

(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告書第41集

上越新幹線関係報告書 第4集

上越新幹  
埋蔵文化財発掘調査報告

第4集

# 菟田遺跡

利根郡月夜野町所在  
須恵器生産工人集落の調査

1985

群馬県教育委員会  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
日本鉄道建設公団



資料	(財)群馬県埋蔵文化財	01-310
	調査事業団保管	9
No. 1-2461	平成 2 年 3 月 31 日	(7)



上越新幹線関係  
埋蔵文化財発掘調査報告

第4集

# 藪田遺跡

利根郡月夜野町所在  
須恵器生産工人集落の調査

1985

群馬県教育委員会  
(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団  
日本鉄道建設公団





5区1号住居址出土土器



6区1号住居址出土土器

銅印



土製印



烙印







輸入陶磁器 (1) 青磁 外面



内面



輸入陶磁器（2） 青花・白磁・伊万里（左下） 外面



内面

## 序

首都東京と新潟市とを結ぶ幹線鉄道として計画された上越新幹線も、昭和57年11月に大宮―新潟間が開通、さらに60年3月には、上野駅乗り入れが決定となり、その利用価値も一段と増しつつあります。

この新幹線建設工事に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、昭和48年度以来実施され、昭和56年度には本線敷内の調査が終了、引き続き調査を継続した側道部分の調査も昭和59年2月に終了し、11年間という歳月を経てすべての発掘調査が終了し、現在は調査の結果得られた資料の整理に取り組んでおります。

ここに報告いたします藪田遺跡もそのうちの一つです。遺跡の所在する大峰山東麓一帯には、奈良時代から平安時代にかけて盛んに使用された多くの窯跡が確認でき、本県の窯業史研究の上で重要な地域です。本遺跡でも、調査の結果確認された住居跡からは、他の地域とは比較にならないほどの多量の土器類が発見され、粘土採掘坑の存在とともに、窯業集団の実態に迫る多くの資料を得ることができました。

酷寒・酷暑の日もいとわず、連日すすめられた調査の結果得られた、これらの資料を収め、後世の人々にも残す記録として、ここに本報告書が刊行できましたのも、日本鉄道建設公団の関係者の方々をはじめとする多くの方々の御指導と御協力の賜物であります。ここに厚く感謝の意を表します。

願わくば、本報告書が一人でも多くの方々に広くご覧いただき、有効に活用されますことを念じ序といたします。

昭和60年2月25日

群馬県教育委員会

教育長 横 山 巖



# 例 言

- 1 本書は上越新幹線建設事業に伴なう事前調査として、昭和51年度から昭和53年度にかけて実施した、<sup>やぶた</sup>藪田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 藪田遺跡は、群馬県利根郡月夜野町大字月夜野字藪田1757番地他に所在する。
- 3 藪田遺跡は、上越新幹線関係の事前の分布調査で、78地区と称した遺跡であり、調査時の概要は、上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報V・VI（昭和54・55年、群馬県教育委員会）に掲載した。
- 4 発掘調査は、日本鉄道建設公団の委託を受けて、群馬県教育委員会文化財保護課が実施した。発掘担当職員は、文化財保護主事前沢和之、同中束耕志、同下城 正、調査員原 雅信である。
- 5 整理事業は、昭和59年1月から12月にかけて、(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団が実施した。整理担当職員は、主任調査研究員下城 正、調査研究員関 晴彦であり、整理事業は坂庭常磐・平野照美・永井真由美・小池弘美・小林幸枝・樺沢朱実があたり、金属器の保存処理は関 邦一、遺物写真撮影は佐藤元彦が行なった。本書の編集は、下城 正・関 晴彦が担当した。
- 6 本書の作成にあたっては、石器・石製品の石質については、飯島静男氏（群馬地質研究会）の教示を得、「印」に関して、群馬県立歴史博物館・前橋市教育委員会・横倉興一氏（高崎市教育委員会）・横尾好之氏（富岡市）より、資料提供の協力および教示を得、平安時代の土器に関して、宮石宗弘・藤澤良祐・仲野泰裕・松井孝宗・後藤建一・渡辺博人・小沢一弘・大村 直・永井義博各氏の教示を得た。また、発掘調査に関し、月夜野町教育委員会に多大なる協力を得た。あわせて、感謝の意を表わす次第である。
- 7 本書の執筆分担は、次のとおりである。

第I章	森田秀策	（群馬県教育委員会文化財保護課長）
第II章～第IV章	下城 正	
第V章 1～7 遺構に関する事項	下城 正	遺物に関する事項 関 晴彦
8—(1)	中束耕志	（群馬県立歴史博物館 学芸員）
8—(2)	下城 正	
8—(3)	関 晴彦	
8—(4)～(6)	大江正行	
8—(7)～(9)	関 晴彦	
第VI章 1	中束耕志	
2～4	下城 正	
5	関 晴彦	
6・7	大江正行	
8	前沢和之	（群馬県教育委員会文化財保護課 主任）
9	磯部淳一	（群馬県立歴史博物館 学芸員）

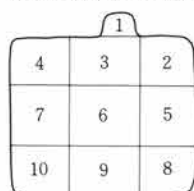
[金属器の蛍光X線分析 花岡紘一（群馬県工業試験場）、X線透過試験 小林重夫（同）]

# 凡 例

- 1 平安時代の出土土器の個別解説は、本文末に一括して表にして掲載した。
- 2 遺構番号は調査中に欠番としたものがあり、また、整理中に新たに番号を付けたものがある。
- 3 遺構および遺構図の方位は磁北を基準としており、月夜野町後閑周辺の磁針方位は西偏約7°00' (国土地理院発行2万5千分の1地形図による)である。
- 4 遺構図中のスクリーントーンは以下の内容である。

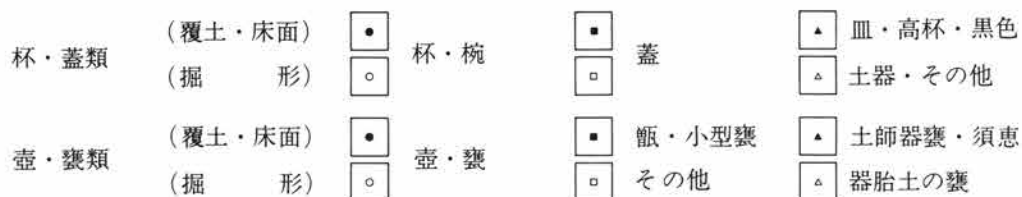


- 5 住居址出土土器の位置は、図のように住居を分割し、以下のように称した。

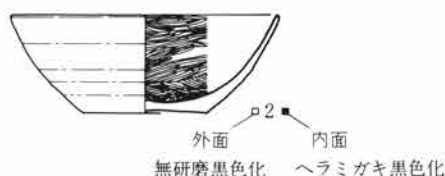
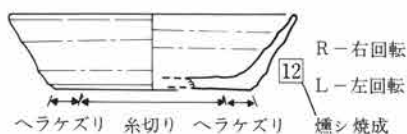


- 1 カマド 2 南東隅 (貯蔵穴のある場合は貯蔵穴) 3 カマド前
  - 4 北東隅 5 南壁中央 6 中央 7 北壁中央 8 南西隅
  - 9 西壁中央 10 北西隅
- (観察表では床面下落ち込み出土の土器も含め、掘形出土とした。)

- 6 住居址の遺物散布図は、以下のように器種を分けた。また、未掲載の土器の散布も図示した。



- 7 奈良・平安時代の土器のうち、須恵器の小型品 (蓋・杯・椀、皿等) については、図のように表わした。糸切りには「回転糸切り離し」と「静止糸切り離し」の両者が含まれる。また端部を除く凹凸はヘラケズリ調整の稜線を破線————で、回転性のナデを一点鎖線———で表わした。土師器等のヘラケズリ調整は、工具の動いた方向を矢印→で示した。



- 8 蕨田遺跡の、遺構・遺物の実測図および出土遺物は、群馬県埋蔵文化財調査センターに保管してある。

# 目 次

序

例 言

凡 例

第I章 調査にいたる経過 .....	1
第II章 調査の方法と経過 .....	4
1 調査の方法 .....	4
2 調査経過 .....	4
第III章 遺跡の立地と歴史的環境 .....	7
第IV章 基本土層 .....	12
第V章 遺構と遺物 .....	13
1 遺跡の概要 .....	13
2 住居址 .....	15
5区1号住居址 .....	15
5区2号住居址 .....	18
5区3号住居址 .....	24
5区4号住居址 .....	32
5区5号住居址 .....	32
5区6号住居址 .....	42
5区7・10号住居址 .....	44
5区9号住居址 .....	55
5区11号住居址 .....	64
6区1号住居址 .....	68
3 掘立柱建物 .....	75
5区1号掘立柱建物 .....	75

5区2号掘立柱建物	75
5区3号掘立柱建物	75
5区4号掘立柱建物	75
5区5号掘立柱建物	75
5区6号掘立柱建物	76
5区7号掘立柱建物	76
5区8号掘立柱建物	76
5区9号掘立柱建物	76
5区10号掘立柱建物	76
5区11号掘立柱建物	81
5区12号掘立柱建物	83
5区13号掘立柱建物	84
5区14号掘立柱建物	84
5区15号掘立柱建物	84
5区16号掘立柱建物	84
5区17号掘立柱建物	87
5区18号掘立柱建物	87
5区19号掘立柱建物	87
5区20号掘立柱建物	87
5区21号掘立柱建物	87
5区22号掘立柱建物	88
5区23号掘立柱建物	88
5区24号掘立柱建物	88
5区25号掘立柱建物	88
6区1·2号掘立柱建物	88
7区1号掘立柱建物	88
4 土 坎	93
5区1号土坎	93
5区2号土坎	93
5区3号土坎	93
5区4号土坎	93
5区5号土坎	93
5区6号土坎	93
5区7号土坎	93
5区8号土坎	94
5区9号土坎	94



5 区10号土坎	94
5 区11号土坎	94
5 区12号土坎	94
5 区13号土坎	94
5 区14号土坎	94
5 区15号土坎	94
5 区16号土坎	95
5 区17号土坎	95
5 区18号土坎	95
5 区19号土坎	95
5 区20号土坎	95
5 区21号土坎	95
5 区22号土坎	95
5 区23号土坎	95
5 区24号土坎	95
5 区25号土坎	96
5 区26号土坎	96
5 区27号土坎	96
5 区28号土坎	96
5 区29号土坎	96
5 区30号土坎	96
5 区31号土坎	96
5 区32号土坎	96
5 区33号土坎	96
5 区34号土坎	97
5 区35号土坎	97
5 区36号土坎	97
5 区37号土坎	97
5 区38号土坎	97
5 区39号土坎	97
5 区40号土坎	97
5 区41号土坎	97
5 区42号土坎	106
5 区43号土坎	106
5 区44号土坎	108
5 区45号土坎	108

6区1号土塚	108
6区2号土塚	108
6区3号土塚	108
6区4号土塚	108
6区5号土塚	108
6区6号土塚	108
6区7号土塚	109
6区9号土塚	109
6区10号土塚	109
6区11号土塚	109
6区12号土塚	109
6区13号土塚	109
6区14号土塚	109
6区15号土塚	109
7区1号土塚	114
7区2号土塚	114
7区3号土塚	114
7区4号土塚	114
7区5号土塚	114
7区6号土塚	114
7区7号土塚	114
7区8号土塚	114
5区10号土塚出土遺物	119
5区16号土塚出土遺物	119
5区18号土塚出土遺物	130
5区24号土塚出土の古銭	132
5 集 石	141
5区1号集石	141
6 溝	142
5区1号溝	142
5区2号溝	142
5区3号溝	142
5区4号溝	142
7区1号溝	145
7 井 戸	145
5区1号井戸	145

5区2号井戸	145
6区1号井戸	145
5区2号井戸出土遺物	145
8 遺構外出土の遺物	148
(1) 縄文時代の遺物	148
a 土器	148
b 石器	154
(2) 弥生時代の遺物	163
(3) 平安時代の遺物	165
須恵器	165
高杯	165
片口・鉢	165
壺	165
甗	165
甕	165
硯	166
羽釜	166
遺構外出土のヘラ記号のある須恵器	166
遺構外出土須恵器甕体部叩き目	166
土師器	175
杯	175
高杯	175
甕	178
須恵器と同様の胎土をもった煮沸器	186
甕	186
黒色土器	186
(4) 瓦類	191
(5) 中・近世の陶磁器	192
(6) 中・近世の軟質陶器	214
(7) 遺構外出土の金属製品	215
遺構外出土の貨幣	221
(8) 遺構外出土の石製品	221
(9) 土製品	221

第VI章 ま と め .....229

1	縄文時代の遺物について .....	229
2	弥生時代の遺構と遺物について .....	230
3	菟田遺跡平安時代集落の変遷 .....	232
4	中・近世の遺構について .....	235
5	奈良・平安時代の土器 .....	237
6	菟田遺跡出土瓦の考古学的位置 .....	254
7	中世～近世の陶磁器 .....	258
8	菟田遺跡出土の印章 .....	265
9	菟田遺跡出土の宝篋印塔塔身部分について .....	274
10	結 語 .....	275

# 図版目次

- 巻頭図版 1 5区1号住居址出土土器  
6区1号住居址出土土器
- 巻頭図版 2 銅印  
土製印  
烙印
- 巻頭図版 3 輸入陶磁器(1) 青磁 外面  
輸入陶磁器(1) 青磁 内面
- 巻頭図版 4 輸入陶磁器(2) 青花・白磁・伊万里(左下) 外面  
輸入陶磁器(2) 青花・白磁・伊万里(左下) 内面
- 図版 1 菟田遺跡の地形(航空写真1/2,000 昭和49年撮影)
- 図版 2 菟田遺跡の周辺地形(航空写真1/4,000 昭和49年撮影)
- 図版 3 調査中の菟田遺跡(航空写真1/4,000 昭和52年撮影)
- 図版 4-1 遺跡遠景(予備調査中、北西より)  
2 6~7区の予備調査状況(北より)
- 図版 5-1 5区調査状況(南東より)  
2 5区実測風景(東より)
- 図版 6-1 調査前の5区台地部(北西より)  
2 調査後の5区台地部(北西より)
- 図版 7-1 5区台地部全景(東より)  
2 5区台地部南端(北東より)
- 図版 8-1 6区全景(南より)  
2 7区全景(西より)
- 図版 9-1 5区1号住居址(北より)  
2 同上、炉と土器2の出土状態(南より)
- 図版 10-1 5区2号住居址遺物出土状態(西より)  
2 5区2号住居址(西より)
- 図版 11-1 5区2号住居址 カマド前遺物出土状態(南より)  
2 同上、北東隅遺物出土状態(西より)  
3 同上、カマド・カマド前掘形(西より)
- 図版 12-1 5区3号住居址遺物出土状態(西より)  
2 5区3号住居址(西より)
- 図版 13-1 5区3号住居址掘形遺物出土状態(西より)

- 2 5区3号住居址掘形（西より）
- 図版 14—1 5区4号住居址（南より）
- 2 5区4号住居址（西より）
- 3 5区4号住居址遺物出土状態（西より）
- 図版 15—1 5区5号住居址（西より）
- 2 5区5・6号住居址と41号土壇（西より）
- 図版 16—1 5区5号住居址 東半遺物出土状態（南より）
- 2 同上、床面遺物出土状態（西より）
- 3 同上、南東隅床面遺物出土状態（西より）
- 図版 17—1 5区6号住居址遺物出土状態（西より）
- 2 5区6号住居址掘形（西より）
- 図版 18—1 5区6号住居址 カマドと貯蔵穴（西より）
- 2 同上、貯蔵穴遺物出土状態（西より）
- 3 同上、北東隅掘形（東より）
- 図版 19—1 5区7・10号住居址遺物出土状態（東より）
- 2 5区7・10号住居址と4・37～39号土壇（東より）
- 図版 20—1 5区9号住居址遺物出土状態（西より）
- 2 5区9号住居址床面遺物出土状態（西より）
- 図版 21—1 5区9号住居址 南西隅遺物出土状態（東より）
- 2 同上、カマド前遺物出土状態（西より）
- 3 同上、掘形（西より）
- 図版 22—1 5区11号住居址と2・3・40号土壇遺物出土状態（西より）
- 2 5区11号住居址と2・3・40号土壇（西より）
- 図版 23—1 6区1号住居址 東半遺物出土状態（西より）
- 2 6区1号住居址（西より）
- 図版 24—1 6区1号住居址 西半遺物出土状態（南より）
- 2 同上、東壁中央寄りの遺物出土状態（西より）
- 3 同上、貯蔵穴遺物出土状態（西より）
- 図版 25—1 5区1・2号掘立柱建物（南より）
- 2 5区3・4号掘立柱建物（南より）
- 図版 26—1 5区3・4・6～8号掘立柱建物（東より）
- 2 5区6・7号掘立柱建物（南より）
- 図版 27—1 5区8号掘立柱建物（南より）
- 2 5区9号掘立柱建物（西より）
- 図版 28—1 5区10号掘立柱建物（北より）
- 2 5区11号掘立柱建物（東より）

- 図版 29—1 5区12・25号掘立柱建物（南より）  
2 5区5・13・14号掘立柱建物（南より）
- 図版 30—1 5区15～17号掘立柱建物（南より）  
2 5区18～24号掘立柱建物（南より）
- 図版 31—1 6区1・2号掘立柱建物（西より）  
2 7区1号掘立柱建物（西より）
- 図版 32—1 5区1号土坑（南東より）  
2 5区2（右）・3（左）号土坑（南より）  
3 5区2号土坑遺物出土状態（南より）
- 図版 33—1 5区4号土坑（東より）  
2 5区6号土坑（南東より）  
3 5区7号土坑（南東より）
- 図版 34—1 5区8号土坑（西より）  
2 5区10号土坑（南西より）  
3 5区11号土坑（南より）
- 図版 35—1 5区12～14号土坑（南西より）  
2 5区15号土坑（南東より）  
3 5区16号土坑（南より）
- 図版 36—1 5区17号土坑（西より）  
2 5区17号土坑 土層断面（南西より）  
3 5区18号土坑（南東より）
- 図版 37—1 5区19号土坑（南西より）  
2 5区20号土坑（南西より）  
3 5区21号土坑（南より）
- 図版 38—1 5区22号土坑（南より）  
2 5区23号土坑（南西より）  
3 5区24号土坑（西より）
- 図版 39—1 5区25号土坑 土層断面（南西より）  
2 5区26（右）・28（左）号土坑（南西より）  
3 5区27号土坑（南東より）
- 図版 40—1 5区29号土坑（東より）  
2 5区30号土坑（南より）  
3 5区31号土坑（南より）
- 図版 41—1 5区36号土坑（東より）  
2 5区40号土坑（東より）  
3 5区40号土坑遺物出土状態（南東より）

- 図版 42—1 5区41号土壇（西より）  
 2 5区41号土壇遺物出土状態（南より）  
 3 5区43号土壇遺物出土状態（南より）
- 図版 43—1 5区42号土壇（西より）  
 2 5区9・42・44号土壇（南東より）  
 3 5区1号集石（南東より）
- 図版 44—1 6区1号土壇（南西より）  
 2 6区2（右）・3（左）号土壇（南西より）  
 3 6区4号土壇（東より）
- 図版 45—1 6区5号土壇（北東より）  
 2 6区6号土壇（北より）  
 3 6区7号土壇（南東より）
- 図版 46—1 6区9号土壇（南より）  
 2 6区10号土壇（南西より）  
 3 6区11号土壇（南東より）
- 図版 47—1 6区12号土壇（南東より）  
 2 6区13号土壇（東より）  
 3 6区15号土壇（南より）
- 図版 48—1 7区1号土壇（南より）  
 2 7区2号土壇（東より）  
 3 7区4号土壇（南東より）
- 図版 49—1 7区6号土壇 土層断面（南より）  
 2 7区7号土壇（南より）  
 3 7区8号土壇（南より）
- 図版 50—1 5区1号溝東端～南西端（北東より）  
 2 5区1号溝東端～北端（南東より）
- 図版 51—1 5区1号溝北西端（北西より）  
 2 5区1号溝東端寄り土層断面（南東より）  
 3 5区1号溝北端寄り土層断面（北西より）
- 図版 52—1 5区2号溝（南西より）  
 2 5区3号溝（南西より）  
 3 5区4号溝（西より）
- 図版 53—1 5区1号井戸（東より）  
 2 5区2号井戸（北より）  
 3 6区1号井戸（南西より）
- 図版 54 5区1号住居址出土遺物（1）



図版	55	5区1号住居址出土遺物 (2) 5区2号住居址出土遺物 (1)
図版	56	5区2号住居址出土遺物 (2)
図版	57	5区3号住居址出土遺物 (1)
図版	58	5区3号住居址出土遺物 (2) 5区4号住居址出土遺物
図版	59	5区5号住居址出土遺物 (1)
図版	60	5区5号住居址出土遺物 (2)
図版	61	5区5号住居址出土遺物 (3)
図版	62	5区5号住居址出土遺物 (4)
図版	63	5区6号住居址出土遺物 (1)
図版	64	5区6号住居址出土遺物 (2)
図版	65	5区7号住居址出土遺物
図版	66	5区9号住居址出土遺物 (1)
図版	67	5区9号住居址出土遺物 (2)
図版	68	5区9号住居址出土遺物 (3)
図版	69	5区9号住居址出土遺物 (4)
図版	70	5区9号住居址出土遺物 (5)
図版	71	5区10号住居址出土遺物 (1)
図版	72	5区10号住居址出土遺物 (2)
図版	73	5区11号住居址出土遺物 6区1号住居址出土遺物 (1)
図版	74	6区1号住居址出土遺物 (2)
図版	75	6区1号住居址出土遺物 (3)
図版	76	6区1号住居址出土遺物 (4)
図版	77	6区1号住居址出土遺物 (5) 5区3号住居址出土砥石 5区5号住居址出土砥石
図版	78	5区2号井戸出土遺物
図版	79	5区1・3・6・10・16号土坛出土遺物
図版	80	5区2号土坛出土遺物 (1)
図版	81	5区2号土坛出土遺物 (2) 5区18・21号土坛出土遺物
図版	82	5区24号土坛出土遺物
図版	83	5区38号土坛出土遺物 (1)
図版	84	5区38号土坛出土遺物 (2)

図版	85	5区39号土坑出土遺物	
		5区40号土坑出土遺物 (1)	
図版	86	5区40号土坑出土遺物 (2)	
図版	87	5区40号土坑出土遺物 (3)	
図版	88	5区41号土坑出土遺物 (1)	
図版	89	5区41号土坑出土遺物 (2)	
図版	90	5区42号土坑出土遺物 (1)	
図版	91	5区42号土坑出土遺物 (2)	
図版	92	5区42号土坑出土遺物 (3)	
図版	93	5区43号土坑出土遺物 (1)	
図版	94	5区43号土坑出土遺物 (2)	
図版	95	遺構外出土の縄文土器 (1)	
図版	96	遺構外出土の縄文土器 (2)	
図版	97	遺構外出土の縄文土器 (3)	
図版	98	遺構外出土の縄文石器 (1)	
図版	99	遺構外出土の縄文石器 (2)	
図版	100	遺構外出土の縄文石器 (3)	
図版	101	遺構外出土の縄文石器 (4)	
図版	102	遺構外出土の弥生土器	
図版	103	遺構外出土の蓋 (1)	
図版	104	遺構外出土の蓋 (2)	
		遺構外出土の高杯	
図版	105	遺構外出土の杯 (1)	
図版	106	遺構外出土の杯 (2)	
図版	107	遺構外出土の杯 (3)	
図版	108	遺構外出土の杯 (4)	
図版	109	遺構外出土の杯 (5)	
図版	110	遺構外出土の杯 (6)	
図版	111	遺構外出土の杯 (7)	
図版	112	遺構外出土の椀 (1)	
図版	113	遺構外出土の椀 (2)	
図版	114	遺構外出土の椀 (3)	
図版	115	遺構外出土の黒色土器 (1)	1 口縁部 2 底部外面全面回転ヘラケズリ 3 底部外面回転糸切り
図版	116	遺構外出土の黒色土器 (2)	

- 図版 117 遺構外出土の黒色土器 (3)  
 図版 118 遺構外出土の皿  
 図版 119 遺構外出土の硯  
           遺構外出土の鉢  
 図版 120 遺構外出土の壺  
 図版 121 遺構外出土の土師器・土師質甕  
           遺構外出土の小型甕  
 図版 122 遺構外出土の甑・小型甕・甕  
 図版 123 遺構外出土のヘラ記号のある土器  
 図版 124 須恵器資料 (1)  
 図版 125 須恵器資料 (2)  
 図版 126 須恵器資料 (3)  
 図版 127 須恵器資料 (4)  
 図版 128 瓦  
 図版 129 遺構外出土の羽釜  
           中・近世の軟質陶器  
 図版 130 陶磁器 (1) 美濃焼 内面  
 図版 131 陶磁器 (2) 美濃焼 外面  
 図版 132 陶磁器 (3) 瀬戸・美濃 内面  
 図版 133 陶磁器 (4) 瀬戸・美濃 外面  
 図版 134 陶磁器 (5) 伊万里系 内面  
 図版 135 陶磁器 (6) 伊万里系 外面  
 図版 136 陶磁器 (7) 唐津系 内面  
 図版 137 陶磁器 (8) 唐津系 外面  
 図版 138 陶磁器 (9) その他 内面  
 図版 139 陶磁器 (10) その他 外面  
 図版 140 陶磁器 (11) 美濃  
 図版 141 陶磁器 (12) 瀬戸 [44]、伊万里 [64・65・67~69]  
 図版 142 陶磁器 (13) その他  
 図版 143 陶磁器 (14) 摺鉢  
 図版 144 石製品 (1) 砥石 [1・3~5]、硯 [2]、石臼 [6]  
 図版 145 石製品 (2) 宝篋印塔 [1]、板碑 [2]  
 図版 146 金属製品 (1) 鉄器  
 図版 147 金属製品 (2) 銅製品  
 図版 148 金属製品 (3) 貨幣  
 図版 149 土製品 (1)

図版	150	土製品 (2)
図版	151	銅印
図版	152	銅製金属器の蛍光X線分析
図版	153	X線透過試験

## 挿 図 目 次

第 1 図	藪田遺跡位置図	3
第 2 図	藪田遺跡と周辺遺跡の調査範囲	6
第 3 図	周辺遺跡位置図	8
第 4 図	藪田遺跡土層模式図	12
第 5 図	5区1号住居址	16
第 6 図	5区1号住居址出土遺物	17
第 7 図	5区2号住居址およびカマド部分掘形	19
第 8 図	5区2号住居址遺物散布図 1	20
第 9 図	5区2号住居址遺物散布図 2	21
第 10 図	5区2号住居址出土遺物 (1)	22
第 11 図	5区2号住居址出土遺物 (2)	23
第 12 図	5区3号住居址および掘形	25
第 13 図	5区3号住居址遺物散布図 1	26
第 14 図	5区3号住居址遺物散布図 2	27
第 15 図	5区3号住居址出土遺物 (1)	28
第 16 図	5区3号住居址出土遺物 (2)	29
第 17 図	5区3号住居址出土遺物 (3)	30
第 18 図	5区3号住居址出土遺物 (4)	31
第 19 図	5区4号住居址	32
第 20 図	5区4号住居址遺物散布図	33
第 21 図	5区4号住居址出土遺物	33
第 22 図	5区5号住居址およびカマド遺物出土状態	35
第 23 図	5区5号住居址遺物散布図 1	36
第 24 図	5区5号住居址遺物散布図 2	37
第 25 図	5区5号住居址出土遺物 (1)	38
第 26 図	5区5号住居址出土遺物 (2)	39
第 27 図	5区5号住居址出土遺物 (3)	40

第 28 図	5 区 5 号住居址出土遺物 (4)	41
第 29 図	5 区 6 号住居址および掘形	43
第 30 図	5 区 6 号住居址遺物散布図	44
第 31 図	5 区 6 号住居址出土遺物 (1)	45
第 32 図	5 区 6 号住居址出土遺物 (2)	46
第 33 図	5 区 7・10号住居址	47
第 34 図	5 区 7・10号住居址遺物散布図 1	48
第 35 図	5 区 7・10号住居址遺物散布図 2	49
第 36 図	5 区 7号住居址出土遺物 (1)	50
第 37 図	5 区 7号住居址出土遺物 (2)、5 区10号住居址出土遺物 (4)	51
第 38 図	5 区10号住居址出土遺物 (1)	52
第 39 図	5 区10号住居址出土遺物 (2)	53
第 40 図	5 区10号住居址出土遺物 (3)	54
第 41 図	5 区 9号住居址	55
第 42 図	5 区 9号住居址掘形	56
第 43 図	5 区 9号住居址遺物散布図	57
第 44 図	5 区 9号住居址出土遺物 (1)	58
第 45 図	5 区 9号住居址出土遺物 (2)	59
第 46 図	5 区 9号住居址出土遺物 (3)	60
第 47 図	5 区 9号住居址出土遺物 (4)	61
第 48 図	5 区 9号住居址出土遺物 (5)	62
第 49 図	5 区 9号住居址出土遺物 (6)	63
第 50 図	5 区11号住居址および 2・3・40号土坑	65
第 51 図	5 区11号住居址遺物散布図	66
第 52 図	5 区11号住居址出土遺物	67
第 53 図	6 区 1号住居址	69
第 54 図	6 区 1号住居址遺物散布図 1	70
第 55 図	6 区 1号住居址遺物散布図 2	71
第 56 図	6 区 1号住居址出土遺物 (1)	72
第 57 図	6 区 1号住居址出土遺物 (2)	73
第 58 図	6 区 1号住居址出土遺物 (3)	74
第 59 図	5 区 1・2号掘立柱建物	77
第 60 図	5 区 3・4号掘立柱建物	78
第 61 図	5 区 5・13・17号掘立柱建物	79
第 62 図	5 区 6～8号掘立柱建物	80
第 63 図	5 区 9号掘立柱建物	81

第 64 図	5 区10・11号掘立柱建物	82
第 65 図	5 区12号掘立柱建物	83
第 66 図	5 区14～17号掘立柱建物	85
第 67 図	5 区18号掘立柱建物	86
第 68 図	5 区19～24号掘立柱建物	89
第 69 図	5 区25号掘立柱建物	90
第 70 図	6 区1・2号掘立柱建物	91
第 71 図	7 区1号掘立柱建物	92
第 72 図	5 区掘立柱建物出土遺物（遺物の解説は観察表）	92
第 73 図	5 区1・4～7号土塚	98
第 74 図	5 区8・10～14号土塚	99
第 75 図	5 区15～19・25号土塚	100
第 76 図	5 区20～24・26～28号土塚	101
第 77 図	5 区29～31号土塚	102
第 78 図	5 区32～36号土塚	103
第 79 図	5 区37・38号土塚	104
第 80 図	5 区39号土塚	105
第 81 図	5 区41号土塚	106
第 82 図	5 区9・42・44号土塚、1号集石	107
第 83 図	5 区45号、6 区1～3号土塚	110
第 84 図	6 区4～7号土塚	111
第 85 図	6 区9～12号土塚	112
第 86 図	6 区13～15号土塚	113
第 87 図	7 区1～4号土塚	115
第 88 図	7 区5～7号土塚	116
第 89 図	7 区8号土塚	117
第 90 図	5 区2号土塚出土遺物（1）	118
第 91 図	5 区2号土塚出土遺物（2）	119
第 92 図	5 区2号土塚出土遺物（3）	120
第 93 図	5 区1・3・6・10号土塚出土遺物	121
第 94 図	5 区16・18・21・24・29号土塚出土遺物	122
第 95 図	5 区24号土塚出土古銭	123
第 96 図	5 区38号土塚出土遺物（1）	124
第 97 図	5 区38号土塚出土遺物（2）	125
第 98 図	5 区38号土塚出土遺物（3）	126
第 99 図	5 区39号土塚出土遺物	127

第 100 図	5 区40号土坛出土遺物 (1)	128
第 101 図	5 区40号土坛出土遺物 (2)	129
第 102 図	5 区40号土坛出土遺物 (3)	130
第 103 図	5 区41号土坛出土遺物 (1)	131
第 104 図	5 区41号土坛出土遺物 (2)	132
第 105 図	5 区41号土坛出土遺物 (3)	133
第 106 図	5 区41号土坛出土遺物 (4)	134
第 107 図	5 区42号土坛出土遺物 (1)	135
第 108 図	5 区42号土坛出土遺物 (2)	136
第 109 図	5 区42号土坛出土遺物 (3)	137
第 110 図	5 区42号土坛出土遺物 (4)	138
第 111 図	5 区43号土坛出土遺物 (1)	139
第 112 図	5 区43号土坛出土遺物 (2)	140
第 113 図	5 区43号土坛出土遺物 (3)	141
第 114 図	5 区 1～4 号溝、7 区 1 号溝	143
第 115 図	5 区 1～4 号溝、7 区 1 号溝断面	144
第 116 図	5 区 1・2 号井戸、6 区 1 号井戸	146
第 117 図	5 区 2 号井戸出土遺物	147
第 118 図	縄文時代 土器 1	150
第 119 図	縄文時代 土器 2	151
第 120 図	縄文時代 土器 3	152
第 121 図	縄文時代 土器 4	153
第 122 図	縄文時代 石器 1	154
第 123 図	縄文時代 石器 2	155
第 124 図	縄文時代 石器 3	156
第 125 図	縄文時代 石器 4	157
第 126 図	縄文時代 石器 5	158
第 127 図	縄文時代 石器 6	159
第 128 図	遺構外出土遺物 弥生土器	164
第 129 図	遺構外出土遺物 須恵器 蓋	167
第 130 図	遺構外出土遺物 須恵器 杯・碗 (1)	168
第 131 図	遺構外出土遺物 須恵器 杯 (2)	169
第 132 図	遺構外出土遺物 須恵器 杯 (3)	170
第 133 図	遺構外出土遺物 須恵器 杯 (4)	171
第 134 図	遺構外出土遺物 須恵器 杯 (5)	172
第 135 図	遺構外出土遺物 須恵器 杯 (6)	173

第 136 図	遺構外出土遺物	須恵器	杯 (7)	174
第 137 図	遺構外出土遺物	須恵器	杯 (8)	175
第 138 図	遺構外出土遺物	須恵器	椀 (1)	176
第 139 図	遺構外出土遺物	須恵器	椀 (2)	177
第 140 図	遺構外出土遺物	須恵器	椀 (3)	178
第 141 図	遺構外出土遺物	須恵器	椀 (4)	179
第 142 図	遺構外出土遺物	須恵器	椀 (5)	180
第 143 図	遺構外出土遺物	黒色土器	(1)	181
第 144 図	遺構外出土遺物	黒色土器	(2)	182
第 145 図	遺構外出土遺物	須恵器	皿	183
第 146 図	遺構外出土遺物	須恵器	高杯	184
第 147 図	遺構外出土遺物	須恵器	鉢	184
第 148 図	遺構外出土遺物	須恵器	壺	185
第 149 図	遺構外出土遺物	土師器	甕 (1)	186
第 150 図	遺構外出土遺物	土師器・土師質	甕 (2)	187
第 151 図	遺構外出土遺物	須恵器	甗・甕 (1)	188
第 152 図	遺構外出土遺物	須恵器	甕 (2)	189
第 153 図	遺構外出土遺物	羽釜口縁部片		189
第 154 図	遺構外出土遺物	硯		190
第 155 図	遺構外出土遺物	須恵器	甕体部片叩き目拓影	190
第 156 図	遺構外出土遺物	ヘラ記号を持つ須恵器		191
第 157 図	遺構外出土遺物	瓦		193
第 158 図	陶磁器 (1)	白磁・青磁	(輸入)	194
第 159 図	陶磁器 (2)	青花	(輸入)	195
第 160 図	陶磁器 (3)	美濃焼		196
第 161 図	陶磁器 (4)	瀬戸・美濃		197
第 162 図	陶磁器 (5)	伊万里系		198
第 163 図	陶磁器 (6)	唐津系		199
第 164 図	陶磁器 (7)	その他		200
第 165 図	陶磁器 (8)	擂鉢		201
第 166 図	陶磁器 (9)	擂鉢		202
第 167 図	遺構外中・近世の軟質陶器			214
第 168 図	遺構外出土遺物	金属製品	(1)	218
第 169 図	遺構外出土遺物	金属製品	(2)	219
第 170 図	遺構外出土遺物	金属製品	(3) 貨幣	220
第 171 図	遺構外出土遺物	石製品	(1) 砥石・硯・石臼	222



第 172 図	遺構外出土遺物 石製品 (2) 宝篋印塔・板碑	223
第 173 図	遺構外出土遺物 土製品 (1)	227
第 174 図	遺構外出土遺物 土製品 (2)	228
第 175 図	5 区 1 号住居址出土土器 2 の甕のヒビ割れ状態	231
第 176 図	藪田および藪田東遺跡平安時代時期別遺構分布図	234
第 177 図	杯・椀の底口指数による分布	238
第 178 図	口高指数による分布	238
第 179 図	杯の形態図	239
第 180 図	椀の形態図	239
第 181 図	高台椀と高台の形態図	239
第 182 図	蓋の形態図	240
第 183 図	大型高台皿の形態図	240
第 184 図	高台皿の形態図	240
第 185 図	甕の形態図	241
第 186 図	須恵器胎土の甕形態図	241
第 187 図	内面に糸切り痕のある須恵器	243
第 188 図	外底周縁の絞り込み	243
第 189 図	須恵器 資料	244
第 190 図	重ね焼きの痕跡	245
第 191 図	蓋と高杯と大型高台皿	246
第 192 図	右回転の土器 (1)	247
第 193 図	右回転の土器 (2)	248
第 194 図	左回転の土器 (1)	249
第 195 図	左回転の土器 (2)	250
第 196 図	月夜野古窯跡群中の右回転と左回転	252
第 197 図	北毛地域における古瓦分布	255
第 198 図	中・近世陶・磁器の世紀別出土量	260
第 199 図	中世陶磁器出土位置図	262
第 200 図	近世陶磁器出土位置図	263
第 201 図	県内出土の銅印 (1)	267
第 202 図	県内出土の銅印 (2)	269
第 203 図	藪田遺跡出土銅印・土製印・烙印	272

付 図 藪田遺跡遺構全体図 (1 : 1000)

巻末折込 1 藪田遺跡 5 区・藪田東遺跡平安時代遺構全体図 (1 : 500)

2 藪田遺跡 5 区・藪田東遺跡中～近世遺構全体図 (1 : 500)

# 目 次

第1表	1～3	周辺遺跡一覧表	9
第2表	1～4	石器一覧表	159
第3表	1～2	遺構外出土須恵器甕体部叩き目観察表	180
第4表	1～15	中・近世陶磁器観察表	192
第5表	1～3	5区2号住居址出土土器観察表	277
第6表	1～4	5区3号住居址出土土器観察表	280
第7表	1～2	5区4号住居址出土土器観察表	283
第8表	1～7	5区5号住居址出土土器観察表	284
第9表	1～5	5区6号住居址出土土器観察表	290
第10表	1～3	5区7号住居址出土土器観察表	294
第11表	1～11	5区9号住居址出土土器観察表	296
第12表	1～5	5区10号住居址出土土器観察表	306
第13表	1～2	5区11号住居址出土土器観察表	311
第14表	1～5	6区1号住居址出土土器観察表	312
第15表		掘立柱建物出土土器観察表	316
第16表	1～2	土壇出土土器観察表	317
第17表	1～4	5区2号土壇出土土器観察表	318
第18表	1～4	5区38号土壇出土土器観察表	322
第19表	1～2	5区39号土壇出土土器観察表	325
第20表	1～5	5区40号土壇出土土器観察表	326
第21表	1～5	5区41号土壇出土土器観察表	330
第22表	1～5	5区42号土壇出土土器観察表	334
第23表	1～4	5区43号土壇出土土器観察表	338
第24表	1～34	遺構外出土土器観察表	341
別表1		平安時代の遺構出土土器一覧表	242
別表2		北毛地域における古瓦出土遺跡一覧表	256

## 第 I 章 調査に至る経過

昭和39年10月1日に東海道新幹線が開通し、わが国も新幹線時代を迎えることになり、時あたかも経済の高度成長と相まって全国的な新幹線建設網の整備の機運が盛り上がってきた。昭和45年5月には全国新幹線鉄道整備法が制定され、東京と新潟間約300kmを結ぶ上越新幹線の基本計画が発表されたのは昭和46年1月、その直後の同年4月には整備計画が発表されるという急ピッチであった。さらに同年10月12日には大宮～新潟間の路線発表がなされ、本県内には高崎と月夜野町に駅が設置されることになった。

しかし、新幹線建設に伴う埋蔵文化財の取り扱いについては建設側と教育委員会側との事前協議が十分になされることなく推移し、日本鉄道建設公団から群馬県企画部の幹線交通対策室を通じて、上越新幹線に関連した公共事業調査が群馬県教育委員会文化財保護室（昭和47年4月1日発足）に依頼があったのは、昭和47年5月のことであった。県教委では、鉄建公団側から提供を受けた2500分の1の地図にもとづき、周辺の文化財分布調査を実施したところ93箇所のにぼる遺跡地、包蔵地、ならびに天然記念物等の所在地の存在が確認された。こうした資料をもとに、同年9月になって日本鉄道建設公団東京新幹線建設局と協議した結果、93箇所のうち22箇所の埋蔵文化財包蔵地が直接路線にかかることが判り、大規模な建設工事に伴うため遺跡や包蔵地の保存は事実上困難視されるため原則として記録作成を目的とした発掘調査を要することとなった。鉄建公団側では建設を急ぐ情勢にあったため昭和47年度内にも、北毛の利根郡月夜野町上津地内における事前調査の実施について打診されていたが、調査体制がまだ整っていないこと、調査計画もまだ十分に練られていないこと、加えて気象条件の厳しさ等もあり、昭和47年度内には事実上実施が不可能となった。

以上のような経緯のあと、昭和48年4月1日付けをもって、群馬県教育委員会は日本鉄道建設公団との間で、「上越新幹線建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の実施に関する協定書」ならびに契約書を締結すると共に、県教委では同日付けで文化財保護室（定員10名）から文化財保護課（定員30名）に昇格するなど調査体制が整えられた。発掘調査は上越新幹線のほか、同時に併行して進行していた関越自動車道（日本道路公団）、上武国道（建設省）もあったため、上越新幹線地域で直接現地での発掘調査の実務を担当したのは7名であった。

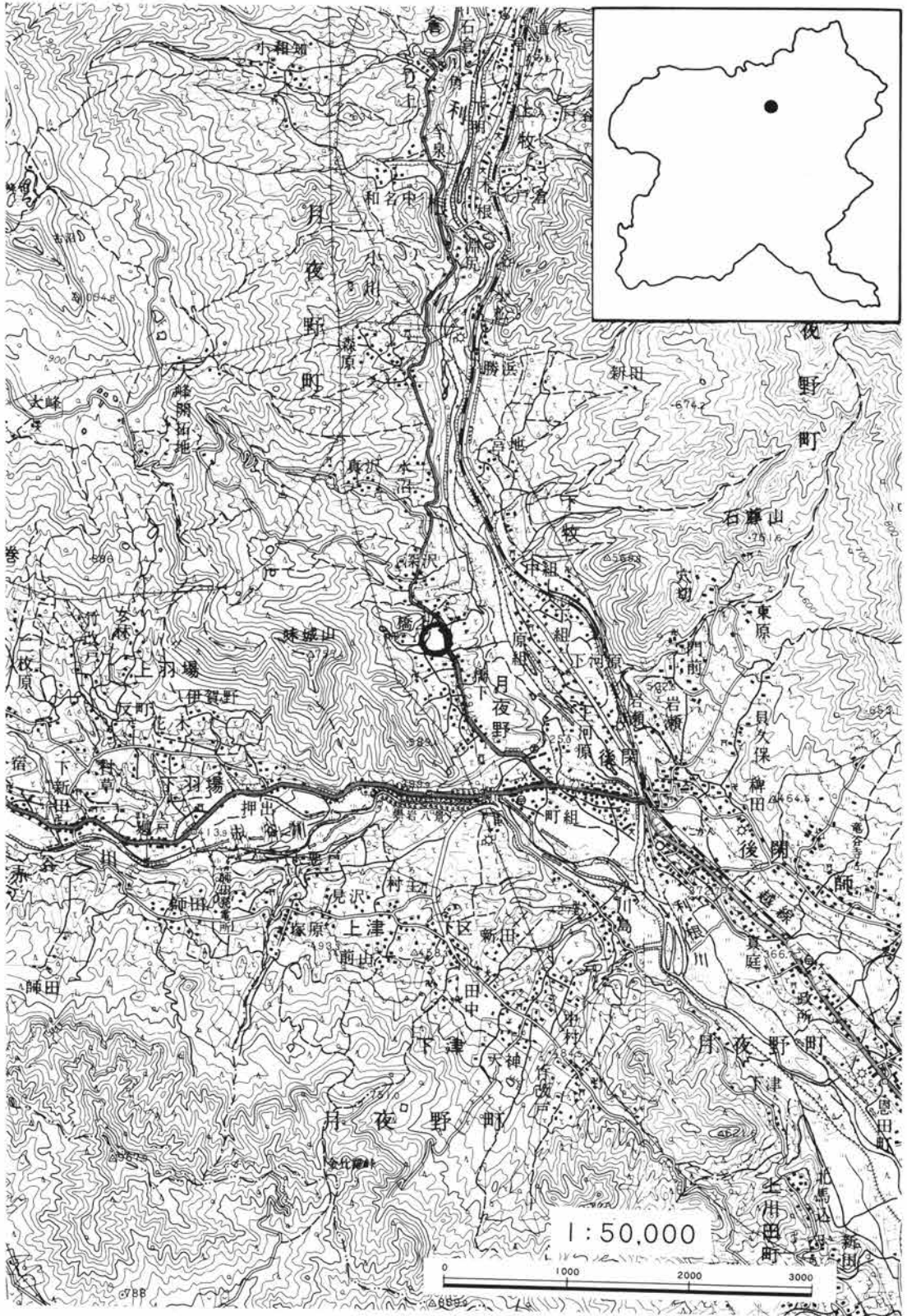
現地調査に入れる最大要件は用地の買収が完全に終了することである。しかし、計画発表から工事着工までの期間が極めて短時間ということもあって十分な熟度がなく、以後どこの場所でも大きな問題点であった。鉄建公団当局と地元との折衝が比較的スムーズに進行し、上越新幹線地域全線を通じて最初に調査に着手ができたのは中山トンネル入口部の利根郡月夜野町上津（調査期間48.5.11～48.7.14）とその北方で赤谷川以南の大原（第1次調査48.8.6～48.10.6、第2次調査48.11.2～48.12.24）であり、この初年度には平野部の高崎市下小鳥遺跡（第1次調査48.10.22～49.3.30）であった。2年次の昭和49年度は高崎市内大八木町融通寺・熊野堂遺跡、上佐野町の舟橋遺跡のほか、月夜野町大原遺跡の第3次調査（49.9.10～49.10.16）を実施した。

利根郡月夜野町地内における上越新幹線の大規模な建設工事は中山トンネル・月夜野トンネル・赤

谷川橋梁などのほか上毛高原駅等である。その駅は橋上、橋下にかかる区域に及び、用地の面積は広大である。鉄建公団当局も用地交渉を早急に進めるべく48年度以来糸口をさがしていたが上組橋上、橋下対策委員会、及び地権者会との折衝が思うように進展しなかった。昭和50年3月頃から鉄建公団は県教委及び地元月夜野町教委に対して、文化財調査を前面にしての地元交渉をするための方法を種々と模索していた。こうして県教委からの要請にもとづく地権者会が開催されたのは昭和50年7月14日の夜のことである。この席で、地元としては、①文化財調査には協力する。②しかし土地が凍結されるので何らかの補償が必要である。③鉄建公団の用地買収とは別個の対応とするというものであった。一方、上越新幹線地域内の包蔵地としては本県の最北部に相当する月夜野町水沼地区（前中原遺跡）でも、同年7月29日に地権者会が開催され、橋上、橋下地区に準じて応じたいとの意向が確認された。翌7月30日、上組（橋上、橋下）の役員との交渉で、①借地方式でいく。②調査期間は、4～11月頃までとし、およそ2年間とすることになった。しかし、最大の問題は借地料をいくらにするかで、再三の交渉（8月18日、8月27日、9月5日）があり、9月7日の地権者全員総会において一応の妥結をみた。しかしなお、個々の補償問題などの残件がいくつかあったこと、借地区域と面積を確定するための測量調査が前提になることから、9月一杯を要して地元、鉄建、測量会社との細部にわたる折衝が続行された。こうして9月末日までには大半の地権者側の調査立入りの承諾書が提出される見通しとなった。水沼地区でのくい打ちは9月30日、上組では10月3日に開始され、10月上旬にかけて官民立ち合いも実施された。一方、9月30日には、上組地区の地権者総会が開催され、①一括借り入れ、一括返還とする。②農業用水路には手をつけぬこととする。③残地補償も考慮することになった。翌10月1日から水沼地区（前中原遺跡）、上組地区（洞遺跡）併行しての現地入りが出来たのである。こうして昭和50年度の調査は前中原遺跡が、10月1日から11月30日まで、洞遺跡は同じく10月1日から12月20日まで試掘が行なわれ、遺跡の範囲と性格についての調査が進められたのである。

昭和51年度は月夜野町の上毛高原駅周辺の遺跡調査は、①水沼地区の前中原遺跡(51. 4. 12～51. 5. 31)、②古城沢の南方の洞遺跡(51. 6. 1～51. 11. 30)、③古城沢以北の藪田遺跡(51. 6. 1～51. 11. 30)、④藪田の北方で、オープンカットとなる深沢遺跡(51. 9. 1～51. 11. 30)と4箇所で開催された。このうち藪田遺跡は初年度であったため全面的にトレンチを入れて遺跡の範囲を確認した。この結果にもとづき2年次の昭和52年度は4月18日から12月15日まで7ヶ月余にわたって実施され、3年次の昭和53年度は4月22日から9月27日まで続行され、当該地区における現地調査のすべてを終了した。

なお、藪田遺跡は上毛高原駅の建設地であったが、その駅前広場も線路及び駅舎に隣接して建設されることが事前から判っていたので、事業主体者（県土木部都市施設課）と県教委とで、別途協議しており、藪田遺跡の調査が終了したあとの昭和54年3月26日から28日まで群馬県埋蔵文化財調査事業団が試掘を行ない、その範囲を確認したので引き続き本調査を同年4月12日から10月31日まで実施したが、遺跡名は上記の新幹線地区の遺跡名とのかねあいから藪田東遺跡と命名されたのである。



第1図 菟田遺跡位置図

## 第II章 調査の方法と経過

### 1 調査の方法

藪田遺跡の調査方法および調査区の設定は、同じ上越新幹線建設事業の事前調査として、早期に調査が開始された、南に位置する洞Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡の方法に準拠し、調査区の設定も一連のものである。

ほぼ南北に延びる上越新幹線建設用地の、洞地内から藪田地内にかけての埋蔵文化財包蔵地を、事前の予備調査段階で調査区を7区に区切り設定した。

調査区1区（上越新幹線建設用距離程大宮起点 118km 380m～450m）が洞Ⅰ遺跡、調査区2・3区（118km450m～650m）が洞Ⅱ遺跡、調査区4区（118km650m～900m）が洞Ⅲ遺跡で、調査区5～7区（118km900m～119km200m）が藪田遺跡である。

藪田遺跡の調査対象範囲は距離300m、幅57m～74mで、対象面積は19,600㎡である。以下の方法を基本として調査を実施した。

- ① 100mを1調査区とし、3m×3mグリッドを基本単位とした。しかし、調査区末端は1m×3mを1グリッドとした。
- ② グリッド設定の基軸線は、上越新幹線建設用センター杭（118km900mを原点とし、119km00mと119km100mを視準。）を利用した。基軸線の方位はN-2°35'10"-Wである。
- ③ グリッドの表示は、基軸線に平行する方向を算用数字（01～34）で表わし、直交する方向をアルファベット（A～Z）で表わした。グリッドの基点は南西隅に置き、この組み合わせに調査区名を加えてグリッド名称とした。
- ④ 遺構番号は、調査区単位で区切りまとめることとした。
- ⑤ 遺構図面は、平面図・断面図ともに1/20作図を基本とし、遺構・遺物の状態により1/10作図も行なった。平面図の作成には平板を使用した。
- ⑥ 住居址および遺物の集中した遺構の遺物については、小片は点で完形や大片は形状を1/20で作図し散布図を作成、すべての遺物の出土状態を極力押えるようにした。
- ⑦ 遺構の写真撮影は6×9版プロニーサイズと35mm版を併用した。

なお、藪田遺跡の調査区に接して、関連開発事業の事前調査として実施された、藪田東遺跡と藪田遺跡観光センター用地南西調査区のグリッドの基軸線は、本遺跡の5区W-24を原点としており、グリッドの単位も同一としている。

### 2 調査経過

藪田遺跡は予備調査を昭和51年10月12日～同年12月10日まで実施した。調査対象区域の一部には用地問題が未解決の部分があり、この部分を除く他の全域に試掘坑を入れ、遺跡の範囲確認を行なった。

試掘坑は3m×3mグリッドを2m×1.5mの範囲で掘り、1グリッドおきに試掘坑を設定し発掘し

た。試掘坑は5区では112ヶ所、6区では126ヶ所、7区では76ヶ所を入れた。また、併行して全域の土層断面図を作成し、南北方向はOラインを5区～7区を通して実測し、東西方向は各調査区に3本を通して実測した。

この結果、南の古城沢から北の国道291号線にかけて、台地状に高くなっている部分すべてに遺構が確認され、特に5区の台地部には遺構・遺物が集中していることが判明し、本調査への資料とした。

予備調査の結果を受け、翌52年4月18日より本調査を開始した。藪田遺跡台地部全体の調査を目指して、5区台地部より調査を開始したが、地形的制約やローム面までが浅く、反面、多くの遺物を包含していること等により、重機の導入を断念し人力による拡張を方針とした。

4月は、5区台地部を4グリッド6m×6mを拡張の1単位として、北と東に1mずつのセッションベルトを残し5m×5mを発掘することとして、西端より開始し順次拡張して行なった。

5・6月は、グリッドの拡張を継続しつつ、1号住居址と土塚の調査を実施し、南西傾斜面に流れ込んだ、多量の平安時代の土器の取り上げを行なった。また、洞～藪田～深沢にかけての調査予定地の草刈りを行なった。

7・8月は、7月中にグリッドの拡張を終了した。また、8月は異常な長雨により約半月が室内作業となった。この間、2～6号住居址と土塚の調査を実施した。また、第2回目の調査予定地の草刈りと除草剤散布を行なった。

9・10月は、7・9～11号住居址と土塚・溝・井戸の調査を実施した。各住居址からは多量の遺物が出土し、取り上げに時間を労した。

11・12月は、掘立柱建物群と土塚の調査を実施した。併行して、古城沢の対岸である洞Ⅲ遺跡の調査が行なわれた。藪田遺跡の第1次調査は、5区台地部だけに限り12月15日をもって終了した。

翌53年度の月夜野地区の調査は、工事計画に変更があり、藪田遺跡より北へ約1kmの前田原遺跡の調査を先行させた。

前田原遺跡の調査は予備調査を4月13日より開始し、4月27日より拡張し本調査に入り、5月31日に終らせたが、同時に、藪田遺跡の残りの調査区について、重機により4月22日より掘削を開始し、5月22日まで実施した。

藪田遺跡の5区北半～6区・7区北端にかけては、重機掘削の段階では出水に悩まされたが、遺構確認の段階では、粘土化したロームが乾き固くなってしまい、逆に水をまきながらの確認作業となり、1ヶ月強を要した。この間、6区の土塚と掘立柱建物の調査を実施した。

7・8月は、洞Ⅲ遺跡の調査が開始され、一部作業員の移動があり、5区北半と7区北端の掘立柱建物・土塚・溝の調査を実施した。

9月は、6区1号住居址を一部借地して拡張し調査を行なった。また、併行して、洞Ⅰ遺跡の調査を開始した。藪田遺跡全域の調査は9月27日をもって終了した。



第2図 菰田遺跡と周辺遺跡の調査範囲



## 第III章 遺跡の立地と歴史的環境

藪田遺跡は県北山間部のほぼ中央の、利根郡月夜野町大字月夜野に所在し、大峰山<sup>おおみねさん</sup>東南麓<sup>みな</sup>末端の味城<sup>じょうざん</sup>山東麓<sup>さんとうろく</sup>袖部に接し、利根川と支流の赤谷川の合流点より、北西へ約2kmに位置する。標高は446m～452mで、調査前は畑地と水田に利用されていた。

県最北端<sup>おのみなみみやま</sup>の大水上山を水源とする利根川は、月夜野町地内ではほぼ南流し、左右両岸に良好な河岸段丘が発達している。藪田遺跡はこの右岸にある。

本遺跡がのる河岸段丘は、沖積面と洪積面に分かれ、両者の間は高さ約30mの段丘崖がある。洪積面はさらに上位面と下位面に分かれ、本遺跡の東70mには高さ約6mの段丘崖が南北に走っている。藪田遺跡は以上のように分化した、洪積上位面<sup>注</sup>に立地する。

さらに、この河岸段丘は大峰山麓から東流する、小河川による谷により分割されている。本遺跡も南<sup>こじょうざわ</sup>を古城<sup>ふかさわ</sup>沢、北を深沢によって切られ、谷の枝沢によりさらに南北に波打つように起伏がある。

藪田遺跡周辺では、大正時代より少事例ながら遺跡の発見・調査例があり、昭和20年代末から40年代前半には、3遺跡が学術調査されている。昭和48年以降、本遺跡の調査原因でもある上越新幹線建設に伴う事前調査として、大規模な発掘調査が実施されるようになり、続く、関越自動車道建設や関連の開発事業により、昭和58年まで、次々と大規模な発掘調査が実施された。この発掘調査の成果は、次第に報告されつつある。

本遺跡周辺の旧石器時代の遺跡はすべて、利根川左岸で確認されている。後田<sup>うしろだ</sup>・善上<sup>ぜんじょう</sup>・大竹<sup>おおたけ</sup>等の遺跡があり、特に後田遺跡は約4,500点の遺物と約20箇所のユニットが検出された大規模な遺跡である。

縄文時代の遺跡では、前中原<sup>まへなかはら</sup>・三後沢<sup>みつござわ</sup>・十二原II<sup>じゅうにのはら</sup>・宮地<sup>みやじ</sup>・善上<sup>ぜんじょう</sup>・後田<sup>ごてん</sup>等の遺跡で、前期の集落が確認されており、中期の遺跡としては、梨の木平<sup>なしきだいら</sup>・三後沢<sup>みつござわ</sup>・十二原<sup>じゅうにのはら</sup>・十二原II<sup>じゅうにのはら</sup>等の遺跡があり、梨の木平遺跡では敷石住居址1軒が確認されている。後期の遺跡としては、深沢<sup>ふかさわ</sup>遺跡があり、径約20mの配石遺構が確認され、石棺状配石が50基近く検出された。

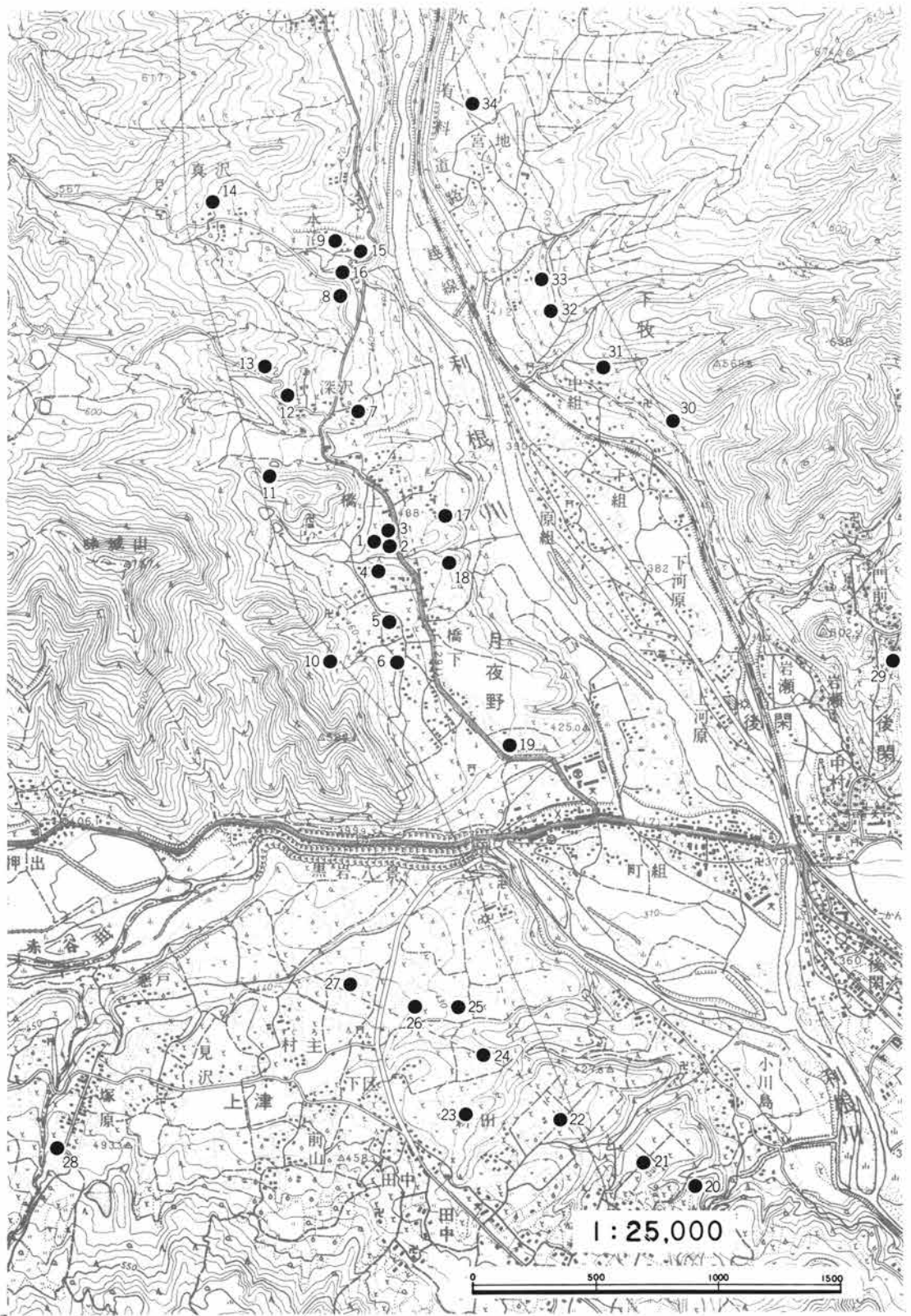
弥生時代の遺跡としては、八東<sup>やつかはぎ</sup>脛洞窟<sup>せうどうくつ</sup>・梨の木平<sup>なしきだいら</sup>遺跡で中期の土器が出土し、利根川と赤谷川の合流点の南西に広がる、通称<sup>なぐるみだいら</sup>名胡桃<sup>なぐるみだいら</sup>平<sup>ひら</sup>で後期の集落が数箇所確認されている。

古墳時代の遺跡としては、諏訪<sup>すわ</sup>・師<sup>し</sup>B<sup>ろ</sup>・後田<sup>ごてん</sup>等の遺跡で、後期の集落が確認されている。また、塚原<sup>つかはら</sup>・師<sup>し</sup>・後閑<sup>ごかん</sup>地区を中心に150基以上の古墳があり、いずれも、後期の群集墳をなしている。

奈良・平安時代の遺跡は、利根川両岸の各地で集落が確認されているが、当地域の大きな特徴は、藪田遺跡の西に連なる大峰山東南麓に、窯址群が数多く確認されている点である。これらの窯址群は月夜野窯址群と呼ばれ、南より洞<sup>ほら</sup>A支群、藪田A支群、深沢B・C支群、真沢<sup>まなざわ</sup>A支群、水沼<sup>みづぬま</sup>A・B支群が確認されており、8世紀後半から10世紀にかけての時期で、県北における須恵器生産の一大拠点であり、利根郡内一帯へ須恵器を供給していた。

中・近世にかけては、本遺跡の南東約300mの段丘崖上に、明応元年築造と伝えられる小川<sup>おがわ</sup>城があり、本遺跡も含め洞III遺跡等で、関連する多くの掘立柱建物が確認されている。

注 遺跡の立地については、藪田東遺跡(1982)の「藪田東遺跡周辺の地質 磯貝基一」を参考にした。



第3図 周辺遺跡位置図

第1表1 周辺遺跡一覧表

No	遺跡名	所在地	調査年度	遺跡の概要	文献
1	藪田遺跡	月夜野町大字月夜野字藪田1757他	S52・S53	弥生時代住居址1軒、平安時代住居址10軒、中・近世掘立柱建物群。	
2	藪田東遺跡	月夜野町大字月夜野字藪田1756他	S54	藪田遺跡に臨接。粘土採掘坑を伴う平安時代集落址。住居址8軒。	1
3	藪田遺跡（観光センター）	月夜野町大字月夜野字藪田1743他	S54	藪田・藪田東遺跡に臨接。調査地点2ヶ所。中・近世掘立柱建物群を確認。	
4	洞III遺跡	月夜野町大字月夜野字洞1506他	S52・S53	藪田遺跡の南に臨接。平安時代住居址7軒と中・近世掘立柱建物85軒を確認。	2・3
5	洞II遺跡	月夜野町大字月夜野字洞1442他	S51・S53	中・近世掘立柱建物18軒と近世鍛冶跡1基等を確認。	3・4
6	洞I遺跡	月夜野町大字月夜野字洞1369他	S51・S53	平安時代住居址2軒と近世井戸・溝・土壇等多数。	3・4
7	深沢遺跡	月夜野町大字月夜野字深沢2111他	S51・S54	縄文時代住居址1軒、配石遺構約45基、その他、土壇多数。	4・5
8	前田原遺跡	月夜野町大字月夜野字前田2397他	S53	平安時代住居址1軒、中・近世掘立柱建物2軒を確認。	3
9	前中原遺跡	月夜野町大字小川字前中原18他	S50・S51	縄文時代早期～前期の住居址4軒と土壇多数。その他、平安時代住居址1軒。	6
10	洞A支群	月夜野町大字月夜野字洞	S45・S46	9世紀初頭の半地下式無段登窯3基を調査。	7・8 9
11	藪田A支群	月夜野町大字月夜野字藪田1691	S54	月夜野窯址群の中では最も古い8世紀代の窯。窯体2基を確認。	4・8
12	深沢B支群	月夜野町大字月夜野字深沢		2基の窯体が確認されている。9世紀末から10世紀初頭の杯・蓋・羽釜等が出土。	8
13	深沢C支群	月夜野町大字月夜野字深沢		複数の窯址が予想される。10世紀前半を主体とする杯・蓋・盤・羽釜等が出土。	8
14	真沢A支群	月夜野町真沢		地下式の窯体を1941年に発見。10世紀前半の杯・羽釜・甕・鍔付飯等出土。	8・9

第1表2 周辺遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	調査年度	遺跡の概要	文献
15	水沼A支群	月夜野町水沼		窯体1基を確認。須恵器・瓦併用の窯。8世紀後半代か？	8
16	水沼B支群	月夜野町水沼		窯体1基が存在していた可能性あり。時期不明。	8
17	梨の木平遺跡	月夜野町大字月夜野字藪田	S51	縄文時代敷石住居址1軒、弥生時代中期の包含層、平安時代住居址1軒。	12
18	小川城址	月夜野町大字月夜野1132	S55	城館址。昭和55年に二の丸推定地を調査。15・16世紀の掘立柱建物7軒確認。	10・11
19	菩提木遺跡	月夜野町大字月夜野931-1	S56	経塚1基を確認。一字一切経を多数検出。	
20	名胡桃城址 (城平遺跡)	月夜野町大字下津字城平3491	S56	城館址。昭和56年に馬出し部を調査。昭和24年県史跡指定。	10・14
21	諏訪遺跡	月夜野町大字下津字諏訪3376	S56	縄文時代土壇46基、弥生時代住居址1軒、古墳時代住居址6軒。	14
22	三後沢遺跡	月夜野町大字下津字三後沢	S57	縄文時代住居址6軒、弥生時代住居址7軒、その他、土壇多数。	15
23	十二原遺跡	月夜野町大字下津字十二原2255	S48	縄文時代中期包含層。弥生・古墳時代住居址各1軒、平安時代住居址2軒。	6
24	十二原II遺跡	月夜野町大字下津字十二原	S57	縄文時代住居址10軒、弥生時代住居址6軒、土壇70基。	15
25	大原遺跡	月夜野町大字上津字大原929	S48・S49	弥生時代住居址2軒、平安時代住居址1軒。	6
26	大原II遺跡	月夜野町大字上津字大原	S58	大原遺跡に臨接。縄文時代陥穴22基、弥生時代住居址3軒。	16
27	村主遺跡	月夜野町大字上津字大原	S58	縄文時代陥穴16基、奈良・平安時代住居址31軒、掘立柱建物5軒。	16
28	塚原古墳群	月夜野町大字上津字塚原		昭和28年群馬大学実測調査。40基以上の古墳が確認されている。	17・18
29	門前A遺跡	月夜野町大字後閑字門前	S58	古墳時代住居址5軒、奈良・平安時代住居址13軒を確認。	

第1表3 周辺遺跡一覧表

No	遺跡名	所在地	調査年度	遺跡の概要	文献
30	高平遺跡	月夜野町大字下牧字高平	S58	平安時代住居址3軒を確認。	
31	大竹遺跡	月夜野町大字下牧字大竹	S58	旧石器のユニット25、縄文時代住居址2軒、平安時代住居址11軒を確認。	
32	小竹A遺跡	月夜野町大字下牧字小竹	S58	旧石器のユニット2、縄文時代土壇21基を確認。	
33	小竹B遺跡	月夜野町大字下牧字小竹	S58	土壇・暗渠等確認。	
34	宮地遺跡	月夜野町大字下牧字宮地	S58	縄文時代住居址2軒と土壇を多数確認。	

参考文献

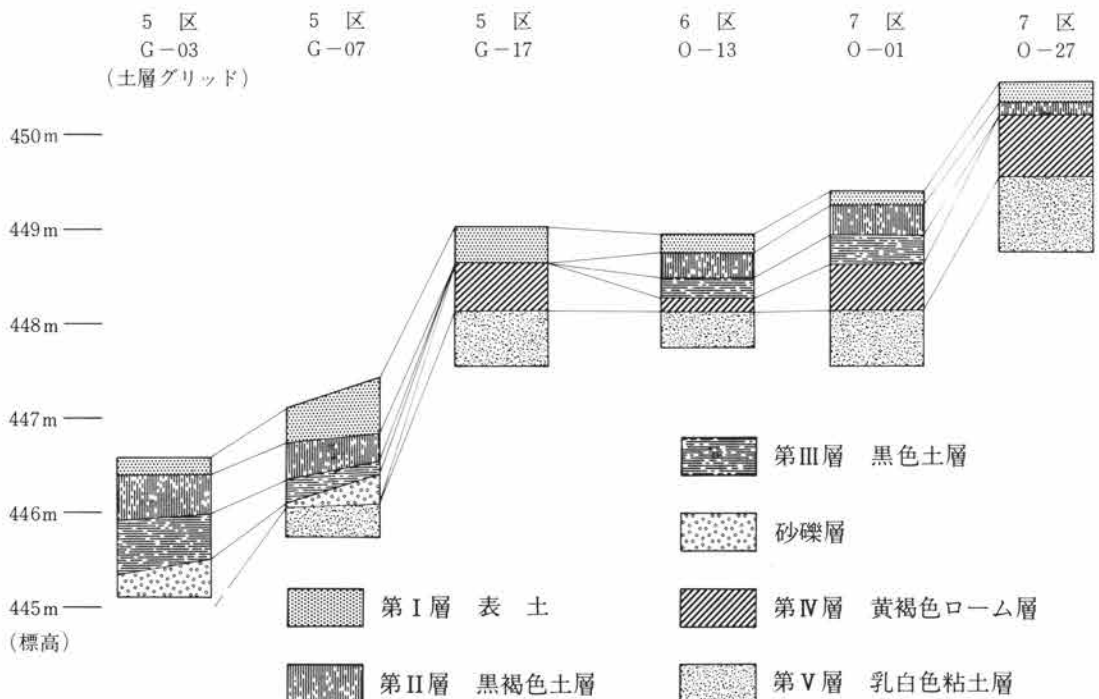
- 1 原 雅信・中沢 悟他 「薮田東遺跡」1982 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 2 細野雅男・須田 茂他 「上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報 V」1979 群馬県教育委員会
- 3 中束耕志・須田 茂他 「上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報 VI」1980 群馬県教育委員会
- 4 長谷部達雄・中束耕志他 「上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報 IV」1978 群馬県教育委員会
- 5 下城 正・西田健彦他 「群馬県深沢配石遺構」『日本考古学年報32』1982 日本考古学協会
- 6 長谷部達雄・能登健他 「十二原遺跡・大原遺跡・前中原遺跡」1982 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 7 井上唯雄 「群馬県利根郡月夜野町洞窟跡発掘調査報告」1973 月夜野町教育委員会
- 8 大江正行・中沢 悟他 「土器部会研究資料No.2」1983 群馬歴史考古同人会
- 9 山崎義男 「上野国利根郡月夜野町二窠址について」『古代文化第12巻第4号』1941 日本古代学会
- 10 山崎 一 「群馬県古城畷址の研究 下巻」1972 群馬県文化事業振興会
- 11 相京建史 「小川城址」1981 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 12 能登 健・下城 正 「梨の木平遺跡」1977 群馬県教育委員会
- 13 細野雅男 「年報 1」 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 14 中沢 悟・原雅信他 「城平遺跡・諏訪遺跡」1984 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 15 相京建史・中沢 悟他 「三後沢遺跡・十二原II遺跡」1983 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 16 相京建史・中沢 悟他 「大原II遺跡・村主遺跡」1984 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- 17 「上毛古墳綜覧」1938 群馬県
- 18 尾崎喜左雄 「古墳文化に現われた地域社会 毛野」『日本考古学講座 5 古墳文化』1955

## 第IV章 基本土層

菟田遺跡は前述のごとく、利根川右岸段丘の洪積上位面に立地し、小谷により南北を刻まれ、枝谷により台地部と低地部が交互に構成され、台地部に遺構が広がっている。本遺跡の地質については、「菟田東遺跡」の報告の中で、「菟田東遺跡周辺の地質」として、磯貝基一氏が詳しく述べられており、詳細については前稿を参照されたい。

菟田遺跡の基本土層は以下のとおりである。

- 第I層 表土** 土 暗褐色を呈し、小礫を含む。5区南半台地部では直下がローム層となる。
- 第II層 黒褐色土層** FP（榛名山二ツ岳の6世紀後半降下の軽石）を含み、粒子荒く、粘性は弱い。5区台地部南西傾斜面では、多量の平安時代の土器が流れ込んでいる。また、7区南半低地部では、水的作用により分層している。
- 第III層 黒色土層** 粒子密で、粘性が強い。縄文時代～弥生時代の包含層と思われる。
- 砂礫層** 調査区南端の低地部だけに確認された。砂・ジャリ・小礫が混じり合っている。古城沢の開析による堆積層と思われる。
- 第IV層 黄褐色ローム層** 上部ローム層で、最下部は粘土化する。
- 第V層 乳白色粘土層** 5区台地部では約1.5mの厚さがある。上半は良質の粘土であるが、中位や下部には小礫が混入している。本層の下部は河床礫層となる。



第4図 菟田遺跡土層模式図

## 第V章 遺構と遺物

### 1 遺跡の概要

藪田遺跡の調査区は、距離約300m、幅約57m～74mのほぼ南北に細長い調査区である。本遺跡に接して、藪田東遺跡と観光センター用地の調査区がある。

藪田東遺跡は5区南半台地部の東半を調査しており、平安時代の住居址8軒、粘土採掘坑群11群、土坑6基と近世の掘立柱建物6軒、集石状遺構1基、組石状遺構1基、溝状遺構1基、骨蔵器を伴う遺構2基、土坑15基、時期不明土坑6基を検出した。

観光センター用地の調査区は2ヶ所あり、南西の調査区は、藪田遺跡の5区北半と藪田東遺跡の北に接している。南西の調査区では、近世掘立柱建物の柱穴を数本確認しただけであるが、約150m離れた北東の調査区では、中世から近世にかけての掘立柱建物を20軒近く検出した。中でも1軒は、桁行9間、梁行2間で南北に庇を持つ大規模な建物であった。

藪田東遺跡と観光センター用地南西調査区は、本遺跡と接しており遺跡の性格からも、藪田遺跡と同一のものである。

藪田遺跡は調査区を3区に分割しており、各区には比高差1m～2mの起伏があり、台地部と低地部とがある。調査区南端は、古城沢の開析により低地化し、5区南半は藪田東遺跡に連なる舌状台地状



を呈し、5区北半は低地化している。6区は南端と北端が微高地状にやや高くなっており、7区南半は浅い埋没谷が湾入しており、調査区北端の7区北半は痩せ尾根状の台地となっている。調査区北端より北へ約40mで深沢の開析谷となる。

藪田遺跡の遺構と遺物は、以上のような調査区のやや高くなった台地部に分布しており、特に5区南半の台地部に多く集中している。検出された遺構は、竪穴住居址11軒、掘立柱建物28軒、土壇68基、井戸3基、溝5本、集石状遺構1基であり、遺物は縄文時代から近世末まで、連綿と出土している。

5区では弥生時代後期の住居址1軒が確認され、平安時代の遺構としては、住居址9軒、粘土採掘坑と思われる土壇11基、土壇1基、溝2本がある。中・近世にかけては、掘立柱建物25軒、土壇34基、井戸2基、溝2本がある。また、南西傾斜面には多量の平安時代の土器が流れ込んでいた。5区は、土器量の多さや出土土器の状態、粘土採掘坑の存在等から、平安時代においては窯業集団の居住地としての性格を有している。また、朱の付着した印と烙印、土製印の3点が出土したことは、特筆すべき点である。また、14世紀～18世紀にかけての陶磁器が出土しており、掘立柱建物との関連が窺える。

6区では、平安時代の住居址1軒と、近世掘立柱建物2軒および柱穴群、土壇14基、井戸1基が確認された。住居址からは良好な土器のセットが出土し、掘立柱建物は3群に分かれ、土壇は時期は明確ではないが、おおよそ2群に分かれている。7区の拡張調査区は小範囲であるが、近世掘立柱建物1軒および柱穴群、溝1本、土壇8基を確認した。

なお、5区8号住居址は調査後、結果として粘土採掘坑であることが判明し、欠番とした。





## 2 住居址

### 5区1号住居址（第5図、図版9）

5区台地部の中央南西寄りに立地し、調査区の西端に位置する。本住居址は南東・北東・北西の各隅を、平安時代の粘土採掘坑によって壊されている。

平面形は長方形を呈し、規模は長軸4.27m、短軸3.30mで、長軸方向はN-9°-Wを示す。覆土は炭化材を多量に含む黒色土で、自然に埋没した様相を示していた。

壁はほぼ直で、ローム面を掘り込んで10cm~15cmの高さが確認された。床面は平坦で、ほぼ全面が固く締っていた。周溝は確認されなかった。

柱穴は南壁に寄った位置に2本、北壁に寄った位置に1本が確認されたが、構造的には4本柱と考えられ、北壁寄りのPit3に対応する柱穴は北西隅の粘土採掘坑によって壊されたものと考えられる。柱穴は円形を呈し、南壁寄りのPit1は径15cm、深さ46cmで、Pit2は径16cm、深さ36cmである。北壁寄りのPit3は径21cm、深さ38cmである。

炉は中央北壁寄りに位置し、67cm×62cmの規模で歪んだ円形を呈している。床面を約8cm掘り窪め、断面は皿状をなしている。炉の底面や周辺の床面が部分的に焼けていた。完形の甕が西壁上端より、横に倒れて潰れた状態で出土した。

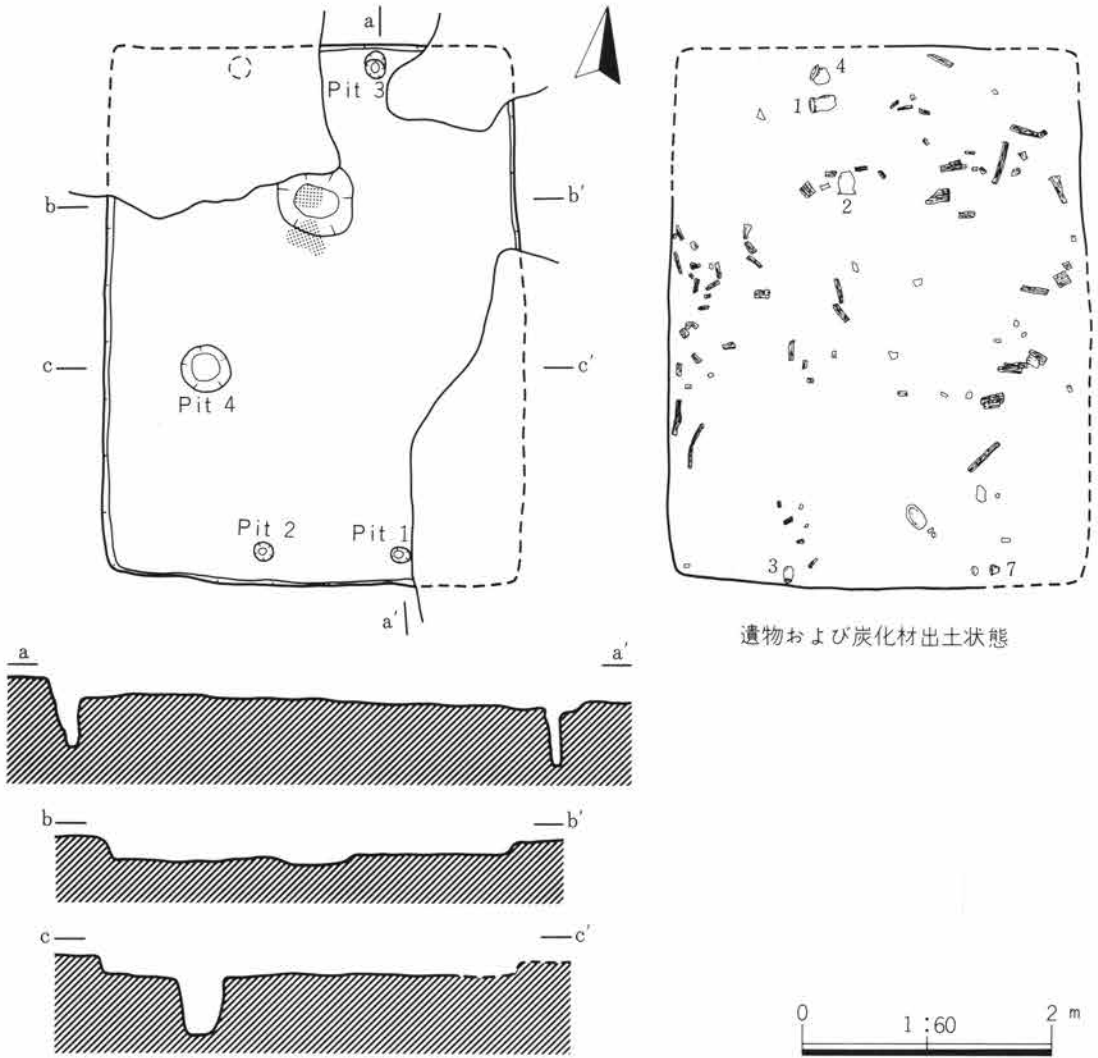
貯蔵穴(Pit4)が西壁寄り中央やや南で確認された。平面形は円形を呈し、径40cm、深さ45cmの規模で、断面は円筒状をなしていた。この貯蔵穴からは遺物は出土しなかった。

なお、本住居址の覆土や床面上からは、多くの炭化材が出土した。中央西壁寄りの位置には、径約10cm、長さ約98cmの丸太材が短軸に平行して出土し、中央北東寄りの位置には60cm×30cmの範囲で、カヤと思われる炭化物が出土した。本住居址は東壁や西壁の一部が焼けており、炭化材の出土状態も含め、火災を受けた可能性が強い。

土器の出土状態としては、1・4が北西隅の粘土採掘坑に、6・7が南東の粘土採掘坑に落ち込んだ状態で出土し、2は前述のように炉の縁より出土し、3は南壁に接して出土し、5は覆土中より出土した。その他、土器小片や小礫が10数点、覆土中より出土した。

### 5区1号住居址出土土器（第6図、図版54）

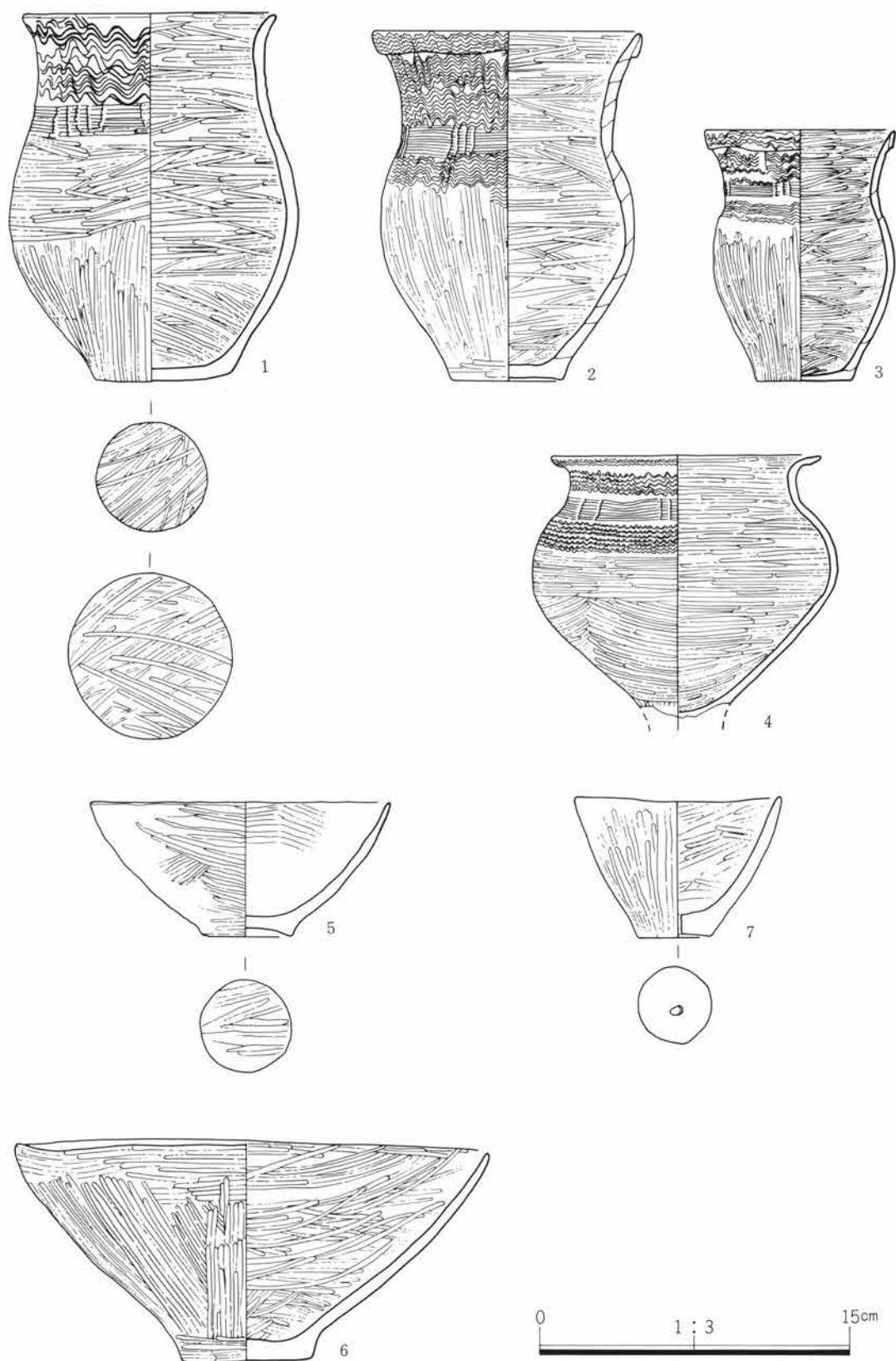
1は甕で完形である。口縁は単口縁で外反し、頸部が緩やかに括れている。器高17.5cm、口径12.2cm、底径6.7cmで、胴部中位に最大径がある。頸部下半に一段の左回転の簾状文を施した後、頸部上半から口縁部に向かって、2段の乱れた波状文を施している。器面全面は研磨され、部位により方向が異なる。胎土は砂粒を含み、焼成は良好で、色調は外面が赤褐色、内面が褐色を呈し、外面にはススが付着している。2も甕で完形である。口縁は折り返し口縁で、器形は1と同様であるが、最大径は口縁部にある。器高16.5cm、口径13.0cm、底径5.4cmである。頸部下半に1段の簾状文を施した後、胴部上端に1段、頸部上半から口縁部に向かって3段の右回転の波状文を施している。器面外面は縦方向に、内面は横方向に研磨されている。胎土・焼成・色調・ススの付着は1と同様である。2は輪積痕に沿ってヒビが入っている。3は小型甕で、2を小形にした状態で、器形・文様・器面調整・胎土・焼成とも2と同様である。器高11.9cm、口径9.0cm、底径4.5cmである。2と異なる所は、頸部上半か



遺物および炭化材出土状態

第5図 5区1号住居址

ら口縁部にかけての波状文が2段であることと、色調が外面は黒褐色、内面は赤褐色を呈する所である。4は台付甕で、脚部を欠いているが、欠損後も使用の痕がある。口縁は折り返し口縁で外反し、頸部が括れ、胴部上半が大きく張り最大径を持ち、脚部に向かってすぼんで行く。器高15.0cm+ $\alpha$ 、口径12.8cmである。文様は3と同様で、器面調整は部位により研磨の方向を変えている。胎土は微砂粒を含み、色調は外面がにぶい黄褐色、内面が灰褐色を呈し、内外面ともに所々、ススが附着している。5は小型の鉢で、口縁部を一部欠損している。上底の底部で、器体はやや膨らみを持って立ち上がり、口縁部はやや内湾ぎみである。器高6.4cm、口径14.4cm、底径4.4cmである。器面は丹念に研磨されている。6は5を大きくした同様の鉢で、上半を $\frac{1}{2}$ ほど欠損する。器高10.6cm、口径22.7cm、底径6.3cmで、底部は平底である。外面に黒斑が見られる。7は小型の甑で完形である。底部は上底で、器体はやや膨らみを持って立ち上がる。器高6.6cm、口径10.0cm、底径3.4cmで、底部には焼成前穿孔の径0.6cmの小孔がひとつある。作りはやや雑であるが、内外面ともに研磨されている。



第6图 5区1号住居址出土遺物

5区2号住居址（第7～9図、図版10・11）

5区台地部の南東寄り傾斜面に立地し、第Ⅲ層黒色土中に構築されている。4号住居址に平行して近接し、18号掘立柱建物や柱穴群がのっている。

平面形は長辺に膨らみを持つ隅丸長方形を呈し、各隅は丸みが大きい。規模は長軸4.75m、短軸4.20mである。長軸方向はN-108°-Eを示す。

覆土は焼土小ブロックの混入が目立つが、自然埋没の様相を示している。壁は南東隅から南壁中央にかけては確認できなかったが、他の部分では約20cmの高さで確認され、やや斜めに立ち上がっている。

床面はほぼ平坦で、全面がやや固く締っていたが、特にカマド前から中央部にかけては固く締っていた。また、床面上面はほぼ全面にわたって灰が薄く堆積し、カマド前の床面下落ち込み上面の床面には、焼土の小ブロックも混じって堆積していた。本住居址につく柱穴と周溝および貯蔵穴は確認されなかった。

カマドは短辺の東壁中央に位置し、半円状に張り出し、焚き口幅97cm、奥行70cmである。燃焼部底面は周壁は非常に良く焼けており、固く焼き締っていた。また、灰と焼土小ブロックの混じり合った層が、カマド前に薄く堆積していた。カマドは掘形を持ち、焚き口部下部には径50cm、深さ15cmのやや円形を呈する、浅い掘り込みが見られた。掘形からは土師器甕の小片が18点出土した。

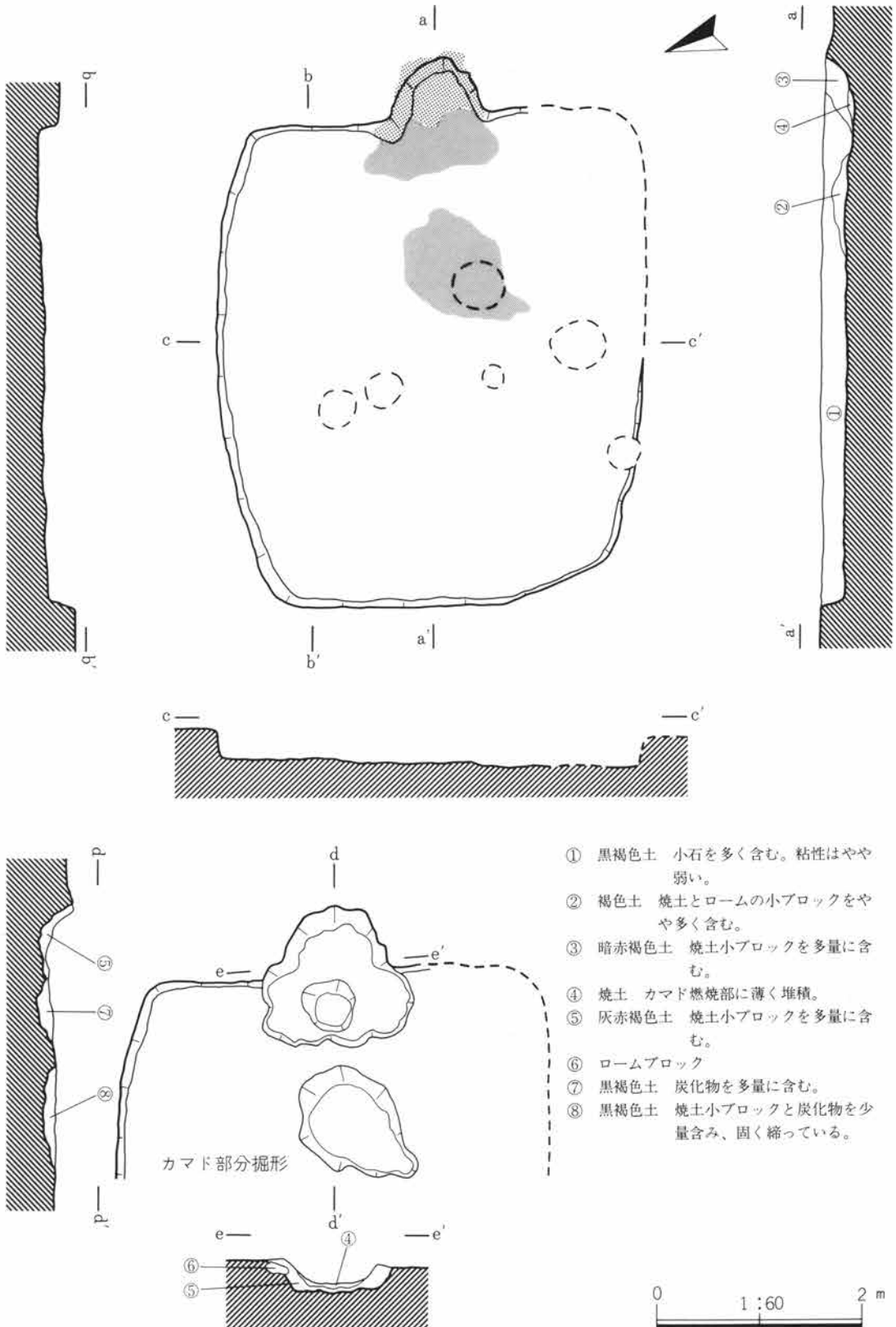
また、カマド前床面下には、長軸88cm、短軸41cm、深さ12cmの不整形をした落ち込みが確認された。この床面下の落ち込みからは、土師器甕や須恵器杯・碗の小片が21点出土し、カマド内や南壁中央の床面出土の土器と接合するものもあった。

出土土器の取り上げ点数は447点であるが、一括取り上げの点数を加えると、600点近い土器が出土した。杯・蓋類と壺・甕類の出土量はほぼ半数ずつで、大きな差はない。杯・蓋類はほぼ全面から出土しており、若干、カマド前～南東隅が多い。壺・甕類はカマド～カマド前～南東隅が多い傾向にあり、散布に片寄りが見られる。

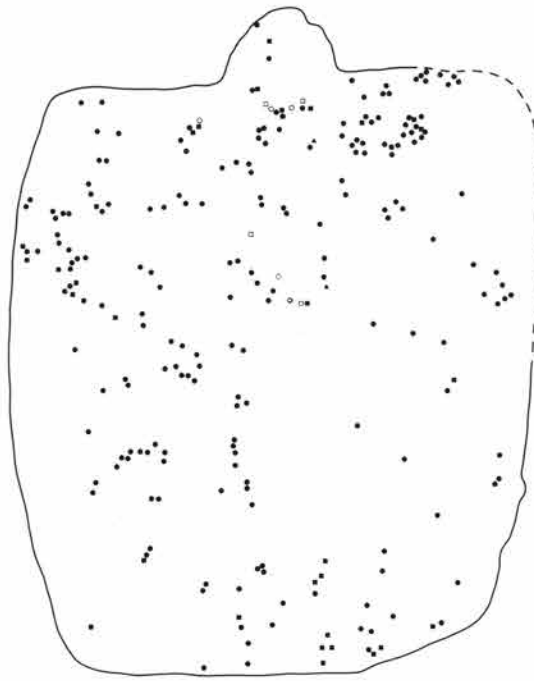
杯・蓋類では圧倒的に杯・碗が多く、完形や大片はカマド前～南東隅、南西隅、北壁中央～北東隅が多い。また、カマド前～南東隅と南西隅の出土のものは床面か、床面近くからの出土が目立ち、他の部分のものは覆土中のものが多い。

壺・甕類では土師器甕が圧倒的に多く、それも、カマド～カマド前に集中して散布していた。また、須恵器甕の大片が、カマド前を中心に散布していたが、覆土中からの出土である。

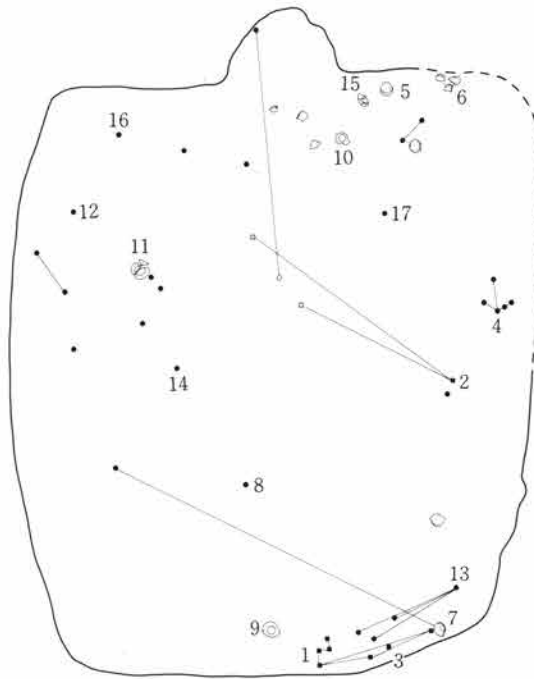
また、碗の中には4号住居址の出土遺物と接合するものもあり、覆土中の出土遺物は傾斜面上方の北からの流れ込みの傾向が窺える。出土土器の中では、杯・蓋類、壺・甕類ともに、カマド～カマド前、南東隅、南西隅のものに高い一括性が窺える。



第7図 5区2号住居址およびカマド部分掘形



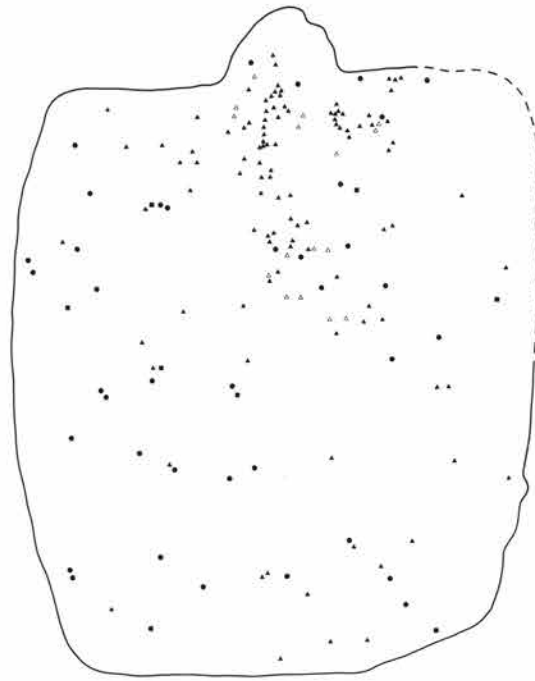
杯・蓋類散布図



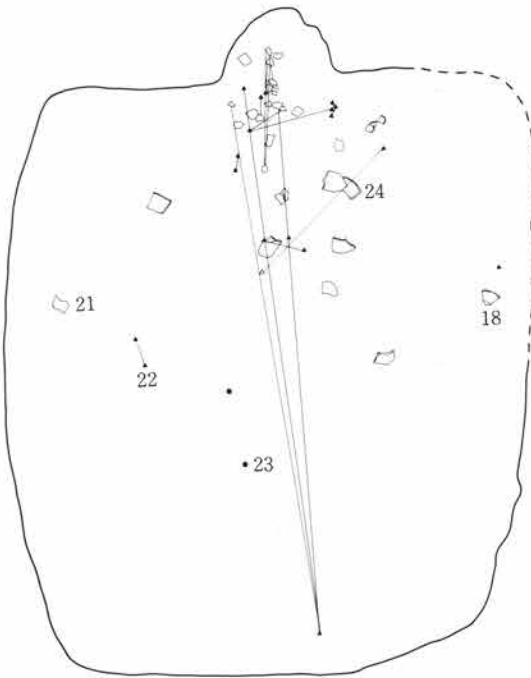
杯・蓋類接合関係図



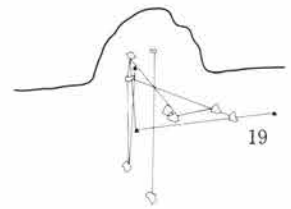
第8図 5区2号住居址遺物散布図1



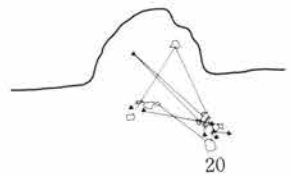
壺・甕類散布図



壺・甕類接合関係図



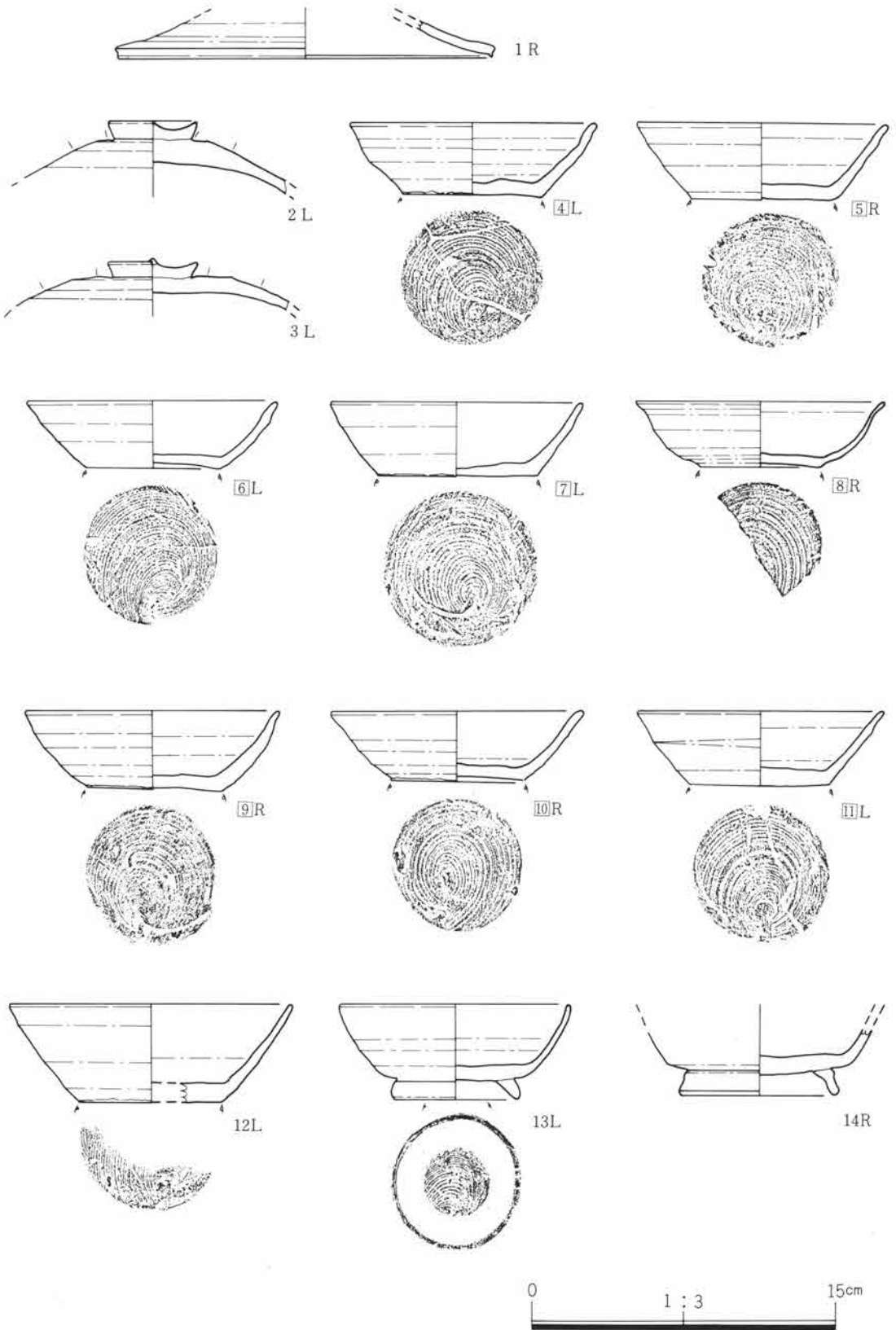
No.19接合関係図



No.20接合関係図

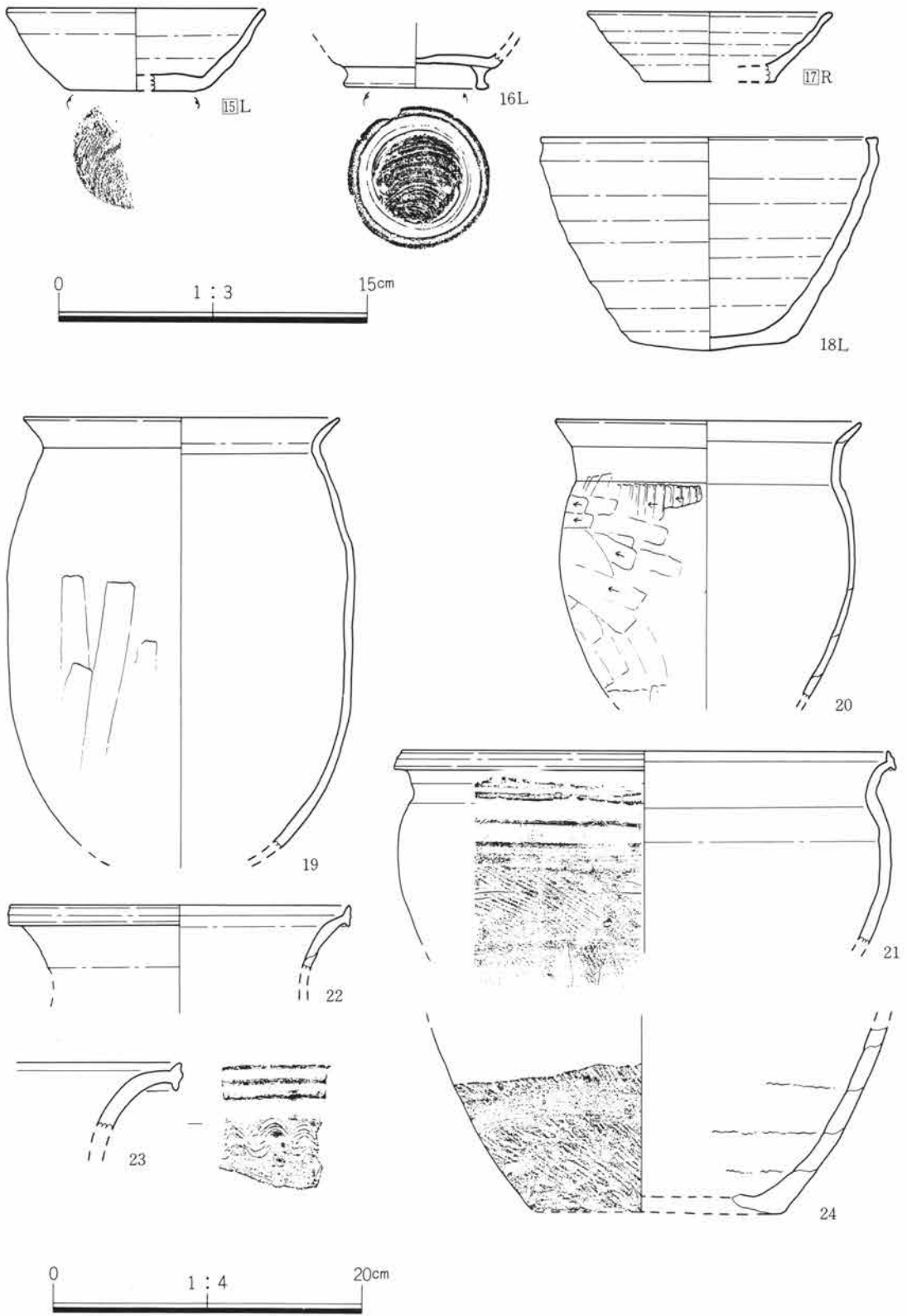


第9図 5区2号住居址遺物散布図2



第10図 5区2号住居址出土遺物 (1)





第11图 5区2号住居址出土遺物 (2)

5区3号住居址 (第12～14図、図版12・13)

5区台地部の南東傾斜面上段に立地し、北半はロームを掘り込んでいるが、南半は黒色土中に構築されている。19・22～24号掘立柱建物がのっている。

平面形は、東壁北半がやや膨らんだ隅丸長方形を呈し、各隅の丸みが大きい。規模は長軸5.07m、短軸3.76mで、長軸方向はN-16°-Eを示す。

覆土は自然に埋没した状況を示し、特に傾斜面上方の北からの流れ込みの様相を強く示している。これは遺物の出土状態からも窺がえる。

壁は北壁では50cmの高さが確認されたが、南壁では約5cmの高さが確認されただけである。各辺の壁はほぼ直に立ち上がる。床面はやや凸凹しており、南壁寄りの部分は軟弱であるが、他の部分はやや固く締っていた。また、中央部周辺は張り床されていた。

周溝が北東隅から北壁全面と北西隅にかけて確認された。幅は15cm～23cmで、深さは平均5cmと浅く、断面はU字状をなしている。本住居址には柱穴と貯蔵穴は確認されなかった。

カマドは長辺の東壁中央に位置し、半円状に張り出している。焚き口幅は98cm、奥行55cmで、焚き口から燃焼部底面にかけて、良く焼け固く締っていた。煙道や他の施設は確認されなかった。

本住居址は掘形があり、南・北両壁に沿った部分を除き、他の部分は全面が床面よりさらに一段深く掘り込まれていた。掘形は起伏が激しく、ロームと黒色土のブロックが混じり合っていた。

また、中央には隅丸長方形をした、床面下の落ち込みがある。規模は長軸1.40m、短軸0.96mで、深さは44cmである。この落ち込みの軸線は、住居址の軸線と合致する。

土器の取り上げ数は1,345点で、一括取り上げの数量を含めると、1,500点近い量の遺物が出土しており、本遺跡の中でも最も土器量の多い住居址である。

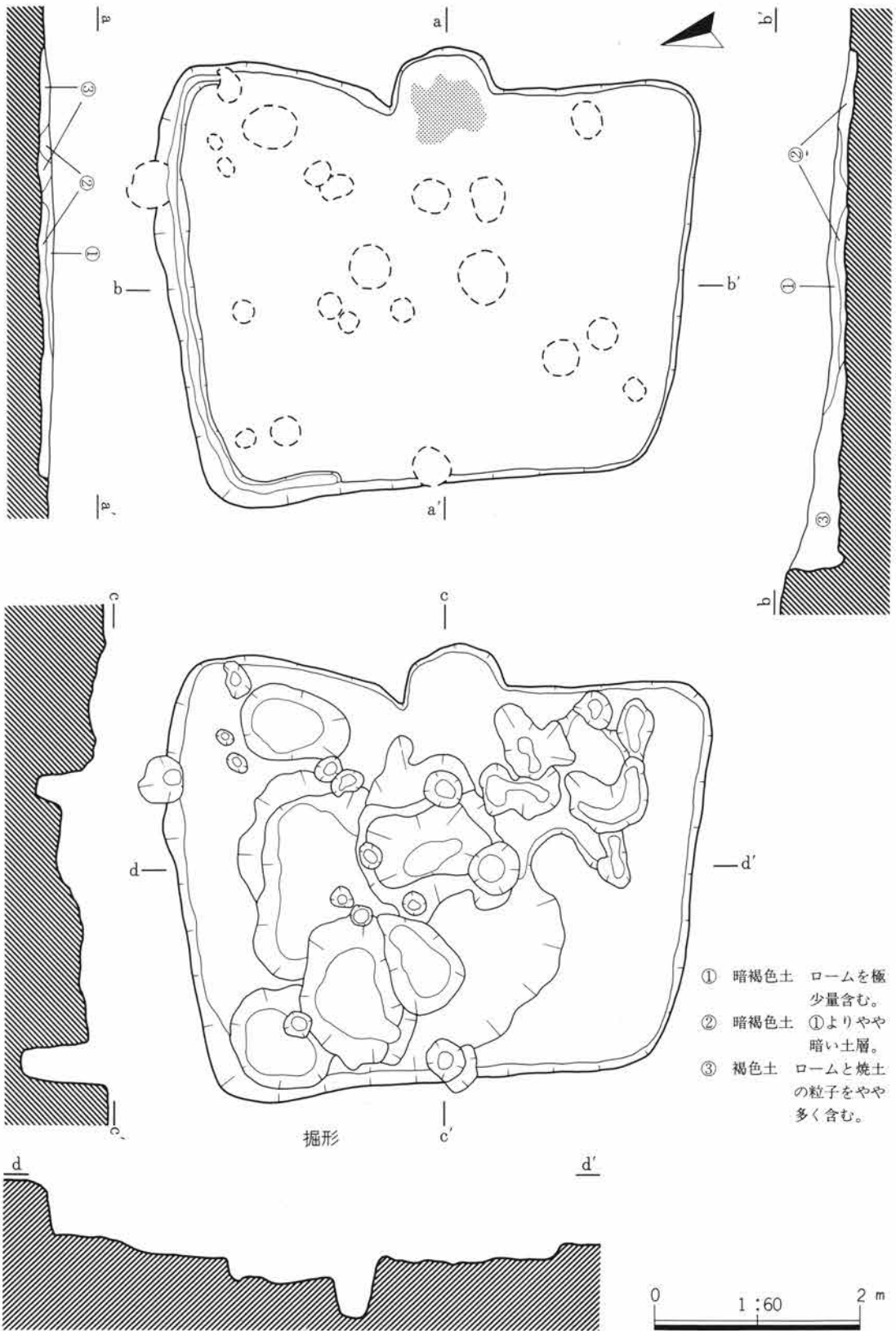
出土数の内訳は、覆土中のものが約950点、床面直上のものが約200点、掘形および床面下の落ち込み出土のものが約350点である。覆土中のものは北半に多く、傾斜面上方からの流れ込みの様相を呈しており、5号住居址の土器と接合するものも2点ある。床面直上の土器は、カマド前～南東隅西壁中央～南西隅のものが多く、

杯・蓋類と壺・甕類では前者の方が量的には多く、器種では杯・椀と土師器甕が多い。杯・蓋類の完形や大片はカマド前～南東隅と西壁中央～南西隅に多く、ほとんどが床面直上のものであり、一括性が高い。接合関係にあるものは、ほとんどが北半の覆土中であり、流れ込んだものと思われる。

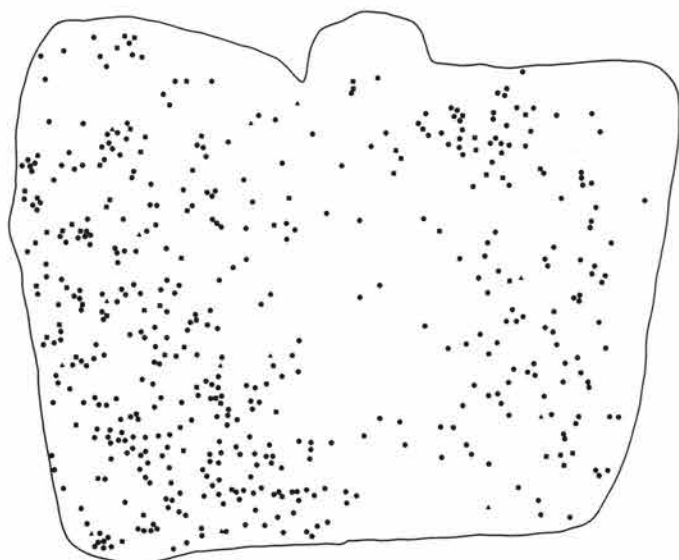
壺・甕類はカマド前～南東隅に散布するものは、床面直上のもが多く、土師器甕が目立ち、北半のものは、覆土中のものが多く、須恵器甕が目立つ。

また、砥石(No.30)1点が北東隅より出土し、磨石状の円礫(No.31～33)3点が南西隅よりまとまって出土している。

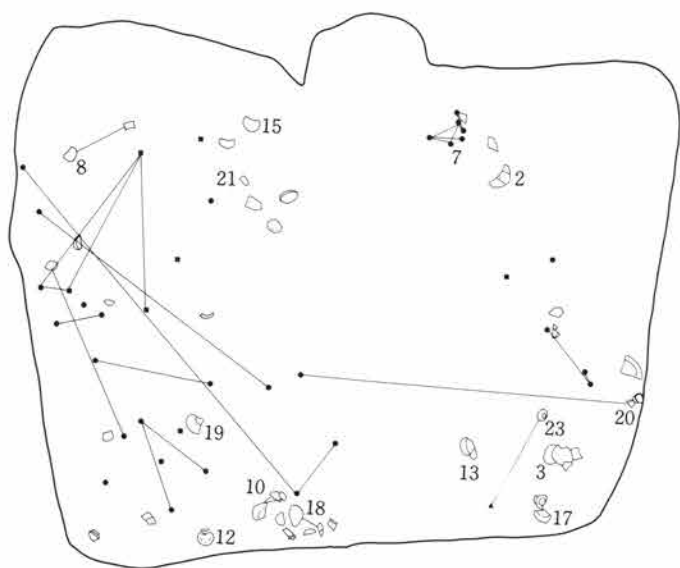
30は輝石安山岩で両端を欠損しているが、各面は内湾ぎみに非常に良く磨られている。側面の一部には製作時の削り痕が認められる。31は安山岩、32は凝灰質砂岩、33は輝石安山岩で、3点とも偏平な河原石をそのまま使用しており、表裏両面や側面が非常に良く磨れている。33は $\frac{1}{2}$ を欠損し、片側面には打撃痕と思われる連続した窪みがある。



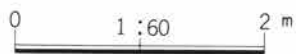
第12図 5区3号住居址および掘形



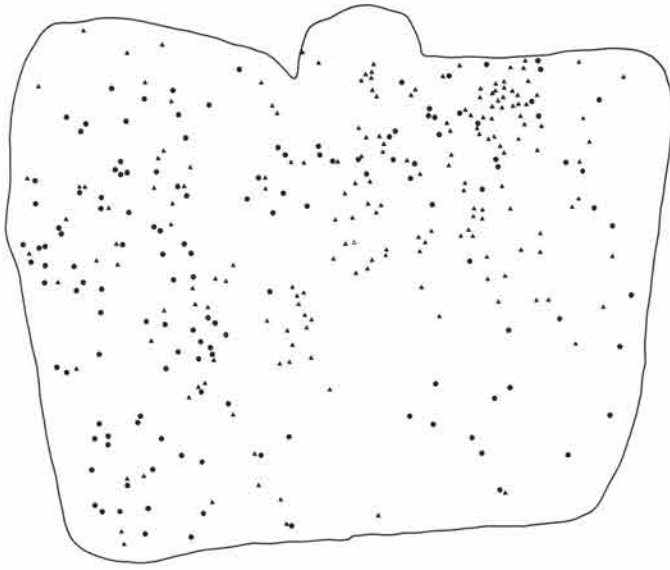
杯・蓋類散布図



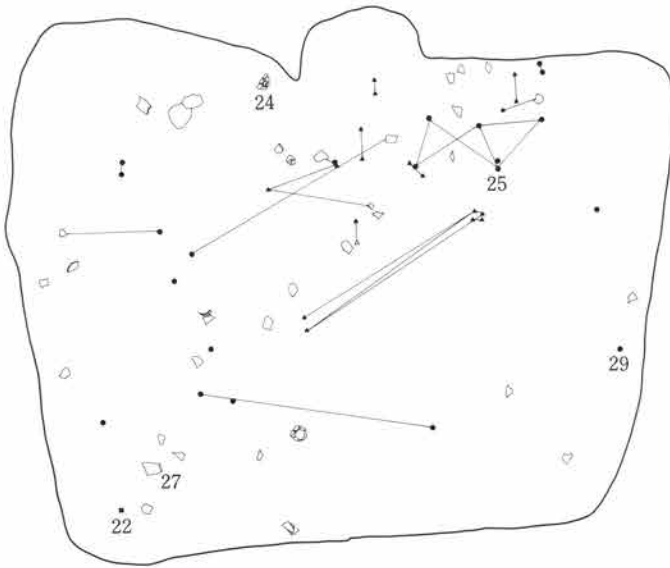
杯・蓋類接合関係図



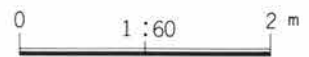
第13図 5区3号住居址遺物散布図1



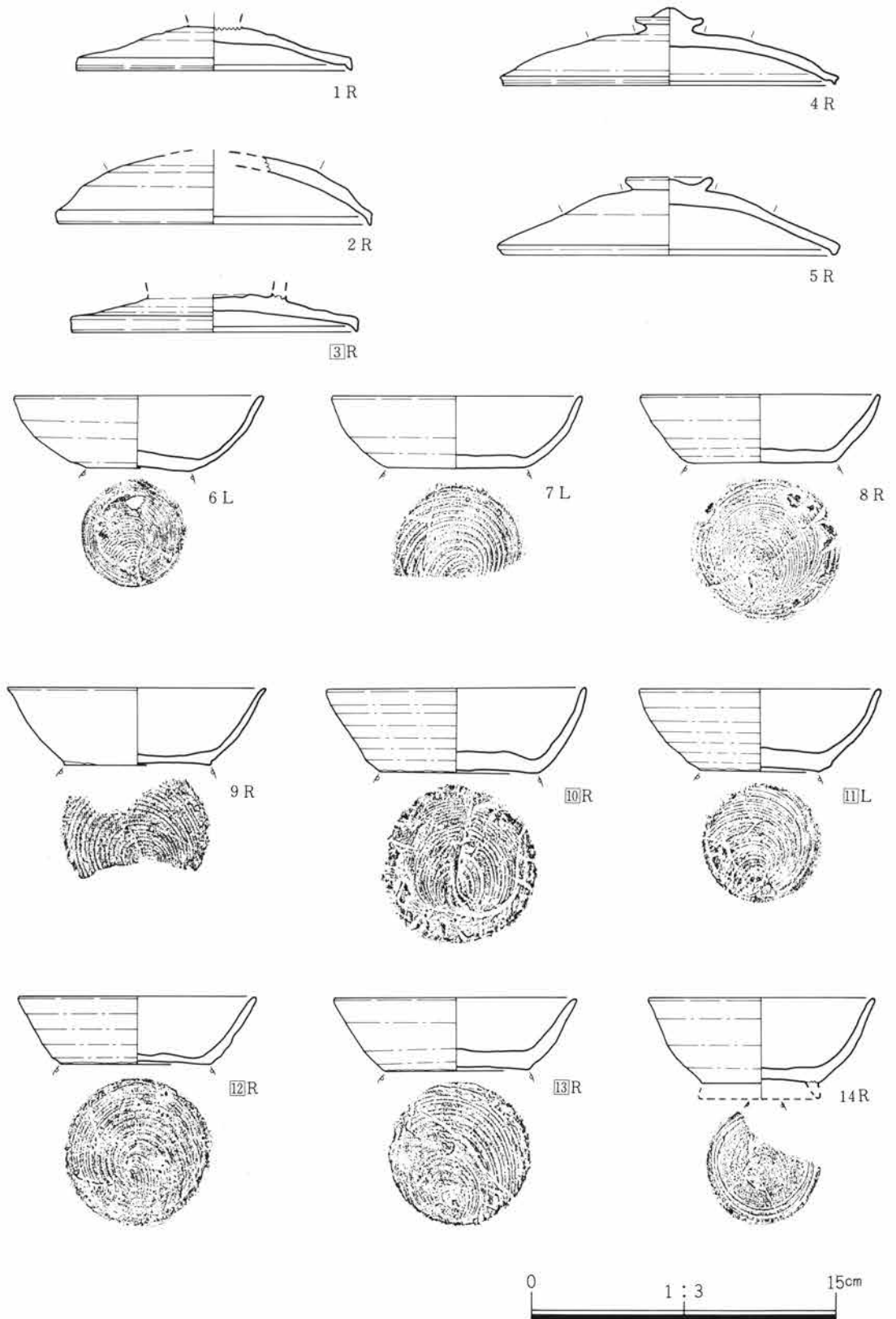
壺・甕類散布図



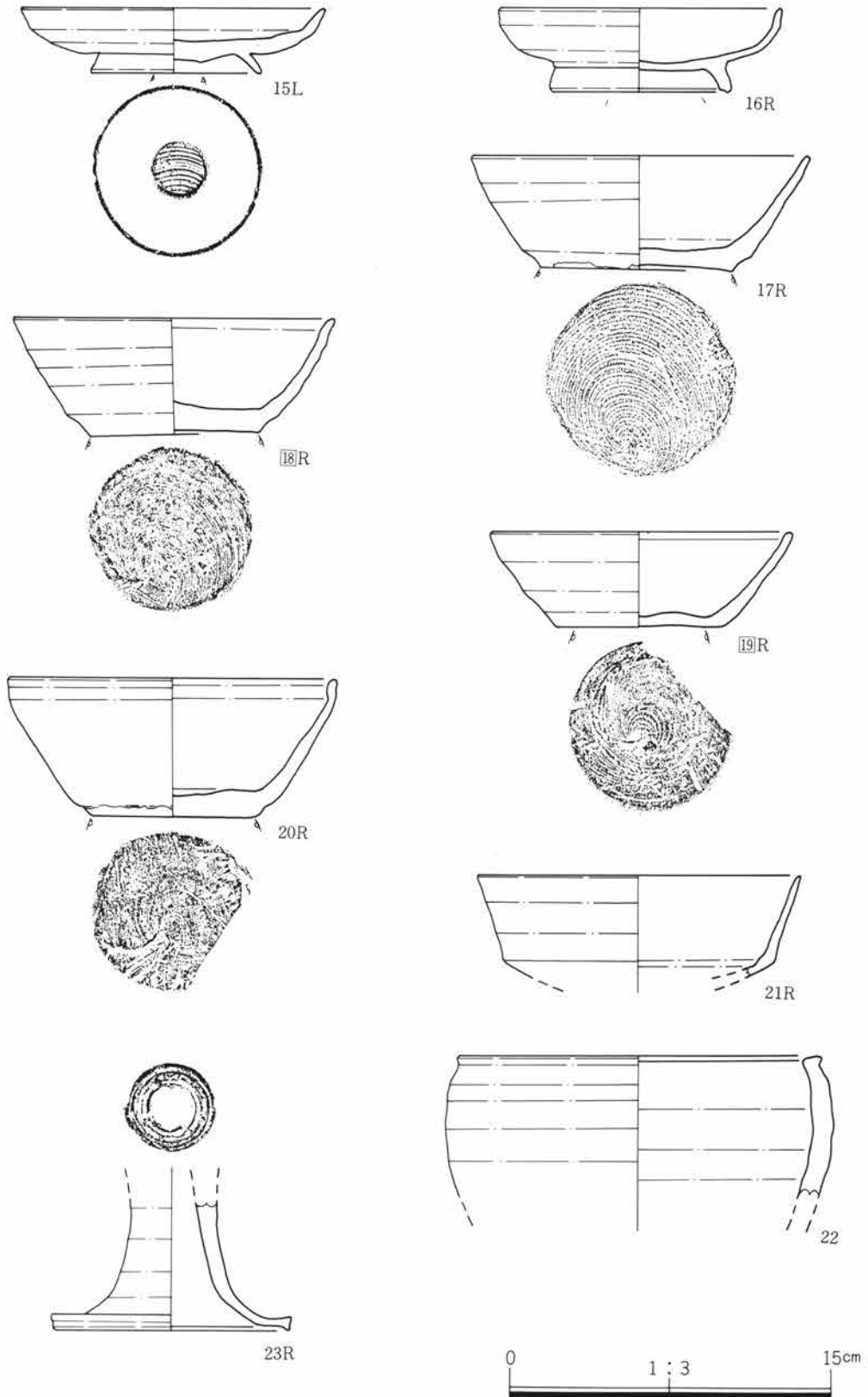
壺・甕類接合関係図



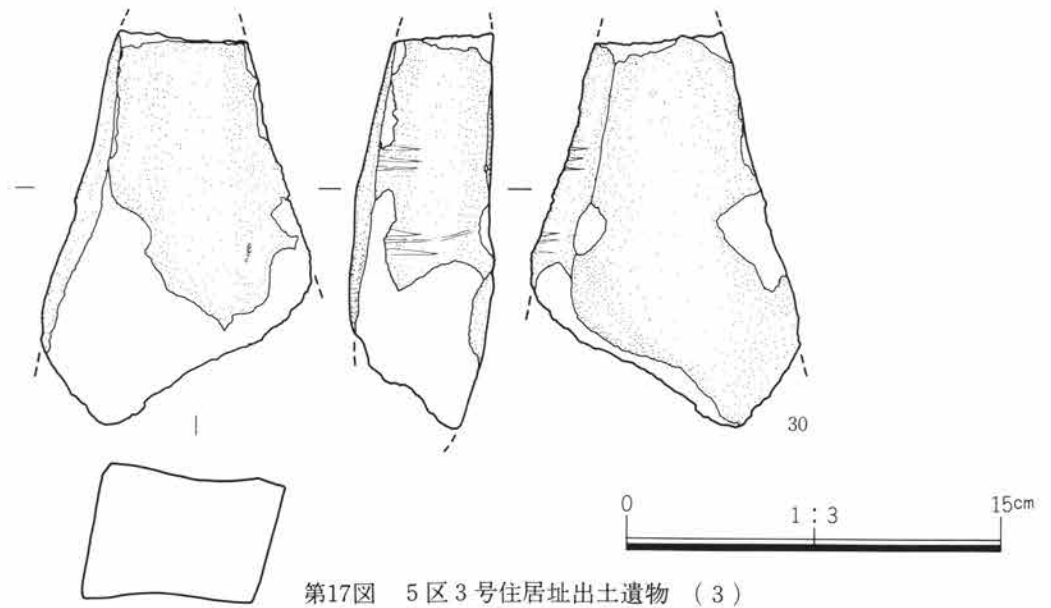
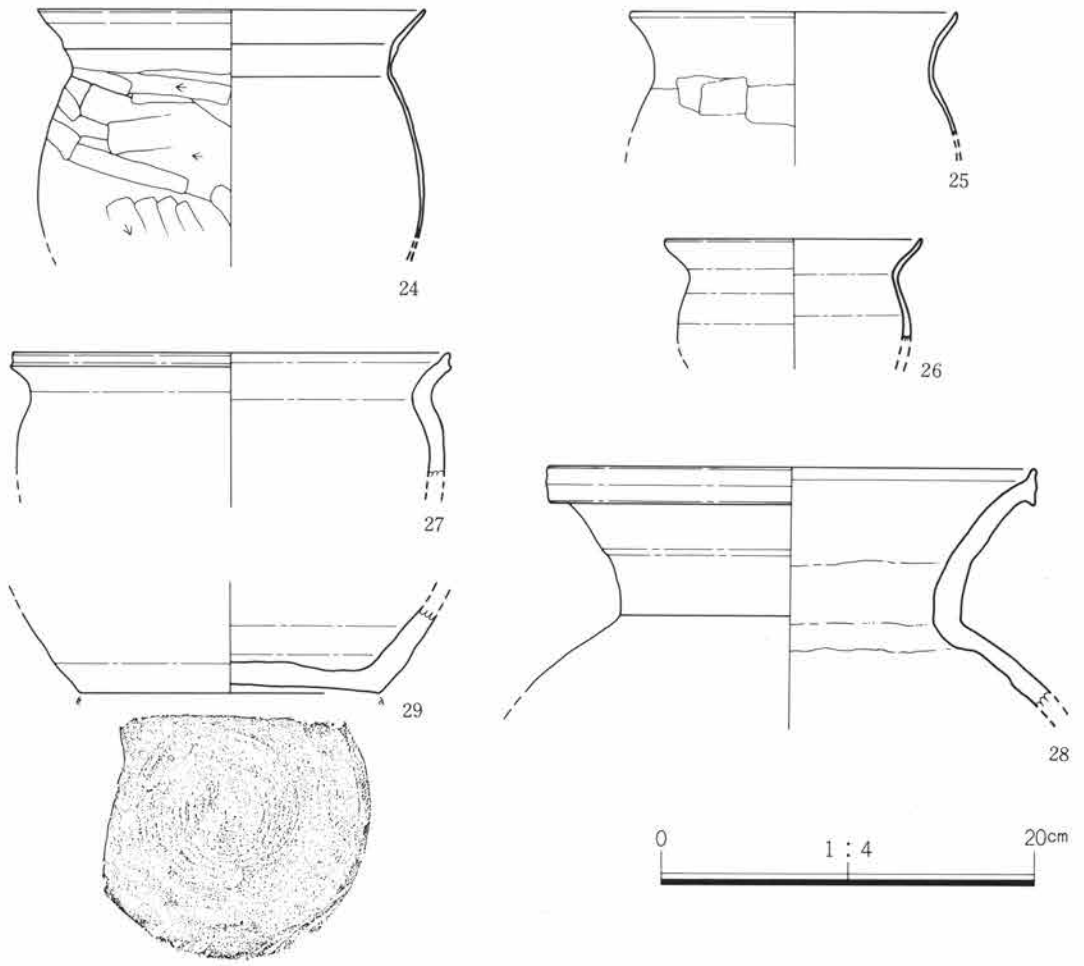
第14図 5区3号住居址遺物散布図2



第15図 5区3号住居址出土遺物 (1)

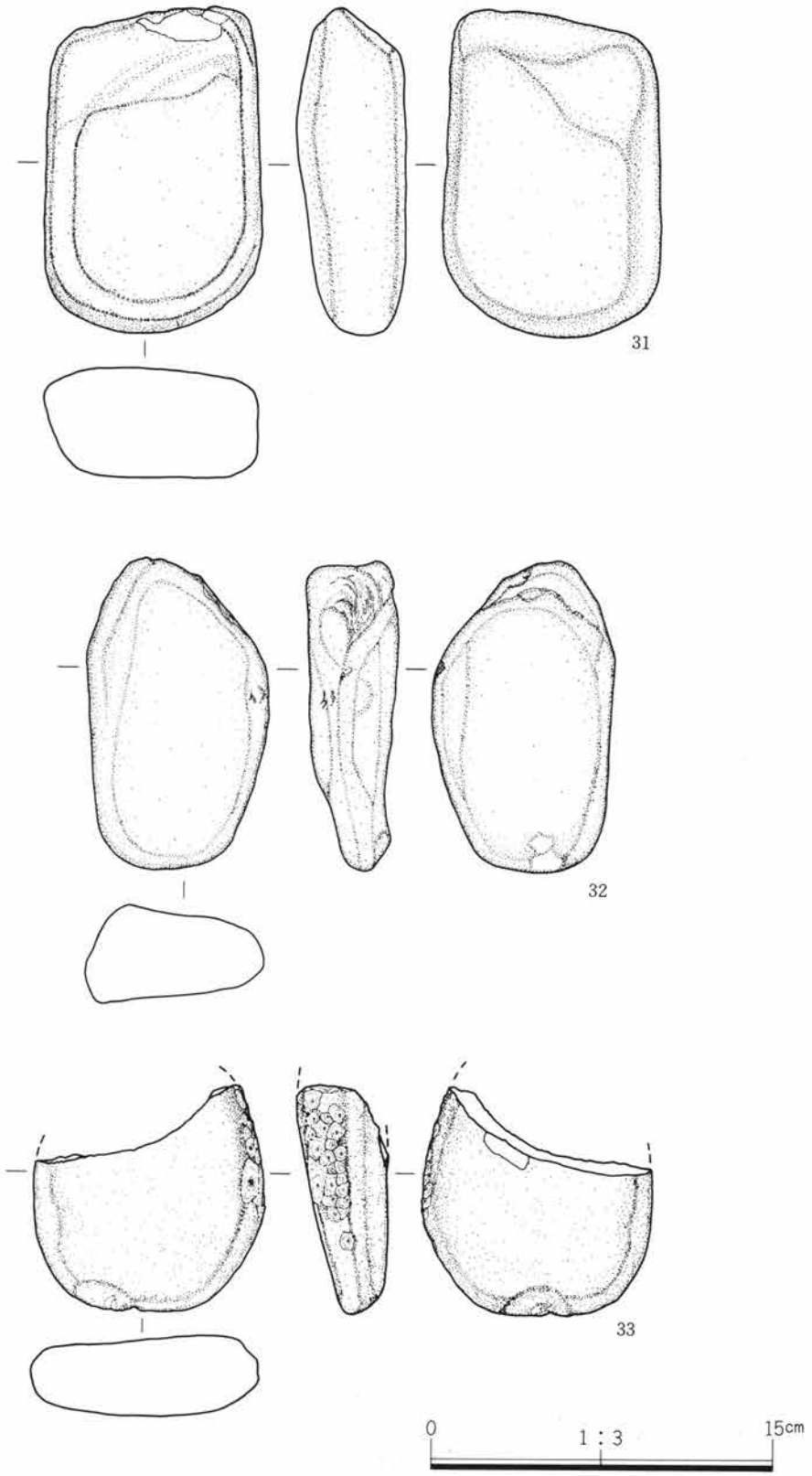


第16图 5区3号住居址出土遺物 (2)



第17図 5区3号住居址出土遺物 (3)





第18图 5区3号住居址出土遺物 (4)

5区4号住居址 (第19・20図、図版14)

5区台地部の南東傾斜面上段に立地する。北壁寄りの一部を確認しただけで、他の部分は確認できなかった。3号住居址と同様に北半はロームを掘り込み、南半は黒色土中に構築されていたものと思われる。2号溝と重複しているが時期差は確認できなかった。20・21号掘立柱建物がのっている。

北壁寄りの部分では4.78mの規模を持つが、形状や全体規模、方位、カマド等、他の施設も不明である。

北壁は34cmの高さが確認され、やや斜めに立ち上っている。確認された床面は、やや凸凹しているが、全面が固く締っていた。周溝が北東隅から北壁中央にかけて確認された。幅は8cm、深さは5cmで、断面はV字状を呈していた。

出土遺物は平安時代の土器片が48点出土した。土器片はすべて細片で、ほとんどが北東隅より出土している。器種としては杯・椀が多い。

出土した土器片は6点が床面直上より出土しているが、全体的な傾向としては、流れ込んだ可能性が強い。

5区5号住居址 (第22～24図、図版15・16)

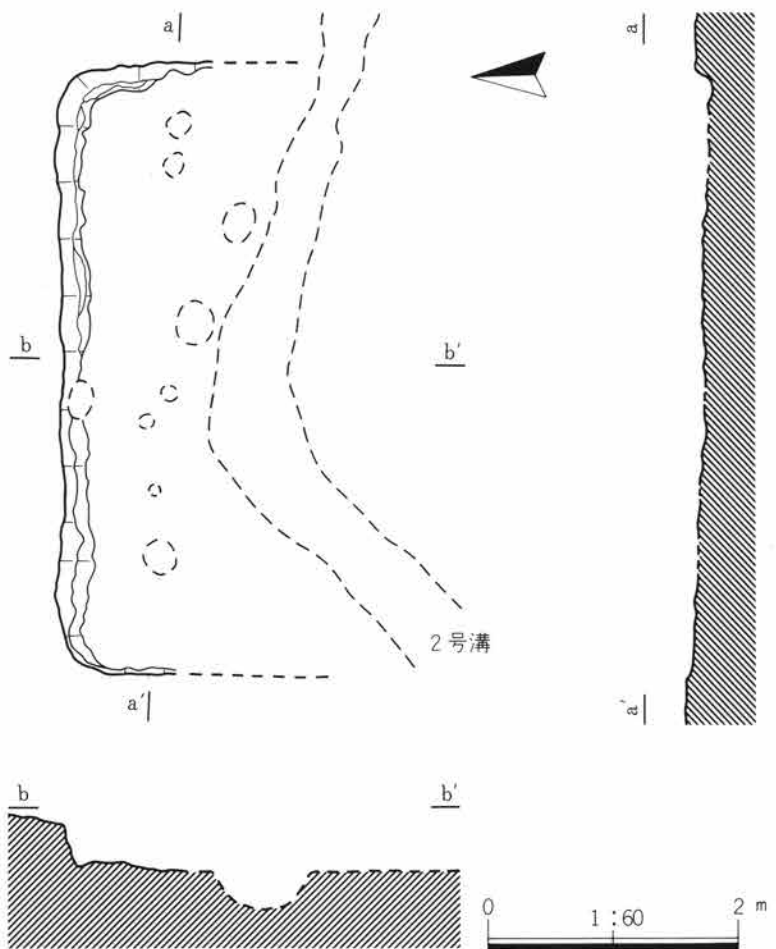
5区台地部の中央南東寄りに立地し、調査区の東端に位置する。

6号住居址に平行して近接し、41号土壇(粘土採掘坑)によって切られ、掘立柱建物の柱穴群がのっている。

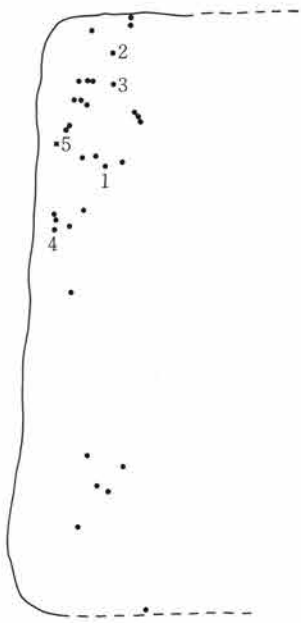
また、本住居址の中央西寄り下部には、本住居址よりも古い、長軸2.55mと1.82mの楕円形を呈する、2基の粘土採掘坑と思われる落ち込みがある。

本住居址はロームを掘り込み、平面形はほぼ方形を呈し、歪みもなく、しっかりとした住居址である。

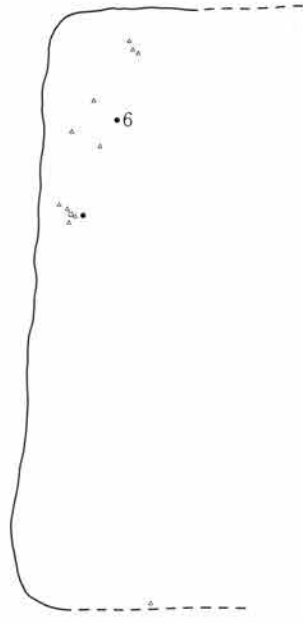
規模は長軸4.87m、短軸4.53mで、長軸方向はN-3°-Eを示す。



第19図 5区4号住居址



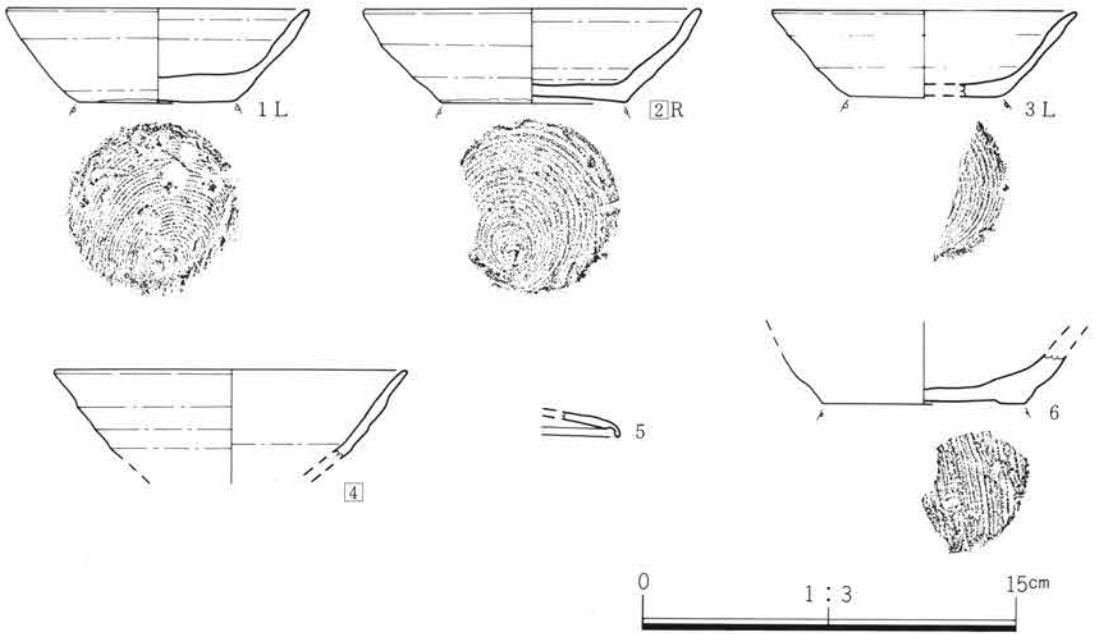
杯・蓋類散布図



壺・甕類散布図



第20図 5区4号住居址遺物散布図



第21図 5区4号住居址出土遺物

覆土はほぼ中位に、粘土ブロックの薄い層がレンズ状に堆積しており、住居中央では直接床面に付いていた。この層を境として、下部は自然に埋没した様相を示すが、上部は人為的に埋められた状態を示していた。これは41号土壇が本住居址のある、南東方向から掘り進んでおり、この排土と関連する可能性が高い。

壁は平均22cmの高さが確認され、ほぼ直に立ち上がる。床面は平坦で、全面が固く締っており、特に中央周辺からカマド前は、非常に固く締っていた。また、下部に落ち込みのある部分では張り床を行っていた。床面上の南壁中央やや東寄りには、乳白色粘土の塊があり、中央部からカマド前にかけて、焼土小ブロックが薄く堆積していた。

周溝が北壁と南東隅を除き確認された。カマド北側から北東隅にかけての周溝は、幅10cm～15cm、深さ平均5cmで、断面はU字状を呈していた。西壁と南壁はほぼ全周し、幅8cm～15cm、深さ3cm～7cmで、断面はV字状をなし、掘り込んだ状態ではなく、薄い材を連続して打ち込んだような状態であった。なお、本住居址に付く柱穴は確認されなかった。

カマドは東壁の中央やや南よりに位置し、コの字状に張り出していた。焚き口幅は76cm、奥行は60cmで、全面が非常に良く焼け、固く締っていた。カマドの掘形は、焚き口部下下部が掘鉢状に浅く掘り窪められていた。また、両袖部には抜き取り穴が確認され、袖部に何らかの材が裾えられていたものと思われる。このカマドの奥壁寄り燃焼部底面には、杯・椀・蓋・皿の6個体の完形土器が南北に一直列の状態、折り重なるように出土した。6個体の土器は火を受けていると思われ、出土状態からも、本住居址の存続期間に裾えられていたものと思われる。また、奥壁上端から砥石の破片(Na40)、が出土し、カマド前より出土した破片2点と接合した。この砥石は火を受けている。

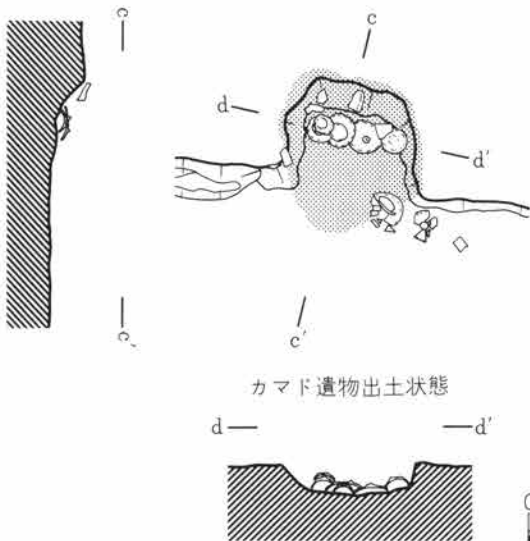
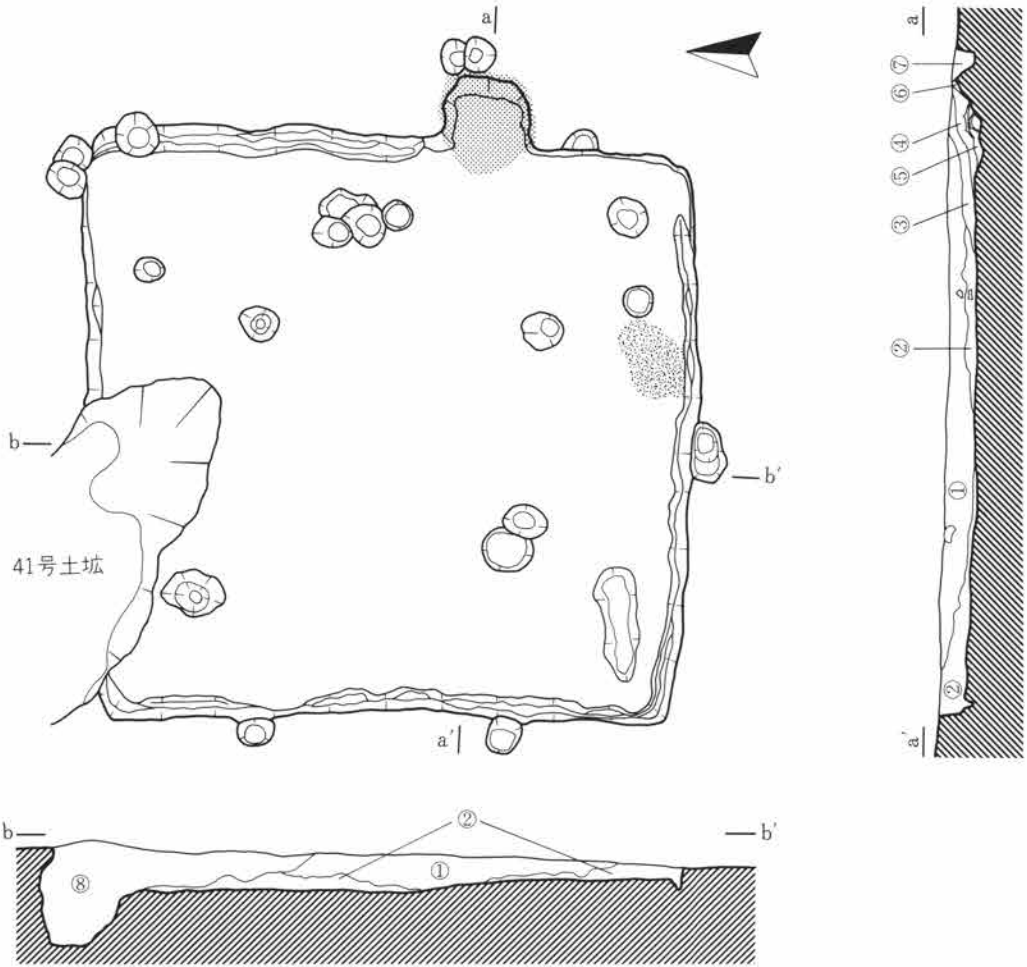
本住居址の南西隅には、不整形をした浅い落ち込みがあるが、貯蔵穴とは考えられず、性格は不明である。また、中央やや南西寄りには下部の落ち込みとは異なり、本住居址に付くと思われる床面下の落ち込みが確認された。平面形は楕円形を呈し、長軸1.12m、短軸0.80mで、深さは24cmである。断面は丸底状を呈し、覆土は人為的に埋められた様相を示していた。

出土土器の取り上げ数は583点で、覆土中のものは240点、床面直上および床面近くより出土したものが336点、カマド掘形出土のものが7点で、半数以上が床面より出土している。器種では杯・椀が多い。カマド内の土器も他の住居址と異なり、杯・蓋類が多く、出土状態とともに特異である。

杯・蓋類の散布状態は完形・大片も含め、南東隅～南壁中央・中央～北西隅・西壁中央に多い傾向にあり、床面出土のものが多い。接合関係も散布状態と同様の動きを示している。

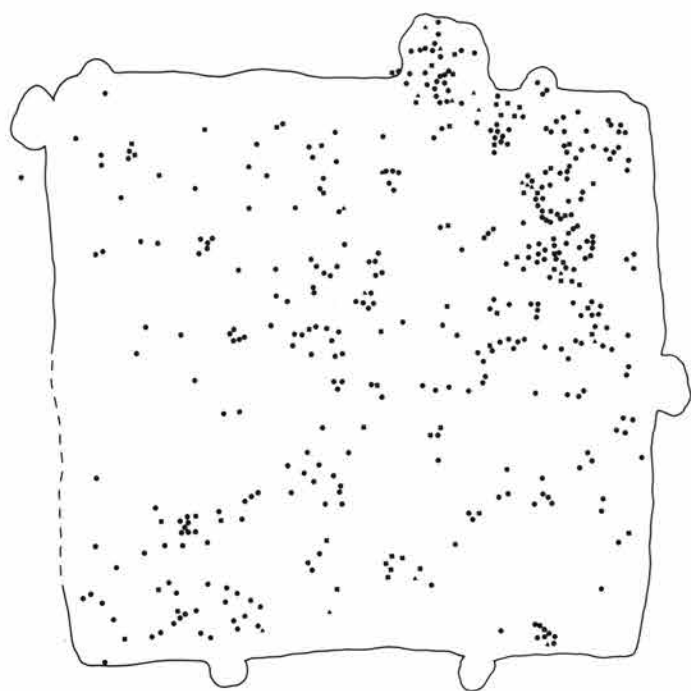
壺・甕類の散布は多くが南東隅より出土しており、床面出土のものも多く、散布に片寄りが見られる。接合関係も同様な動きを示している。本住居址の土器は、出土状態からカマド・南東隅・西壁中央・北西隅のものは一括性が高い。

本住居址からは他に前述の砥石と、鉄製鎌(第28・169図No40・14、図版77・146)が南東隅の床面より出土している。砥石は凝灰質砂岩製で、ほぼ方形を呈し、長辺14.5cm、短辺13.7cm、厚さ4.9cmの大きさで3片に割れている。表・裏面や両側面は内湾ぎみに非常に良く磨れており、上・下両端も磨れており、6面全面が使用されている。また、裏面には金属器による擦痕と思われる小溝があり、端部に見られる小溝は方向と間隔がほぼ一定している。

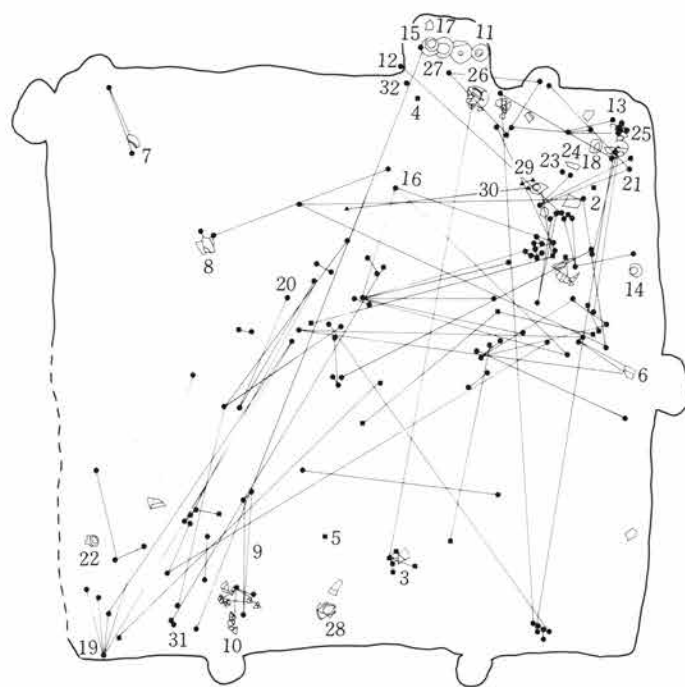


- ① 暗黄褐色土 黄白色粘土の大小のブロックを多量に含み、焼土・炭化物を少量含む。②との間には、黄白色粘土が薄い層をなして堆積していた。土層の状態は一挙に埋没した様相を示していた。
- ② 暗褐色土 ローム・焼土・炭化物を少量含む。
- ③ 暗褐色土 ②より焼土を多く含む。
- ④ 暗赤褐色土 焼土小ブロックを多く含み、炭化物・ローム小ブロックを少量含む。
- ⑤ 焼土 固く縮っている。
- ⑥ 暗赤褐色土 焼土ブロックを多量に含み、固く縮っている。
- ⑦ 柱穴の覆土。 ⑧ 41号土坑の覆土。

第22図 5区5号住居址およびカマド遺物出土状態



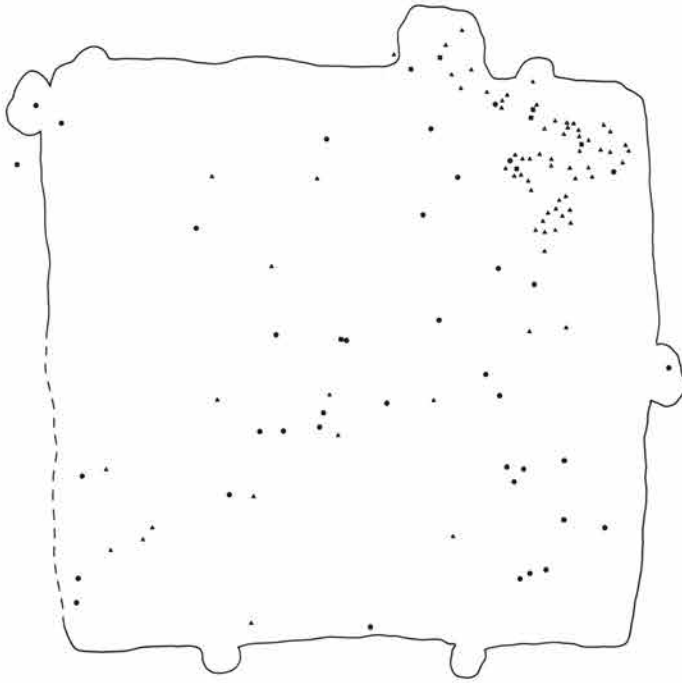
杯・蓋類散布図1



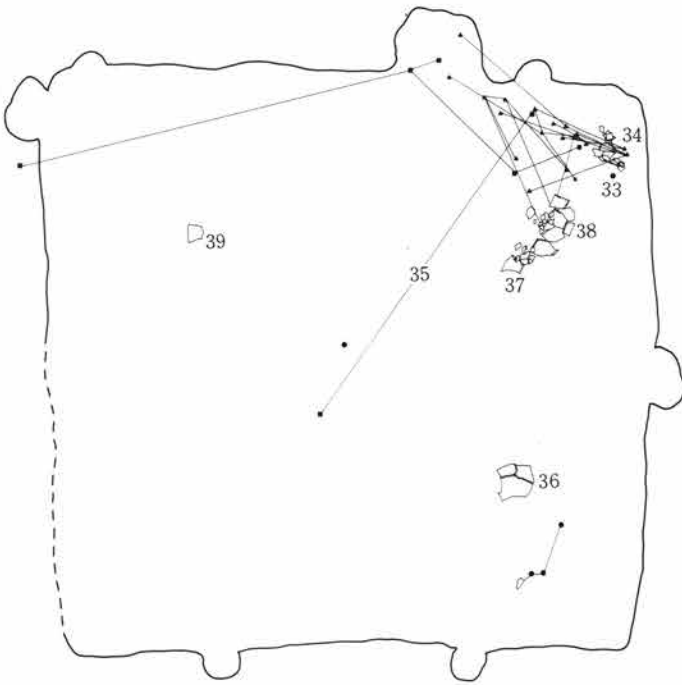
杯・蓋類接合関係図



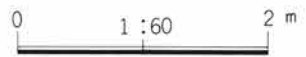
第23図 5区5号住居址遺物散布図1



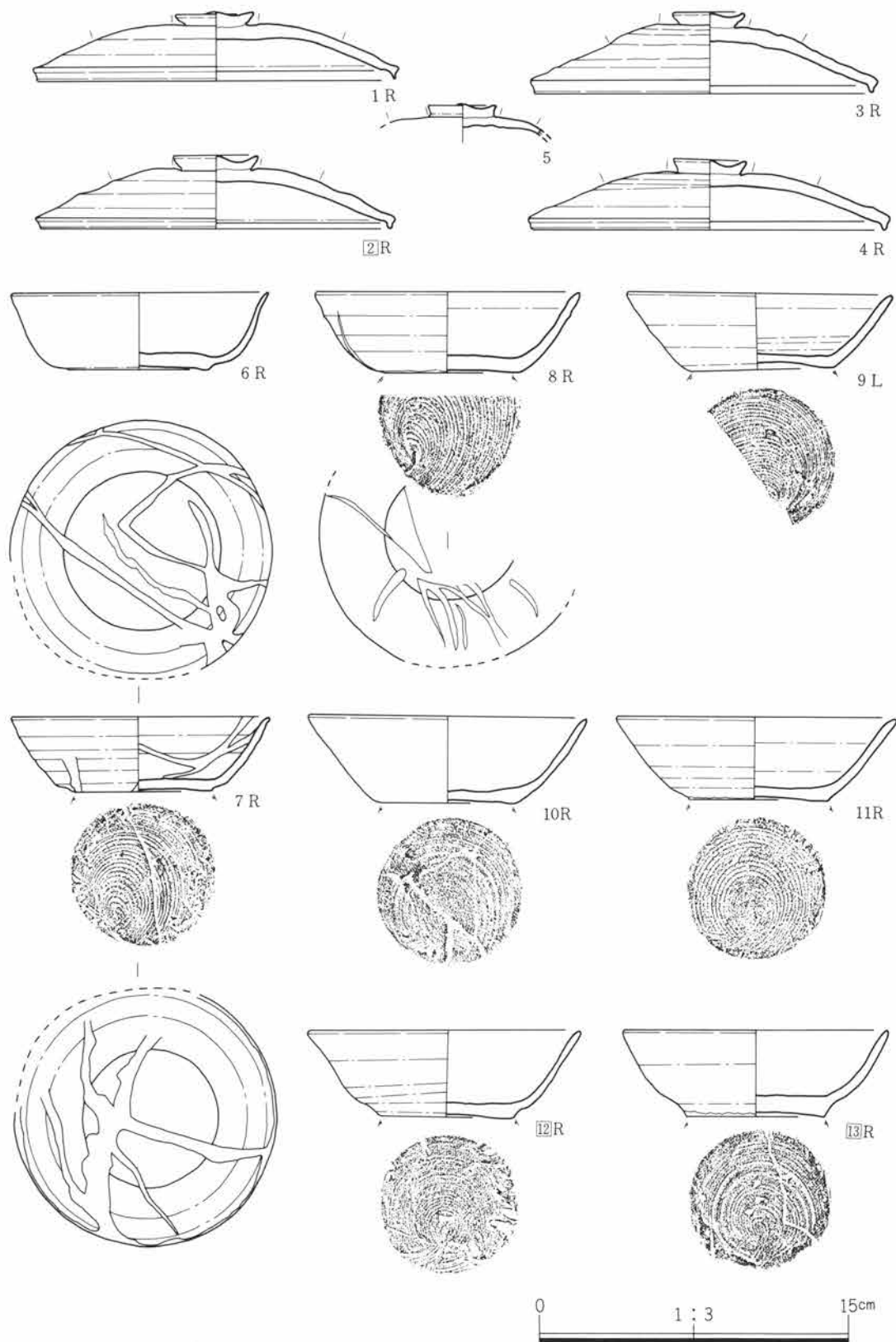
壺・甕類散布図 2



壺・甕類接合関係図

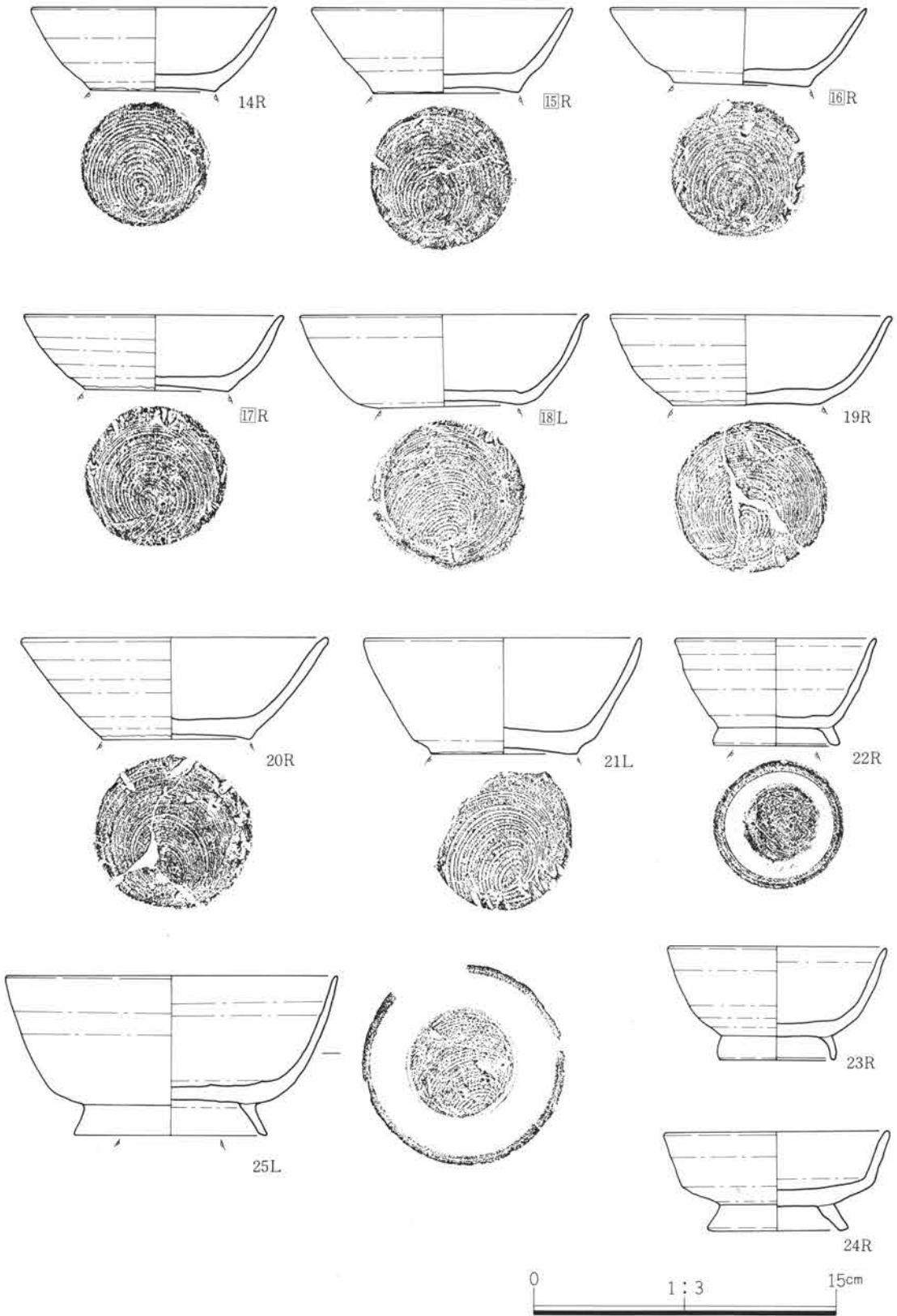


第24図 5区5号住居址遺物散布図 2

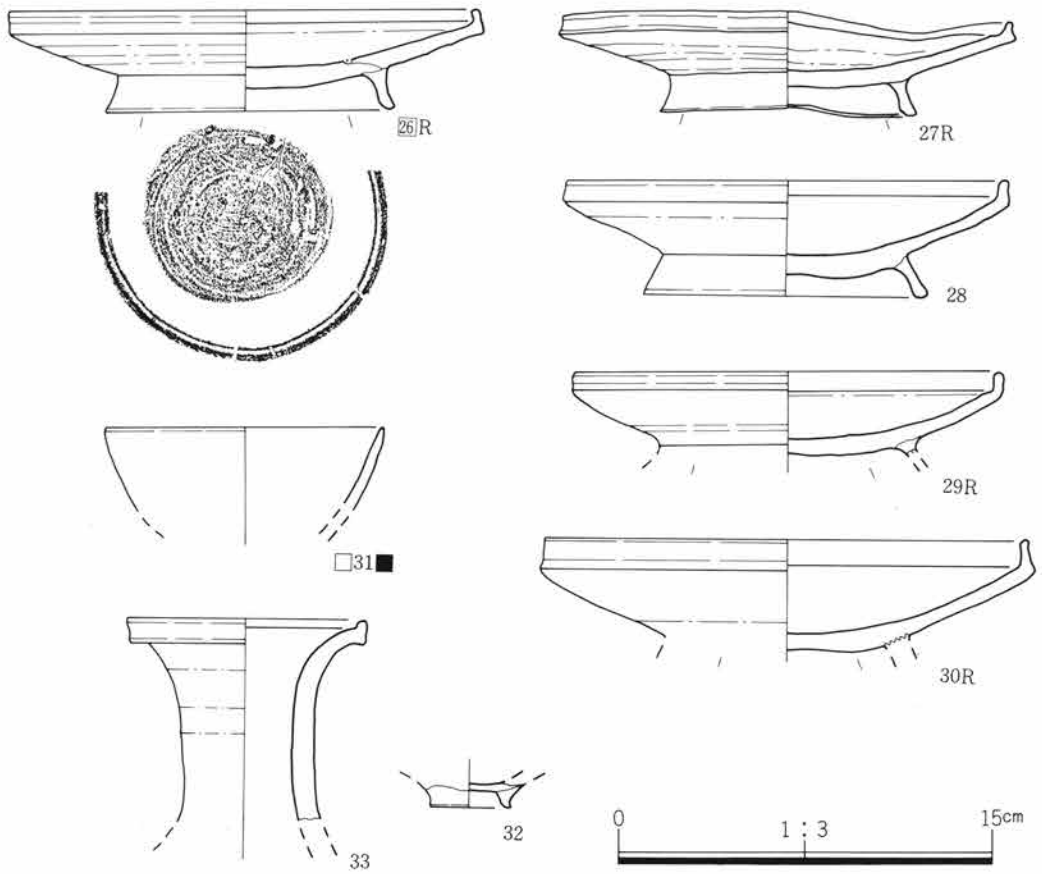


第25図 5区5号住居址出土遺物 (1)

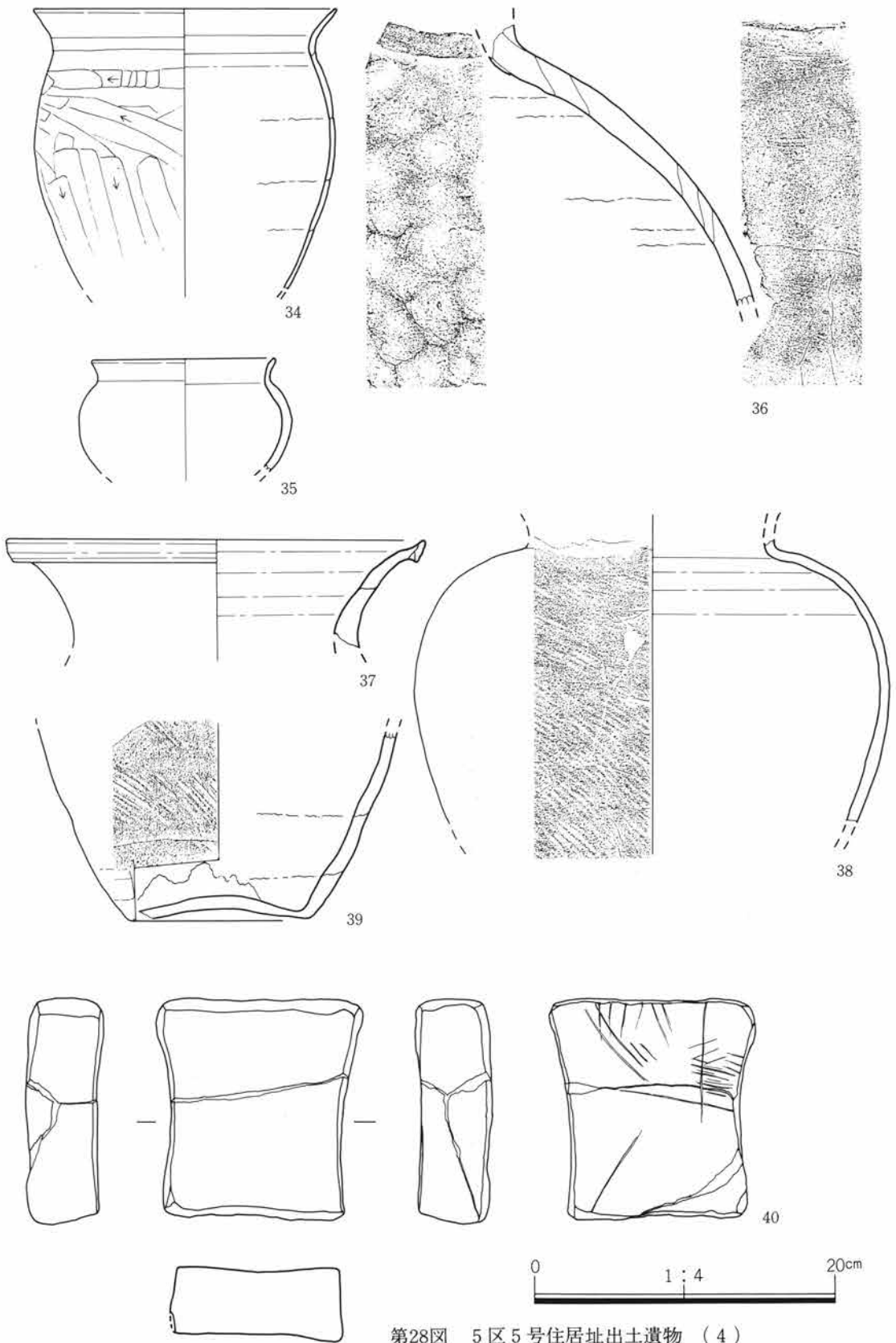




第26图 5区5号住居址出土遗物(2)



第27図 5区5号住居址出土遺物 (3)



第28图 5区5号住居址出土遺物 (4)

5区6号住居址 (第29・30図、図版17・18)

5区台地部の中央東寄りに立地し、調査区の東端に位置する。壁面は黒色土であるが、床面はローム上面に構築されている。41号土壇によって切られ、南壁の一部が壊されている。

平面形は方形に近く、各隅は丸みがやや大きく、各辺は直線的である。規模は長軸3.20m、短軸2.90mで、本遺跡の中では規模が一番小さい。長軸方向はN-3°-Wを示す。覆土は自然に埋没した様相を示している。

壁は平均10cmの高さが確認され、ほぼ直に立ち上がる。床面は平坦で、中央部は固く締っていたが、周壁部はあまり締っていない状態であった。柱穴は確認されなかった。

周溝が南西隅を除き確認された。南壁の状態は不明であるが、南西隅の状況から南壁にも存在した可能性が大きく、ほぼ全周していたものと思われる。東壁北半から北壁にかけては、幅12cm~19cm、深さ平均5cmで、断面はU字状を呈していた。西壁から南西隅にかけては、幅5cm~10cm、深さ平均5cmで、断面はV字状をなしており、断面形に相異がみられる。

カマドは東壁の中央やや南に位置している。このカマドは外部へ張り出しておらず、袖が内部へ張り出している。両袖はロームと粘土の混じり合った土で固められ、35cm~40cm内部へ張り出している。焚き口幅は75cm、奥行46cmで、焼けは弱い。カマドの掘形は、両袖部は掘り込まれておらず、燃烧部底面が播鉢状に20cmほど掘り窪められていた。

貯蔵穴が南東隅で確認され、周壁とカマドの南袖を利用して構築されていた。平面形は隅丸方形を呈し、82cm×80cmの規模で、床面を10cmほど掘り込んでいた。

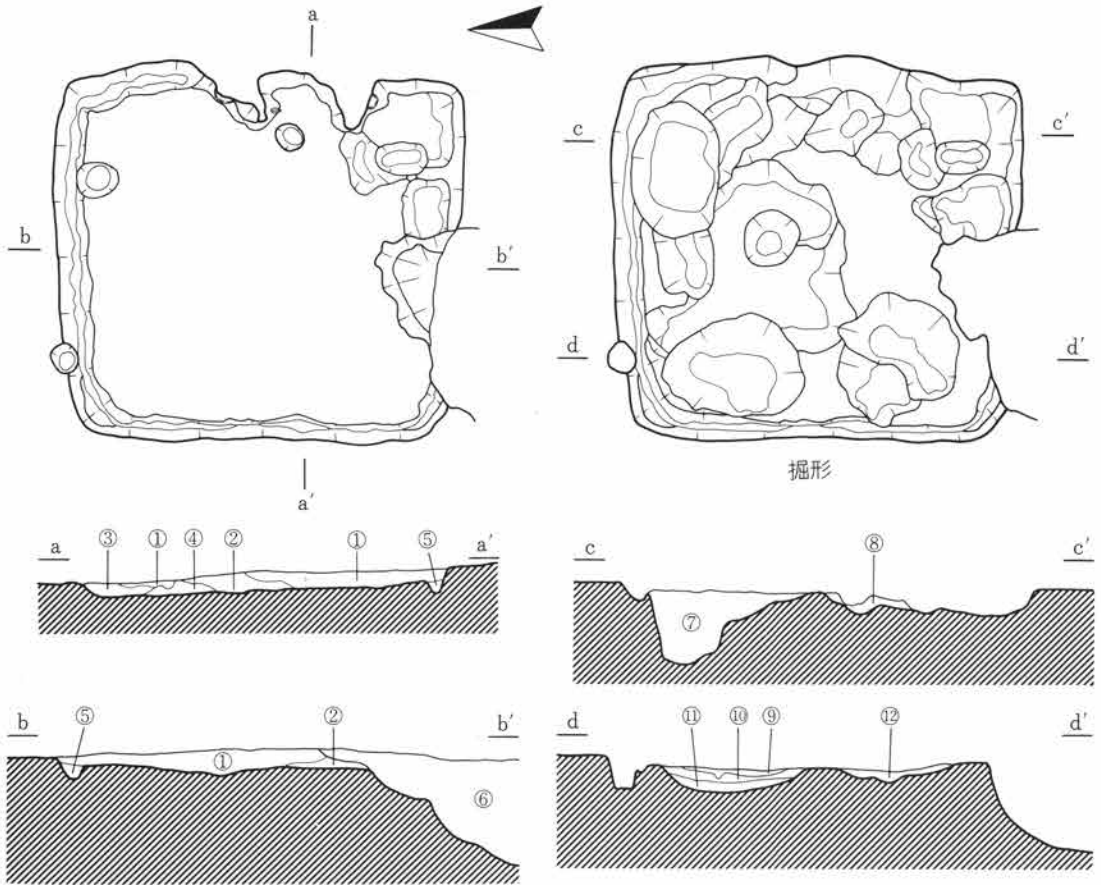
本住居址はカマド前と中央部を除き、周壁に沿って12cm~30cmの深さで、起伏の激しい掘形が確認された。また、この掘形を切る状態で3基の床面下の落ち込みが確認された。

床面下の落ち込みはそれぞれ、北東隅、北西隅、南西隅に位置し、楕円形を基調としている。北東隅の落ち込みは1.08m×0.70m、深さ40cmの規模で、土器片3点が出土した。北西隅の落ち込みは1.15m×0.80m、深さ21cmの規模で、土器片34点が出土した。南西隅の落ち込みは1.02m×0.93m、深さ18cmの規模で、やや不整形を呈し、土器は出土しなかった。これらの落ち込みは軸線が各辺の方向に合致し、覆土はいずれも一挙に埋没した様相を示している。

土器の取り上げ点数は179点で、一括取り上げの土器を含めると200点強の土器が出土した。床面直上より出土したものは35点、掘方・床面下落ち込み出土のものが45点で、他は覆土中の出土である。杯・蓋類と壺・甕類では杯・蓋類の量がやや多く、完形の蓋の出土が目立つ。

杯・蓋類はカマドと貯蔵穴およびその周辺からの出土が多く、完形の出土は貯蔵穴およびその周辺が目立つ。これらの土器は一括性が高いと思われる。また、カマド北袖近くの床面より出土した杯は、北西隅の床面下の落ち込み内の破片と接合関係にある。

壺・甕類は貯蔵穴と中央周辺に多く散布し、大片は床面に付いているが、小片は覆土中のものが多い。貯蔵穴内の須恵器甕も、前述の杯と同様に、北西隅の床面下の落ち込み内の破片と接合関係にある。

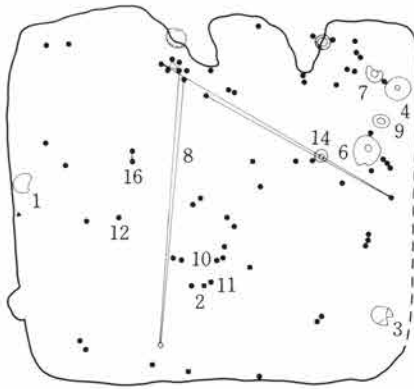


- ① 黒色土 小石を含み、ローム小ブロックを極少量含む。  
 ② 黒褐色土 小石を含み、ローム小ブロックをやや多く含む、焼土を極少量含む。  
 ③ 暗赤褐色土 焼土ブロックを多量に含み、ローム小ブロックを極少量含む。  
 ④ 暗黄褐色土 ロームの大小のブロックが堆積。床面との間に炭化物・焼土を含んだ、黒色土の薄い間層がある。  
 ⑤ 黒褐色土 周溝内に堆積。ロームブロックを多く含む。  
 ⑥ 41号土坑の覆土。  
 ⑦ 黄褐色土 ロームと黒色土のブロックが混じり合っている。上面は固く締っている。

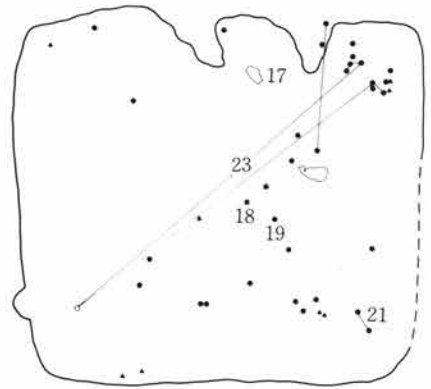
- ⑧ 暗黄褐色土 焼土を少量含み、ローム小ブロックを多く含む。  
 ⑨ 暗褐色土 ローム小ブロックを少量含み、固い。  
 ⑩ 暗黄褐色土 ローム・乳白色粘土・黒色土が混じり合っており、やや固く締っている。  
 ⑪ 暗赤褐色土 ローム・焼土・黒色土が混じり合っており、焼土の量が多い。  
 ⑫ 黒褐色土 ローム・焼土小ブロックを含み、やや固く締っている。

0 1 : 60 2 m

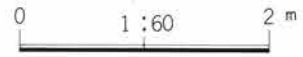
第29図 5区6号住居址および掘形



杯・蓋類散布および接合関係図



壺・甕類散布および接合関係図



第30図 5区6号住居址遺物散布図

5区7・10号住居址 (第33～35図、図版19)

7・10号住居址は5区台地部の中央の南傾斜面上段に立地する。7号住居址と10号住居址は重複関係にあり、土層観察の結果では7号住居址が古く、10号住居址の方が新しいと判断された。また、この2軒は、南半を37～39号土壇の粘土採掘壇によって切られており、このため、平面形や全体規模、付属施設等不明な点が多い。

7号住居址は大半を10号住居址によって切られているため、平面形は不明である。規模は現状で南北軸3.35m+ $\alpha$ 、東西軸4.21mである。南北軸の方位はN-4°-Eを示す。覆土は自然に埋没したものと思われるが、荒れた状態である。

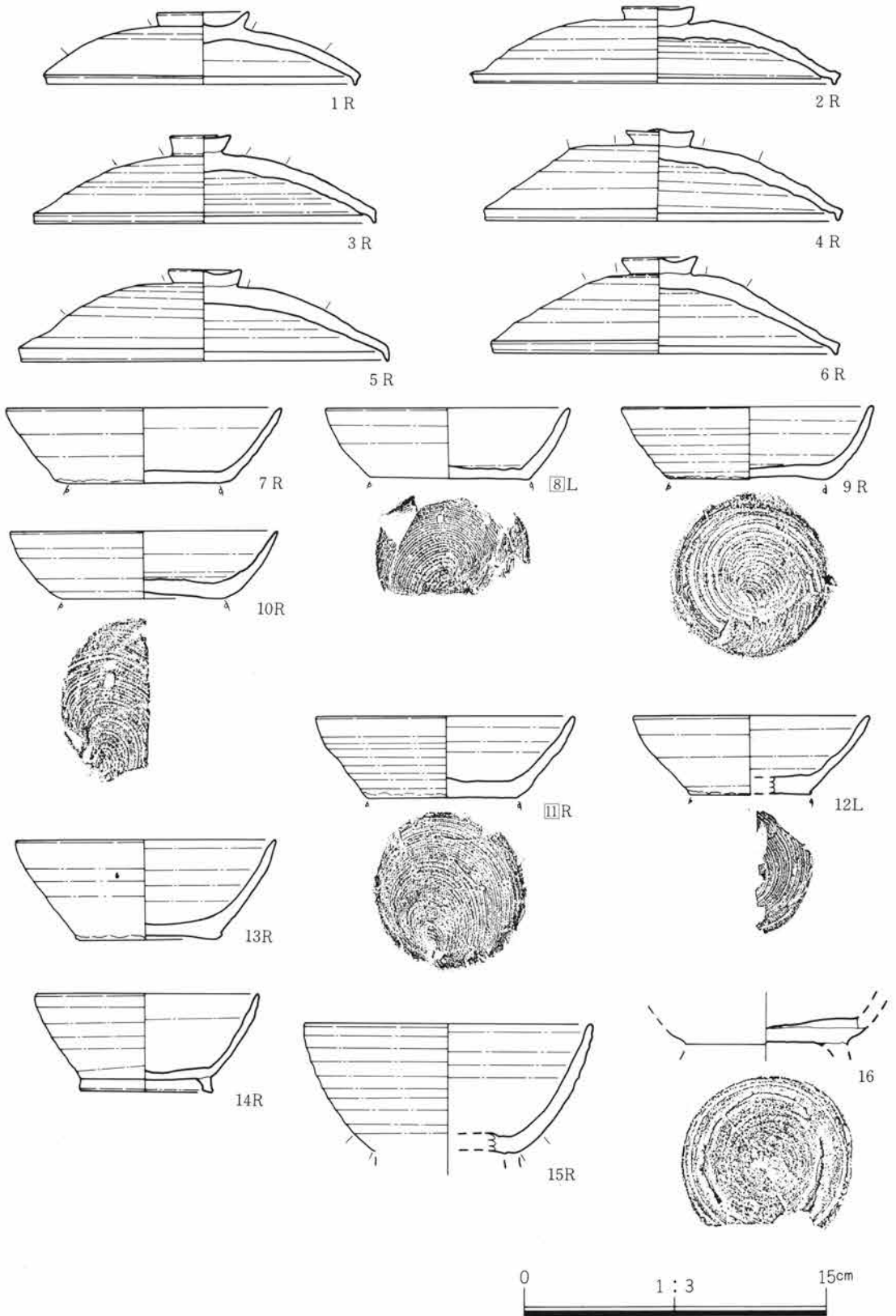
壁は18cm～25cmの高さが確認され、ほぼ直に立ちあがりしっかりしている。床面はほぼ平坦で、固く締っている。

周溝が北壁西寄りから西壁中央寄りにかけて確認された。幅は5cm～10cm、深さは3cm～6cmで、断面はややV字状を呈していた。柱穴やカマド・貯蔵穴は確認できなかった。

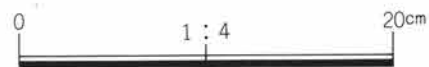
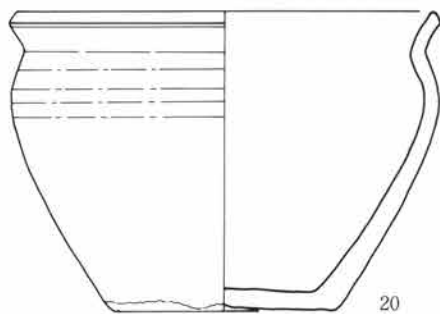
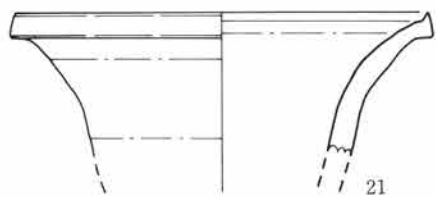
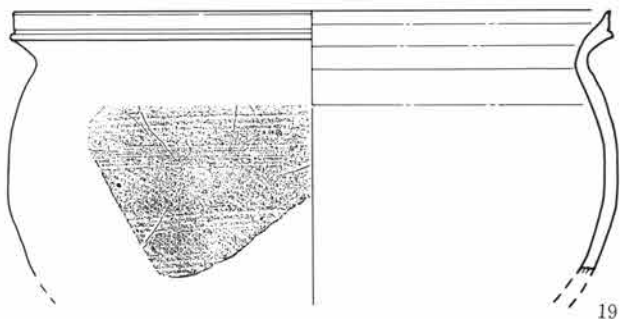
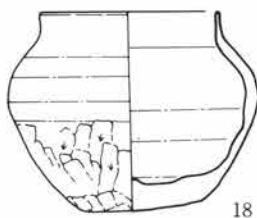
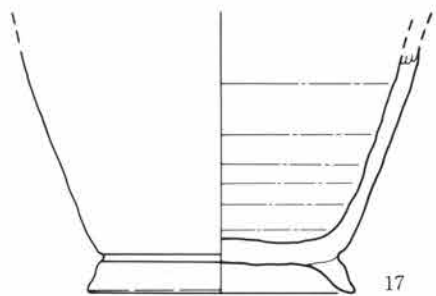
10号住居址の北壁にかかる、不整楕円形をした大小の2基の落ち込みは、本住居址の床面下の落ち込みであり、土層観察からも10号住居址に切られている。また、本住居址の北壁にかかる落ち込みも、同様の性格と思われるが、断定はできなかった。

10号住居址も南半を37～39号土壇によって切られているため、平面形は不明である。規模は現状で、南北軸2.90m+ $\alpha$ 、東西軸3.35mで、南北軸はN-15°-Eを示す。覆土は7号住居址と同様で、荒れた状態である。

壁は28cm～34cmの高さが確認され、ほぼ直に立ち上がりしっかりしている。東壁がやや歪んでいる。床面はやや凸凹しているが、全面が非常に固く締っていた。また、床面上には点々と粘土が貼り付いていた。周溝は東壁北半から北壁東端にかけてと、北西隅から西壁中央にかけて確認された。東壁部



第31图 5区6号住居址出土遗物 (1)



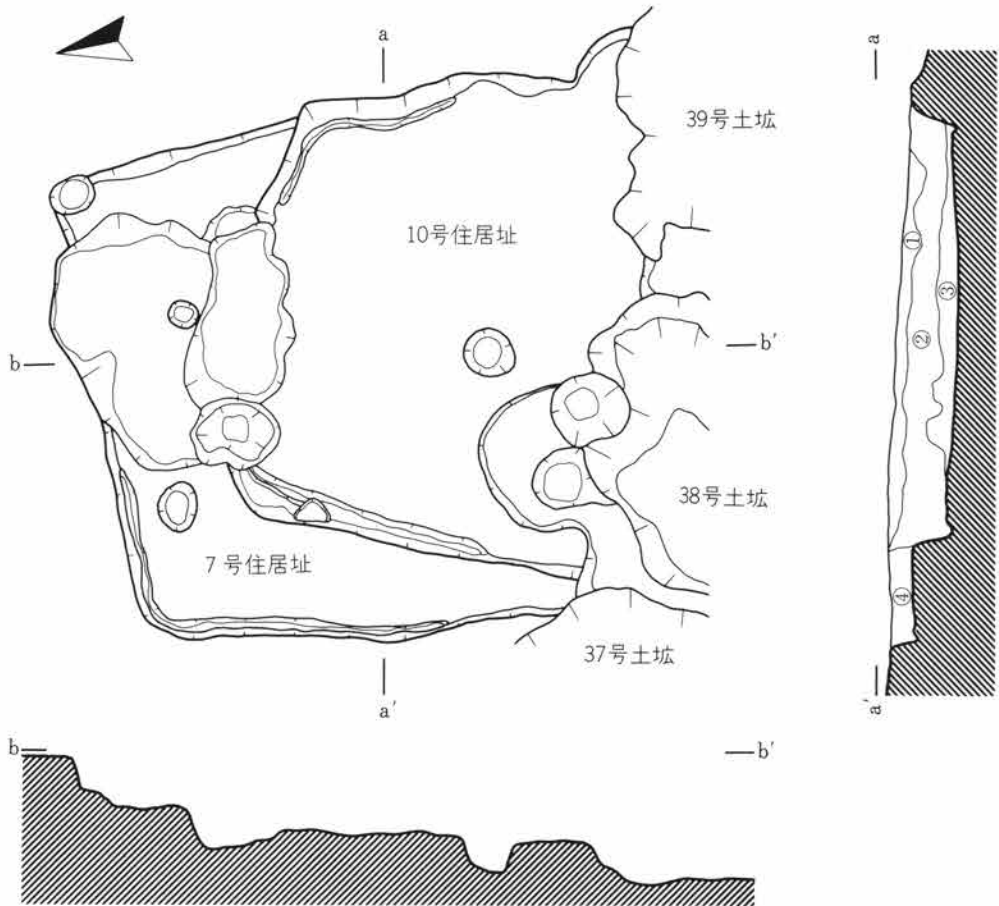
第32図 5区6号住居址出土遺物 (2)



分の周溝は幅 5 cm～8 cm、深さ 4 cm で、断面は V 字状をなしている。西壁部分の周溝は幅 9 cm～16 cm、深さ 5 cm で、断面は U 字状を呈していた。

カマドと思われる焼土を伴った張り出しが、東壁東端で 39 号土壇に切られた状態で確認されたが、明確な状態ではなかった。その他、貯蔵穴、柱穴は確認できなかった。

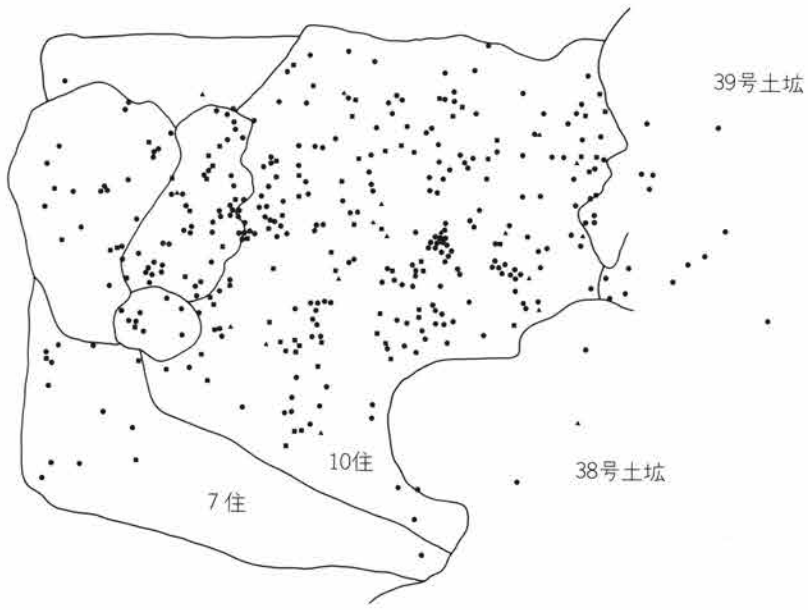
7 号住居址の土器取り上げ点数は 94 点で、内 46 点が掘形出土のものである。10 号住居址の土器取り上げ点数 627 点で、内 139 点がカマド前～中央にかけての床面から出土した。7 号住居址の土器は覆土中のものが多く、10 号住居址の土器はカマド前～中央にかけての土器が一括性が高い。7・10 号住居址の接合関係は乱れており、両住居址間で接合する例や、11 号住居址の土器と接合する例等があり、特に 38・39 号土壇の土器と接合する例が多くある。これは、重複関係が激しいことや、覆土の所見を考えると、住居址が完全に埋没しない段階で、粘土採掘が行なわれた可能性もある。



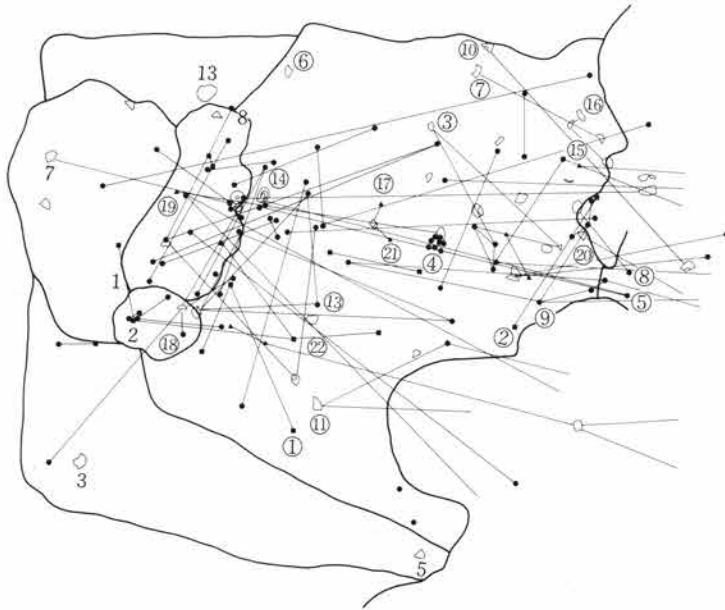
- |        |                               |        |                         |
|--------|-------------------------------|--------|-------------------------|
| ① 暗褐色土 | ローム・粘土・焼土小ブロックを少量含む。          | ③ 暗褐色土 | ローム・粘土・焼土の小ブロックをやや多く含む。 |
| ② 暗褐色土 | ローム・焼土を極少量含む、粘土の大小のブロックを多く含む。 | ④ 黒褐色土 | ローム・粘土の小ブロックを極少量含む。     |

0 1 : 60 2 m

第33図 5区7・10号住居址



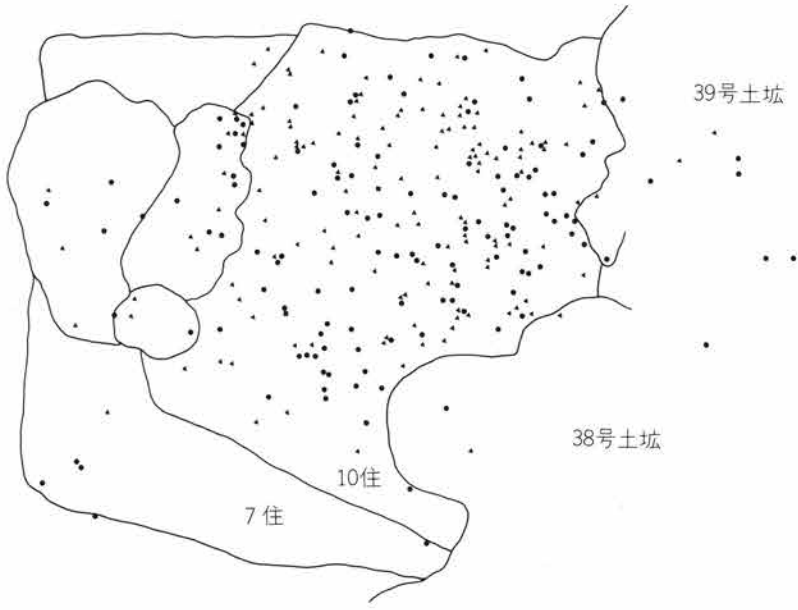
杯・蓋類散布図



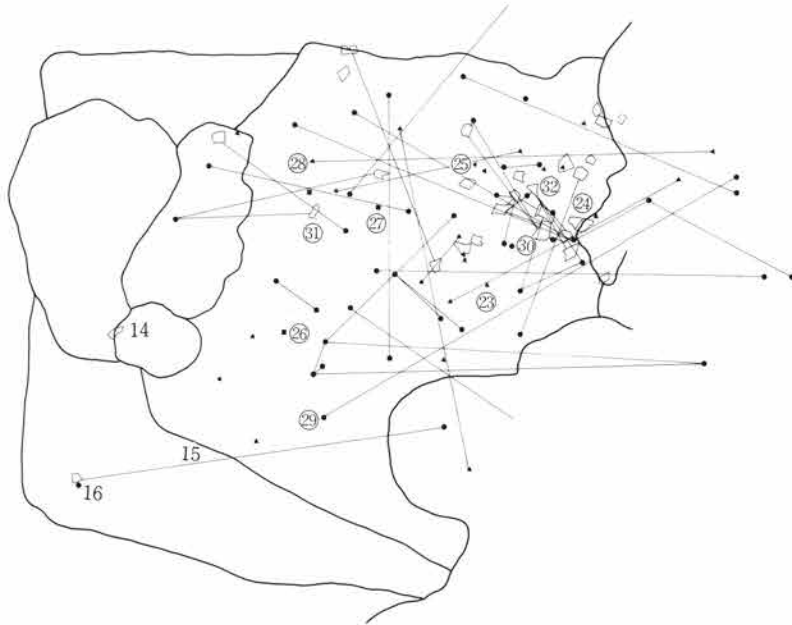
杯・蓋類接合関係図 (○は10号住居址の遺物)



第34図 5区7・10号住居址遺物散布図1



壺・甕類散布図

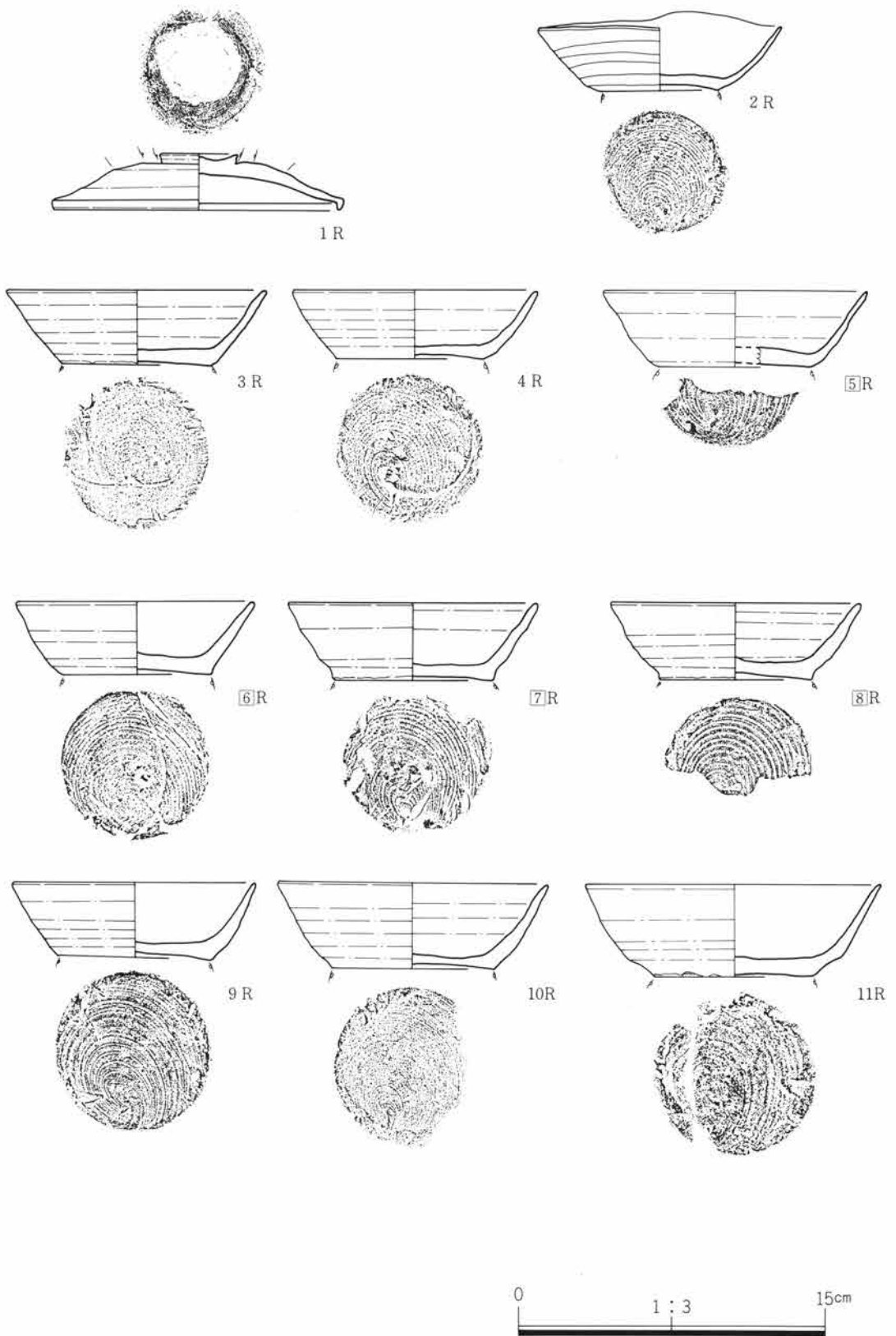


壺・甕類接合関係図 (○は10号住居址の遺物)

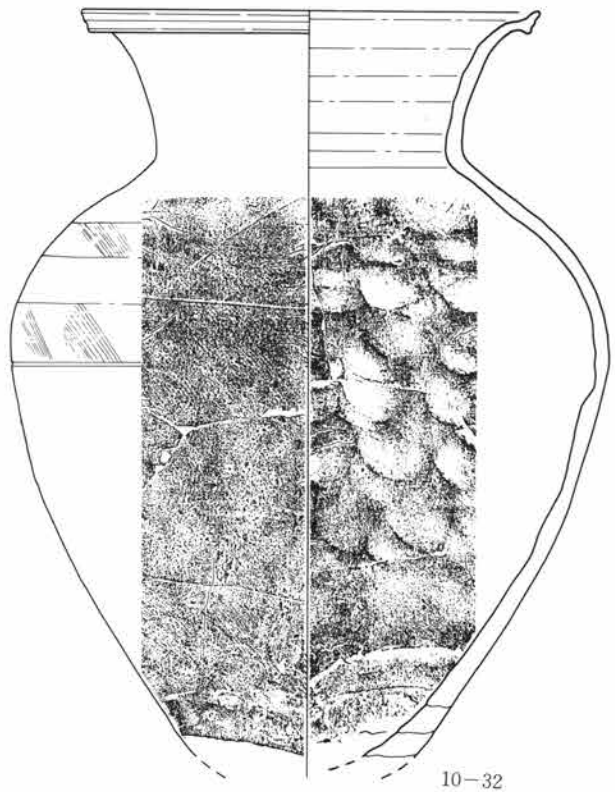
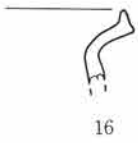
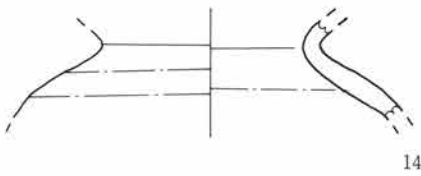
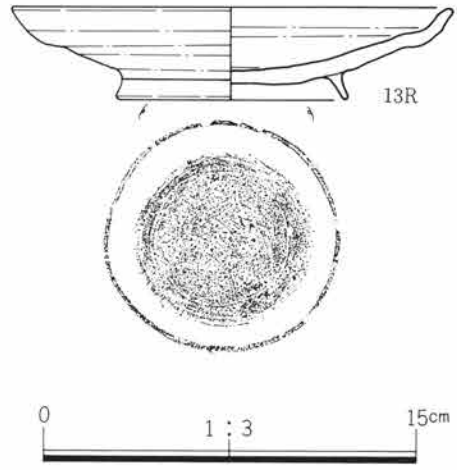
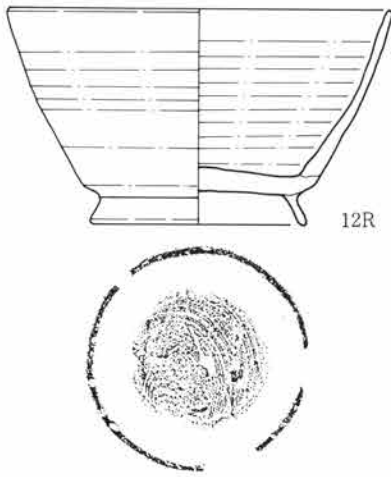
○は10号住居址の遺物



第35図 5区7・10号住居址遺物散布図2

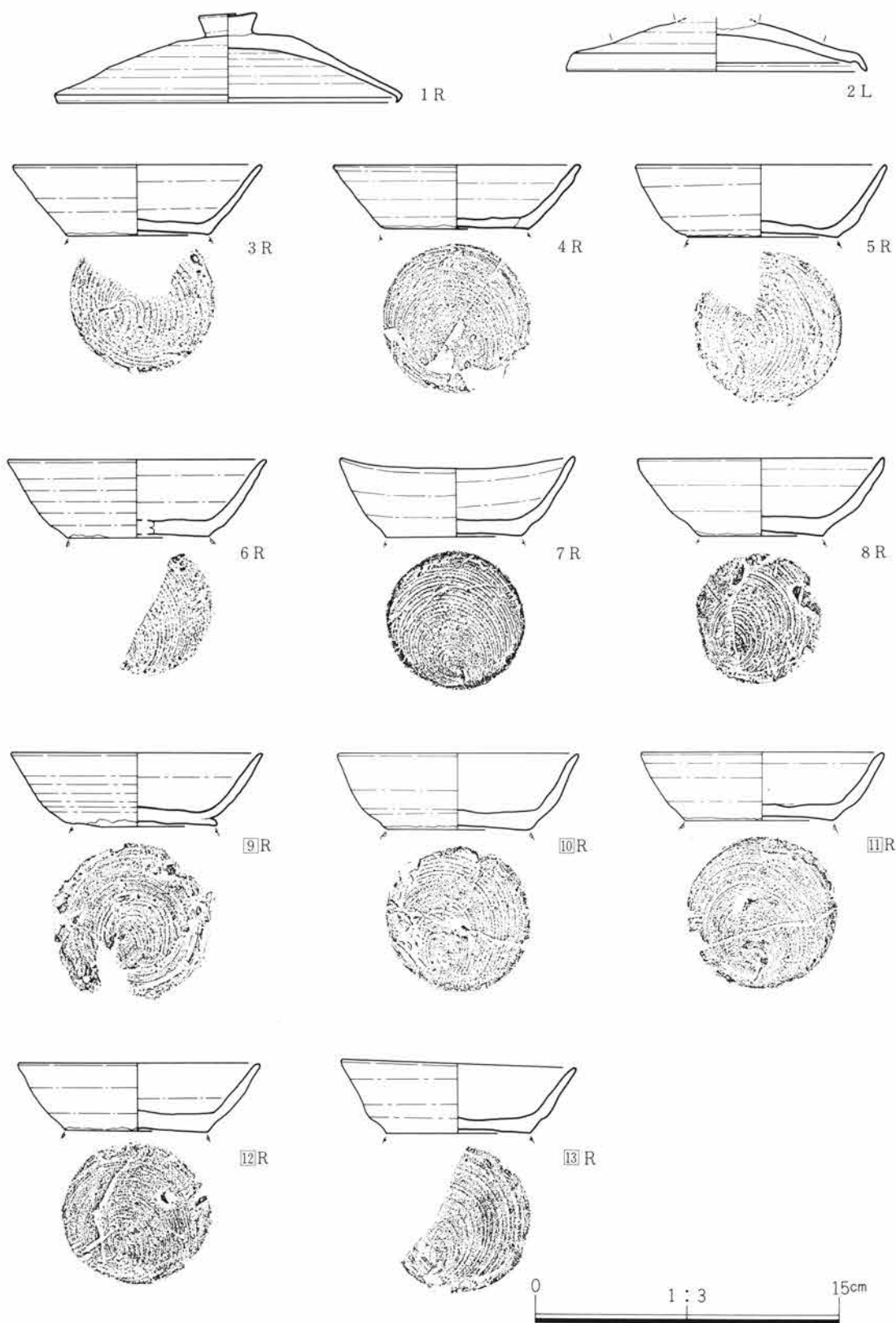


第36図 5区7号住居址出土遺物 (1)

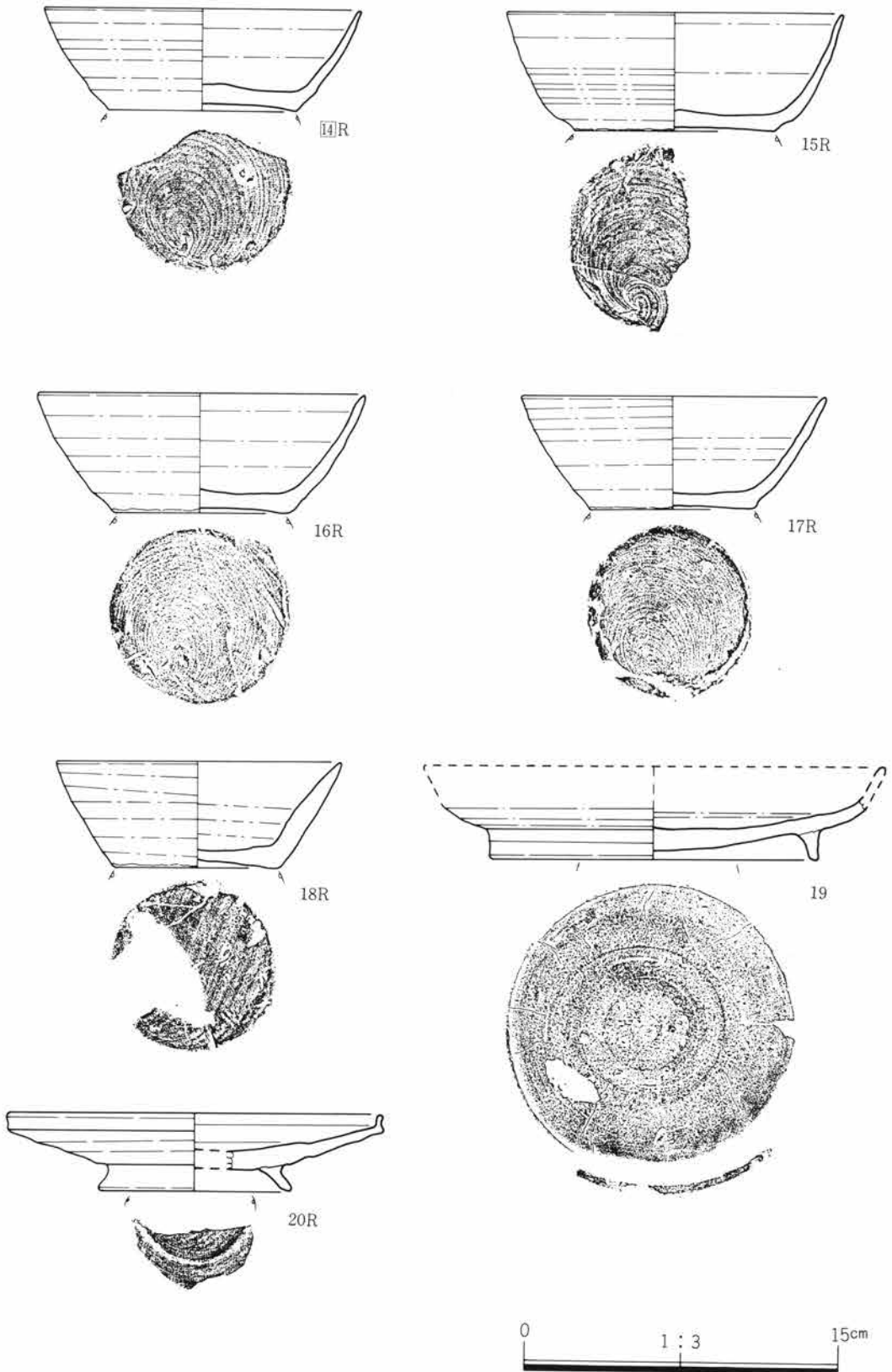


第37图 5区7号住居址出土遺物 (2)

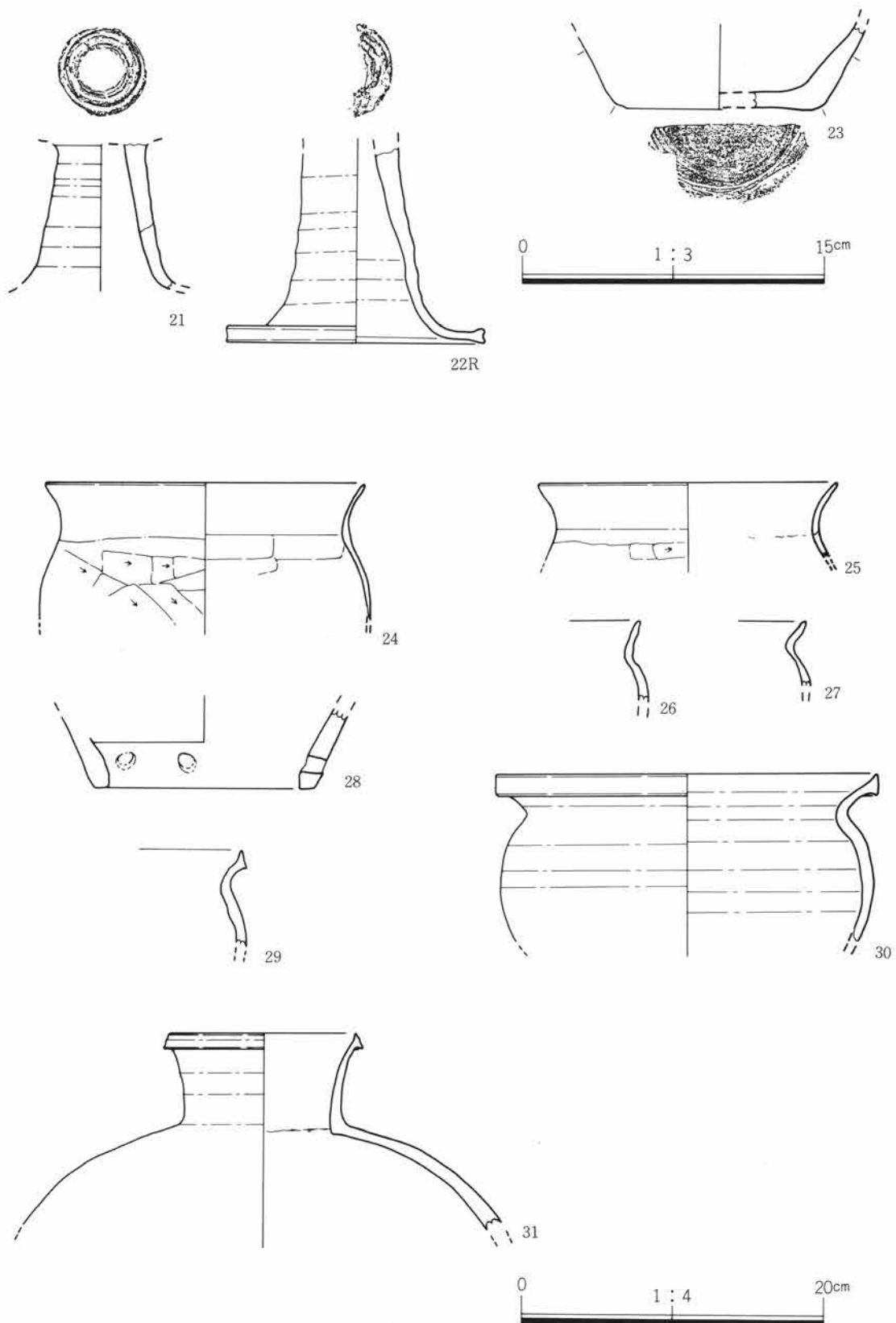
5区10号住居址出土遺物 (4)



第38図 5区10号住居址出土遺物 (1)



第39图 5区10号住居址出土遺物 (2)



第40図 5区10号住居址出土遺物 (3)



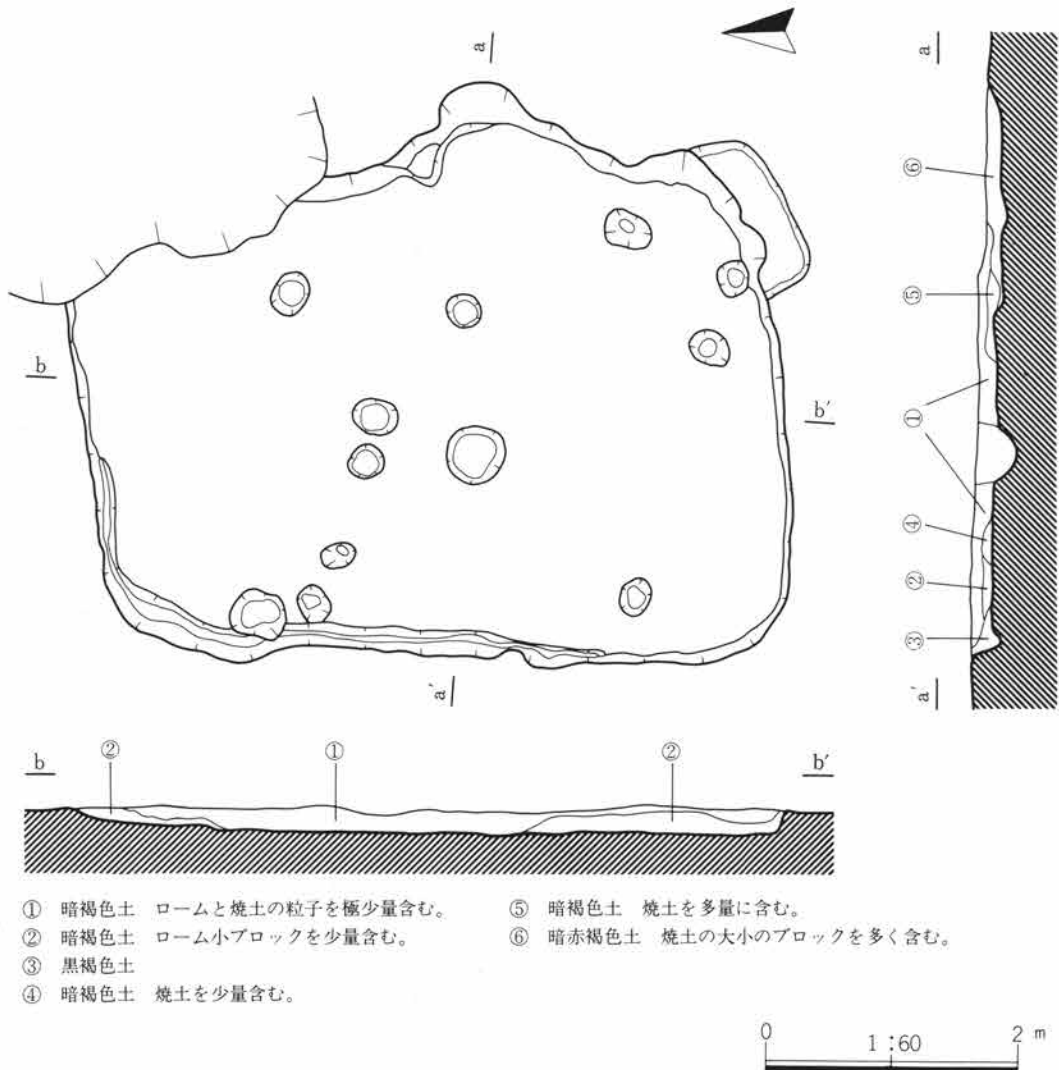
## 5区9号住居址 (第41~43図、図版20・21)

5区台地部中央に立地し、調査区の中央やや東寄りに位置する。本住居址は粘土採掘坑と思われる、落ち込みの上部に構築されており、北東隅の部分も同じく、粘土採掘坑と思われる落ち込みによって切られている。また、掘立柱建物の柱穴によっても切られている。

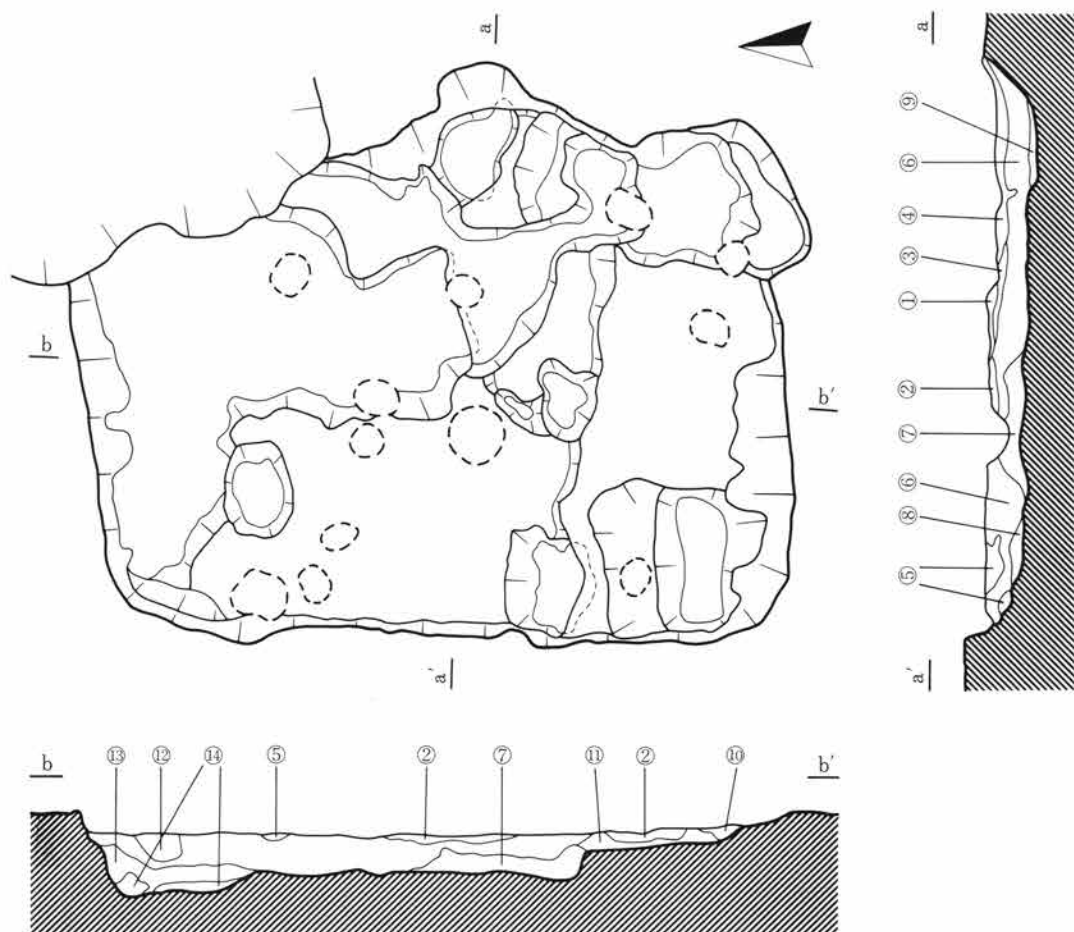
平面形は隅丸長方形を呈し、各隅は丸みが大きく、各辺はやや歪みがある。規模は長軸5.62m、短軸3.81mで、長軸方向はN-2°-Eを示す。覆土は自然に埋没した様相を示すが、やや荒れている。

壁はほぼ直に掘り込まれ、平均16cmの高さが確認された。床面は南壁中央寄りの部分を除いて、全面がロームと粘土により張り床されている。床面は起伏がやや激しいが、全面が固く締っていた。

周溝が北壁中央から北西隅・西壁中央南寄りにかけて確認された。幅は6cm~20cmと差が大きく、深さは平均6cmである。幅の狭い部分はV字状をなし、広い部分はU字状をなしている。



第41図 5区9号住居址



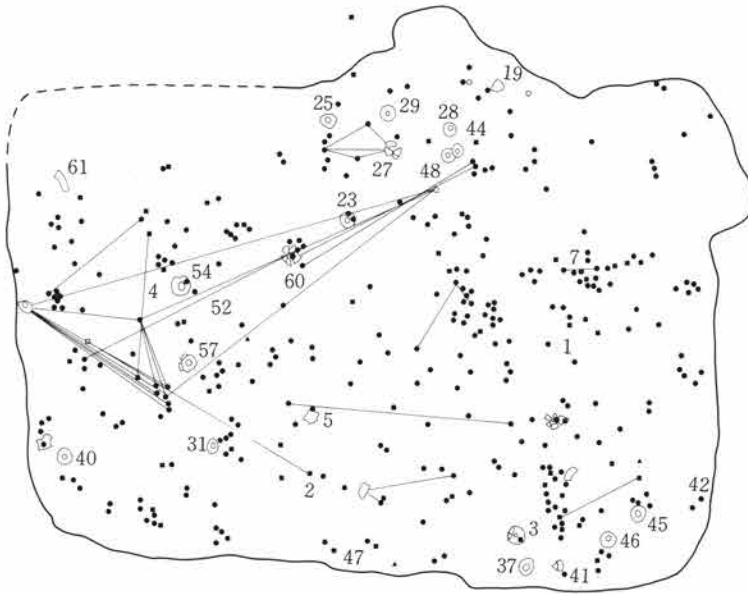
- |  |   |
|--|---|
| <p>① 黒色土 固く締っている。</p> <p>② 灰褐色土 粘土ブロックを含み、固く締っている。</p> <p>③ 褐色土 焼土を少量含む。</p> <p>④ 褐色土 やや固く締っている。</p> <p>⑤ 乳白色粘土ブロック</p> <p>⑥ 暗褐色土 ローム小ブロックを少量含む。</p> <p>⑦ 黒色土 ローム小ブロックを含む。</p> <p>⑧ 暗褐色土 ローム小ブロックを多量に含む。</p> <p>⑨ 黒色土 焼土を少量含む。</p> <p>⑩ 灰褐色土 粘土小ブロックを少量含む。固く締っている。</p> | <p>⑪ 暗黄褐色土 ロームの大小のブロックが混じり合っている。</p> <p>⑫ 粘土とロームがブロックで混じり合っている。</p> <p>⑬ 灰黄褐色土 粘土とロームが混じり合っている。</p> <p>⑭ 黒色土 ローム小ブロックを少量含む。</p> |
|--|---|



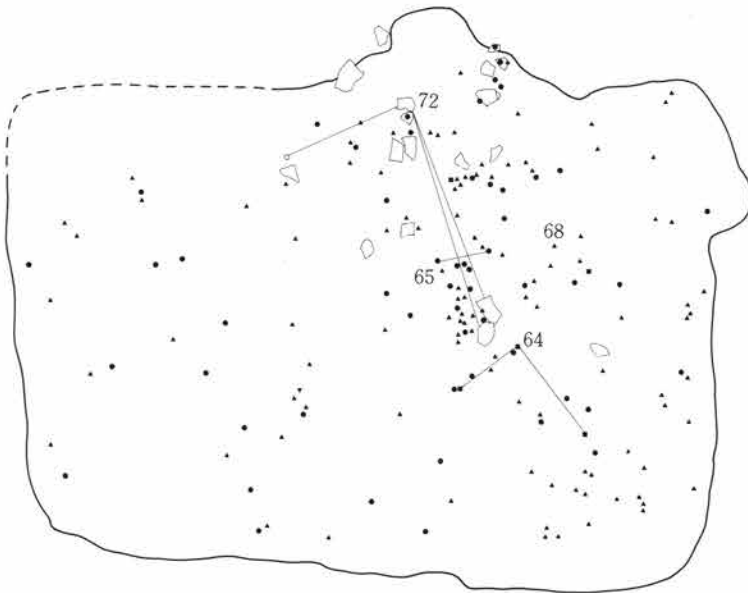
第42図 5区9号住居址掘形

カマドは東壁中央やや南寄りに位置している。壁より78cm張り出しているが、形状は乱れている。カマドは焼土が堆積していたが、底面や周壁はあまり焼けていなかった。

また、南東隅にコの字状に床面より、一段高く張り出した部分が確認されたが、本住居址の施設かどうかは断定できなかった。なお、本住居址に付く柱穴は、確認されなかった。



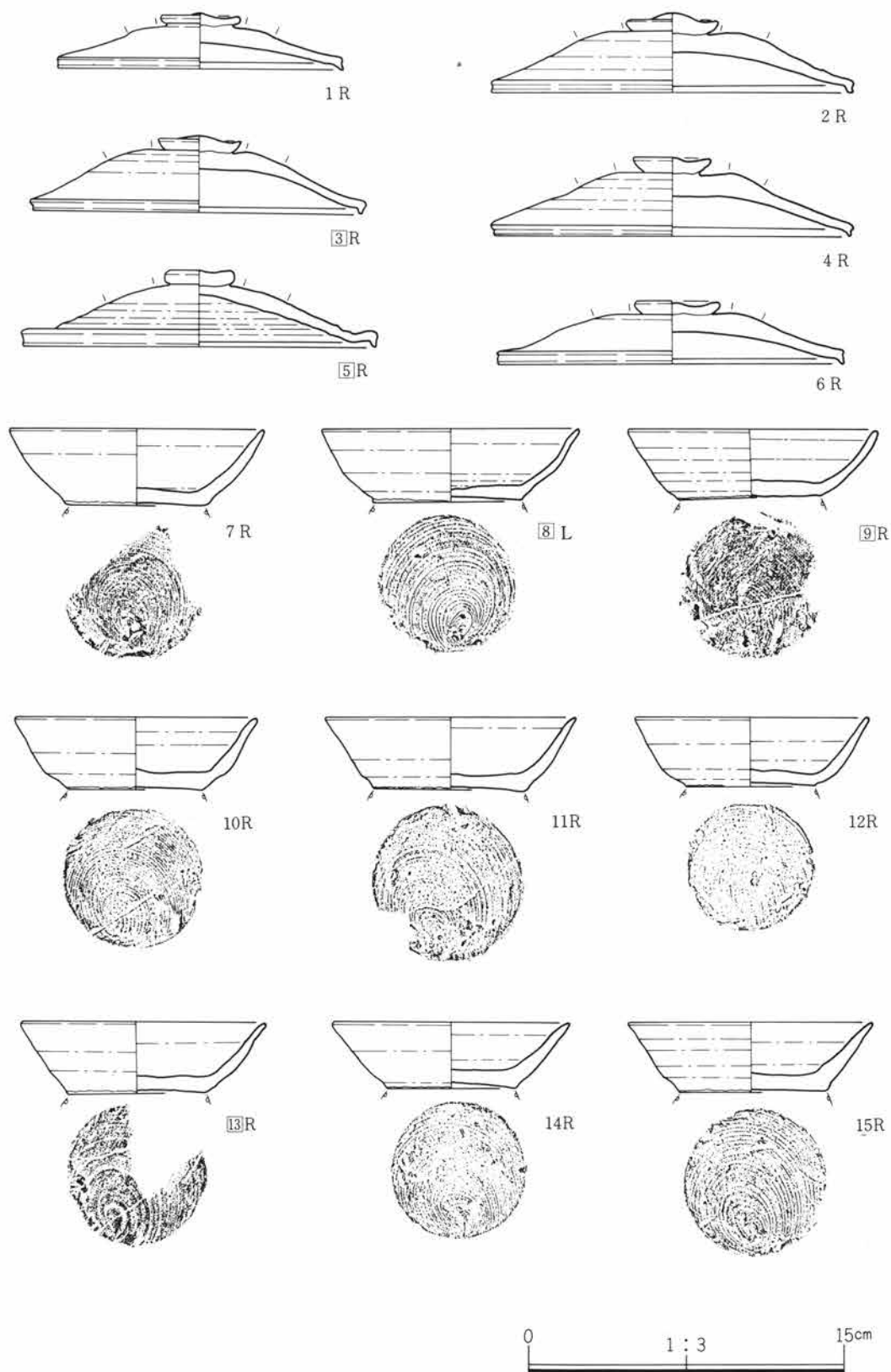
杯・蓋類散布および接合関係図



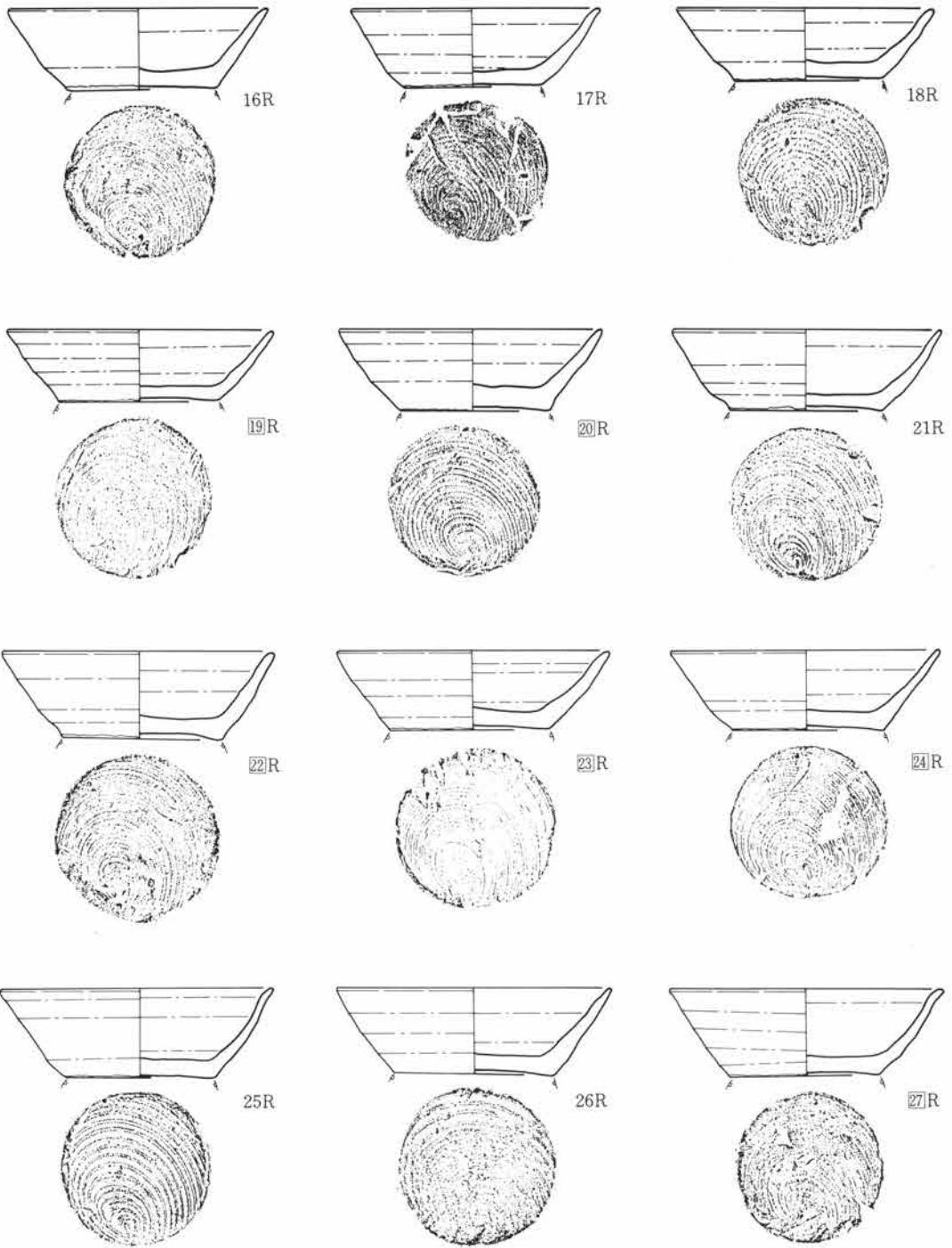
壺・甕類散布および接合関係図



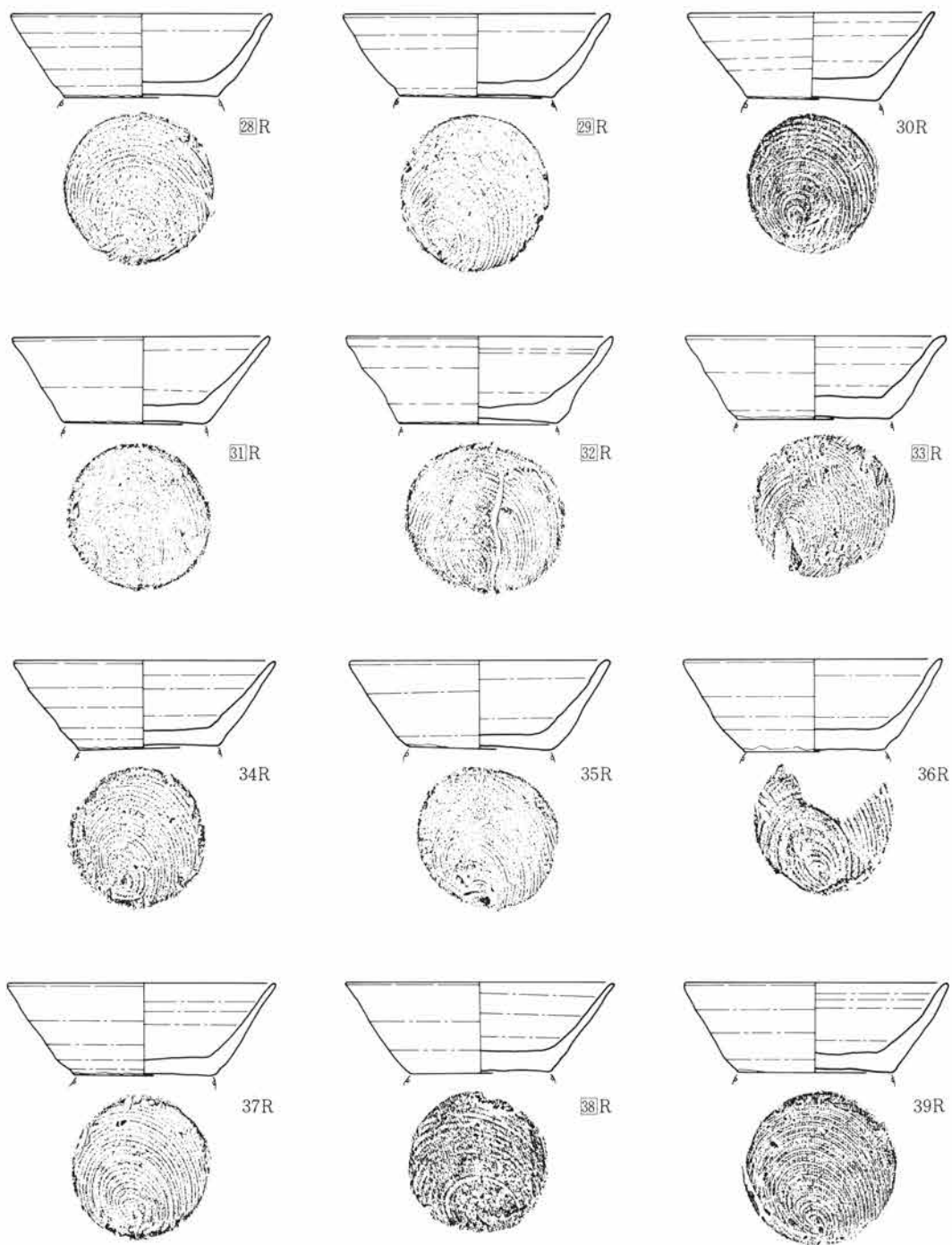
第43図 5区9号住居址遺物散布図



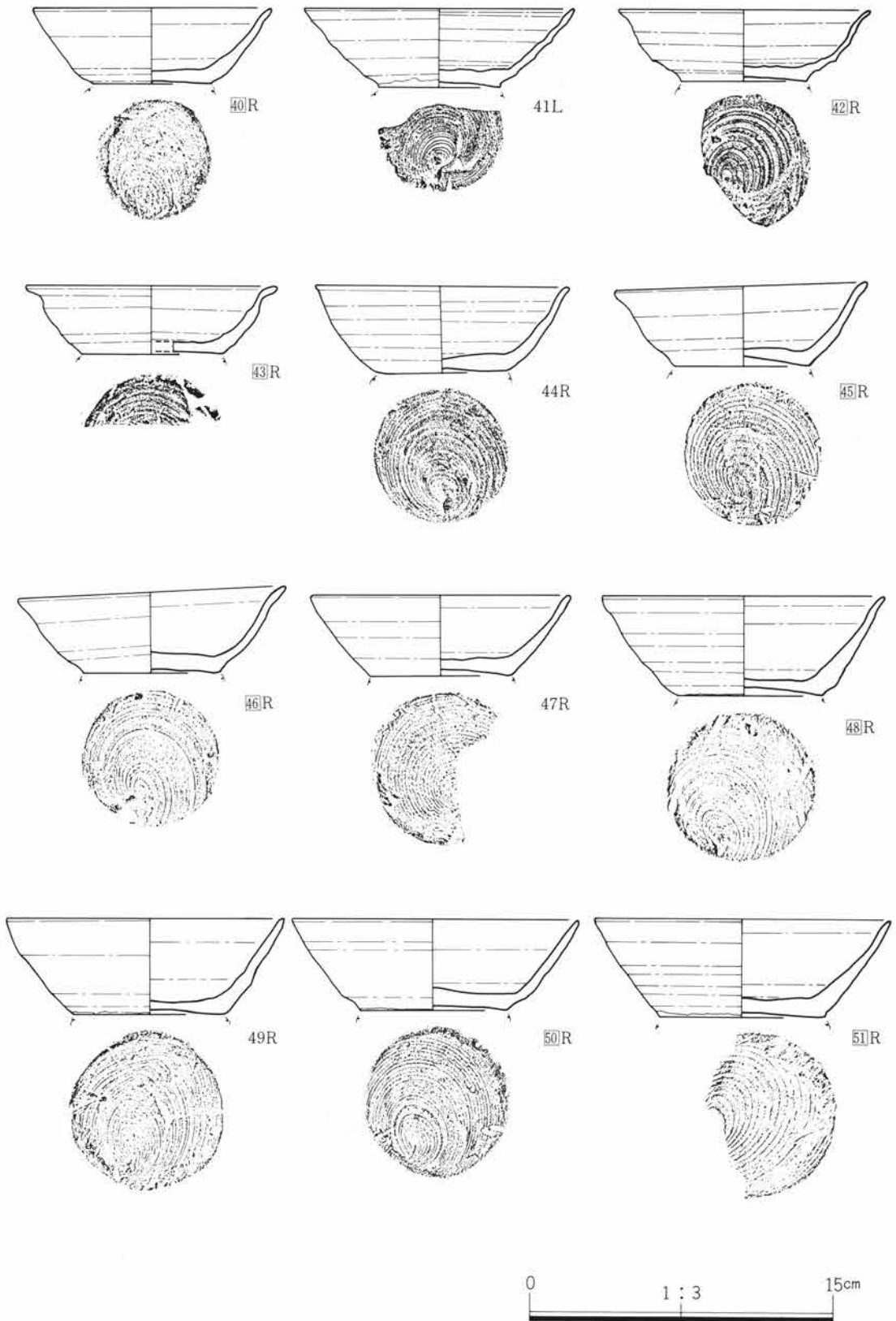
第44図 5区9号住居址出土遺物 (1)



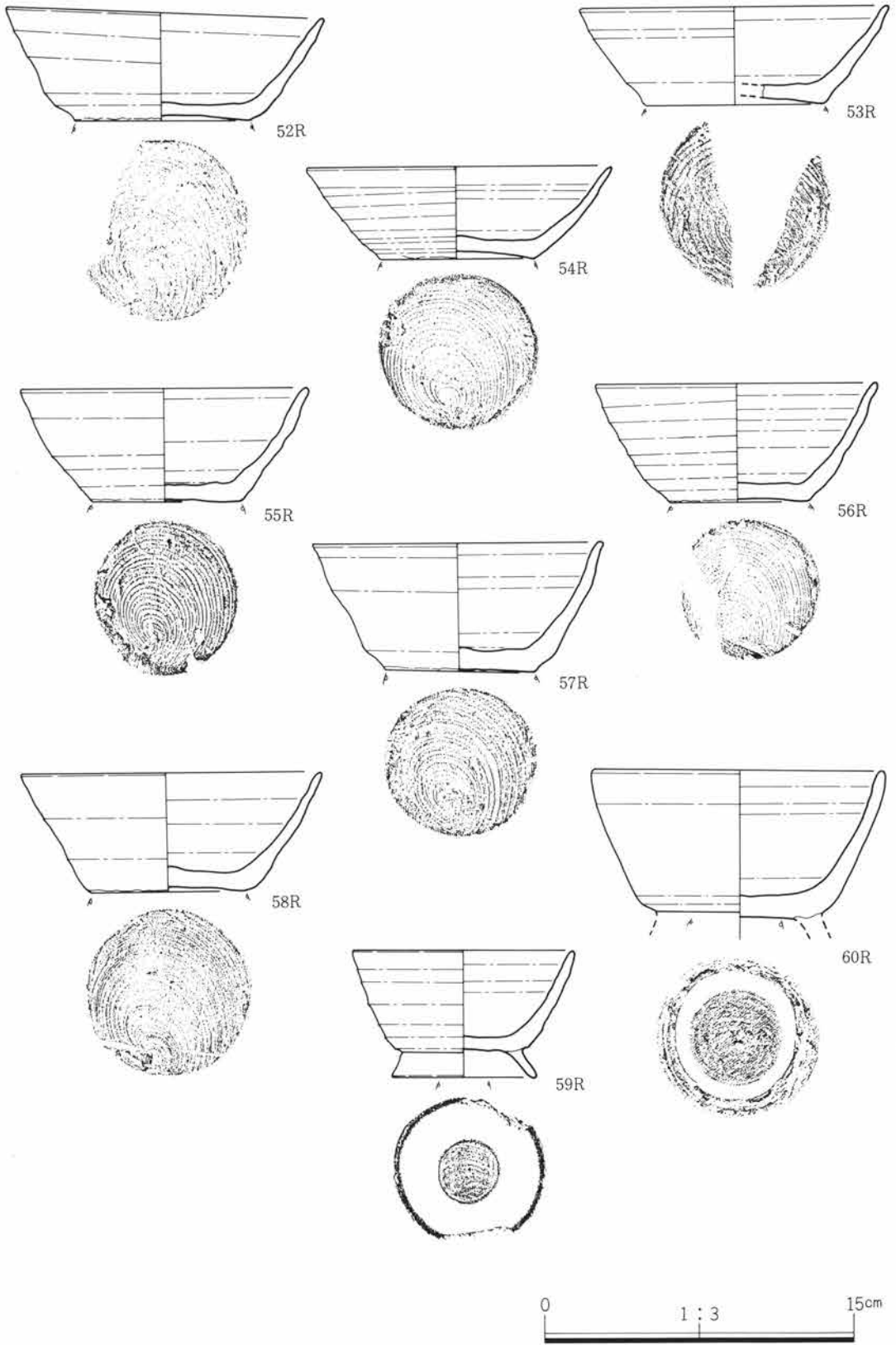
第45图 5区9号住居址出土遗物 (2)



第46図 5区9号住居址出土遺物 (3)

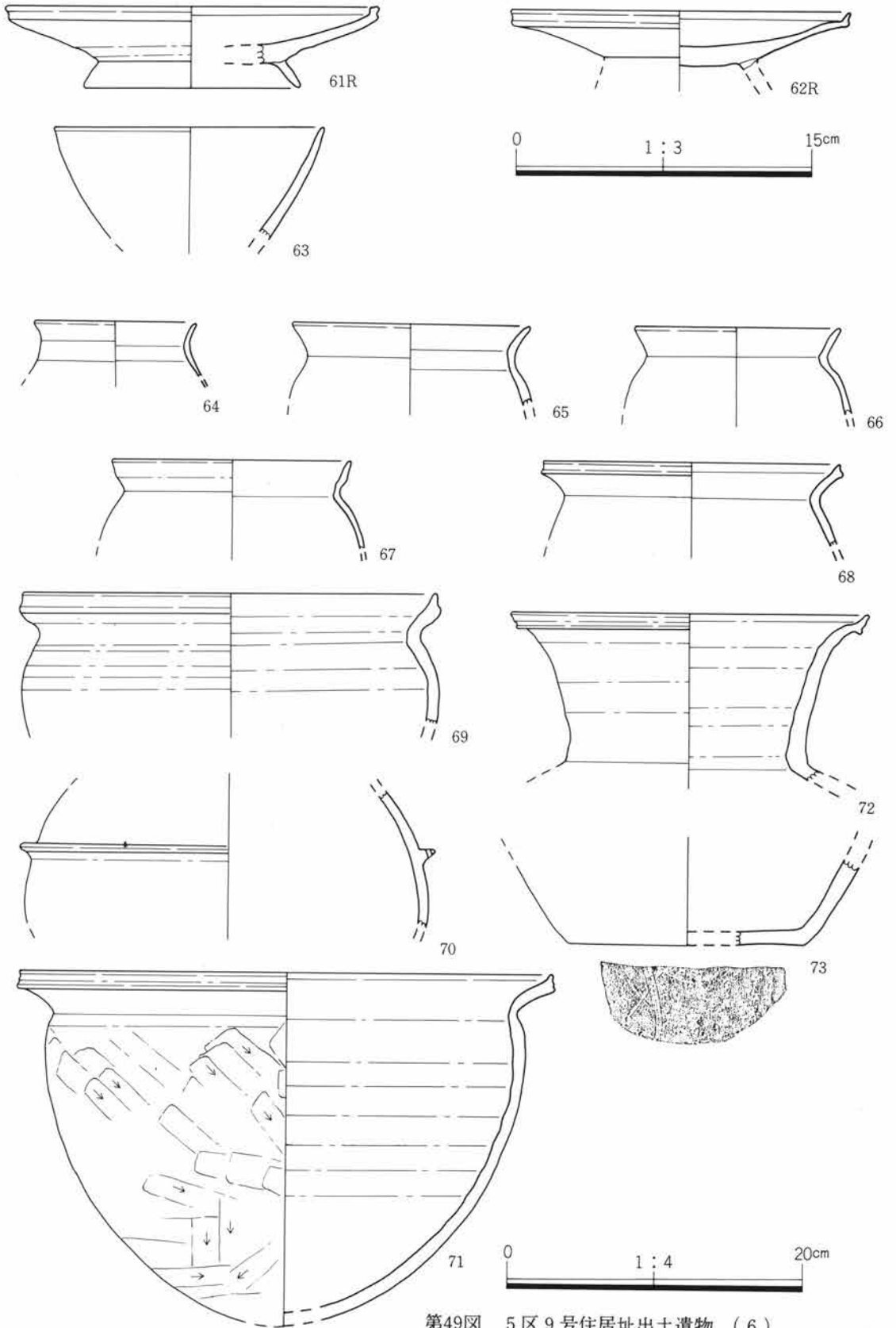


第47图 5区9号住居址出土遗物 (4)



第48図 5区9号住居址出土遺物 (5)





第49图 5区9号住居址出土遗物 (6)

本住居址の張り床を剥すと、直下に黒色土の面があり固く締っていた。さらに本住居址は南壁中央寄りの部分を除き、全面に掘形があり、掘形の下部に粘土採掘塚と思われる落ち込みがあった。しかし、掘形と落ち込みの境はあまり明確でなく、掘形のプランはほとんど確認できなかった。図示した土器には掘形出土のものが多く含まれているが、下部の落ち込みの土器も混入している可能性が大である。

出土土器の取り上げ点数は748点で、覆土中のものが451点、床面出土のものが75点、掘形出土のものが222点であるが、一括取り上げの量を含めると800点強の土器が出土した。杯・蓋類の量が圧倒的に多く、杯・碗の完形が多量に出土している。

杯・蓋類の完形や大片はカマド前と南西隅・北壁中央寄りに集中し、ほとんどが床面から出土している。接合関係は一部の土器に見られるが、大きな移動はあまり見られない。

壺・甕類の散布状態はカマド～カマド前・中央にやや多く散布しており、この傾向は大片の土器に顕著である。

#### 5区11号住居址 (第50・51図、図版22)

5区台地部の中央に立地し、9号住居址の南西に平行して近接する。粘土採掘塚と思われる、2・3・40号土塚によって切られ、14～17号掘立柱建物にも切られている。本住居址はロームへの掘り込みが浅く、確認段階から床面が露出する状態であり、上部の14～17号掘立柱建物の構築時に、削平を受けた可能性がある。

平面形は長方形を呈し、各隅は鋭角で、各辺はやや歪みがある。規模は長軸6.32m、短軸4.72mで本遺跡の中では最も大きい住居址である。長軸方向はN-1°-Wを示す。覆土の状態はあまり明確ではないが、自然に埋没したものと思われる。

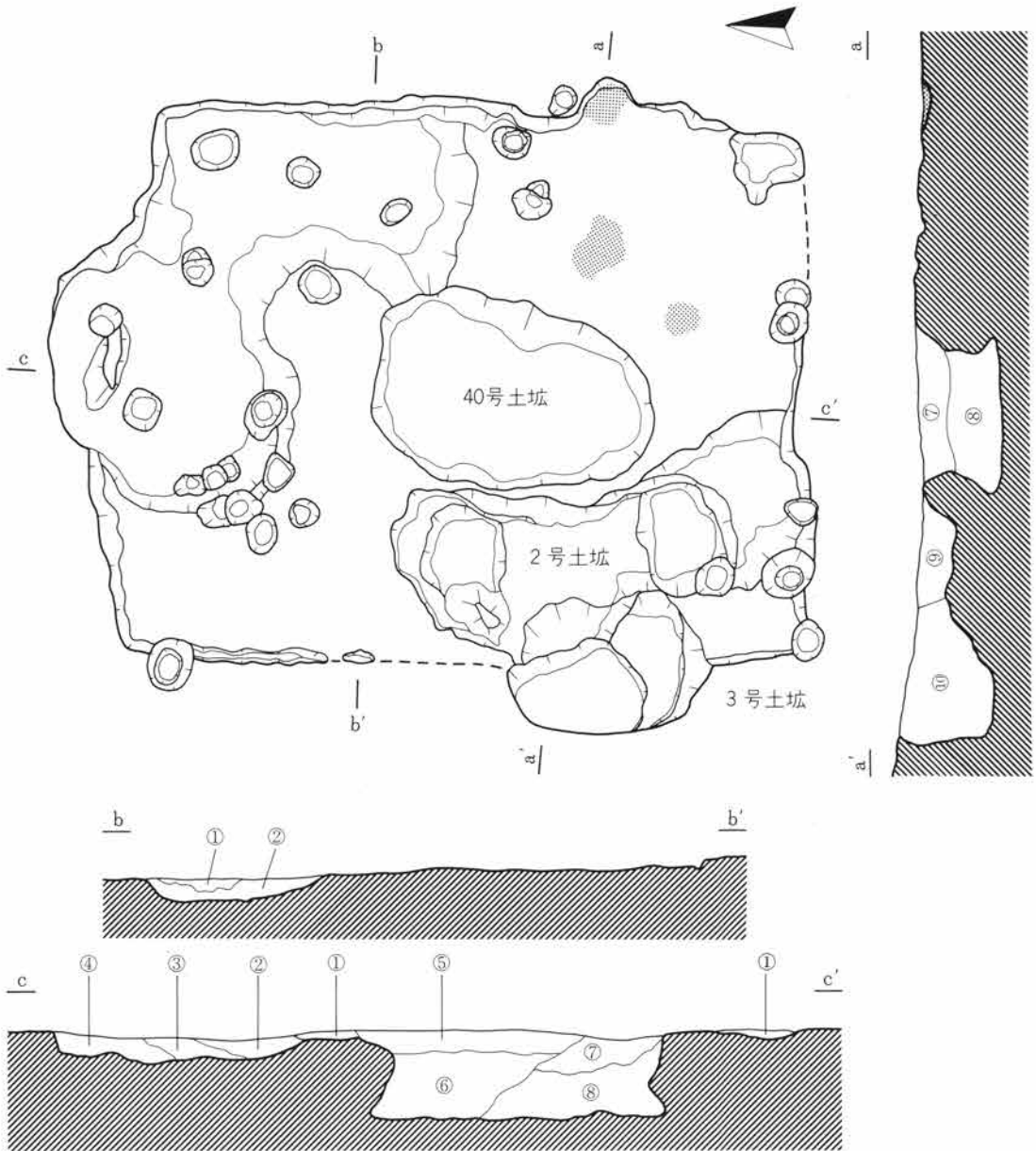
壁は部分的に不明な所もあるが、平均5cmの高さが確認され、やや斜めに立ち上がっていた。床面は全面がやや凸凹しているが、掘形のある部分も含め、全面が非常に固く締っていた。また、カマド前の2ヶ所に小範囲ではあるが、焼土が薄く散布していた。

周溝が西壁の北西隅寄りの部分で確認された。幅は平均10cm、深さは10cm～13cmで、断面はV字状を呈していた。なお、本住居址に付く柱穴は確認されなかった。

カマドは東壁中央より南へ寄った位置にあり、丸みを帯びたコの字状を呈して、壁外へ35cm張り出していた。このカマドはほとんど底面近くの状態であり、本来の形状や規模は不明である。底面や奥壁立ち上がり部分は、非常に良く焼けていた。また、このカマドは掘形はなく、遺物も出土しなかった。

南東隅の壁に沿って、68cm×46cm、深さ6cmの規模の、不整形の落ち込みが確認されたが、貯蔵穴である可能性は弱い。

本住居址の東壁中央から北東隅・北壁中央にかけて、床面下が掘り込まれていたが、東壁寄りの落ち込みは、本住居址の掘形であるが、北壁寄りの落ち込みは本住居址のものであるかどうかは、確認できなかった。



- ① 暗褐色土 ローム粒子を少量含む。  
 ② 褐色土 ロームと粘土の小ブロックを極少量含む。  
 ③ 明褐色土 ロームブロックをやや多く含む。  
 ④ 黒褐色土 ローム小ブロックを極少量含む。

## 40号土坑

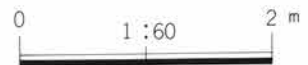
- ⑤ 暗褐色土 ローム小ブロックを多く含む。  
 ⑥ 暗黄褐色土 ロームの大小のブロックが混入。  
 ⑦ 黒褐色土 ローム小ブロックをやや多く含む。  
 ⑧ 黄褐色土 ⑥より大きなロームブロックが混入。

## 2号土坑

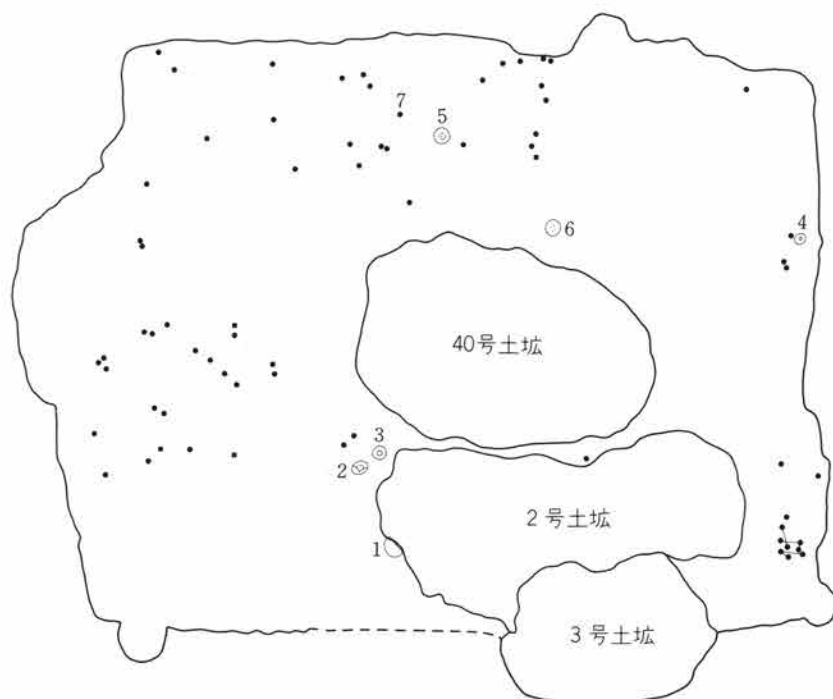
- ⑨ 黒褐色土 ローム小ブロックを多量に含む。

## 3号土坑

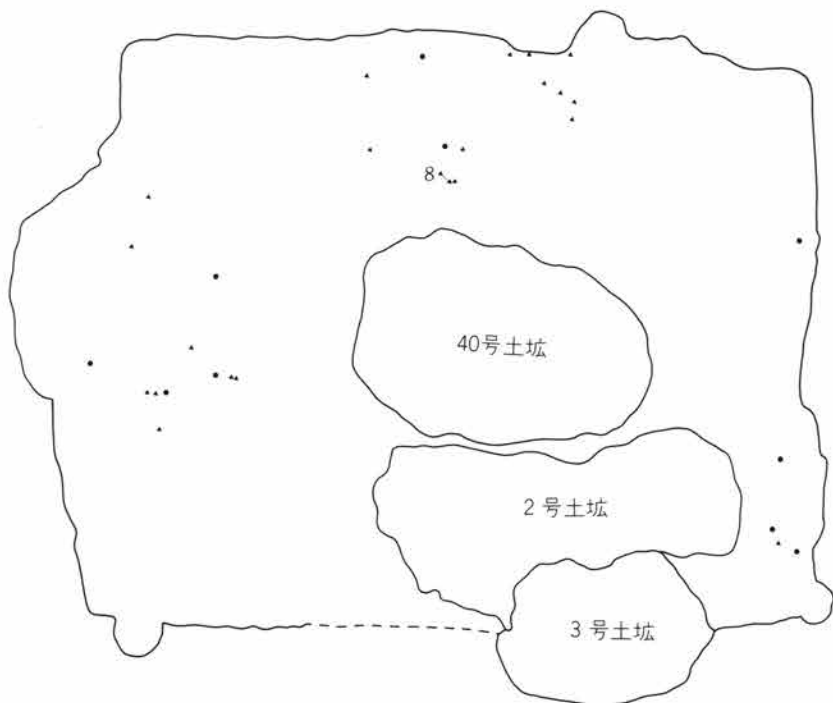
- ⑩ 暗黄褐色土 ローム・乳白色粘土・黒色土がブロックで混じり合っている。



第50図 5区11号住居址および2・3・40号土坑



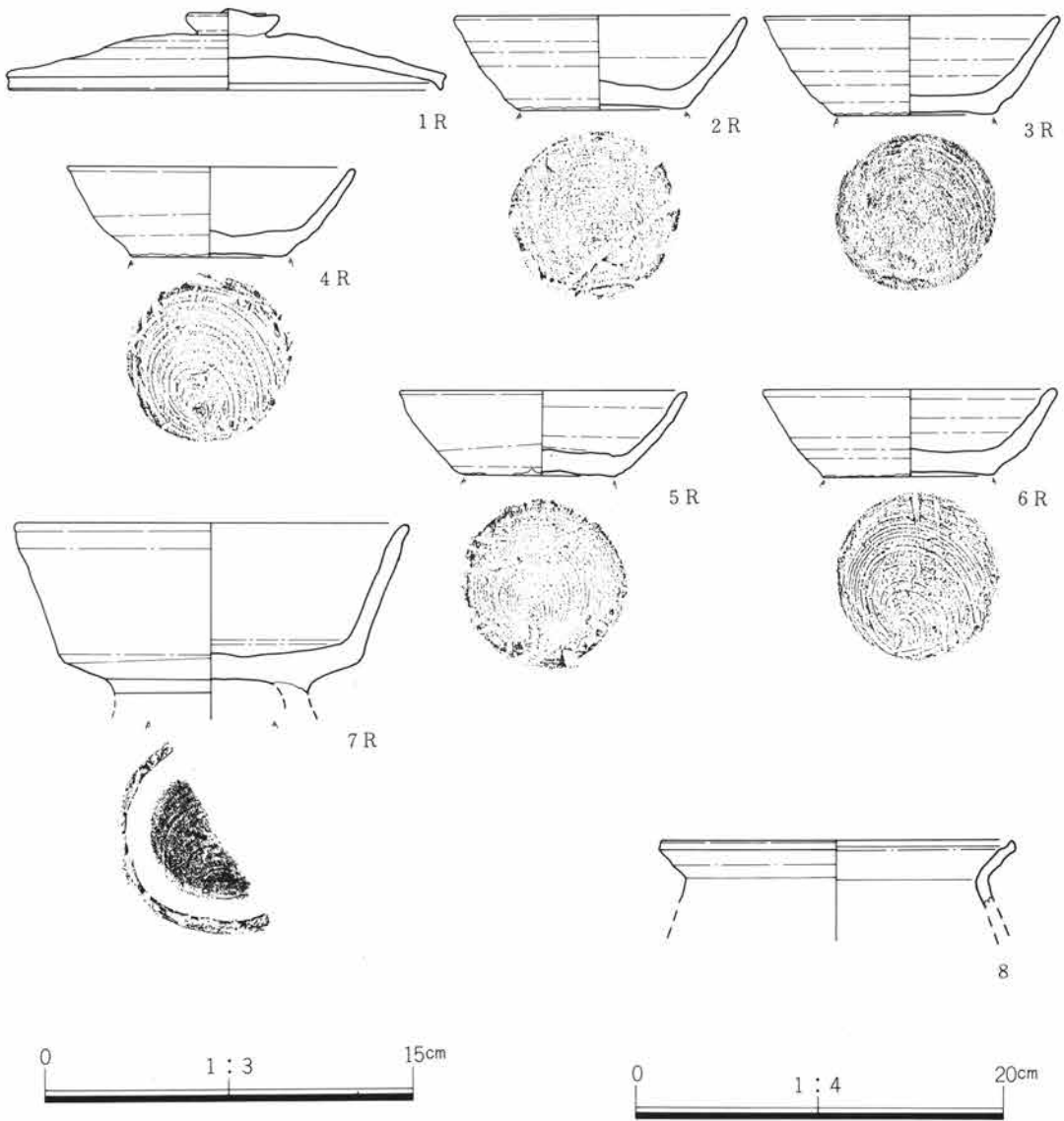
杯・蓋類散布および接合関係図



壺・甕類散布および接合関係図



第51図 5区11号住居址遺物散布図



第52図 5区11号住居址出土遺物

土器の出土状態は本住居址の状況から、掘形以外のものはほとんどが床面直上もしくは床面近くからの出土である。土器の取り上げ点数は107点で、床面上のものが52点、掘形出土のものが55点である。

杯・蓋類の散布状態は小片がカマド前北寄りにやや集中しており、完形は東壁中央・中央・南壁中央・西壁中央に各々散布している。また、南西隅に集中して散布している土器片は、掘立柱建物の柱穴の上端に集中している。壺・甕類では土師器甕の小片が、カマド～カマド前～東壁中央に集中して散布していた。

6区1号住居址 (第53～55図、図版23・24)

本住居址は5区住居址群より北へ約100m離れた、6区南半のやや高い部分へ立地し、6区南半調査区の東端に位置する。周辺には同時期の住居址はなく、南約5mの位置に6区1・2号掘立柱建物があ  
り、本住居址も掘立柱建物の柱穴によって切られている。

平面形はやや歪んだ隅丸長方形を呈しており、各隅は丸みが大きく、各辺はやや歪みがあり、やや  
台形状をなしている。また、南壁中央やや東寄りの部分は、壁外へ半円状に43cm張り出している。

規模は長軸3.92m、短軸3.14mで、長軸方向はN-20°-Wを示している。覆土は自然に埋没した様  
相を示し、部分的に耕作の溝によって攪乱を受けている。

壁は8cm～14cmの高さが確認され、ほぼ直に立ち上がっている。北壁の一部は耕作の溝により壊さ  
れている。また、西壁北端と北西隅の壁面が焼けていたが、火災によるものかどうかは不明である。

床面はやや凸凹しているが、全面的に締っており、特に中央からカマド前にかけては固く締って  
いた。周溝・柱穴は確認されなかった。

カマドは東壁中央やや南寄りに構築されている。両袖部はロームを掘り残して造られており、北袖  
は40cm、南袖は74cm住居内へ張り出している。南袖は貯蔵穴との仕切りも兼ねている。焚き口は92cm  
の幅で、燃烧部は丸底状に窪んでいる。奥壁部は緩やかに立ち上がり、東壁より25cm張り出している。  
また、奥壁上端中央は楕円状にさらに20cm突出している。この突出部は煙道へ続くものと思われる。  
カマドの焼けは弱く、掘形はない。カマド内からは土師器甕の小片が出土した。

貯蔵穴は南東隅の壁に沿って構築されている。ほぼ1m四方の規模で、歪んだ隅丸方形を呈して  
いる。深さは22cmで、底面はほぼ平坦な状態であった。この貯蔵穴の東半上部は、偏平な河原石6石に  
より覆われていた。この状態は、何らかの材で支えられた河原石により、貯蔵穴東半上方を柵状に使  
用していたかの様である。

本住居址の土器取り上げ点数は229点で、一括取り上げの数量を含めると総数は250点近い土器が出  
土した。杯・蓋類は53点と少ないが、完形や大片がほとんどである。壺・甕類は個体数も多いと思わ  
れるが、小片となって散乱している。

土器の散布状態には偏りがあり、カマド～カマド前～貯蔵穴と東壁中央・南西隅が圧倒的に多い。  
また、出土位置により器種に差がある。

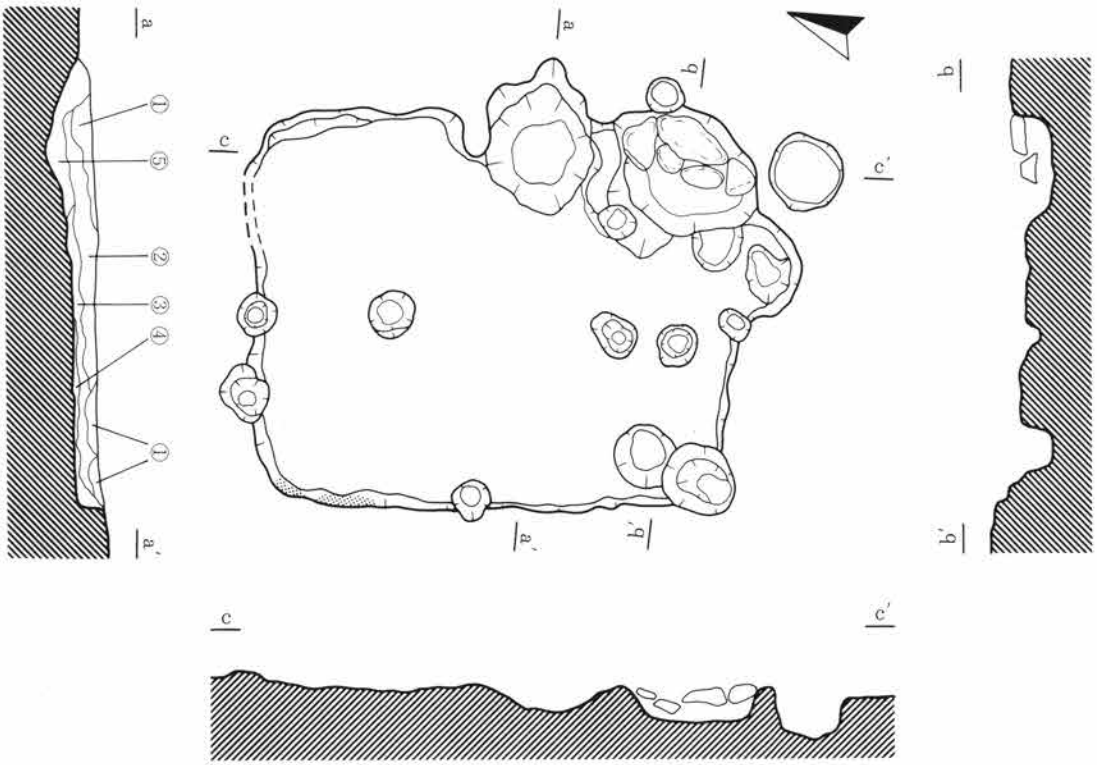
カマドからカマド前にかけては、土師器甕が多く、小型甕も出土している。ほとんど小片で、床面  
直上あるいは近くより出土し、散乱する傾向にある。

貯蔵穴は土師器甕の小片が多く、杯・蓋の小片も出土し、杯の完形1個体が出土している。しかし、  
ほとんどのものが浮いた状態で、カマドやカマド前からの流れ込みの状態を示している。

東壁中央には杯6個体、椀3個体、小型甕1個体が、東壁に沿って列をなして出土した。ほとん  
どの土器が完形か完形に近く、床面より出土している。

南西隅は杯3個体と小型甕の大片が出土し、杯・椀の小片が集中している。土器は群在する状態  
で床面よりやや浮いている。

上記以外の所では、南壁中央から張り出し部にかけて、土師器甕と小型甕の小片が浮いた状態で出



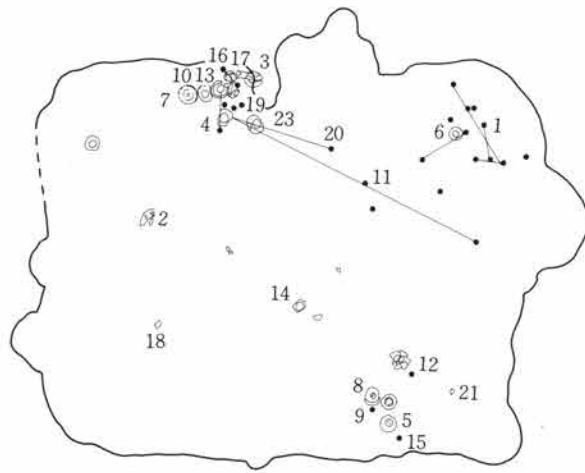
- ① 褐色土  
 ② 明褐色土 ローム小ブロックを多く含む。  
 ③ 黒褐色土 ローム小ブロックをやや多く含む、焼土・炭化物を少量含む。  
 ④ 黒褐色土 ローム粒子を少量含む。  
 ⑤ 暗赤褐色土 焼土とロームの小ブロックを多量に含む。

0 1:60 2 m

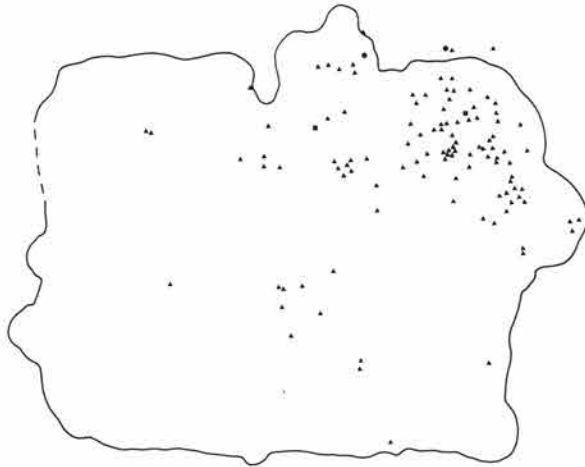
第53図 6区1号住居址

土し、中央では土師器甕の大片が多く、杯の大片もあり、床面より浮いた状態で出土した。北東隅では碗の完形1個体が床面より出土し、北壁中央では蓋の大片が床面より出土している。

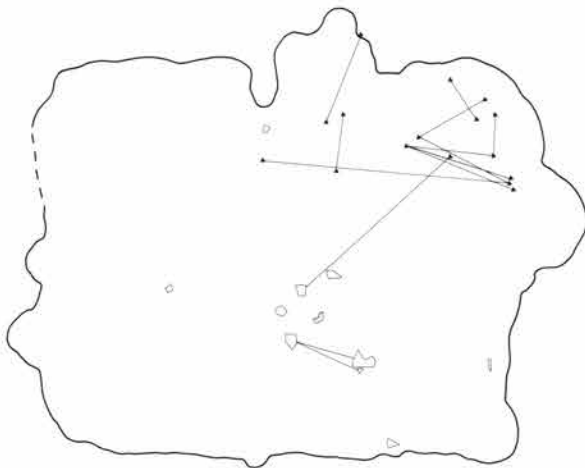
本住居址の土器の出土状態は、5区の住居址群の出土状態と様相を異にし、出土土器は良好なセット関係を示している。



杯・碗類散布および接合関係図



壺・甕類散布図

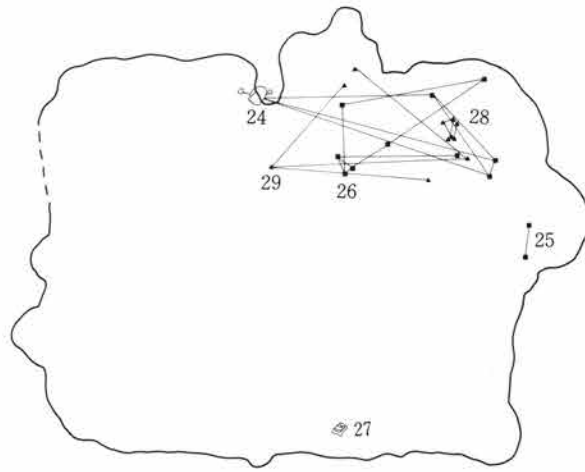


壺・甕類接合関係図

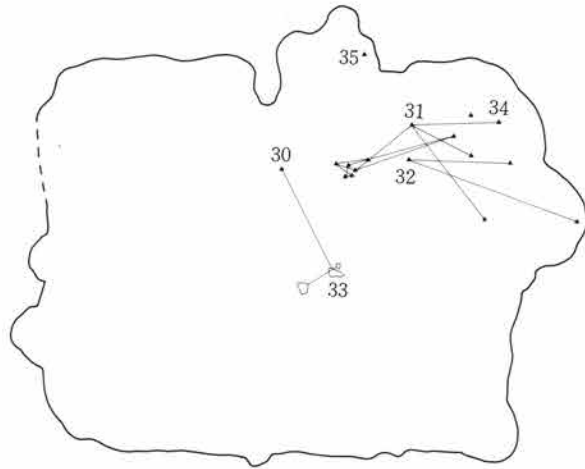


第54図 6区1号住居址遺物散布図1

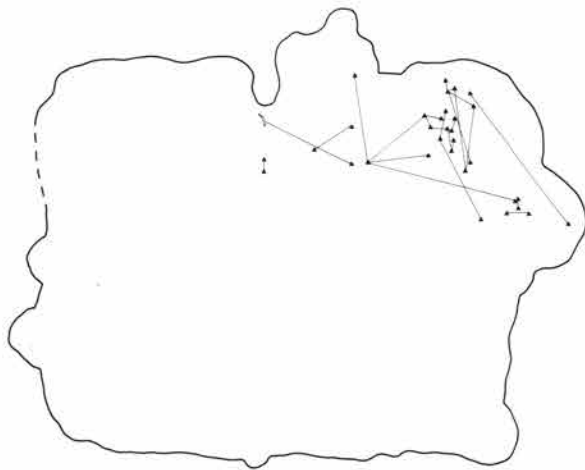




壺・甕類接合関係図



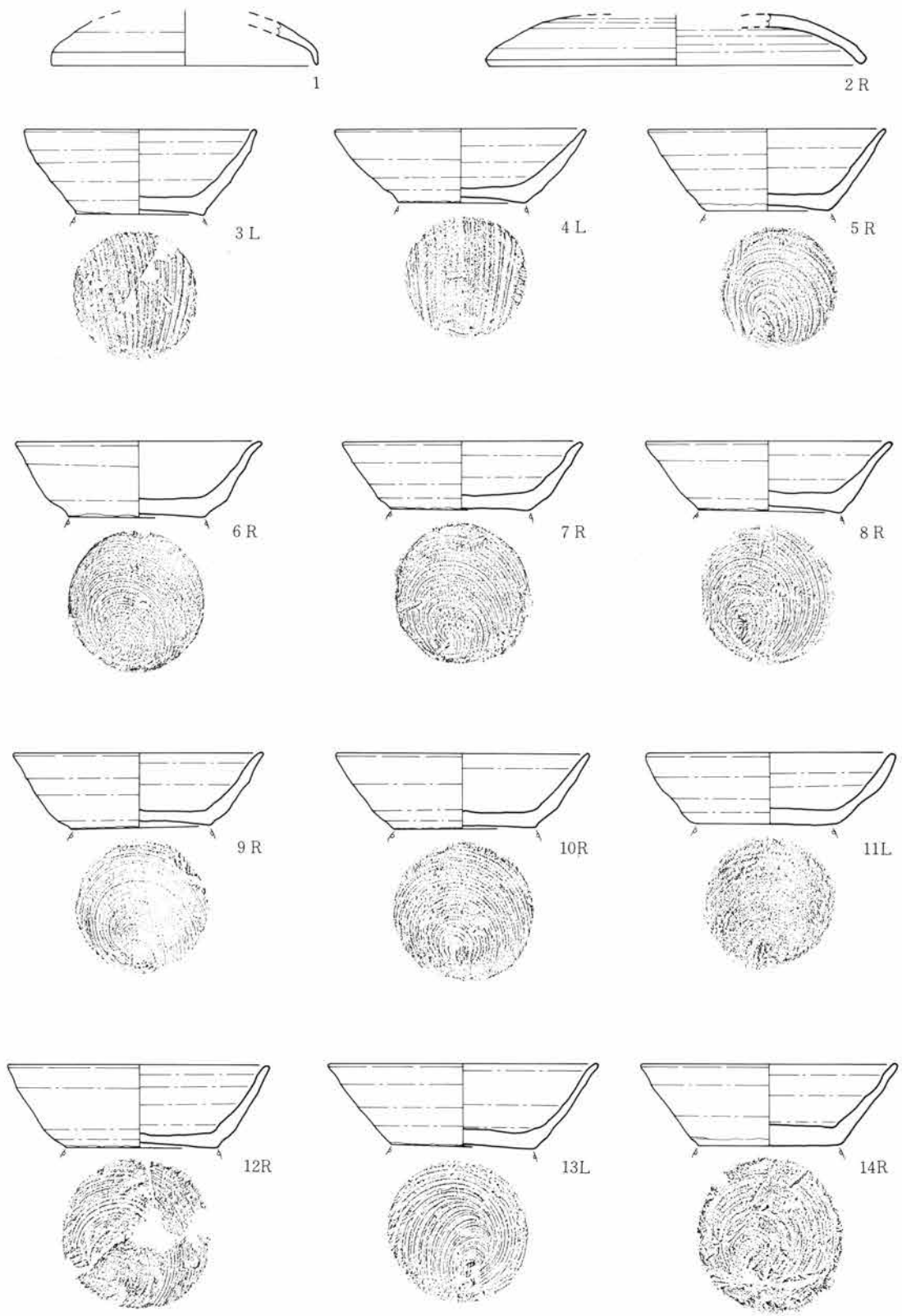
壺・甕類接合関係図



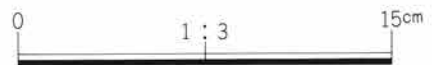
壺・甕類接合関係図

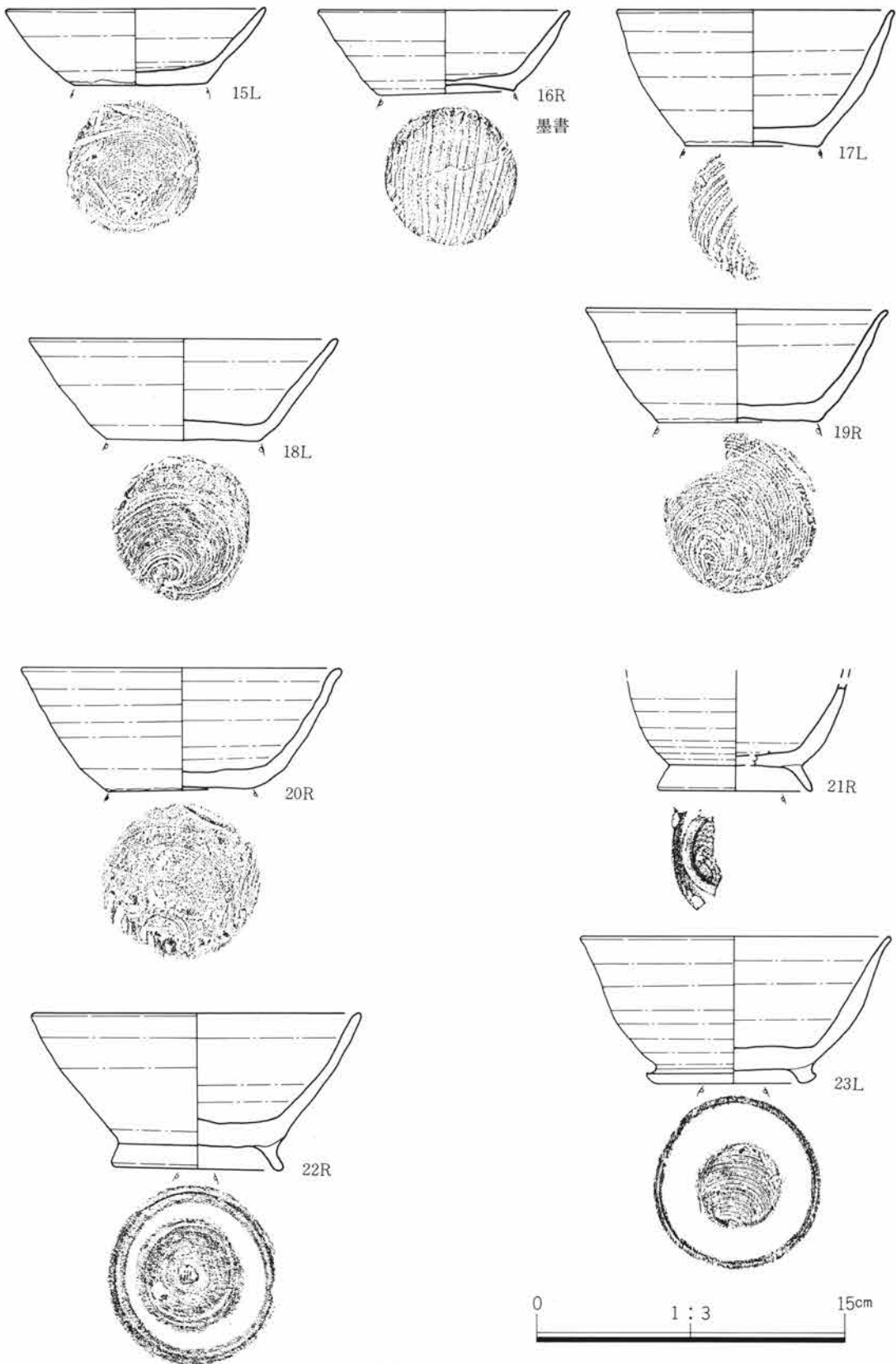


第55図 6区1号住居址遺物散布図2

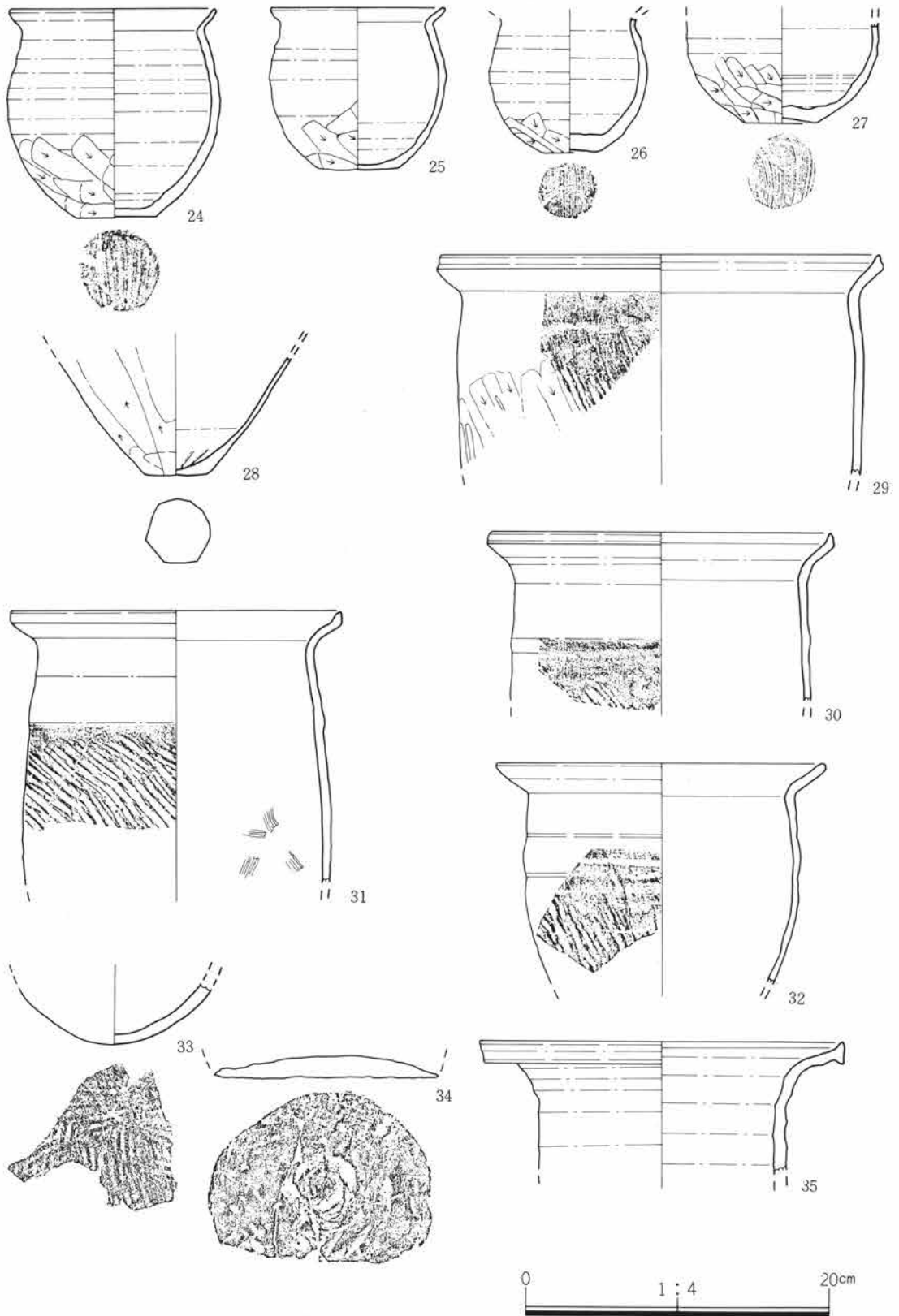


第56図 6区1号住居址出土遺物 (1)





第57図 6区1号住居址出土遺物 (2)



第58図 6区1号住居址出土遺物 (3)

### 3 掘立柱建物

#### 5区1号掘立柱建物（第59図、図版25-1）

5区台地部の北西寄りに位置し、2号掘立柱建物と重複するが前後関係は不明である。掘形は円形で、規模は径33cm～47cm、深さ20cm～52cmである。柱痕は確認されなかった。西梁間の棟柱は確認できなかったが、構造は桁行4間、梁行2間と思われる。西寄り1間には束柱と思われる柱穴がある。全体規模は桁行9.84m、梁行4.51mで、東1間がやや短くなっている。棟方向は東西で、N-104°-Eを示す。遺物は出土しなかった。

#### 5区2号掘立柱建物（第59図、図版25-1）

1号掘立柱建物と同位置で、重複している。掘形は円形で、規模は径32cm～52cm、深さ23cm～42cmである。桁行南側柱では円形で径12cmの柱痕が2本の柱穴で確認され、北側柱の東西両端の柱穴には偏平な河原石が据えられていた。西梁間の棟柱は確認できなかったが、構造は桁行3間、梁行2間と思われる。全体規模は桁行6.66m、梁行4.04mで、桁行中央の柱間がやや短くなっている。棟方向は東西で、N-94°-Eを示す。遺物は出土しなかった。

#### 5区3号掘立柱建物（第60図、図版25-2・26-1）

5区台地部の中央やや北寄りに位置し、4号掘立柱建物と重複するが前後関係は不明である。掘形は円形で、規模は径38cm～69cm、深さ22cm～48cmで、規模にやや大小がある。柱痕は確認されなかった。構造は桁行3間、梁行1間である。全体規模は桁行5.88m、梁行3.92mで、柱間はほぼ等間である。棟方向は東西で、N-94°-Eを示す。柱穴からは平安時代の土器小片2点が出土し、周辺には近世陶磁器片が散布していた。

#### 5区4号掘立柱建物（第60図、図版25-2・26-1）

3号掘立柱建物と同位置で重複し、30・31号土壇を切っている。掘形は円形で、規模は径40cm～68cm、深さ30cm～48cmで、規模にやや大小がある。柱痕は確認されなかった。桁行東側柱は柱間1間をとばしているが、構造は桁行5間、梁行1間の細長い建物である。全体規模は桁行9.19m、梁行3.12mで、柱間はほぼ等間である。棟方向は南北で、N-5°-Eを示す。柱穴からは平安時代の土器小片が1点出土し、周辺には近世陶磁器片が散布していた。

#### 5区5号掘立柱建物（第61図、図版29-2）

5区台地部の中央やや南寄りに位置し、13・17号掘立柱建物と重複しているが前後関係は不明である。掘形は円形で、規模は径24cm～45cm、深さ18cm～42cmである。柱痕は確認されなかった。構造は桁行1間、梁行1間で、東梁行柱穴は2段に落ち込んでおり、西梁行柱穴は2本ずつ重なり合っており、1度建て替えを行なっている。また、西梁行は歪んでいる。全体規模は桁行が4.15mと4.43mで、梁行2.85mである。棟方向は東西で、N-106°-Eを示す。遺物は出土しなかった。

5区6号掘立柱建物（第62図、図版26）

5区台地部の中央北寄りに位置し、1号溝を切り、7・8号掘立柱建物と重複しているが前後関係は不明である。掘形は円形で、規模は48cm～70cm、深さ37cm～63cmである。南梁行の棟柱は規模が小さいが、他は大きくしっかりしている。柱痕が1本確認され、円形で径22cmである。構造は桁行3間、梁行2間である。全体規模は桁行5.75m、梁行5.15mで、柱間はやや乱れている。棟方向は東西で、N-2°-Wを示す。柱穴からは縄文土器片1点が出土し、周辺には中・近世陶磁器片が散布していた。

5区7号掘立柱建物（第62図、図版26）

6号掘立柱建物と同位置で、6・8号掘立柱建物と重複し、1号溝を切っている。掘形は円形で、規模は径69cm～82cm、深さ48cm～82cmで、規模が大きくしっかりしている。柱痕が1本確認され、円形を呈し径20cmである。構造は桁行3間、梁行1間である。全体規模は桁行7.20m、梁行4.83mで、桁行中央の柱間が短くなっている。棟方向は東西で、N-88°-Eを示す。柱穴からは平安時代の土器小片1点が出土し、周辺には中・近世陶磁器片が散布していた。

5区8号掘立柱建物（第62図、図版26-1・27-1）

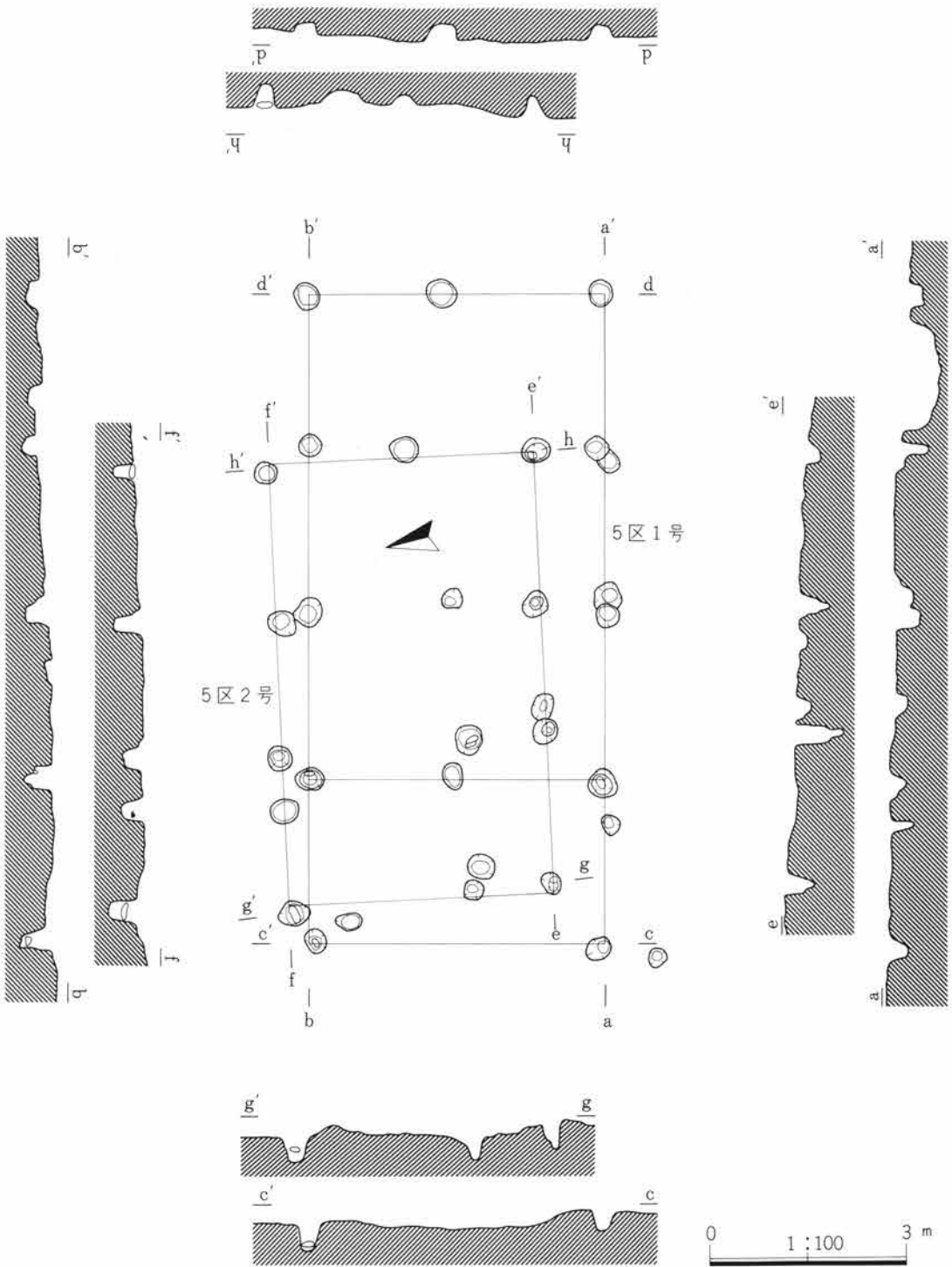
6・7号掘立柱建物の東に重複して位置し、1号溝を切っている。掘形は円形で、規模は径42cm～79cm、深さ33cm～50cmで、規模が大きくしっかりとしている。構造は桁行3間、梁行1間である。全体規模は桁行7.20m、梁行4.94mで、柱間はほぼ等間である。棟方向は東西で、N-88°-Eを示す。柱穴からは平安時代の土器片4点が出土し、周辺には中・近世陶磁器片が散布していた。

5区9号掘立柱建物（第63図、図版27-2）

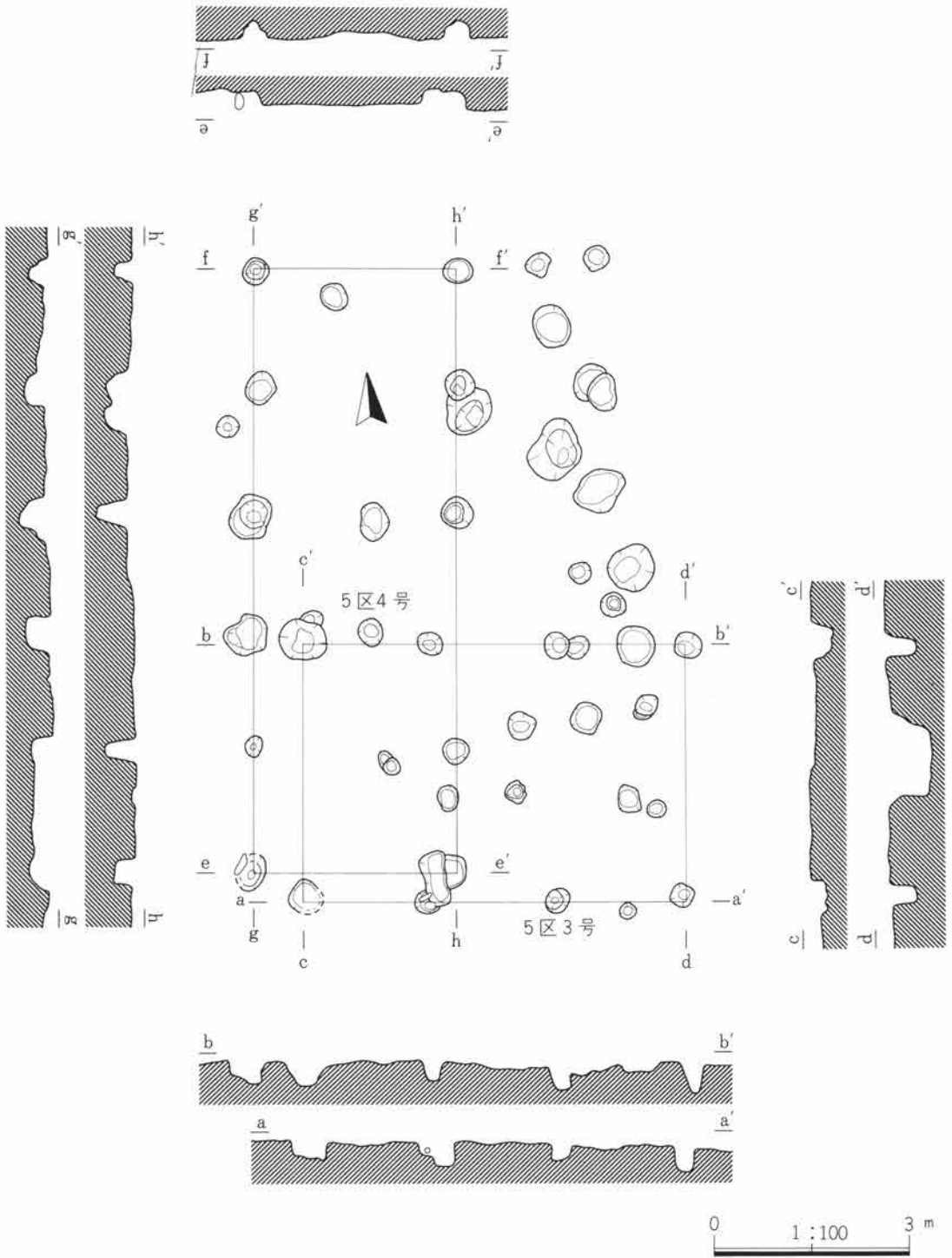
5区台地部の北東寄りに位置し、北東隅の柱穴は調査区外のため確認できなかった。掘形は円形で、規模は径44cm～65cm、深さ15cm～28cmで、しっかりとしている。すべての柱穴で柱痕が確認され、円形を呈し径14cm～18cmである。構造は桁行3間、梁行1間で、歪みがほとんどない。全体規模は桁行6.00m、梁行4.00mで、柱間は等間である。棟方向は南北で、N-3°-Wを示す。柱穴からは平安時代の土器小片が5点出土した。

5区10号掘立柱建物（第64図、図版28-1）

5区台地部南東傾斜面の南東隅に位置し、南半は不明である。掘形は円形で、規模は径31cm～45cm、深さ20cm～42cmである。柱痕は確認されなかった。全体構造は不明であるが、現状で東西3間、南北1間が確認され、さらに南へ延びるとされる。また、東柱が確認されており総柱の建物と推定される。本建物の柱位置に近接して、整っていないが柱穴が並んでおり、建て替えを行なっている可能性がある。現状の規模は東西5.16m、南北2.20mで、1本の柱穴はずれているが、他はほぼ等間である。東西方向の方位はN-93°-Eを示す。柱穴からは平安時代の土器片が少量出土し、周辺には中・近世陶磁器片が散布していた。

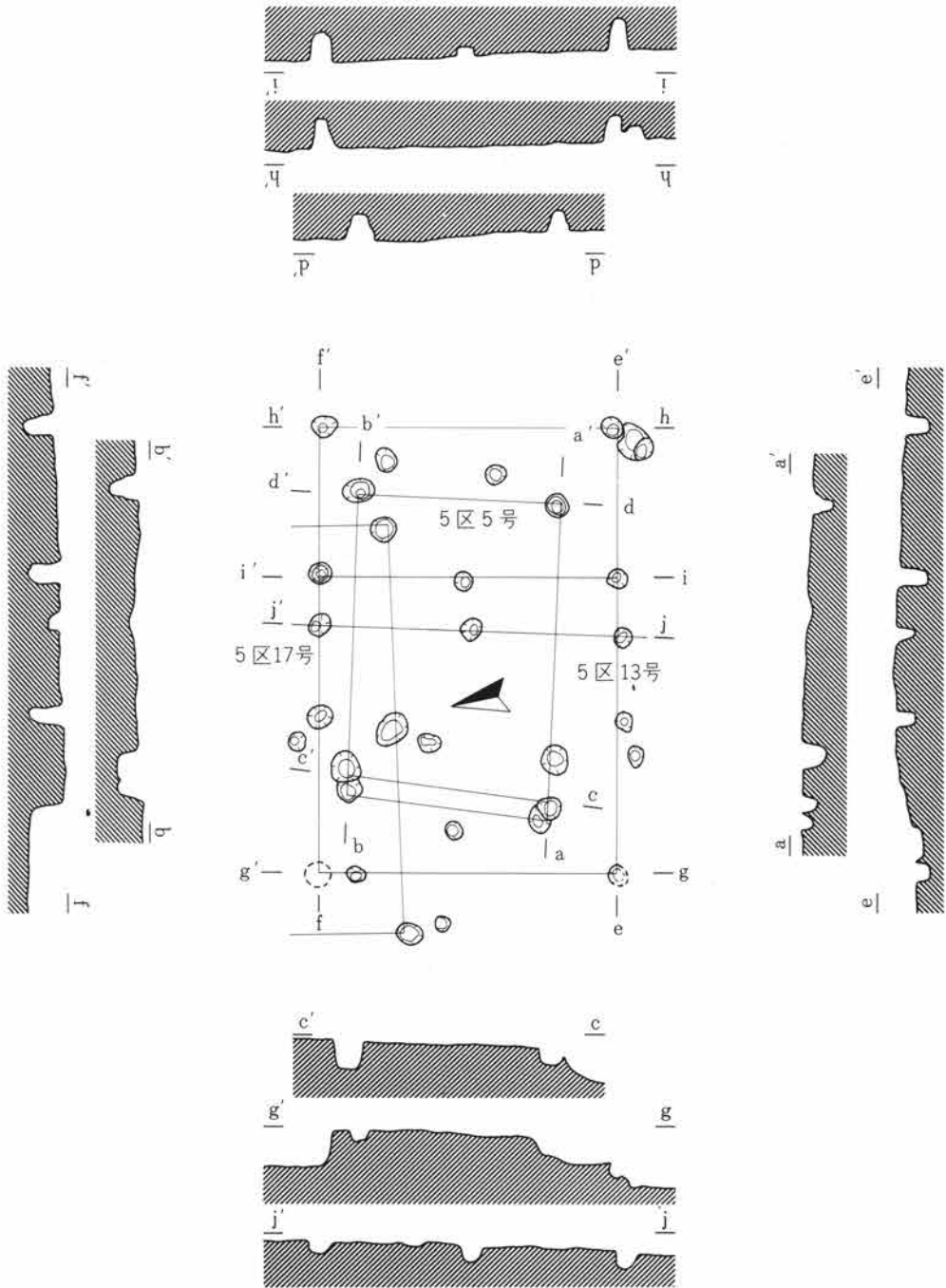


第59图 5区1・2号掘立柱建物



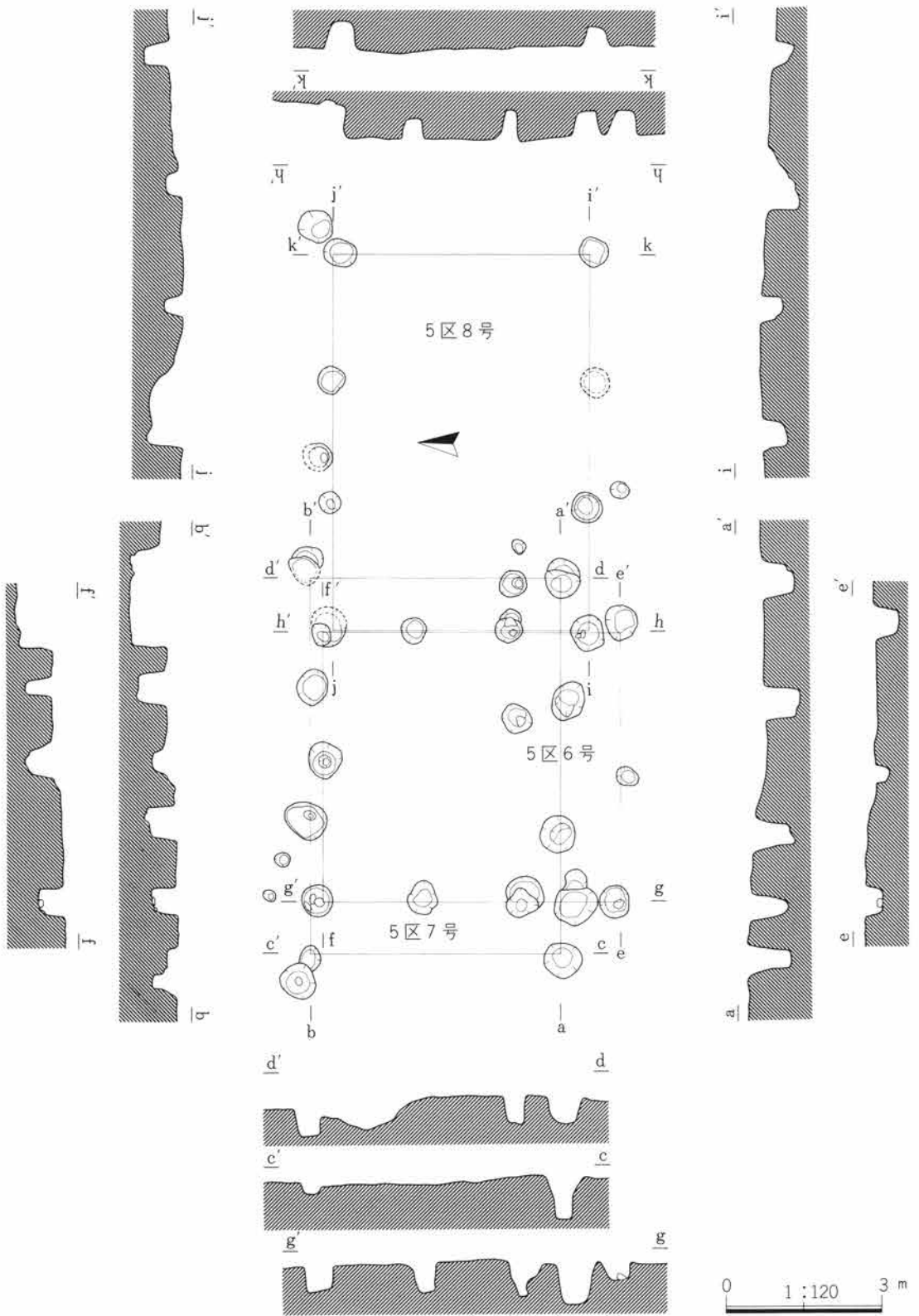
第60図 5区3・4号掘立柱建物



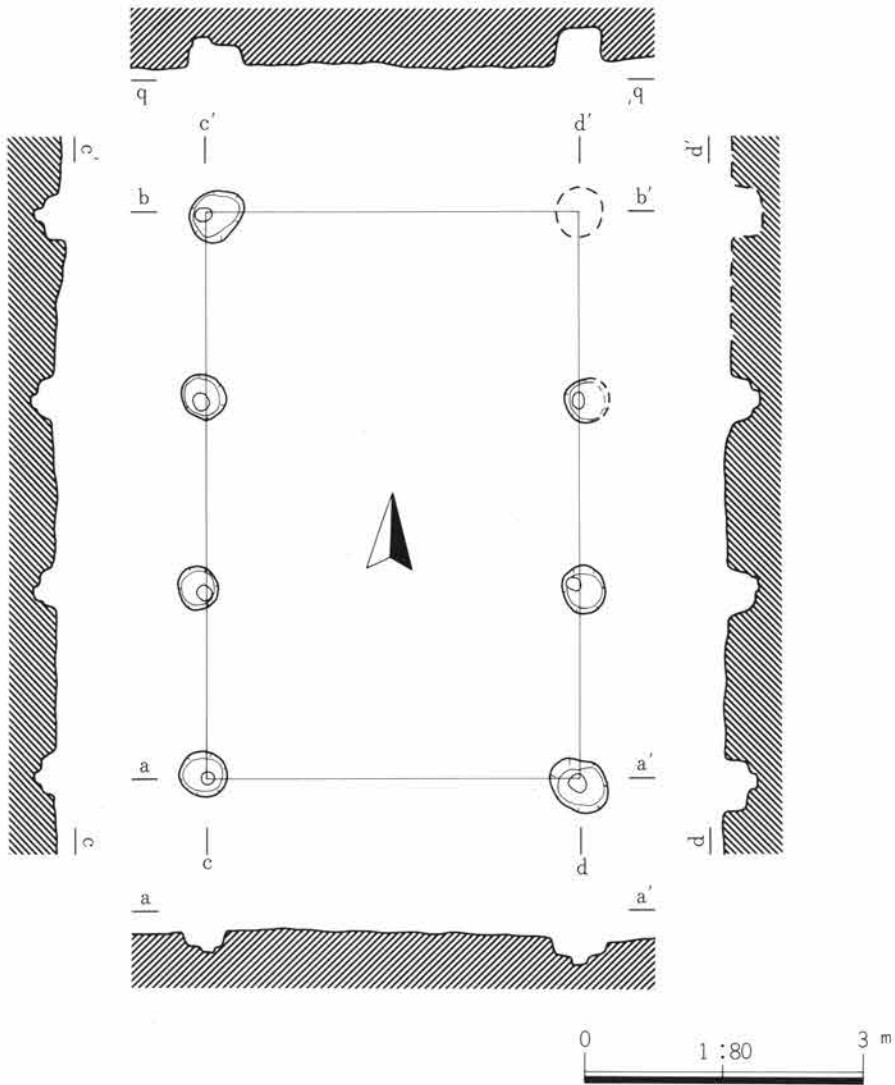


第61图 5区5・13・17号掘立柱建物





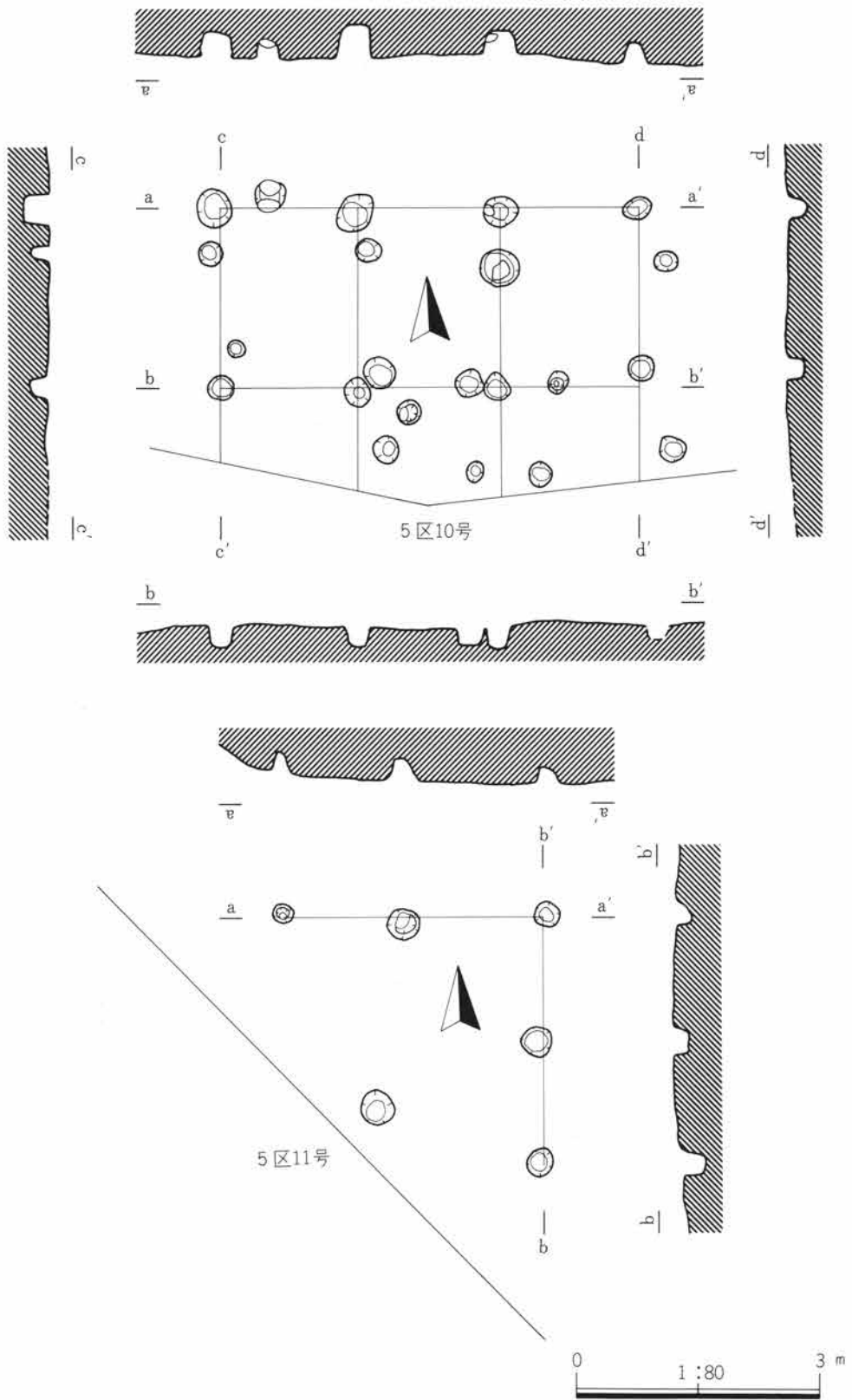
第62図 5区6～8号掘立柱建物



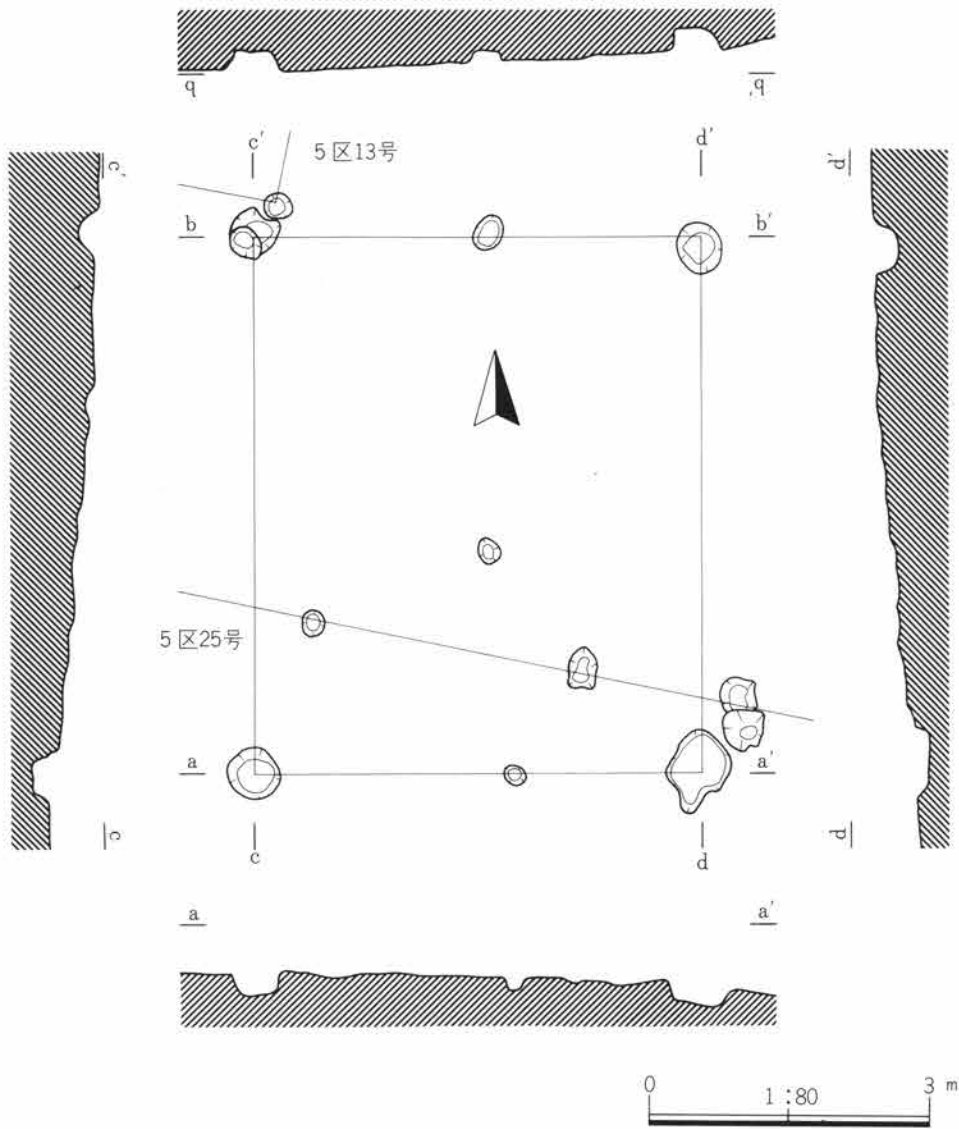
第63図 5区9号掘立柱建物

## 5区11号掘立柱建物 (第64図、図版28-2)

5区台地部南傾斜面の中央南端に位置し、2号井戸に近接している。東西2間、南北2間を確認しただけで、全体の構造・規模は不明である。掘形は円形で、規模は径24cm~40cm、深さ20cm~32cmである。柱痕は確認されなかった。現状の規模は東西3.24m、南北3.00mである。東西方向の方位は、N-92°-Eを示す。柱穴からは遺物は出土しなかったが、周辺には近世陶磁器片が散布していた。



第64図 5区10・11号掘立柱建物



第65図 5区12号掘立柱建物

### 5区12号掘立柱建物 (第65図、図版29-1)

5区台地部の中央やや南寄りに位置し、13・25号掘立柱建物と重複しているが前後関係は不明である。掘形は円形で、側柱の規模は径48cm～70cm、深さ20cm～25cmで、棟柱は径22cm～38cm、深さ12cmで側柱より規模が小さい。構造は桁行1間、梁行2間という特異なものである。全体規模は桁行5.67m、梁行4.80mで、南棟柱の位置がややずれている。棟方向はほぼ南北である。遺物は出土しなかった。

5区13号掘立柱建物（第61図、図版29-2）

5区台地部の中央やや南寄りに位置し、5・17号掘立柱建物と29号土壇と重複するが前後関係は不明である。掘形は円形で、規模は径27cm～36cm、深さ28cm～51cmである。柱痕が1本確認され、12cm×12cmの角柱である。構造は桁行3間、梁行1間で、東寄り1間の柱通りに東柱と思われる柱穴がある。全体規模は桁行6.19m、梁行2.85mで、柱間は若干ではあるが少しずつずれている。棟方向は東西で、N-103°-Eを示す。遺物は出土しなかった。

5区14号掘立柱建物（第66図、図版29-2）

5区台地部のほぼ中央に位置し、11号住居址を切り、15～17号掘立柱建物と重複しているが前後関係は不明である。掘形は円形で、規模は身舎が径36cm～47cm、深さ38cm～62cmで、南庇が径39cm～46cm、深さ15cm～42cmで、北庇が径25cm～33cm、深さ15cm～38cmで、西庇が径32cm～42cm、深さ24cm～36cmである。身舎の柱穴は径はあまり大きくないが深くしっかりとしている。南庇の柱穴は径は身舎と変わらないがやや浅くなっている。北庇と西庇の柱穴は径も小さく浅くしており、北庇の中央の柱穴は3本で受け、西庇の中央の柱穴は2本で受けている。また、身舎の2本の柱穴では、円形を呈する径15cmの柱痕が確認され、北東隅の柱穴底面には偏平な河原石が据えられていた。構造は身舎桁行4間、梁行1間で、南と北と西の3面に庇を持つ。また、桁行中央の柱通りには東柱と思われる柱穴がある。規模は身舎桁行9.38m、梁行5.03mで、南庇の出は1.38m、北庇の出は1.22m、西庇の出は0.87mで、全体規模は10.25m×7.63mとなる。また、桁行の柱間は東2間と西2間では異なっており、東2間が2.19mの等間隔で、西2間が2.50mの等間隔となっている。棟方向は東西で、N-107°-Eを示す。柱穴からは遺物は出土しなかったが、周辺からは中・近世陶磁器片が出土している。

5区15号掘立柱建物（第66図、図版30-1）

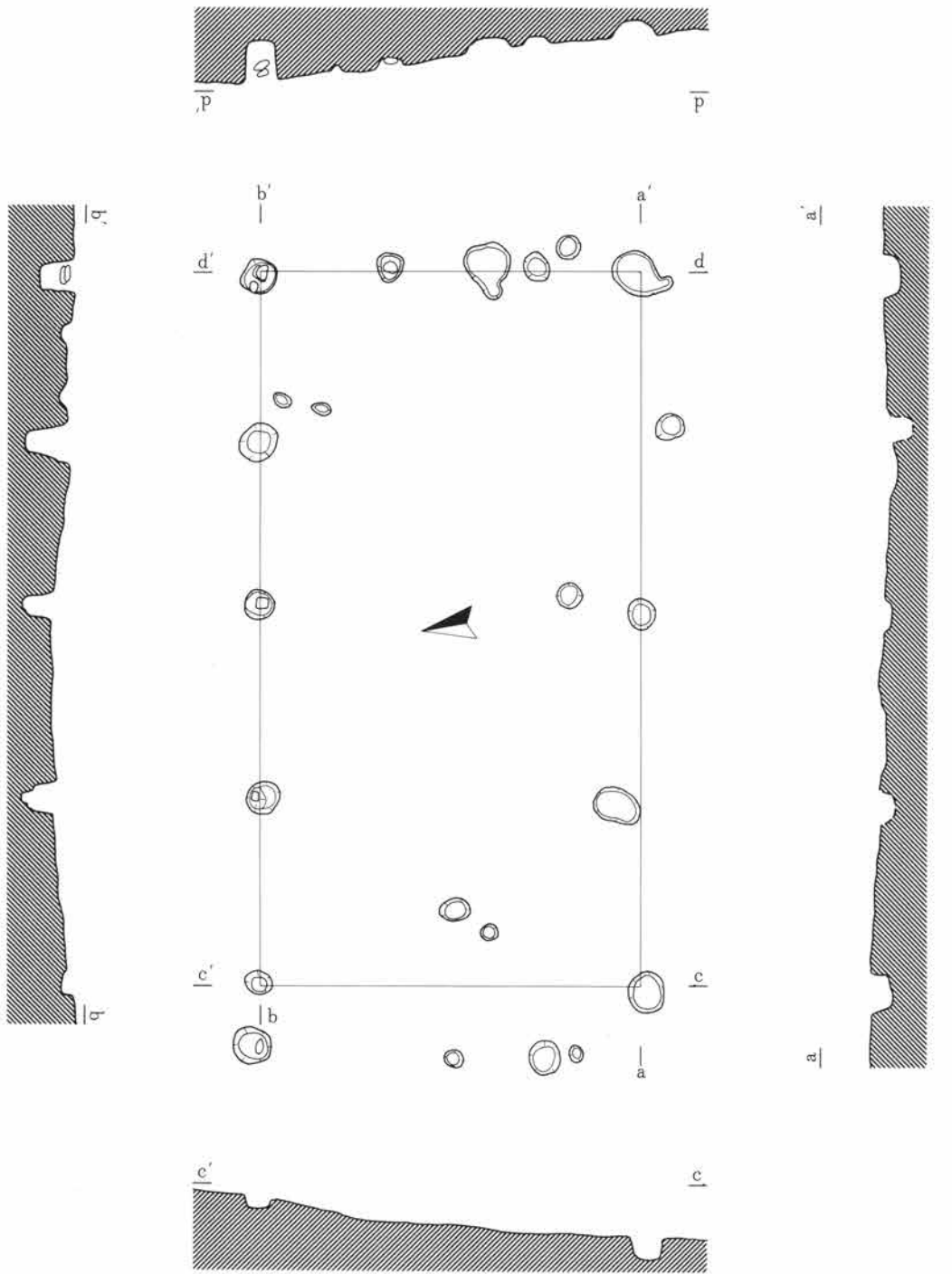
14号掘立柱建物と同位置で重複している。掘形は円形で、規模は径42cm～47cm、深さ48cm～52cmで、しっかりとしている。柱痕が1本確認され、円形を呈し径15cmである。構造は桁行4間、梁行1間で、やや歪んでいる。全体規模は南桁行が9.20m、北桁行が9.31m、東梁行が4.76m、西梁行4.86mである。桁行の柱間は中央2間と東西両端の1間では差があり、中央2間の柱間は平均2.50mで広く、東西両端の柱間は平均2.10mと狭くなっている。棟方向は東西で、N-106°-Eを示す。柱穴からは平安時代の土器小片28点が出土し、周辺には中・近世陶磁器片が散布していた。

5区16号掘立柱建物（第66図、図版30-1）

14・15号掘立柱建物と同位置で重複し、ともに11号住居址を切っている。掘形は円形で、規模は径26cm～36cm、深さ24cm～55cmで、細いが深くしっかりとしている。柱痕は確認されなかった。構造は桁行3間、梁行1間である。全体規模は桁行8.43m、梁行5.04mで、桁行東端の1間がやや柱間が狭くなっている。棟方向は東西で、N-105°-Eを示す。柱穴からは遺物が出土しなかったが、周辺には中・近世陶磁器片が散布していた。



第66图 5区14~17号掘立柱建物



第67図 5区18号掘立柱建物

0 1:100 3 m



## 5 区17号掘立柱建物 (第61・66図、図版30-1)

5 区台地部のほぼ中央に位置し、5・13～16号掘立柱建物と29号土坑と重複しているが前後関係は不明である。南北棟と思われるが、東西2間、南北3間を確認しただけで、構造や全体規模は不明である。掘形は円形で、規模は径38cm～53cm、深さ20cm～40cmである。現状の規模は東西5.64m、南北8.40mで、柱間はほぼ等間である。南北方向の方位はN-16°-Eを示す。柱穴からは遺物は出土しなかったが、周辺には近世陶磁器片が散布していた。

## 5 区18号掘立柱建物 (第67図、図版30-2)

5 区台地部の南東傾斜面に位置している。2・3号住居址を切り、20号掘立柱建物と重複しているが前後関係は不明である。掘形は円形で、規模は径41cm～60cm、深さ12cm～64cmで、桁行北側柱の柱穴はしっかりとしているが、南側柱は不明確な部分がある。柱痕が2本確認され、15cm×15cmの角柱である。構造は桁行4間、梁行は西では棟柱は確認されず1間であるが、東では2本の棟柱と思われる柱穴が確認されており、柱間は差があるが3間の可能性もある。全体規模は桁行10.42m、梁行5.60mで、桁行西2間の柱間は2.76mと2.82mでやや大きく、東2間の柱間は2.36mと2.48mでやや狭くなっている。棟方向は東西で、N-100°-Eを示す。柱穴からは平安時代の土器片が31点出土し、周辺には近世陶磁器片が散布している。

## 5 区19号掘立柱建物 (第68図、図版30-2)

19・22～24号掘立柱建物は、ともに5区台地部の南東傾斜面上段に位置し重複関係にある。しかし、建物としては確証を欠いており、対応する2本の柱列を、建物存在の可能性として最大限にみたものである。また、19号は23号土坑と重複し、23号は20号と、24号は20・21号建物と重複している。

19号掘立柱建物の掘形は円形で、規模は径32cm～50cm、深さ32cm～62cmである。柱痕は確認されなかった。a列は3間(7.80m)が確認され、対応するb列は2間(5.25m)が確認された。やや歪んでおり、柱間もやや不均等である。方位はN-109°-Eを示す。遺物は出土しなかった。

## 5 区20号掘立柱建物 (第68図、図版30-2)

5 区台地部の南東傾斜面上段に位置し、21・23・24号掘立柱建物と重複している。掘形は円形で、規模は径30cm～56cm、深さ13cm～48cmである。柱痕は確認されなかった。南東隅の柱穴は確認されなかったが、構造は桁行1間、梁行2間と思われる。全体規模は桁行4.70m、梁行3.80mである。棟方向は南北で、N-10°-Eを示す。遺物は出土しなかった。

## 5 区21号掘立柱建物 (第68図、図版30-2)

20号掘立柱建物と同位置で重複している。掘形は円形で、規模は径24cm～32cm、深さ10cm～16cmである。柱痕は確認されなかった。構造は桁行1間、梁行1間である。全体規模は桁行3.51m、梁行2.62mである。棟方向は東西で、N-102°-Eを示す。遺物は出土しなかった。

5区22号掘立柱建物（第68図、図版30-2）

掘形は円形で、規模は径25cm～35cm、深さ15cm～48cmである。柱痕は確認されなかった。g列・h列ともに3間（5.95m）が確認された。方位はN-120°-Eを示す。遺物は出土しなかった。

5区23号掘立柱建物（第68図、図版30-2）

掘形は円形で、規模は径20cm～26cm、深さ12cm～30cmである。柱痕は確認されなかった。i列・j列ともに3間（4.04m）が確認された。方位はN-113°-Eを示す。遺物は出土しなかった。

5区24号掘立柱建物（第68図、図版30-2）

掘形は円形で、規模は径26cm～38cm、深さ33cm～50cmである。柱痕は確認されなかった。k列・l列ともに3間（8.24m）が確認された。方位はN-104°-Eを示す。遺物は出土しなかった。

5区25号掘立柱建物（第69図、図版29-1）

5区台地部の中央南傾斜面に位置し、12号掘立柱建物と重複する。掘形は円形で、規模は径25cm～42cm、深さ8cm～18cmである。柱痕は確認されなかった。構造は桁行3間、梁行1間で、歪んでいる。全体規模は桁行8.95m、梁行5.62mで、柱間はやや乱れている。棟方向は東西で、N-107°-Eを示す。柱穴からは平安時代の土器片21点が出土し、周辺には中・近世陶磁片が散布していた。

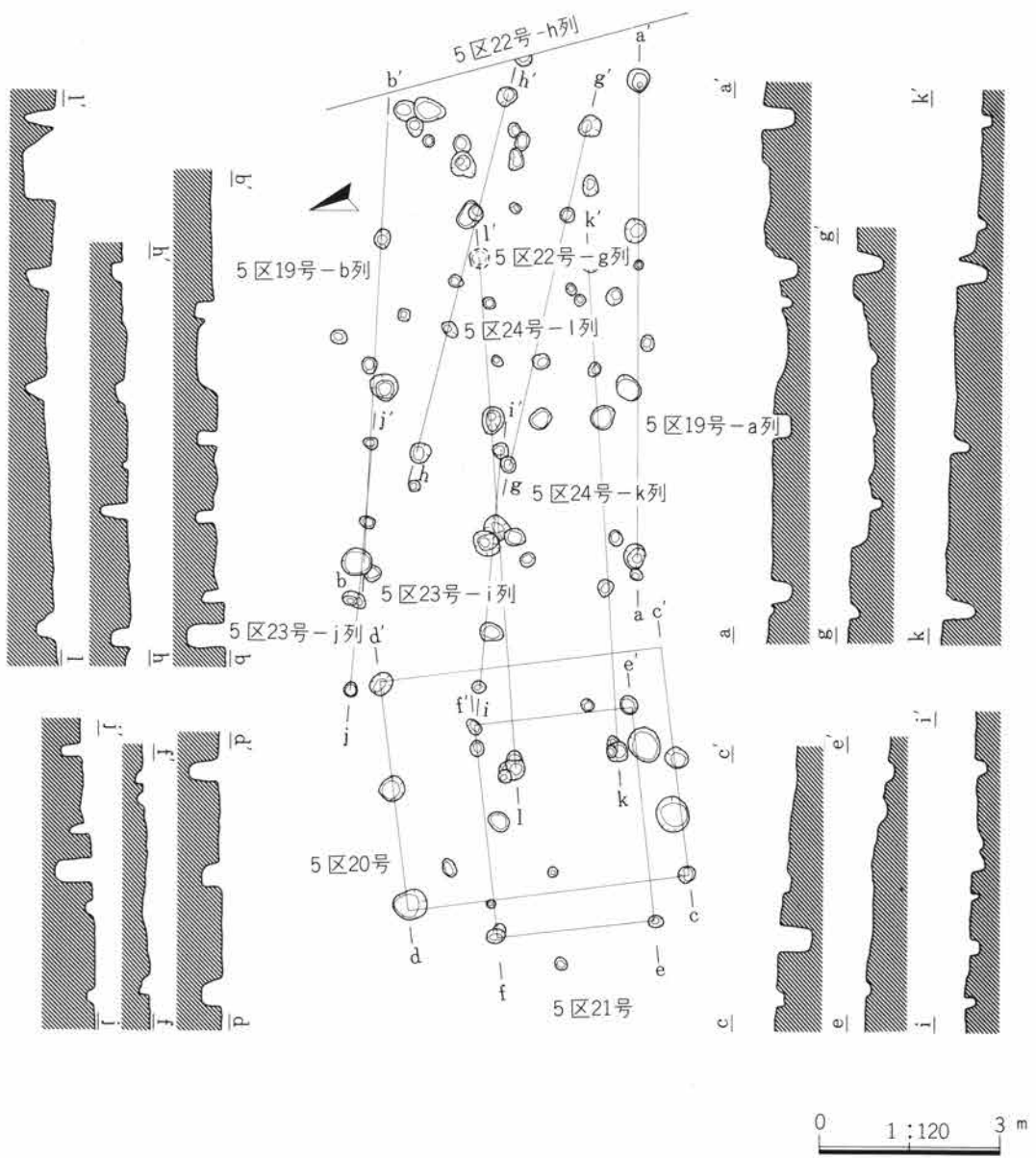
6区1・2号掘立柱建物（第70図、図版31-1）

6区南半微高地部の東端に位置し、同位置で建て替えられている。掘形は1・2号ともに円形で、規模は径28cm～55cm、深さ30cm～70cmである。柱材が西側柱でともに残っており、15cm×15cmの角材であった。1号の構造・規模は桁行2間（5.52m）、梁行1間（3.72m）で、2号は桁行2間（5.52m）、梁行2間（3.90m）で、東柱があり総柱の建物である。棟方向はともに東西で、N-103°-Eを示す。遺物は出土しなかった。

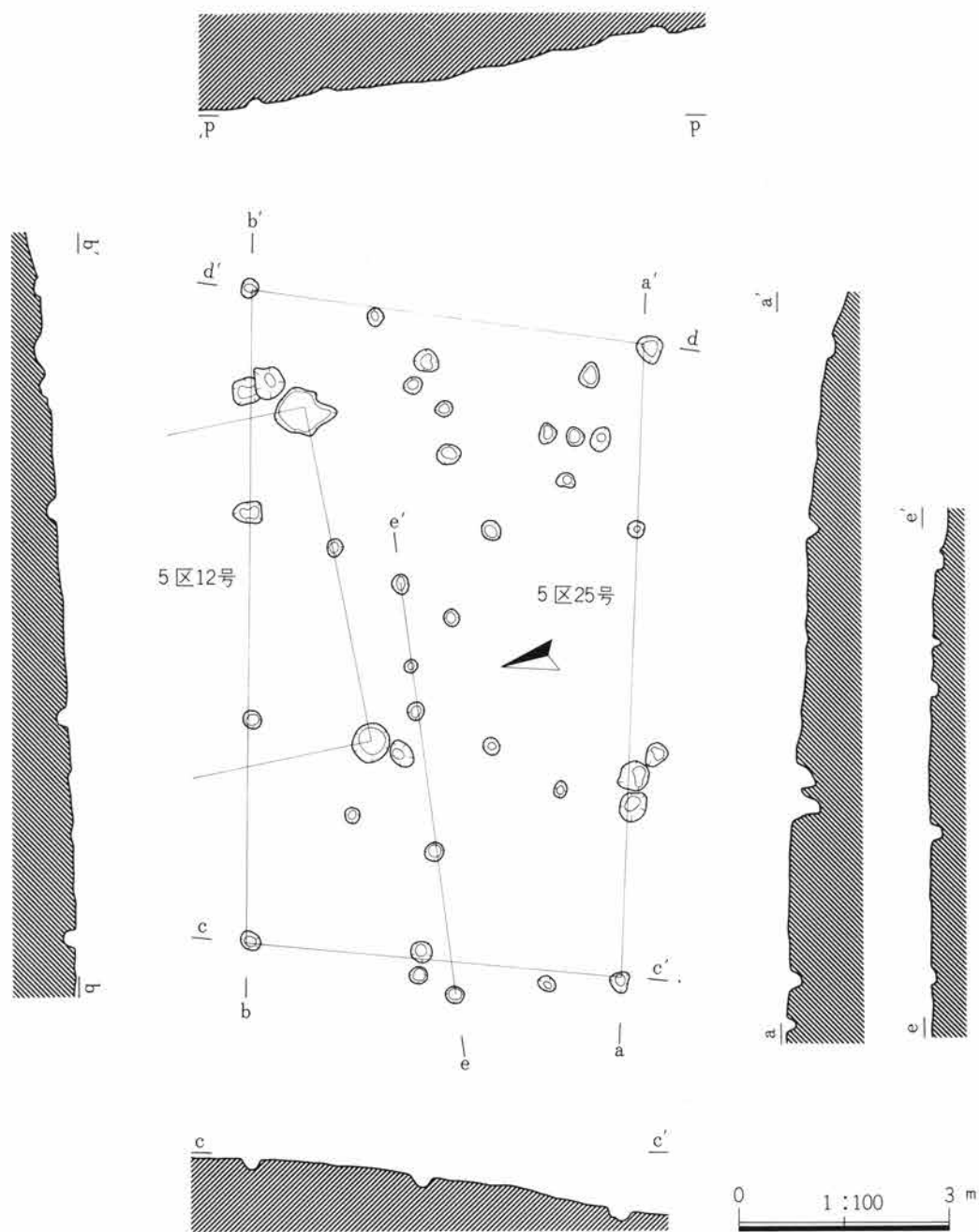
7区1号掘立柱建物（第71図、図版31-2）

7区台地部の東寄りに位置し、東半は道路によって切られ不明である。掘形は円形で、規模は径24cm～38cm、深さ16cm～35cmである。柱痕は確認されなかった。構造は現状で、桁行2間、梁行2間である。規模は桁行6.20m、梁行4.44mである。棟方向は東西で、N-69°-Eを示す。出土遺物はない。

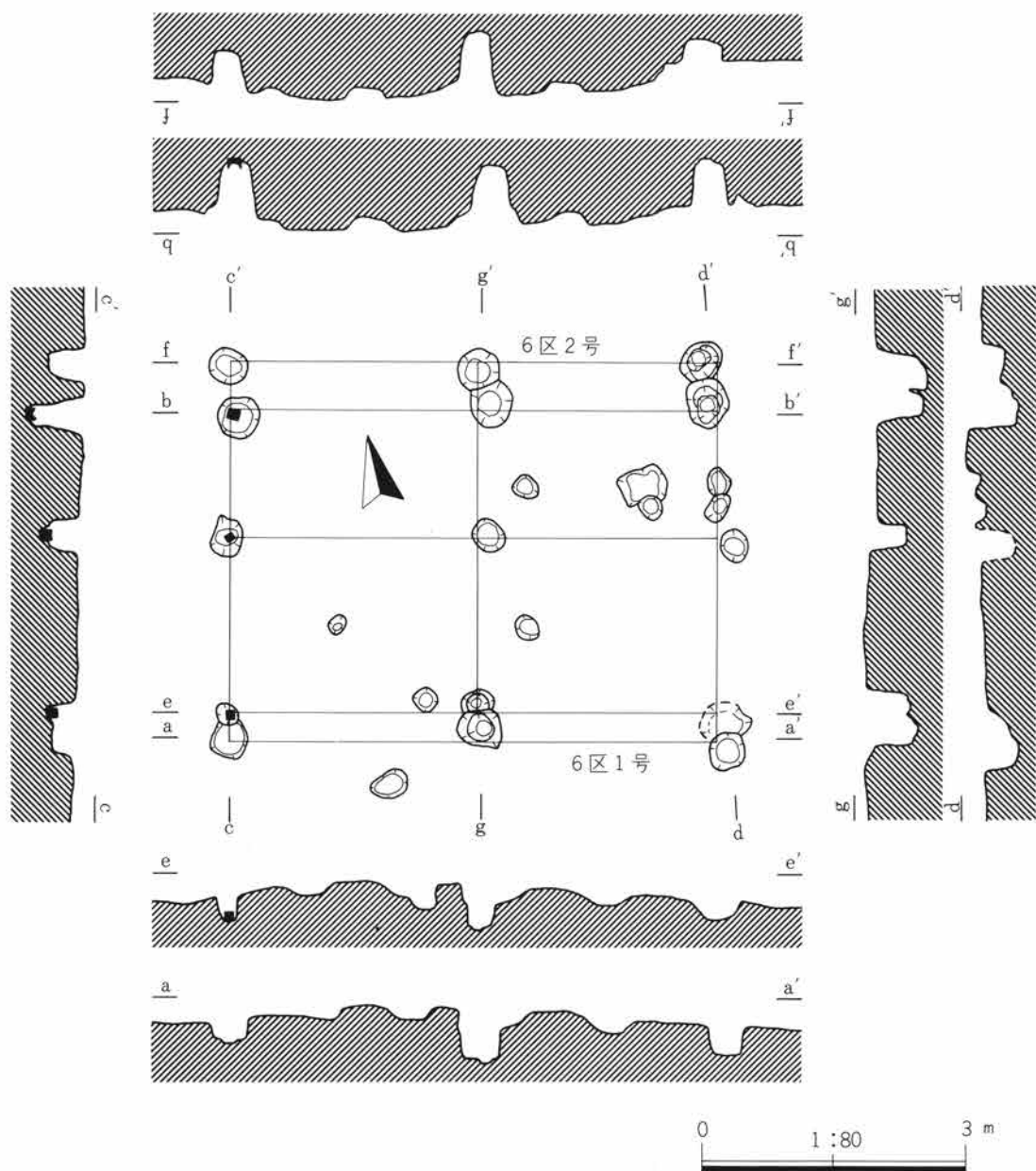
なお、5区台地部では建物としてはまとまらなかったが、柱列が16列確認された。西端では東西に2列、中央では東西1列、南北2列、中央やや北寄りでは東西2列、南北3列、中央やや南寄りでは東西と南北各1列、北東寄りでは南北に4列がある。



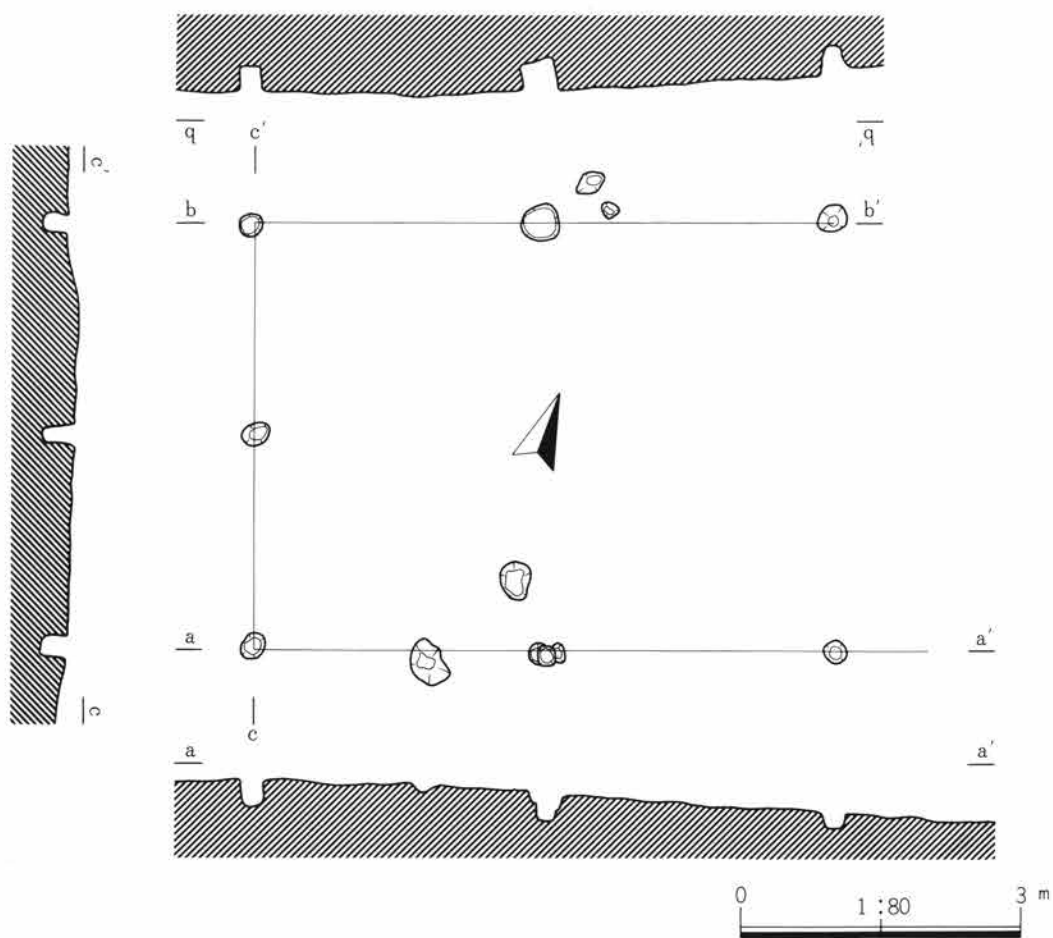
第68图 5区19~24号掘立柱建物



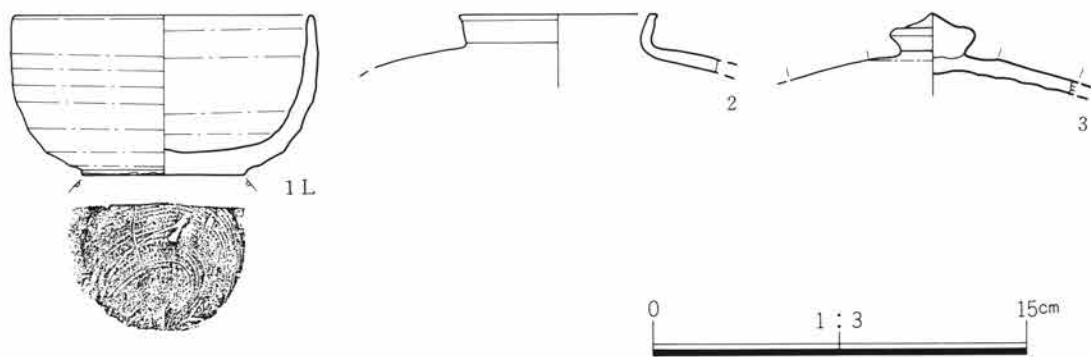
第69図 5区25号掘立柱建物



第70図 6区1・2号掘立柱建物



第71図 7区1号掘立柱建物



第72図 5区掘立柱建物出土遺物（遺物の解説は観察表）

## 4 土 塚

## 5 区 1 号土塚 (第73図、図版32-1)

5 区台地部の中央北寄りに位置し、1号溝と接するが新旧関係不明。平面形は不整長楕円形を呈する。壁は斜めに立ち上がり、底面は起伏がある。規模は長軸1.86m、短軸1.15mで、深さは24cmである。長軸方向はN-16°-Wを示す。本土塚は火を受け、一挙に埋没したかの様である。平安時代の蓋・杯・甕等の完形や大片が多く出土。

## 5 区 2 号土塚 (第50図、図版22・32-2・3)

5 区台地部の中央に位置し、11号住居址と3号土塚を切っている。平面形は不整長楕円を呈する。規模は長軸2.77m、短軸1.14mで、深さは中央部が32cm、北端が58cm、南端が73cmである。長軸方向はN-11°-Wを示す。中央部は平坦で、ローム中で止まっているが、南北両端は径約70cmの規模で、粘土層を掘り込み、粘土層を横にも掘り込んでいる。粘土採取のために、北端を掘った後、南端を掘り進み、南端の開口部に平安時代の甕・鉢・蓋等の大片が多量に投棄されている。

## 5 区 3 号土塚 (第50図、図版22・32-2)

2号土塚の西に位置し、9号住居址を切り、2号土塚によって切られている。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸1.58m、短軸1.28mで、深さは南半が41cmで、北半が79cmである。長軸方向はN-31°-Wを示す。北半は横方向まで粘土層を掘り進んでおり、南半は粘土採掘のための段と思われる。平安時代の杯・碗・甕等の大片とともに、一挙に埋め戻されている。

## 5 区 4 号土塚 (第73図、図版19-2・33-1)

5 区台地部中央南寄りで、7・10号住居址の東に位置する。平面形は不整隅丸長方形を呈し、規模は長軸2.27m、短軸1.21mで、深さは22cmである。長軸方向はN-15°-Eを示す。底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は一挙に埋没した様な状態で、須恵器鉢の小片が出土しているが、時期は新しいと思われる。

## 5 区 5 号土塚 (第73図)

5 区台地部の北西寄りに位置している。ほぼ円形を呈し、径は2.00mである。底面は皿状を呈し、壁はほぼ直に立ち上がる。北東壁に粘土塊がある。縄文時代や平安時代の遺物が混入。時期は新しいと思われる。

## 5 区 6 号土塚 (第73図、図版33-2)

5 区台地部中央やや北西寄りに位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.00m、短軸0.75mで、深さは40cmである。長軸方向はほぼ南北である。底面は平坦で、壁は急角度で立ち上がる。覆土は自然に埋没した様な状態で、摩滅した平安時代の碗・甕が混入していた。

## 5 区 7 号土塚 (第73図、図版33-3)

5 区台地部中央西寄りに位置する。平面形は隅丸長方形を呈する。規模は長軸1.08m、短軸0.55mで、深さは27cmである。長軸方向はほぼ南北を示している。底面は凸凹しており、壁は急角度で立ち上がり、北壁はやや扶れ込んでいる。覆土は黒褐色土でローム小ブロックが極少量混入している。自然に埋没した様相を示している。出土遺物はない。

5区8号土坑（第74図、図版34-1）

5区台地部中央西に位置する。平面形は不整隅丸方形を呈し、規模は長軸0.84m、短軸0.77mで、深さは17cmである。底面は起伏があり、壁はやや斜めに立ち上がる。遺物は出土しなかった。

5区9号土坑（第82図）

5区台地部中央北東寄りに位置し、42号土坑・1号集石によって切られている。平面形は不整形を呈し、規模は長軸 $2.74 + \alpha$ m、短軸2.78mで、深さは54cmである。底面は起伏があり、壁は斜めに立ち上がる。覆土は一挙に埋没している。平安時代の土器片が少量混入している。粘土採掘坑と思われる。寛永通寶一点が出土しているが、上層の出土である。

5区10号土坑（第74図、図版34-2）

5区台地部中央北東寄りで、9・44号土坑の北に位置する。平面形は不整円形を呈し、規模は $1.48\text{m} \times 1.24\text{m} + \alpha$ で、深さは86cmである。覆土は自然に埋没した状態で、平安時代の土器小片が混入、羽口1点が出土している。井戸の可能性もある。

5区11号土坑（第74図、図版34-3）

5区台地部中央やや北寄りで、8号掘立柱建物の南に位置している。円形の掘形の中に桶を設置した土坑である。掘形の規模は径1.18m、深さ20cmで、掘形の底面や側面に厚さ約10cmの粘土を裏込めとして、桶を設置している。底面の粘土には桶のアシの痕跡があり、径は1.02mである。近世陶磁器小片が出土した。

5区12号土坑（第74図、図版35-1）

5区台地部中央東寄りに位置する。13号土坑を切っている。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸1.54m、短軸0.88mで、深さは18cmである。長軸方向はN-59°-Wを示す。底面はやや凸凹しており、東壁部分が一段深く落ち込む。壁は緩やかに立ち上がる。柱穴により南壁が切られている。覆土は乱れており、遺物は出土しなかった。

5区13号土坑（第74図、図版35-1）

12号土坑の北に位置し、切られている。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸1.33m、短軸1.24mで、深さは63cmである。長軸方向はN-16°-Eを示す。東壁部分が一段深く落ち込み、扶れ込んでいる。壁はやや斜めに立ち上がる。覆土は12号土坑と同様乱れている。平安時代の土器小片が3点出土した。

5区14号土坑（第74図、図版35-1）

5区台地部中央東寄りで、12・13号土坑の東に位置する。柱穴によって切られ、東壁部分が攪乱されている。平面形は不整形で、規模は長軸1.12m、短軸1.02mで、深さは12cmである。底面はやや凸凹し、壁は緩やかに立ち上がる。遺物は出土しなかった。

5区15号土坑（第75図、図版35-2）

12~14号土坑の北東に位置する。平面形は不整円形を呈し、規模は径ほぼ0.90mで、深さは10cmである。底面はほぼ平坦で、壁はやや斜めに立ち上がる。覆土は焼土を含み、乱れている。平安時代の土器小片が3点出土した。



**5 区16号土塚** (第75図、図版35-3)

5 区台地部の北東寄りに位置している。平面形は不整隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.12m、短軸0.51m、深さ47cmである。底面はやや丸みを帯び、壁は急角度に立ち上がる。覆土は自然に埋没した様相を示す。平安時代の土器小片が少量出土。

**5 区17号土塚** (第75図、図版36-1・2)

5 区台地部の北東寄りに位置する。平面形は不整形で、規模は長軸2.84m、短軸1.98m、深さは63cmである。底面は平坦で、北壁と西壁の2箇所が、粘土層に沿って横へ掘り進められている。平安時代の土器小片が少量出土。

**5 区18号土塚** (第75図、図版36-3)

5 区台地部中央東寄りに位置し、1号溝を切っている。11号土塚と同様の土塚であるが、西半を確認しただけである。掘形は円形と思われ、径1.44m、深さ48cmである。底面は平坦で、粘土は貼られていないが、桶の痕跡を残している。桶の径は1.02mである。周壁はやや斜めに立ち上がり、粘土が貼られている。覆土には大きな礫が投げ込まれていた。近世陶磁器片と羽口が出土。

**5 区19号土塚** (第75図、図版37-1)

5 区台地部中央南東寄りに位置している。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸1.06m、短軸0.80m、深さ12cmである。長軸方向はN-41°-Eを示す。底面はやや丸みを帯び、壁は緩やかに立ち上がる。覆土は一挙に埋没した様な状態である。遺物は出土しなかった。

**5 区20号土塚** (第76図、図版37-2)

5 区台地部中央南東寄り、19号土塚に近接する。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸0.90m、短軸0.58m、深さ23cmである。長軸方向はN-62°-Eを示す。底面は丸底ぎみで、壁は斜めに立ち上がる。覆土中に小礫2個があり、遺物は出土しなかった。

**5 区21号土塚** (第76図、図版37-3)

19・20号土塚の東に位置している。平面形は不整隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.10m、短軸0.92m、深さ34cmである。底面はやや起伏があり、壁は急角度で立ち上がり、北壁と西壁の一部が抉れ込んでいる。覆土は一挙に埋没した状態である。平安時代の椀大片2個体が出土。

**5 区22号土塚** (第76図、図版38-1)

5 区台地部南東寄りに位置し、2号溝を切っている。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸1.21m、短軸1.12m、深さ14cmである。長軸方向はほぼ南北である。断面は皿状をなしている。覆土は一挙に埋没した状態で、平安時代の土器小片が4点出土した。

**5 区23号土塚** (第76図、図版38-2)

22号土塚の南に位置し、同様に2号溝を切っている。柱穴との前後関係は不明。形状・長軸方向・断面形・覆土とも22号土塚に類似している。規模は長軸1.17m、短軸0.96m、深さ12cmで、遺物は出土しなかった。

**5 区24号土塚** (第76図、図版38-3)

22・23号土塚の南東に位置しており、柱穴によって切られている。平面形は不整楕円形を呈している。規模は長軸1.18m、短軸1.06m、深さ15cmである。長軸方向はN-8°-Eを示す。断面は皿状を

呈している。覆土は一挙に埋没した様相を示している。土壇からは10枚の宋銭が出土した。

5区25号土壇（第75図、図版39-1）

17号土壇の南東に近接している。平面形は不整隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.58m、短軸1.18m、深さは10cmである。底面は凸凹しており、壁は斜めに立ち上がる。覆土は乱れている。平安時代の土器小片が少量出土した。

5区26号土壇（第76図、図版39-2）

5区台地部中央やや北寄りに位置する。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.00m、短軸0.51m、深さは46cmである。長軸方向はN-6°-Wを示す。底面は丸底状を呈し、壁はほぼ直に立ち上がるが、北壁はやや抉れ込んでいる。覆土は自然に埋没した様相を示す。遺物は出土しなかった。

5区27号土壇（第76図、図版39-3）

5区台地部のほぼ中央に位置する。形状や覆土等26号土壇に類似。規模は長軸1.18m、短軸0.64m、深さは58cmである。長軸方向はN-68°-Wを示す。遺物は出土しなかった。

5区28号土壇（第76図、図版39-2）

5区台地部中央やや北寄りに位置し、3号掘立柱建物と重複している。平面形はほぼ円形を呈し、規模は径2.00m、深さ60cmである。底面は平坦で、壁は急角度に立ち上がる。覆土は一挙に埋没した様相を呈している。平安時代の土器小片が多く混入。

5区29号土壇（第77図、図版40-1）

5区台地部のほぼ中央に位置し、13・17号掘立柱建物と重複している。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸3.05m、短軸2.12mで、深さは53cmである。長軸方向はN-76°-Wを示す。底面は平坦で、中央やや西寄りに、径52cm、深さ8cmのほぼ円形をした落ち込みがあり、上部に偏平な河原石2石がのっていた。壁はやや斜めに立ち上がる。覆土は一挙に埋没しており、平安時代の土器小片が多く混入していた。

5区30号土壇（第77図、図版40-2）

5区台地部中央やや北寄りに位置し、4号掘立柱建物によって切られている。平面形は隅丸長方形を呈し、規模は長軸2.50m、短軸2.14m、深さ33cmである。底面は凸凹しており、壁は斜めに立ち上がる。覆土は一挙に埋没しており、平安時代の土器小片1点が混入していた。

5区31号土壇（第77図、図版40-3）

5区台地部中央やや北寄りに位置し、3・4号掘立柱建物によって切られている。平面形は不整隅丸長方形を呈し、規模は長軸0.82m、短軸0.38m、深さ36cmである。底面は平坦で、壁はほぼ直に立ち上がる。覆土は自然に埋没しており、遺物は出土しなかった。

5区32号土壇（第78図）

5区台地部北西隅に位置している。平面形は不整長楕円形を呈し、規模は長軸2.02m、短軸1.30m、深さ33cmである。断面は播鉢状を呈している。遺物は出土しなかった。

5区33号土壇（第78図）

5区台地部西端中央に位置している。平面形は円形を呈し、規模は径1.15m、深さ53cmである。底面は平坦で、壁はほぼ直に立ち上がる。西壁寄りに粘土塊がある。覆土は自然に埋没しており、小礫が

混入し、平安時代の土器小片が1点出土した。

#### 5区34号土塚 (第78図)

5区台地部西端中央に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸2.02m、短軸1.84m、深さ44cmである。長軸方向はほぼ南北である。断面はスリ鉢状を呈し、遺物は出土しなかった。

#### 5区35号土塚 (第78図)

33・34号土塚の南に位置する。平面形は不整隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.62m、短軸1.32m、深さ43cmである。底面は平坦であるが、東端が一段深く落ち込む。壁はほぼ直に立ち上がり、一部が抉れ込んでいる。遺物は出土しなかった。

#### 5区36号土塚 (第78図、図版41-1)

5区台地部中央西寄りに位置する。円形を呈し、桶を設置した土塚である。掘形の規模は径1.20m、深さ51cmで、底面や側面に厚さ約10cmの粘土を貼り付け、桶を設置している。桶の底径は0.88mである。遺物は出土しなかった。

#### 5区37号土塚 (第79図、図版19-2)

5区台地部中央南傾斜面に位置し、7・10号住居址を切り、38号土塚によって切られている粘土採掘塚である。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸4.00m、短軸3.30m、深さ68cmである。長軸方向はN-22°-Eを示す。底面はやや丸みを帯び、壁は緩やかに立ち上がって行く。覆土の状態から傾斜面下位から上方へ掘り進んだ様子が窺える。遺物は出土しなかった。

#### 5区38号土塚 (第79図、図版19-2)

37号土塚の東に位置し、37号土塚・10号住居址を切っている粘土採掘塚である。平面形は不整形で乱れている。規模は長軸3.82m、短軸2.67m、深さ71cmである。長軸方向はN-28°-Eを示す。傾斜面上位に段があり、傾斜面下位に向って深くなっている。土塚内には平安時代の土器が多量に混入しており、7・10号住居址の土器と接合するものもある。

#### 5区39号土塚 (第80図、図版19-2)

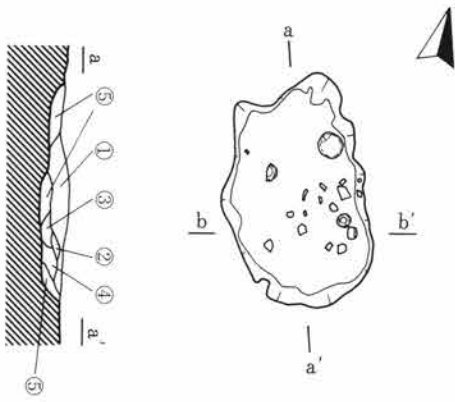
36・37号土塚の東に位置し、10号住居址を切っている粘土採掘塚である。南北に細長い形状を呈しており、土層断面から3基の粘土採掘塚が重複していることが判明した。規模は長軸6.86m、短軸2.03m、深さ72cm~83cmである。長軸方向はN-22°-Eを示す。本土塚はまず、中央部が採掘され、次に南端を採掘し、次に1号溝が構築され、最後に北端が傾斜面上方へ向って採掘されている。本土塚も多くの平安時代の土器が流れ込んでいる。

#### 5区40号土塚 (第50図、図版22・41-203)

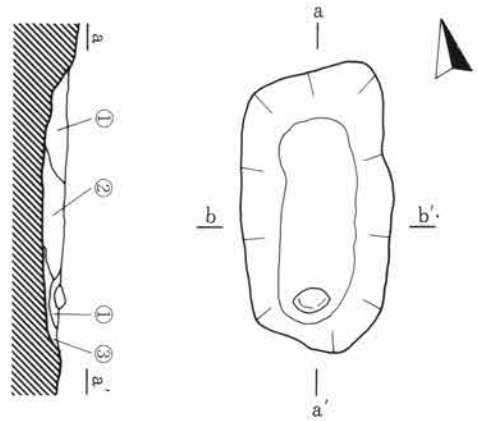
5区台地部の中央に位置し、11号住居址を切っている粘土採掘塚である。平面形は長楕円形を呈し、規模は長軸2.37m、短軸1.57m、深さ75cmである。長軸方向はN-12°-Eを示す。本土塚は径約1.20mの円形を呈する2基の土塚が重複しており、まず、南半の粘土を採掘した後、北半を掘り込んでいる。2基はともに粘土層を横方向まで掘り進んでいる。2基の土塚の上部には平安時代の土器の完形や大片が投棄されている。

#### 5区41号土塚 (第81図、図版15-2・42-1・2)

5区台地部中央東端に位置し、5・6号住居址を切っている粘土採掘塚である。39号土塚と同様の



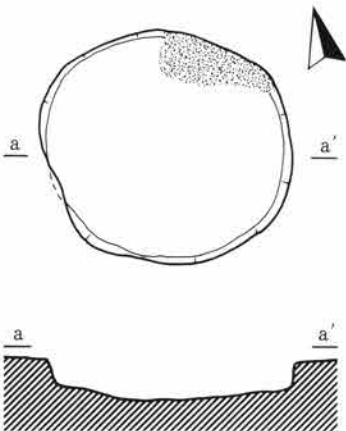
5区1号土坑



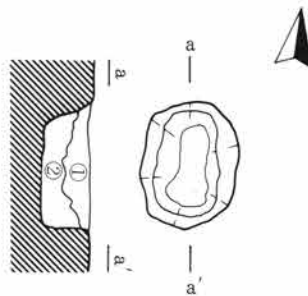
5区4号土坑

- ① 黒褐色土 ロームと焼土が少量混入。
- ② 黄褐色土 黒褐色土が少量混入。粘性が強い。
- ③ 黄褐色粘土 火を受けている。
- ④ 黒褐色土 焼土がやや多く混入し、炭化物も含む。
- ⑤ 黒色土 焼土・炭化物を少量含む。

- ① 暗褐色土 ロームを極少量含む。
- ② 暗褐色土 ロームを多く含む。
- ③ 暗褐色土 粘土を少量含む。

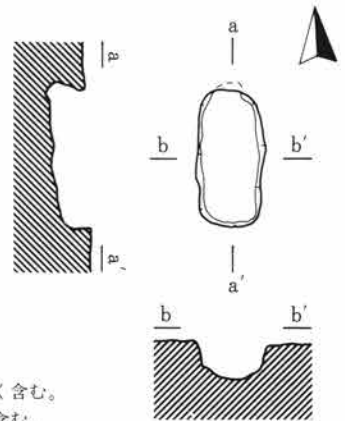


5区5号土坑

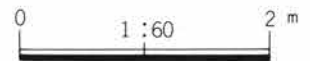


5区6号土坑

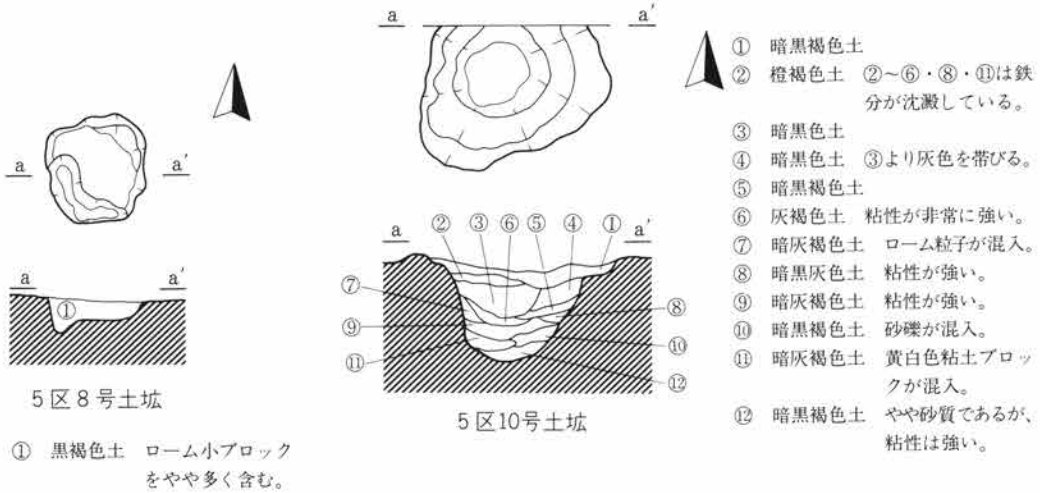
- ① 黒褐色土 ローム小ブロックをやや多く含む。
- ② 暗黄褐色土 ローム小ブロックを多く含む。



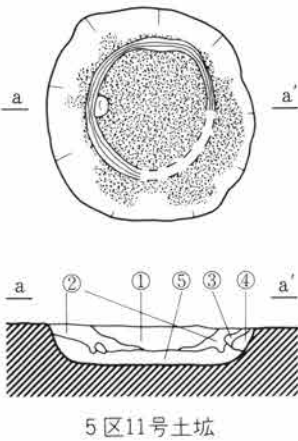
5区7号土坑



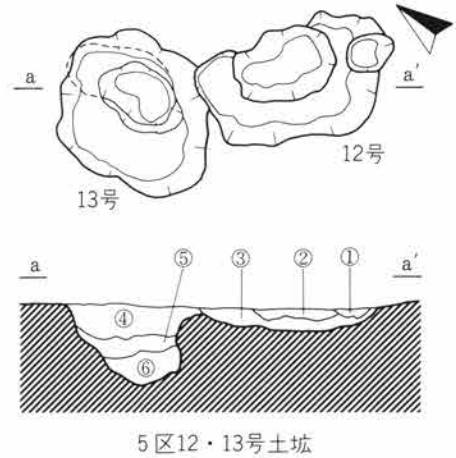
第73図—5区1・4～7号土坑



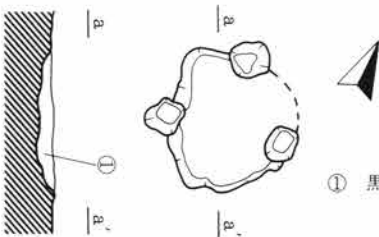
① 黒褐色土 ローム小ブロックをやや多く含む。



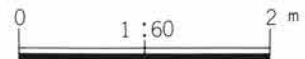
① 暗褐色土 ローム小ブロックを多く含む。  
 ② 暗褐色土 ローム小ブロックを極少量含む。  
 ③ 暗褐色土 ロームを多く含む。  
 ④ 粘土 ⑤ ローム ④・⑤は人為的に張られている。



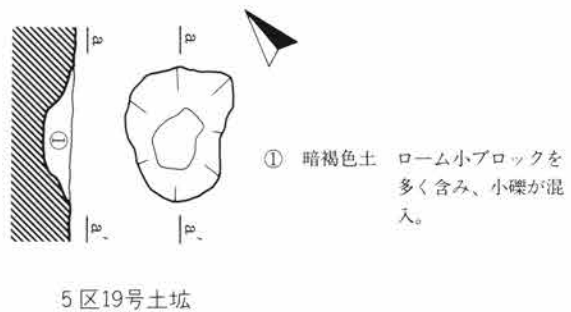
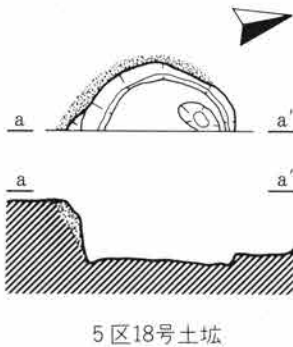
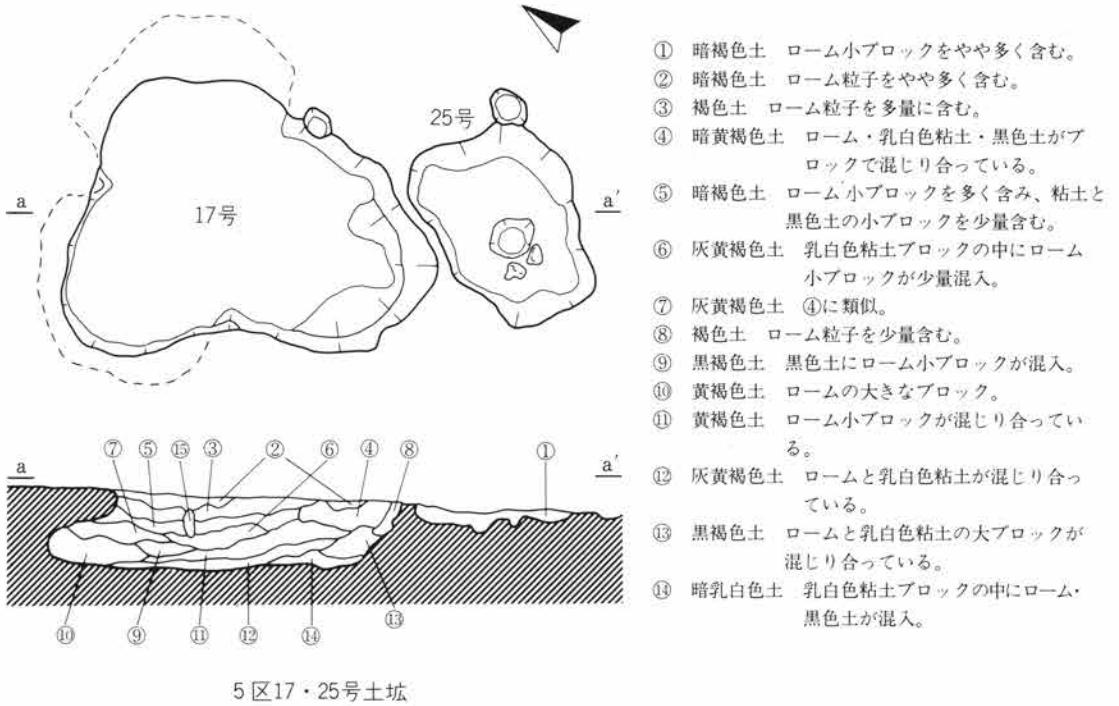
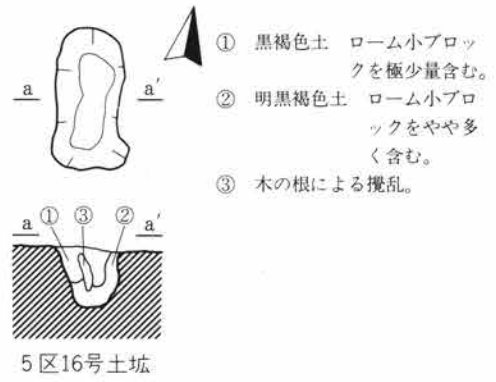
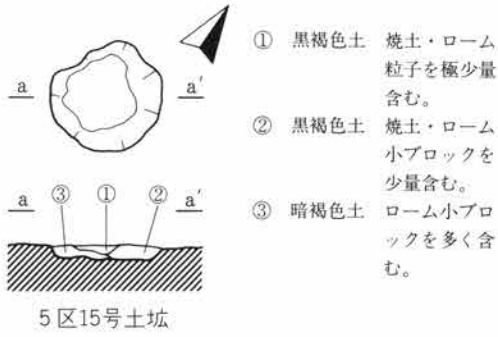
① 暗赤褐色土 焼土小ブロックを多く含み、ローム小ブロックを極少量含む。  
 ② 黒褐色土 ローム小ブロックを少量含む。  
 ③ 暗黄褐色土 ローム小ブロックを多く含む。  
 ④ 黒褐色土 ローム大ブロックを多く含む。  
 ⑤ 黒褐色土 ローム大ブロックをやや多く含む。  
 ⑥ 黒色土 ローム小ブロックをやや多く含む。



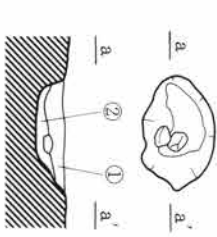
① 黒褐色土 ローム小ブロックを少量含む。



第74図 5区8・10~14号土塚

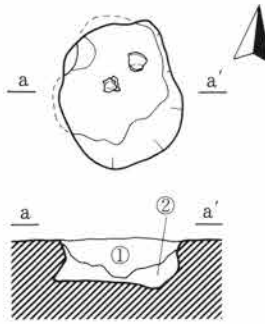


第75図 5区15～19・25号土坑



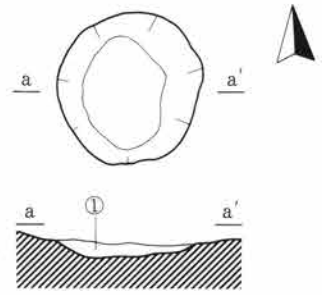
5区20号土塚

- ① 暗褐色土 ローム小ブロックを少量含む。
- ② 暗褐色土 ローム小ブロックを多く含む。



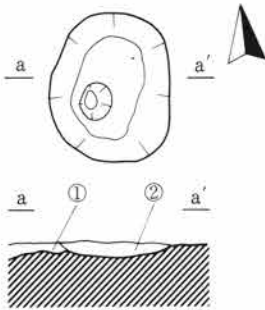
5区21号土塚

- ① 黒褐色土 小石を多く含む。
- ② 黒褐色土 小石を少量含み、ローム小ブロックを多く含む。



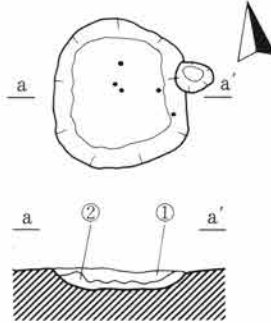
5区22号土塚

- ① 暗褐色土 小石を含み、ローム小ブロックをやや多く含む。



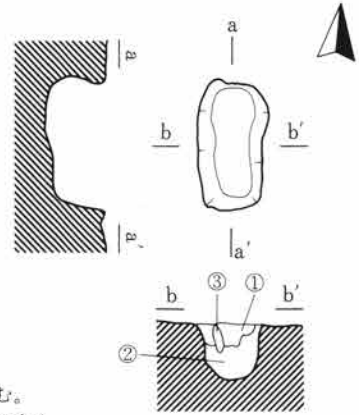
5区23号土塚

- ① 2号溝 暗褐色土
- ② 暗褐色土 小石を含み、ローム小ブロックを少量含む。



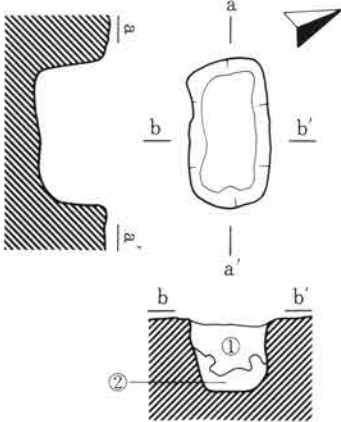
5区24号土塚

- ① 暗褐色土 ローム小ブロックを含む。
- ② 暗褐色土 ローム小ブロックをやや多く含む。



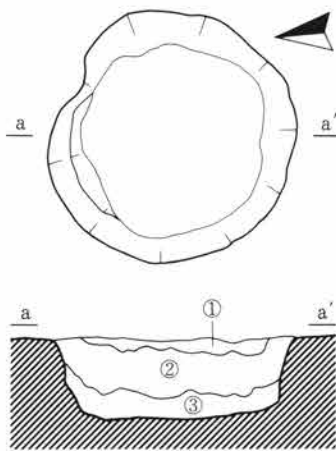
5区26号土塚

- ① 黒色土 ローム粒子を極少量含む。
- ② 黒褐色土 ローム小ブロックを多く含む。



5区27号土塚

- ① 暗褐色土 ローム小ブロックを少量含む。
- ② 暗黄褐色土 ローム小ブロックを多く含む。

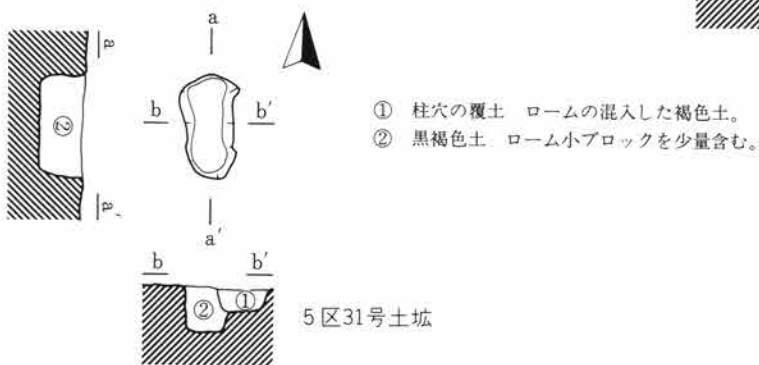
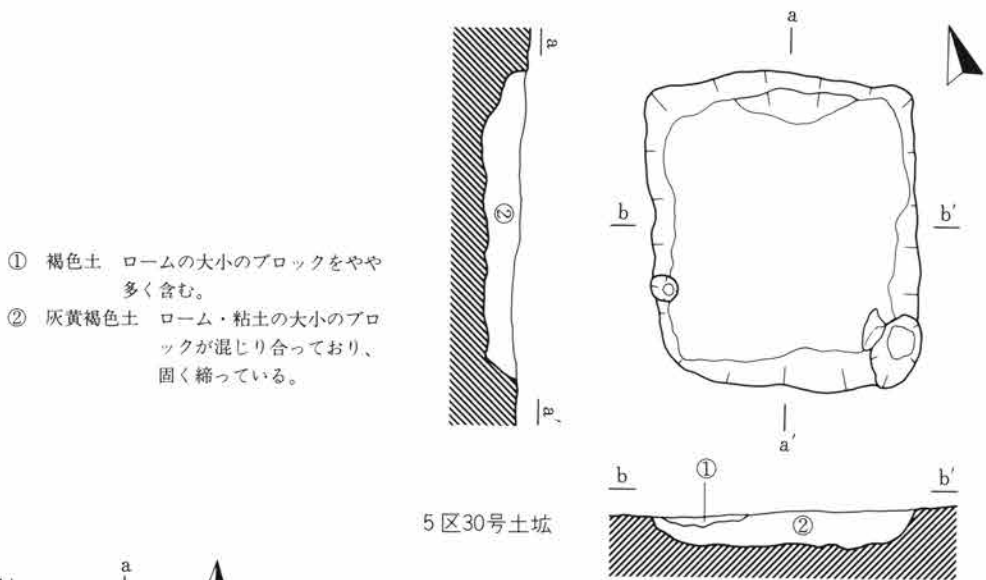
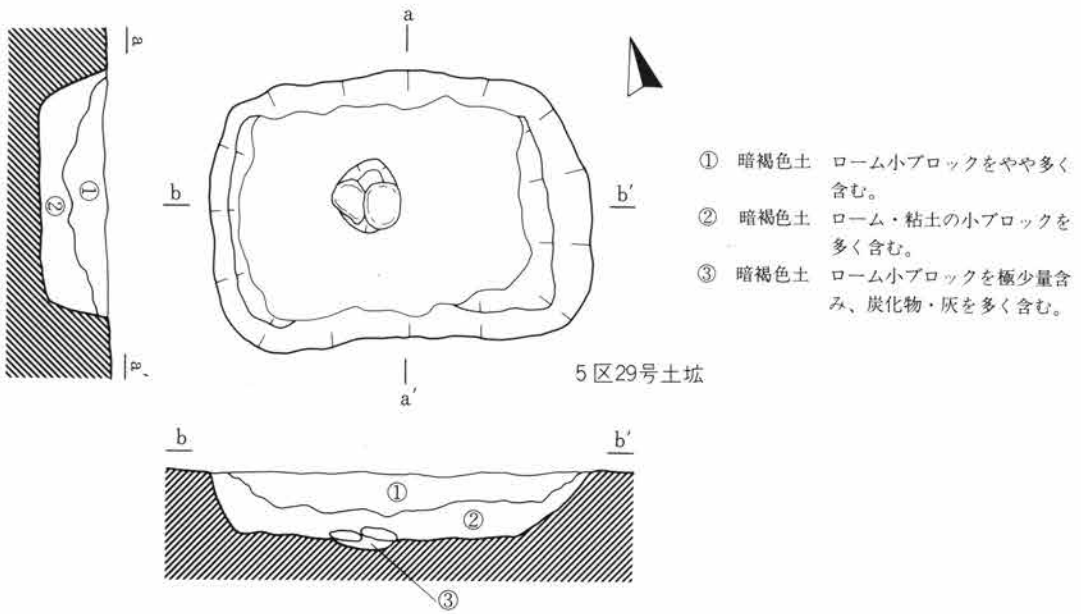


5区28号土塚

- ① 暗褐色土 ローム小ブロックを少量含む。
- ② 黒褐色土 ローム・乳白色粘土小ブロックを多く含む。
- ③ 暗褐色土 ローム・乳白色粘土小ブロックを多く含む。

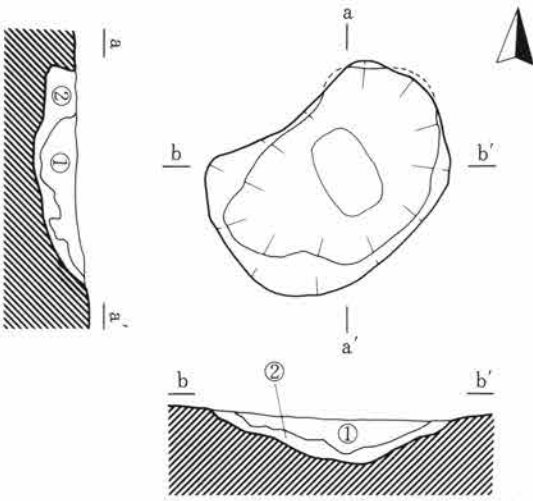


第76図 5区20～24・26～28号土塚



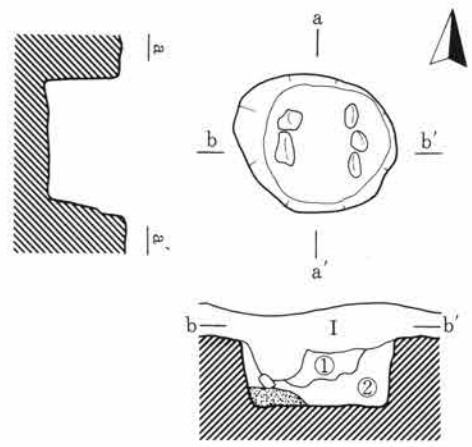
第77図 5区29～31号土坑





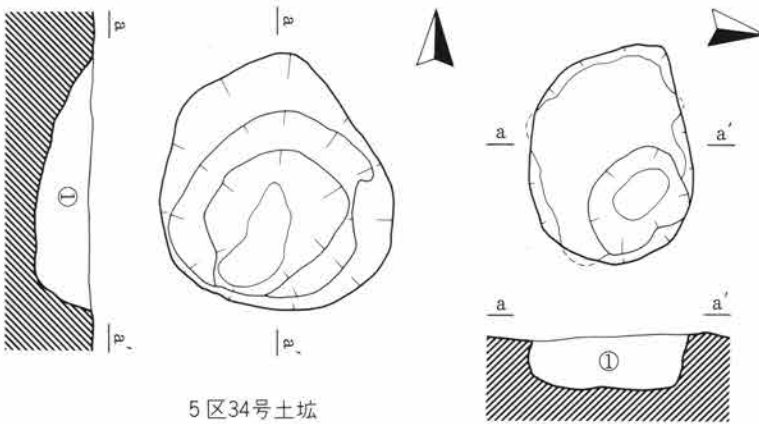
5区32号土塚

- ① 暗褐色土 ローム小ブロックをやや多く含む。
- ② 褐色土 ローム小ブロックを多量に含む。



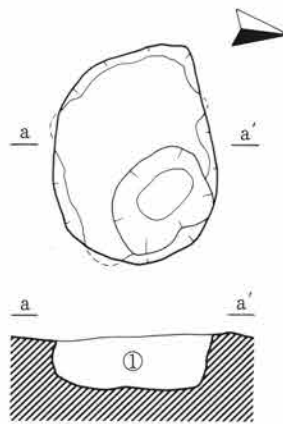
5区33号土塚

- ① 褐色土 ローム小ブロックを少量含む。
- ② 黒褐色土 ローム小ブロックをやや多く含む。



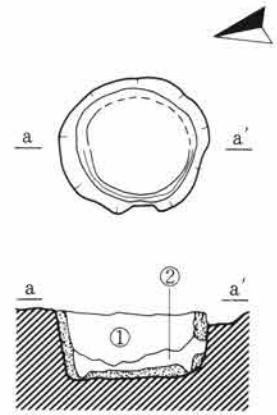
5区34号土塚

- ① 黒褐色土 ローム小ブロックをやや多く含む。



5区35号土塚

- ① 暗褐色土 ローム小ブロックを少量含む。

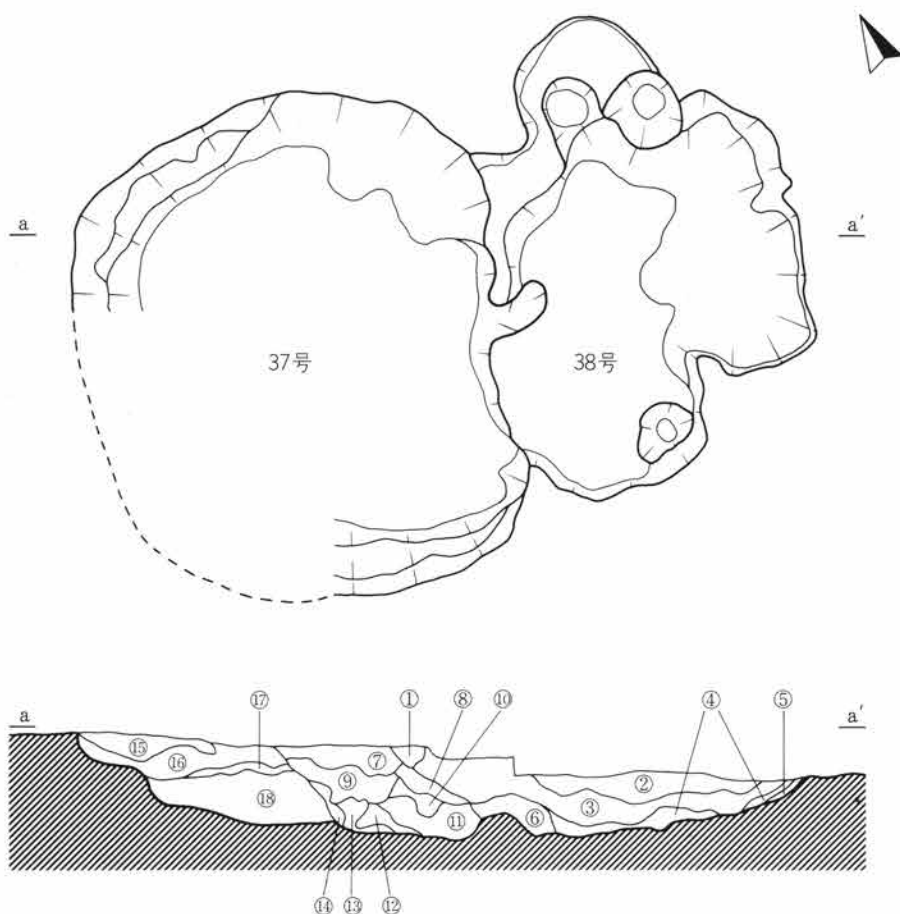


5区36号土塚

- ① 褐色土 ローム・粘土小ブロックを多量に含む。
- ② 暗褐色土 ローム粒子を少量含む。



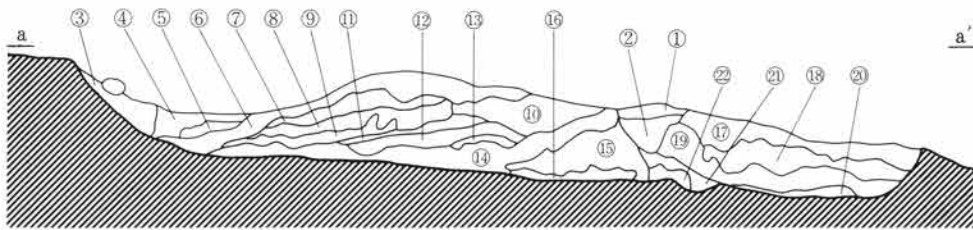
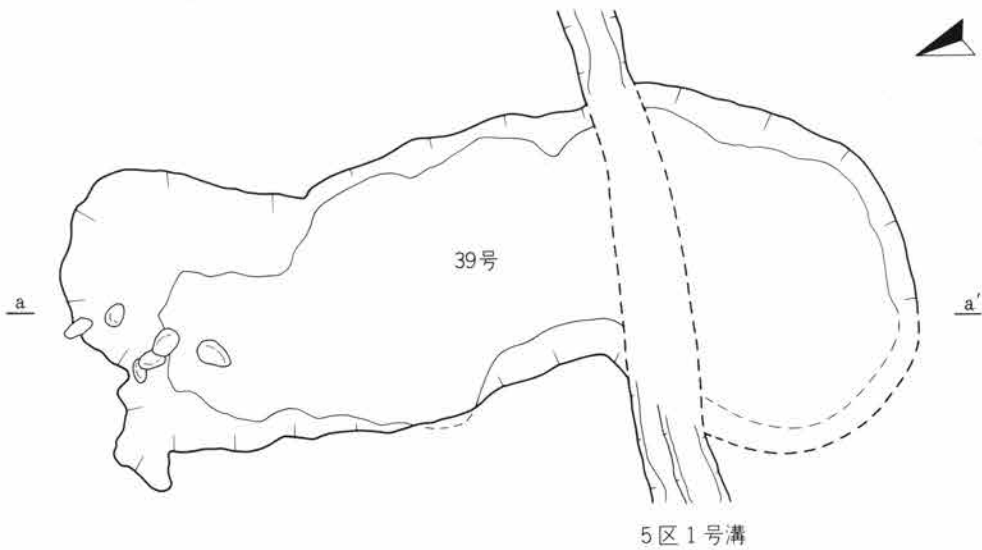
第78図 5区32～36号土塚



- |                                       |                              |                                |
|---------------------------------------|------------------------------|--------------------------------|
| ① ロームと粘土の小ブロックが混じり合っている。              | ⑦ 暗褐色土 ローム・粘土の小ブロックを極少量含む。   | ⑮ ロームと粘土のブロックが混じり合っている。        |
| ② 暗褐色土 ロームと粘土の小ブロックを少量含む、焼土・炭化物を多く含む。 | ⑧ 黒色土 ローム小ブロックを極少量含む。        | ⑯ 黒色土 ローム小ブロックを少量含む。           |
| ③ 暗褐色土 ローム・粘土の小ブロックと焼土を少量含む。          | ⑨ ロームと粘土の大小のブロックが混じり合っている。   | ⑰ ⑮に類似。                        |
| ④ 黒色土 粘土小ブロックを多量に含む。                  | ⑩ 黒色土 ローム小ブロックをやや多く含む。       | ⑱ ローム・粘土・黒色土の大小のブロックが混じり合っている。 |
| ⑤ 黒色土 粘土小ブロックと焼土を極少量含む。               | ⑪ ロームの大小のブロックが堆積。            |                                |
| ⑥ 黒色土 ローム小ブロックを多量に含む。                 | ⑫ ローム・粘土・黒色土の小ブロックが混じり合っている。 |                                |
|                                       | ⑬ 乳白色粘土のブロック。                |                                |
|                                       | ⑭ 乳白色粘土のブロックの中に小礫が多量に混入している。 |                                |

0 1 : 60 2 m

第79図 5区37・38号土坑



## 1号溝

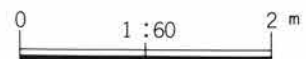
- ① 黒色土 小礫を多く含む。
- ② 黒色土 小礫を多く含む、ロームも少量含む。

## 39号土塚

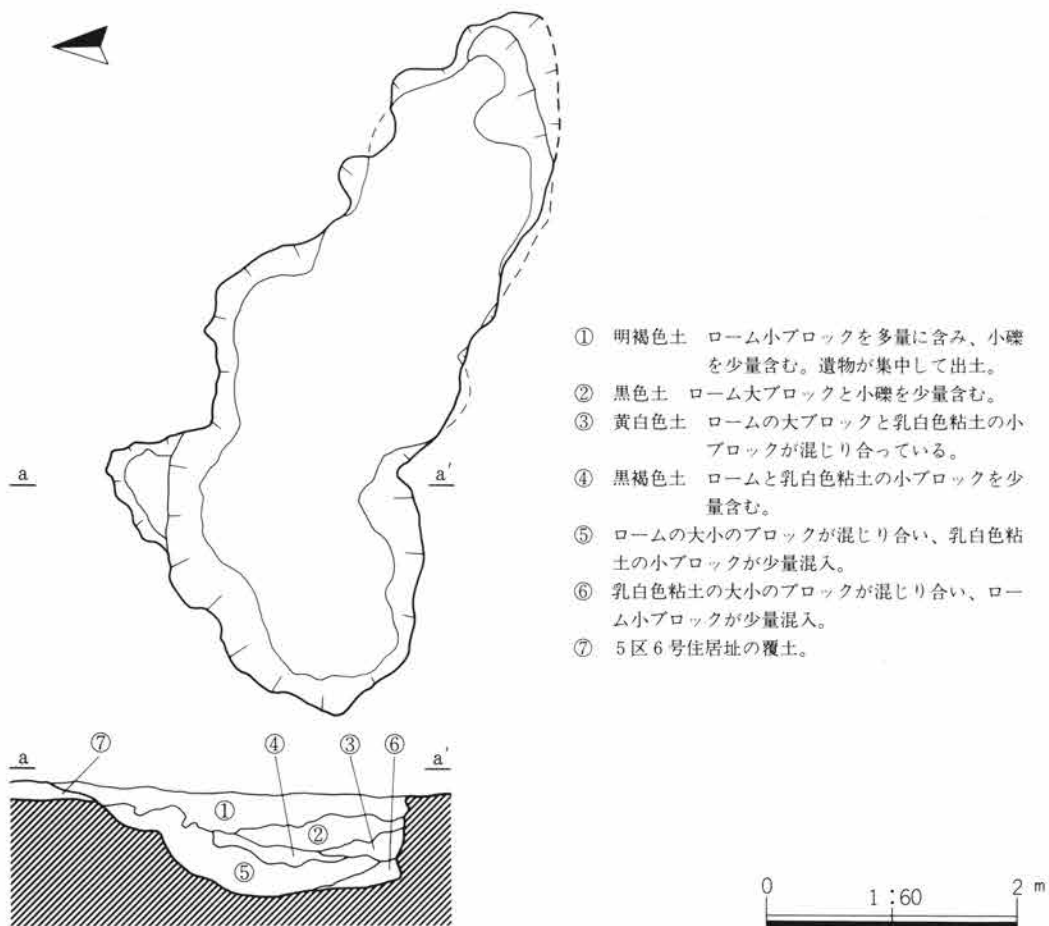
- ③ 黄灰色ローム小ブロック
- ④ ロームと粘土の小ブロックが混じり合っている。
- ⑤ ④に類似するが、ブロックがやや大きい。
- ⑥ ロームと粘土の大小のブロックが混じり合っている。
- ⑦ 暗褐色土 ローム小ブロックを多く含む。
- ⑧ 暗褐色土 ロームと粘土の小ブロックを多く含む。

- ⑨ 乳白色粘土小ブロックが堆積。
- ⑩ 暗褐色土 ローム小ブロックを含み小礫が混入。
- ⑪ 黒色土 ローム粒子を極少量含む。
- ⑫ ローム小ブロックが堆積。
- ⑬ 黒色土 ローム小ブロックを極少量含む。
- ⑭ 乳白色粘土の大小のブロックが堆積している。
- ⑮ 黒色土 小礫を多量に含む、ローム小ブロックを極少量含む。
- ⑯ 黒色土 小礫を少量含む。
- ⑰ 明褐色土 ローム小ブロックを多量に含む。
- ⑱ ロームの大小のブロックが堆積し、やや固く締っている。
- ⑲ ⑱に類似。固く締っていない。

- ⑳ ⑱に類似。非常に固く締っている。
- ㉑ ⑱に類似。
- ㉒ 乳白色粘土ブロック



第80図 5区39号土塚



第81図 5区41号土坑

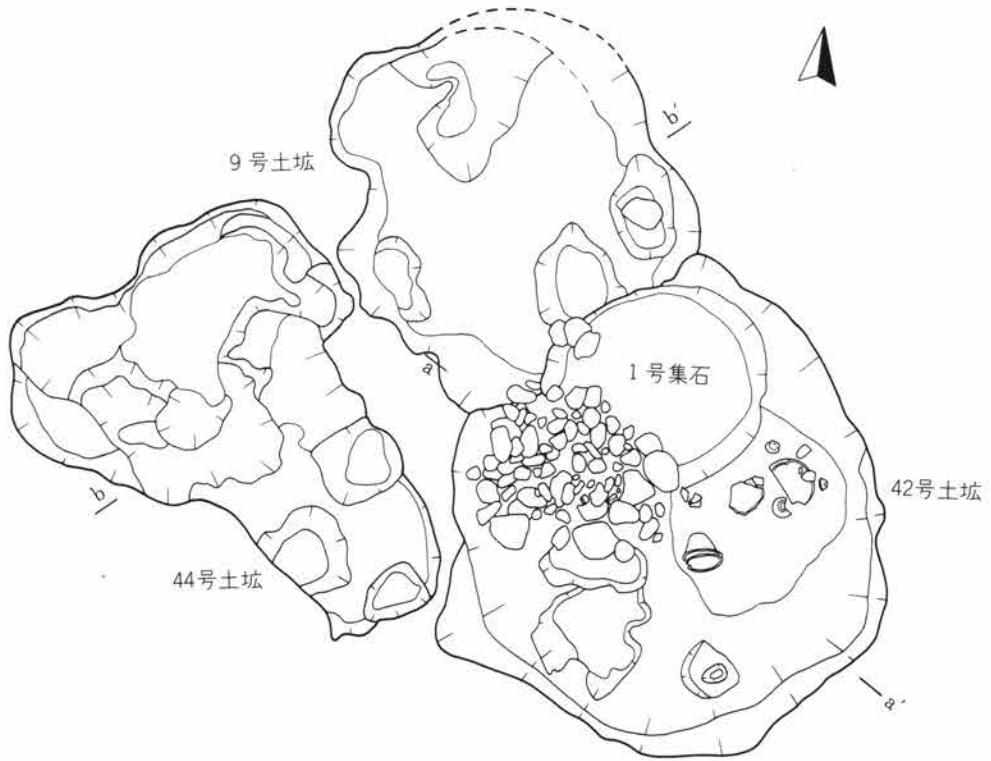
形状で、東西に細長い土坑である。規模は長軸5.78m、短軸2.11m、深さ80cmである。東端より粘土採掘を開始し、西へ順次進行して行ったものと思われる。採掘の工程は5段階ほどと思われ、旧坑を埋めつつ採掘し、一部の排土は5号住居址も埋めている。本土坑の西端上部には、平安時代の土器が多量に投棄されている。

5区42号土坑 (第82図、図版43-1・2)

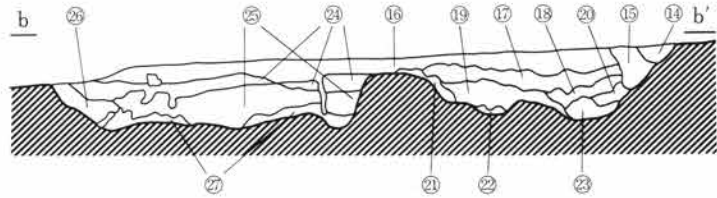
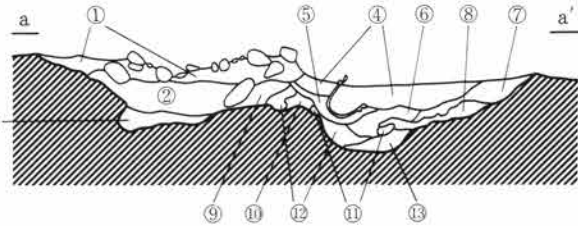
5区台地部北東寄りに位置し、9号土坑を切り、1号集石によって切られている粘土採掘坑である。平面形は不整形円形を呈し、規模は径3.20m~3.48m、深さ62cmである。底面中央が一段低く落ち込み、壁は緩やかに立ち上がる。土坑中央上部に平安時代の土器が多量に投棄されていた。

5区43号土坑 (図版42-3)

5区台地部南西寄りに位置する粘土採掘坑と思われる土坑である。調査時では断面観察と遺物採取を行っただけである。平面形は楕円形を呈するものと思われる、規模は約4.50m×4.00m、深さは1.42mである。底面は丸みを帯び、壁は緩やかに立ち上がる。土坑の南半上部には、平安時代の土器が多量に投棄されていた。本土坑のある5区台地部南西部分には、1号住居址を切る粘土採掘坑も含め、単独的な粘土採掘坑が散在していた。



- ① 黒褐色土 ローム小ブロックが少量混入。
- ② 暗褐色土 砂質。
- ③ 灰黒色土 砂質。
- ④ 黒色土 小礫・ローム粒子を含む。
- ⑤ 黒褐色土 小礫が混入。
- ⑥ 黒色土 ローム小ブロックが混入。
- ⑦ 黒色土とロームの小ブロックが混じり合っている。
- ⑧ 黒褐色土 ローム小ブロックが多量に混入。
- ⑨ ⑦に類似。ロームの量が多い。
- ⑩ 黒褐色土 ローム小ブロックが多量に混入。
- ⑪ ロームブロック
- ⑫ ⑩に類似。黒色を帯びる。
- ⑬ 暗茶褐色土 ローム小ブロックを多量に含む。
- ⑭ 暗褐色土 ローム小ブロックが多量に混入。
- ⑮ ⑬に類似。小礫混入。
- ⑯ 暗褐色土 ローム混入。
- ⑰ 黒色土と粘土の大小のブロックが混じり合い、小礫も混入。
- ⑱ ⑰に類似。ロームブロック混入。
- ⑲ ⑰に類似。小礫を含まない。
- ⑳ 黒色土 ローム小ブロックが多量に混入。



- ⑳ ロームと黒色土のブロックが混じり合っている。
- ㉑ ㉒に類似。黒色土が多い。
- ㉒ ㉒に類似。ロームが多い。
- ㉓ ㉒に類似。ロームの量が多い。
- ㉔ ㉒に類似。ローム小ブロック混入。
- ㉕ ㉒に類似。黒色土の量が多い。
- ㉖ ㉒に類似。



第82図 5区9・42・44号土塚、1号集石

5区44号土坑（第82図、図版43-2）

9・42号土坑の西に位置し、1号溝によって切られている。平面形は不整形で、規模は長軸3.60m、短軸1.84m、深さ50cm～65cmである。底面は凸凹しており、壁は斜めに立ち上がる。遺物は出土しなかった。本土坑は粘土採掘坑と思われる。

なお、9・17・42・44号土坑のある5区台地部北東隅寄りの部分から、西の3・4号掘立柱建物のある中央やや北寄りの部分、南は9号住居址のある中央部にかけて、広範囲に粘土採掘坑が連続して分布していた。

5区45号土坑（第83図）

5区北端の低地部に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸1.48m、短軸1.26m、深さ22cmである。長軸方向はN-38°-Wを示す。底面は南半が一段低く落ち込み、壁は斜めに立ち上がる。遺物は出土しなかった。

6区1号土坑（第83図、図版44-1）

6区北半微高地部中央に位置する。平面形は不整形で、規模は長軸1.05m、短軸0.90m、深さ15cmである。長軸方向はN-29°-Eを示す。底面は南半がやや深くなり、壁は斜めに立ち上がる。覆土は乱れており、遺物は出土しなかった。

6区2号土坑（第83図、図版44-2）

6区北半微高地部やや西寄りに位置する。平面形は不整長楕円形を呈し、規模は長軸2.25m、短軸1.23m、深さ38cmである。長軸方向はN-29°-Eを示す。底面は凸凹しており、壁は斜めに立ち上がる。覆土は一挙に埋没した様な状態である。遺物は出土しなかった。

6区3号土坑（第83図、図版44-2）

2号土坑の南に近接している。平面形は長楕円形を呈し、規模は長軸1.80m、短軸1.25m、深さ42cmである。長軸方向はN-18°-Eを示す。底面は平坦で、壁はほぼ直に立ち上がる。覆土は一挙に埋没した様相を示している。遺物は出土しなかった。

6区4号土坑（第84図、図版44-3）

6区南半微高地部のほぼ中央に位置する。平面形は不整楕円形を呈し、規模は長軸1.45m、短軸0.90m、深さ42cmである。長軸方向はN-75°-Eを示す。底面は丸底状でやや起伏があり、壁は丸みを持ってほぼ直に立ち上がる。覆土は一挙に埋没した様相を示している。遺物は出土しなかった。

6区5号土坑（第84図、図版45-1）

6区南半微高地部の中央やや北寄りに位置する。平面形は不整隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.69m、短軸0.90m、深さ38cmである。長軸方向はN-50°-Eを示す。底面はほぼ平坦で、壁はほぼ直に立ち上がる。覆土は一挙に埋没した様相を示している。遺物は出土しなかった。

6区6号土坑（第84図、図版45-2）

6区南半微高地部の中央やや東寄りに位置している。平面形は不整長楕円形を呈している。規模は長軸1.72m、短軸1.02m、深さ1.00mである。長軸方向はほぼ南北を示している。底面は平坦で、壁は2段に立ち上がり、下半はほぼ直であるが、上半はやや開きを持って立ち上がる。覆土は一挙に埋没した様相を示している。覆土中に打製石斧1点が混入していた。

## 6区7号土塚 (第84図、図版45-3)

6区南半微高地部のほぼ中央に位置する。平面形は不整長楕円形を呈し、規模は長軸1.85m、短軸1.08m、深さ70cmである。長軸方向はN-37°-Wを示す。底面は丸みを帯びており、南半は一段深くなっている。壁は丸みを持って立ち上がる。覆土は一挙に埋没した様相を示す。出土遺物はない。

## 6区9号土塚 (第85図、図版46-1)

6区北半微高地部の南東寄りに位置している。平面形は長楕円形を呈し、規模は長軸1.83m、短軸1.02m、深さ92cmである。長軸方向はN-54°-Wを示している。底面はやや凸凹しており、壁はやや段を持って急角度に立ち上がる。覆土は比較的短時期に埋没したものと思われる。遺物は出土しなかった。

## 6区10号土塚 (第85図、図版46-2)

6区北半微高地部のやや南東寄りに位置している。平面形は不整隅丸長方形を呈し、規模は長軸1.41m、短軸1.04m、深さ33cmである。長軸方向はN-35°-Wを示している。底面は南半が一段深く、北半が浅くなっている。覆土は一挙に埋没した様相を示している。遺物は出土しなかった。

## 6区11号土塚 (第85図、図版46-3)

6区北半微高地部のやや東寄りに位置している。平面形は不整楕円形を呈している。規模は長軸1.65m、短軸1.13m、深さ70cmである。長軸方向はN-17°-Eを示している。底面は東方へ傾斜し、凸凹している。壁は段を持ってほぼ直に立ち上がる。覆土は一挙に埋没した様相を示している。遺物は出土しなかった。

## 6区12号土塚 (第85図、図版47-1)

6区北半微高地部の北東寄りに位置している。平面形は隅丸長方形を呈している。規模は長軸1.50m、短軸0.70m、深さ67cmである。長軸方向はN-20°-Eを示している。底面は凸凹しており、南半中央に径14cm、深さ8cmの小穴がある。壁はやや段を持って急角度に立ち上がる。覆土は比較的短時期に埋没したものと思われる。遺物は出土しなかった。

## 6区13号土塚 (第86図、図版47-2)

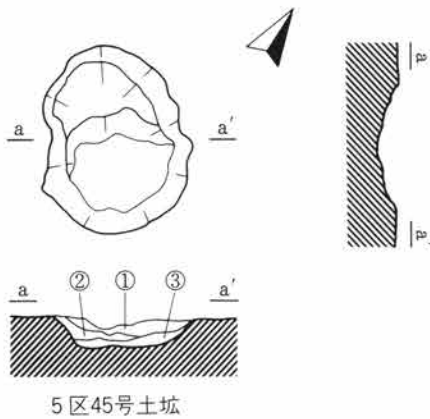
6区北半微高地部の北東寄りに位置している。平面形はほぼ隅丸長方形を呈している。規模は長軸1.14m、短軸0.55m、深さ23cmである。長軸方向はほぼ南北を示している。底面はほぼ平坦で、壁はほぼ直に立ち上がる。覆土は一挙に埋没している。遺物は出土しなかった。

## 6区14号土塚 (第86図)

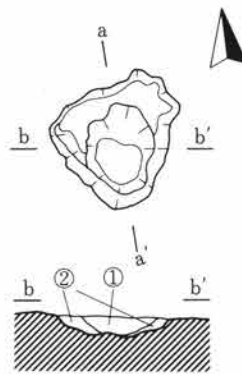
6区北半微高地部の北東寄りに位置している。平面形は孤状をなす不整形を呈している。規模は長軸2.98m、短軸1.30m、深さは平均12cmである。長軸方向はN-91°-Eを示している。底面は全体的に起伏があり荒れている。壁は確認面が浅く、立ち上がり部分を確認しただけである。覆土は乱れており、焼土小ブロックが混入している。遺物は出土しなかった。

## 6区15号土塚 (第86図、図版47-3)

6区南半微高地部の南東寄りに位置している。平面形は長楕円形を呈している。規模は長軸2.29m、短軸1.36m、深さ31cmである。長軸方向はN-9°-Eを示している。底面は丸みを帯び、皿状を呈しており、壁は緩やかに立ち上がっていく。覆土は一挙に埋没した様相を示している。土塚内からは大小



5区45号土坑

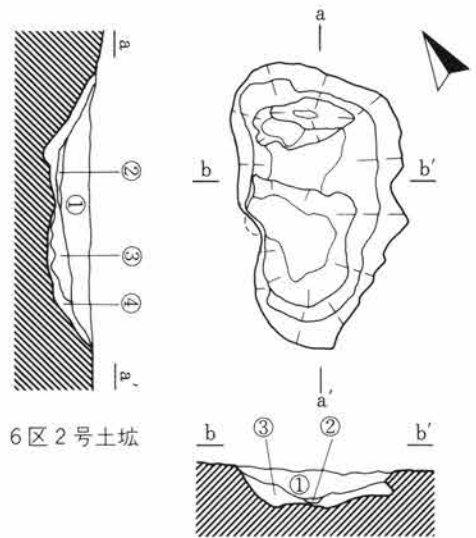


6区1号土坑

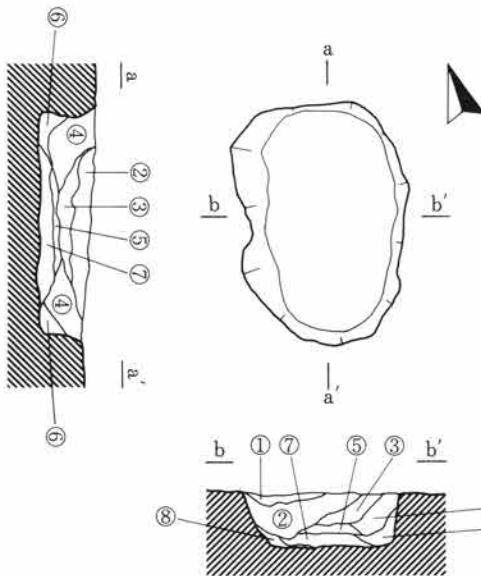
- ① 黒色土 小礫・ローム小ブロックを少量含み、固く締っている。
- ② 暗黄褐色土 ロームブロックを多く含み、固く締っている。

- ① 黒褐色土 ローム小ブロックを極少量含む。
- ② 黒褐色土 ①に類似。やや黒が強い。
- ③ 暗褐色土 ローム小ブロックをやや多く含む。

- ① 黒色土 ローム小ブロックと小礫を少量含む。
- ② 灰黄褐色土 ローム小ブロックが薄く堆積。
- ③ 暗褐色土 ロームの大小のブロックを多量に含む。
- ④ 暗黄褐色土 ローム大ブロックを多量に含む。



6区2号土坑



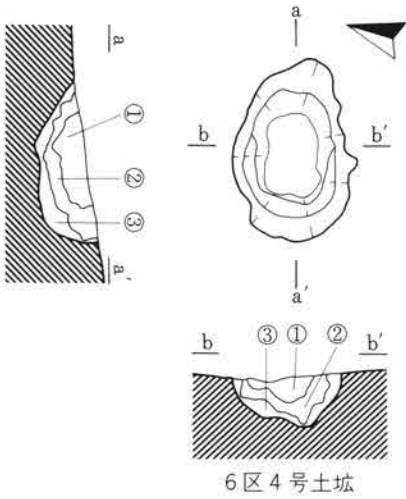
6区3号土坑

- ① 褐色土 小礫を多量に含む。
- ② 黒色土 小礫を多く含み、ローム小ブロックを極少量含む。
- ③ 暗黄褐色土 ロームと黒色土の大小ブロックが混じり合っている。
- ④ 黒色土 ローム小ブロックと小礫を少量含む。
- ⑤ 暗茶褐色土 粘土の小ブロックをやや多く含む。
- ⑥ 暗褐色土 ローム小ブロックをやや多く含む。
- ⑦ 黒色土 ロームと粘土の小ブロックを極少量含む。
- ⑧ 暗黄褐色土 ローム小ブロックを多量に含む。



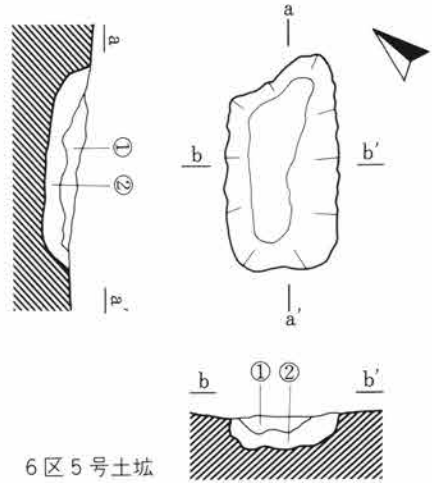
第83図 5区45号、6区1～3号土坑





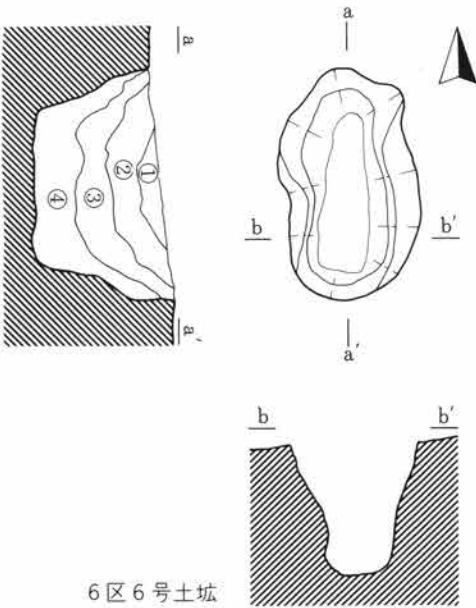
6区4号土塚

- ① 黒色土 ローム小ブロックと炭化物を少量含む。
- ② 暗褐色土 ロームの大小のブロックをやや多く含む。
- ③ 褐色土 ローム大ブロックを多量に含む。



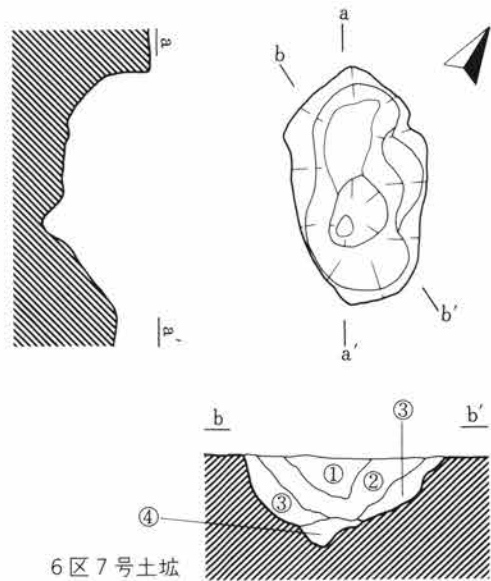
6区5号土塚

- ① 黒色土 ローム小ブロックを極少量含む。
- ② 暗黄褐色土 ローム大ブロックを多量に含む。



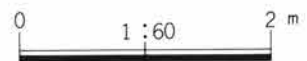
6区6号土塚

- ① 暗褐色土 ロームブロックをやや多く含む。
- ② 黒色土 ローム小ブロックと炭化物を極少量含む。
- ③ 黒色土 ローム小ブロックを多く含む。
- ④ 暗褐色土 ロームと粘土の大小のブロックを多量に含む。

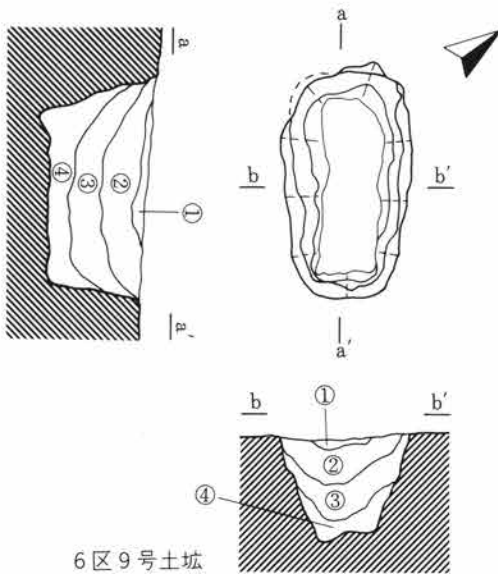


6区7号土塚

- ① 褐色土 ロームと粘土の小ブロックを多く含む。
- ② 黒色土 ロームと粘土の小ブロックを少量含む。
- ③ 暗黄褐色土 ローム大ブロックを多量に含む。
- ④ 黒色土 ローム小ブロックを極少量含む。

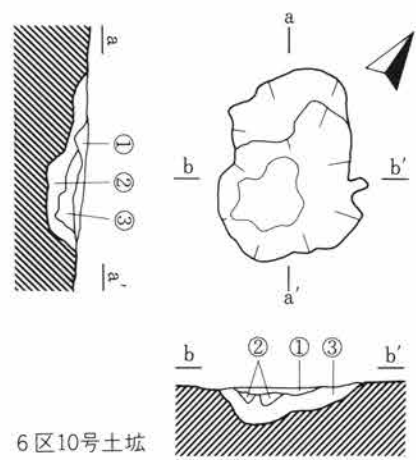


第84図 6区4～7号土塚



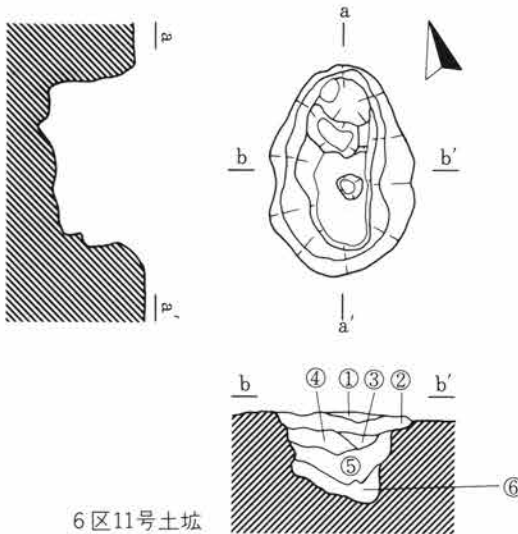
6区9号土坑

- ① 黒褐色土 ロームの大小のブロックを多く含む。
- ② 黒色土 ローム小ブロックを極少量含む。
- ③ 黒色土 壁寄りの部分にローム小ブロックを含む。
- ④ 黒色土 ③に類似。粘土小ブロックが混入。



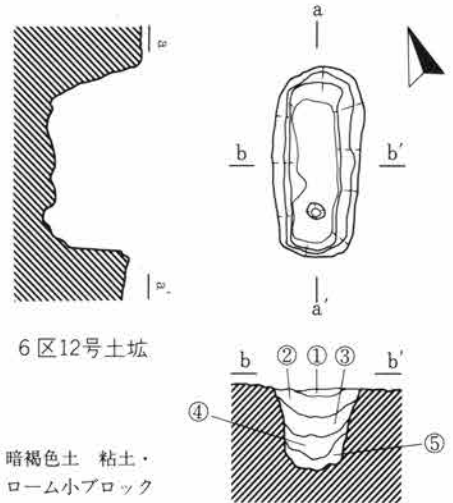
6区10号土坑

- ① 暗褐色土 ローム小ブロックをやや多く含む。
- ② 黒色土 ローム小ブロックを極少量含む。
- ③ 暗褐色土 ロームの大小のブロックを多く含む。



6区11号土坑

- ① 暗褐色土 ローム小ブロック・炭化物を多く含む。
- ② 暗褐色土 ローム小ブロック・炭化物を極少量含む。
- ③ 褐色土 ローム大ブロックを多く含む。
- ④ 黒色土 ローム小ブロックをやや多く含む。
- ⑤ 黒色土 壁寄りの部分にローム小ブロックを含む。
- ⑥ 黒色土 ロームと粘土の大ブロックを多く含む。

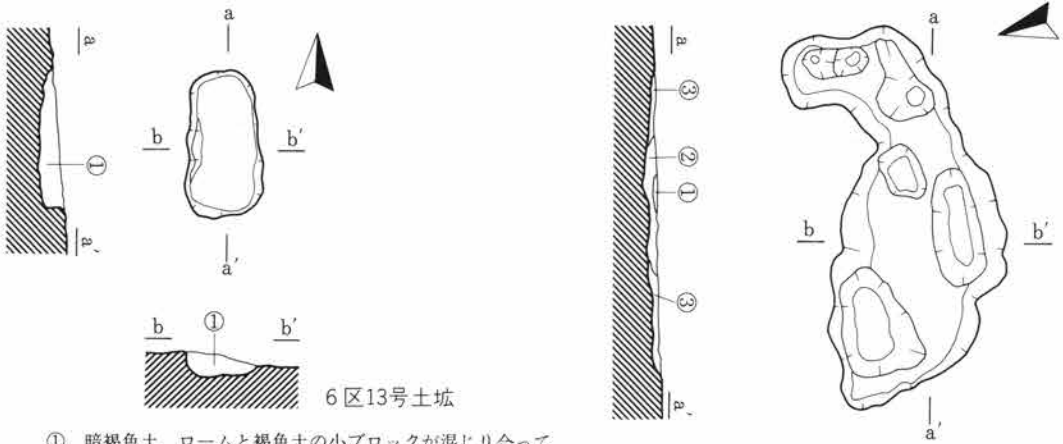


6区12号土坑

- ① 暗褐色土 粘土・ローム小ブロックをやや多く含む。
- ② 黒色土 ロームと粘土の小ブロックをやや多く含む。
- ③ 黒色土 ローム小ブロックをやや多く含む。
- ④ 黒色土 壁寄りにローム小ブロックを多く含む。
- ⑤ 黒色土 壁寄りにローム大ブロックを多く含む。



第85図 6区9～12号土坑

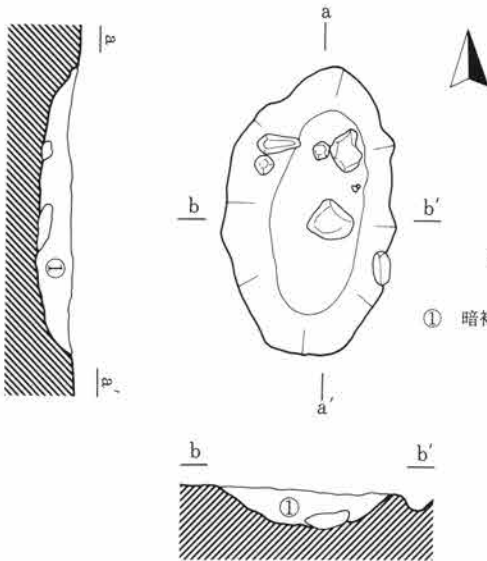


6区13号土塚

6区14号土塚

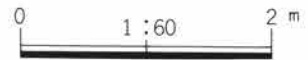
① 暗褐色土 ロームと褐色土の小ブロックが混じり合っている。

- ① 明褐色土 ロームブロックをやや多く含み、焼土小ブロックを少量含む。
- ② 暗褐色土 ローム小ブロックをやや多く含む。
- ③ 黒色土 ローム小ブロックを少量含む。



6区15号土塚

① 暗褐色土 ロームの大小のブロックを多量に含む。



第86図 6区13～15号土塚

の礫が底面に付いた状態で出土した。

6区の1・14号土塚を除く、他の土塚の覆土中にはFPが混入していた。なお、8号土塚は調査の結果、6区1号井戸となり、欠番とした。

7区1号土壇 (第87図、図版48-1)

7区北端台地部のやや南西寄りに位置している。平面形はほぼ円形を呈し、一部木の根により攪乱されている。規模は径1.02m、深さ25cmである。底面はやや凸凹しており、壁は急角度に立ち上がる。覆土は自然に埋没した様相を示している。遺物は出土しなかった。

7区2号土壇 (第87図、図版48-2)

7区北端台地部のやや南西寄りで、1号土壇の南に位置している。平面形は楕円形を呈し、北壁を柱穴状の穴により切られている。規模は長軸 $1.25 + \alpha$ m、短軸1.02m、深さ44cmである。長軸方向はN-10°-Wを示している。底面は丸みを帯び、壁は斜めに立ち上がっていく。覆土には小礫が混入し、一挙に埋没した様相を示している。

7区3号土壇 (第87図)

7区北端台地部の中央やや北東寄りに位置している。平面形は不整隅丸長方形を呈している。規模は長軸1.47m、短軸0.83m、深さ82cmである。長軸方向はN-28°-Wを示している。底面は平坦で、やや西方へ傾斜している。壁はほぼ直に立ち上がる。覆土は一挙に埋没した様相を示しており、遺物は出土しなかった。

7区4号土壇 (第87図、図版48-3)

7区北端台地部のほぼ中央に位置している。平面形は不整円形を呈している。規模は径1.04cm、深さ10cmである。底面はやや凸凹しており、壁は斜めに立ち上がる。覆土は乱れている。遺物は出土しなかった。

7区5号土壇 (第88図)

7区北端台地部の東端に位置している。平面形は不整形を呈している。規模は長軸1.00m、短軸0.84m、深さ13cmである。長軸方向はN-36°-Wを示している。底面は起伏があり、壁は斜めに立ち上がる。覆土はやや乱れており、遺物は出土しなかった。

7区6号土壇 (第88図、図版49-1)

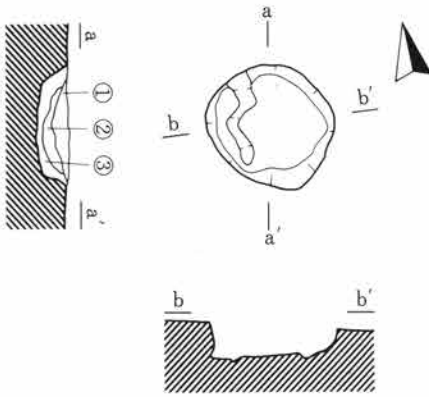
7区北端台地部の東端で、5号土壇の北に位置している。平面形は不整形で乱れている。規模は長軸3.40m、短軸2.73m、深さ52cmである。長軸方向はN-13°-Wを示している。断面は段を持ちながら挿鉢状に落ち込んでおり、凸凹している。本土壇は北東寄りにローママウンドのある、風倒木痕であり、南西方向へ倒木したものである。

7区7号土壇 (第88図、図版49-2)

7区北端台地部のほぼ中央に位置している。平面形は不整形を呈し、乱れている。規模は長軸0.97m、短軸0.88m、深さ24cmである。長軸方向はN-85°-Wを示している。底面は起伏があり乱れている。壁は斜めに立ち上がる。覆土も乱れており、遺物は出土しなかった。

7区8号土壇 (第89図、図版49-3)

7区北端台地部の中央やや西寄りに位置している。平面形は極めて乱れた不整形を呈している。規模は4.58m×4.20m、深さ28cmである。底面はやや起伏のある皿状をなし、壁はやや段を持って緩やかに立ち上がる。本土壇はローママウンドは見られないが、6号土壇と同様風倒木痕と思われ、7号土壇も本土壇の一部である可能性がある。



7区1号土塚

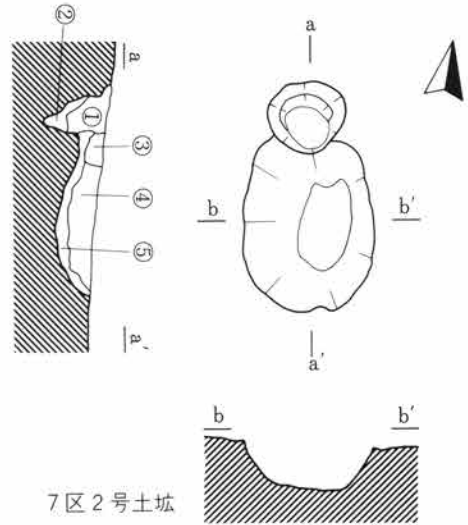
- ① 暗褐色土 小礫を多く含み、ローム小ブロックを極少量含む。
- ② 暗褐色土 小礫とローム小ブロックを少量含む。
- ③ 明褐色土 ローム粒子を多量に含む。

7区2号土塚

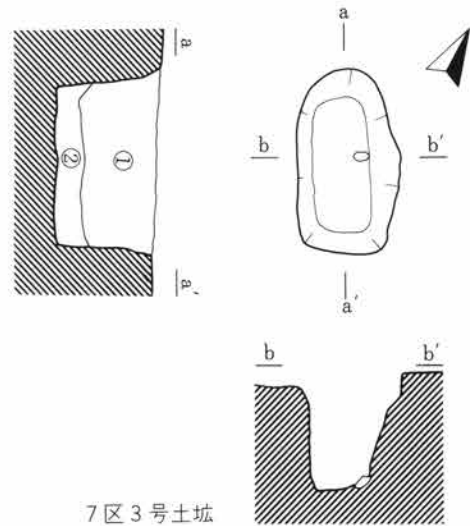
- ① 暗褐色土 ②とともに柱穴の覆土。ローム小ブロックを含む。
- ② 暗黄褐色土 ロームブロックが詰っている。
- ③ 暗褐色土 ローム小ブロックを少量含む。
- ④ 暗褐色土 小礫を含み、ローム小ブロックを極少量含む。
- ⑤ 明褐色土 小礫を含み、ローム小ブロックを多く含む。

7区3号土塚

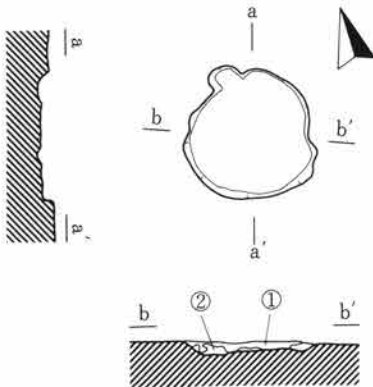
- ① 黒色土 ローム小ブロックを極少量含む。粘性強い。
- ② 黒褐色土 ローム小ブロックをやや多く含む。粘性強い。



7区2号土塚

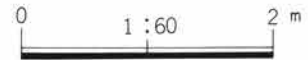


7区3号土塚

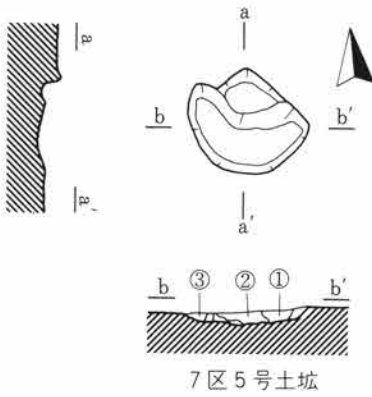


7区4号土塚

- ① 暗褐色土 小礫・ローム小ブロックを少量含む。
- ② 暗褐色土 小礫を極少量含み、ローム小ブロックを多く含む。

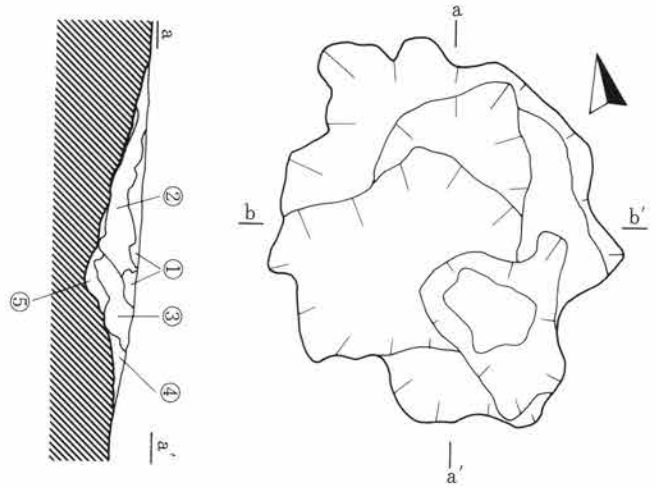


第87図 7区1～4号土塚



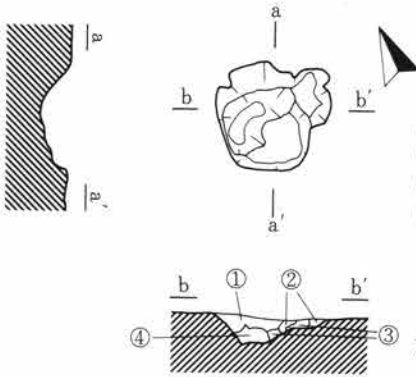
7区5号土坑

- ① 暗褐色土 やや砂質土。
- ② 黒褐色土 ローム小ブロックを少量含む。
- ③ 暗褐色土 小礫・ローム小ブロックを少量含む。



7区6号土坑

- ① 黄褐色ローム
- ② 黒色土 ローム小ブロックが極少量混入。
- ③ 黒褐色土 ローム粒子が多く混入。
- ④ 暗黄褐色土 ローム小ブロックが多く混入。
- ⑤ 暗黄褐色土 ロームと黒色土の小ブロックが混じり合っている。

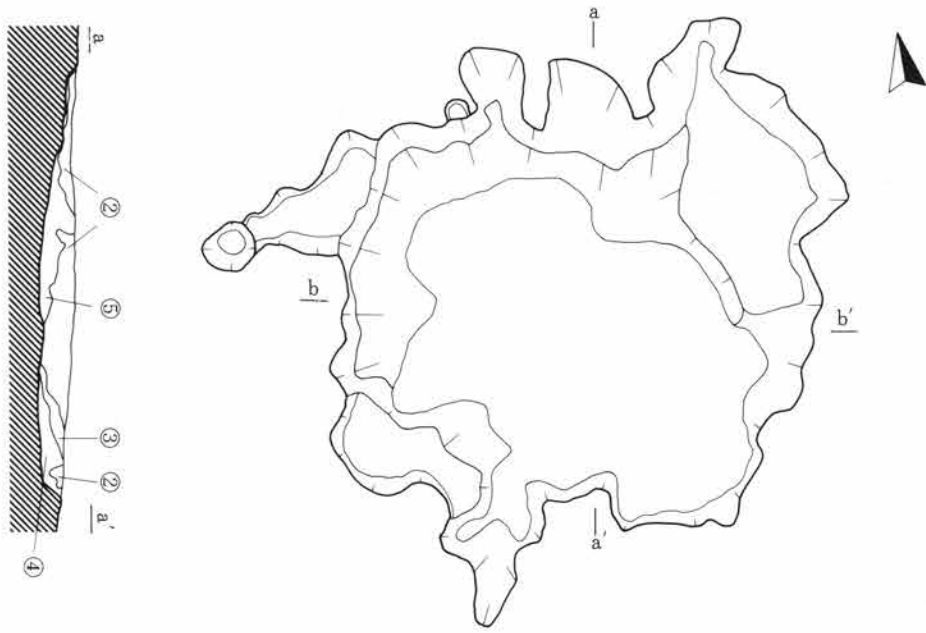


- ① 暗褐色土 ローム小ブロックを極少量含む。
- ② 黒褐色土 ローム小ブロックを極少量含む。
- ③ 明褐色土 ローム小ブロックを多く含む。
- ④ 暗黄褐色土 ローム粒子を多量に含む。

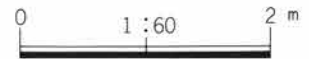
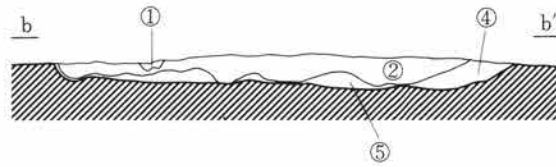
7区7号土坑



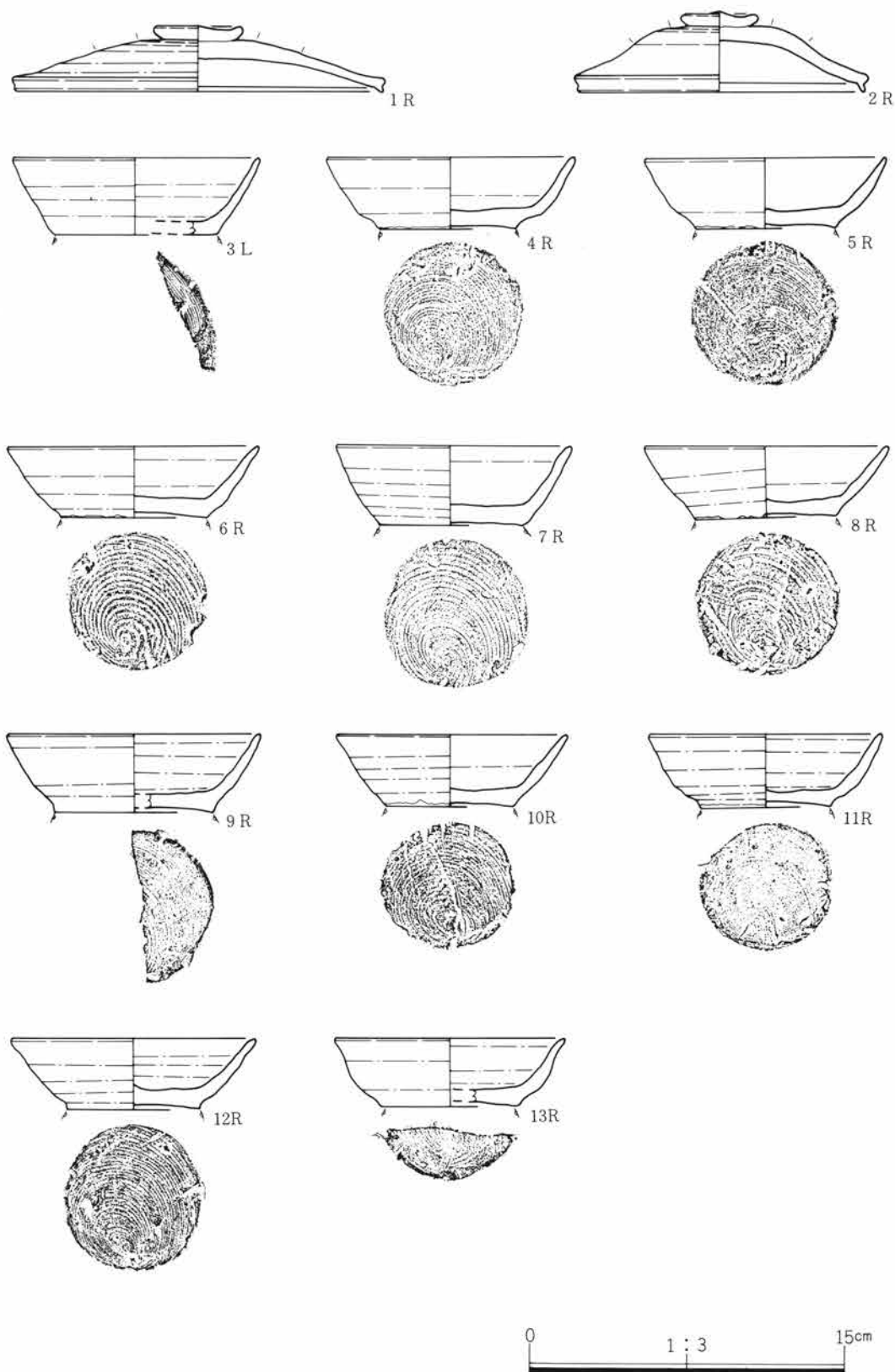
第88図 7区5～7号土坑



- ① 黒褐色土 ローム小ブロックが極少量混入。  
 ② 明褐色土 ロームと黒色土の小ブロックが混じり合っている。  
 ③ 黒色土 ローム小ブロックが極少量混入。  
 ④ 暗黄褐色土 ロームの大小のブロックが混じり合っている。  
 ⑤ 黄褐色土 軟弱なロームが堆積している。

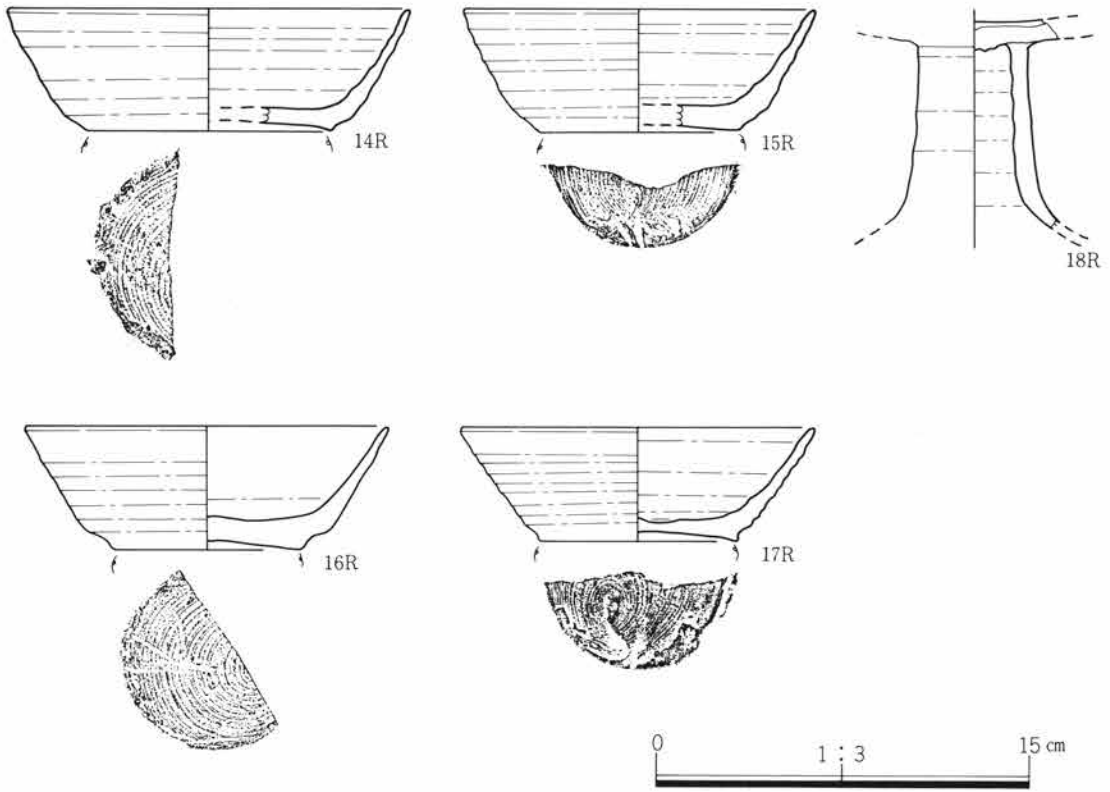


第89図 7区8号土塚



第90図 5区2号土坑出土遺物 (1)





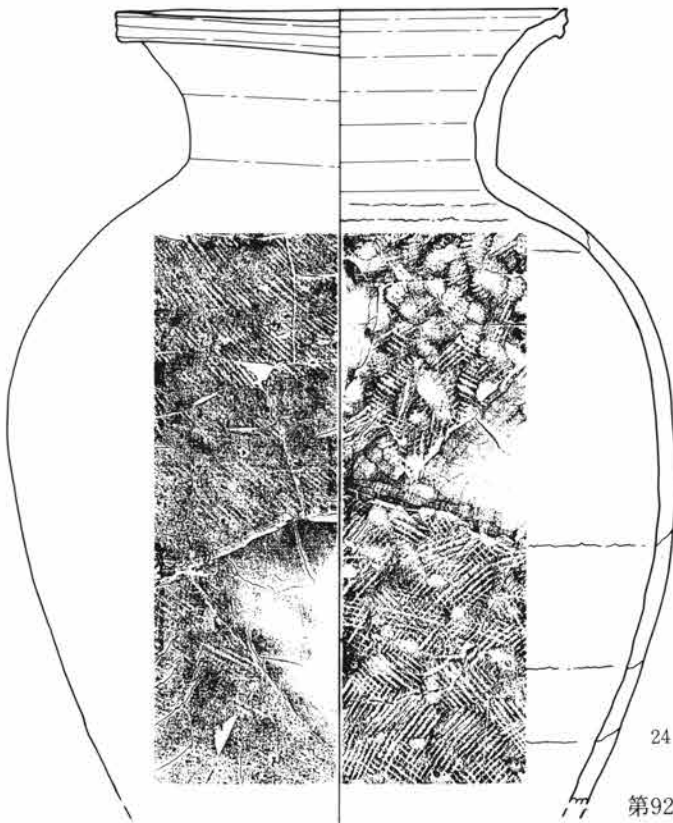
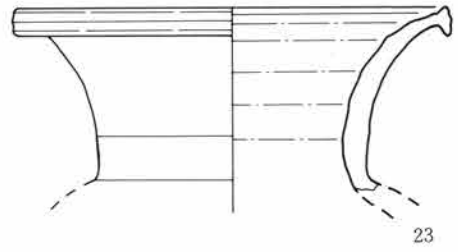
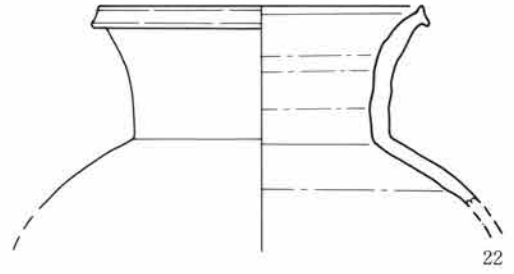
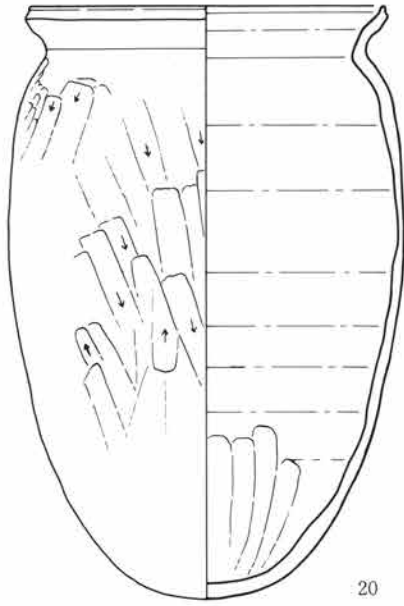
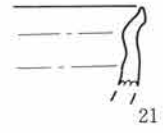
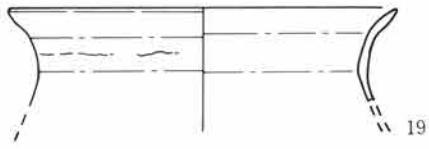
第91図 5区2号土塚出土遺物 (2)

## 5区10号土塚出土遺物 (第93図9、図版79)

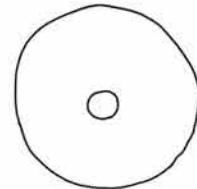
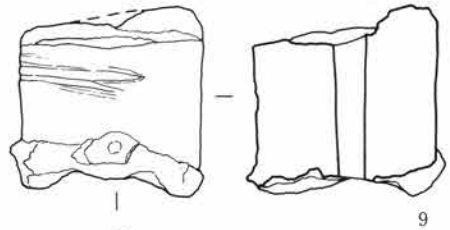
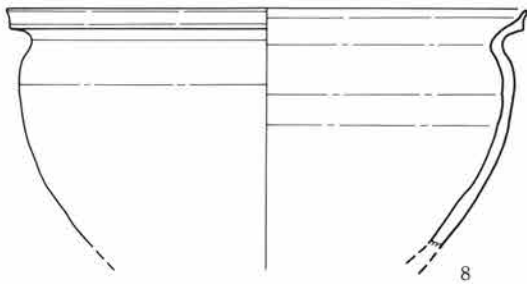
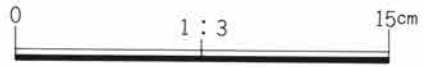
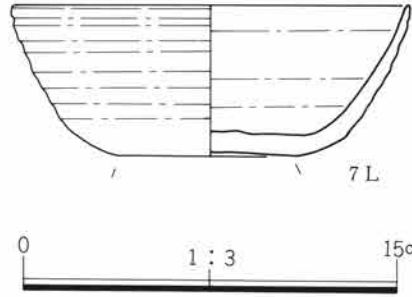
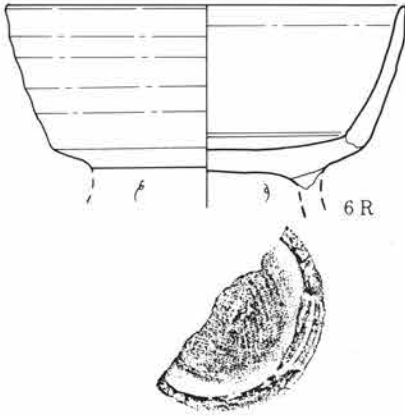
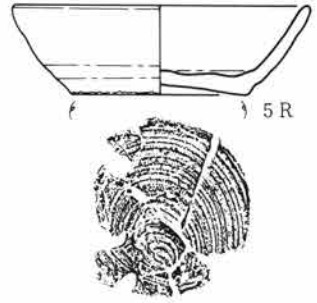
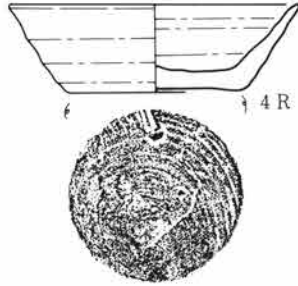
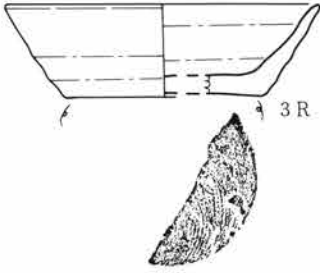
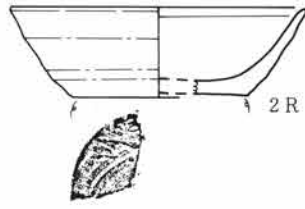
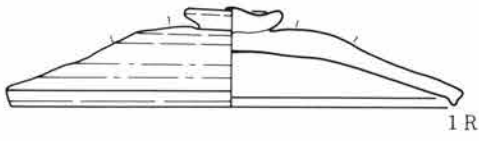
第93図9はフィゴ羽口である。先端部にガラス質の滓が溶着しており、通气孔付近のみ磁石に反応する。径9.5~9.8cm、孔径1.2cm、長さ10.5cmでフィゴ側の端部は斜めの平坦面が遺存していることから、この長さで略完存していることになる。外面にタテ方向の鈍い稜線があり、横断面は不整形円形を呈する。また外面の一部にワラ状の圧痕がみられる。整形時のものか、使用時のアタリか不明である。砂粒を多く含み、褐色を呈する。

## 5区16号土塚出土遺物 (第94図10、図版79)

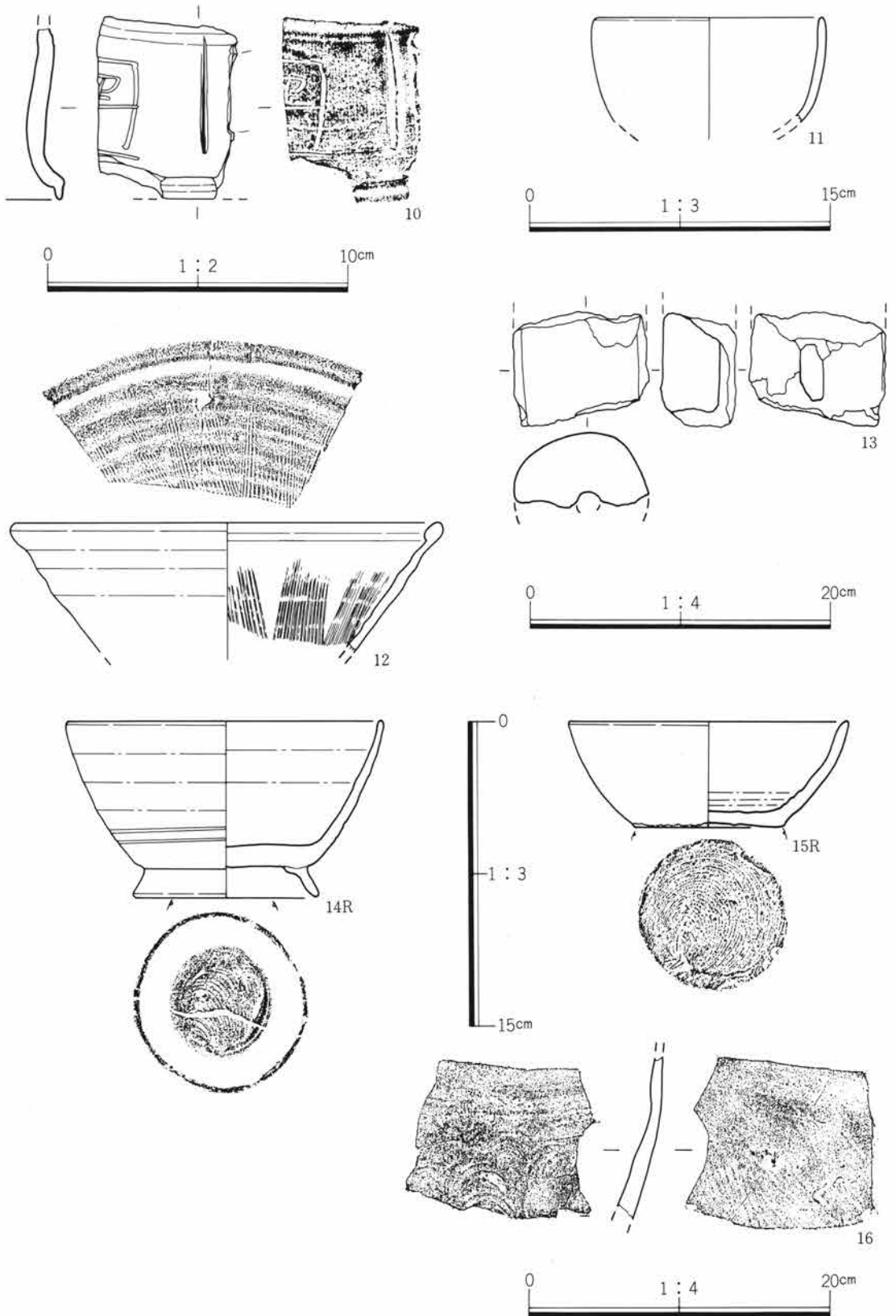
第94図10は須恵器円面硯の脚部と思われる。脚端部が遺存し、また長方形透しの一部が図中右端に遺存している。長方形透しの左隣りには刻線が1本あり、約2cm離れて方形の区画中に判読できないヘラ描き(以下、記号部と呼ぶ)がある。方形の区画部分は上・中・下の3本のヨコ棒と、上のヨコ棒から連続して描かれるタテ棒からなる。タテ棒の下端は左へ跳ねる。中央のヨコ棒はタテ棒を切っているが、下のヨコ棒とタテ棒との筆順は不明である。中のヨコ棒の上にある記号部の筆順は、上方の半円と下方のヨコ棒を描いたのち、タテ棒を加える。このタテ棒は半円の上方に突き出ない。また、このタテ棒を描いたのち方形区画の中ヨコ棒を描いていると思われる。内外面ともヨコナデを施し、焼成は良好で内外面とも灰白色を呈する。胎土に白色小粒・石英小粒を含み、胎土中央部は明褐色を呈する。



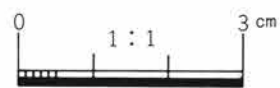
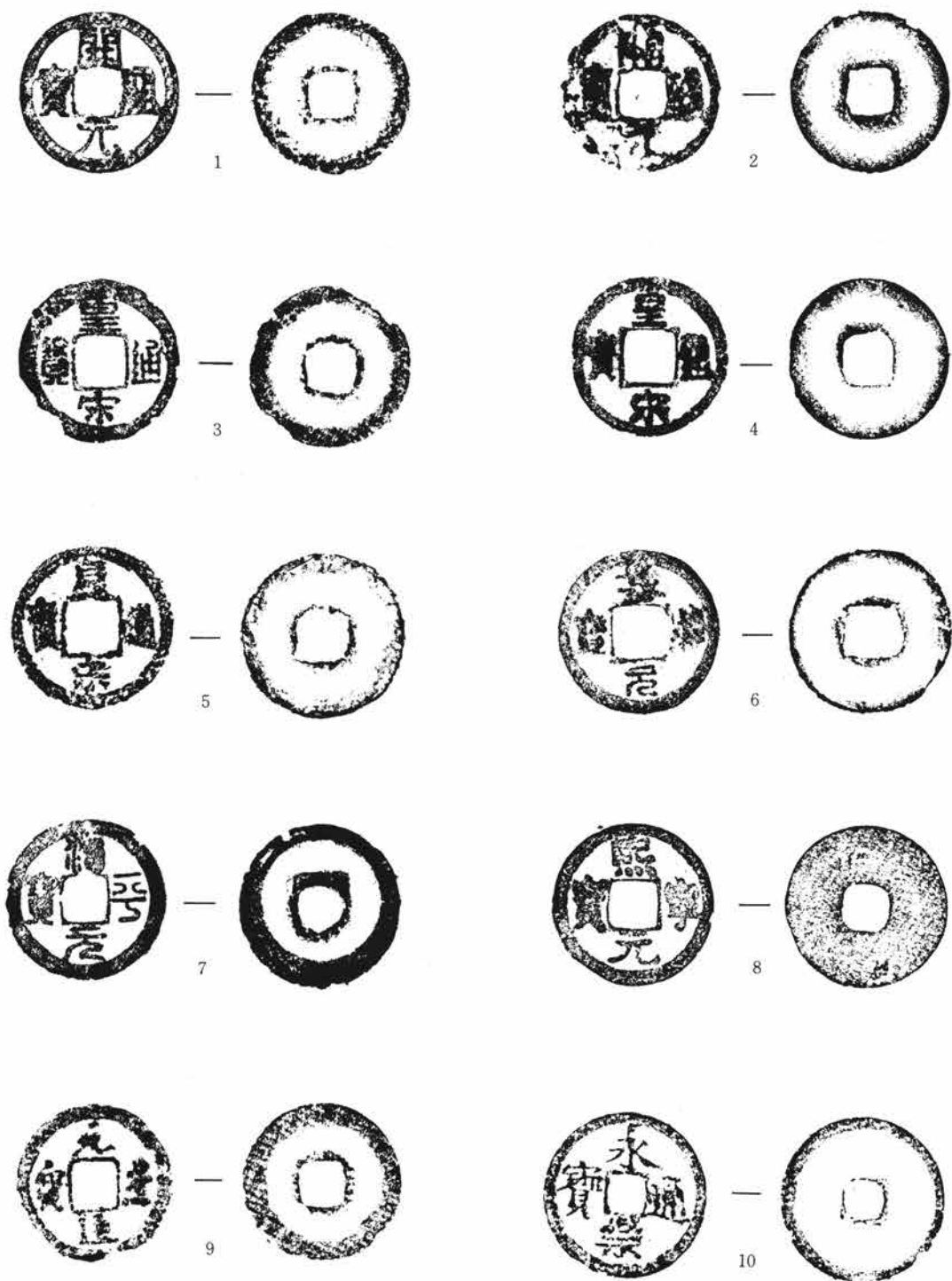
第92図 5区2号土壇出土遺物 (3)



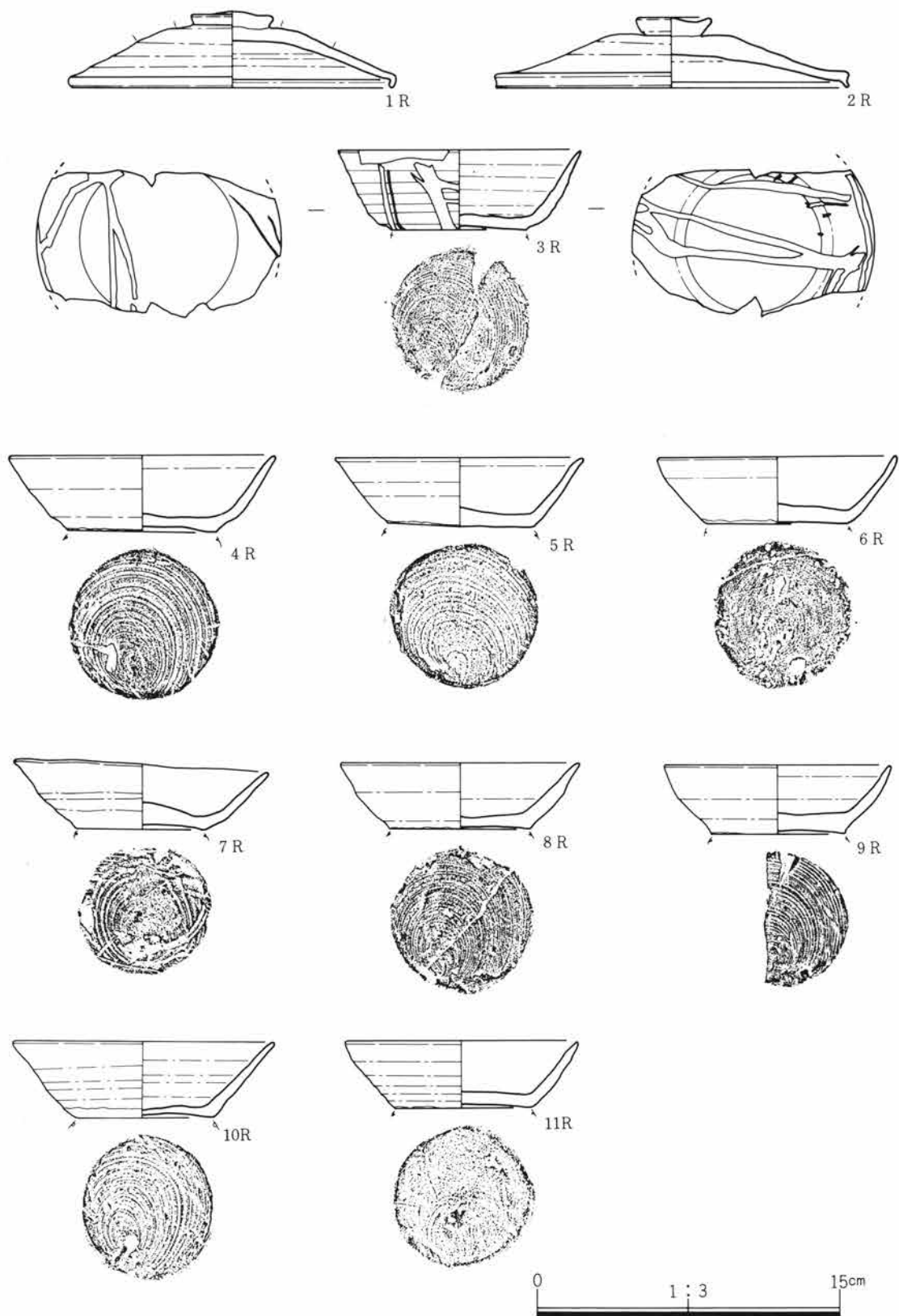
第93図 5区1・3・6・10号土塚出土遺物



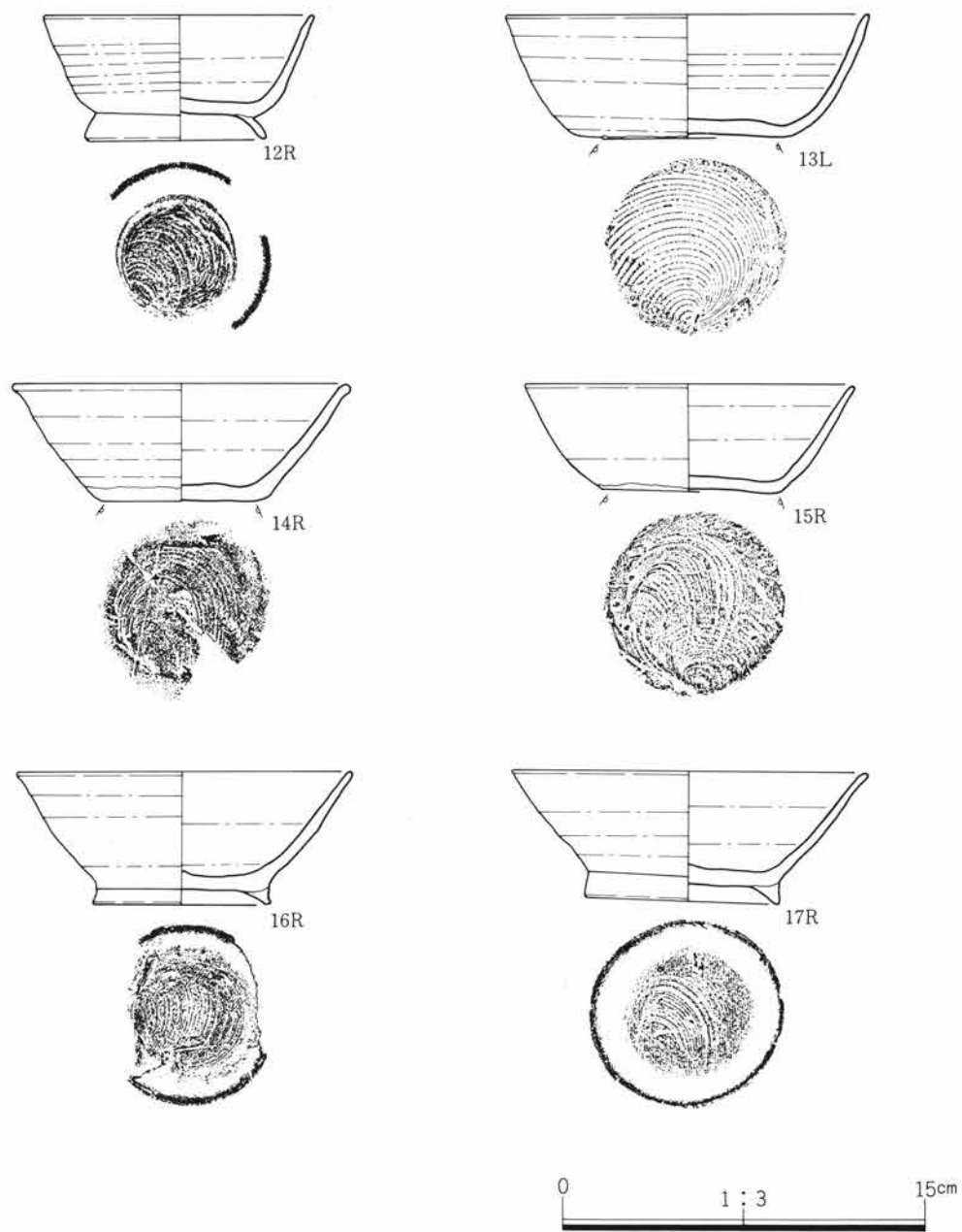
第94図 5区16・18・21・24・29号土坑出土遺物



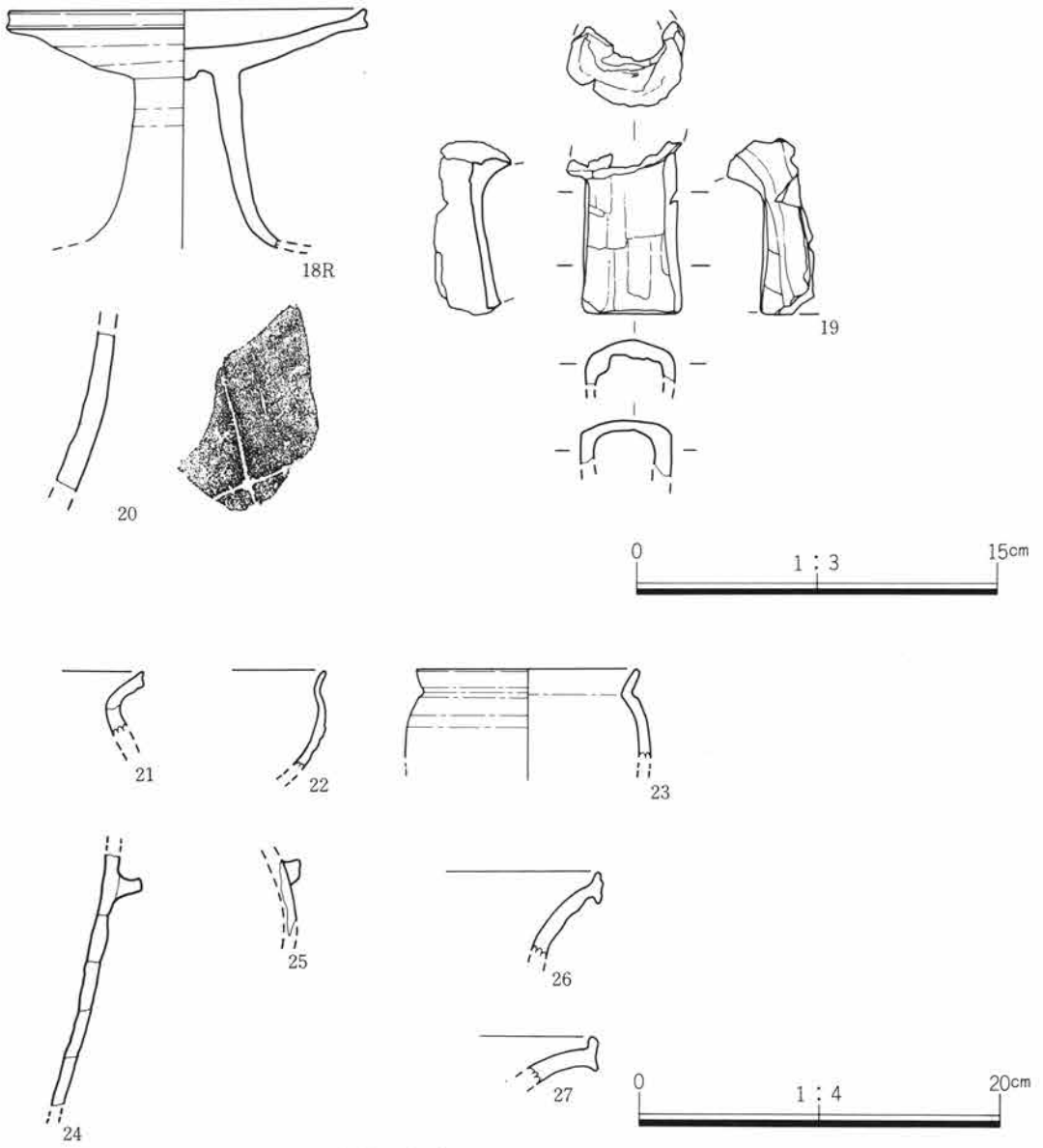
第95图 5区24号土塚出土古钱



第96図 5区38号土壇出土遺物 (1)

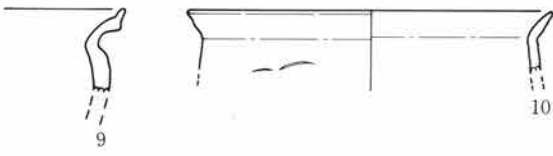
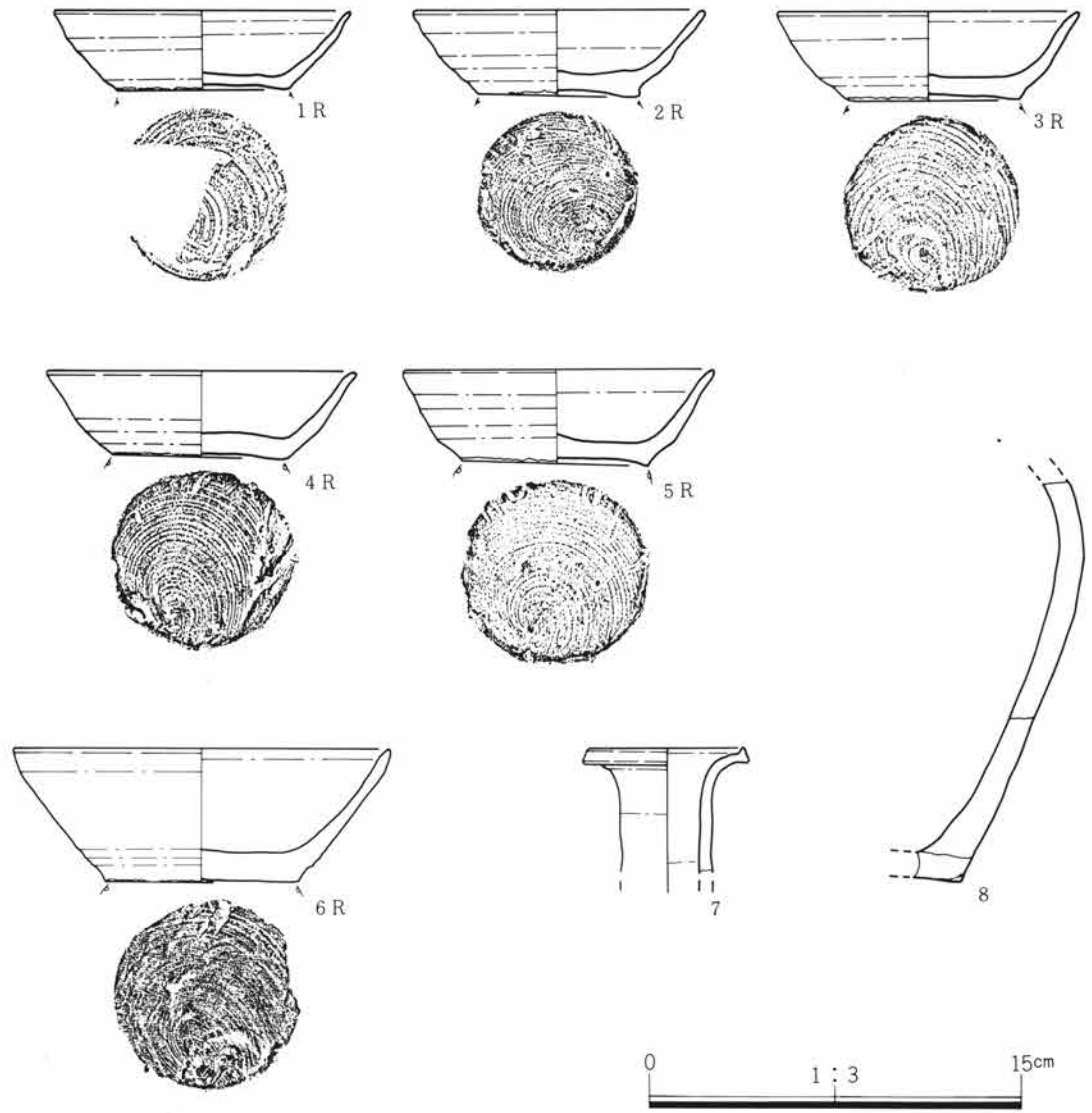


第97图 5区38号土坛出土遗物 (2)

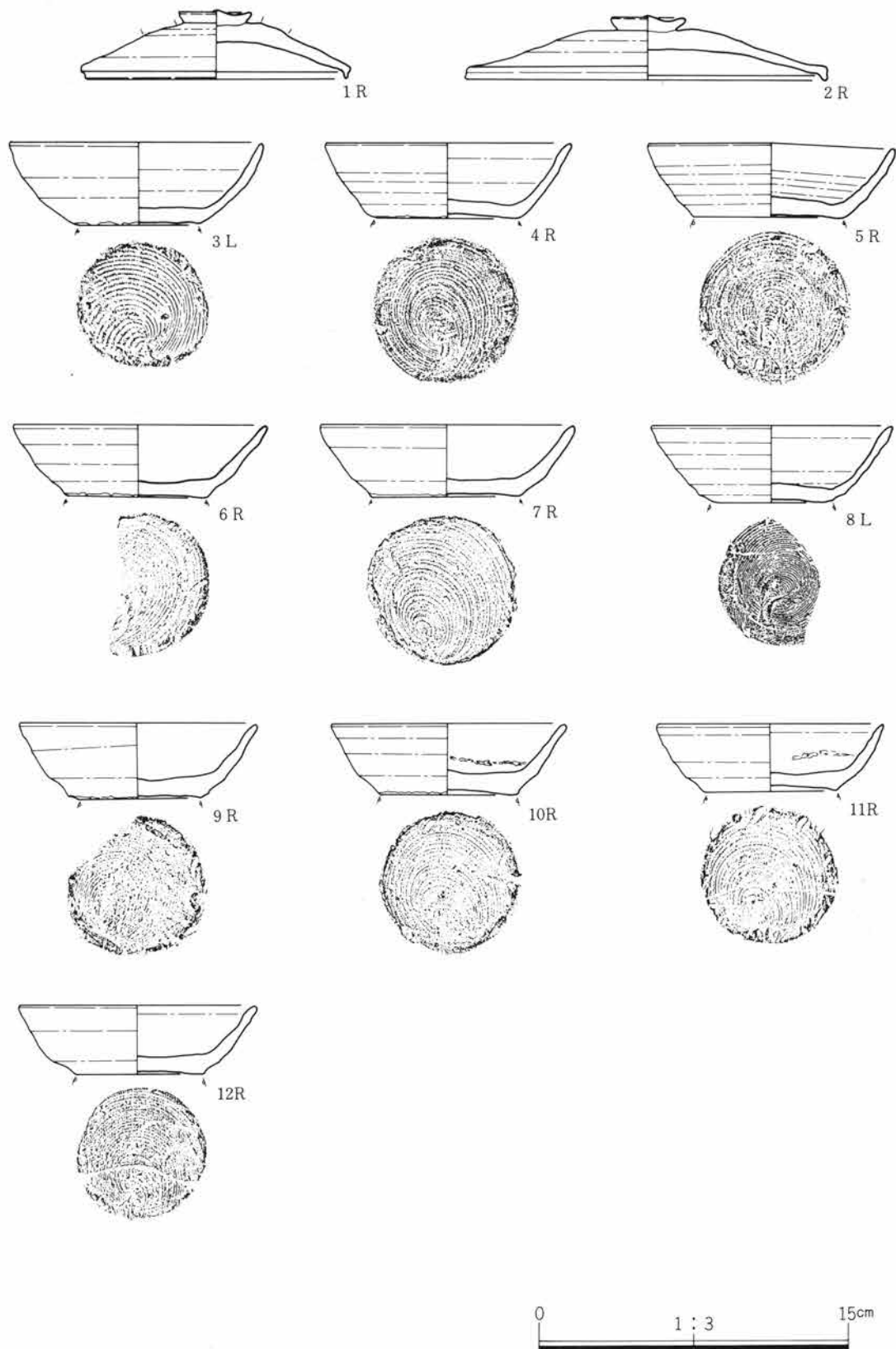


第98図 5区38号土壇出土遺物 (3)

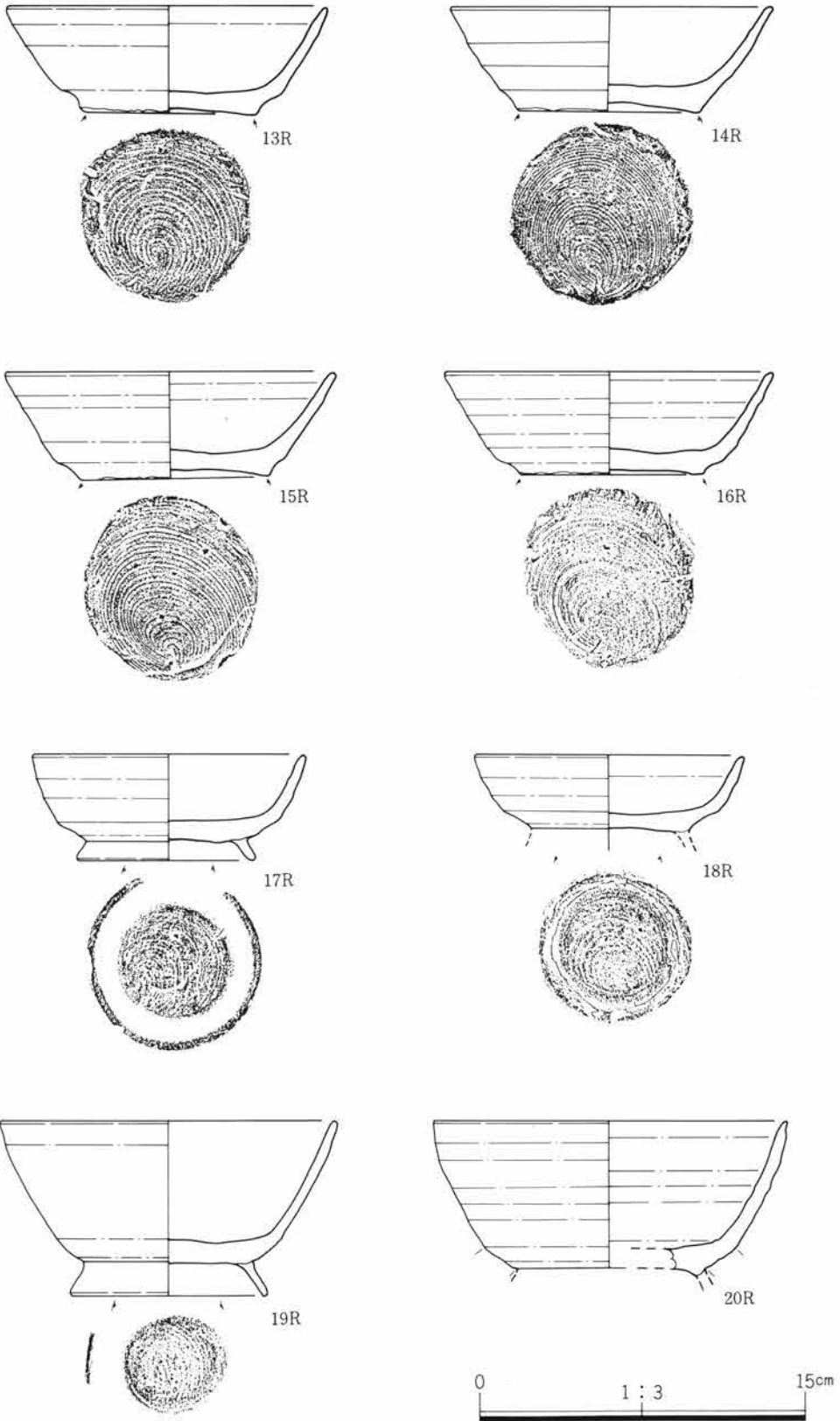




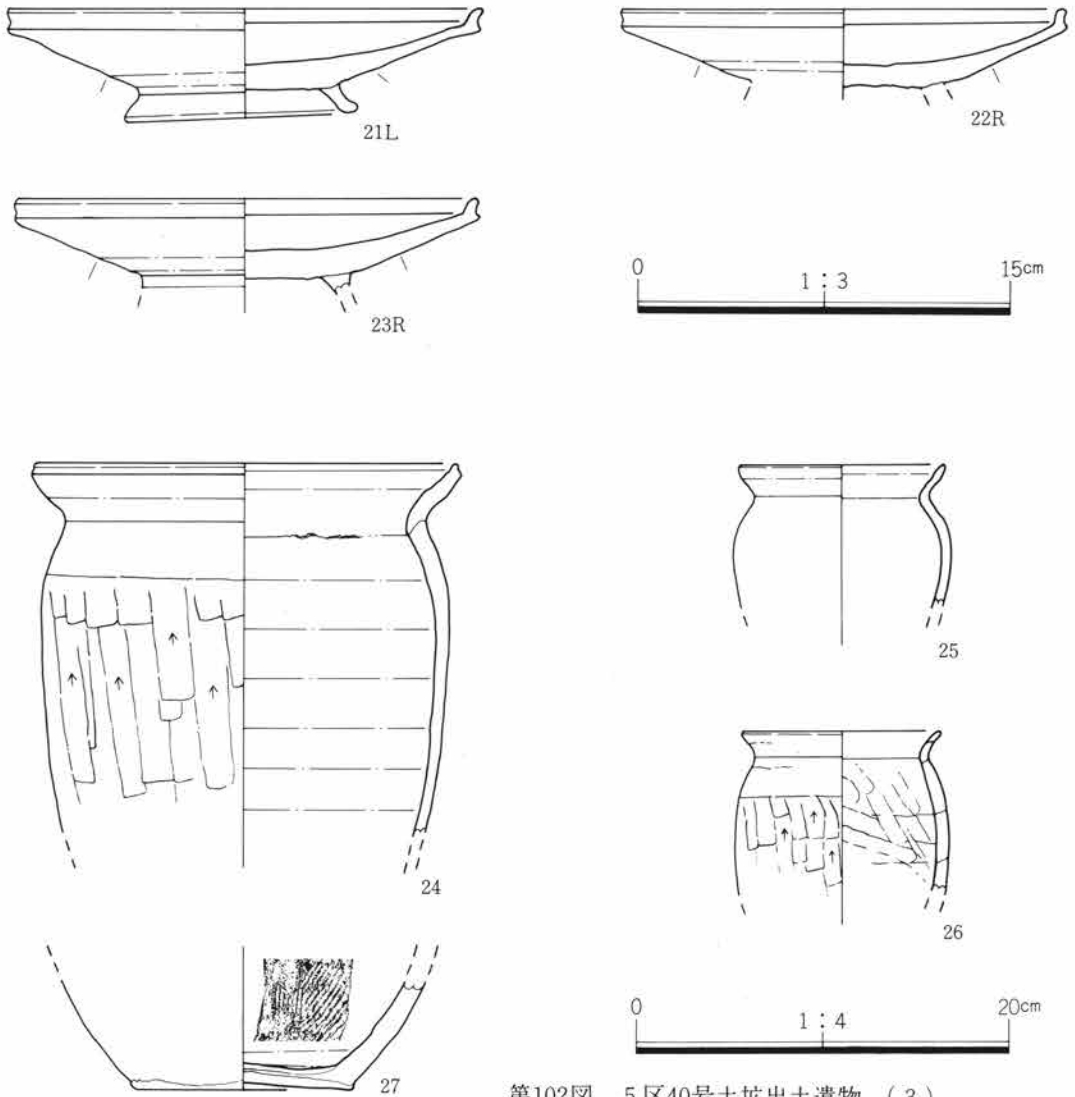
第99图 5区39号土坛出土遗物



第100図 5区40号土壇出土遺物 (1)



第101図 5区40号土塚出土遺物 (2)



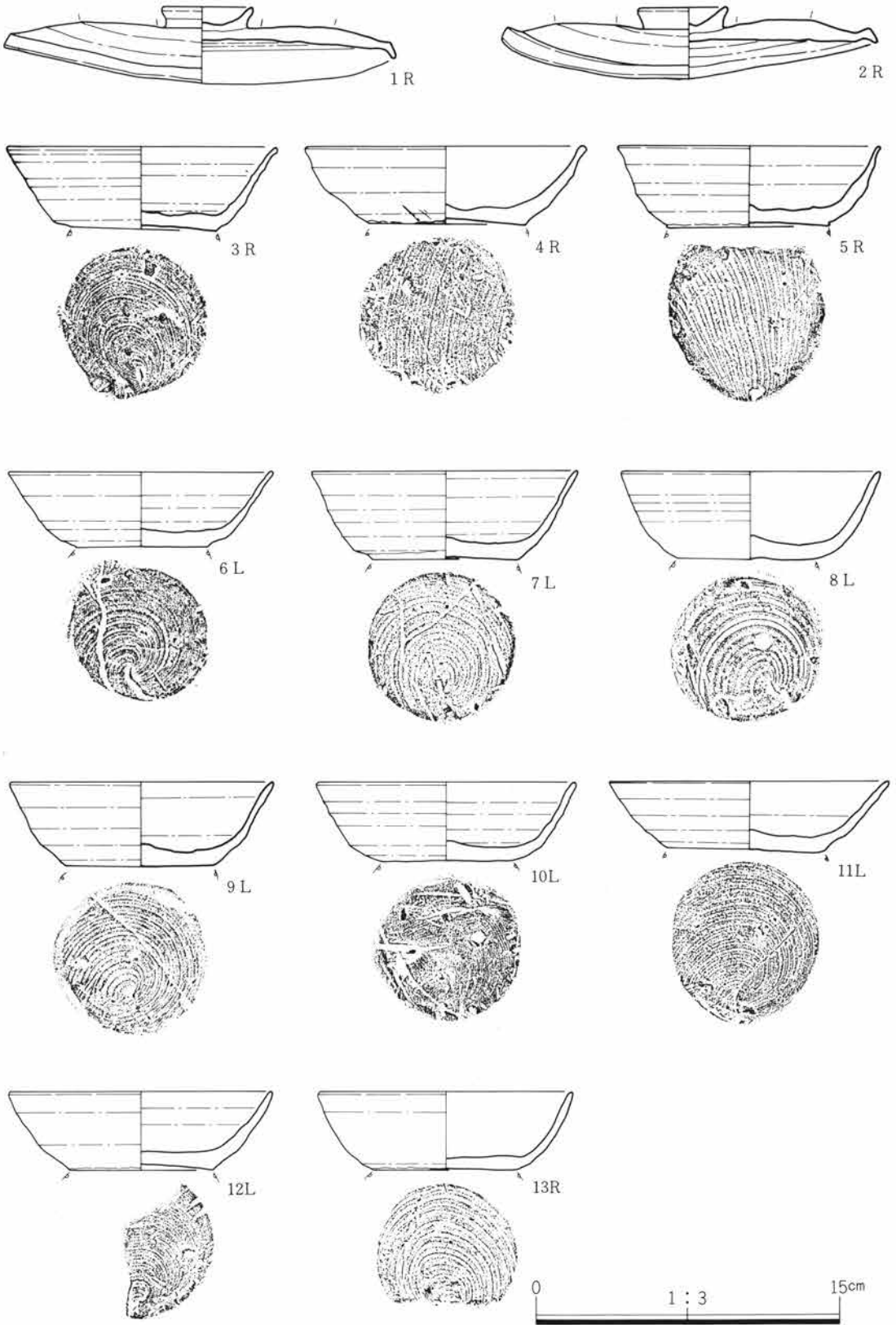
第102図 5区40号土坑出土遺物 (3)

5区18号土坑出土遺物 (第94図11-13、図版81)

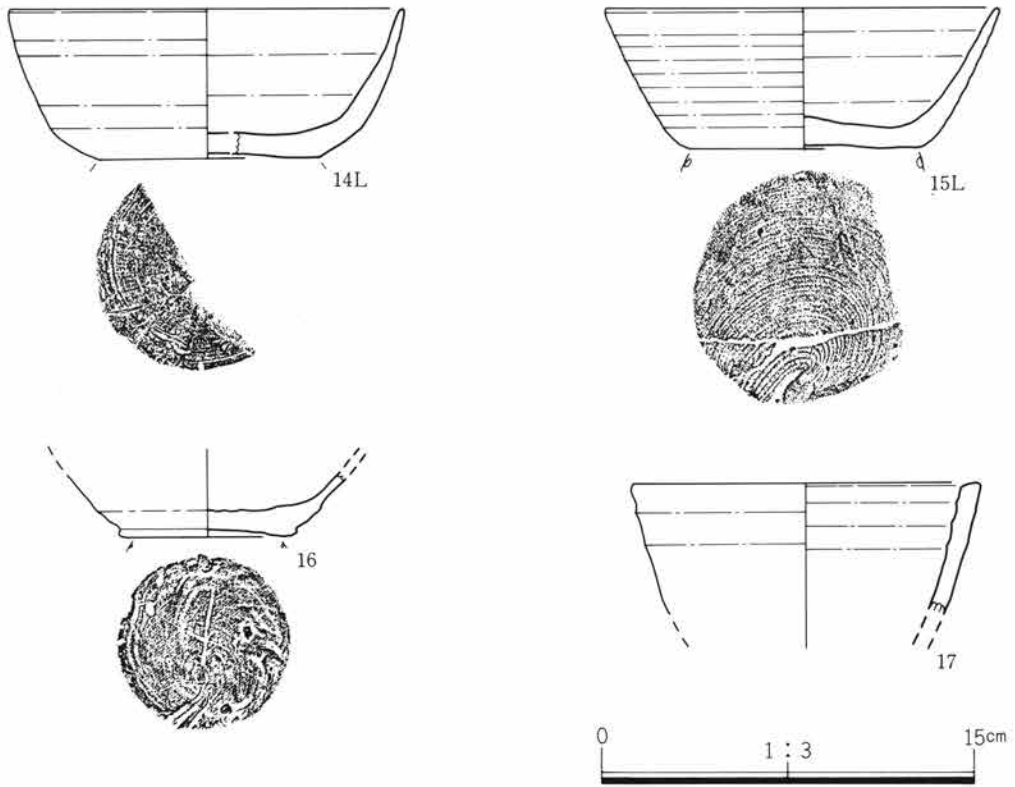
第94図11は口径11.5cmに復原される陶器碗である。素地はやや目が詰まり、内外面にロクロ目がみられる。内外面に灰オリーブ色の透明釉がかかり、細貫入が多くみられる。現存高5.2cm。18世紀代の所産とみられる。産地不明。

12は陶器播鉢で、復原口径28.4cm、器高8.5cmが遺存する。素地はザングリしており、内外面にロクロ目がある。内面には17本を1単位とする卸し目が施され、口縁部は折り返している。内外面とも茶褐色の鉄釉を施す。江戸時代後半(19世紀代)、美濃産とみられる。

13は径8.9cmに復原されるフイゴ羽口である。径の約 $\frac{1}{2}$ が遺存する。長さ7.5cmが遺存し、孔径は約1.5cmである。先端部にガラス質の滓が付着し、磁石に強く反応する。砂粒を多く含み、灰褐色を呈する。



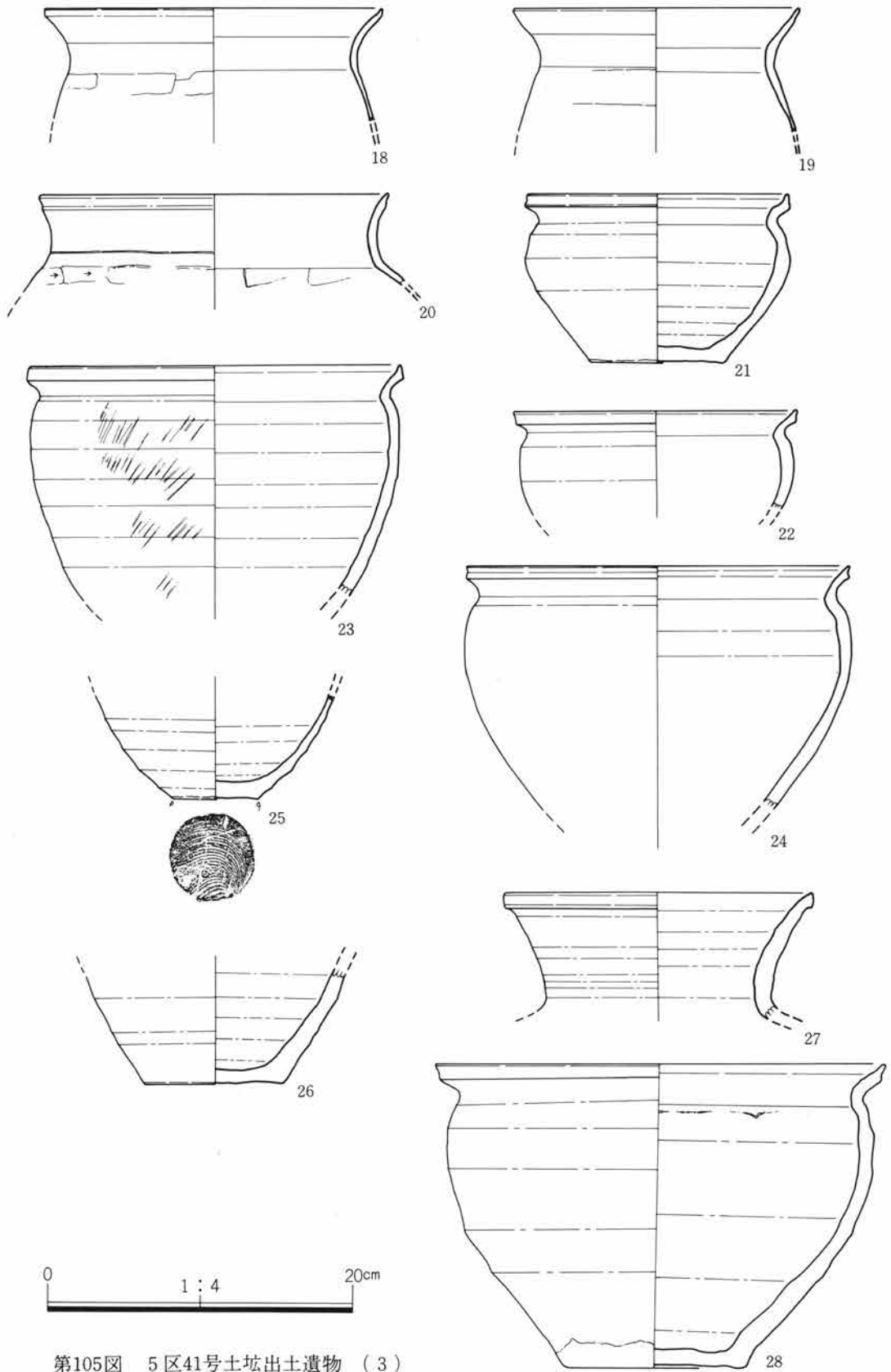
第103图 5区41号土塚出土遺物 (1)



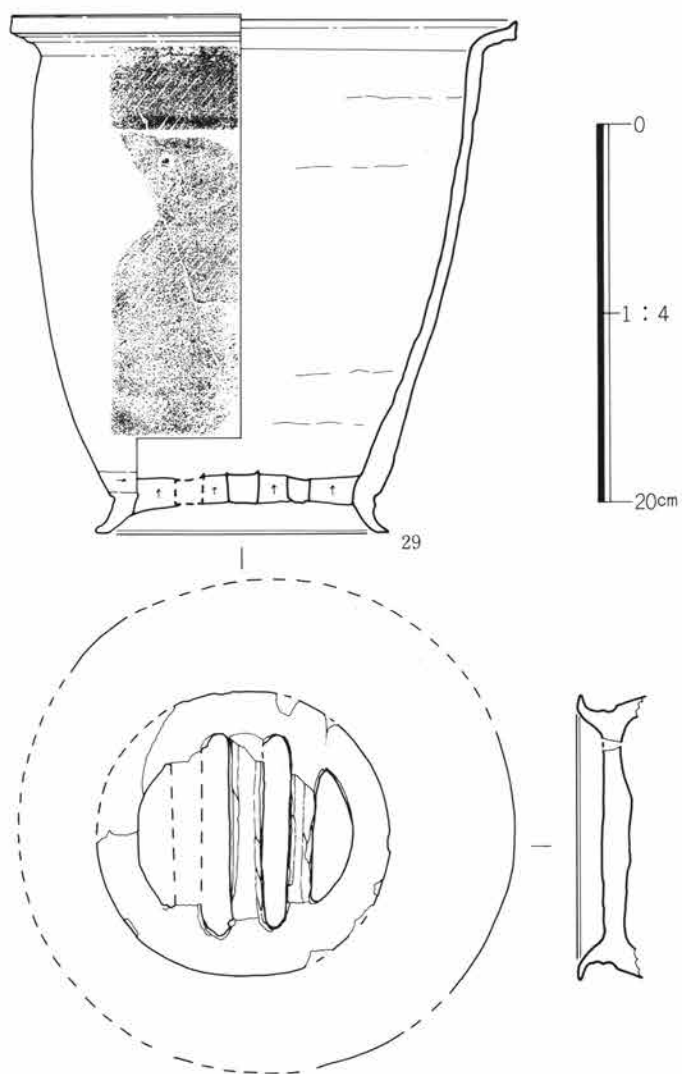
第104図 5区41号土壇出土遺物 (2)

24号土壇出土の古銭 (第95図、図版82)

24号土壇から10枚の古銭が出土し、内9枚が渡来銭である。1・2は開元通寶(銅 唐 武徳4年)。3～5は皇宋通寶(銅 北宋 宝元2年)。6は嘉祐元寶(銅 北宋嘉祐元年)。7は治平元寶(銅 北宋 治平元年)。8は熙寧元寶(銅 北宋 熙寧元年)。9は元豊通寶(銅 北宋 元豊元年)。10は永楽通寶(銅 天正15年頃)である。

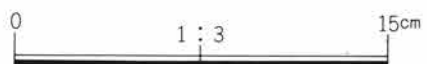
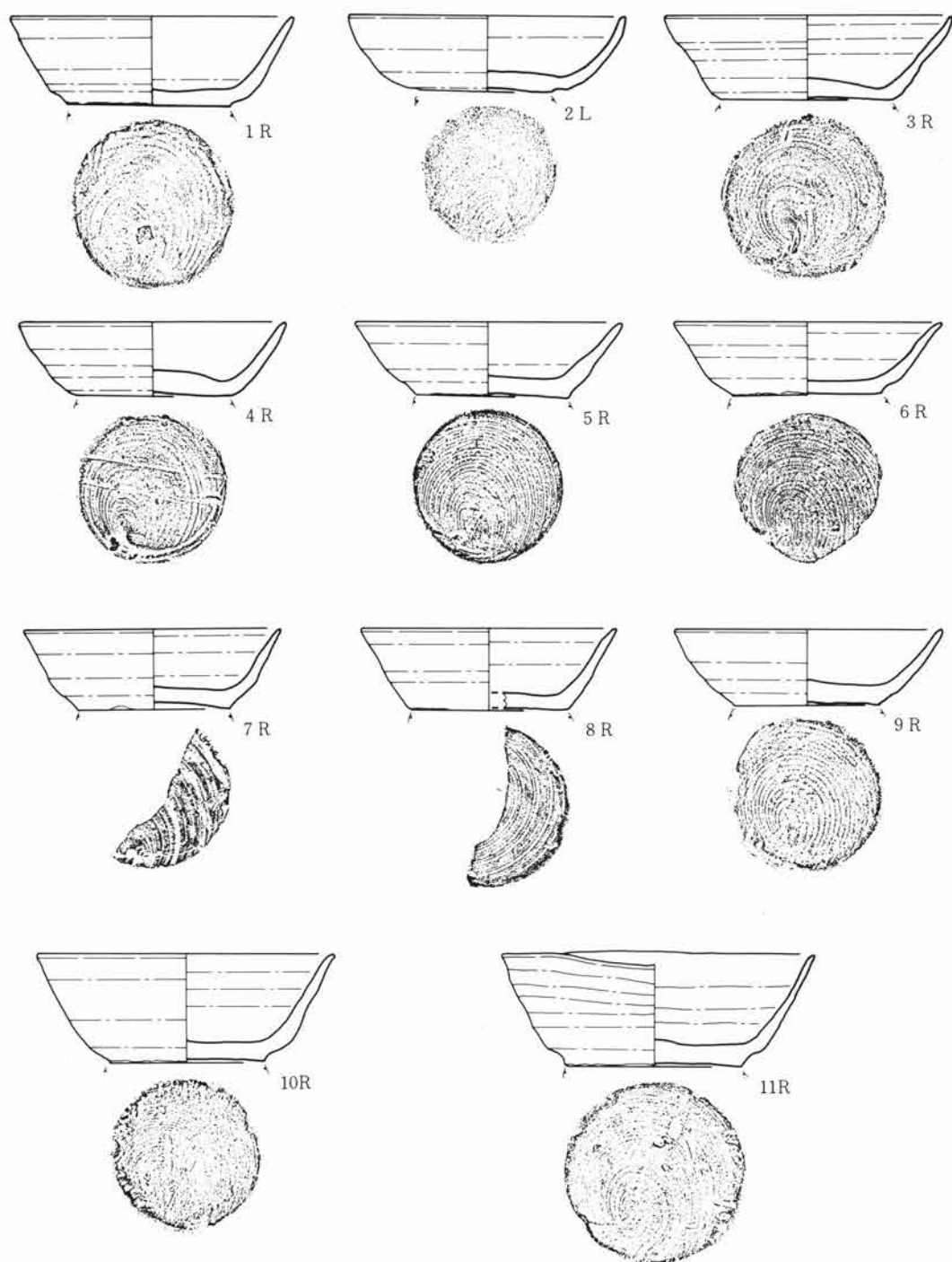


第105図 5区41号土塚出土遺物 (3)

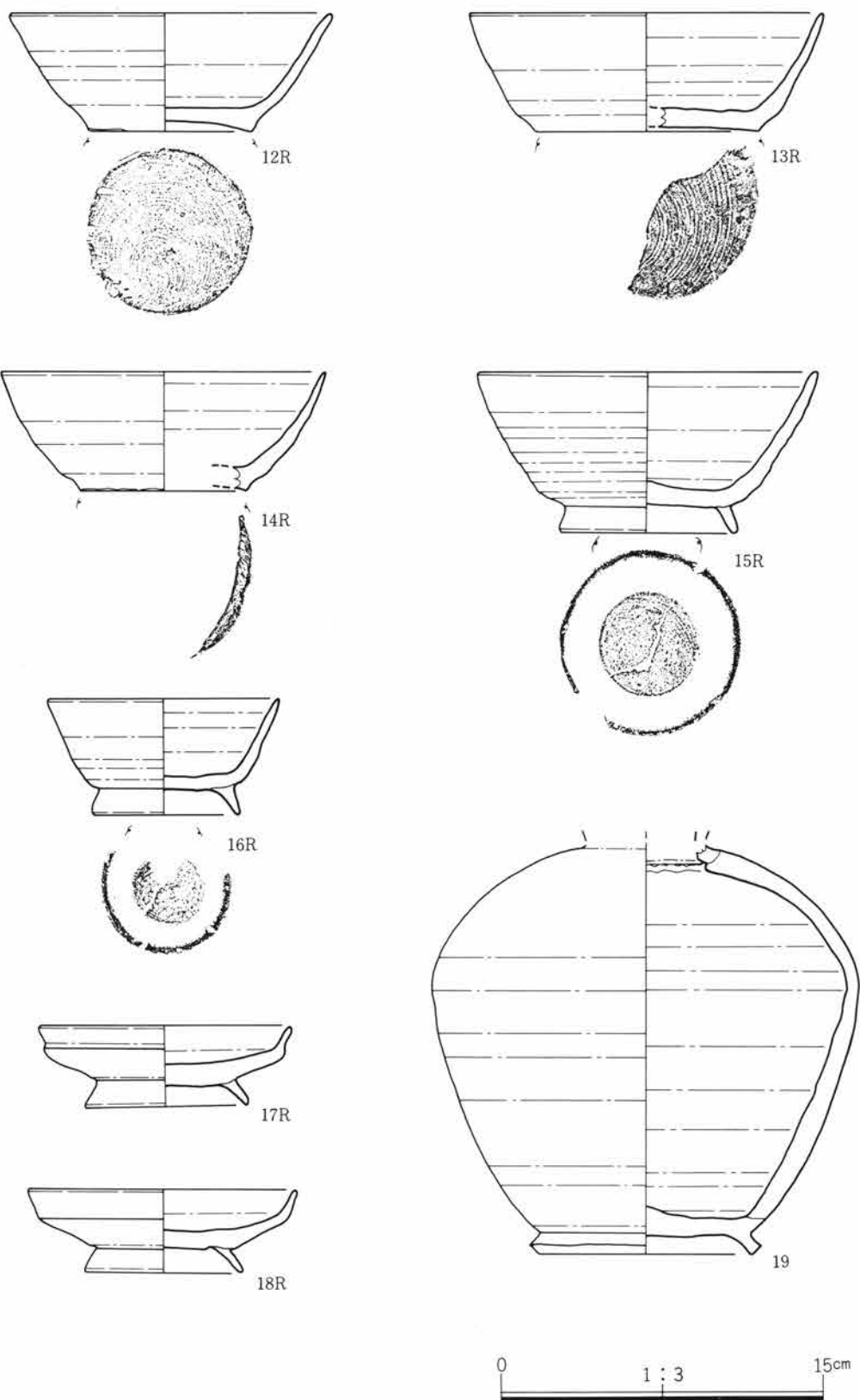


第106図 5区41号土壇出土遺物 (4)

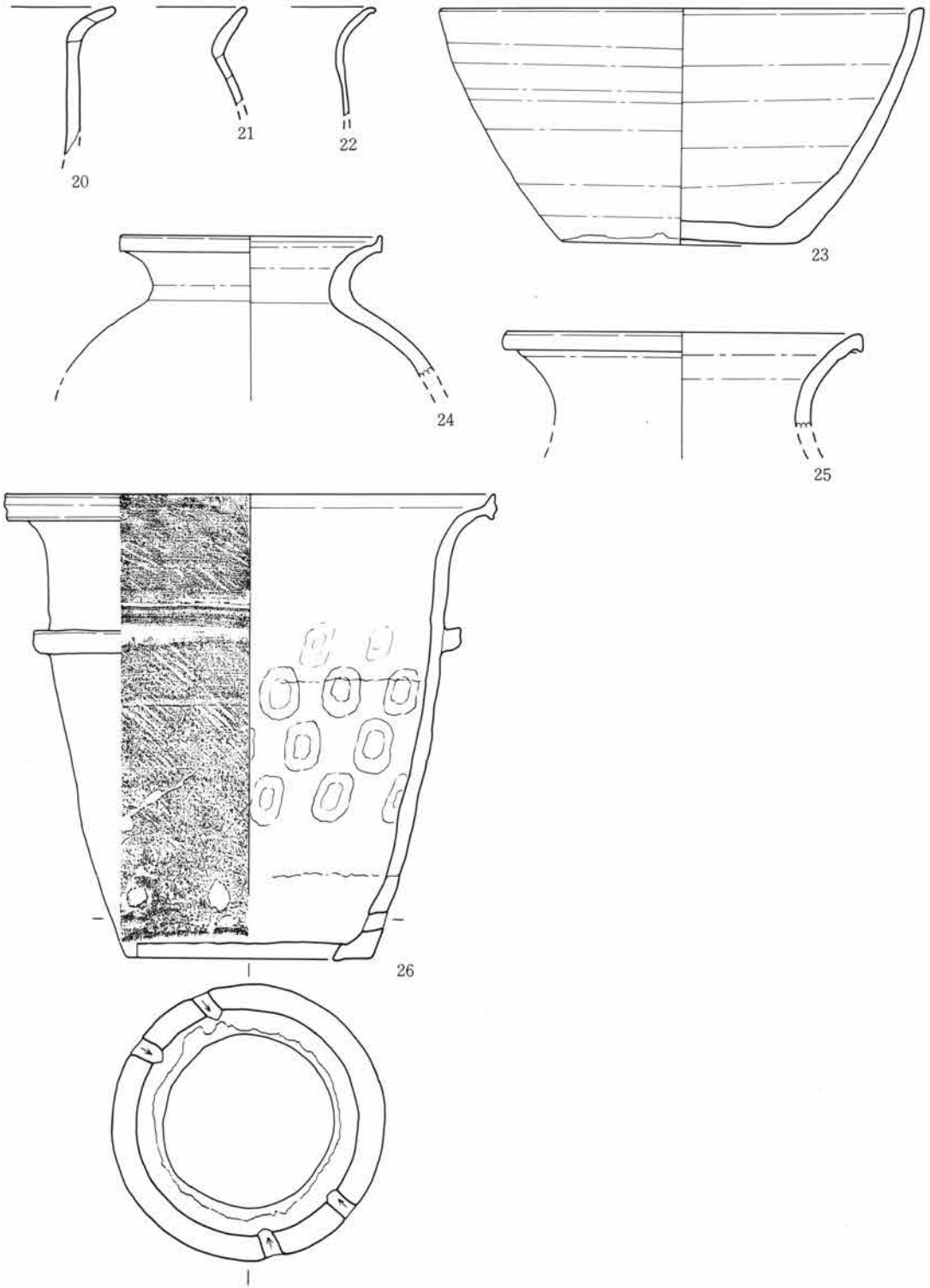




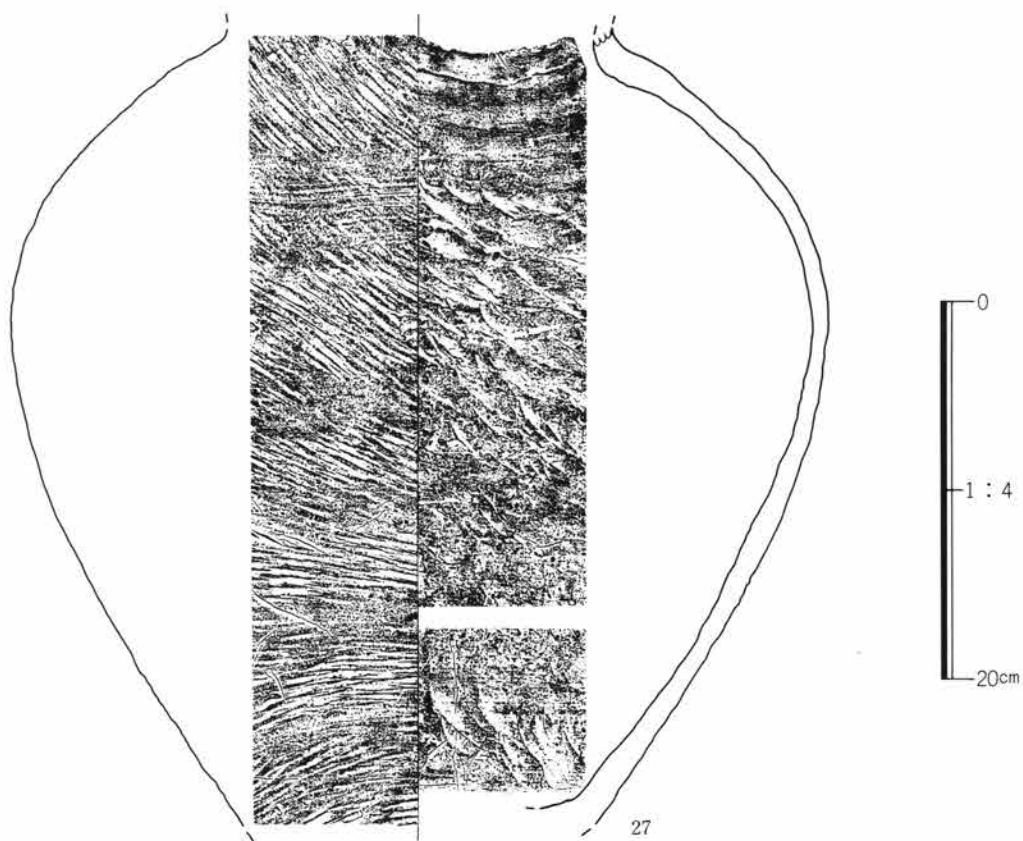
第107图 5区42号土坛出土遗物 (1)



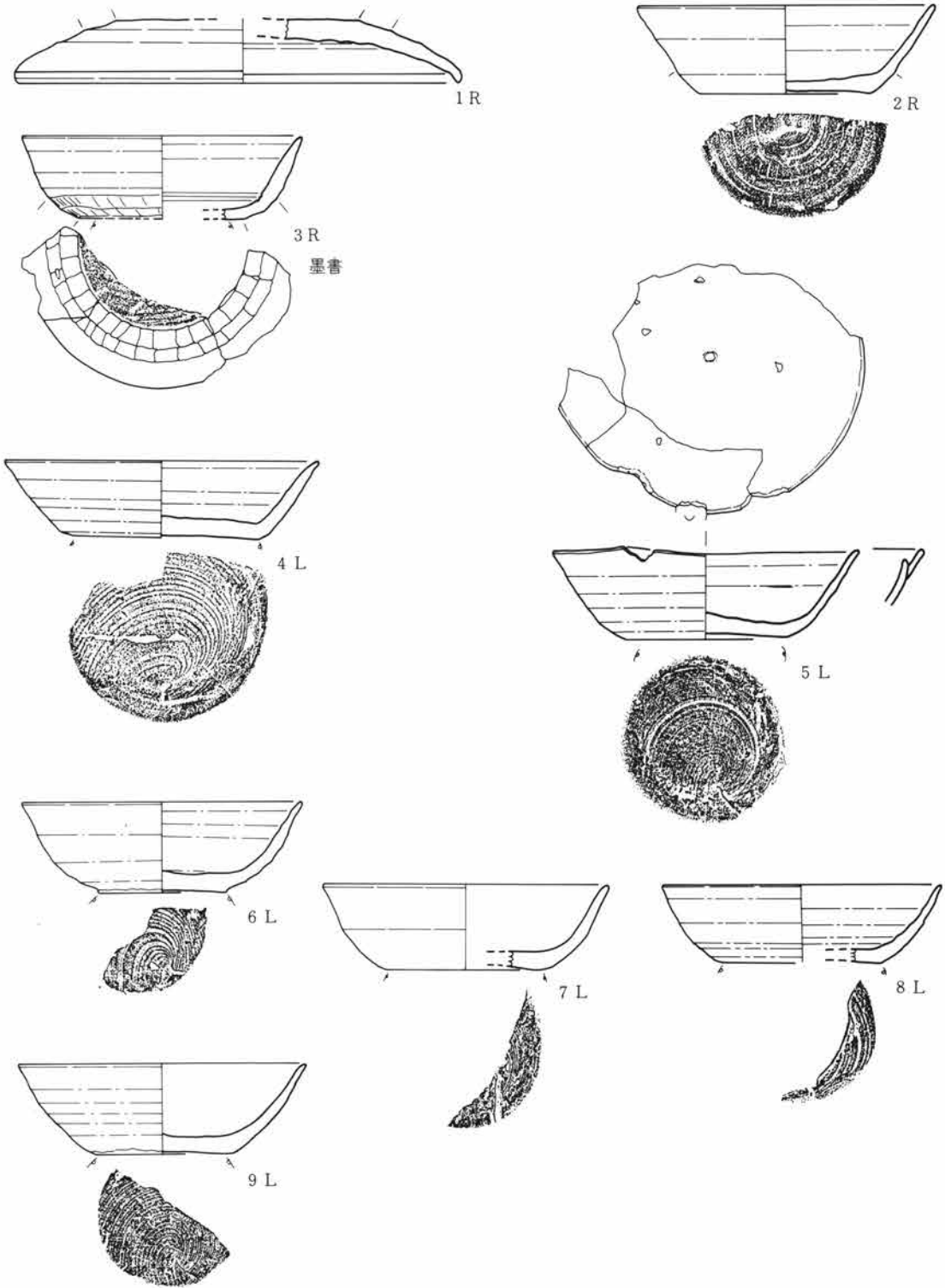
第108図 5区42号土坑出土遺物 (2)



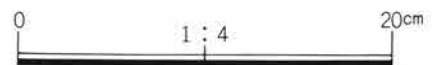
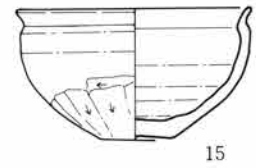
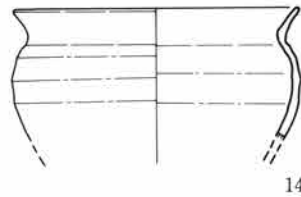
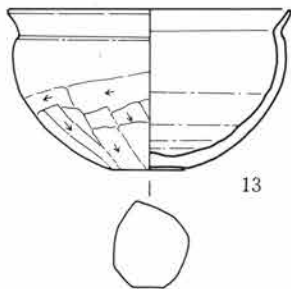
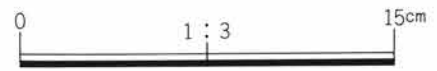
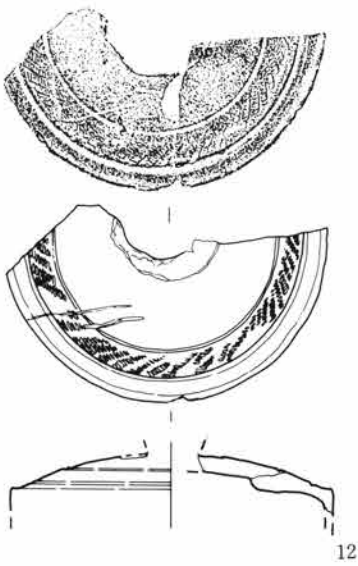
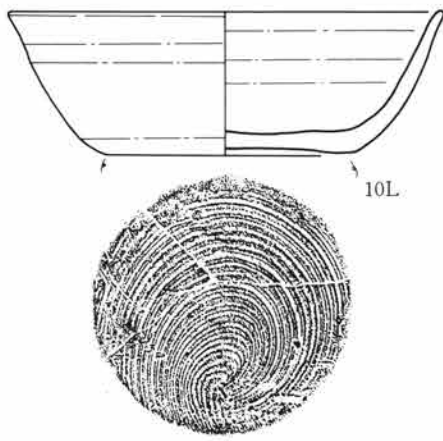
第109图 5区42号土坛出土遗物 (3)



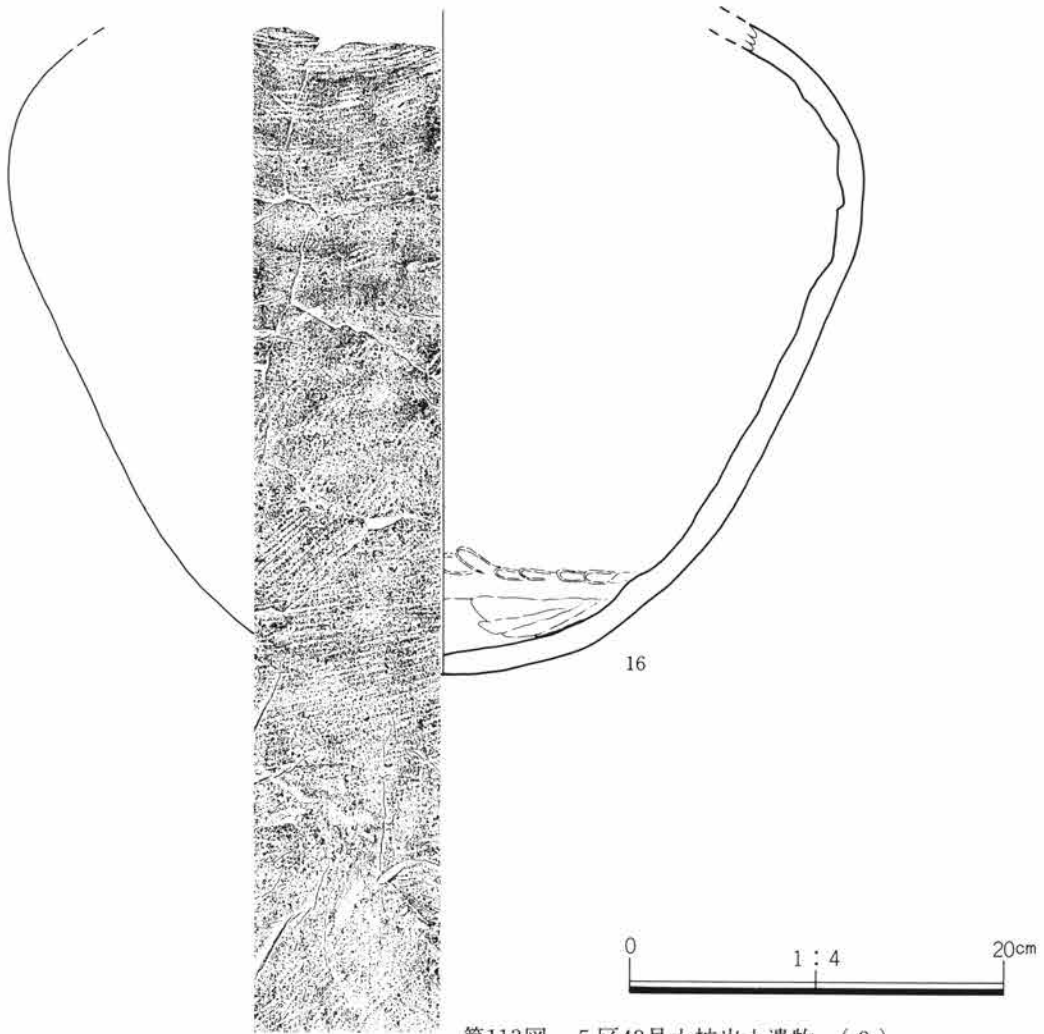
第110図 5区42号土坑出土遺物 (4)



第111图 5区43号土塚出土遺物 (1)



第112図 5区43号土壇出土遺物 (2)



第113図 5区43号土坑出土遺物 (3)

## 5 集 石

### 5区1号集石 (第82図、図版43-3)

5区台地部の北東寄りに位置し、9・42号土坑を切っている。掘形は不整楕円形を呈し、規模は長軸2.15m、短軸1.89m、深さ50cmである。底面は丸底状を呈し、壁は斜めに立ち上がる。覆土は一挙に埋没しており、覆土上層外縁に大礫を配し、内部に比較的小ぶりの礫を詰め込んだ状態である。平安時代の土器小片が数点混入していた。

## 6 溝

### 5区1号溝 (第114・115図、図版50・51)

5区台地部を448mの等高線に沿って巡っている。5区北半低地部の西端より逆S字を描きながら、東方へ進み、5区台地部北中央で南東方向へ向きを変え、やや蛇行しながら、5区台地部南東頂部で弧を描いて方向を反転し、5区台地部南傾斜面上段を大きくくねりながら、西方へと消えて行く。

溝の規模は北西部で、幅2.26m、深さ44cmで、断面は中央底面が丸みを帯びて、一段深くなっており、壁下半は急角度で立ち上がるが、上半は開きを持ってやや斜めに立ち上がる。北西部の逆S字を描く部分は1回改修を行なっている。5区台地部北寄りの部分は、幅0.88m、深さ40cmで、断面は底面がやや丸みを帯び、両壁は斜めに開きを持って立ち上がる。5区台地部南東頂部から南傾斜面の部分では、幅はほぼ35cm、深さもほぼ25cmで、断面はU字状をなしている。溝の覆土は、5区台地部頂部付近を除き、他の部分では砂礫層がラミナ状に堆積している。

1号溝は2～6号住居址の1群と7・9～11号住居址の1群の間に構築され、粘土採掘坑を切る場合と切られる場合とがある。また、中・近世掘立柱建物群の間を通り、土壇によって切られている。遺物は平安時代の土器小片が少量出土し、摩滅したものが目立つ。本溝の時期は、平安時代の集落存続期間内で、比較的短期間であったと思われる。

### 5区2号溝 (第114・115図、図版52-1)

5区台地部の南東頂部から南東傾斜面に位置している。5区台地部南東頂部の5・6号住居址の西より始まり、約8m南へ進み、南東傾斜面上段で傾斜面に直交して西へ曲がり同じく8mほど進み、5区台地部南中央傾斜面方向へ再び方向を変え、5区南低地部に向かって消えて行く。

溝の規模は幅1.50m～0.58m、深さ15cm～30cmで、断面は底面が丸みを帯び、壁は緩やかに立ち上がって行く。溝の北東端と南西端では2m以上の比高差がある。

2号溝は南東頂部付近では5号住居址と平行して走り、3号住居址の西で方向を変え、4号住居址とは重複し、2号住居址の西を斜めに走っている。1号溝とは屈曲点は近接するが、末端の走向は異なっている。また、中・近世掘立柱建物と土壇とによって切られている。

覆土等の状況は水が頻繁に流れていた様相は示していない。平安時代の土器小片が少量出土し、摩滅したのものもある。2号溝は遺構の重複関係や立地から、平安時代の可能性が強いと思われる。

### 5区3号溝 (第114・115図、図版52-2)

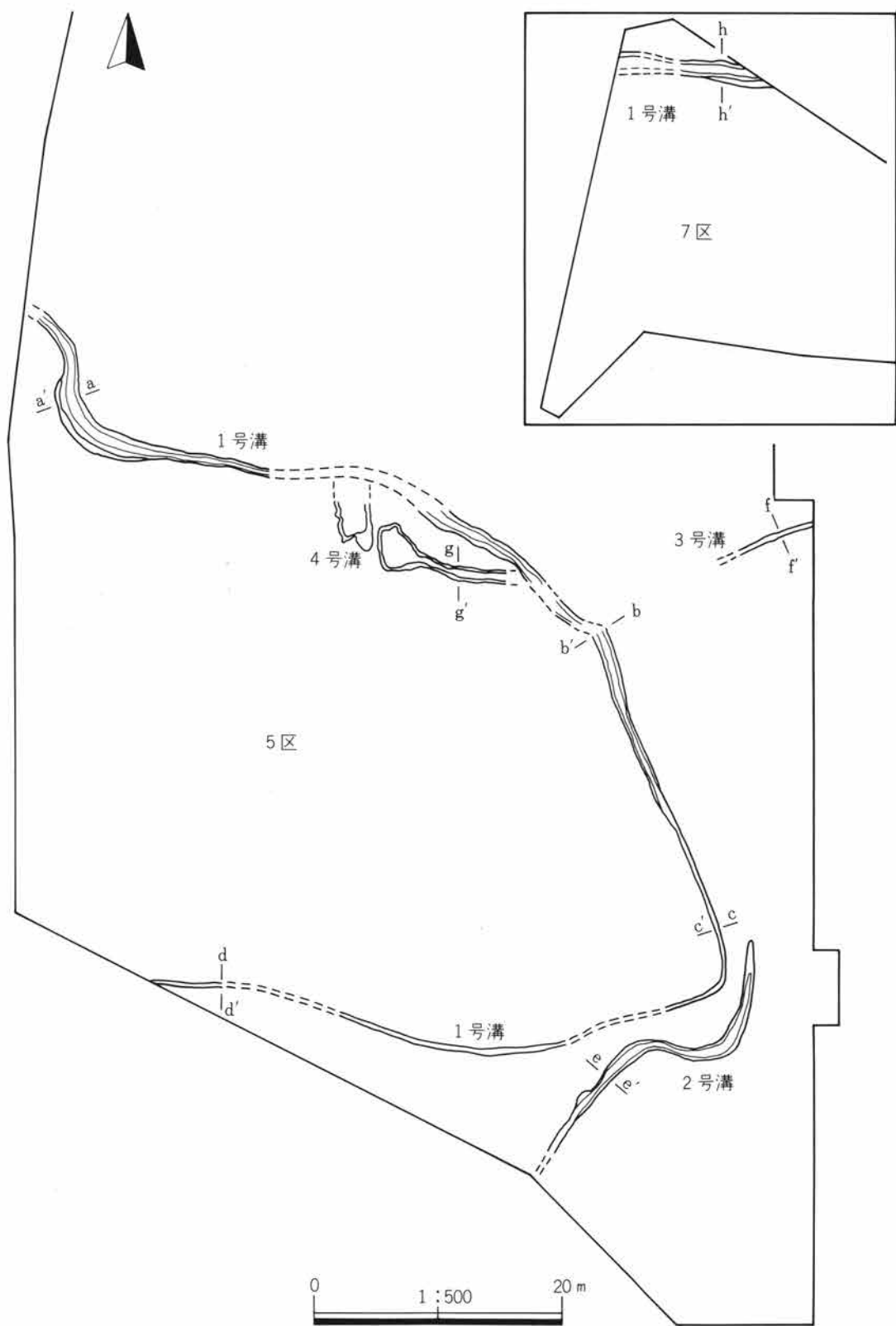
5区台地部の北東隅に位置し、東西方向に走向し、藪田東遺跡の溝状遺構に続いている。調査区東端より6mほどの長さが確認されただけで、以西の走向は確認できなかった。

溝の規模は幅0.52m、深さ20cmで、断面はU字状をなしている。覆土は暗褐色土で、小礫を含んでいる。平安時代の土器小片や、中・近世の播鉢片・陶磁器片が少量出土している。3号溝の時期は近世と思われる。

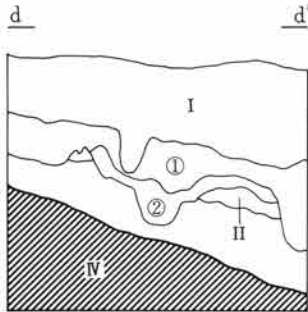
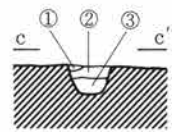
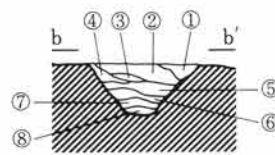
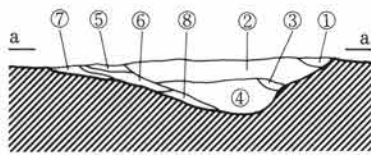
### 5区4号溝 (第114・115図、図版52-3)

5区台地部の北端中央に位置し、東西に走向する溝と南北に走向する溝とに分かれ、それぞれ東方や北方への走向は確認できなかった。東西に走向する溝は幅1.00m～0.76m、深さ14cm～20cmで、断面

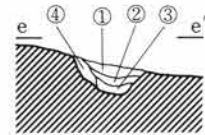




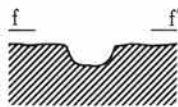
第114图 5区1~4号溝、7区1号溝



5区1号溝



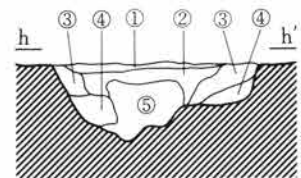
5区2号溝



5区3号溝



5区4号溝



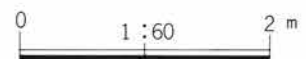
7区1号溝

- a~a'
- ① 暗褐色土 小礫混入。粘性強い。
  - ② 砂礫層
  - ③ 暗褐色土 砂・炭化物が少量混入。
  - ④ ③と類似。砂がやや多く混入。
  - ⑤ 砂礫層
  - ⑥ 砂層
  - ⑦ 暗茶褐色土 砂・炭化物がやや多く混入。
  - ⑧ 暗褐色土 小礫混入。粘性強い。

- b~b'
- ① 砂層
  - ② 黒色土 砂礫混入。粘性強い。
  - ③ 砂礫層
  - ④ 黒褐色土 粘性強い。
  - ⑤ 砂層
  - ⑥ ②と類似。
  - ⑦ 茶褐色土 ローム粒子を含む砂質土。
  - ⑧ 黒褐色土 ローム粒子を含む粘質土。

- c~c'
- ① 黒色土 ローム粒子混入。
  - ② 黒色土 ラミナ状の砂層を挟んでいる。
  - ③ 黒褐色土 ローム小ブロックが混入。
- d~d'
- ① 暗褐色土 多量の砂礫を含む砂質土。
  - ② 砂礫がラミナ状に堆積。
- e~e'
- ① 黒褐色土 小礫が少量混入。粘性強い。
  - ② 黒褐色土 ロームと小礫が少量混入。
  - ③ 黒褐色土 粘土と小礫が混入。
  - ④ 黒褐色土 砂礫が多く混入。

- h~h'
- ① 砂礫層
  - ② 灰褐色土 ローム小ブロックを少量含む。
  - ③ 黒色土 礫を少量含む。
  - ④ 暗褐色土 ロームや砂礫を少量含む。
  - ⑤ 砂礫層



第115図 5区1~4号溝、7区1号溝断面

は丸底状をなし、西端で幅2.00mと広がり、南北に走向する溝の手前で止まっている。南北に走向する溝はやや乱れており、幅2.44m、深さ16cmで、底面は段があり、断面は丸底状を呈している。覆土は3号溝に類似するが、遺物は出土しなかった。本溝は中・近世掘立柱建物群の北限を画しており、これらの遺構に伴うものと思われる。

#### 7区1号溝 (第114図・115図)

7区北端台地部の北寄りに位置し、東西に走向している。約8mの長さが確認されただけである。幅は1.17m～1.78m、深さ42cmである。断面は北半は丸底状を呈し、南半は一段の平坦な面があり急角度で立ち上がり、改修の痕跡がある。溝は東方へ傾斜しており、水が頻繁に流れていたと思われる。遺物は出土しなかったが、極めて新しい溝である。

## 7 井 戸

#### 5区1号井戸 (第116図、図版53-1)

5区台地部の北東寄りに位置しており、石組井戸である。掘形はほぼ円形を呈し、上端径は1.82m～1.98mで、下部へいくに従い径が小さくなっていく。深さは確認できなかった。石組も円形に組んでおり、内径80cmで、ほぼ直に近い状態で積み上げている。井戸には多くの礫が投げ込まれていた。出土遺物としては、平安時代の土器小片や近世陶磁器小片があり、掘立柱建物群に伴うものと思われる。

#### 5区2号井戸 (第116図、図版53-2)

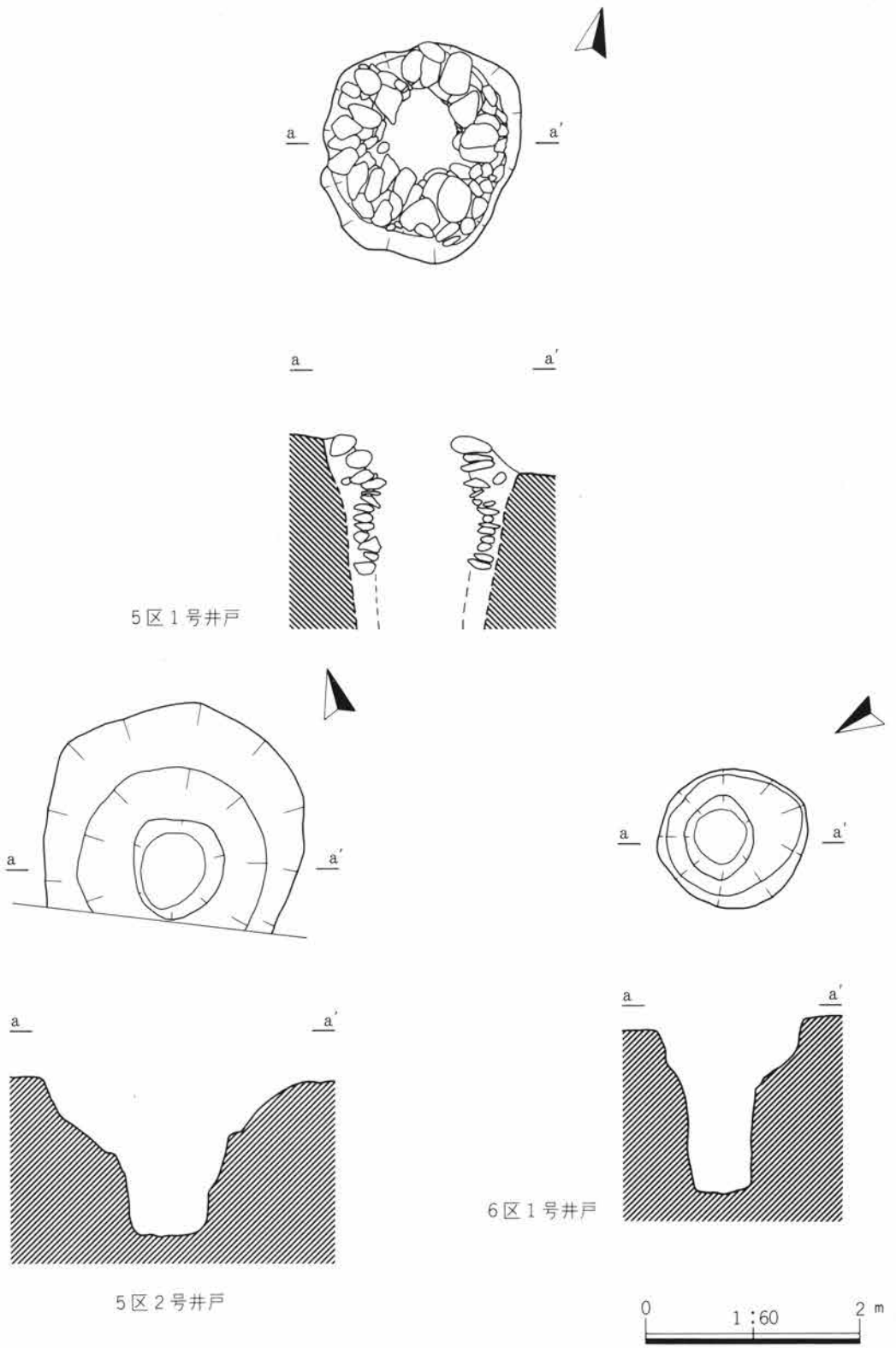
5区台地部の南中央傾斜面南端に位置し、素掘りの井戸である。平面形は円形を呈し、底面は平坦で、下半はほぼ直に立ち上がり、中位に段を持ち、上半はラッパ状に開く。上端径は2.40m、中段径は1.07m、底径は0.60mで、深さは1.48mである。下半は自然に埋没していたが、上半は大小の礫が投げ込まれ、一挙に埋め戻されていた。出土遺物は平安時代の土器片や近世の羽口3点と硯1点が出土した。本井戸も1号井戸と同様に、掘立柱建物に伴うものと思われる。また、5区10号土坑は井戸の可能性がある。

#### 6区1号井戸 (第116図、図版53-3)

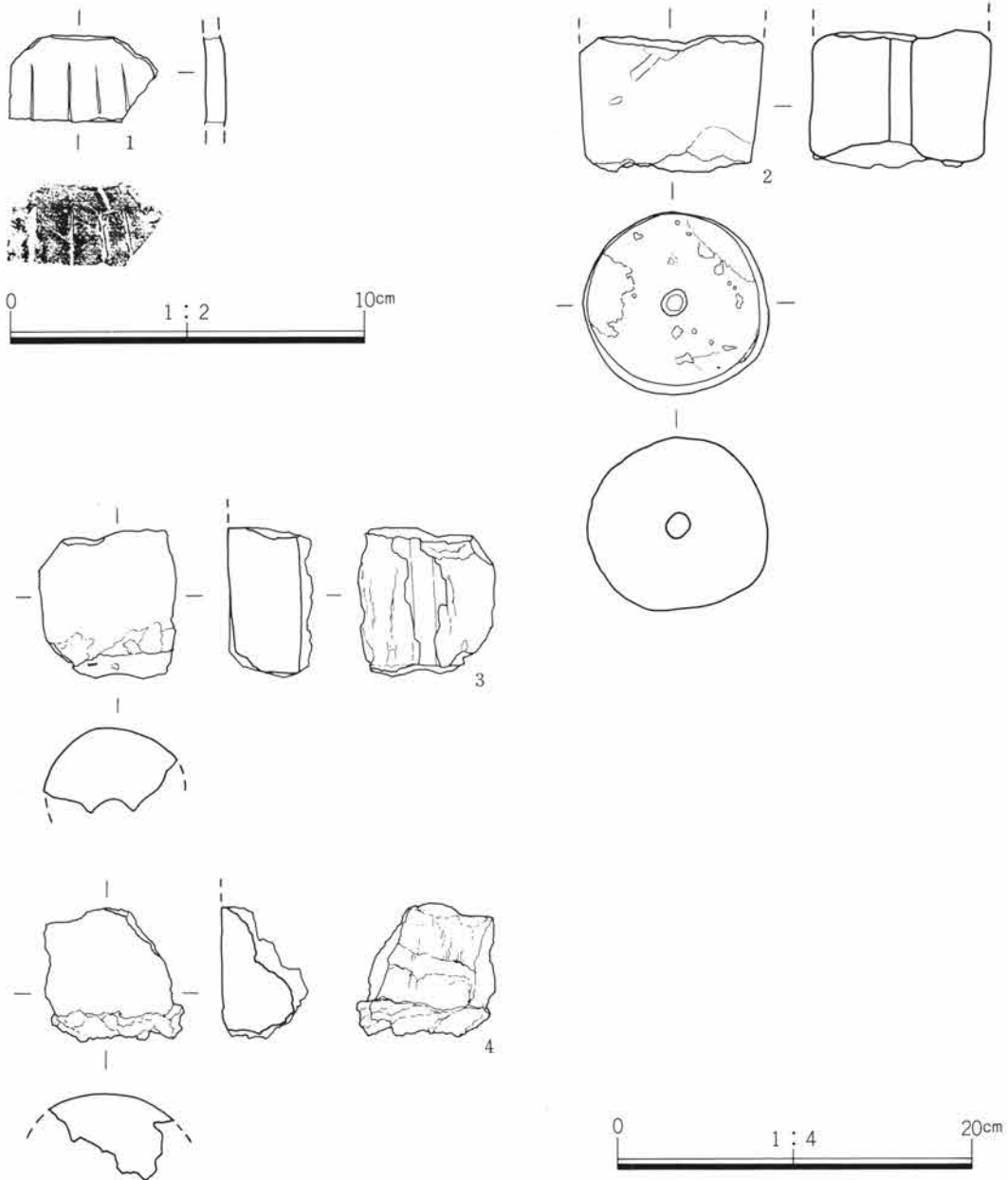
6区南半微高地部の東寄りで、1号住居址や掘立柱柱穴群の西に位置している。平面形は円形を呈し、底面は平坦で、上部までほぼ直に立ち上がり、上端部はやや段を持って開いている。上端径は1.46m、中段径は0.82m、底径は0.52mで、深さは1.65mである。5区2号井戸と同様に、下半は自然に埋没していたが、上半は大小の礫が投げ込まれ埋められていた。遺物は出土せず、時期は断定できないが、本井戸も5区の井戸と同様に、6区の掘立柱建物群に伴うものと思われる。

#### 5区2号井戸出土遺物 (第117図、図版78)

第117図1は須恵器円面硯の脚部と思われる。図中左端に長方形透しの一部が遺存する。外面に4本の線刻が遺存するが、それらは等間隔に並ばない。4.1cm×2.4cmの小片である。内外面ヨコナデを施し、胎土に白色小粒を含んでいる。灰色を呈し、焼成は還元で良好である。



第116図 5区1・2号井戸、6区1号井戸



第117図 5区2号井戸出土遺物

2～4はいずれもフイゴの羽口で、先端部にガラス質の滓が溶着しており、そこから1～2cmほどフイゴ側の表面は灰色に還元されている。2はフイゴ側径10.3cm、先端部径9.4cm、孔径1.2cmで、長さ7.5cmが遺存している。通気孔は不整円形を呈し、ガラス質の滓は磁石に反応する。3は長さ8.3cmが遺存し、孔径2.0cmほどに復元できる。4は長さ7.2cmが遺存し、通気孔部分は遺存しない。3・4のガラス質の滓は磁石に反応しない。3個体とも砂粒を多く含み、褐色～赤褐色を呈する。

他に図示しなかったが、杯・高台碗・甕の破片が出土した。高台碗は右回転糸切りののち「ハ」字状にひらく高台を貼り付け、酸化焰焼成のものである。

## 8 遺構外出土の遺物

### (1) 縄文時代の遺物

#### a 土 器

##### 第I群

第1類 1～3は単軸絡条体原体を横位に施文している。2はR撚り原体である。

第2類 4は口縁部破片である。口縁はやや波状を呈し、内面に傾斜している。施紋は口縁に沿って右下り斜位に貝殻口縁で刺突し、横位二条の沈線文を施している。下部には曲線状の沈線を施し、部分的に刺突を加え、沈線文としている。また、口唇上には不規則な刺突が施されている。5も口縁部破片である。半截竹管工具によると思われる逆「C」字状の刺突が密接施文されている。

第3類 6は胎土中に繊維を含み、器内外面に横位の条痕が認められる。また、横位一列の楔状刺突紋が施されている。8は6と同様に内外面に条痕が認められる。

##### 第II群

第1類 7は口縁部破片である。口縁部形態は折返しとなる。口縁並行に二段鋸歯文を作出し、縦位の刻目を施している。鋸歯文以下は結節のLRを施紋している。

第2類 9は胎土中に繊維を含み、LRとRL原体により羽状文様を作出している。11～15は胎土中に繊維を含んでいる。11はLR原体異方向施紋により、羽状文様を作出している。12も同様であるが、多条の原体を使用している。13は菱形文様を構成している。14・15は底部破片である。15の原体はLRである。

第3類 10はLR原体による斜縄文である。16は底部破片であるが繊維を含んでいない。原体はRLである。17は口縁部破片である。RL斜縄文である。18～23はいずれも胴部破片であり、粗く撚られた原体を使用した単節縄文である。18・19・22・23はRLであり、20・21はLRである。24は屈曲した胴部破片である。地文にLR縄文を施し、上半部には半截竹管による四条余りの沈線文を施している。25は24と同様の工具により曲線文を作出している。26は集合条線を横位と斜位に施文している。27も集合条線により鋸歯状文様を作出している。28はRL縄文である。29はLRの多条原体である。

第4類 30は地文にRL原体を施文し、細い粘土紐を曲線状に貼付している。

##### 第III群

第1類 31は斜位左下りと右下りの沈線を施し、上段に横位沈線を施文している。32は半截竹管工具により、左下り斜位の沈線を施し、次に横位の沈線により格子目状の紋様を構成している。33は底部破片であり、結節のRL縄文を施している。

第2類 34～39は口縁部破片であり、胎土中に雲母片を含んでいる。34は口縁部に沿って二条の節沈線により波状文を作出し、沈線間に山形文を陰刻している。同様の文様は口縁部内面にも認められる。35は円形と楕円区画を構成し、区画内は角押文をめぐらす。さらに、「X」字状区画の粘土紐上にも、角押文を施している。36の断面形態は方形を呈し、内面にはわずかに稜をもつ。口縁に沿った二条の角押文と窓枠区画文を作出している。区画内側は一条の角押文がめぐっている。37も36と同様な

口縁部断面形態であるが、内面にしっかりした稜が認められる。口縁に沿って一条の角押文がめぐる。38は内面にそげる状態の口縁であり、これにより稜線を作出している。口縁に沿って一条の深く刺突された沈線をめぐらしている。39は38に類似するが、逆「C」字状角押文を浅く施紋している。40は縦位曲線的な角押文を作出している。41は器表面に炭化物の付着が認められる。上部にやや隆起した粘土帯の両脇に角押文をめぐらし、下部には粘土紐のおさえによる凹凸を作出している。42・43も41の下部と同様に凹凸が認められる。その他の文様は不明である。44は粘土瘤の横位引き伸ばしにより、窓枠区画文を作出している。区画文下部には楕行する沈線を施している。45は地文にLR縄文を施し、上部に横位一条の角押文をめぐらしている。46は幅広の粘土帯を横位から縦位に連続させて貼付している。横位粘土帯の上部脇には不規則な結節沈線を施している。47は胎土中にわずかに雲母片を含んでいる。二条の沈線が施紋されている。48はほとんど雲母の混入が認められない。縦位鋸歯状の沈線が施紋されている。49は口縁部破片であり、波状を呈する。内面にわずかな稜をもつ。口唇上には円形に近い結節沈線が施紋される。口縁に沿って結節沈線がめぐり、その下位には鋸歯状の結節沈線が施紋される。

第3類 52は幅広の角押文と幅の狭い角押文二条単位で施文している。

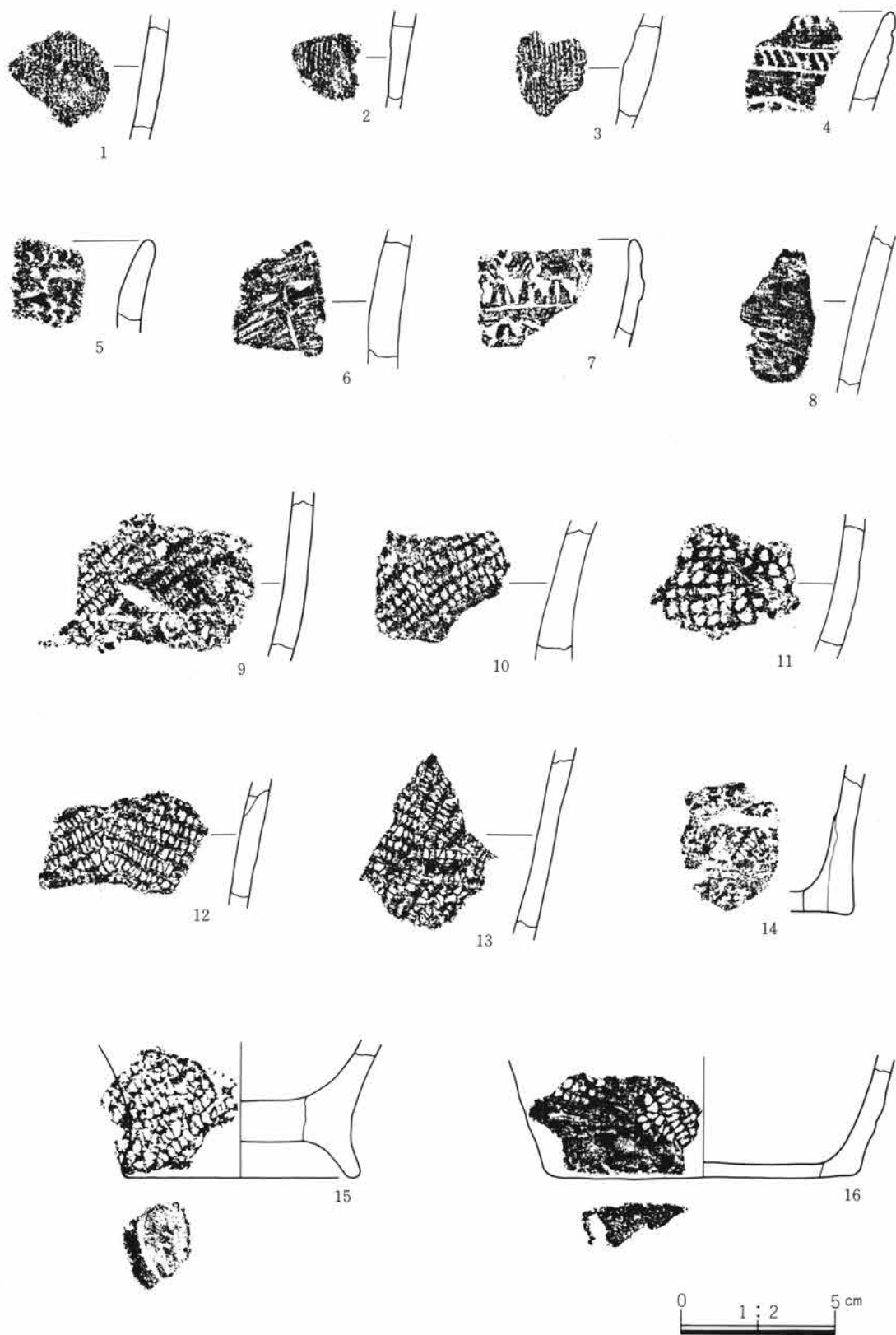
第4類 50は口縁部破片であり、やや波状を呈している。胎土中には雲母片の混入は認められない。文様も認められない。51は底部破片であり、雲母片を含んでいる。文様は不明である。53は底部破片である。胴部から底部への屈曲部は、やや張り出している。

第5類 54は粘土紐を横位に貼付し、以下RL縄文を施している。

#### 第IV群

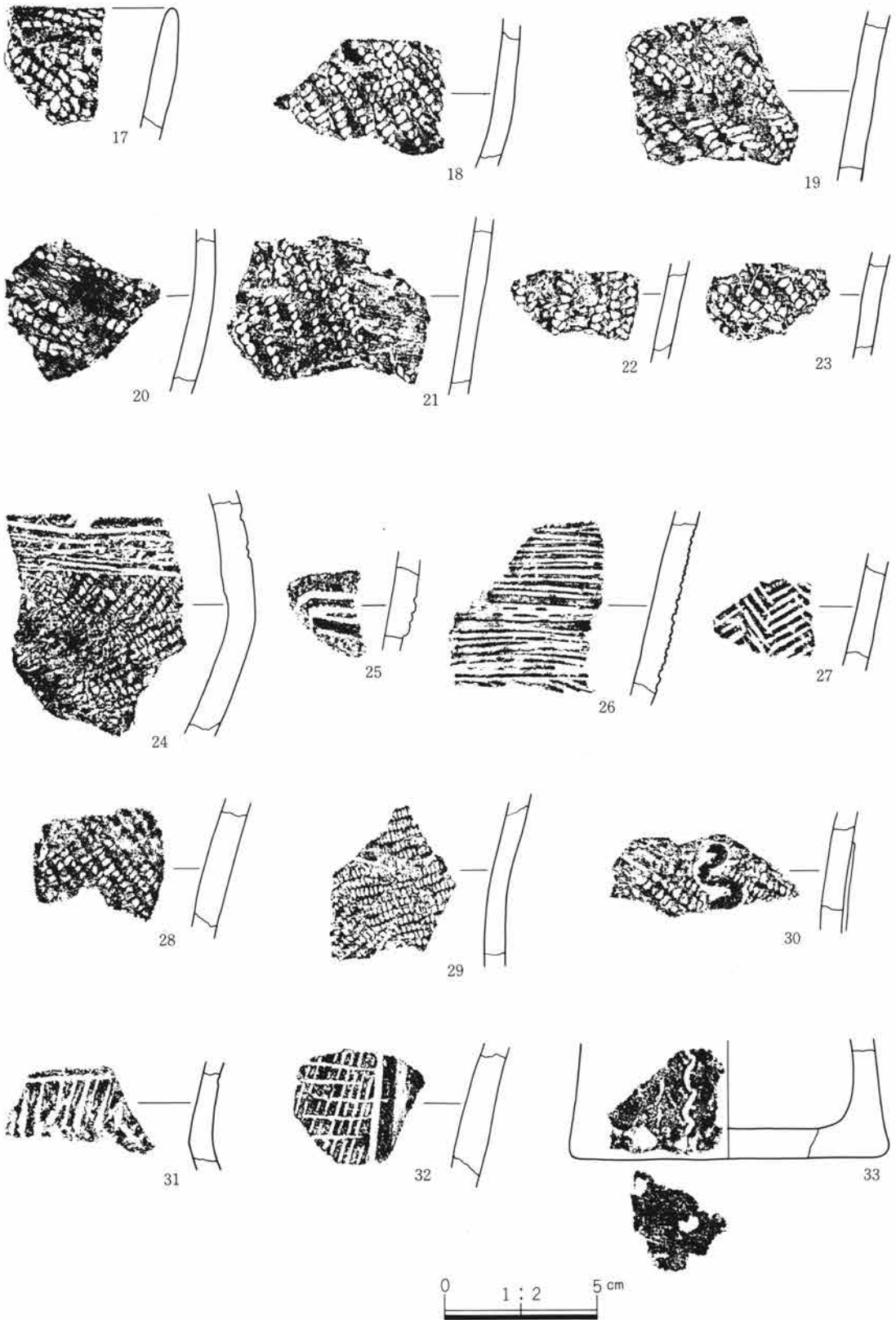
55は口縁部破片であり、やや内湾している。口縁部に横位二条の沈線をめぐらし、以下左上りの曲線的な沈線を施している。地文はLR縄文である。

以上、本遺跡出土土器について時期別に分類し記述した。類別した土器の所属時期は、以下のごとく位置づけられよう。第I群は早期、第II群前期、第III群中期、第IV群が後期である。第I群の第1類は単軸絡条体であるが、草創期の原体とは異なり、三戸・田戸式ないしはその直前に位置づけたい。第2類常世式比定、第3類茅山下層式と考えられる。第II群第1類は木島式比定、第2類は黒浜式、第3類は諸磯b・c式である。第III群第1類は五領ケ台式、第2類は五領ケ台直後型式を含め、阿玉台Ia・Ib・II式、3類は勝坂式、第4類は中期に位置づけられると思われる底部破片などである。第5類は加曾利E4式と考えられる。第IV群は一点のみの出土である。加曾利B3式であろう。

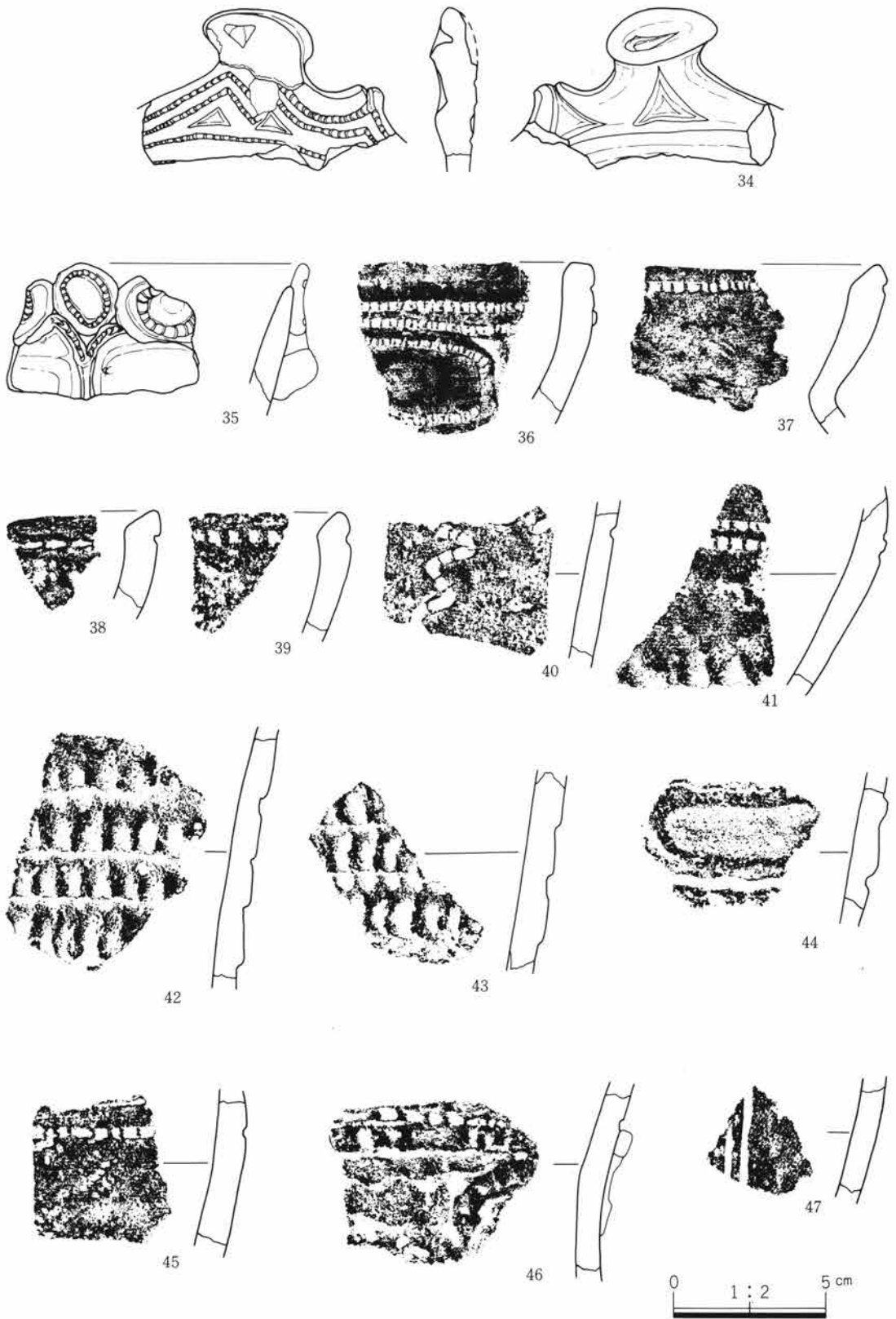


第118図 縄文時代 土器 1

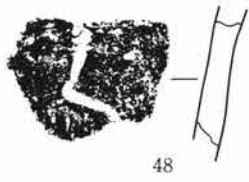




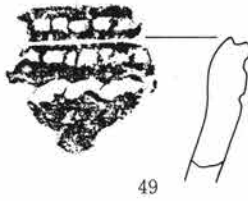
第119図 縄文時代 土器 2



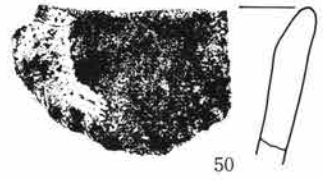
第120図 縄文時代 土器 3



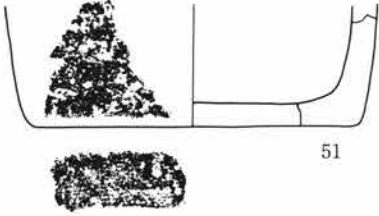
48



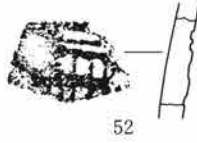
49



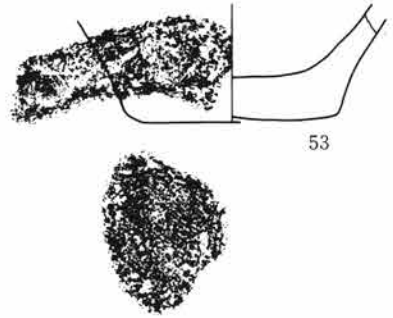
50



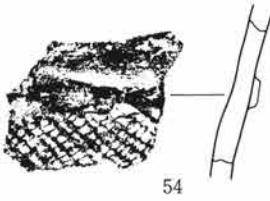
51



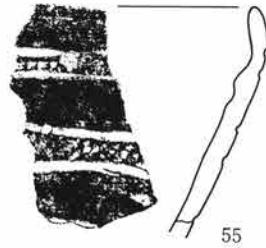
52



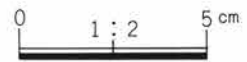
53



54



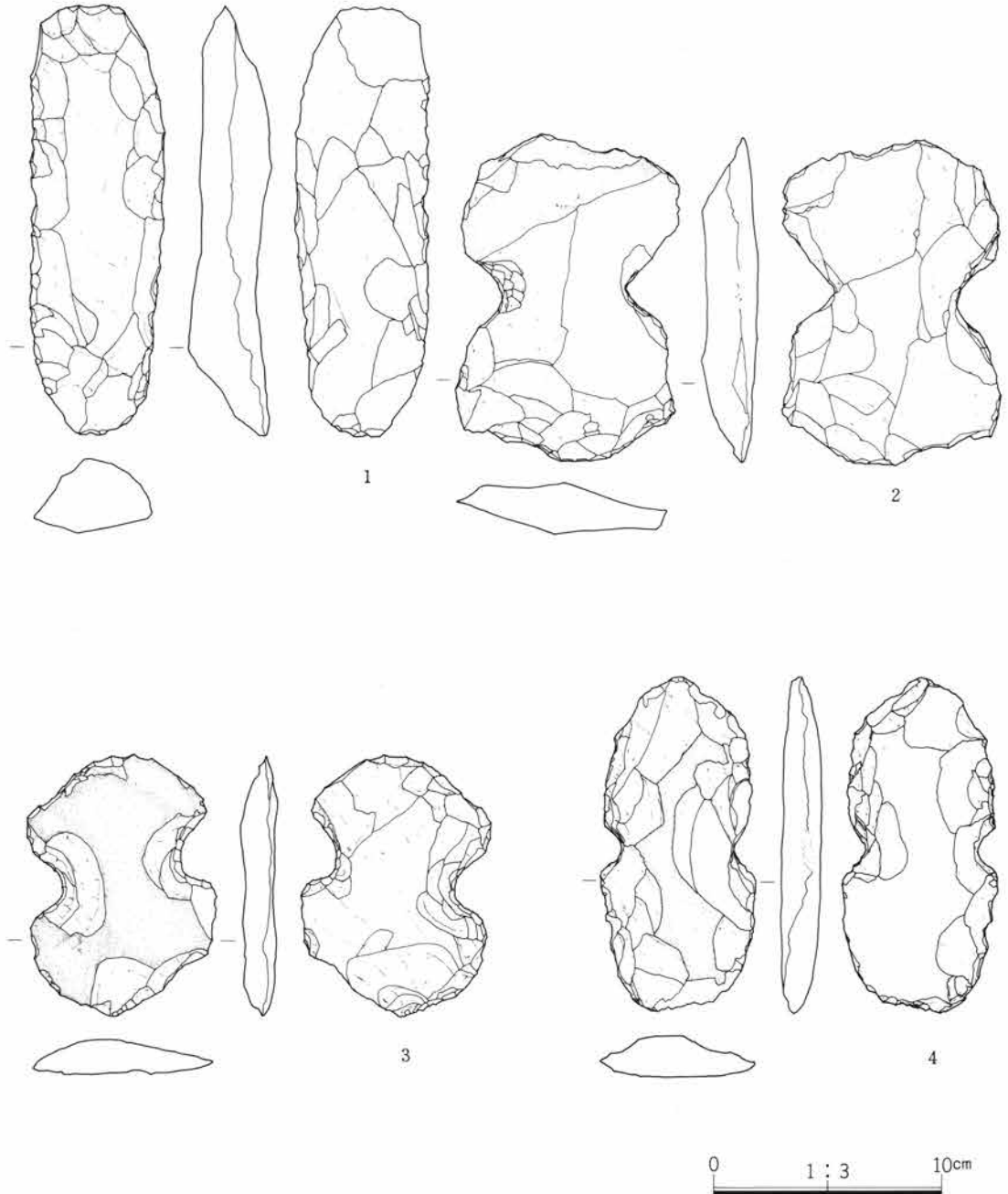
55



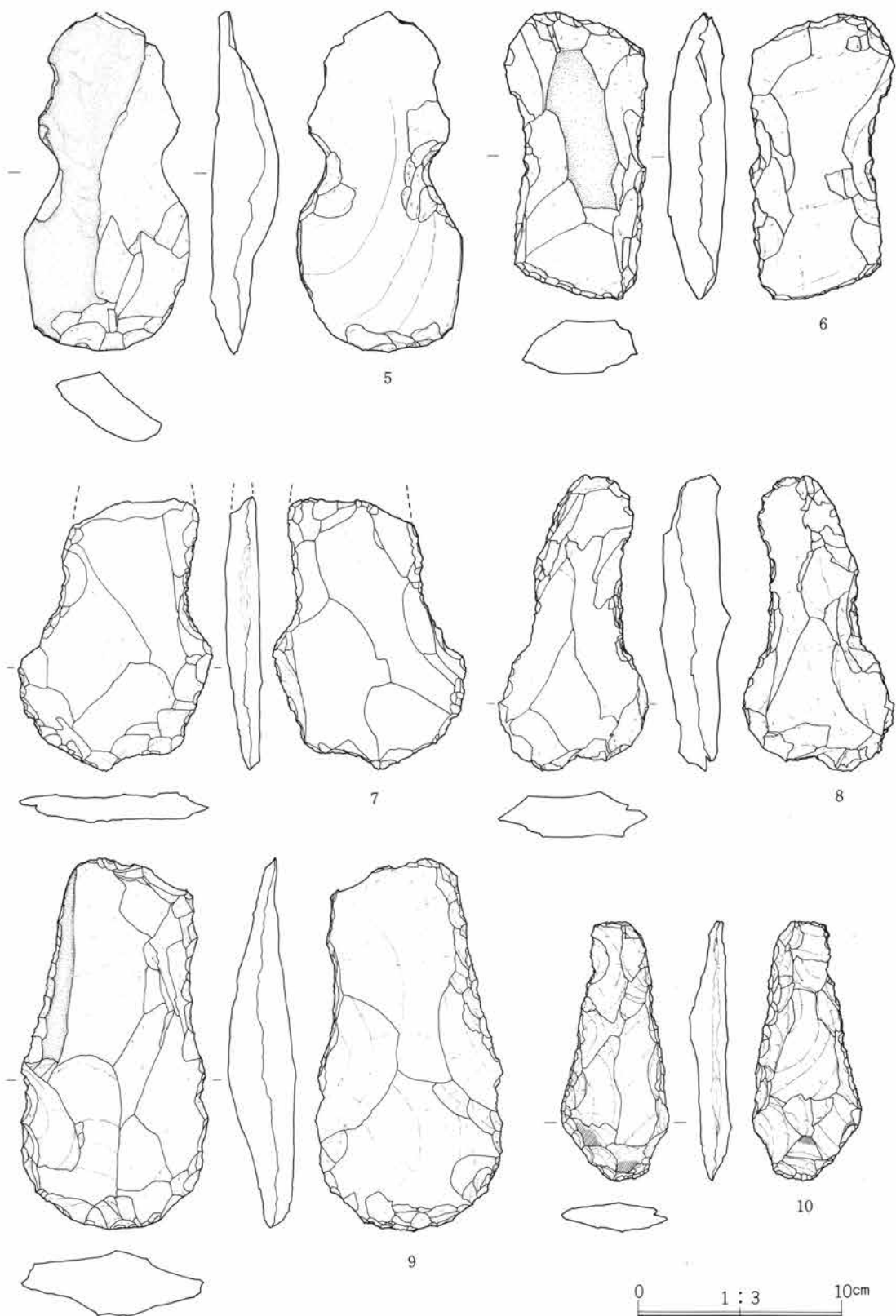
第121図 縄文時代 土器 4

b 石 器 (第122～127図、図版98～101)

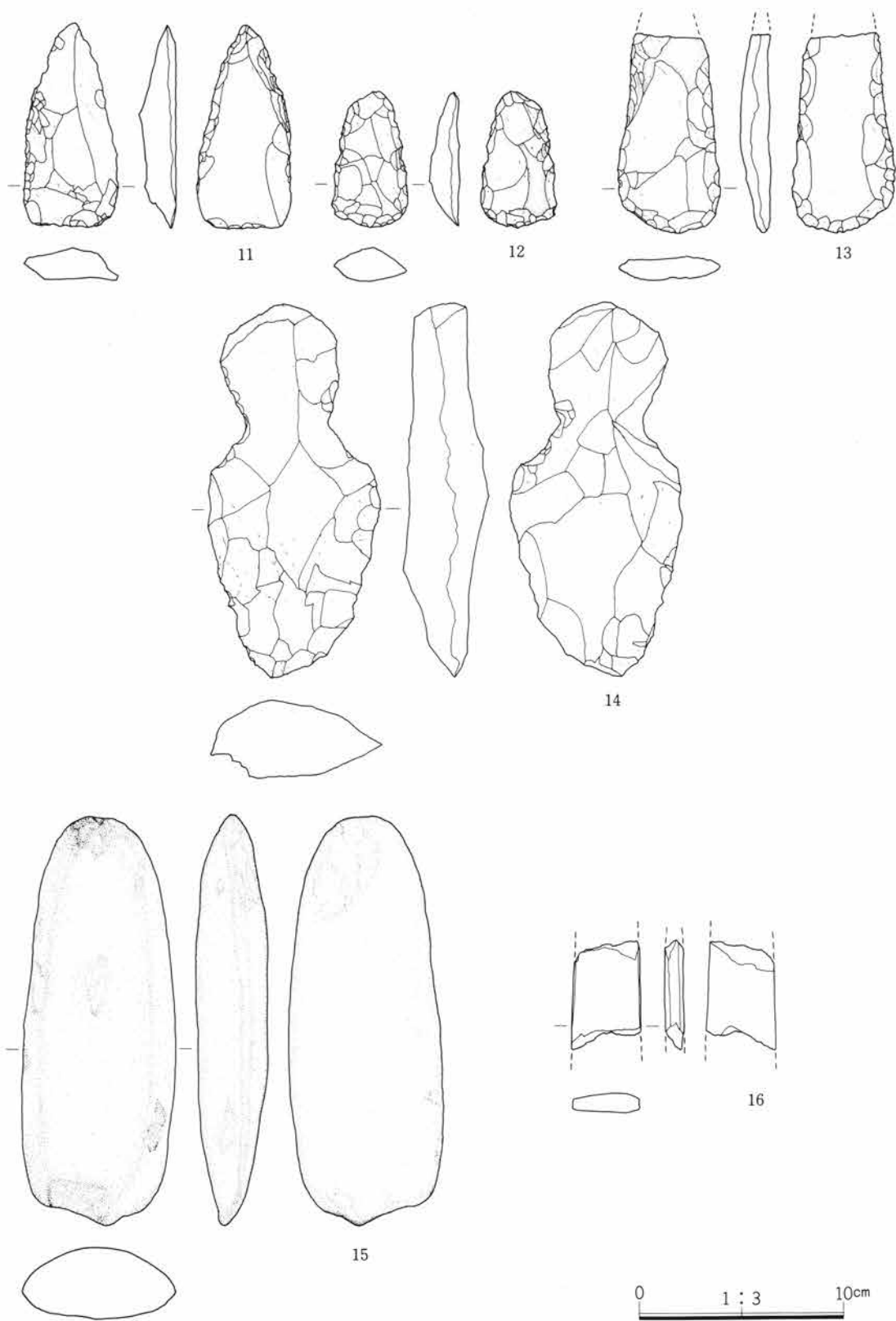
藪田遺跡の調査範囲からは、少量ではあるが各種の石器や剥片が出土した。石器は5区からの出土が多いが、出土状態には傾向は認められない。また、遺構より出土したものもあるが、時代性を表わすものではなく、グリッド出土の石器と同一に、分類上、本項で扱うこととした。



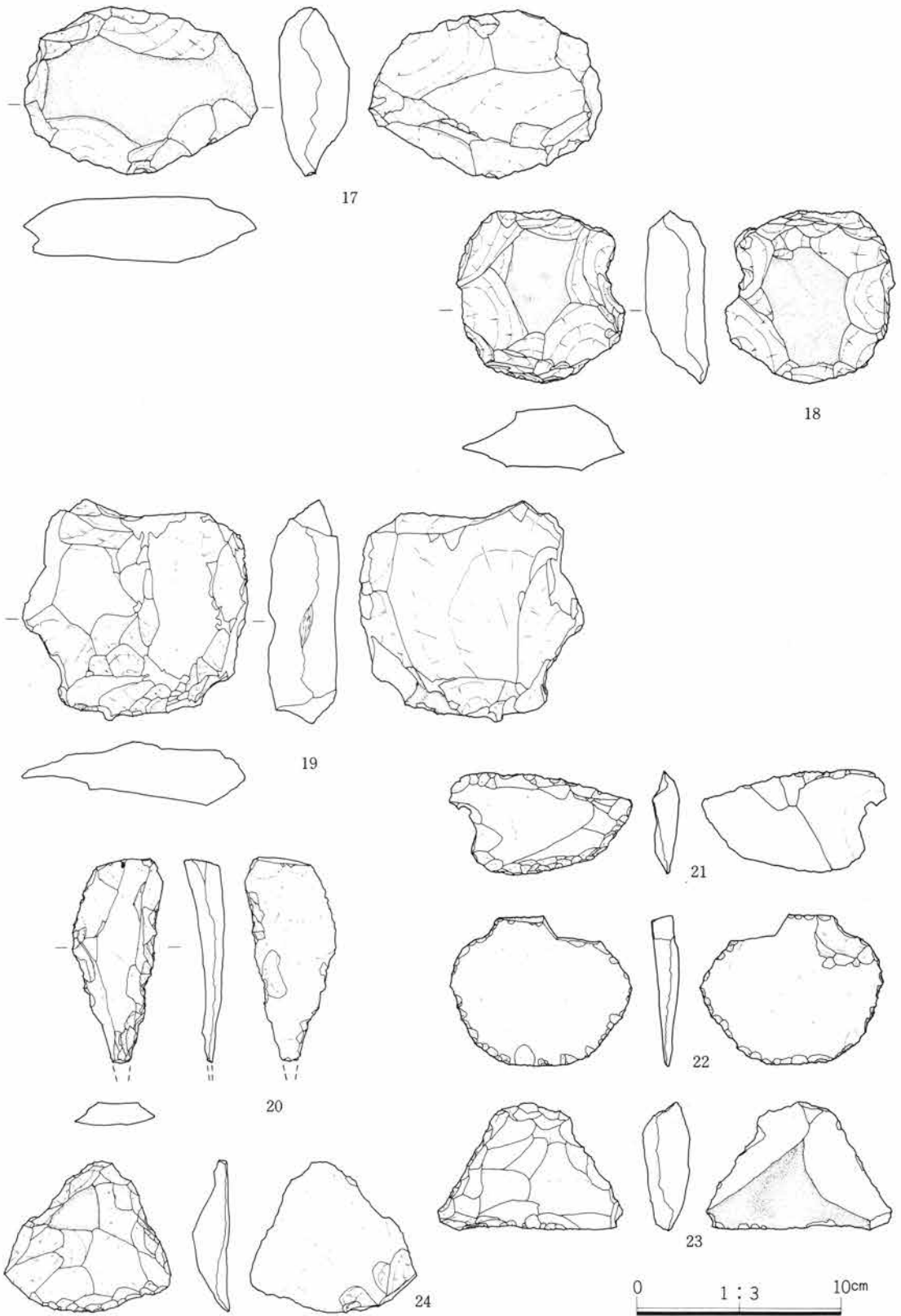
第122図 縄文時代 石器1



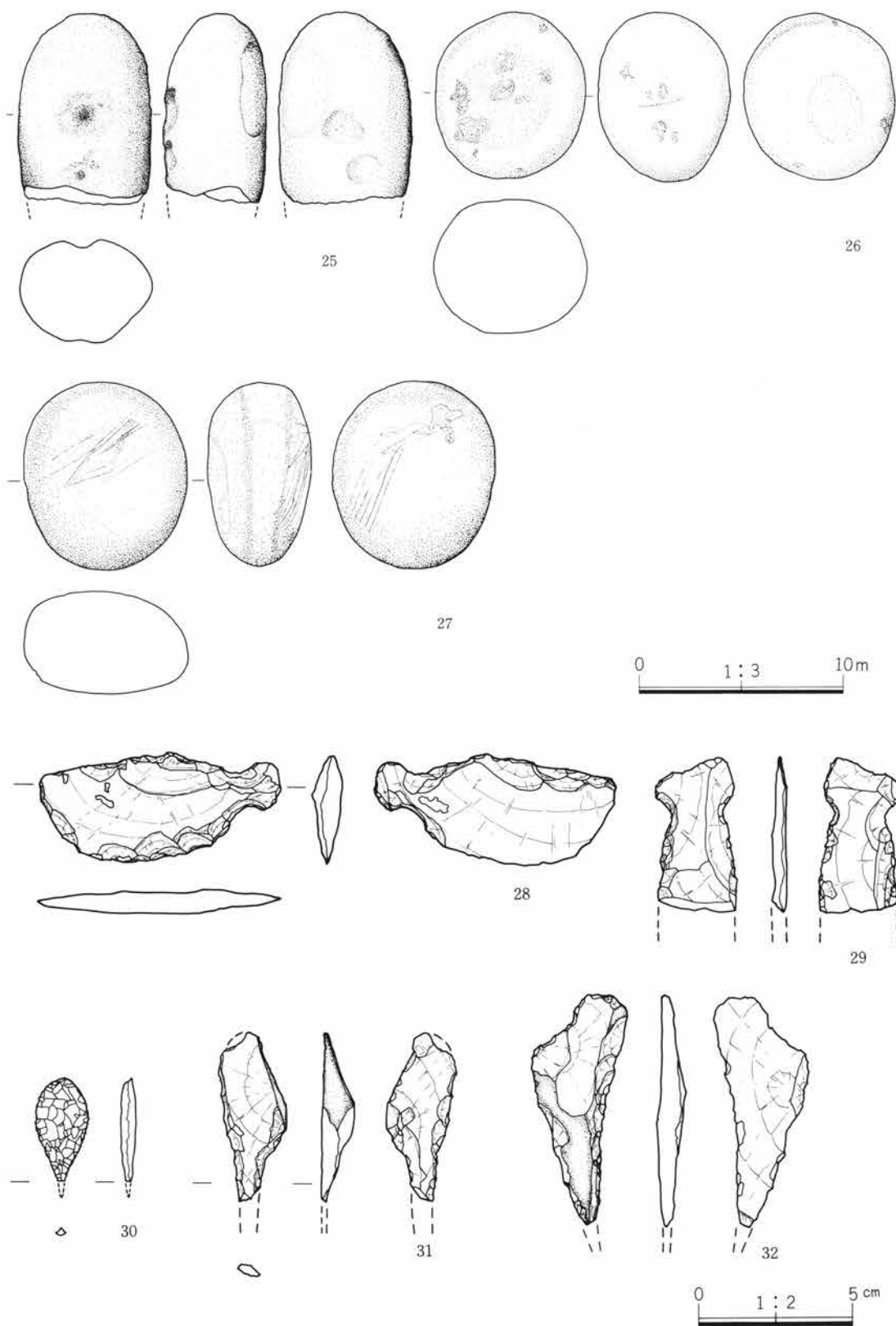
第123図 縄文時代 石器 2



第124図 縄文時代 石器 3

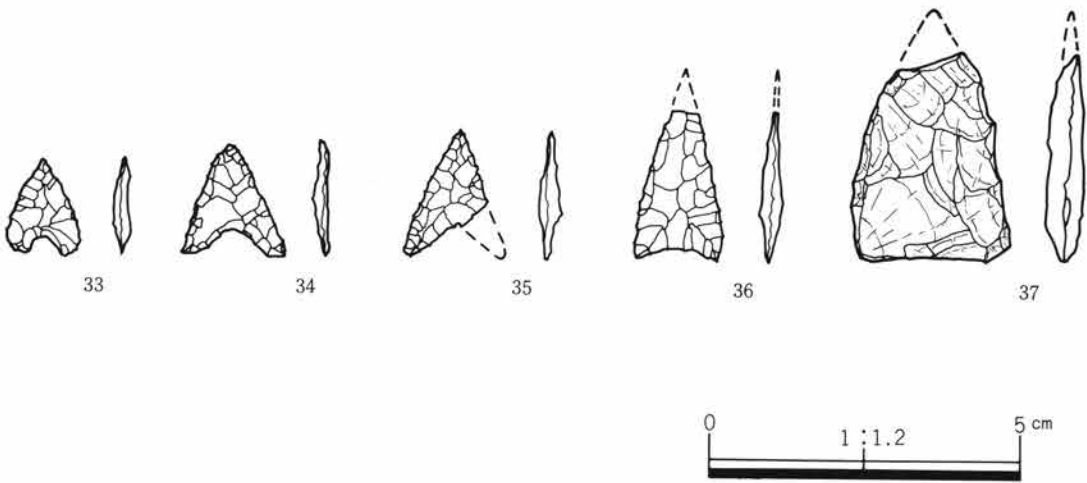


第125図 縄文時代 石器4



第126図 縄文時代 石器 5





第127図 縄文時代 石器6

第2表1 石器一覧表 (第122・123図、図版98)

No	器種	長さ(cm)	幅 (cm)	重さ(g)	石質	出土位置
備考						
1	打製石斧	18.7	5.6	440	黒色頁岩	7区 0-05 第Ⅲ層
両側縁がほぼ並行になり、刃部先端方向より剥離を施した、円のみ形の打製石斧である。器面の風化が著しい。						
2	打製石斧	14.0	9.5	335	黒色頁岩	7区 Q-15 第Ⅲ層
表面の一部に自然面を残している。両側縁にえぐりを入れ、分銅形の打製石斧としている。						
3	打製石斧	11.2	8.0	160	黒色頁岩	7区 Q-15 第Ⅲ層
No 2と同様に自然面を残している。剥片を素材とした分銅形の打製石斧である。						
4	打製石斧	14.5	6.7	250	黒色頁岩	5区 2号井戸
長楕円形の剥片を素材とし、両側縁にわずかにえぐりを入れている。基部平面形は尖り、刃部は方形に近い。						
5	打製石斧	16.5	8.1	320	凝灰質泥岩	4区 O-33 第Ⅱ層
表面に自然面を残し、主要剥離面の打点は横位である。裏面の調整加工は着柄部分以外は認められない。風化が著しい。						
6	打製石斧	13.4+α	8.8	230+α	黒色頁岩	5区 D-08 第Ⅰ層
基部は欠損している。両側縁にはこまかな調整加工が施されている。						

第2表2 石器一覧表 (第123~125図、図版99・100)

7	打製石斧	7.6	9.1	485	黒色頁岩	5区 5号住居址
表面の一部に自然面を残している。両側縁にこまかな調整加工が施されている。器体幅は刃部で最大となる。						
8	打製石斧	13.3	6.2	325	黒色頁岩	5区 E-03 第II層
表面に自然面を残す。裏面は周辺部のみ調整加工が施されている。刃部は片刃となり、特に入念に調整されている。						
9	打製石斧	13.4	7.4	275	黒色頁岩	6区 M-10 第II層
器中央部に稜線が走り、基部は断面菱形となる。刃部には使用による破損が認められる。						
10	打製石斧	12.6	5.3	120	黒色頁岩 (化石含有)	5区 D-08 第I層
刃部表面右側縁には磨耗痕が認められる。バチ形に近い形態であるが、刃部の先端は尖っている。						
11	打製石斧	9.9	4.6	84	黒色頁岩	5区 第I層
扁平な剝片を素材とした小形の打製石斧である。刃部先端方向から剝離し、片刃石斧としている。						
12	打製石斧	6.6	3.7	38	黒色頁岩	5区 K-05 第II層
裏面の一部に自然面を残している。小形であり、かつ刃部の形状からして、削器としての機能も考えられよう。						
13	打製石斧	9.5+ $\alpha$	5.0	95+ $\alpha$	石英閃緑岩 (玢岩)	6区 6号土坑
基部は欠損している。刃部には磨耗痕が認められる。						
14	打製石斧	18.1	8.3	475	黒色頁岩?	5区 第I層
刃部先端は尖り、尖頭状を呈している。基部は細く、横断面は長方形となる。裏面は両側縁方向より剝離されている。						
15	磨製石斧	19.8	7.4	805	斑粉岩	5区 T-20 第I層
刃部と基部の一部に使用によると思われる破損が認められる。大形で片刃の磨製石斧である。						
16	磨製石斧	4.3+ $\alpha$	3.4+ $\alpha$	28.2+ $\alpha$	蛇紋岩 (石英質?)	5区 V-02 第I層
刃部と基部が大きく破損している。両側縁はしっかり研磨され、面取りされている。						
17	礫器	8.2	11.5	345	黒色頁岩	5区 第I層
表面に大きく自然面を残している。厚い剝片を素材とし、右側縁部は裏面→表面、左側は表面→裏面へ調整している。						
18	礫器	8.5	8.0	255	黒色頁岩	5区 D-17
器表面は赤褐色に変色している。刃部裏面から調整されている。						

第2表3 石器一覧表(第125・126図、図版100・101)

19	礫器 ?	10.9	11.0	420	黒色頁岩	5区 第I層
基部裏面に一部自然面を残す。刃部は欠損している。裏面は大きく第一次剝離面を残している。						
20	削器	10.0+ $\alpha$	3.9	60.1+ $\alpha$	黒色頁岩	5区 F-09 第I層
打面を残した縦長状の剥片を素材とした削器である。剝離角は54度である。						
21	石匙 ?	5.1	9.0+a	41.4+ $\alpha$	黒色頁岩	5区 H-11 第I層
左側縁部は欠損している。表面のみ調整加工を施している。横形石匙に類するものであろう。						
22	削器	7.3	8.9	71	黒色頁岩	5区 第I層
打面を残した、薄い剥片を素材とした削器である。縁部全体に微細な調整加工が施されている。						
23	不定形石器	6.3	9.1	112.9	泥質砂岩 ?	5区 L-08 第I層
表面には大きく自然面を残す。打面調整をおこなっている。平面形は台形状を呈し、調整加工が施されている。						
24	不定形石器	7.4	8.2	86.6	黒色頁岩	5区 第I層
表面には自然面を残している。裏面の調整加工は認められない。八角形状を呈し、縁部には微細な調整が施されている。						
25	凹石	9.3+ $\alpha$	6.5	470+ $\alpha$	輝石安山岩	5区 B-10
器中央部で破損している。一側辺部は研磨されている。片面に二孔、他面に一孔の凹が認められる。						
26	磨石	8.2	7.4	540	花崗閃緑岩	5区 H-15 第I層
全周に研磨痕が認められ、部分的には敲打痕も認められる。						
27	磨石	8.9	8.0	535	輝石安山岩	5区 Q-13 第I層
両側縁部に研磨および敲打痕が認められる。						
28	石匙	7.8	3.4	25.8	黒色頁岩	5区 5号土坑
裏面には第一次剝離面を残している。横形石匙である。						
29	石匙	5.1+ $\alpha$	2.5	8.1+ $\alpha$	黒色頁岩	5区 第I層
刃部が欠損している。えぐり部および刃部に荒い調整加工が施されている。						

第2表4 石器一覧表 (第126・127図、図版101)

30	石 錐	3.4+ $\alpha$		2.8+ $\alpha$	珪質頁岩	5区 N-12 第I層
器全体が微細な押圧剥離により調整されている。刃部先端の一部は欠損している。						
31	石 錐	5.5+ $\alpha$		8.5+ $\alpha$	黒色安山岩	5区 Q-14 第I層
非調整打面を残し、刃部のみ調整加工の施された石錐である。刃部先端は欠損している。						
32	削 器 ?	7.6+ $\alpha$		14.0+ $\alpha$	黒色頁岩	5区 J-08 第I層
No31と同様に製作された剥片を素材としている。表面先端部に自然面を残している。器側縁部中央に調整が施されている。						
33	石 鏃	1.5	1.2	0.4	黒曜石	5区 V-08 第I層
表面の一部に自然面を残し、裏面には第一次剥離面が認められる。先端部のみ微細な調整が施されている。						
34	石 鏃	1.9+ $\alpha$	1.7	0.5+ $\alpha$	珪質頁岩	5区 2号土壇
表・裏面ともに第一次剥離面を残している。先端部および脚部の一部が欠損している。						
35	石 鏃	2.1	1.1+ $\alpha$	0.5+ $\alpha$	珪質頁岩	5区 U-09 第I層
脚部の一部が欠損している。表・裏面とも入念な押圧剥離により調整されている。						
36	石 鏃	2.4+ $\alpha$	1.4	1.1+ $\alpha$	(細粒黒色の安山岩?)	5区 S-01 第I層
先端部欠損。						
37	石 鏃	3.4+ $\alpha$	2.5	5.4+ $\alpha$	(細粒黒色の安山岩?)	5区 第I層
表・裏面とも第一次剥離面を残す。先端部欠損。部分的に荒い調整が施されているだけで、未製品の可能性もあろう。						

## (2) 弥生時代の遺物 (第128図、図版102)

遺構外より出土した弥生時代の土器は60点近くあり、紡錘車が1点ある。これらの土器は1点を除き、すべて5区1号住居址周辺のグリッドより出土している。例外の1点は第128図の1の土器で、同じ5区のU-11グリッドの表土より出土している。

第128図1は筒形土器の胴部中位から口縁部にかけての破片で、胴部中位はやや括れ、口縁部に向って膨みを持って立ち上がり、口縁部はやや内湾する。口唇部は内面に向って斜めに切れ込んでいる。文様は、原体無節Lの縄文をあらかじめ、縦位と横位の文様帯となる部分では条の走向を変えて施文し、沈線により直線的に区画し、無文帯を研磨し、縄文施文帯と無文帯を交互に配している。磨消縄文の手法により、王字状の変形工字文を構成している。胎土には小石や砂粒を多く含み、焼成はやや不良で、色調は外面が灰褐色、内面がにぶい黄橙色を呈している。野沢I式に比定される。

2～5は折り返し口縁を持つ甕の口縁部で、ともに右回転の簾状文と波状文を施している。2は口径約18cmの法量と思われ、 $\frac{1}{2}$ ほど残存している。頸部下半に1段の簾状文が見え、頸部上半から口縁部にかけて5段の波状文が施されている。胎土には砂粒を多く含み、焼成は普通で、色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈している。3～5は頸部上半から口縁部にかけて3段の波状文が施されている。

6・7は同一個体と思われる壺の胴部上半の破片で、一段の簾状文の下部に2段の波状文が施されている。ともに右回転である。胎土には微砂粒を含み、焼成は固く良好で、色調は外面が赤褐色と黒褐色で、内面は黄褐色を呈している。

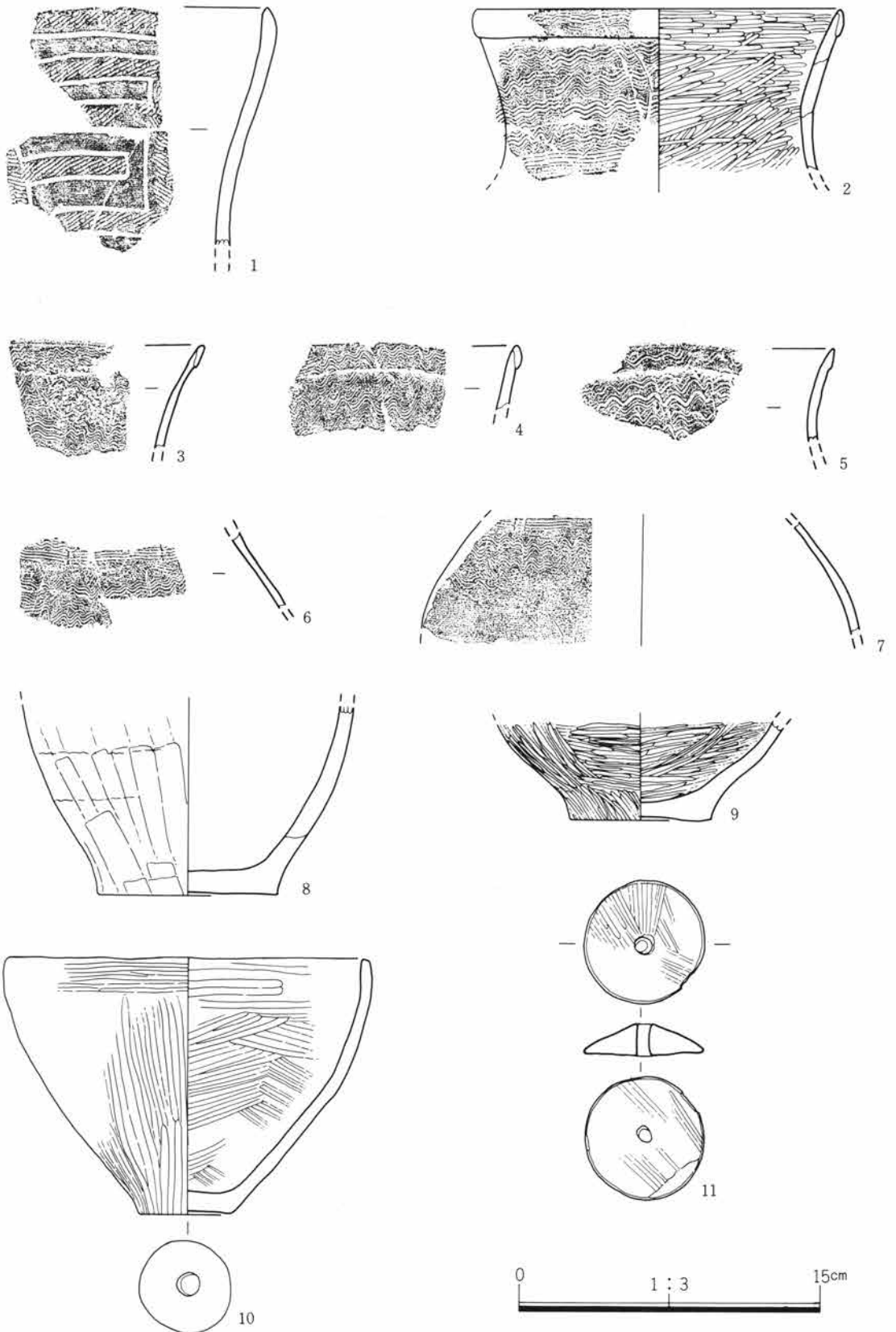
8は甕の胴下半から底部にかけての破片で、底部は平底で、体部は膨らみを持って立ち上がる。底径は9.0cmである。胴部外面は縦方向のヘラケズリ後、同じ方向のナデが加えられ、内面は横方向にナデが加えられている。胎土は砂粒を多く含み、焼成は普通で、色調は内外面ともににぶい黄橙色を呈している。

9は壺と思われる胴下半から底部の破片で、底部はやや上底で、胴部は膨らみを持って大きく外反して立ち上がる。底径は7.0cmである。内外面は縦方向や斜め方向に丁寧に研磨されている。胎土には微砂粒を少量含み、焼成は固く良好で、色調はにぶい黄橙色をしている。

10は甕で $\frac{1}{2}$ ほど欠損している。底部には焼成前穿孔の径1.0cmの小孔がひとつあり、体部下半は直線的に外反して立ち上がり、上半はやや膨らみを持ち、口縁部はやや内湾ぎみとなる。器高は12.5cm、口径18.0cm、底径4.5cmである。口縁内外面は横方向に研磨され、以下は外面は縦方向、内面は斜め方向に研磨されている。胎土は砂粒を少量含み、焼成は良好で、色調は内外面ともに浅黄橙色を呈している。

11は土製の紡錘車で、円形を呈し、断面は三角形を呈している。径は6.0cm、厚さは1.6cm、重さは48gである。ほぼ中央に径0.6cmの焼成前の穿孔による小孔がある。

2～10の土器は5区1号住居址の時期とほぼ同じと考えられ、後期中葉の頃と考えられ、11の紡錘車もこれに伴出するものと思われる。



0 1 : 3 15cm

第128図 遺構外出土遺物 弥生土器

## (3) 平安時代の土器 (第129～145図、図版103～114・118)

ここでは主として遺構外から出土した土器を扱うが、奈良時代の遺物もここに含めてある。各土器の観察は341頁以下の観察表に一括して載せてあるので、そちらを参照されたい。

また、蓋、杯・椀、皿については後述のまとめの項の内容と重なる部分が多いので、ここでは図示にとどめることとする。

## 須 恵 器

蓋 (第129図1～13、図版103・104)

杯 (第130図1～13、第131図15～第137図89、図版105～111)

椀 (第130図14、第138図1～第142図36、図版112～114)

皿 (第145図1～16、図版118)

<sup>註1</sup>  
高杯 (第146図2～6、図版104)

第146図2・3は皿状の杯部をもつ高杯である。脚部との接合痕をよく残している。4～6は脚部で、6の裾部は打欠きの可能性がある。

片口・鉢 (第147図1～6、図版119)

第147図1は片口鉢で、片口と認められるのはこの一点のみである。

2～6は底部に円盤状の台をもつ鉢で、全形の判明するのは2のみである。この外底周縁に1カ所糸切痕がみられる。

壺 (第148図1～11、図版120)

第148図1は長頸壺の体部であろう。外底に右回転糸切痕をもつ。<sup>註2</sup>2・3は小型の短頸壺である。2は外底に右回転糸切痕をもつ。4・5は多口壺の注口部と考えられる。ミニチュア土器の可能性もある。6～9は長頸壺である。6の口縁部は上方への発達が著しく、7は上下に発達している。8は高台の接合部を残している。10・11は短頸壺である。10の方が肩の張りが強い。

甌 (第151図、図版122)

第151図1は甌である。底部は断面方形の高台状を呈し、蒸気孔は橋状部によって構成する。体部に把手や鏝をもたない。同様の器形は5区41号土壇29(134頁)にみられる。

甕 (第151図2～第152図1～8、図版122)

第151図2～6は口径8～15cm代の甕である。全形の判明するものは2のみである。7は長い口頸部をもたない広口の甕である。

第152図1～6は甕口縁部で、口頸部にクシ描波状文をもつものともたないものがある。7・8は底部で、7は外底周縁にヘラケズリを施す。

#### 硯（第154図1・2、図版119）

第154図1・2は円面硯の脚部であろう。ともに端部の遺存がない。他に硯とみられるものは5区16土壇出土例（第94図10、122頁）、5区2号井戸出土例（第117図1、147頁）がある。

#### 羽釜（第153図1～9、図版129）

第153図1～9は羽釜の口縁部片で、全形の判明するものはない。1～5は口縁部が内傾し、6～9は直立のものである。焼成は酸化焰、還元焰の両者がある。

#### 遺構外出土のヘラ記号のある須恵器（第156図1～4、図版123）

ここでは遺構外から出土したヘラ記号のある須恵器を扱う。各遺構出土分については、それぞれの遺構出土遺物の図を参照されたい。

第156図1は小型高台碗の底部片で、ヘラ記号は外底の高台内側にある。切離しは不明だが、左回転ヘラケズリを施したのち、高台を貼り付ける。胎土に白色小粒・小石を含み、焼成は還元・硬質で、灰色を呈する。5 H07グリッド出土。

2は盤形の大型高台皿の一部と考えられる。高台の剥れた痕が残り、ヘラ記号は外底の高台内側にある。「罍」字状にも見えるが、記号の大半を欠き判読できない。胎土に白色小粒を含み、焼成は還元・硬質で、灰色を呈する。5 J06グリッド出土。

3は須恵器壺または小型甕の体部片で、図中上端は口頸部の剥れた面が残っている。ヘラ記号は肩部外面にあり「米」字状を呈する。図中左・中央・右の3本とすると、筆順は中央→右→左の順である。内面に叩キ・ナデを施し、外面はヨコナデで仕上げる。胎土に白色粒を含み、焼成は還元・硬質で、灰色を呈する。5 Q01グリッド出土。

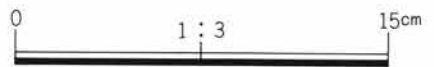
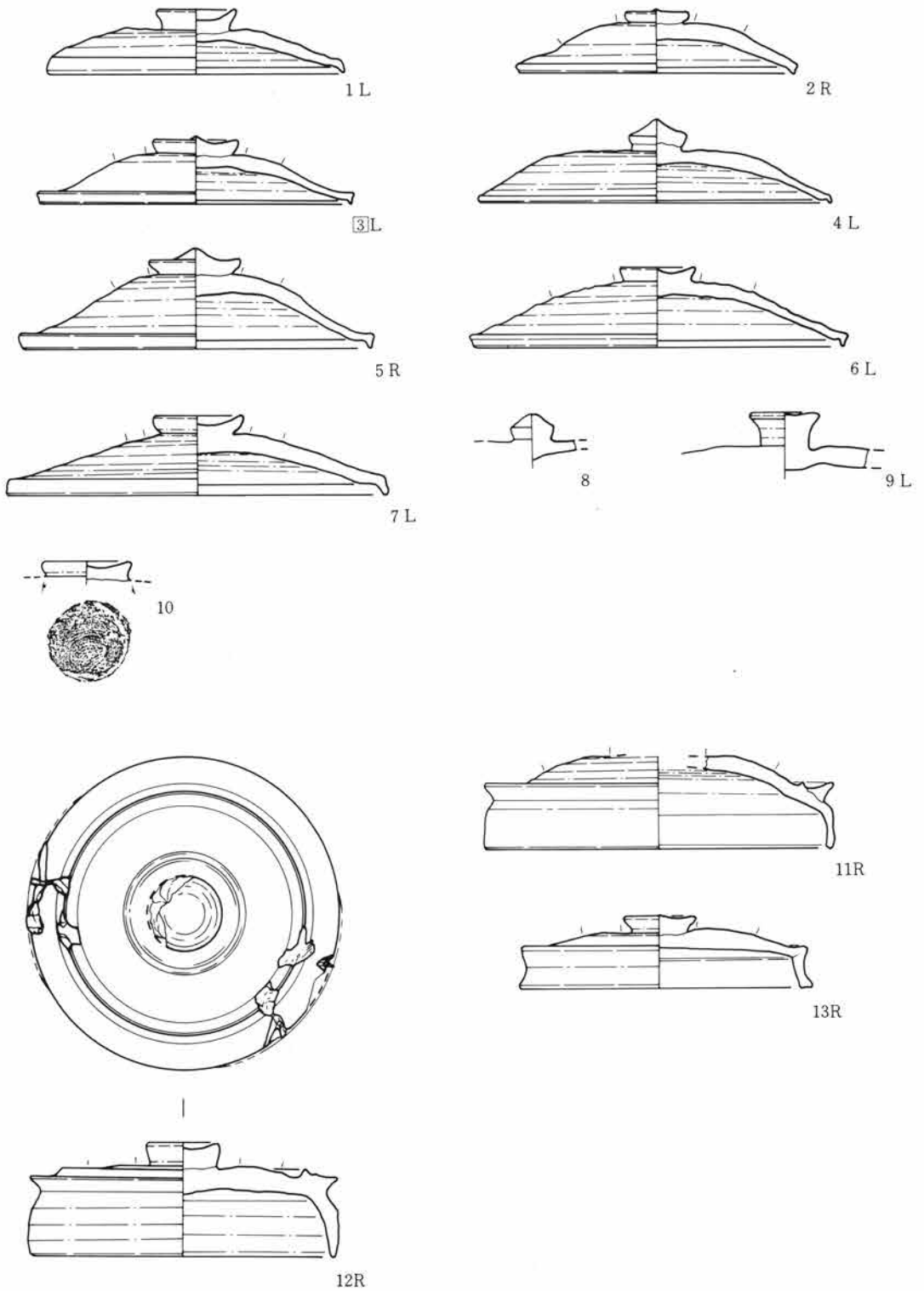
4は須恵器甗の底部片と考えられる。外面下端にヘラケズリを施して整える。ヘラ記号はその上方外面にある。輪積み成形痕が残っている。胎土に白色小粒・石英粒を多く含み、焼成は還元・硬質で、灰白色を呈する。素地に気孔が多い。5 R01グリッド出土。

#### 遺構外出土須恵器甗体部叩キ目（第155図1～7）

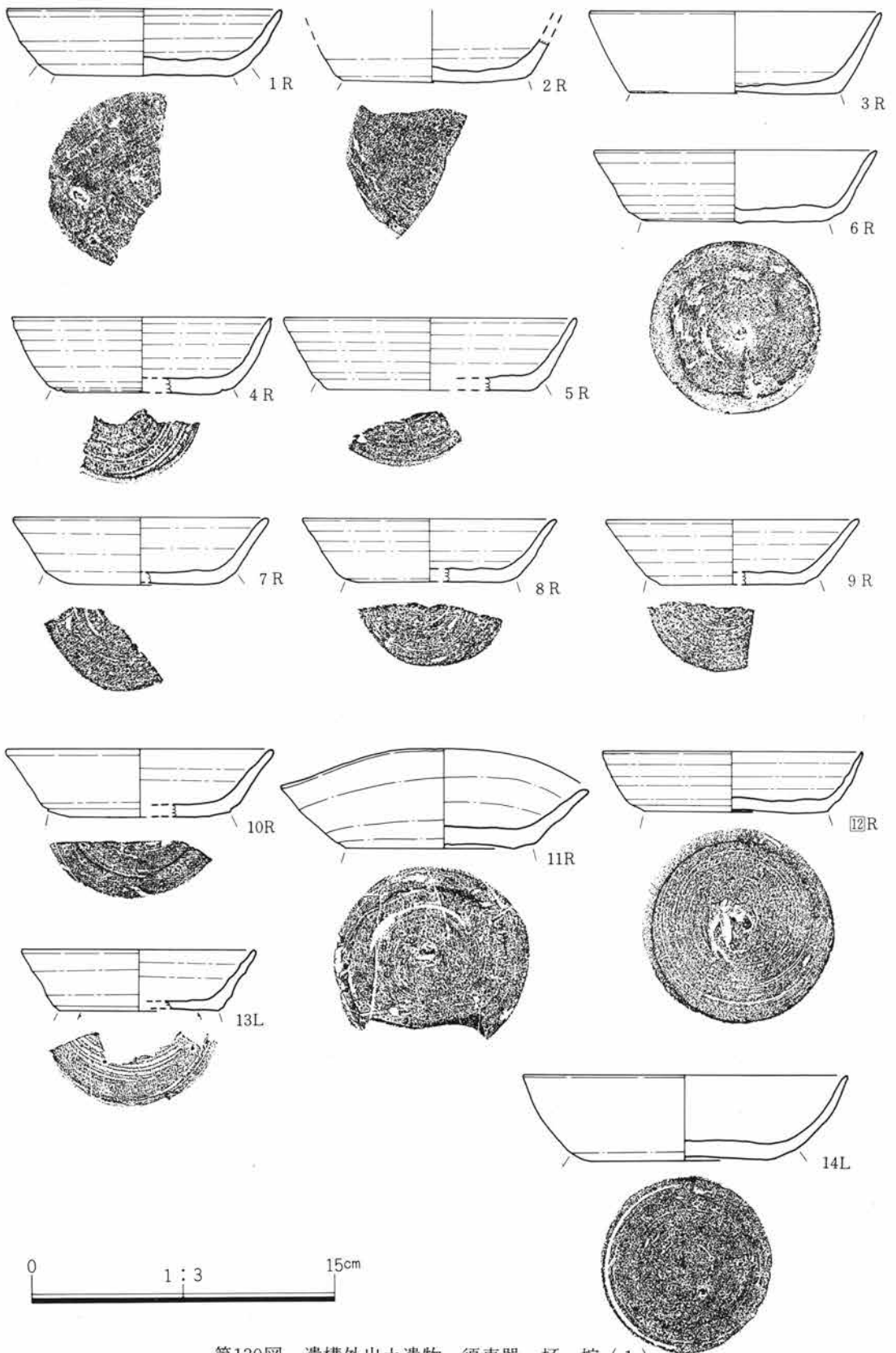
第155図1～7は遺構外出土の須恵器甗体部片のうち、内外面の叩キ痕の主なものを集めたもので、多量に出土した破片の多くはほとんどこれらの叩キ目一当て具痕の組合せのなかにおさまる。

これらのうち特徴のあるものは7の内面当て具痕で、同心円文様のなかにわずかに放射状の線がみられ、当て具の1カ所に割レがみられる。また、1はA・Bの2片が溶着しており、B片はA個体の焼成時にAを安定させるための支えとして使われたと考えられる。

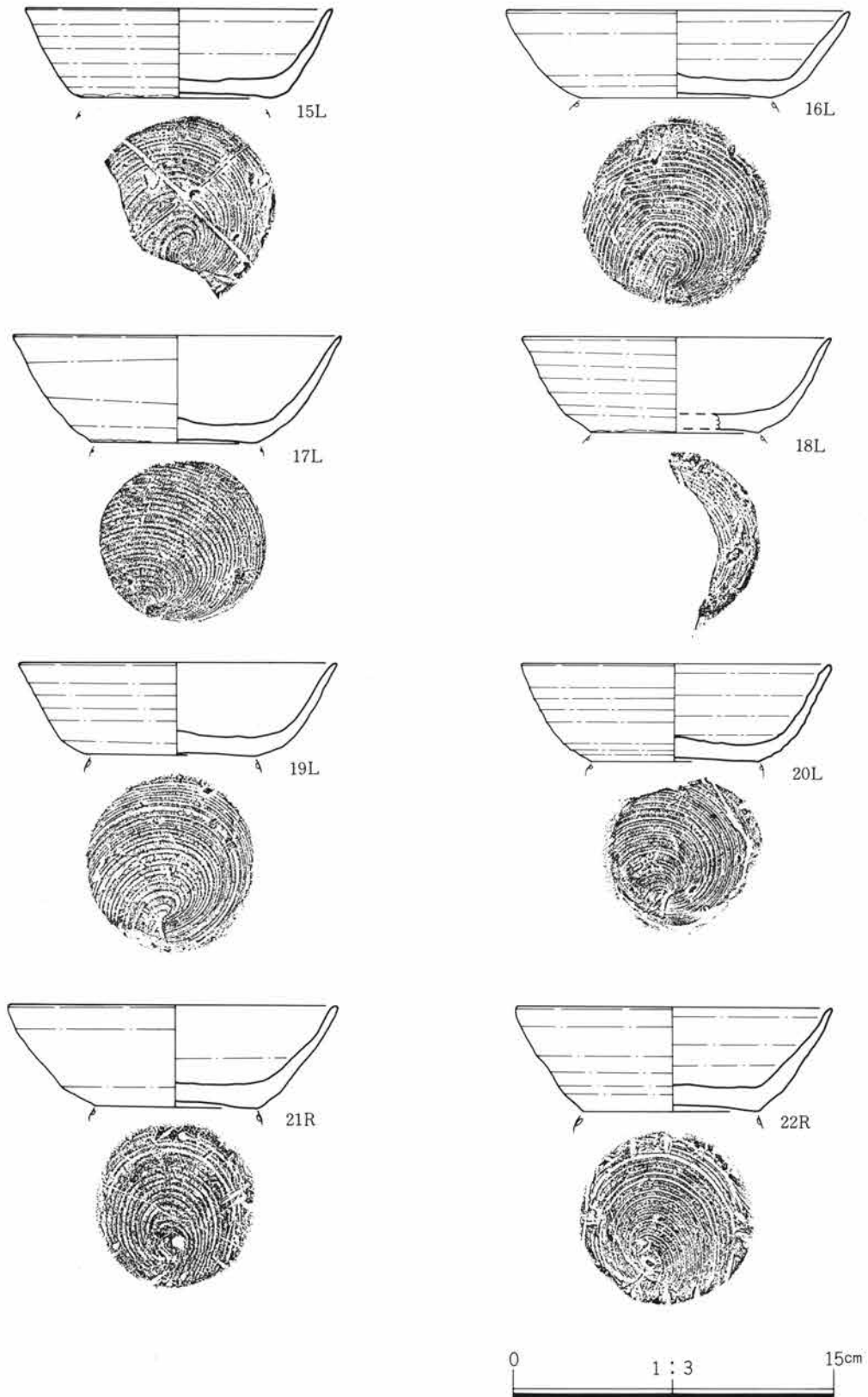




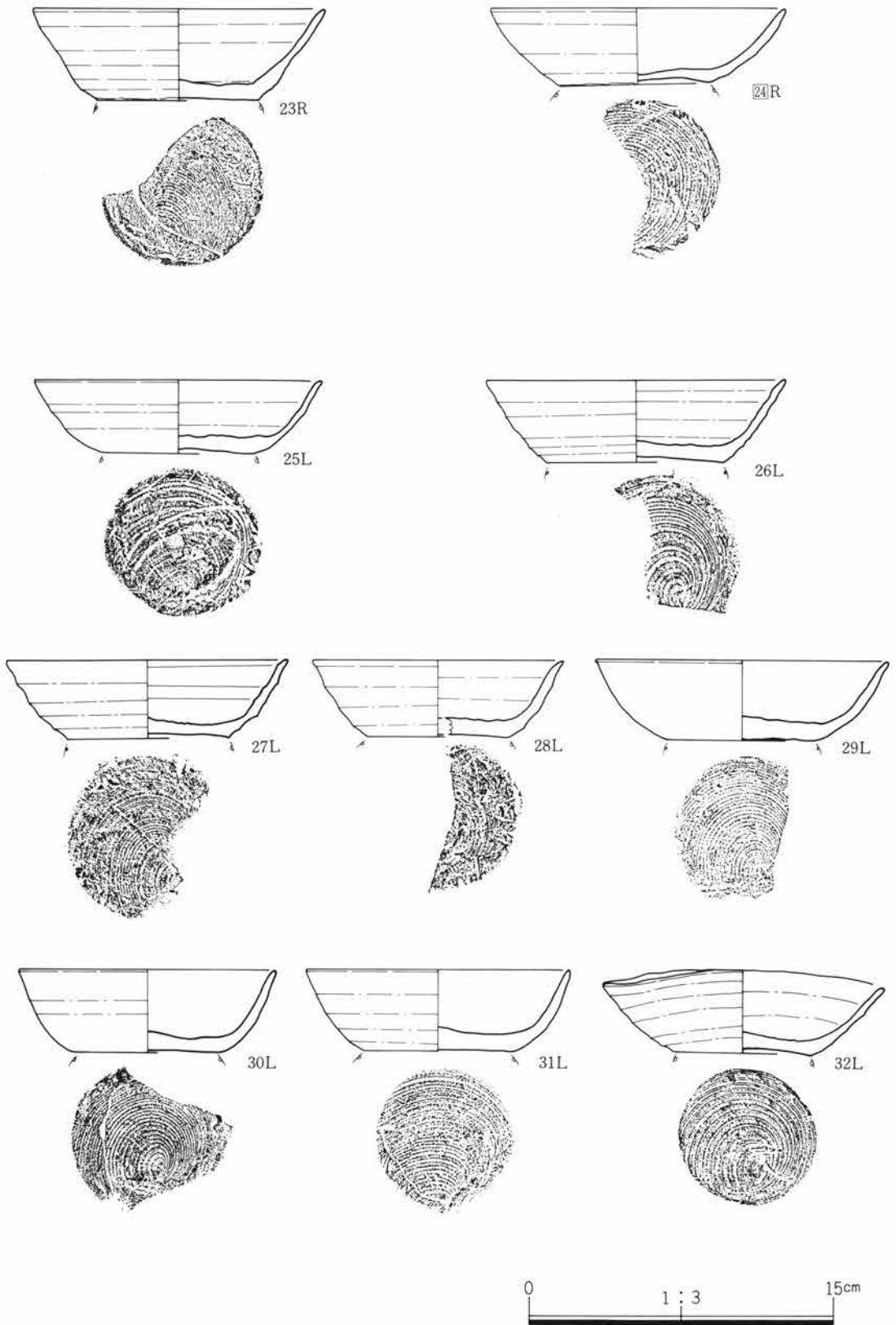
第129図 遺構外出土遺物 須恵器 蓋



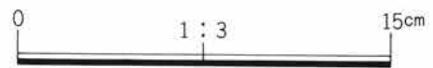
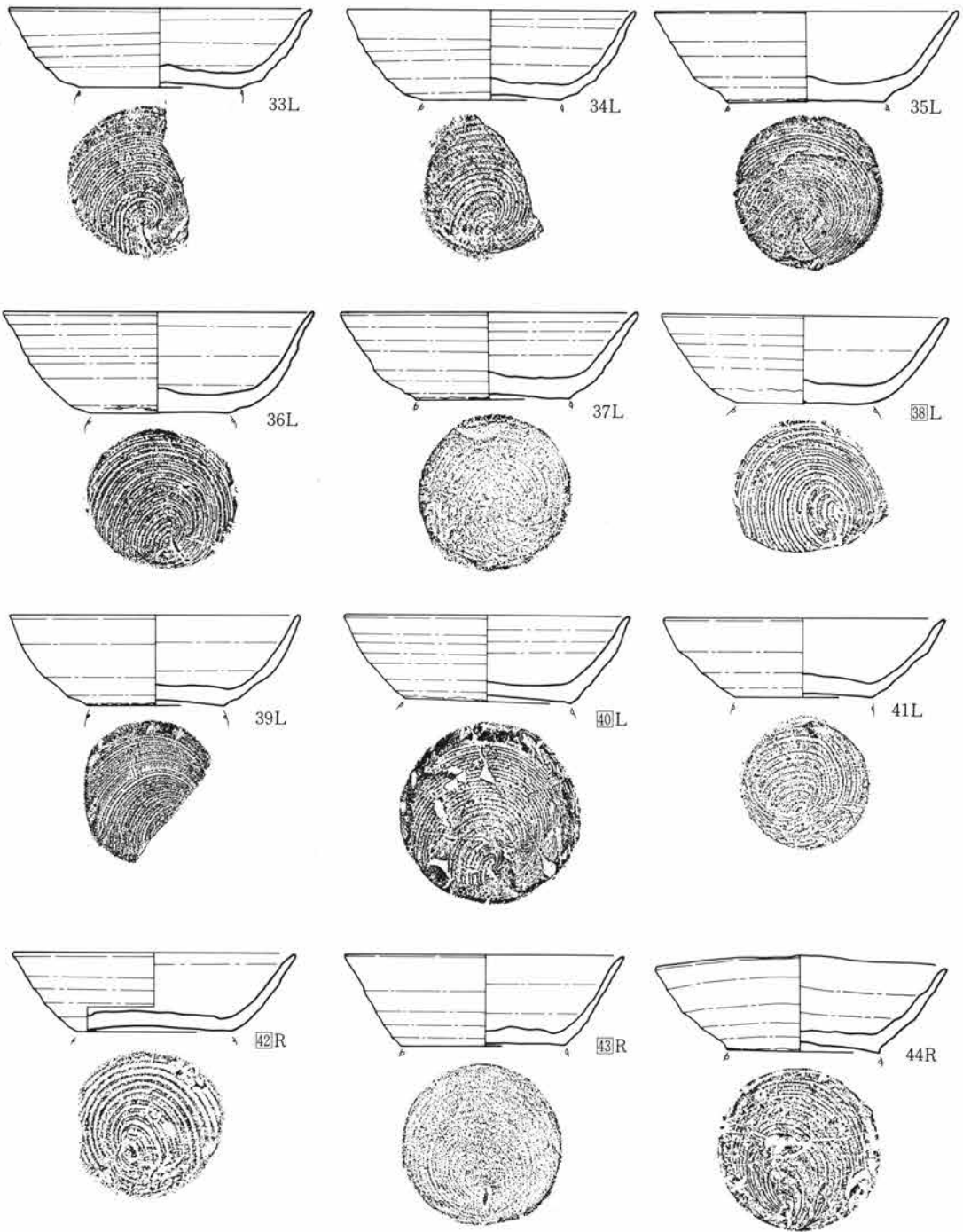
第130図 遺構外出土遺物 須恵器 杯・碗(1)



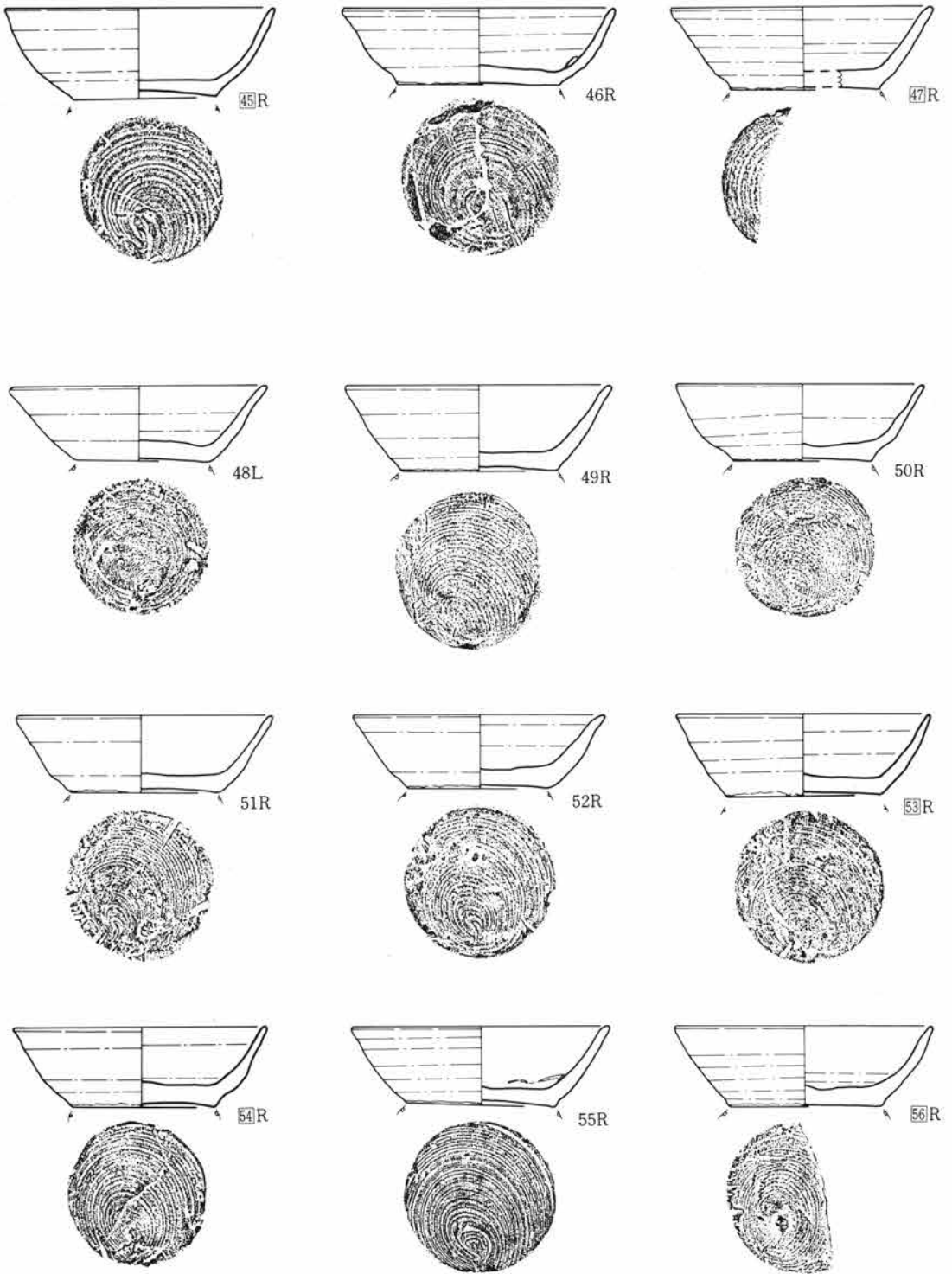
第131図 遺構外出土遺物 須恵器 杯 (2)



第132図 遺構外出土遺物 須恵器 杯 (3)

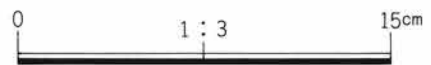
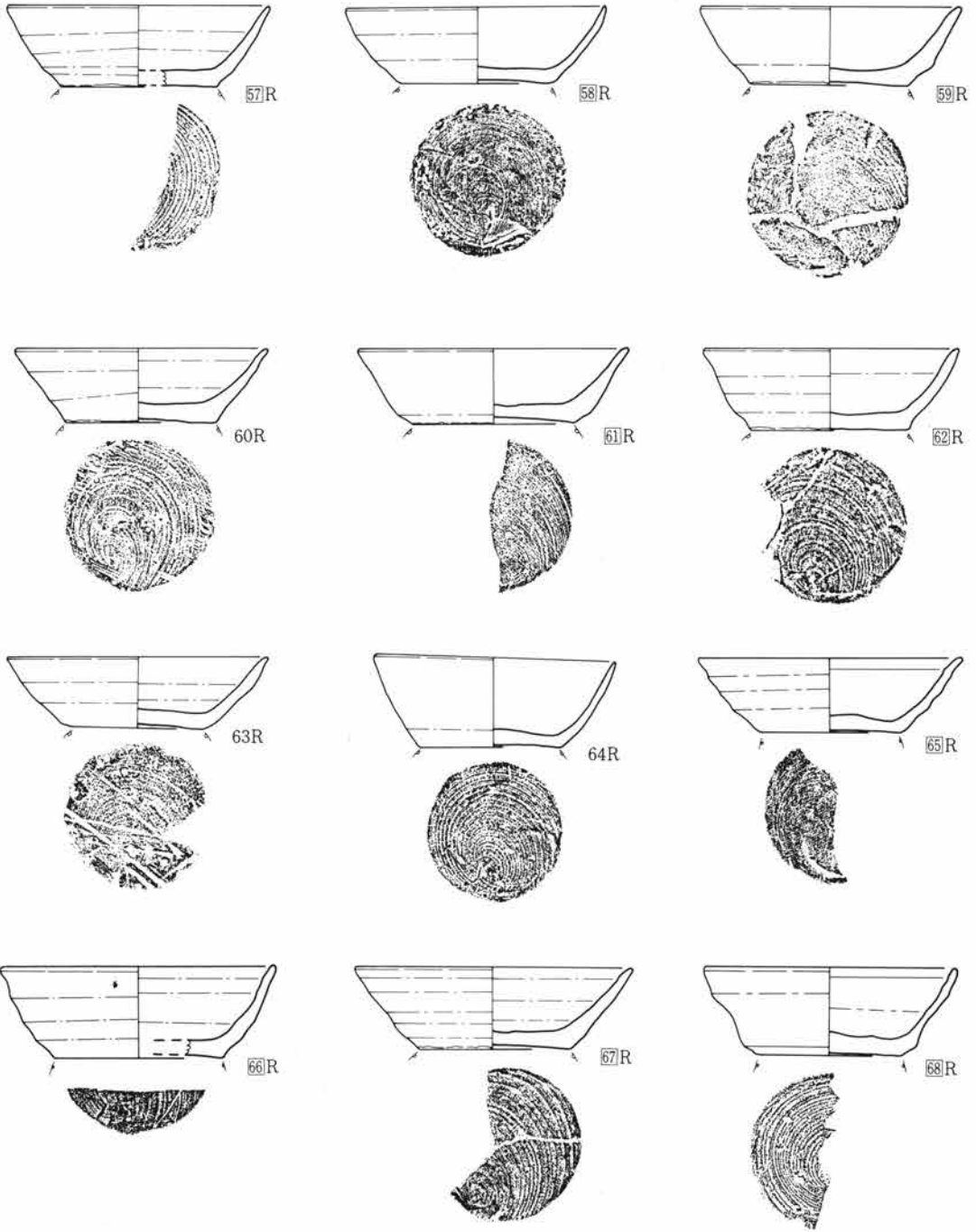


第133図 遺構外出土遺物 須恵器 杯 (4)

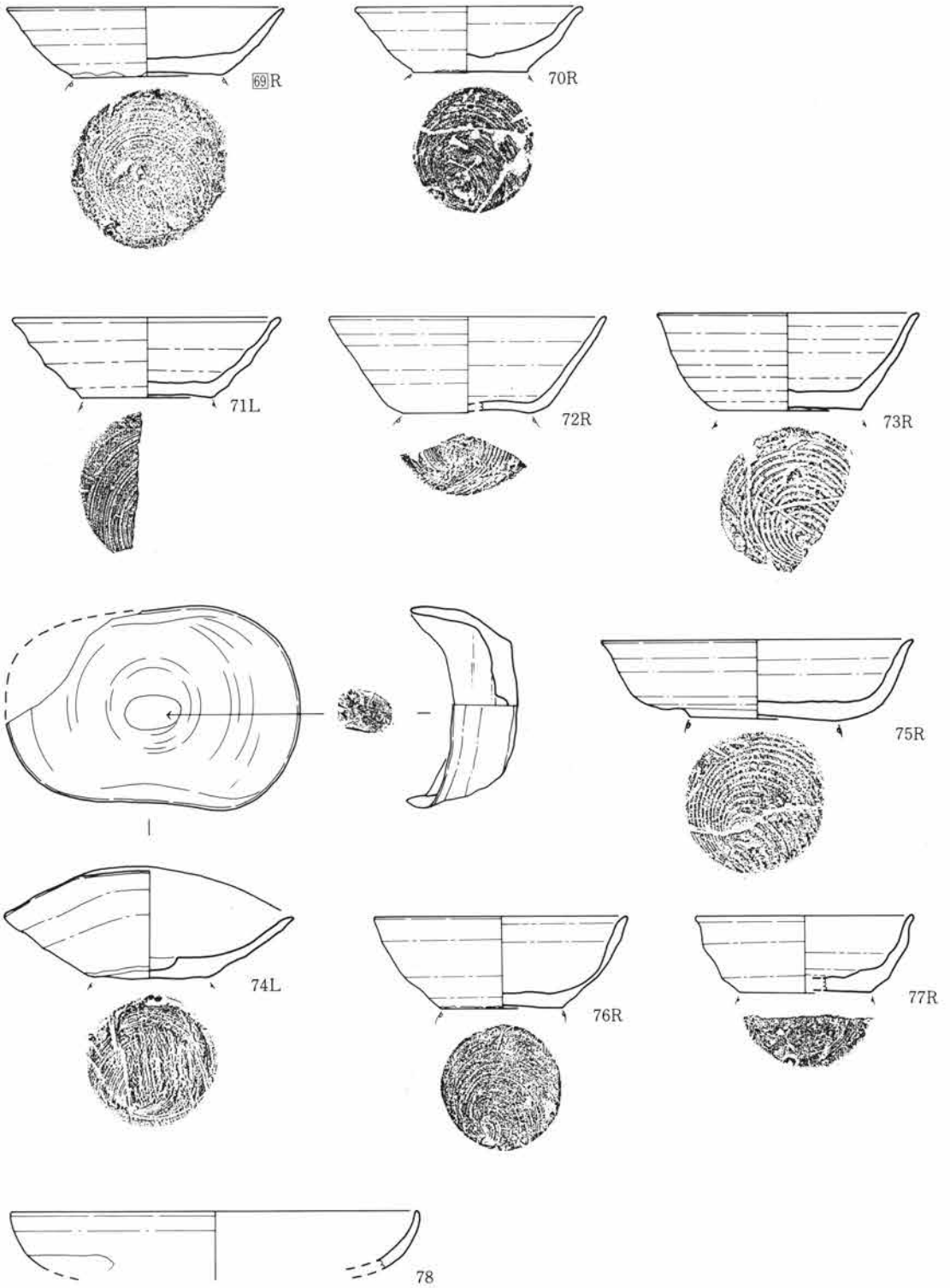


0 1 : 3 15cm

第134図 遺構外出土遺物 須恵器 杯 (5)

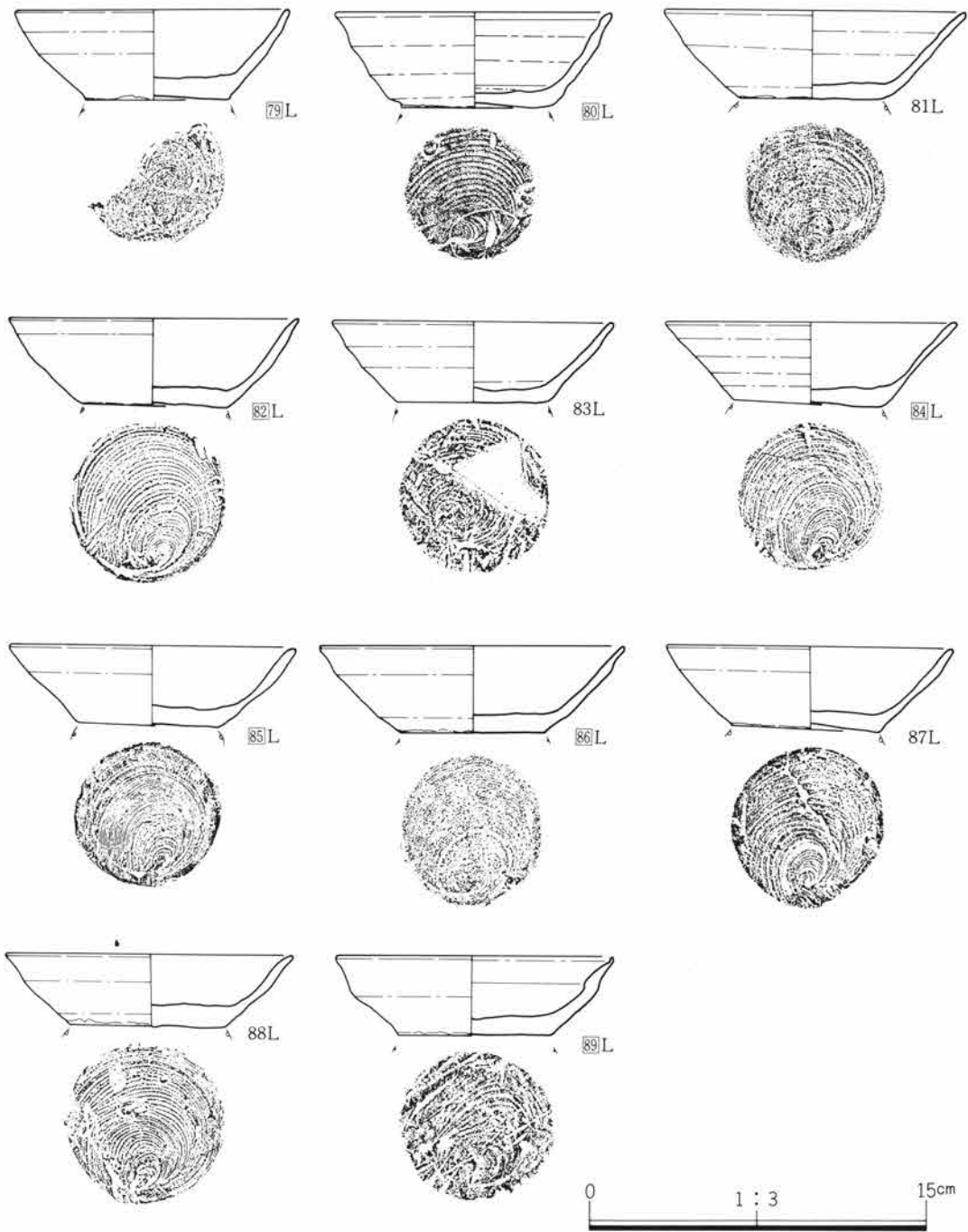


第135図 遺構外出土遺物 須恵器 杯 (6)



第136図 遺構外出土遺物 須恵器 杯 (7)





第137図 遺構外出土遺物 須恵器 杯 (8)

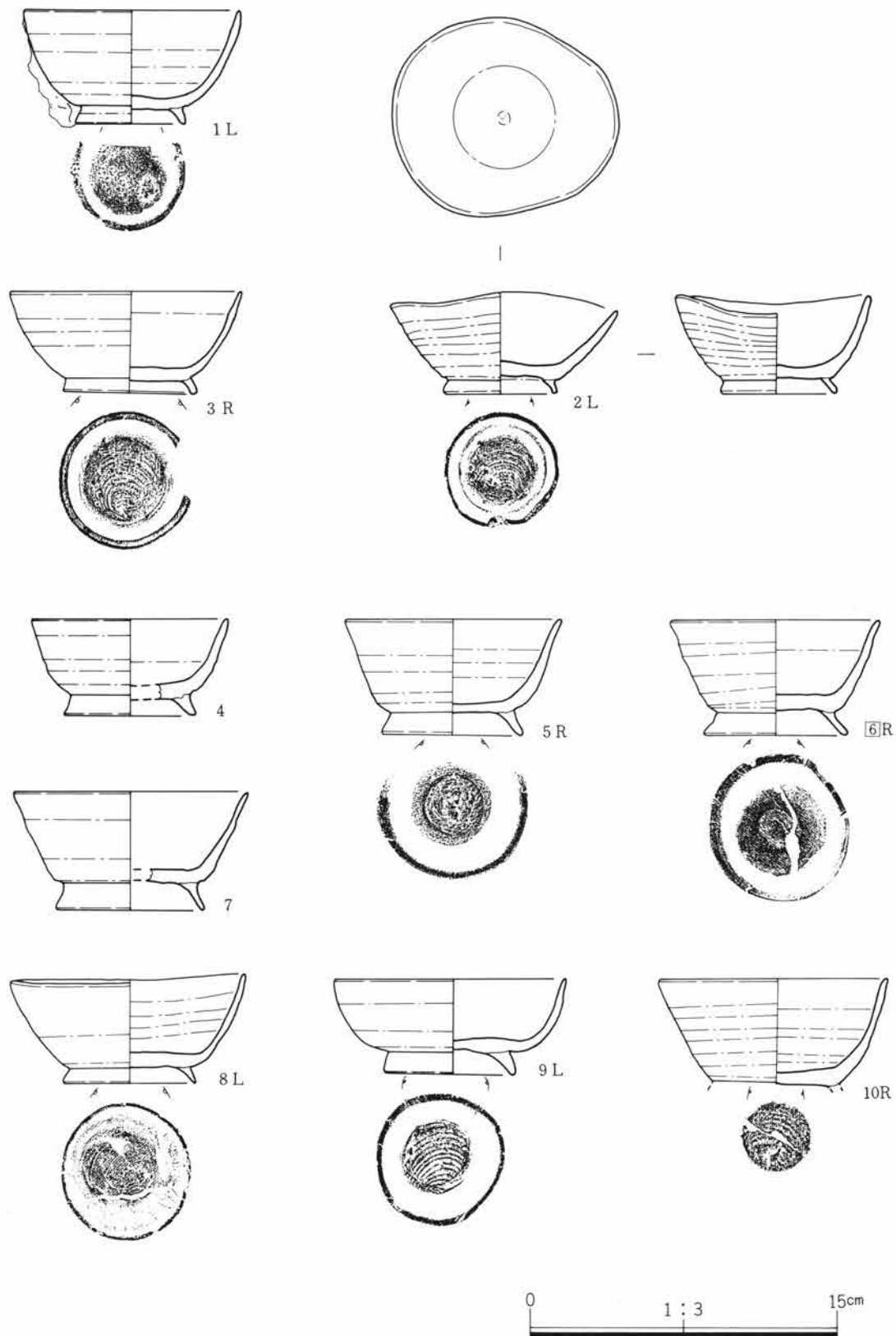
## 土 師 器

## 杯 (第136図78)

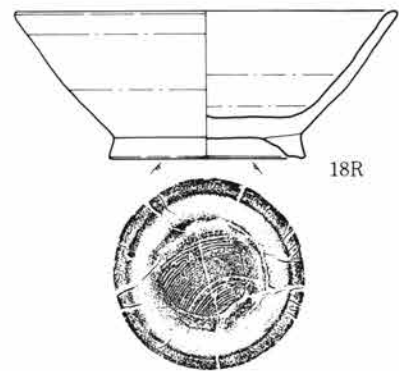
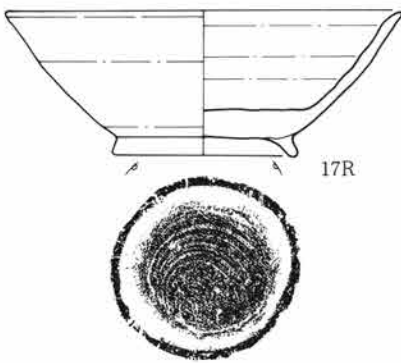
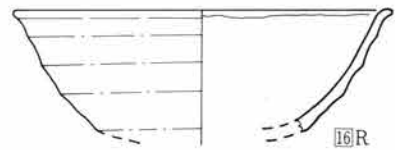
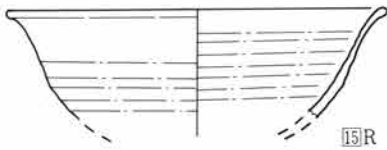
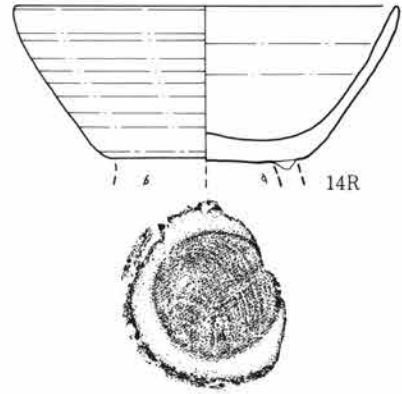
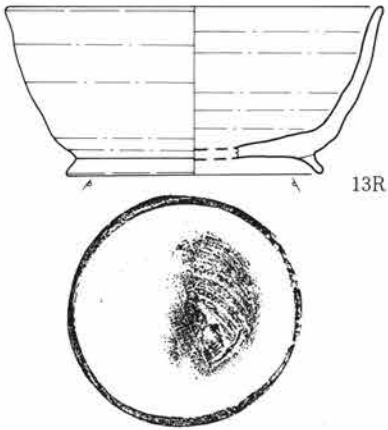
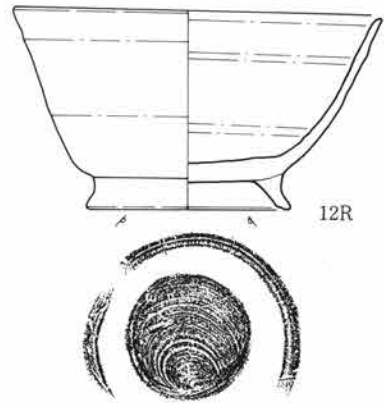
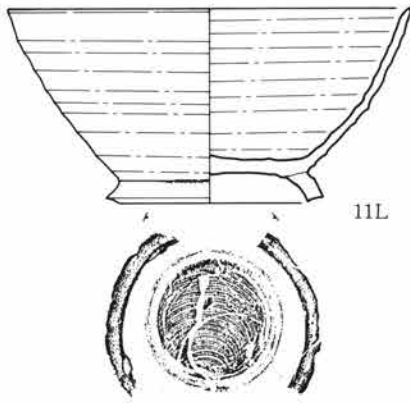
皿状にひろく杯で、同様の器形をもつものは他に1片ある。

## 高杯 (第146図1、図版104)

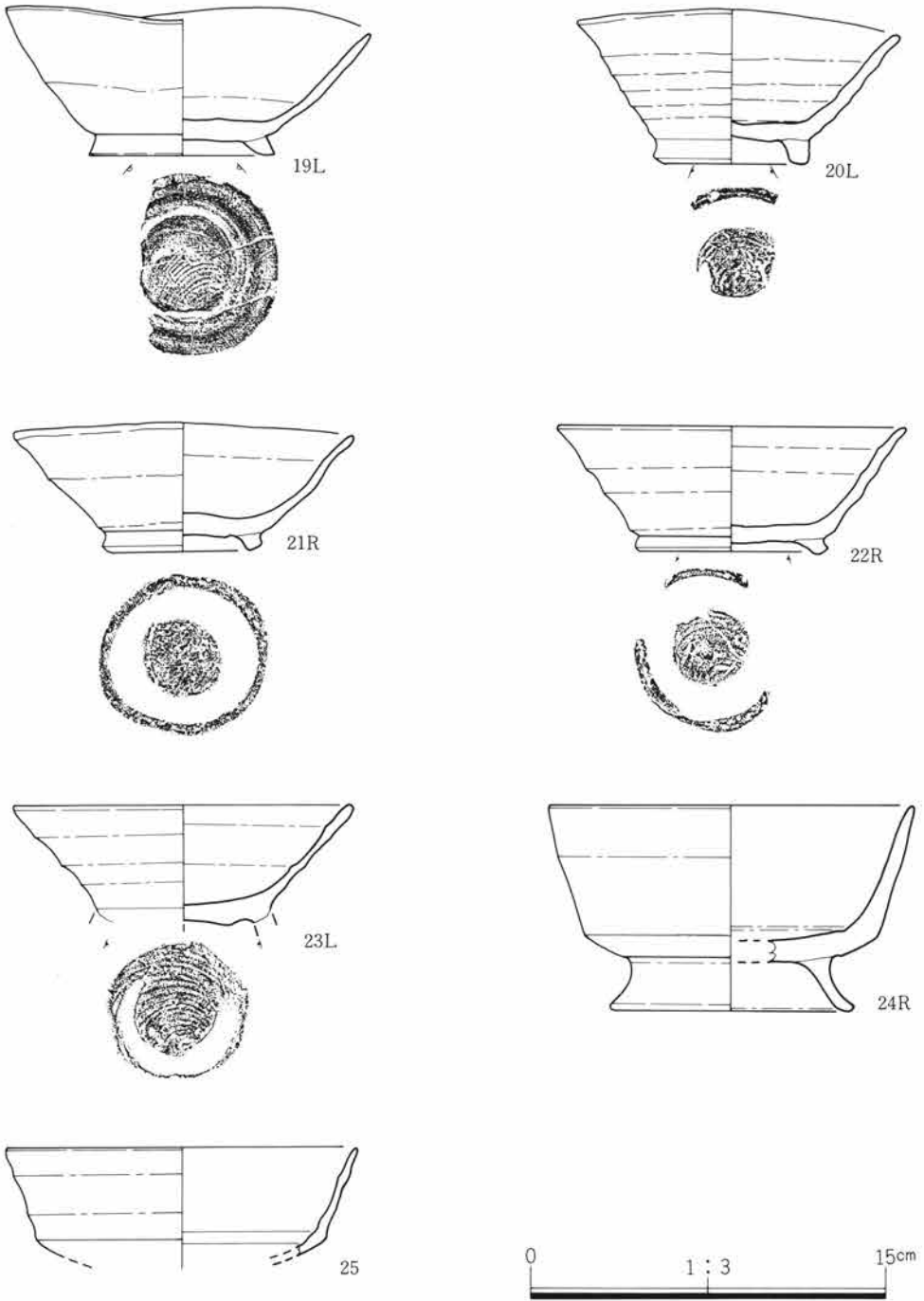
本遺跡出土の土師器高杯で器形を知り得るのは、この一点のみである。杯部のみが遺存する。



第138図 遺構外出土遺物 須恵器 碗 (1)



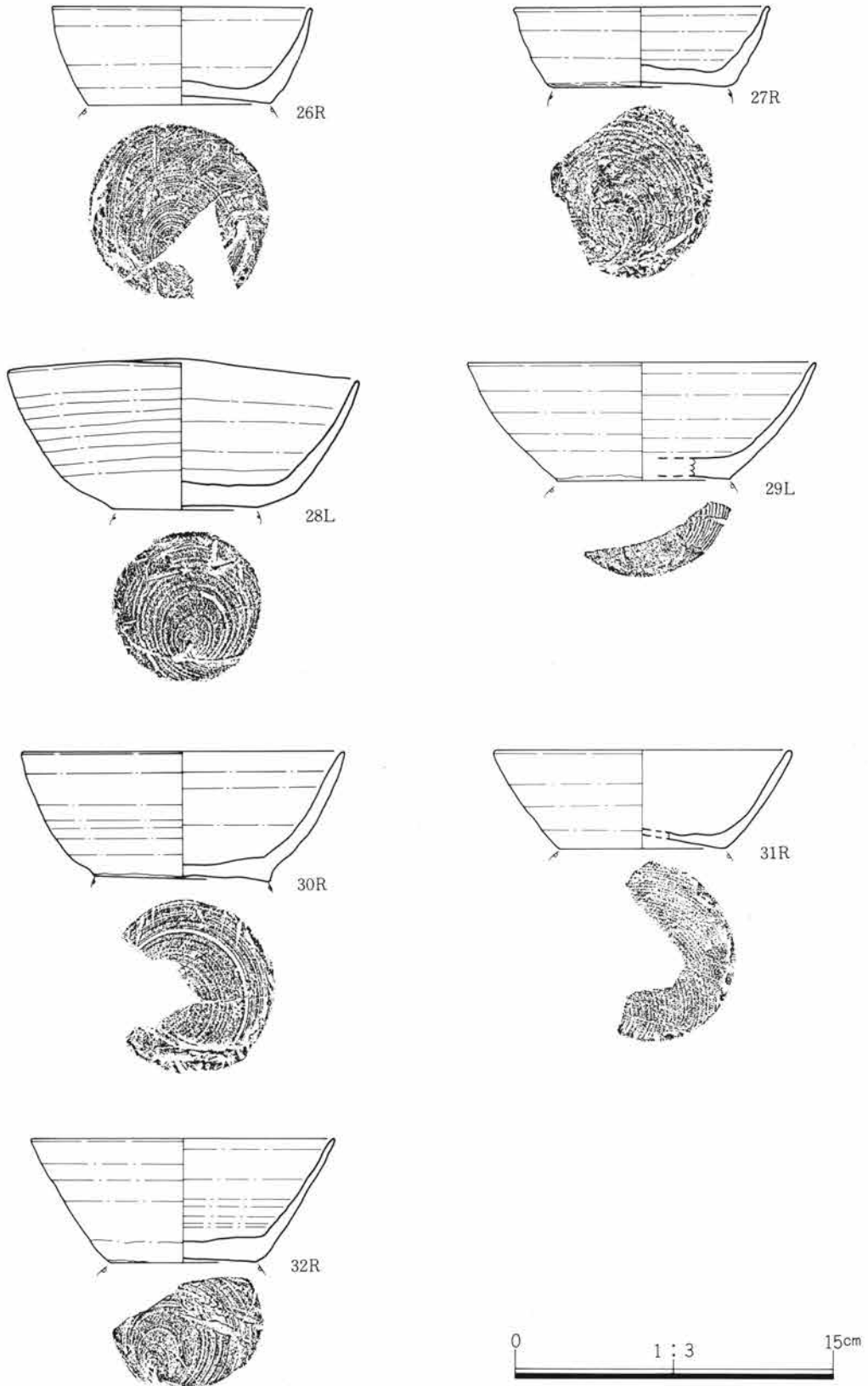
第139図 遺構外出土遺物 須恵器 碗 (2)



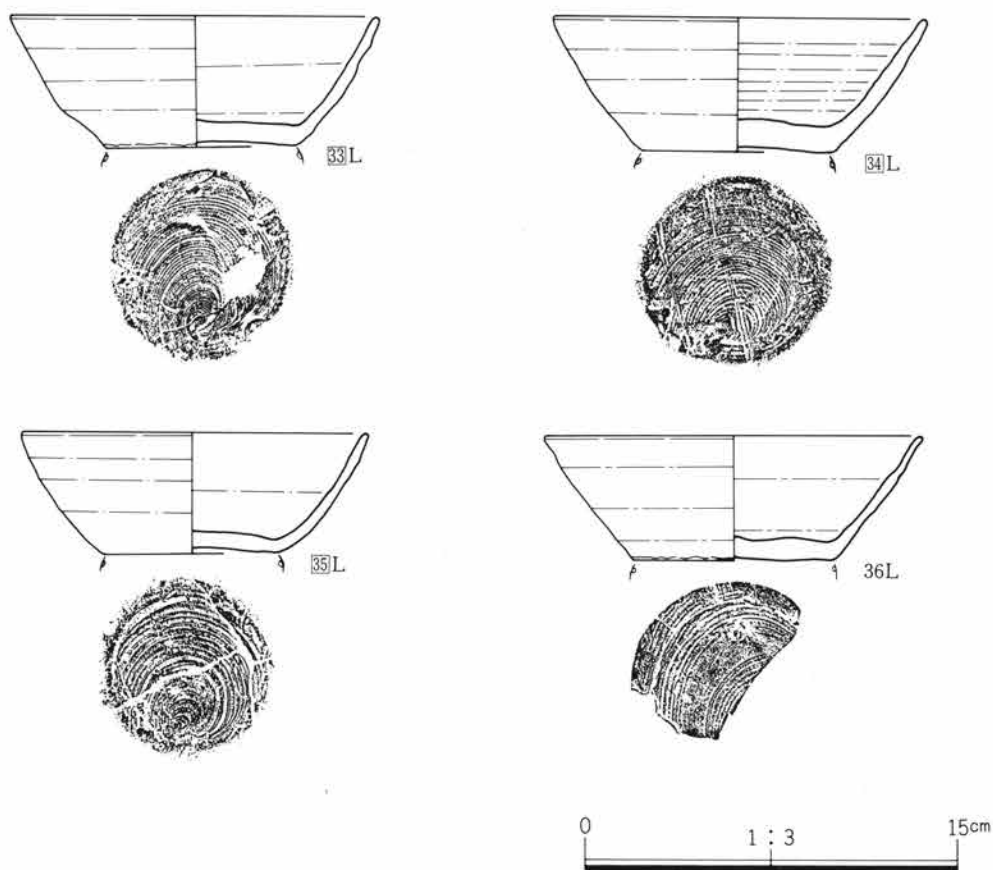
第140図 遺構外出土遺物 須恵器 碗 (3)

甕 (第150図1~6、図版121)

胎土に砂粒を多く含み、体部外面にヘラケズリを施して器厚を薄く仕上げる甕である。口縁部が「く」字状のもの、「コ」字状のものがある。6はこれらの底部片と考えられる。全形の判明するものはない。台付の小型品とみられるものが5区3号住居址で1点みられる。



第141図 遺構外出土遺物 須恵器 碗 (4)

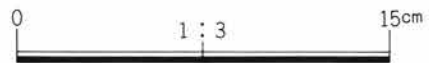
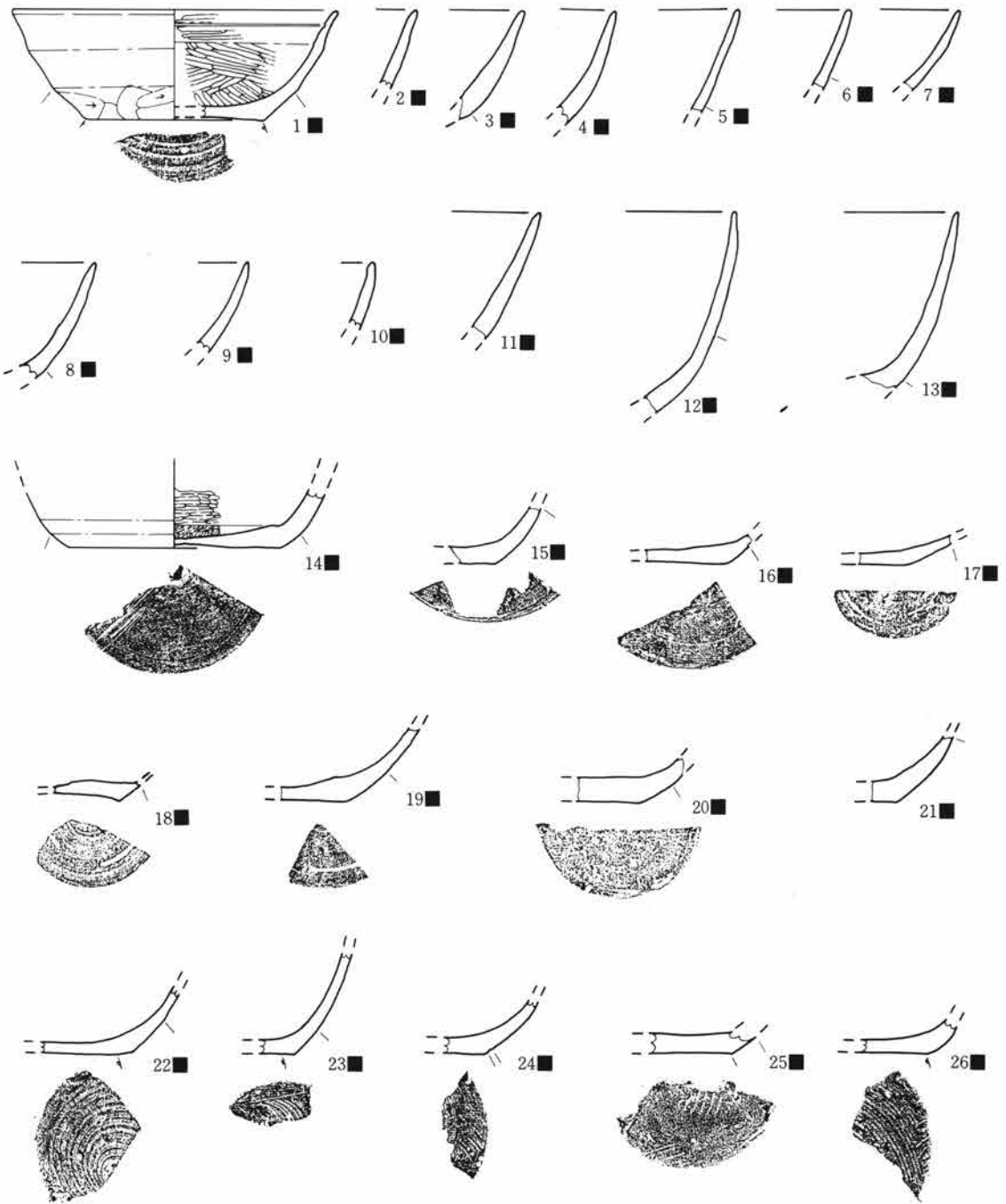


第142図 遺構外出土遺物 須恵器 椀 (5)

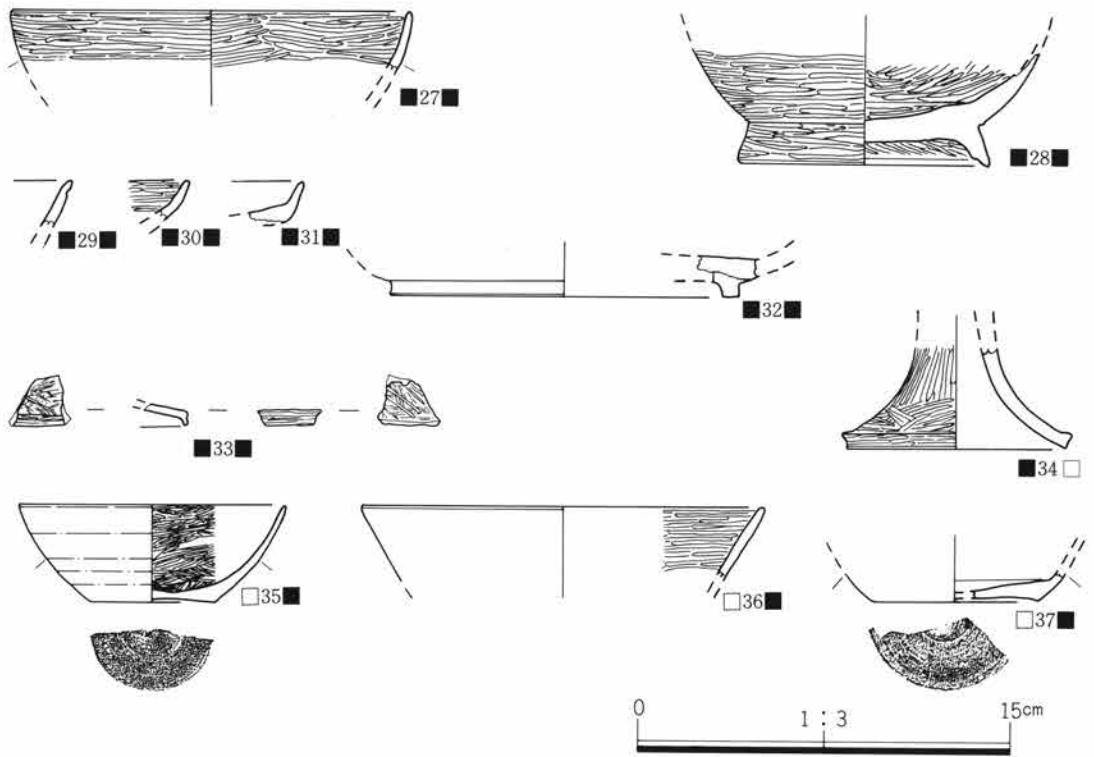
第3表1 遺構外出土須恵器甕体部叩き目観察表 (第155図)

G番号は整理用番号を示す

番号	出土位置	①胎土 ③色	②焼成 調	内面	外面	備考	
1	A 5 Q17	①白色粒を含む	②還元・硬質	③灰色	当て具痕は平行。さらに雑なナデを加える。	平行叩き目→ナデまたはカキ目を施す。	G-604、本体
	B 5 Q17	①白色小粒を含む	②還元・硬質、割れ口も灰を被る	③灰色	当て具痕は無文。ナデの有無は不明。	平行叩き目→ナデの順。	G-604、焼成用支え
2	5 J 06	①白色粒・黒色小粒を含む	②還元・硬質	③灰色	当て具痕は3cm×3cmほどで無文。さらにヨコナデを施す。	平行叩き目→ナデ。自然釉がかかる。	G-611
3	5 H08	①白色小粒を含む	②還元・硬質	③外面灰色、内面褐色	当て具痕は直線部分を持ち、無文。さらに雑なナデを加える。	平行叩き目→ナデ。	G-613



第143図 遺構外出土遺物 黒色土器 (1)



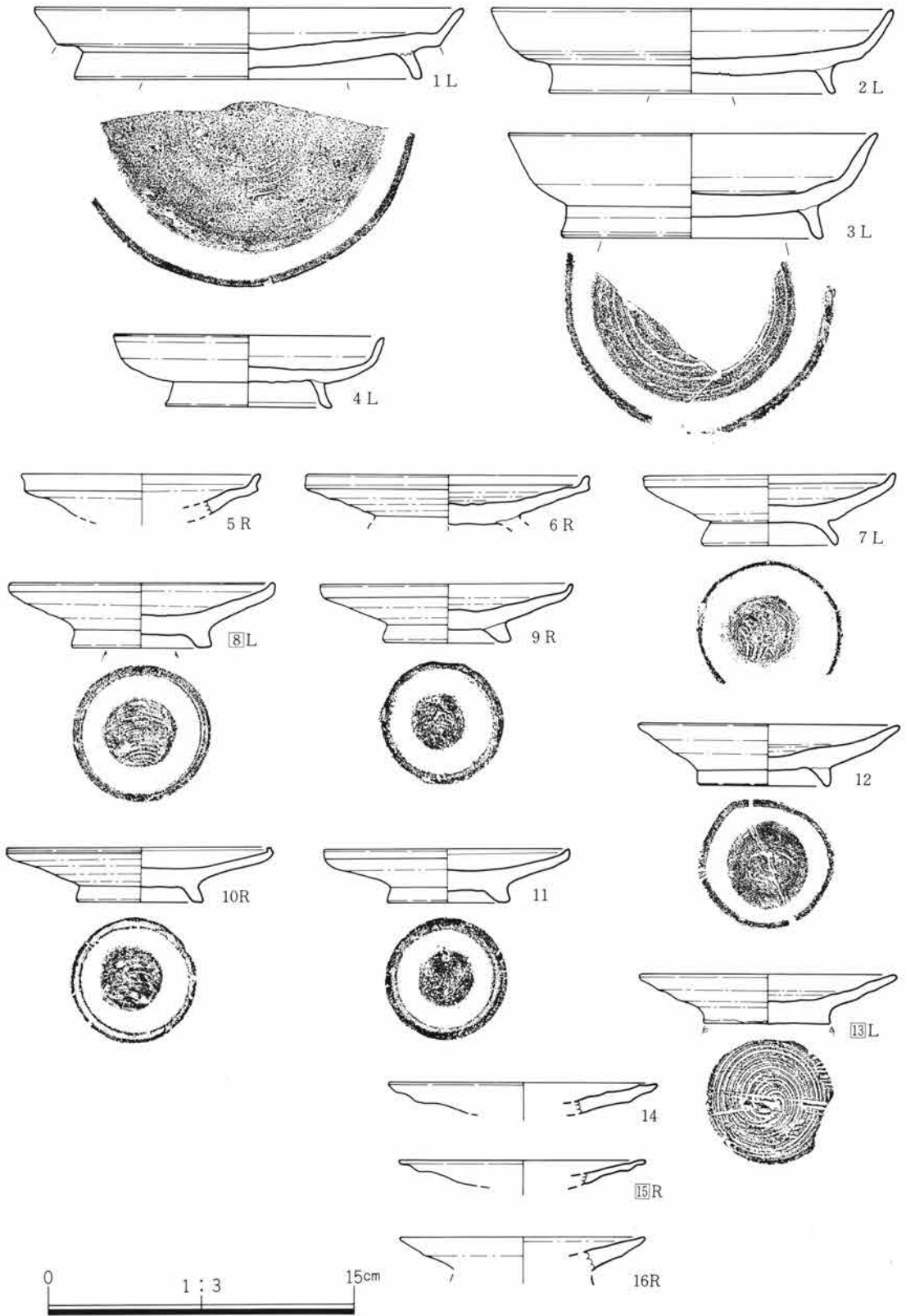
第144図 遺構外出土遺物 黒色土器 (2)

第3表2 遺構外出土須恵器甕体部叩き目観察表 (第155図)

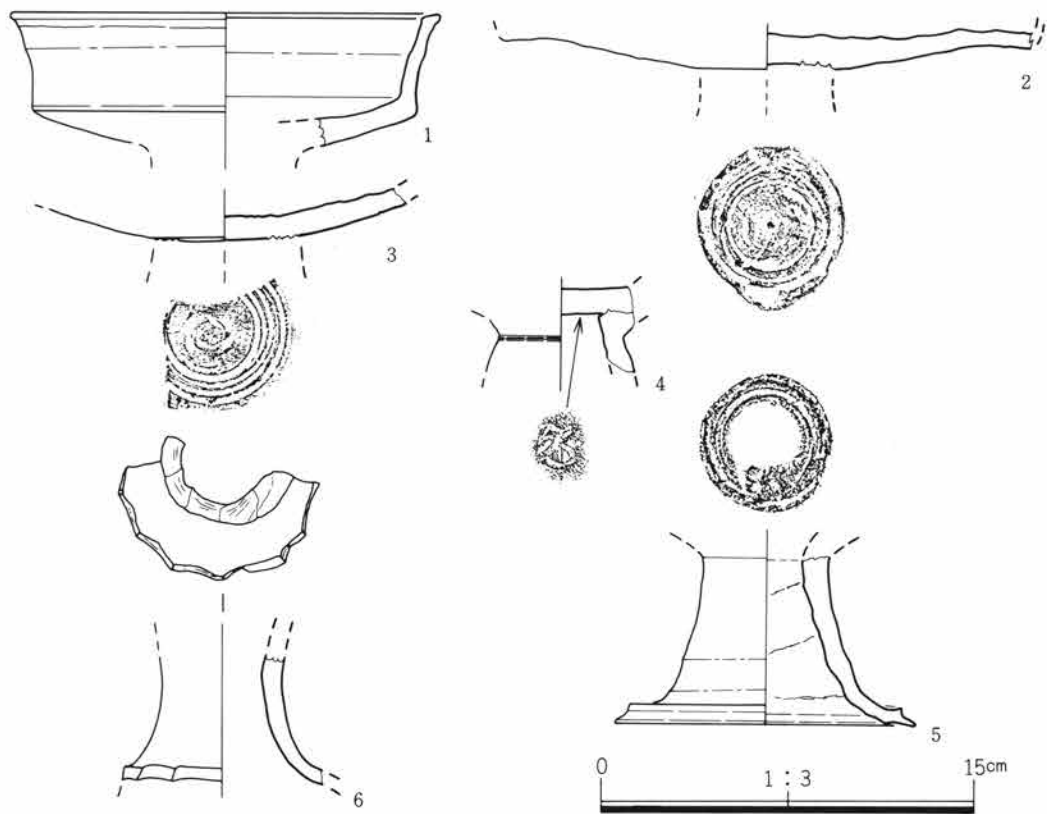
G番号は整理用番号を示す

番号	出土位置	①胎土 ③色調	②焼成	内面	外面	備考
4	5 K09	①白色小粒を含む②還元・硬質③灰色、中心部は淡紫褐色		当て具痕は同心円文。当て具の外側近くに割レが1カ所ある。	平行叩き目→雑なナデ。	G-615
5	5 G07	①白色小粒を少し含む②還元・硬質③灰色		当て具痕は同心円文。さらに雑なナデを加える。	平行叩き目。自然釉がかかる。	G-610、肩部片
6	5 Q02	①白色小粒を多く含む②還元・硬質③灰色		当て具痕は同心円文。や目が細かく、間隔2mmほど。さらにナデを加える。	平行叩き目→ナデまたはカキ目を施す。	G-616
7	5 V04	①白色小粒・黒色小粒を含む、気孔多い②還元・やや軟③灰色		当て具痕は同心円文で、細い放射状の線がある。また1カ所に割レがみられる。	平行叩き目→ヘラケズリを施す。	G-614、外面ヘラケズリは例が少ない。

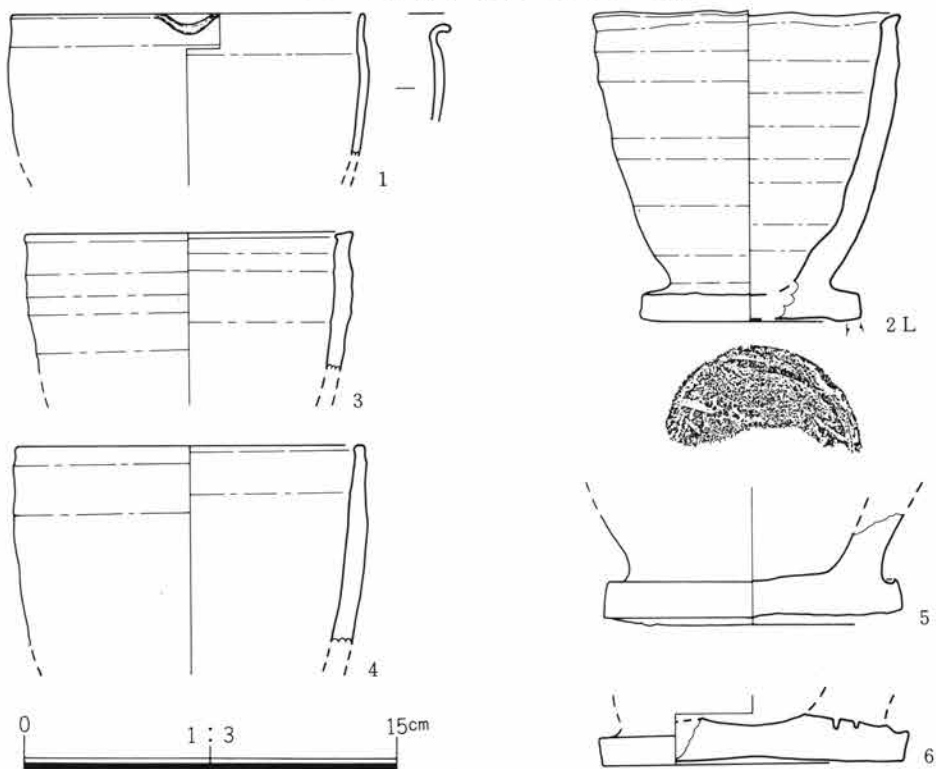




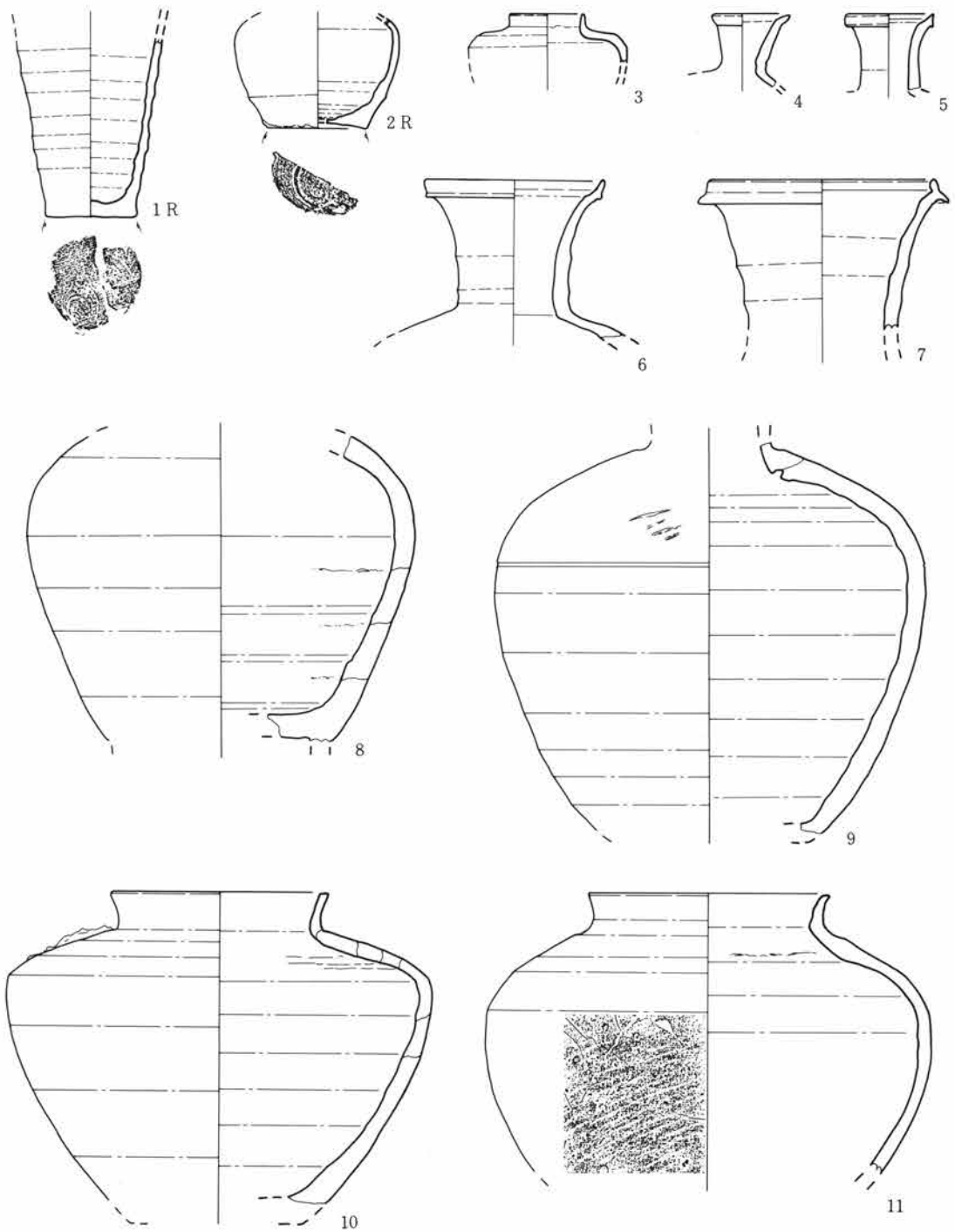
第145図 遺構外出土遺物 須恵器 Ⅲ



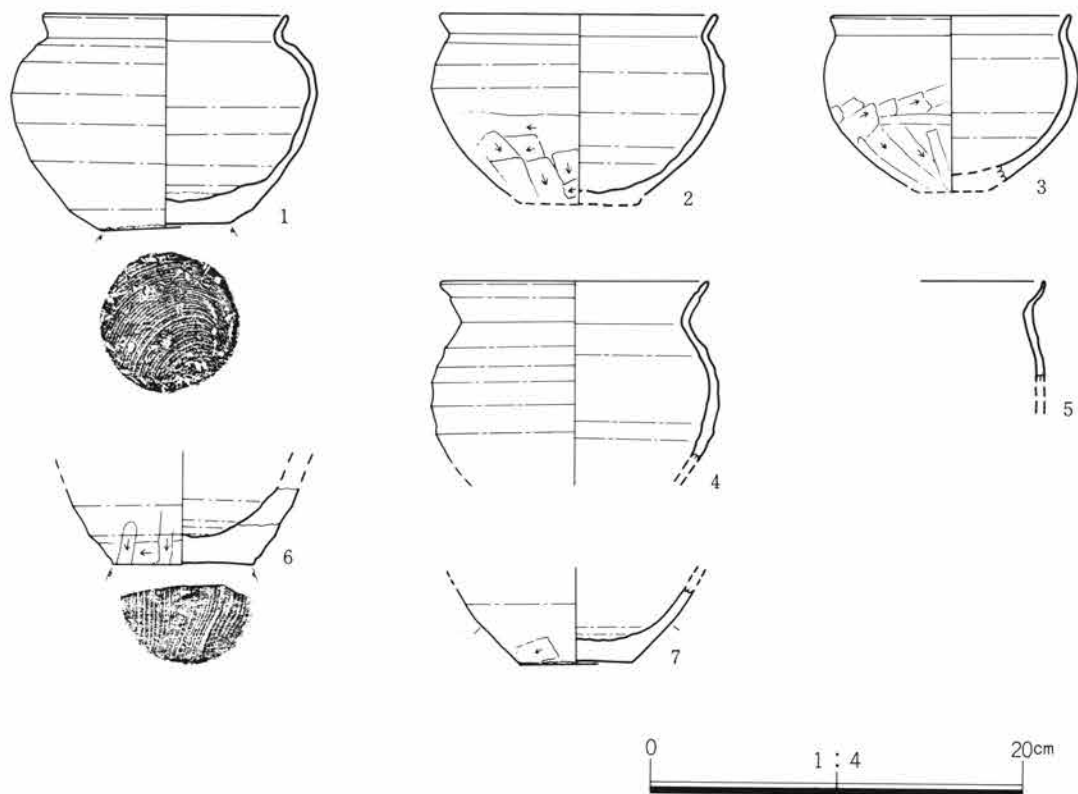
第146図 遺構外出土遺物 須恵器 高杯



第147図 遺構外出土遺物 須恵器 鉢



第148図 遺構外出土遺物 須恵器 壺



第149図 遺構外出土遺物 土師器 甕 (1)

須恵器と同様の胎土をもった煮沸器

甕 (第149図1～7、第150図7～9、図版121)

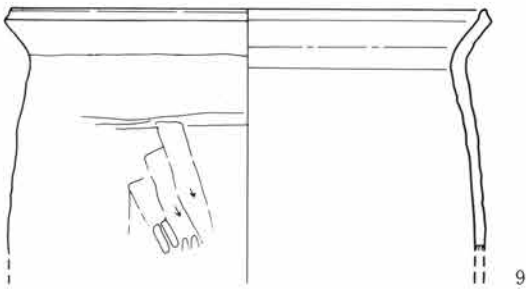
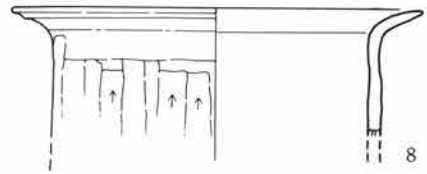
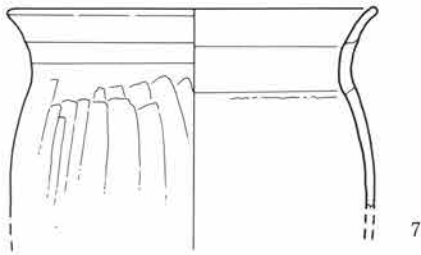
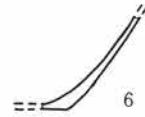
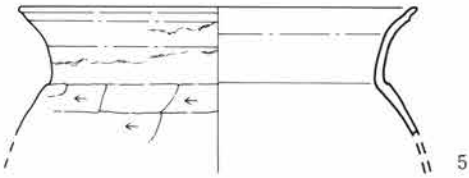
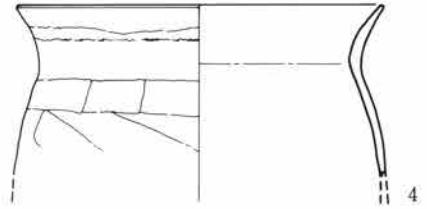
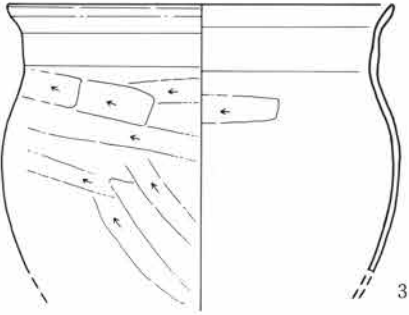
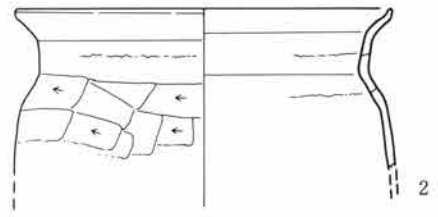
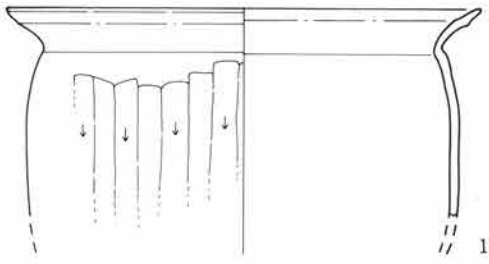
第149図1～7は口径9～10cm代の甕で、ロクロ整形されるものである。体部下半にヘラケズリを施すもの、糸切離しのままのもの、体部下端のみヘラケズリを施すものがある。いずれも酸化焙焼成されている。

第150図7～9は口径14～19cm代の甕で、ロクロ整形痕をもち体部外面にヘラケズリが施される。9は体部中位に平行叩キ目をもち、口唇部は須恵器甕と同様に上方にひきだされた特異な器形をもつ。いずれも酸化焙焼成されている。

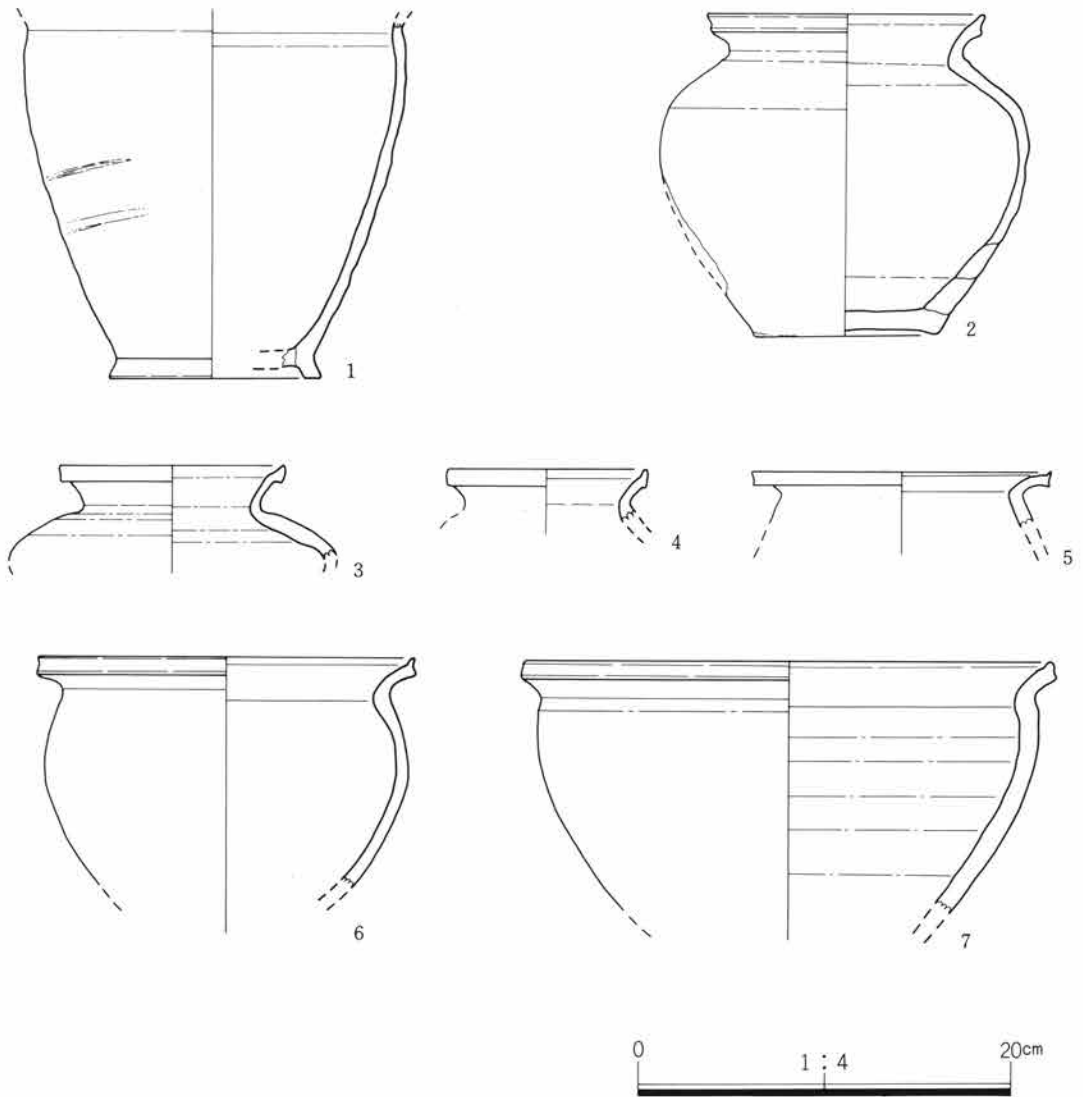
<sup>注3</sup>  
黒色土器 (第143図1～144図37、図版115～117)

第143図1～26は内面が研磨・黒色化されたものである。1は全形の判明するもので、口縁部内面に凹線を1本もつ。2～13は口縁部片である。14～26は底部片で、そのうち14～21は全面ヘラケズリが施されるもの、22～26は回転糸切痕を残すものである。

第144図27～33は内外面ともに研磨・黒色化されたものである。30・31は皿と考えられる。33は蓋・皿・高杯裾部のどれかであろう。



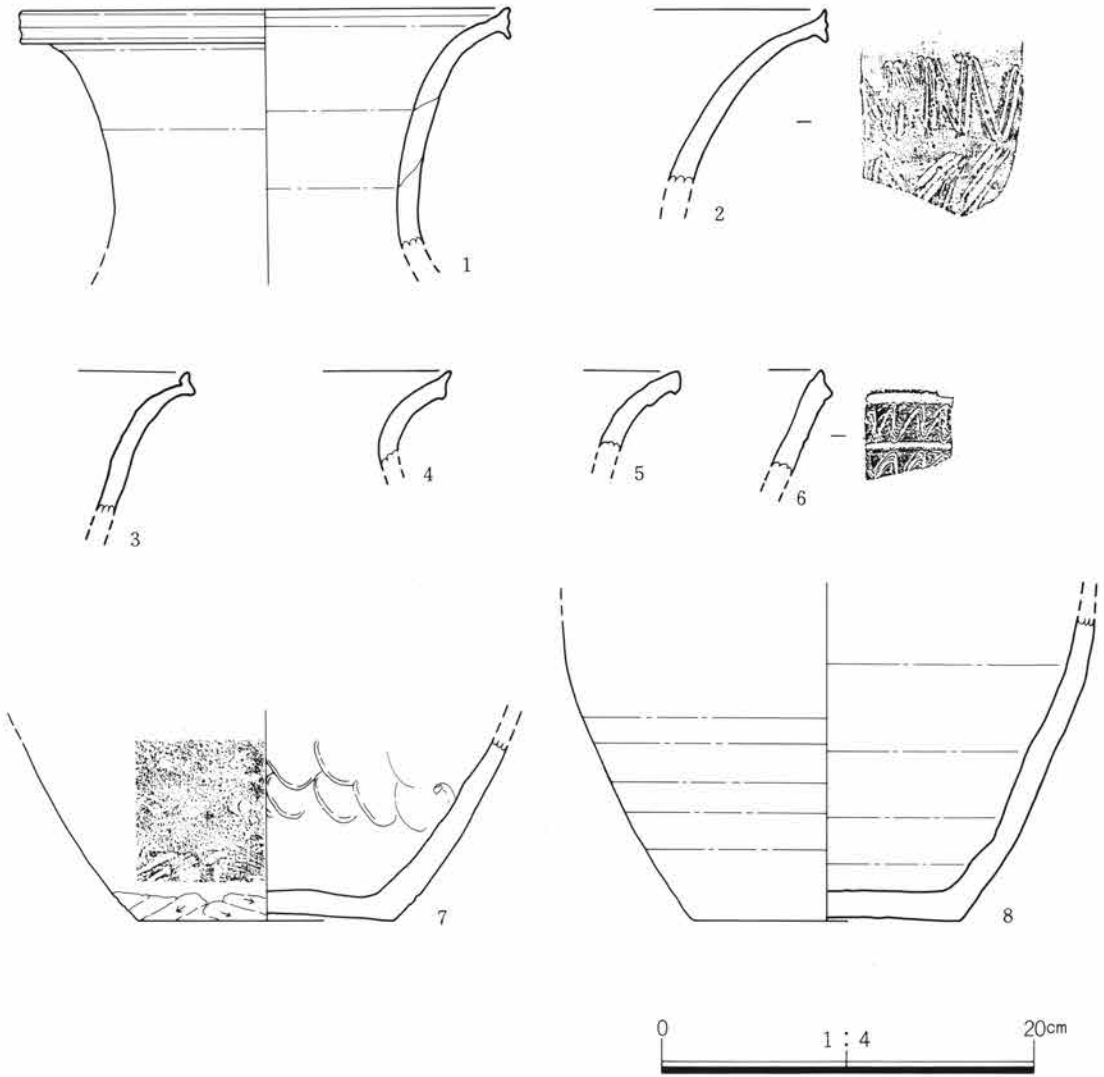
第150図 遺構外出土遺物 土師器・土師質 甕 (2)



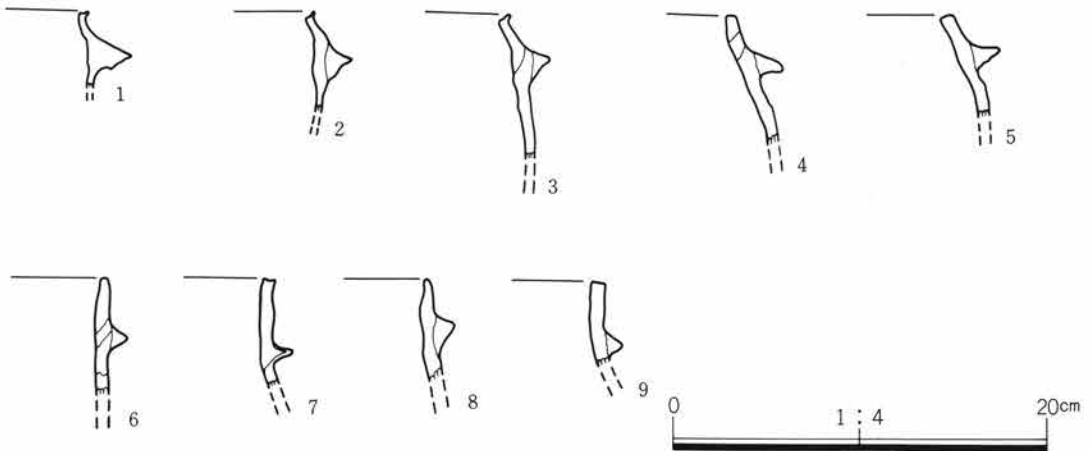
第151図 遺構外出土遺物 須恵器 甑・甕（1）

第144図34～37は内・外面のどちらか片方が研磨され、両面とも黒色化されたものである。34は高杯脚部と考えられ、本遺跡では他に例を見ない。35は内湾する体部をもち、高台が付かないもので、全形の判明する例である。

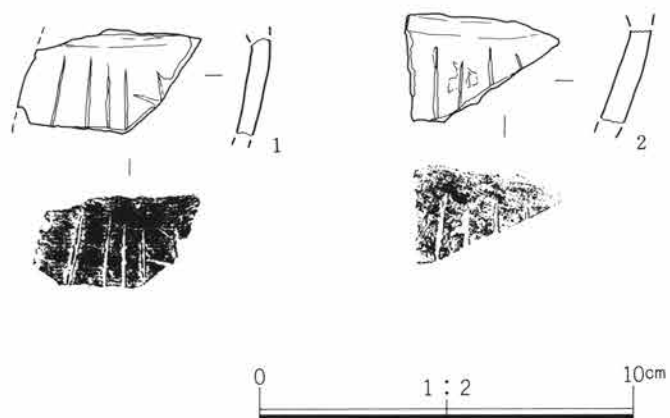
外面に研磨を施さないものは（口縁部小片を除き）体部下位に回転ヘラケズリを施すのが通例である。



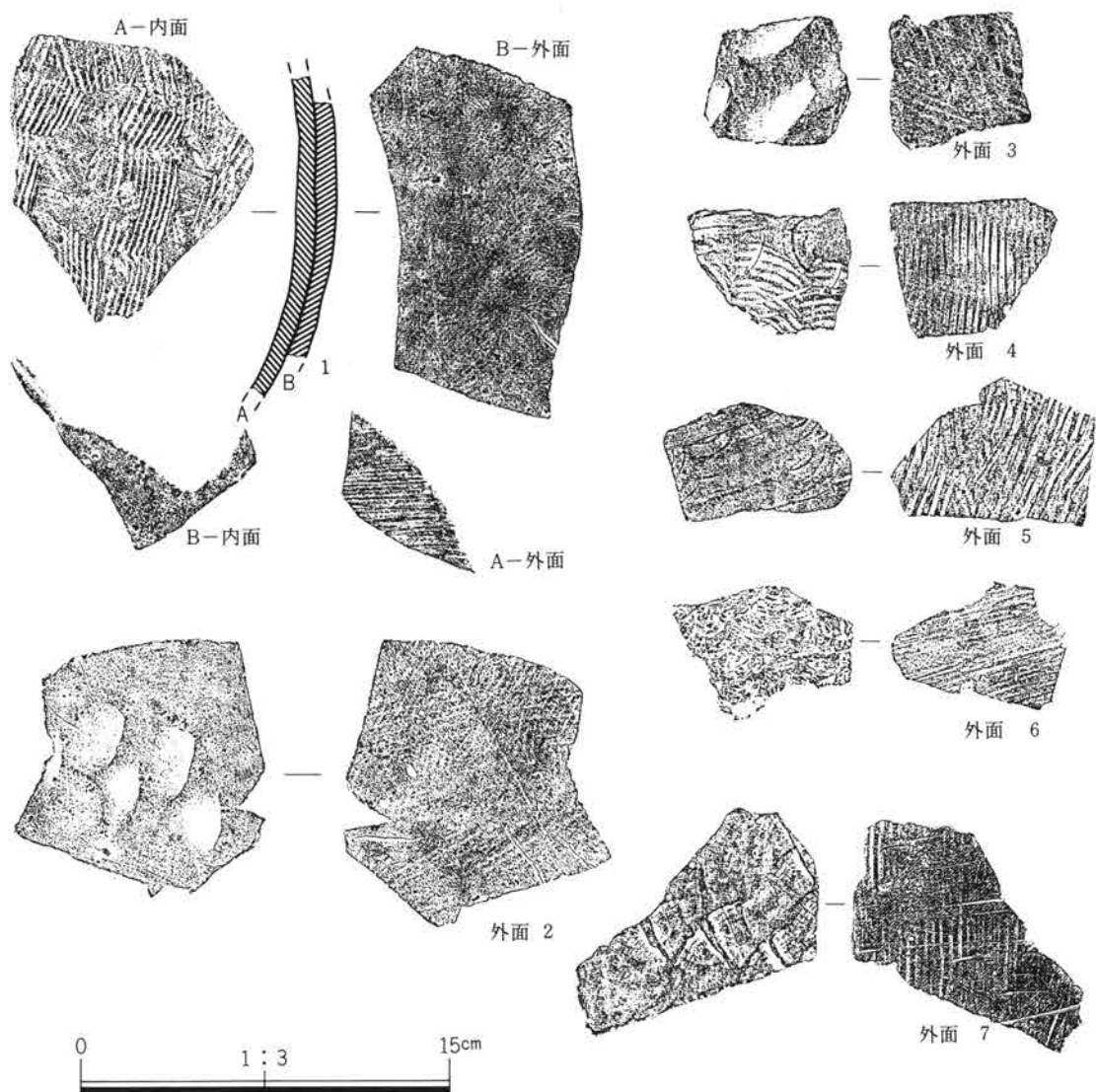
第152図 遺構外出土遺物 須恵器 甕 (2)



第153図 遺構外出土遺物 羽釜口縁部片

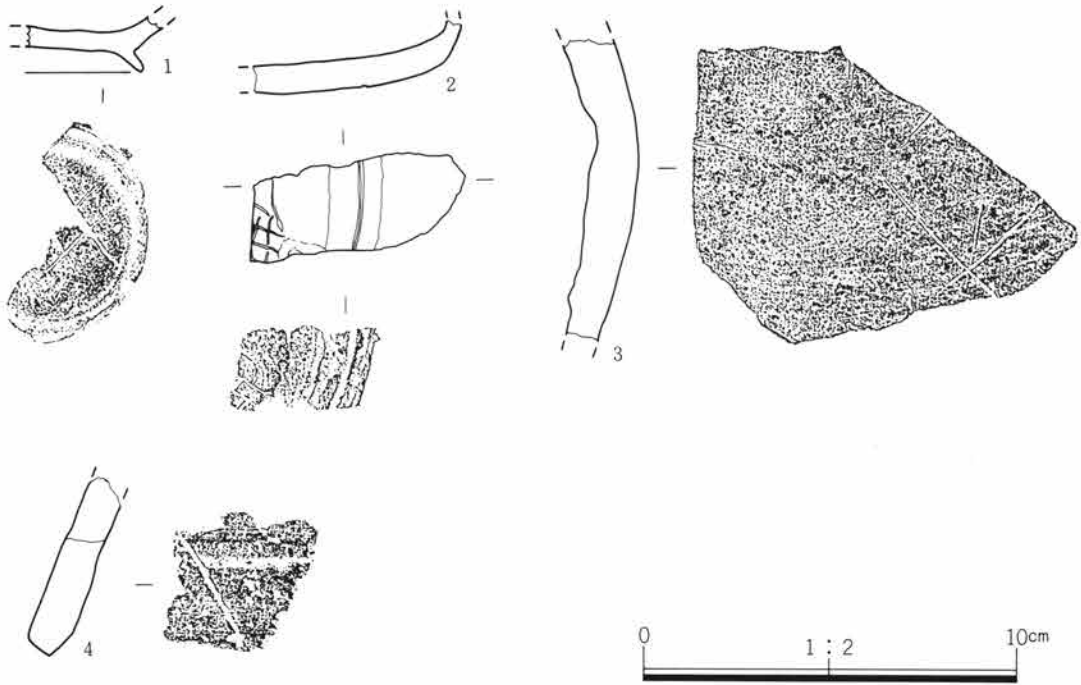


第154図 遺構外出土遺物 硯



第155図 遺構外出土遺物 須恵器 甕体部片叩き目拓影





第156図 遺構外出土遺物 へら記号を持つ須恵器

注1 「高盤」の呼称もあるが、ここでは「高杯」と呼んでおく。

注2 この種の長頸壺の実年代は、「現在のところ753年～825年までに限定されている」という。

注3 黒色土器の出自は土師器に求められるであろう。本遺跡出土の黒色土器のうち内外面とも黒色化された土器(第144図27～30、32～37)に、須恵器と同様の胎土をもち還元焰焼成されたものがある。畿内で呼ばれる「瓦器」とも異なるようである。

田中 琢「古代・中世における手工業の発達 (4)畿内」『日本の考古学 VI』

多賀城跡から出土する須恵器のなかに、「ミガキの須恵器」と呼ばれる一群の土器があり、椀・蓋・高杯が確認されているという。実見していないので何とも言えないが、器種に共通点がみられる。

『多賀城跡』政庁跡本文編、271頁、宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所、1982

#### (4) 瓦 類

藪田遺跡から4点の瓦片が出土したが、この4点が当遺跡における瓦類のすべてである。

第157図1は、5区R19の表土層から出土している。R19は、5区北半にある1号集石と近世と考えられる1号井戸との中間から出土している。

第157図2・4は、5区E07の表土層から出土している。E07は、5区南西端の低地に至ろうとする緩傾斜地にあり、関連遺構は明確でない。

第157図1は、凹・凸面の弧から、平瓦である。胎土は、石英・長石などの半透明～白色の微鉱物粒、茶褐色、灰色、黒色の微鉱物粒も若干含まれ、素地は荒い。色調は、淡灰色を呈し、還元気味の焼成であり、焼上りは甘く、軟質である。瓦を形づくるための可塑性を生む必要性から、砂を混和材として夾雑させたか不明瞭であるが、別種で黒灰色の粘土が縞をなして入っており、二種の粘土を混ぜ合わせた可能性は高い。平瓦表面は、布目痕が部分的に残るが、大半はその後の再調整によって出来た手や掌などの擦痕・撫痕がある。このため模骨桶に伴う寄木状痕は不明確である。裏面は、3mm前後の

細かく、粗な格子目の叩を施している。割れ口には、粘土紐による紐作りの接合面があり、粘土走行もこのことを示している。

第157図2は、凹・凸面の弧から、平瓦である。胎土は、石英・長石などの半透明～白色の微鉱物粒、茶褐色、灰色、黒色の微鉱物粒も若干含まれ、素地は荒い。胎土傾向は前者と同様である。色調は、淡灰色を呈し、還微元気味の焼成であり、焼上りは甘く、軟質である。

瓦種は平瓦であり、その製作技法痕は前者と同様に、紐作りの単位も認められる。

第157図4は、表面に模骨桶に伴う寄木状の圧痕があり、裏面には第157図1・2と同様の細格子の叩目が残る平瓦である。側部には、粘土板剥取り痕として見られるような糸切り状の条痕があり、小口部分に格子叩と思われる痕跡を残す。細片のため側部の糸切り、小口の叩については疑問視され、このことは、粘土板剥取り技法を藪田遺跡出土瓦を製作した工人達が通有の技法として用いていたとすれば、紐作りで作瓦する必要性は生じないと考えられるからである。つまり技法上に矛盾が生じるからである。

第157図3は、表面に布目圧痕があり平瓦片である。裏面は素文であり第157図1・2・4とは別種である。表面に模骨桶に伴う寄木状の圧痕は、小片、器面が荒れているため不明瞭である。前者に認められた紐作りも小片のため不明瞭である。胎土は夾雑鉱物粒の比較的少ない他の3片と異なり、藪田遺跡における9世紀代の須恵器の胎土と共通した白色鉱物粒を多く含む。焼成も他の3片と異なり、酸化気味の赤褐色を呈し、焼成も軟質で、素雑さを感じる。

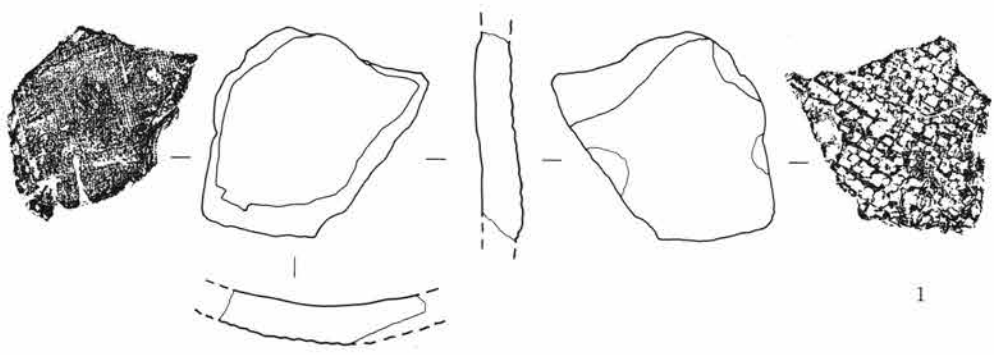
4点に限られた瓦類であったが、その特色は、作瓦技法における平瓦の紐作りにある。通常の場合は、粘土板桶巻作り<sup>注1</sup>か、粘土板1枚作りにあるため、平瓦における紐作りは特殊といわざるを得ない。

注1 佐原 真 「平瓦桶巻作り」『考古学雑誌』第58巻2号、1972

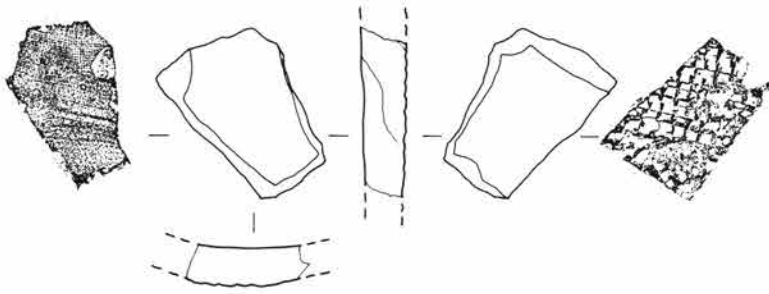
## (5) 中・近世の陶磁器

第4表1 中・近世陶磁器観察表 (第158・159図、巻頭図版3・4)

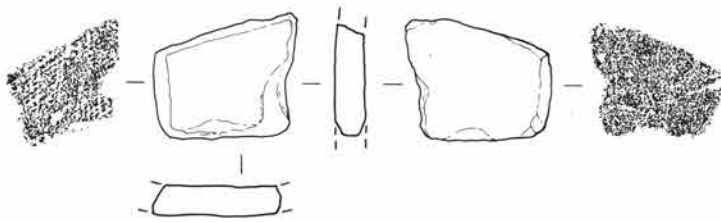
番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・釉調	特徴	備考
1	白磁小皿	6-I	1/4 口径(5.0)	白色 硬調 乳白色	釉は薄く内面のみ施釉。成形は型押しによる。外面の鐫文も型押し。	16C
2	白磁小皿	5O13-I	1/4 口径(5.6)	純白 硬調 淡青白磁色	釉は内面から口縁端部にかけて施釉。成形は型押しにより、外面の施文も型押しによる鐫文である。	16C
3	青磁碗	7Q15-II	体部片	淡灰色 軟調 くすんだ淡緑色	釉は厚く内外面に貫入あり。体部外面に蓮弁の劃花文あり。	龍泉窯系 13C



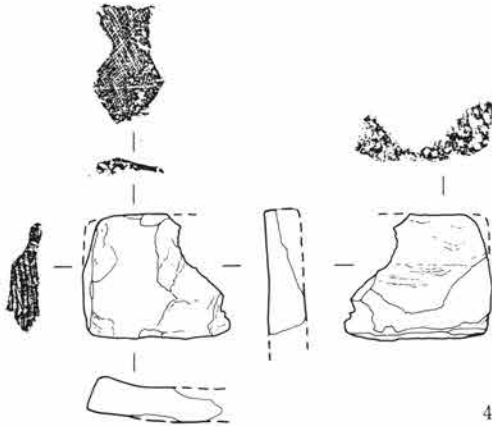
1



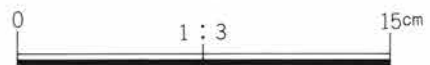
2



3



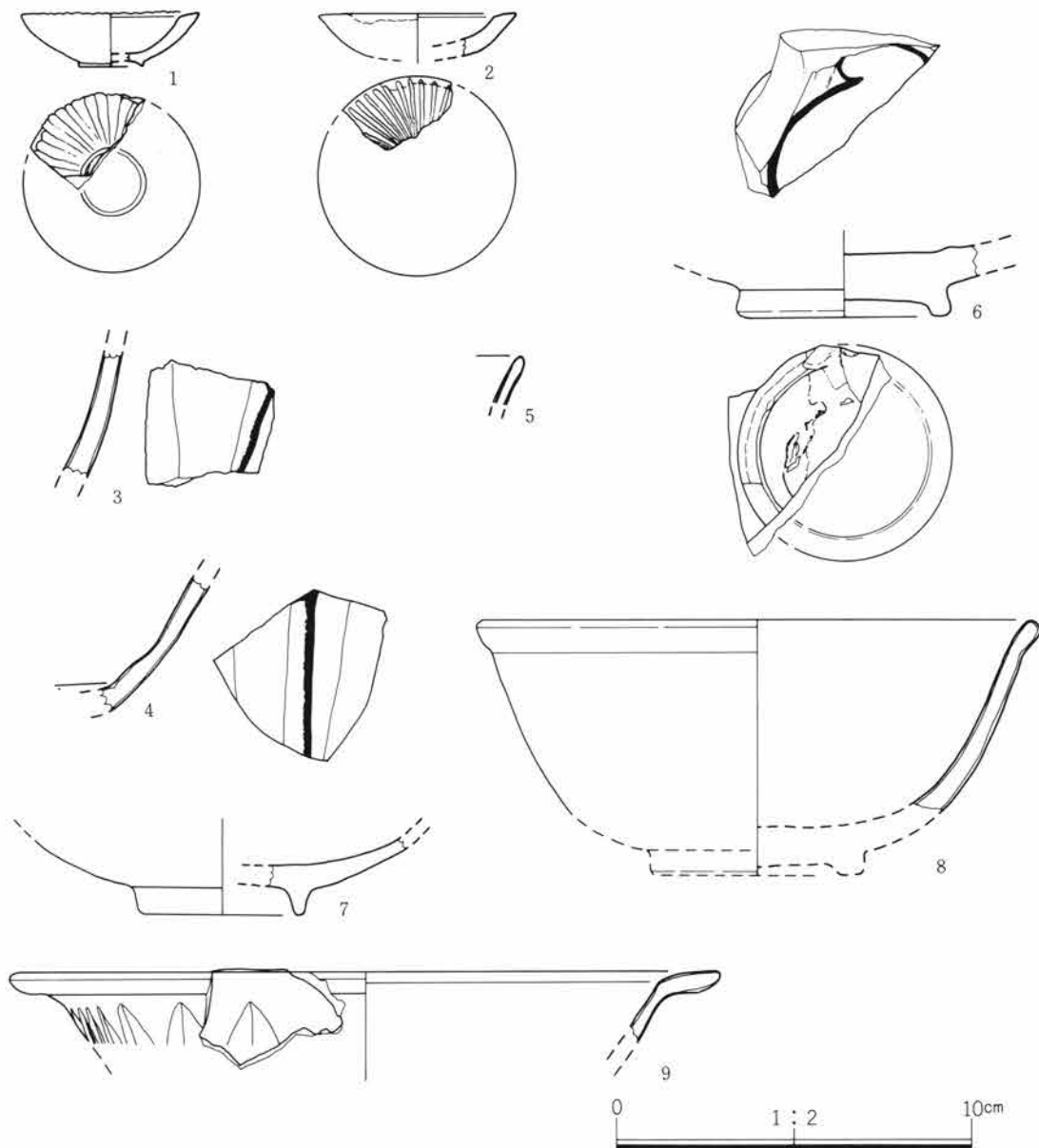
4



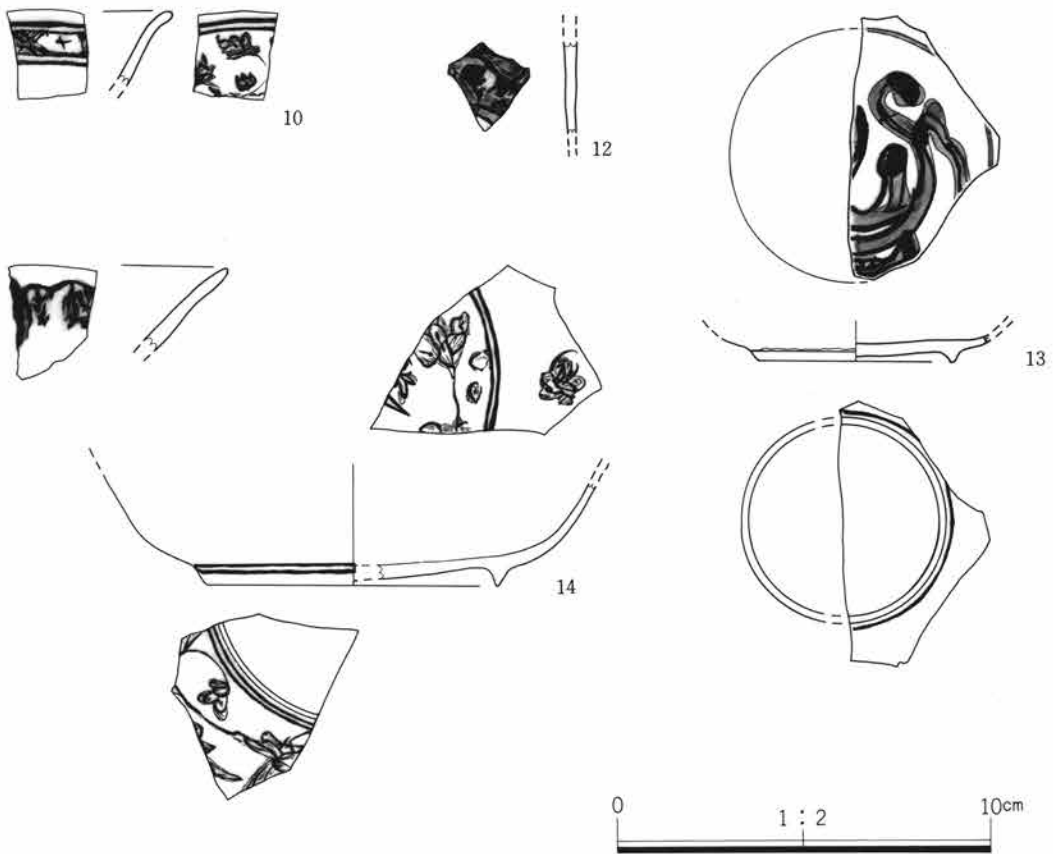
第157図 遺構外出土遺物 瓦

第4表2 中・近世陶磁器観察表 (第158・159図、巻頭図版3・4)

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・釉調	特徴	備考
4	青磁碗	4 V 32-II	体部片	灰色 硬調 淡緑色	体部外面に蓮弁の劃花文あり。内面底側に界線あり。釉は厚くやや乳濁する。	龍泉窯系 13C
5	青磁碗	5 L 19-I	細片	淡灰色 硬調 淡緑色	鎚手蓮弁文碗の口縁部片で、鎚手文の一部があり。口縁部は紫口状となる。	龍泉窯系 13C



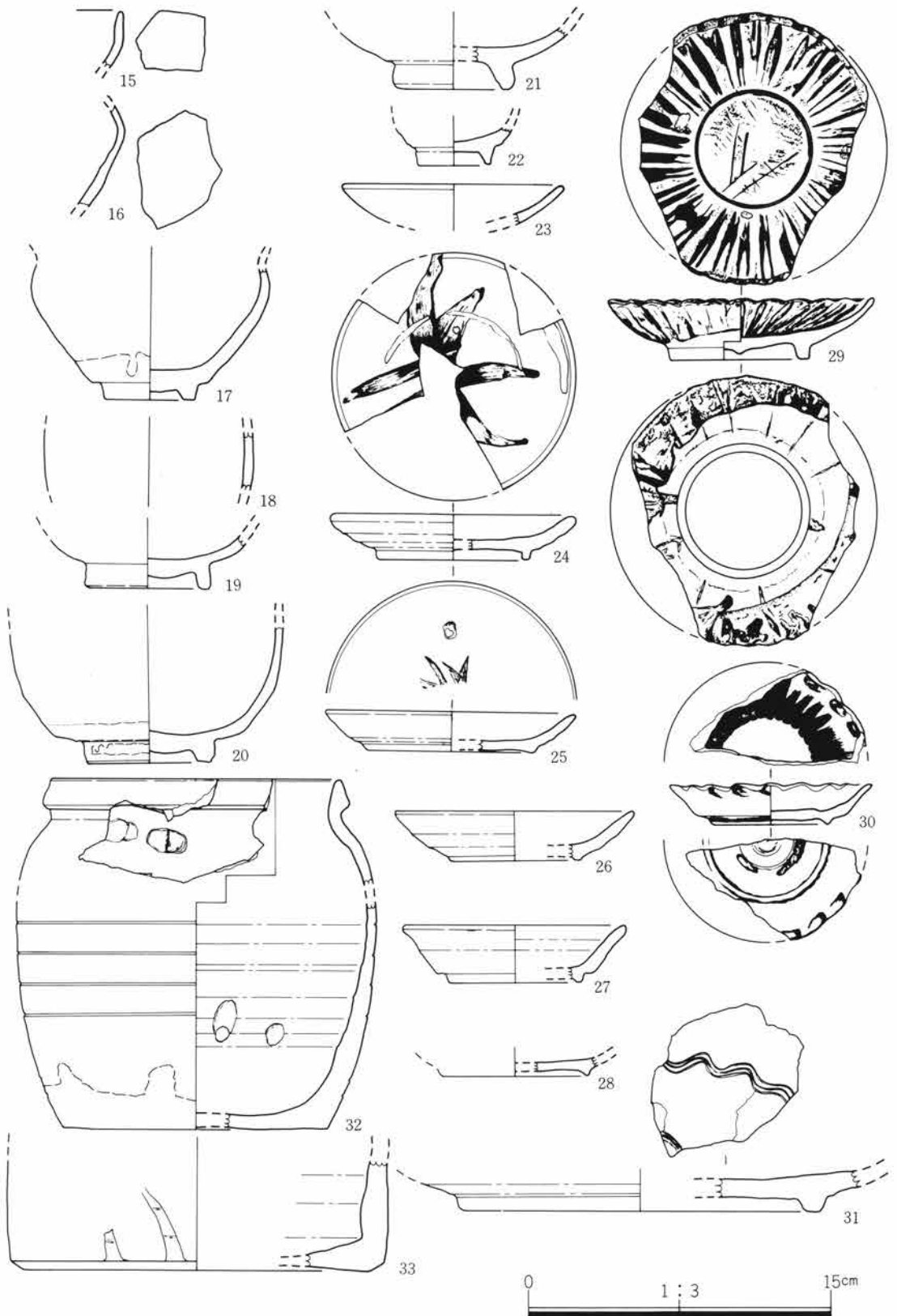
第158図 陶磁器 (1) 白磁・青磁 (輸入)



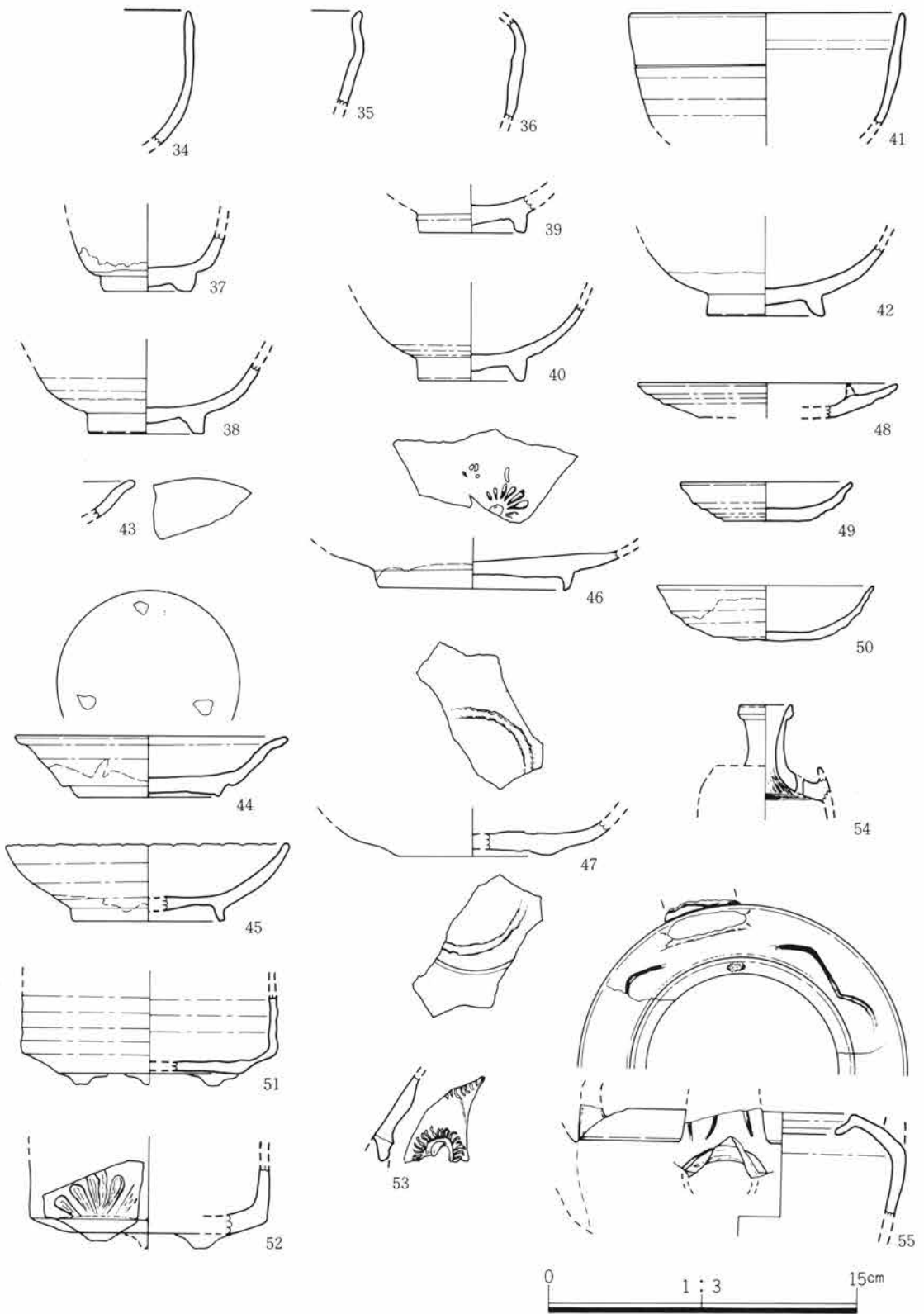
第159図 陶磁器(2) 青花(輸入)

第4表3 中・近世陶磁器観察表(第158・159図、巻頭図版3・4)

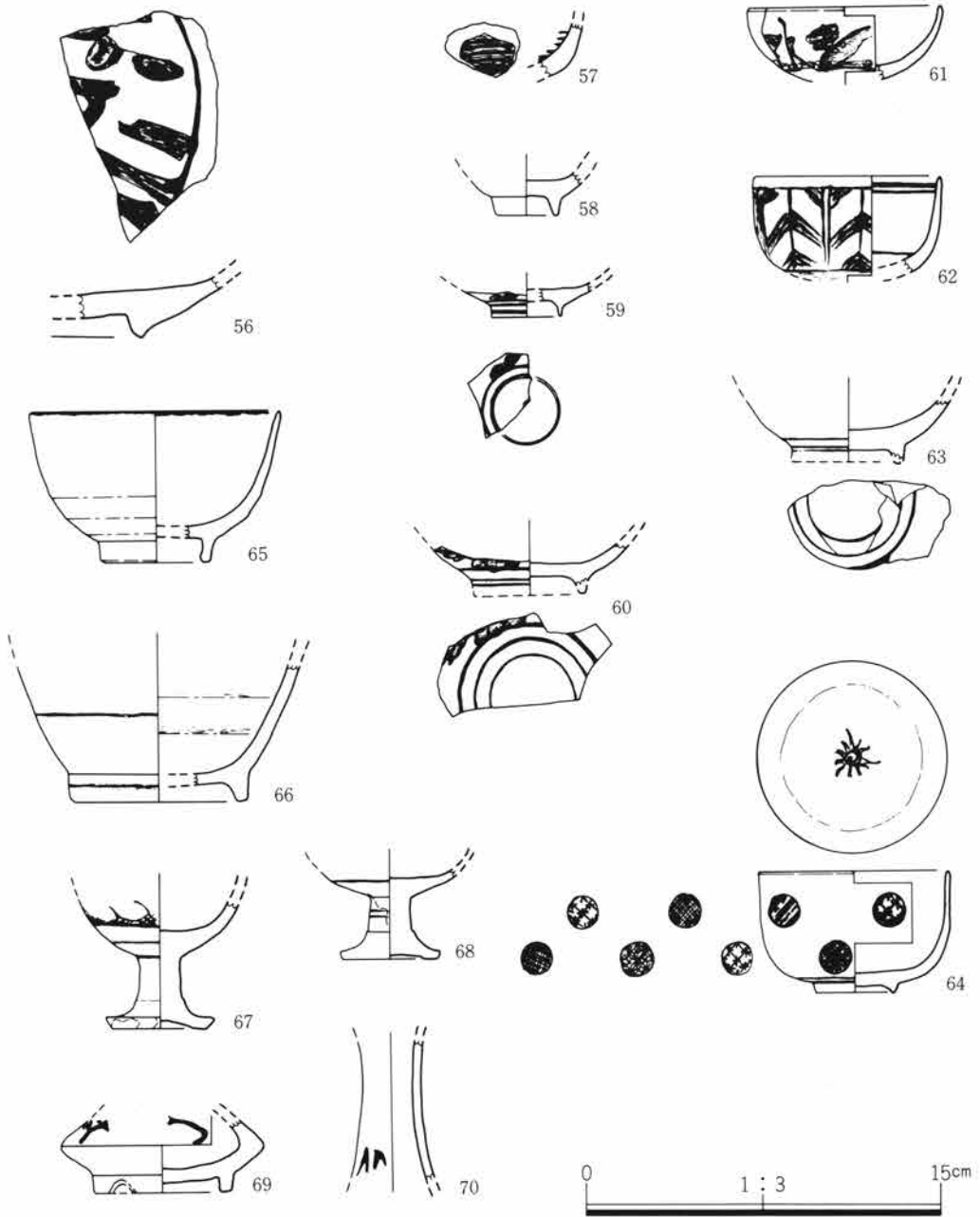
番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・釉調	特徴	備考
6	青磁碗	6-I	底部片	淡黄灰色 硬調 淡褐色	見込部に片切の劃花文あり。釉掛けは高台端部と高台内面を除いて施釉。釉は薄くやや酸化気味。	龍泉窯系 14・15C
7	青磁皿	5H08-I	底部～体部片 底径(4.6)	純白 軟調 緑色	浅い皿で見込みが蛇目となり、青磁釉がかかる。釉は浸し掛けで蛇目部、体部下半、高台部、高台内面を除き施釉。高台は削り出し高台で、端部に微細砂附着。	舶載明末 14C
8	青磁碗	5L08-I	口縁～体部片	灰色 硬調 くすんだ淡緑色	釉は厚く、内外面施釉。	龍泉窯系 15・16C
9	青磁鉢	7M13-II	口縁部片	白色 硬調 淡緑色	釉は厚く乳濁し、貫入する。体部外面に蓮弁の劃花文あり。砧手。	龍泉窯 14C



第160図 陶磁器(3) 美濃焼



第161図 陶磁器(4) 瀬戸・美濃

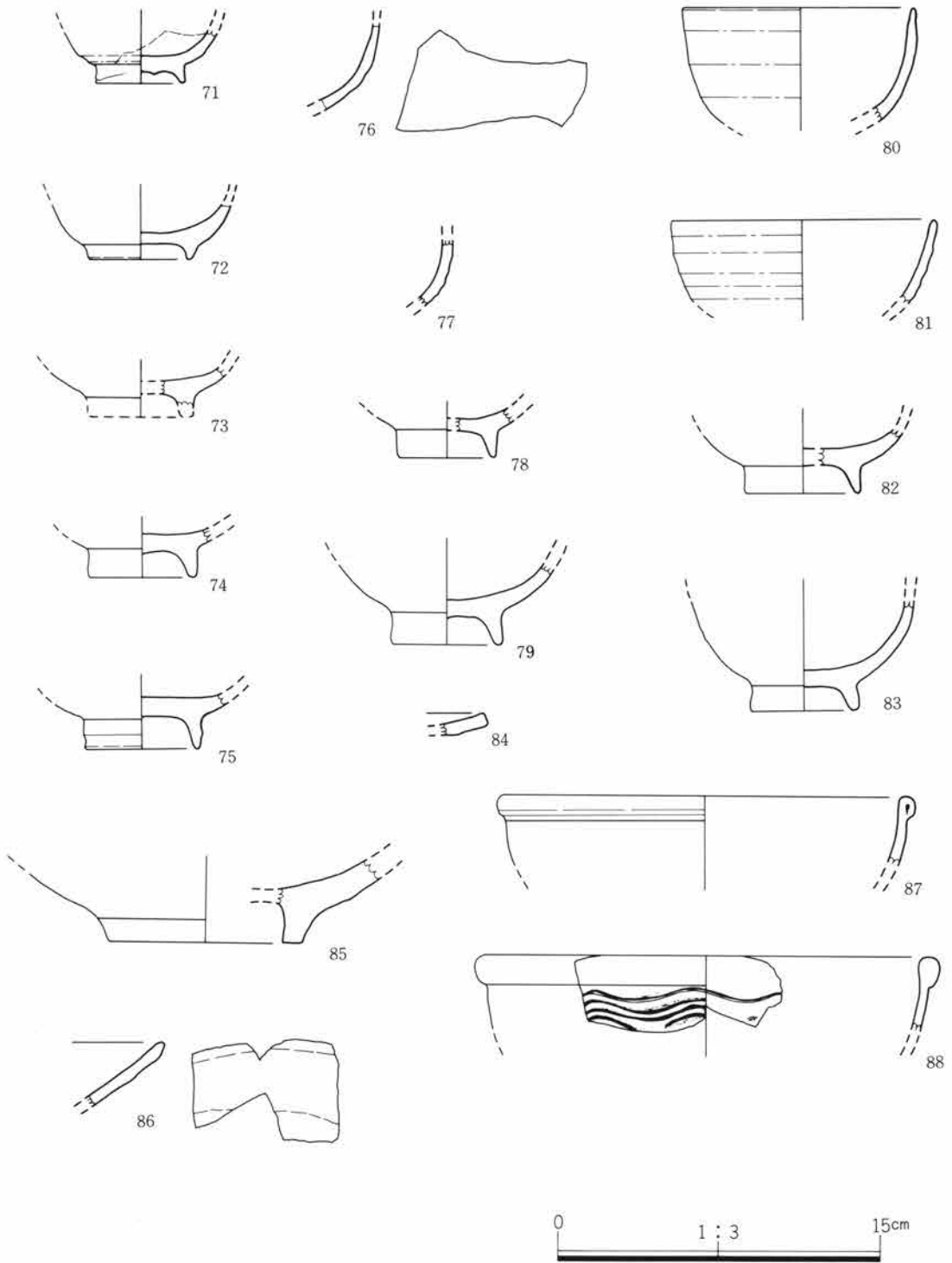


第162図 陶磁器（5）伊万里系

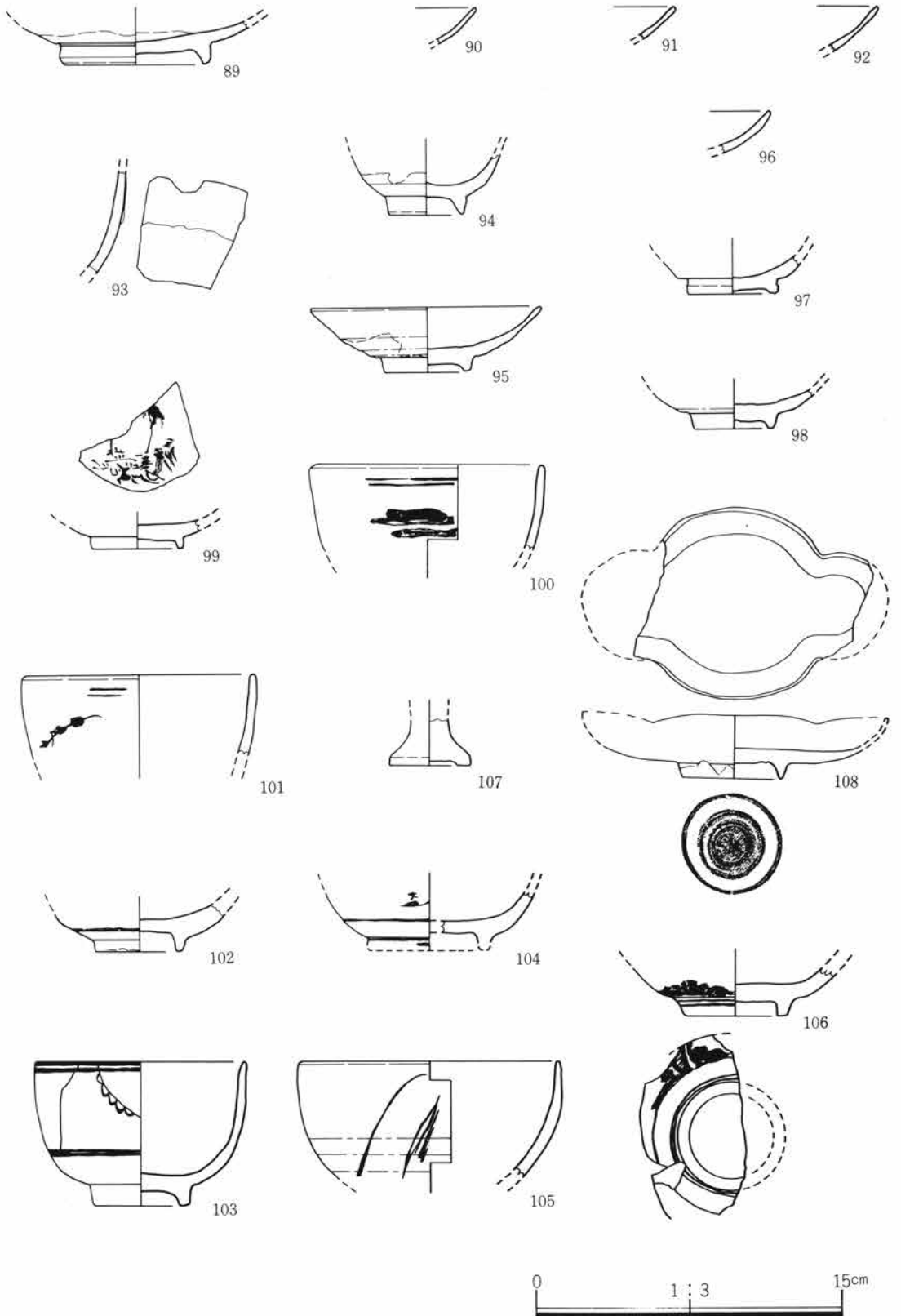
第4表4 中・近世陶磁器観察表（第158・159図、巻頭図版3・4）

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・釉調	特徴	備考
10	青花磁器碗	5O18-I	口縁部片	純白 軟調 淡灰色	釉は薄く、呉須は明末特有の色調を呈す。外面口縁部下に二条の圏線あり、下方に花文あり。内面に二条二単位の圏線があり、その間に、格子様の施文あり。	景德鎮窯系 16C後半

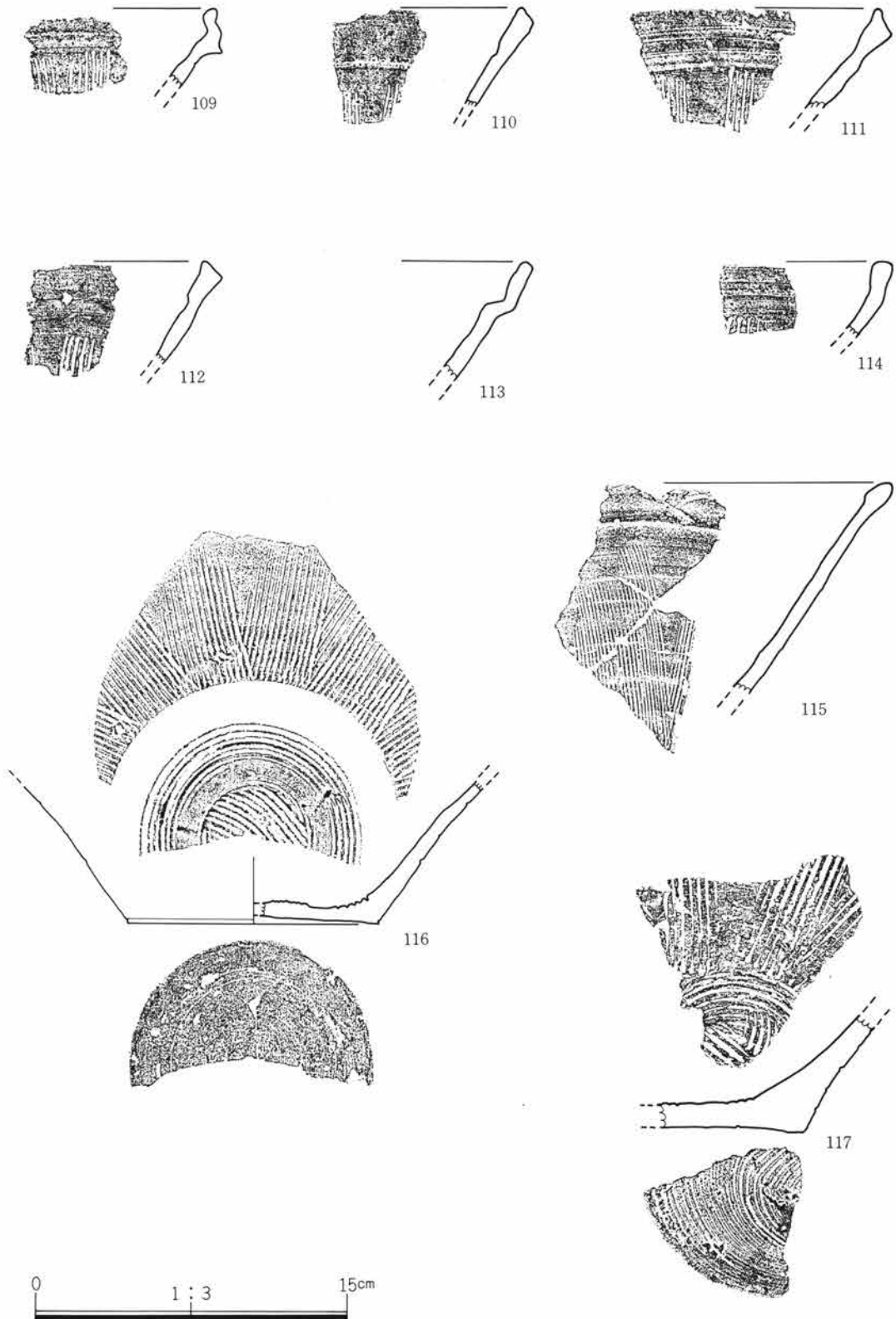




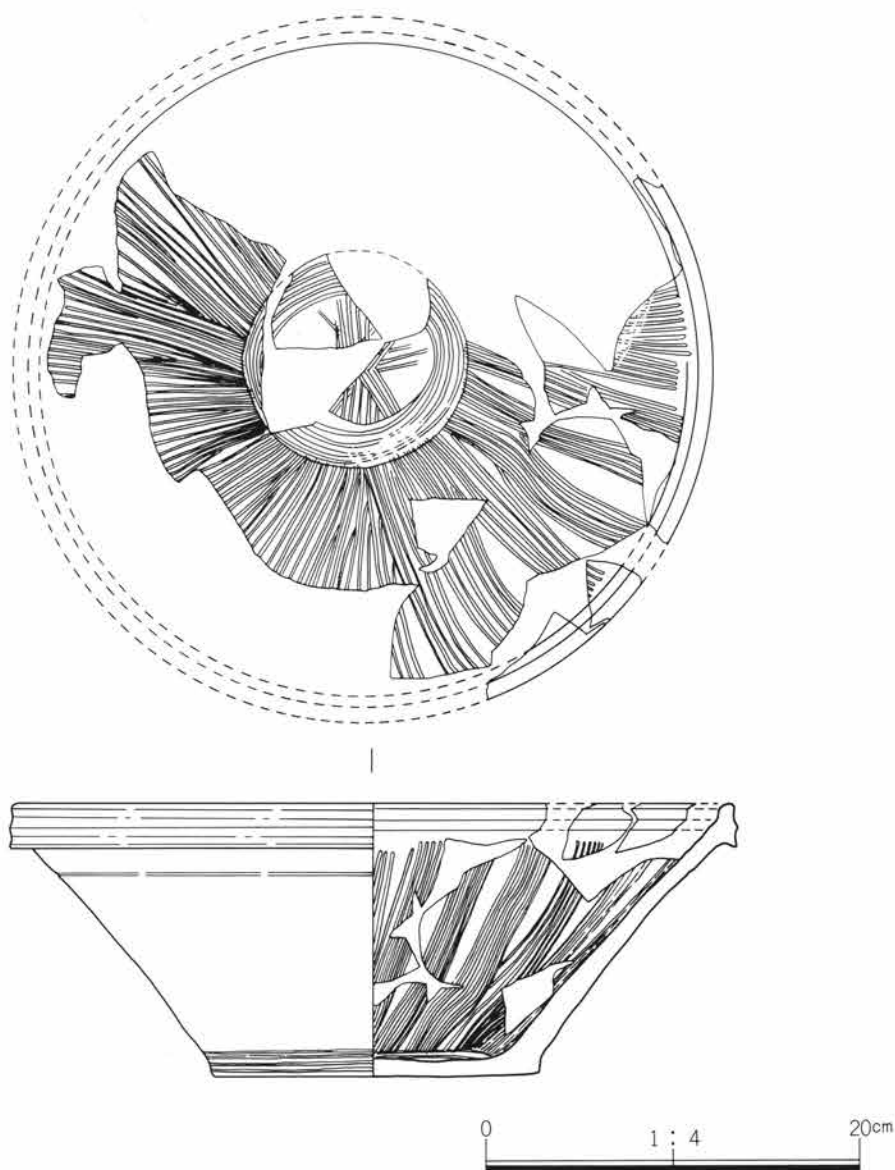
第163図 陶磁器(6) 唐津系



第164図 陶磁器（7） その他



第165図 陶磁器(8) 播鉢



第166図 陶磁器（9） 播鉢

第166図は5区J・K・M・N-15~19から出土した播鉢で、17片が接合して約半分の復原個体をつくることのできた。出土位置は掘立柱建物群の周辺であり、何らかのかたちで係った可能性が高い。口径38.7cm、器高14.5cm、底径17.5cmを測る。胎土は緻密で白色鈹物粒をわずかに含む。色調は酸化気味の暗褐色で、割れ口の内部は還元気味の灰色を呈する。焼成は焼き締められ、焼締陶器の範疇である。口縁外面には3条の凸部をもつ口縁部帯をもち、体部は直線的である。底面には乾燥時の板状の圧痕を残す。内面には6条を1単位とする卸目を施し、内底に円圏と上からおろした条線の一部が中央まで達する。製作年代は3条の口縁部帯と内面における円圏の卸目の存在から、江戸時代前半の所産と考えられる。

第4表5 中・近世陶磁器観察表 (第159図・160図、巻頭図版4、図版130・131)

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・釉調	特徴	備考
11	青花磁器皿	5 T13-I	口縁部片	淡灰色 硬調 灰色を帯びる白色	釉は薄く、呉須はダミの入ったやや褐色気味の藍色を呈す。内面には草花文(?)を描く。外面に呉須施文なし。	舶載であるが、景德鎮窯系とは質感が異なり、古染付に近似する。16C後半
12	青花磁器袋物	5 N19-I	頸部片	純白 硬調 白色	釉は白磁に近く、呉須はややダミが入った藍色を呈す。内面は無釉であり、破片の曲率は高く、瓶類の破片か。	景德鎮窯系か伊万里系か判然とせず。16C後半
13	青花磁器皿	5 O19-I	底部片 底径 (5.2)	純白 軟調 青白	釉掛けは高台端部を除いて施釉。釉は薄く青白磁色を呈する。釉、生掛け。呉須は明末青花特有の色調を帯びる。見込み部には一条の圏線と玉追い獅子(?)が描かれる。高台と体部の境に呉須による圏線あり。高台端部に砂付着。	景德鎮窯系 16C後半
14	青花磁器皿	5 U02-I	底部～体部片	純白 硬調 やや青味を帯びる白色	釉は薄く、呉須は明末の青花特有の色調を帯びる。釉掛けは高台端部を除き施釉。生掛けで、高台端部に砂付着。見込み部は二条の圏線を描き、花文を描く。高台と体部との境に二条の圏線あり。外面に草花文を描く。	景德鎮窯系 16C後半
15	陶器碗	5 S01-I	口縁部片	灰白色 軟調 黒色 (鉄釉)	いわゆる天目茶碗である。体部と口縁部との境目に浅い稜を持つ。釉調は黒色と鉄褐色とが分離して縞状をなしているが禾目まで至らない。	美濃焼か 16C前半
16	陶器碗	5 P15grid 不落	体部片	淡灰色 硬調 黒褐色 (鉄釉)	いわゆる天目茶碗の破片である。釉は薄く、部分的に鉛色を呈する。体部の内外にクロロ目あり。体部と口縁部の間に浅い稜あり。	美濃焼か 17C初頭
17	陶器碗	5 R18不落	体部～底部	灰色 硬調 黒褐色 (鉄釉)	器形はいわゆる天目茶碗。釉は外面体部下半を除いて施釉。施釉法は浸し掛け。高台は削り出し高台。	美濃焼か 17C初頭
18	陶器不詳	5 N14-I	体部片	淡黄灰色 普通 黄土色 (鉛釉)	釉は内外共に施釉し、貫入する。外面に劃文あり。	美濃焼か 18C初頭

第4表6 中・近世陶磁器観察表 (第160図、図版130・131・140)

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・釉調	特徴	備考
19	陶器碗	5 T04-I	高台部片	淡黄灰色 軟調 淡灰色 (鉛釉)	釉は長石釉で薄く、高台端部を除き施釉。器面に貫入が生ずる。	美濃焼か 17C後半
20	陶器碗	5 R13-I 5 N・O19・ 20不落	体部～底部	黄灰色 軟調 暗黄色 (鉛釉)	内湾気味の茶碗である。釉は鉛釉で、外面体部下半を除いて施釉。高台は削り出し高台。	美濃焼 18C前半
21	陶器碗	5 T04-I	底径 (4.8)	淡黄灰色 普通 乳灰色 (御深井釉)	釉は高台端部を除いて施釉。貫入入る。	美濃焼か 17C
22	陶器碗	5 M17-I	高台部片	灰色 硬調 黒褐色 (鉄釉)	釉は外面体部下半を除き施釉。釉調は天目釉。露胎は酸化気味で鉄褐色を帯びる。高台は削り出し高台。	美濃焼か 17～18C
23	陶器灯明皿	5 N12-I	口縁～体部 細片	灰色 軟調 茶褐色 (鉄釉)	釉は薄く、内外面に施釉。	美濃焼か 19C
24	陶器皿	5 O08-I 5 H06-II	口径(12.2) 器高 2.2 底径 (7.5)	淡黄灰色 普通 乳灰色 (長石釉)	釉は高台内面を除いて施釉。貫入入る。内面は鉄絵による楓様の施文あり。又、重ね焼きの痕跡あり。	美濃焼か 17C後半
25	陶器皿	5 G08-I	口径(12.4) 器高 1.9 底径 (8.2)	淡黄灰色 普通 乳灰色 (長石釉)	釉は内外共に施釉。貫入入る。内面に鉄絵施文あり。	美濃焼か 17C初頭
26	陶器皿	6 V02-II	口径(11.8) 器高 2.4 底径 (6.4)	淡黄灰色 普通 乳灰色 (長石釉)	高台を除き内外面施釉。貫入あり。	美濃焼か 17C前半
27	陶器皿	5 N14-I	口径(11.1) 器高 2.8 底径 (6.5)	淡黄灰色 普通 乳灰色 (灰釉)	高台を除き内外面施釉。貫入あり。	美濃焼か 17C後半
28	陶器皿	5-I	底径 (7.4)	淡黄灰色 普通 乳灰色 (灰釉)	釉は内外共に施釉。貫入入る。内面に鉄絵施文あり。	美濃焼か 16C後半

第4表7 中・近世陶磁器観察表 (第160・161図、図版130～133・140)

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・釉調	特徴	備考
29	陶器 菊皿	5 D08-I	3/8 口径 13.2 器高 3.0 底径 6.8	黄灰色 軟調 暗緑～黄灰色 (灰釉)	見込み上方にコテ刻みによる花卉あり。さらに、中央に圈線があり、トチン痕を3箇所認める。外面にもコテ刻みによる花卉あり。口縁部は花卉に沿って輪花あり。その数は32単位と推定される。高台は貼り付け後ロクロ整形。釉は外面体部下半を除いて施釉。	美濃焼か 17C後半
30	陶器 菊皿	7 Q01-II	3/8 口径(10.0) 器高 1.9 底径 (5.6)	淡灰色 軟調 淡緑色 (灰釉)	釉は厚く透明感が強く貫入が入る。内面に花卉を意図した印花文あり。口縁端部は弁端を意図した稜花の押圧あり。	美濃焼 16C前半
31	陶器 大皿	6-I	底部片	淡黄灰色 普通 灰色 (長石釉)	釉は高台端部と底面を除いて施釉。貫入。内面に4条を単位とした櫛描波状文が入る。高台は付高台。	美濃焼か 18C
32	陶器 耳壺	5 G14-I 5 H13-I 5 I15-I 5 H15-I 5 K20-I	口径(14.2) 底径(13.0)	淡黄灰色 普通 黄土色 (鉛釉)	口縁は断面三角形であるが、玉縁を意識してつくられ、その直下に耳がつく。体部外面は篋削り目がシャープにたち、内面には工具によるロクロ目がたつ。釉は体部の内面と外面下方とを除いて施釉。鉛釉。	美濃焼 18C以降
33	陶器 筒物	5 L17-I	体部～底部	黄灰色 軟調 こげ茶 (鉄釉)	器種は大型の袋物である。釉は褐色の鉄釉で刷毛塗りで、底面を除き施釉。内面に顕著なロクロ目あり。底部にトチン痕あり。	美濃焼か 18～19C
34	陶器 碗	5 J20-I	口径(19.6)	淡黄灰色 普通 淡緑灰色 (灰釉)	内外面施釉。釉調は灰釉。体部下半篋削り。	美濃・瀬戸 焼か 17C後半
35	陶器 碗	5 Q11-I	体部片	白灰色 普通 暗褐色 (鉛釉)	内外施釉。釉色は暗黒褐色の天目釉中に茶褐色の斑文状部分あり。口縁は外反し、端部は肥厚する。	美濃焼か 17C前半
36	陶器 碗	5 P12-I	体部片	白灰色 普通 黒褐色 (鉛釉)	体部は下半外面を除いて施釉。釉調はやや茶味を帯びる。	美濃・瀬戸 焼か 時期不詳
37	陶器 碗	5 O04-S B-II	底径 4.2	淡黄灰色 普通 乳灰色 (長石釉)	釉は高台部、体部下方を除いて施釉。高台は削り出し高台で、ロクロ左回り。内面にトチン痕あり。	美濃・瀬戸 焼か 18C前半

第4表8 中・近世陶磁器観察表 (第161図、図版132・133・141)

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・釉調	特徴	備考
38	陶器碗	5 M19-I	底径 5.5	淡灰色 硬調 淡緑色 (灰釉)	釉は内面、体部上半に施釉。釉調は灰釉。貫入あり。高台は削り出し成形。	瀬戸・美濃焼か 17C後半
39	陶器碗	5 J 13-I	底部片	灰色 軟調 暗褐色 (鉛釉)	内面施釉。釉調は鉛釉。高台は削り出し高台。	瀬戸・美濃焼か 17C末～18C前半
40	陶器碗	5 M14-I 5 M17-I 5 L 14-I 5 J 15-I	底部～体部片	灰色 硬調 淡褐色 (灰釉)	釉調は鉛釉である。釉は外面体部下半を除いて鉛釉が掛けられ、外面体部下半から高台部全面に灰釉が掛けられている。灰釉の釉色は淡い緑色を帯びる。高台は削り出し高台。	瀬戸・美濃焼か 17C後半
41	陶器碗	5 I 11-I	口径(13.3)	灰色 軟調 淡灰緑色 (灰釉)	内外施釉。外面体部下半に篋削り目あり。	美濃・瀬戸焼か 18C前半
42	陶器碗	5 N 019. 20不落	底径 5.5	淡灰色 硬調 淡緑色 (灰釉)	釉は内面、体部上半に施釉。貫入あり。高台は削り出し成形。	瀬戸・美濃焼か 17C後半
43	陶器小皿	5 H07-I	口縁部片	淡橙色 軟調 暗茶色 (鉄釉)	口縁部は外反し肥厚する。釉は柿釉で内外面に施釉。	瀬戸・美濃焼か 16C後半
44	陶器端折皿	5 K17-I 5 K18-I 5 N18-I 5 R12-I ・II	口径 13.2 器高 2.8 高台径 7.1	淡黄灰色 硬調 淡緑灰色 (灰釉)	釉は濁った灰釉調で、底面、体部下方を除き内外面施釉。内面、3箇所にとチン痕あり。底面は削り出し高台で、ロクロ右回り。	瀬戸・美濃焼か 17C前半
45	陶器菊皿	5 U14-I 5 S13-I	口径(13.6) 器高 3.7 底径 (7.4)	淡灰色 硬調 淡緑色 (灰釉、銅釉)	釉は体部外面、高台及び高台内面を除き施釉。外面は灰釉、内面は灰釉と緑色釉。口縁部に菊花の刻みあり。高台は付高台。	美濃・瀬戸焼か 17C後半
46	陶器皿	5 M18-I 5 L12-I	底径 (9.0)	淡灰色 硬調 淡緑色 (灰釉)	高台部及びその内面を除いて施釉。内面に菊花の印文鉄絵あり。貫入入る。高台は削り出し成形。	瀬戸・美濃焼か 17～18C



第4表9 中・近世陶磁器観察表 (第161図、図版132・133)

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・釉調	特徴	備考
47	陶器皿	5-I	底部片	淡灰色 硬調 淡緑色(灰釉)	内外面全面に施釉。貫入する。内外面にトチン痕あり。	瀬戸・美濃焼か 16~17C
48	陶器灯明皿	5 M18-I 5 N19-I	口径(12.5) 器高 1.7	暗橙色 硬調 錆鉄色(鉄釉)	内側に反りをもつ灯明皿であるが、大半を失っている。釉は柿釉で外面体部下半を施釉。	産地不詳 19C
49	陶器灯明皿	5 J15-I 5 H13-I	3/6	灰色 硬調 暗橙色(鉄釉)	口縁部に油煙が付着。釉は外面体部上方、内面に施釉。外面体部下半に篋削り目あり。底面は篋削りによる再調整を施す。	瀬戸・美濃焼か 17~18C
50	陶器灯明皿	5 O17-I 焼土中 5 M15-I 5 N15-I	1/2	灰色 硬調 暗茶色(鉄釉)	口縁の一部に油煙が付着。釉は外面体部上方と内面に施釉。体部外面から底部にかけ篋による再調整あり。	瀬戸・美濃焼か 17~18C
51	陶器香炉	5 I09-I 5 J09-I 5 J11-I	底部~体部片	淡黄灰色 硬調 褐色(鉛釉)	器種は筒形香炉である。底面に脚が付されている。釉は鉛釉で、体部外面上方のみ施釉。底部にトチン痕あり。	瀬戸・美濃焼か 18C初頭
52	陶器香炉	5 U11-I	底部~体部片	黄灰色 軟調 淡黄色(鉛釉)	器種は筒形香炉。体部外面に劃文あり。釉は内面、底部外面を除いて施釉。	瀬戸・美濃焼か 18C初頭
53	陶器水注	5 G03-III	体部片	灰色 硬調 カセて剥落 (灰釉)	水注の注口部片である。その巡りに爪形の刺突あり。頸部際にも同様の刺突あり。内面には紐作りに伴う指頭圧痕あり。釉はカセて大半が剥落しているが、刺突痕の中に残ったところからすれば淡い緑色の灰釉。割れ口と外面の大半を除き赤色顔料(朱か)が付着。	瀬戸焼 14C終~15C前半
54	陶器油壺	5 S18-I	口縁~頸部片	灰色 硬調 茶色(鉄釉)	小型袋物の器種で、体部と頸部との間に反りを持つ。頸部端に水差しのための小孔を穿つ。釉は柿釉で内外面に施釉。内面にクロク水挽きに伴うしぼり目あり。	常滑焼 19C
55	陶器土瓶	5 J13-I	口径(9.0)	淡黄灰色 普通 淡緑灰色(灰釉)	釉調は灰釉で、内面を除き他施釉。肩部に土瓶の耳あり。注口あり。耳及び肩部に劃文あり。	美濃・瀬戸焼か 18C

第4表10 中・近世陶磁器観察表 (第162図、巻頭図版4、図版134・135・141)

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・釉調	特徴	備考
56	染付磁器皿	5 L14-I	底部～体部片	白色 軟調 青白磁色 (染付)	釉は薄く乳白濁する。内面は呉須による圏線が一条巡り、判読不明の意匠が施される。外面は高台端部を除いて施釉。	初期伊万里 17C前半
57	青磁、染付碗	5 Q13-I	体部片	乳白色 軟調 青磁釉 (染付)	外面は青磁釉を施し、内面に染付を施す。内外共に貫入あり。染付けは5条の圏線である。	伊万里系 17C
58	磁器猪口	5 U14-I	底径 (2.6)	淡灰色 硬調 乳濁色	高台端部を除き施釉。高台に砂付着。	伊万里系 17C
59	磁器猪口	5 K15-I	底径 (1.5)	乳白色 軟調 淡灰白色 (染付)	外面に呉須を用いた施文あり。	伊万里系 18C前半
60	磁器碗	5 O15-I 5 L12-I	底径 4.7	乳白色 普通 乳濁色 (染付)	内外面に施釉。外面に呉須を用いて草花文が描かれ、高台内面に一条の圏線が巡る。	伊万里系 18C後半
61	磁器碗	5 M19-I	口径 (8.2)	乳白色 普通 淡灰白色 (染付)	内外面に施釉。外面に風景を呉須で施文。	伊万里系 19C前半
62	磁器碗	5 K19-I	口径 (7.8)	淡灰色 硬調 乳濁色 (染付)	内外面に施釉。内面に三条の圏線あり。外面に稜杉の文様が施文される。	伊万里系 18C
63	磁器碗	5、19-I	底径 (4.7)	淡灰白色 軟調 乳濁色 (染付)	高台端部を除く内外面に施釉。外面に呉須を用いた施文あり。高台内面に一条の圏線が巡る。	伊万里系 18C後半
64	磁器碗	5 S19-I	口径 8.0 器高 5.0 底径 3.3	淡灰白色 軟調 淡青濁灰色 (染付)	高台端部を除き施釉。内面に見込み文様。外面に麻の葉、七宝文、時雨文、格子目のある丸窓の意匠が呉須で施される。	伊万里系 18C
65	磁器碗	5 F14-不 落	口径(10.5) 器高 6.3 底径 (4.6)	乳白色 硬調 乳濁色	高台端部を除いて内外を施釉。口縁部に口紅あり。高台端部に砂付着。	伊万里系 17C後半

第4表11 中・近世陶磁器観察表 (第162・163図、図版134～137・141)

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・釉調	特徴	備考
66	磁器徳利	5 M13-I 5 K14-I	底径 (7.5)	灰色 硬調 濁灰色 (染付)	内面、高台端部を除いて施釉。体部下半と高台部に呉須の圏線あり。内面にコテを用いたロクロ目あり。	伊万里系 17C後半
67	磁器仏飯器	5 V21-I	脚長 3.0 台部径 4.2	白色 普通 乳濁色 (染付)	台部内面を除き施釉。杯部に呉須を用いた施文あり。	伊万里系 18C
68	磁器仏飯器	5 O14-I	脚長 2.5 台部径 4.0	淡灰白色 軟調 乳濁色 (染付)	杯部の内外と脚部の上半に施釉。脚部と杯部に呉須を用いた施文あり。	伊万里系 18C
69	磁器染付油壺	5 G12-不落	底径 5.7 胴径 8.6	淡灰白色 軟調 淡灰濁色 (染付)	高台端部及び内面を除いて施釉。呉須は藍色にダミが入った色調を呈し、白磁釉は乳濁する。高台端部は鉄足状に酸化。	伊万里系 18C
70	磁器徳利	5 K18-I	頸部径 2.7	淡灰色 硬調 淡灰色 (染付)	外面と内面の一部に施釉。外面に呉須を用いた絵付けあり。	伊万里系 18C前半
71	陶器碗	5 F10-I	底部片	淡黄灰色 軟調 淡黄褐色 (鉛釉)	釉調は鉛釉、高台部を除いて施釉。	唐津系 17C後半
72	陶器碗	5 J16-I 5 L16-I	体部下半～ 底部	淡橙色 軟調 黒褐色 (鉄釉)	釉を全面施釉。	唐津系 17C後半
73	陶器碗	5 U20-I	底部破片 高台径 (4.7)	淡黄灰色 硬調 淡褐色 (透明釉)	高台端部を除き施釉。釉は透明感が強く、細かい貫入あり。貫入は左上がりのためロクロは右回り。	唐津系 18C前半
74	陶器碗	5 R18-I	底径 (4.8)	淡黄灰色 軟調。淡黄褐色 (透明釉)	高台端部を除いて施釉。微細貫入入る。	唐津系 18C前半
75	陶器碗	5 R11-I	底部破片 高台径 (5.2)	淡黄灰色 硬調 淡褐色 (透明釉)	高台端部を除き施釉。釉は透明感が強く、細かい貫入あり。貫入は左上がりのためロクロは右回り。	唐津系 18C前半
76	陶器碗	5 J14-I 5 K14-I	体部片	淡灰色 軟調 黒色 (鉛釉)	釉は薄く部分的に鉛釉調となる。	美濃焼か 時期不詳

第4表12 中・近世陶磁器観察表 (第163図、図版136・137)

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・釉調	特徴	備考
77	陶器碗	5 I 09-I	体部片	淡黄灰色 軟調。淡黄褐色 (透明釉)	内外面に施釉あり。微細貫入あり。	唐津系 時期不詳
78	陶器碗	5 Q 08-I 5 P 06-I	底部破片 高台径 (4.4)	淡黄灰色 硬調 淡褐色 (透明釉)	高台端部を除き施釉。釉は透明感が強く、細かい貫入あり。貫入は左上がりのためロクロは右回り。	唐津系 18C前半
79	陶器碗	5 T 21-I	高台径 (4.9)	乳灰色 硬調 淡褐色 (透明釉)	高台端部を除き施釉。釉は透明感が強く、細かい貫入あり。貫入は左上がりのためロクロは右回り。	唐津系 18C前半
80	陶器碗	5 J 20-I 5 K 20-I	口縁部片	淡黄灰色 硬調 淡褐色 (透明釉)	釉は薄く内外面に施釉。細貫入は外面左上がりのためロクロは右回り。	唐津系 17C後半～ 18C前半
81	陶器碗	5 I 09-I 5 J 13-I 5 I 12-I	口縁部片 口径(12.2)	淡黄灰色 軟調。淡黄褐色 (透明釉)	内外面に施釉。微細貫入入る。	唐津系 17C後半
82	陶器碗	5 R 11-I	底部破片 高台径 (5.2)	淡黄灰色 硬調 淡褐色 (透明釉)	高台端部を除き施釉。釉は透明感が強く、細かい貫入あり。貫入は左上がりのためロクロは右回り。	唐津系 18C前半
83	陶器碗	5 I 16-I 5 J 15-I 5 K 16-I	底部破片 高台径 (4.8)	淡黄灰色 硬調 淡褐色 (透明釉)	高台端部を除き施釉。釉は透明感が強く、細かい貫入あり。貫入は左上がりのためロクロは右回り。	唐津系 18C前半
84	陶器大皿	5 O 05-I	口縁部片	黒燕脂色 普通 暗緑色 (銅釉か)	内面に施釉された釉は暗緑色、淡緑色、淡いコバルト色の3色を用い刷毛掛けし、外面は透明釉を施す。	唐津系 時期不詳
85	陶器皿	5-I	底部片	燕脂色 硬調 内面-乳灰(白土) 外面-黒褐(鉄釉)	高台端部、底部外面を除いて施釉。	唐津系 時期不詳
86	陶器皿	5 R 17-I 5 L 15-I	口縁部片	淡い燕脂色 軟調 淡褐色 (鉛釉)	釉は体部外面下方を除いて施釉。	唐津系 時期不詳

第4表13 中・近世陶磁器観察表 (第163・164図、図版136~139)

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・釉調	特徴	備考
87	陶器片口	5 P18-I	口縁部片	濃い燕脂色 硬調 こげ茶(鉄釉)	釉は薄く内外面に施釉。口縁部は折り返して玉縁となる。	唐津系 時期不詳
88	陶器片口	5 I14-I 5 E08-I	口縁部片	黒灰色 硬調 灰色(白土、鉄釉)	体部外面に櫛描文あり。口縁部は折り返しによる玉縁。	唐津系 時期不詳
89	灰釉碗	5 E01-I	底径 6.7	微鉾物粒をわずかに含む。焼締 淡い緑色(灰釉)	施釉はその掛目から、刷毛塗りと考えられる。切りはなし痕は再調整のため見えない。高台は付高台。	平安時代前期
90	陶器皿	5 I12-I	口縁部破片	淡灰色 普通 濁緑色(銅釉)	内面は緑色釉(銅釉か)。外面は透明釉。	唐津系 17C
91	陶器皿	5 P18-I	口縁部破片	淡灰色 普通 濁緑色(銅釉)	内面は緑色釉(銅釉か)。外面は透明釉。	唐津系 17C
92	陶器皿	5 M18-I	口縁部片	淡灰色 普通 濁緑色(銅釉)	内面は緑色釉(銅釉か)。外面は透明釉。	唐津系 17C
93	陶器袋物	5 T21-I	体部片	灰色 硬調 黒褐色(鉛釉)	器種は葉茶壺か。釉は体部上方のみ施釉。体部内面にクロロ目あり。	製作地不詳 時期不詳
94	陶器碗	5 J13-I 5 I12-I	底部片	暗灰色 硬調 黒褐色(鉄釉)	外面下半を除いて施釉。	唐津系 時期不詳
95	陶器皿	5 K17-I 5 M13-I 5 M15-I 5 M16-I	口径(13.3) 器高 3.1 底径(4.2)	淡灰色 普通 濁緑色(銅釉)	内面が蛇目となる。蛇目部、高台の内外、体部下半を除き施釉(銅釉か)。高台際に微細砂付着。	唐津系 17C
96	陶器皿	5 K11-I 5 K17-I	口径(13.0)	淡灰色 普通 濁緑色(銅釉)	内面は緑色釉(銅釉か)。外面は透明釉。	唐津系 17C

第4表14 中・近世陶磁器観察表 (第164図、図版138・139・142)

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・釉調	特徴	備考
97	陶器碗	5 O19-I 5 P15-I	底部片	乳白色 硬調 黒色(鉄釉)	外面を除き施釉。	製作地不詳
98	陶器皿	5 L20-I	底径(3.9)	淡灰色 普通 濁緑色(銅釉)	内面に蛇目あり。蛇目部、高台の内外、体部下半を除き施釉(銅釉か)。	唐津系 17C
99	陶器碗	5 H13-II	底径 4.5	乳白色 硬調 灰色(透明釉)	釉は高台内面を除き内外施釉。内面に鉄絵あり。高台部に「山住原」の印銘あり。	京焼系 時期不詳
100	陶質磁器碗	5 R19-I 5 T16-I	口径(11.4)	灰色 軟調 淡灰色(染付)	内外面に施釉。細貫入あり。貫入は左上がりのためクロクロ右回り。外面に具須を用いた施文あり。	九州系か 18C前半
101	陶質磁器碗	5 T15-I 5 U15-I	口径(11.4)	灰色 軟調 灰色(染付)	内外面に施釉の細貫入あり。貫入は左上がりのためクロクロ右回り。外面に具須を用いた施文あり。	九州か 18C前半
102	陶質磁器碗	5 M13-I	底径(4.2)	淡灰色 軟調 淡灰色(染付)	高台端部を除き内外面に施釉。釉は細貫入する。外面に具須を用いた施文あり。高台端部は鉄足状に酸化。	九州か 18C
103	陶質磁器碗	5 S05-I	口径(10.3) 器高 7.0 底径 4.8	灰色 軟調 淡青灰色(染付)	高台端部を除いて施釉。細貫入あり。貫入左上がりのでクロクロ右回り。外面に具須を用いた施文あり。高台端部は生掛け。	九州か 18C
104	陶質磁器碗	5 M14-I 5 R11-I	底径(6.0)	灰色 硬調 淡灰色(染付)	内外面に施釉。釉は細貫入入り、左上がりのためクロクロ右回り。外面に具須による施文あり。	九州か 18C前半
105	陶器碗	5-I	口径(12.6)	灰色 硬調 (透明釉)(鉄絵)	内外面に施釉。外面に柳様の鉄絵あり。体部下半篋削り目あり。	製作地不詳 17C後半
106	陶質磁器碗	5 R19-I 5 R20-I	底径 5.0	灰色 軟調 淡灰色(染付)	高台端部を除き施釉。外面に具須を用いた施文あり。高台端部は鉄足状となる。	九州か 17C後半
107	陶器仏飯器	5 V21-I	底径 4.0	淡灰色 硬調 透明釉(染付)	底面を除いて施釉。	九州系か 18C

第4表15 中・近世陶磁器観察表 (第164~166図、図版142・143)

番号	器種	出土位置	量目	胎土・焼成・釉調	特徴	備考
108	陶器曲耳の碗	5 P16 2号溝	3/4	灰色 硬調 淡灰色(透明釉)	釉は厚く透明感が強い。貫入入る。高台際、高台内面は無釉。	瀬戸焼 17C後半
109	陶器播鉢	5 S14-I	口縁部片	白色鉾物粒多い 焼締 鉄釉	内面に6条を1単位とする卸し目あり。外面にロクロ目あり。	製作地不詳 江戸前期
110	陶器播鉢	5 O08-I	口縁部片	白色鉾物粒多い 焼締 自然釉	内面に3条+αを1単位とする卸し目あり。	製作地不詳 江戸前期
111	陶器播鉢	5 L17-I	口縁部片	白色鉾物粒多い 焼締 自然釉	内面に4条を1単位とする卸し目あり。	常滑焼 江戸前期
112	陶器播鉢	5 T14-I	口縁部片	白色鉾物粒多い 硬質 無釉	内面に5条を1単位とする卸し目あり。	常滑焼 江戸前期
113	陶器播鉢	5 N16-I	口縁部片	夾雑、鉾物粒少ない 硬質 鉄釉	卸し目部を欠損する。	美濃焼 江戸前期
114	陶器播鉢	5 C14-I	口縁部片	白色鉾物粒含む 焼締 自然釉	内面に5条+αを1単位とする卸し目あり。	製作地不詳 江戸前期
115	陶器播鉢	5 P16-I	口縁部片	夾雑、鉾物粒少ない 硬質 鉄釉	内面に25条を1単位とする卸し目あり。施釉は刷毛塗り。	美濃焼 江戸後期
116	陶器播鉢	5 N20-I	体部~底部片 底径 11.6	夾雑、鉾物粒少ない 硬質 鉄釉	内面に14条を1単位とする卸し目あり。内面底に円圏の卸し目あり。施釉は全面。	美濃焼 江戸前期
117	陶器播鉢	5 O08-I	体部~底部片	夾雑、鉾物粒少ない 硬質 鉄釉	内面に9条を1単位とする卸し目あり。内面底に円圏の卸し目あり。底部外面に糸切り痕あり。ロクロ右回転。刷毛塗り。	美濃焼 江戸前期

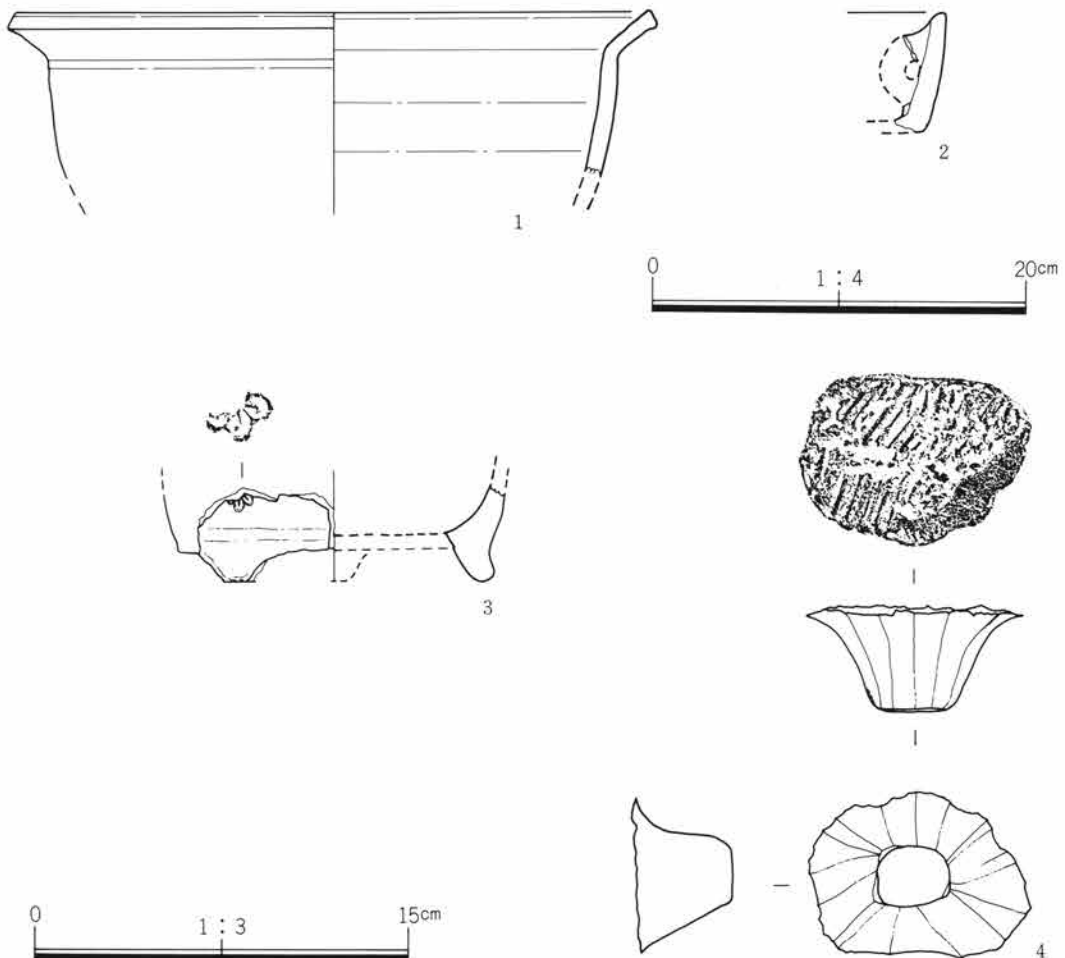
(6) 中・近世の軟質陶器

第167図1は軟質陶器製の内耳鍋形である。耳は欠損しているものの、県下一円で同形が出土しており、内耳が付くと推定される。東毛・西毛地域の類例よりも体部の立ち上りが丸みをおび、地域差を感じる特色がある。焼成は燻がかかり、胎土は白色鈇物を含み、焼成はやや硬い。16世紀代か。

第167図2は軟質陶器製の内耳盤形である。耳は底部まで至らず16世紀代の特色をとどめている。素地は前者に共通する。焼成は燻がかかり、胎土は白色鈇物粒を含み、焼成はやや硬い。

第167図3は軟質陶器製の香炉片で、脚の一端を残す。体部に梅花と見える5弁の印花文があり、連続してはいない。香炉のため内面整形は原形をとどめ横撫でが明瞭に残る。胎土は前者の1・2に共通し白色鈇物を多く含む。焼成は燻がかかり、胎土は白色鈇物粒を多く含む。焼成はやや硬い。

第167図4は軟質陶器製の火鉢と思われる個体の脚部で剥落部に叩板痕のように見える母部圧痕が残る。焼成は燻がかかり、胎土は白色鈇物粒が少なく前者と異なる。焼成はやや硬い。



第167図 遺構外 中近世の軟質陶器



## (7) 遺構外出土の金属製品 (第168~170図、巻頭図版2、図版146・147)

ここでは主として遺構外出土の金属製品を扱うが、紙面の都合により、遺構出土分も一部含めて扱うこととする。遺構出土分の遺物は、第168図2の丸軋裏金具(5区第9号住居址覆土)、第169図10および14の鉄製品(5区第5号住居址)、第169図13の鉄鎌(5区第2号土坑覆土)である。

第168図1は銅印である。印面の大きさは天地26mm、左右25.5mmで、総高は31mmである。文字は「朝」と読める。背面の鈕側からみると天の左右は25mmで、地の左右よりもわずかに小さい。

鈕は有孔の蒼鈕かんちゆうに属する。鈕は背面からみると(文字を正常に捺す状態で)、天地の中軸線から9°左へ傾いている。左側の孔(図中左)の方がやや大きく径5mm、右側の孔径4mmである。鑄造時に右側の鑄型がやや天方向へずれたと考えられる。また孔の内面もずれており、鑄造終了後右側の孔から工具をいれて孔をひろげた痕跡がある。孔内部の下端はずれて段をもつ。

印面は深くつくられており、最深部で4mmを測る。文字は右上りになり、「卓」部の「日」は丸味を帯びて楕円形を呈する。「月」部はヨコ棒の二の右端が離れ、右下端の跳ねが大きい。

一部を除き、全体に緑青がみられ、一部に朱の付着がみられる。5区台地部の東端付近で出土した。完形注1。蛍光X線分析の資料番号はNo.6である。(図版153)。

2は丸軋の銅製裏金具で、A面が内面(帯側)、B面が外面(人体側)とみられる。A面の弧を描く部分は面取りされて端部が薄くなる。また、左下端に銚の一部が遺存しており、天部には銚留め用の径1.5mmほどの小孔がある。全体で3孔あったとみられる。B面右下端には銚留め用小孔の輪郭がみられる。リベット状にとめたと考えられる。天地21mm、左右31mm、厚さ1.5mm弱が遺存し、左右の復原長は33mmである。5区9号住居址覆土から出土した。注2

3は本体銅製、柄部鉄製の烙印である。文字は「全」とあり、「ヤマサン」と仮称する。印面に向けて「ヤマ」の左側は17mm、右側は18mmあり、「サン」のヨコ棒は上から長さ5mm、7mm、20mmの順に長くなる。下のヨコ棒はわずかに歪みをもつ。文字の端部から根元までの深さは最深部で7mmである。「サン」の上のヨコ棒の根元左側、中のヨコ棒と下のヨコ棒との根元のあいだに鉄サビがみられる。また、下のヨコ棒の下方にも鉄サビがある。背面は丸味を帯びて盛り上り、印面に向かって右側の「ヤマ」の外方に、端部が鐺状に凸出する。

柄部は鉄製で断面方形とみられ、一辺3.5~4mmである。背面に向って右下隅に折れがあり、そこから柄部へヒビ割れが走っている。本体背面の接合部周辺には鉄サビがみられる。注3

本遺物は本体と柄部との接合状態を調べるためにX線透過試験を行なった。資料番号はFA3である(図版153)。5U14グリッド出土。

4は銅製の不明金具で、中央に断面「V」字状の浅い凹線があり、図中右上から左下にかけて擦痕がある。天地の最大30mm、左右の最大44mm、厚さ4mmが遺存する。蛍光X線分析の資料番号はNo.1である(図版153)。5V05グリッド出土。

5・6はいずれも刀剣装具の鐶はばき(脛巾)とみられる。5の方が薄手につくられており半欠し、6の方は1mm以上の厚さもち完存である。5は天地35mm、左右23mm、厚さ1mm以下が遺存する。5O12グリッド出土。6は天地35mm、左右27.5mmを測り、天部は断面三角形を呈して切先側に切欠きがある。

棟は平で内法は厚さ7mmを測り、刃部側に向ってふっくらとした丸味をもつ。棟側から刃部側への内法は切先側で29.5mm、茎側で27mm弱で、茎側の刃部相当部は幅2mmの平坦面をなす。ともに暗緑色のサビが発生しているが、6の方は鉄地の可能性がある。5区出土。

蛍光X線分析の資料番号は、5：No.2、6：No.3である。

7は銅製の不明金具である。図中E面は平滑な面をもち、下方へ向ってまくれるようにのびる。その背面（D面上端中央部）には2～3mmほどの小穴があく。また、B面中央の下から10mmほどの位置に、径2mmの円孔がある。B面側がやや薄く下端で1.5mm、D面側は同位置で2.5mmである。5 I 08グリッド出土。叩きノミの柄頭に使用したものか。蛍光X線分析の資料番号はNo.4である。

8は分銅と考えられ、上端に棒状の引掛部の一部が遺存する。<sup>注4</sup>総高31.5mm、錘りの高さ29mm、横断面は一辺13～14mmの方形を呈し、現状の重さ37.99gが遺存する（重さはツァイス製1205MPのハカリで計測した。mg単位まで信頼できるという）。表面に淡緑色のサビが発生しているが、地金は鉄とみられることから、銅メッキまたは銅被せと考えられる。X線透過試験を行なったところ（資料番号FA1）、別造りの引掛部を錘り本体に挿入していることが判明した（図版153）。5 O 18グリッドから出土。

第169図9は鉄製の不明品である。円環状を呈し、一部はコブ状にふくらむ。サビのフクレが著しく、断面はサビを含んだ図である。図中の天地46mmを測る。出土位置不明。<sup>くつわ</sup>轡の引手金具か。

10は鉄製で、鏃の茎または釘と考えられる。断面は一辺5mmほどの方形を呈し、長さ8.6cmが遺存する。5区第5号住居址床面西壁中央出土。

11は鉄刀子で、刃部の大半と茎の一部を欠く。棟関があり、棟から刃までの長さは15mm、現存長は49mmである。鉄サビのフクレが著しい。5 R 04グリッド出土。

12～14は鉄製鎌であろう。12は切先を欠き、最大幅4.4cm（サビを含む）、長さ9.8cmが遺存する。右端に柄をとりつけるための折り曲げがあり、折り曲げの内端と棟とのなす角は75°である。従って、柄と刃とのなす角度は鈍角となる。5 Q 19グリッド出土。

13は切先が遺存し、片面は植物繊維が残っている。最大幅35mm、長さ111mmが遺存する。5区第2号土坑覆土出土。

14はほぼ完形で、最大幅43mm、長さ160mmを測り、柄を取りつける折り曲げ部分をもつ。これと棟とのなす角は75°で、12と同じく柄は鈍角につく。刃部は使い込まれて内湾し、長さ90mmの刃部（直線距離）をもつ。5区第5号住居址南東隅床面出土。

15～20は煙管の雁口、21・22は吸口である。<sup>注5</sup>いずれも緑色のサビが発生している。

15は火皿の外径16mmで、脂返しの部分が折れ曲っている。内部にラウの一部とみられる木質が遺存する。5 E 14グリッド出土。

16は完形で、脂返しは大きく湾曲し、火皿の径は15mmである。首部は板状の素材を円筒状にしたもので、接合部が明瞭に観察できる。ラウの挿入部内径は現状で10mmである。7区O01グリッド出土。

17も完形で、脂返しは湾曲し、火皿の径は15～16mmで楕円形である。首部は16と同じ方法でつくられている。内部にラウの一部が遺存しており、現状で長さ20mm、外径7mm、通気孔の径は2～5mmである。火皿側の孔径が大きい。ラウの挿入部内径は8mmである。出土位置不明。

18は火皿を欠く。長さ41mm、最大径10mmが遺存する。5 M05グリッド出土。

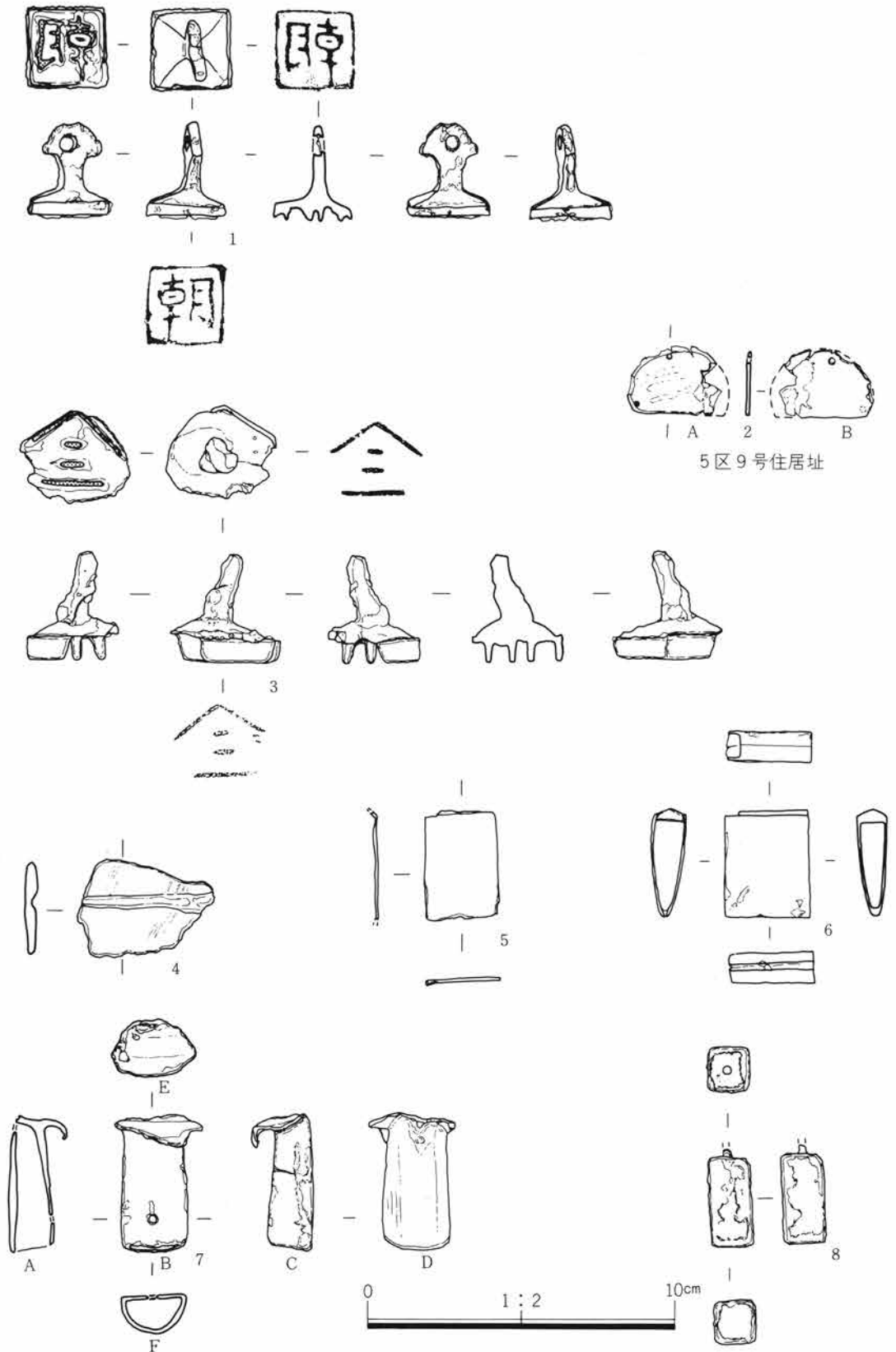
19は首部を欠き、火皿のみ遺存する。径16mmである。出土位置不明。

21は略完形で、板状の素材を円筒状にしたもので、接合部はねじれている。長さ49mm、最大径10mm  
ラウの挿入部内径は9mmである。5 O16グリッド出土。

22も略完形で、21と同様につくられている。長さ64mm、最大径10.5mm、ラウの挿入部内径は8.5mmである。5 V18グリッド出土。

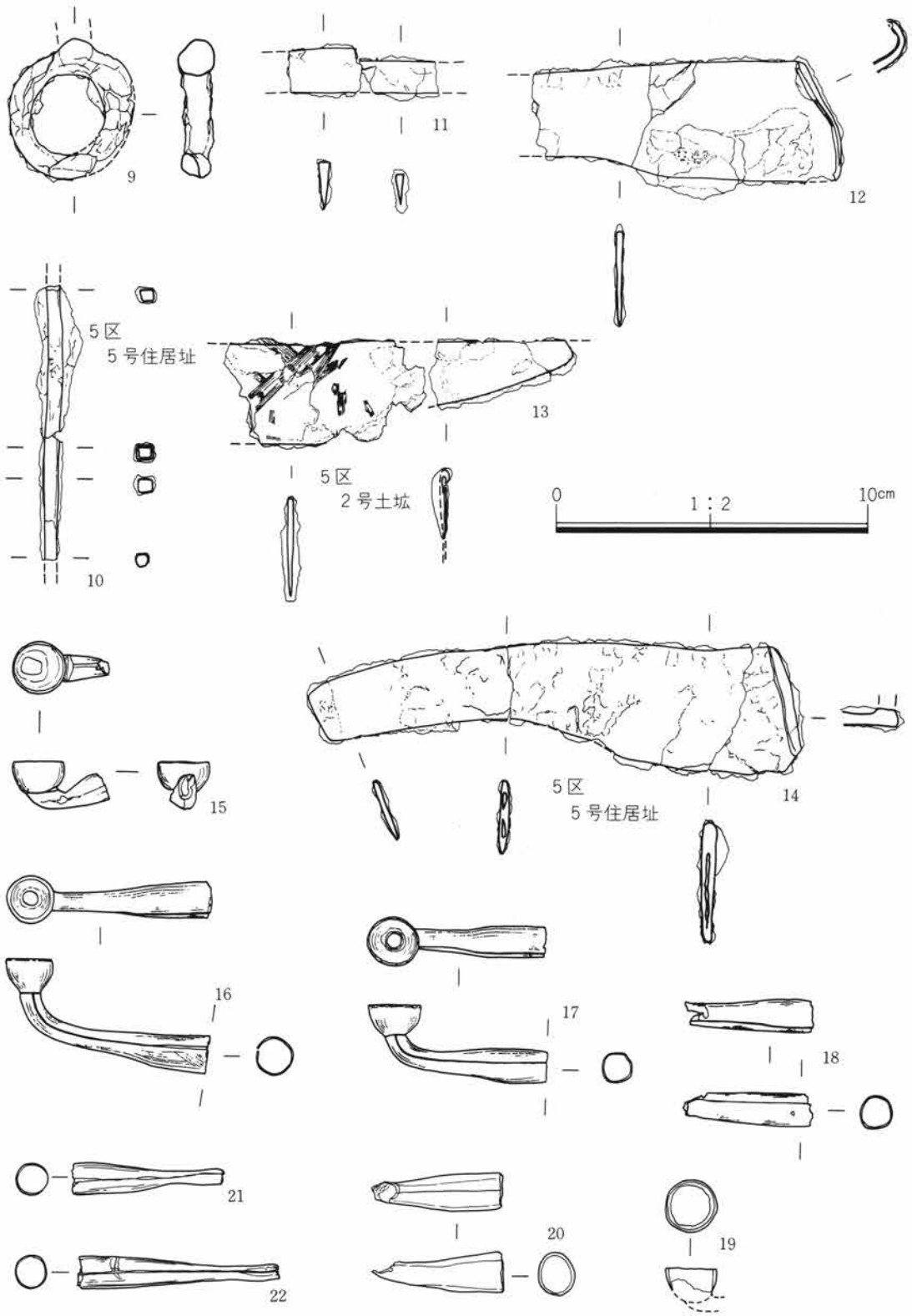
#### 注

- 県内出土または出土と伝えられる銅印には次のような例がある。
  - 碓氷郡板鼻町板鼻社廃址(伝)「薙玉大神」
  - 前橋市山王廃寺「慶雲」
  - 前橋市山王廃寺「酒」
  - 富岡市宇田「百」
  - 藤岡市中栗須「延別□印」
  - 高崎市矢中東遺跡「物部私印」
  - 利根郡利根村大字高戸谷字小沢1084番地先「□長私印」  
発掘調査によって出土したのは③と⑥で、⑦は出土状況の報告がある。
  - 『山王廃寺跡第5次発掘調査報告書』前橋市教育委員会、1979
  - 『矢中村東遺跡』高崎市教育委員会、1984
  - 富田 篤・水田 稔「利根村で発見された古代『銅印』」『群馬文化』No.198、群馬県地域文化研究協議会、1984  
なお、静岡県袋井市坂尻遺跡で銅印が出土したという。永井義博氏御教示。『一般国道1号袋井バイパス(袋井地区)埋蔵文化財発掘調査概報』袋井市他、1982
- 金属製の鈔の使用年代は、法制上707年～796年および807年～810年に限定されるという。銅製巡方・丸柄とその裏金具が同一のサイズであったとすれば、一分=3mmとして、本遺跡例はタテ7分、ヨコ1寸1分(復原値)となる。  
阿部義平「鈔帯と官位制について」『東北考古学の諸問題』東北考古学会編、1976  
このサイズを後藤氏の分類で見ればAⅢ類に属し、位階相当は八位に比定される。  
後藤喜八郎「神奈川県出土の鈔帯について」『専修考古学』第1号、専修大学考古学会、1983
- 本体銅製・柄部鉄製の焼印は太田市屋敷内遺跡C地点に出土例がある。印面は「㊦」と読み、近世以降の所産と考えられる。  
『太田市浜町屋敷内遺跡C地点』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、1985  
平安時代の焼印(状鉄製品)には手元の資料で次の出土例がある。
  - 埼玉県岡部町北坂遺跡13号住居跡「中」
  - 神奈川県平塚市中原上宿遺跡S X 01「井」
  - 神奈川県平塚市向原遺跡16号住居跡「元」
 これらは印本体・柄部とも鉄製である。このほか、埼玉県鶴ヶ島町若葉台遺跡において奈良・平安時代に比定される「王」字焼印が発見されているという。報告書未見。
  - 「北坂遺跡」『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告—XI—』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、1981
  - 『中原上宿』中原上宿遺跡調査団、1981
  - 『向原遺跡』神奈川県教育委員会、1982  
鈴木仁子「陶硯と墨書土器について」『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告—XIV—』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、1982
- 梅沢重昭氏の御教示による。
- 古泉 弘「江戸を掘る」1983を参考にした。以下、煙管の部分名称は本書に従う。

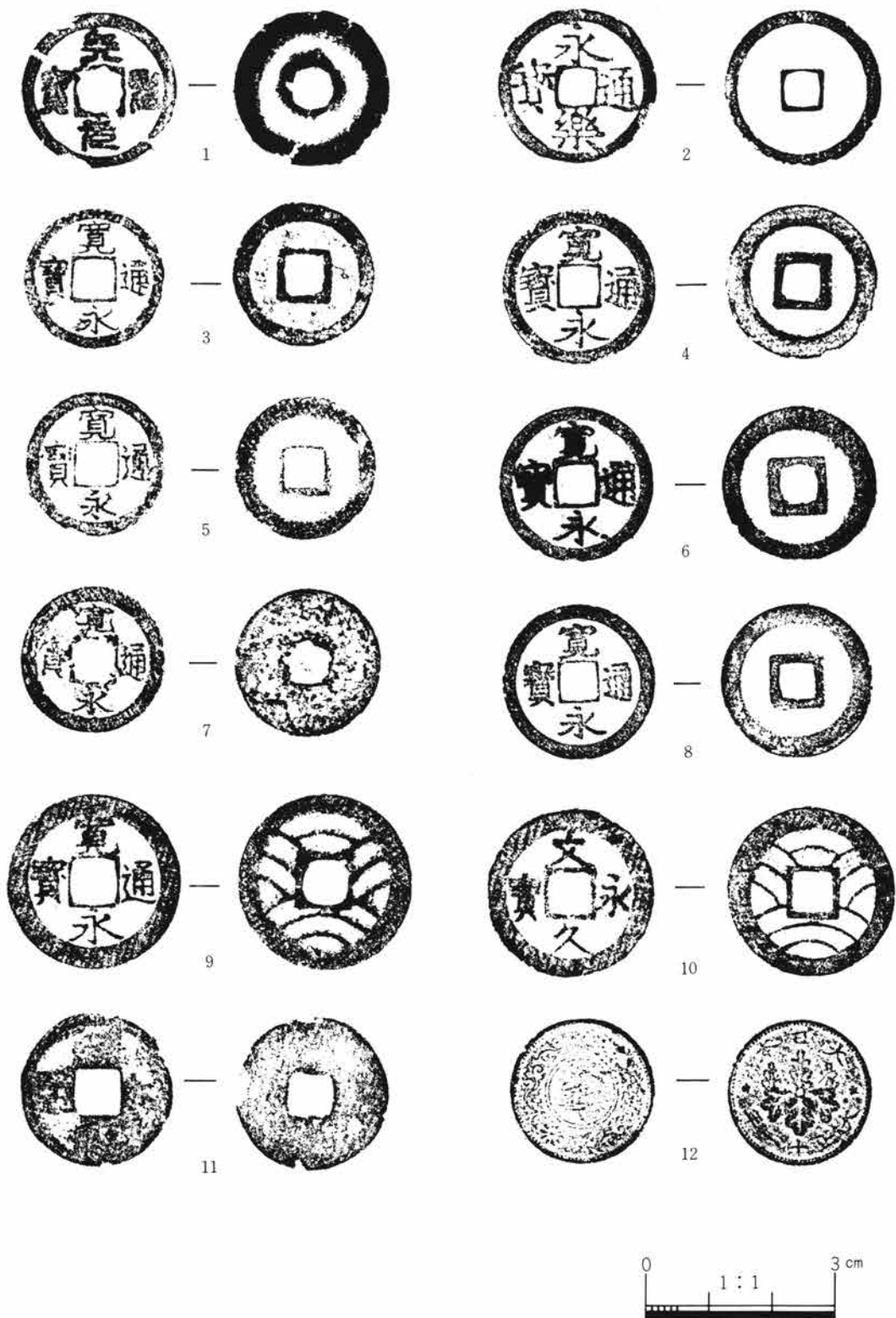


5区9号住居址

第168図 遺構外出土遺物 金属製品 (1)



第169図 遺構外出土遺物 金属製品 (2)



第170図 遺構外出土遺物 金属製品 (3) 貨幣

## 遺構外出土の貨幣 (第170図、図版148)

遺構外より出土した貨幣は12枚あり、すべて5区台地部より出土している。1は天聖元寶(銅北宋元聖元年)。2は永樂通寶(銅、天正15年頃)で、5区9号土塚の上層より出土しているが、混入したと思われる。3～9は寛永通寶で、銅製で新寛永と思われる。10は文久元寶(銅文久3年)。11は銅製であるが種類は不明である。12は一錢銅貨(大正11年)である。

## (8) 遺構外出土の石製品 (第171図、図版144・145)

第171図1は凝灰質砂岩製の砥石である。D面は一部磨られているが、やや凹凸が残り、他の5面は使い込まれている。B面の左上には六花状に、中央やや下には五花状に小穴がみられる。小穴は深さ0.5mm～2mmで、鋭利な金属によるものと考えられる。長さ6.6cm、幅4.4cm、重さ71.6gである。5M02グリッド出土。

2は砂岩質の硯の破片である。池部を欠いた墨堂部の破片で、図中天部を除く3側面は平滑に仕上げられている。天部の側面は他の3側面に比べてやや平滑度が粗くなっており、この面も磨られていることから砥石に転用されたと考えられる。長さ5.8cm、幅6.9cm、厚さ1.4cmが遺存する。5N13グリッド出土。

3は流紋岩製の砥石で、A～D面とも磨られているが、B面の使用が著しい。図中下端は折れている。長さ8.8cm、幅3.0cm、重さ79.4gが遺存する。5O08グリッド出土。

4は変質安山岩製の砥石で、A～D面とも磨れているが、B面とD面の使用が著しい。B面の上半には斜めに平行する擦痕がみられ、D面の下方には金属によると考えられる切り込みがある。長さ10.6cm、幅5.6cm、重さ140.6gが遺存する。5V10グリッド出土。

5は変質安山岩製の砥石で、A～D面とも磨られているが、B面の使用が著しい。C面中央は石が剥げて穴があいている。長さ9.7cm、幅4.4cm、重さ209.8gが遺存する。5R17グリッド出土。

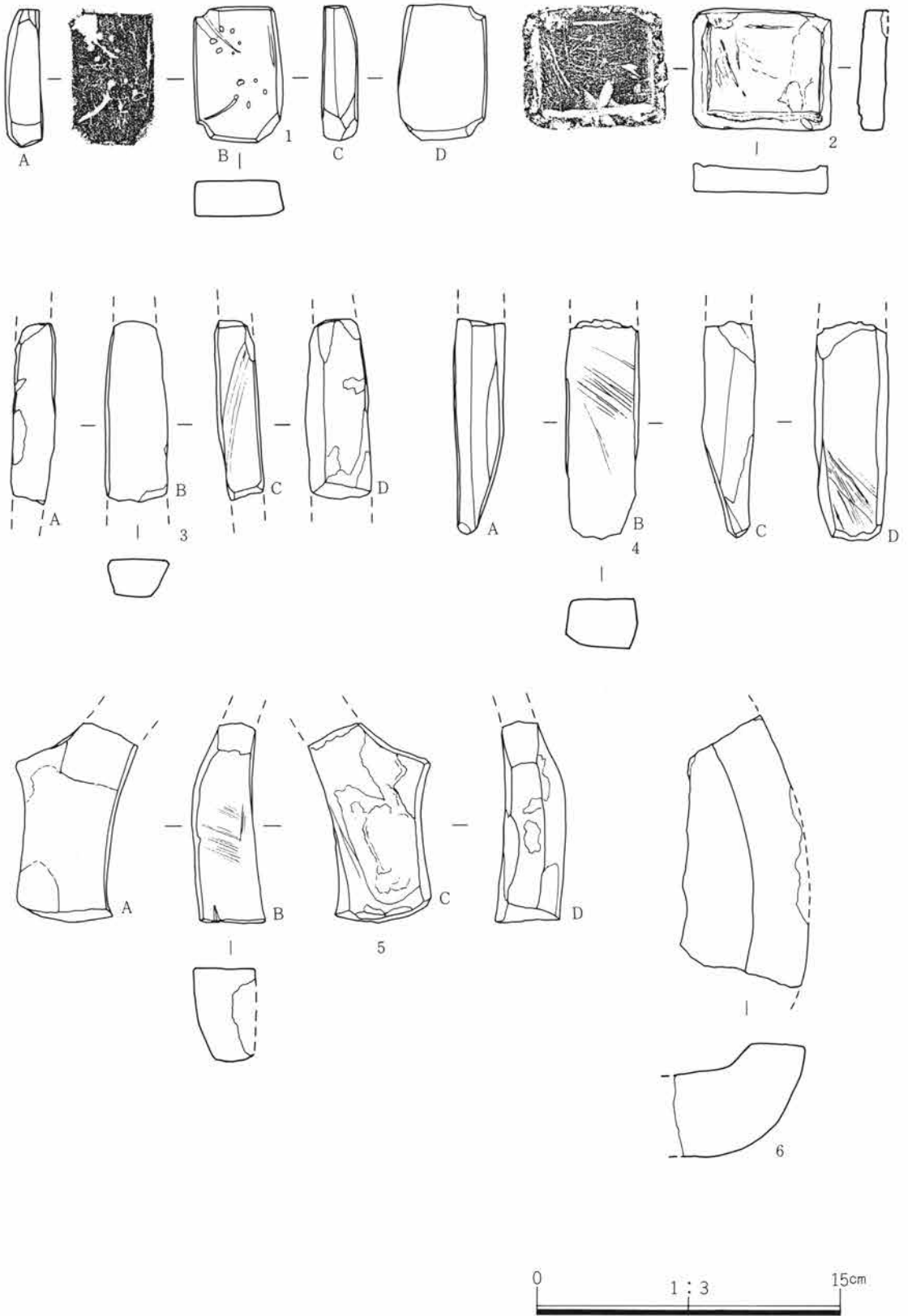
6は安山岩製とみられる石臼(下臼)の破片である。長さ13.1cm、皿状部分の深さ1.6cmで、復原径19.3cmである。5区18号掘立柱建物を構成するピットから出土した。

第172図2は板碑の断片と思われる。点紋緑色片岩製の板石である。5区台地部南傾斜面南端より出土し、剝落が激しく年号等不明である。

## (9) 土製品 (第173・174図、図版149・150)

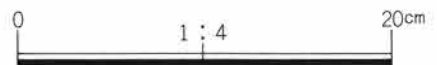
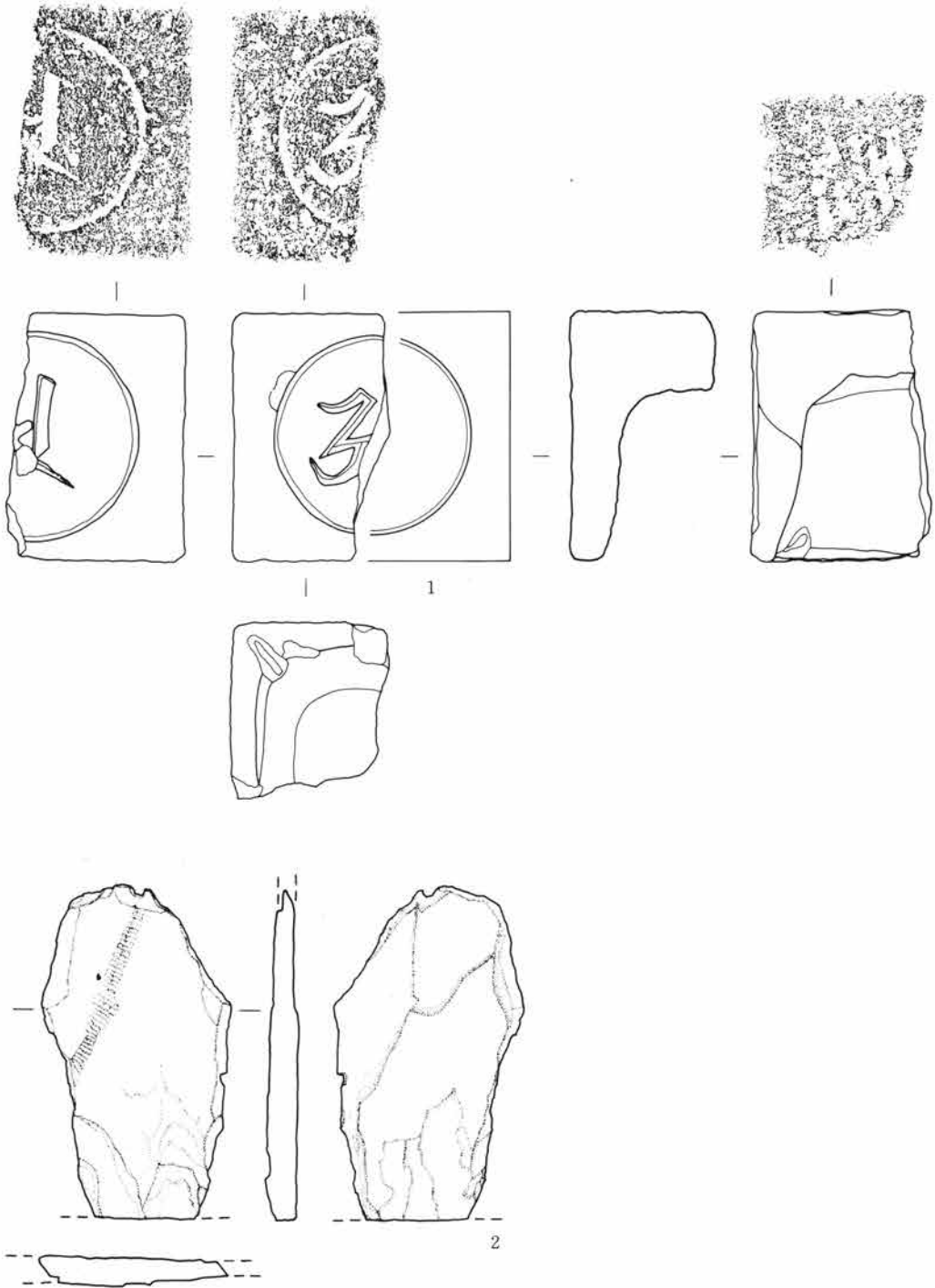
ここでは遺構外出土の土製品と、本体から離れた把手や脚部および用途不明の土製遺物を扱う。但し、第173図5は5区10号住居址出土、13は5区5号住居址出土である。なお、紙面の都合により遺物の大きさを変えてあり、それらは次の通りである。

1～4：½、5・6：¼、7～18：½、19：¼



第171図 遺構外出土遺物 石製品 砥石・硯・石臼 (1)





第172図 遺構外出土遺物 石製品 (2) 宝篋印塔・板碑

第173図1は土製印と考えられる（巻頭図版）。鈕に相当する部分に径2～6mmの焼成前の小孔があり、一カ所欠損部分がある。印面は幅2.5mm～4mmの帯状の凸部がめぐり、上面幅2mmで断面V字形の凹線によって方形に囲まれたなかに、中央に1つ、そのまわりを囲むように6個の小穴がある。以下凹線に囲まれた部分を内区と呼んでおく。内区の7個の小穴のうち、中央の1個は拓影に示された程明確ではなく、左側の遺存が良好な部分からの推定である。小穴の深さも周囲の小穴に比べて浅くつくられている。図中の印面に向って天部の小穴を1とし、右回り（時計回り）に2、3、…とすれば4の小穴（6時の位置）は三角形を呈し、3・5の小穴に接近している。各小穴内部の状態をみると、先端を尖らせた断面略方形で一辺3mmほどの工具によって刺突されており、別の范型によって転写されたものではないことが判る。1の小穴は真上から、2は7時の方向から、3は3時の方向から、4は11時の方向から、5は2時の方向から、6は図中天の方向からそれぞれ刺突されている。隅丸方形の上面観をもつ本遺物の場合、図中に示した天部が印面の天部を示すとは限らないが、各小穴の形状と刺突の状態、および鈕相当部分の小孔の位置によって示したものである。

総高の $\frac{1}{4}$ ほどの高さよりも上方は、平面楕円形を呈しており、長軸は18mm、短軸は現存で14mm弱である。印面は小穴1—4を通る線上で30mm、5・6の中間と中央の小穴とを通る線上で29.5mmで、略方形を呈する。総高は28mmである。胎土に白色小粒・石英粒を含み、還元気味の酸化焰焼成・硬質で（印面に向って小穴1—4を結ぶ線の左側は灰白色を呈する）、色調は淡褐色である。胎土は外観でみ<sup>注1</sup>る限り、本遺跡通有のものである。6区出土。

第173図2・3は土錘で、ともにほぼ完形である。2は長さ45mm、最大径12mm、孔径3.5～4mmで、重さは現状で5.8gである。胎土に白色小粒をわずかに含むが精良で、灰色～褐色を呈する。酸化焰焼成され、硬質である。5 R02グリッド出土。3は長さ63mm、最大径20mm、孔径5mmで、重さ21.4gである。胎土に細砂粒を含み、淡褐色を呈する。一部に赤褐色の塗彩が施されている。酸化焰焼成され、硬質である。指の圧痕とみられる凹部が2カ所みられる。5 Q02グリッド出土。

4は径20mmほどの球形の土玉である。1カ所に径9mmほどの平坦な面がある。胎土に砂粒等を含まず、精良である。焼成は酸化焰・硬質で、灰褐色を呈する。出土地点不明。

5は方柱状の土製品で、頂部の平坦面に焼土粒子とススが付着していることから、支脚と考えられる。現存の高さ12.5cm、一辺5.6cmほどの最大方形断面をもち、頂部は一辺4.5cm前後の方形に復原できる。2cm大の小石が多く混るが、素地は白色小粒子を含んだ精良なもので、ワラ状の圧痕もみられることから、小石・植物性繊維の混入は意図的なものとみられる。焼成は酸化焰・硬質で、明褐色を呈する。5区10号住居址北壁中央覆土出土。

6はフイゴ羽口の破片である。外面に多角形状の稜線をもち、稜線のあいだは平坦な面をなす。先端にガラス質の滓が付着し、磁石に反応しない。長さ7.2cmが遺存し、径は10cm前後、孔径は1.5～2cmに復原できる。胎土に白色粒・石英粒を含み、酸化焰焼成されている。先端から3cmほどのフイゴ側までは2次火熱によって還元されている。灰褐色を呈する。5 O03グリッド出土。

7は碁石状を呈する土製品である。径22mm、厚さ最大6.5mmを測る。表面は平滑に仕上げている。胎土に砂粒を含まず精良で、焼成は還元気味の酸化焰・硬質である。淡褐色を呈する。5 I07グリッド出土。

8は土製の不明品で、完存する。A面は渦巻き状に中央が凸出し、粘土紐の手捏ねであることがわかる。B面は凹面を呈し、その中央に径7mmほどの範囲で、7回以上の刺突を円環状に連ねている。胎土に砂粒を含まず精良で、焼成は還元焰・硬質である。黄灰色を呈する。5 E 19グリッド出土。根拠はないが、窯道具や遊具が考えられる。

9は土製の不明品で、径8cmほどに復原される円盤に約1.5cmの縁を貼り付けたような形状である。手捏ね品で、図中下面は比較的滑らかな面にしており、上面は工具でザッとナデつけるのみである。長さ5.5cmが遺存する。胎土に白色小粒子を含み、焼成は酸化気味の還元焰・硬質である。下面は灰色、上面は灰黄色を呈する。5 Q 13グリッド出土。根拠はないが、窯道具が考えられる。

10は本体不明の把手と考えられる。下端は本体からの剥離面とみられる。表面はナデつけて整形する。長さ48mmが遺存し、断面は17×20mmの楕円形を呈する。胎土に白色小粒・石英小粒を含み、焼成は還元焰・硬質で、灰白色を呈する。5 U 12グリッド出土。

11は本体不明の把手または脚と考えられる。先端部を欠き、本体との接合部を残している。表面はナデつけている。接合部30mm、現存高15mmが遺存する。胎土は白色粒を含み、焼成は還元焰・硬質で、灰色を呈する。5 I 08グリッド出土。

12は土製の不明品で、図中上端の復原径は13.6cmになる。下端に鏢状の凸帯があり、凸帯の復原径は上端部とほぼ同じである。内外面とも丁寧にヨコナデを施し、現存する端部の仕上げは入念に行なっている。外面の図中左端にわずかな凹みがみられ、ここを境として下面から別方向に本体がひらくように見える。外面に灰を被っている。胎土に白色粒・石英粒・黒色小粒を含み、焼成は還元焰・硬質で、灰色を呈する。5 H 08グリッド出土。なお、復原径は6cm弱の小片から推定している。

本遺物については、①骨蔵器蓋口縁部、②本体不明品の高台部、③円面硯の外堤部が考えられる。①の場合、本遺跡出土のものは第129図11～13に示した蓋が代表例で、12の断面三角の凸帯に近い形状となるが、凸帯先端部のつくりがやや異なり、蓋口縁部としてはその口径に比べ器高が低すぎるように思える。②の場合、本例のような凸帯を付した高台を貼り付ける類例がないので、可能性は低いであろう。③の場合、他に4例の円面硯脚部の破片があるが、硯身部の遺存例が本遺跡では発見できなかった。現状では、③の可能性が最も高いように思える。<sup>注2</sup>

13・14は須恵器甑の底部蒸気孔を構成する橋状部の破片であろう。13は13×11mmの方柱状を呈し、内面に回転糸切痕がある。長さ57mmが遺存する。胎土に白色小粒・石英粒を含み、焼成は酸化気味の還元焰・硬質で、淡褐色を呈する。5区5号住居址南壁中央覆土出土。底部等の円盤粘土が必要な時は、回転糸切りによる部品作りをすることがあったと考えられる。

14は長さ52mm、幅19mm、厚さ8mmが遺存し、両端は折れている。外面から内面に向かって切り込んだ痕跡がある。切り抜いたのちにナデつける。胎土に白色小粒を含み、焼成は還元焰・硬質で、青灰色を呈する。5 V 03グリッド出土。

第174図15は本体不明の把手または脚部である。本体との接合部を残しており、本体との接合角度は約45°である。端部に至るまで全面ヘラによるナデつけを丁寧に施している。長さ36mm、幅21mm、厚さ8.5mmが遺存する。胎土に白色粒・石英粒を含み、焼成は還元焰・硬質で、灰色を呈する。5 R 14グリッド出土。本遺物の整形と大きさからみると本体は小型品と考えられ、脚部よりも把手と推定される。

注<sup>3</sup>  
 双耳杯の耳部の可能性がある。

16は本体不明の脚部または注口部である。5区38号土坑出土のもの(第79図19)とよく似た形状をもつが、本例の方が大きい。断面長方形を呈し、内部は不整形の中空である。外面はヘラによるナデつけを施し、図中下端に丁寧は仕上げで平滑な面にしている。内面は棒状工具でかき取ったのち、雑なナデを施す。長さ79mm、幅43~48mm、全体の厚さ32mm、中空を除く粘土の厚さは5~9mmが遺存する。胎土に白色小粒を含み、焼成は還元焰・やや軟質で、内外面黒色を呈する。素地は灰褐色である。5 K07グリッドと5 T02グリッド出土の破片が接合している。内面の雑な仕上げでみると、注口部よりも脚部と推定したい。

17・18は本体不明の把手または羽釜の底部と考えられる。ともに本体の内面を遺存しており、図中下端に平坦面をもつ。断面円形~楕円形の棒状を呈し、下端を除いた外面はナデつけている。本体内面はナデを施す。17は胎土に白色粒・石英粒を多く含み、焼成は還元焰・硬質で、灰色を呈する。5 M01グリッド出土。18は17と同様の胎土で、焼成は酸化焰・硬質、にぶい橙色~赤褐色を呈する。5 R16グリッド出土。端部に平坦面があることから、棒状の底部をもつ羽釜の可能性が高い。<sup>注4</sup>

19は土製の不明品で、約 $\frac{1}{2}$ が遺存し、脚部が1つ接合した。本体は薄い円盤状で、外縁部が薄く尖り気味になり、中央に向かって厚みを増す。中央にはB面からA面に向かって焼成前に径4.5cmの円孔を穿ち、B面の円孔周縁はナデを施す。円盤はロクロ整形されている。脚部は縦断面「L」字状を呈し、本体にナデつけており、端部は三角錐状に尖って一点で接地する。この脚部の両側約90°の位置にそれぞれ同様の剝離痕があり、全体のバランスから見て「+」字形に計4コの脚部があったと思われる。A面を水平に据えれば、「L」字状脚部の本体との接合面は中央に向かって下る傾斜面となる。天地逆転の可能性もあろう。外周径は16cm、円孔径4.5cmに復原され、円孔周縁の厚さは14~17mmである。胎土に白色粒・石英粒を多く含み、金雲母の微小片が混る。焼成は酸化焰・硬質で、にぶい黄橙色を呈する。<sup>注5</sup> 5 J06グリッド出土。

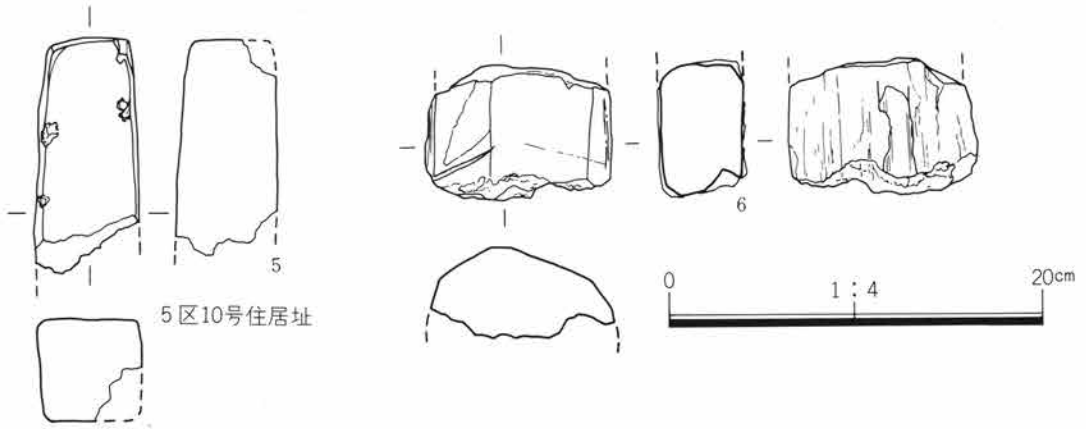
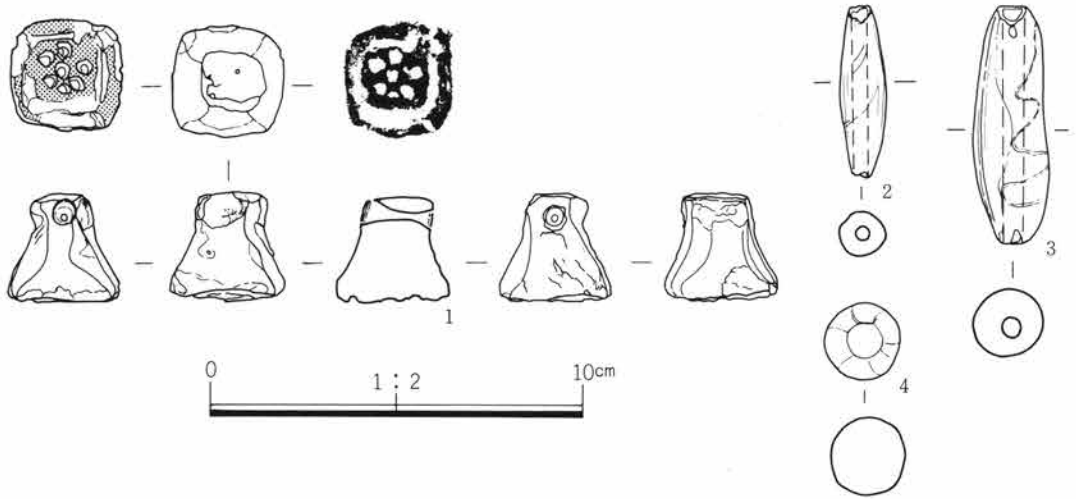
注

1. 陶印または土製印とされているものは、手元の資料で次のものがある。

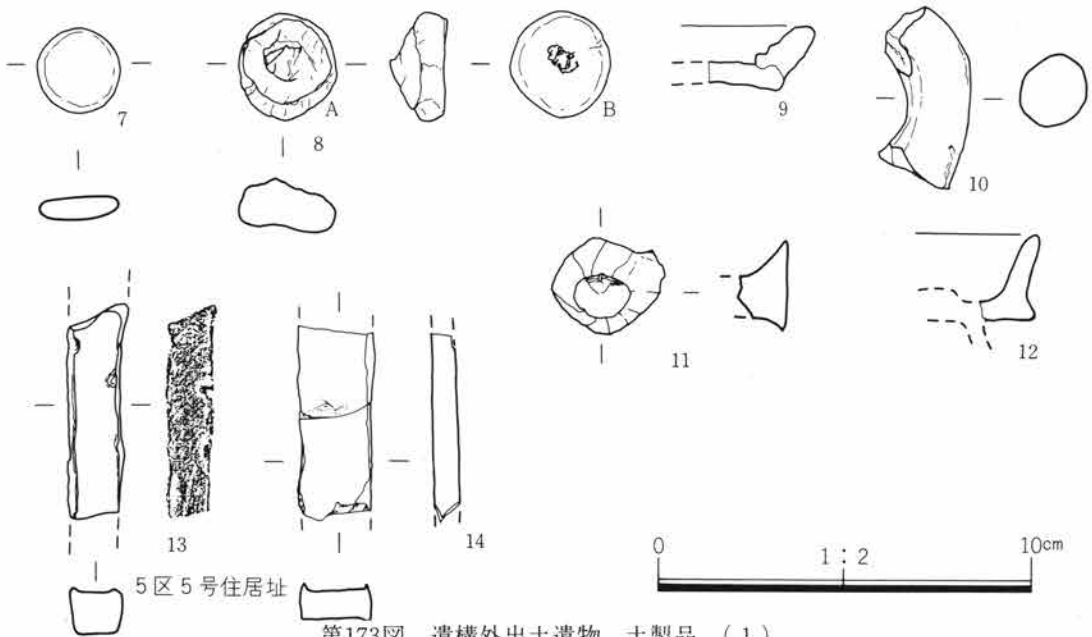
- ① 岐阜県老洞窯
- ② 愛知県豊田市宮口窯跡
- ③ 愛知県日進町猿投窯・I-24号窯跡
- ④ 愛知県日進町猿投窯・海老池1号窯跡
- ⑤ 千葉県君津市永吉台遺跡
- ⑥ 富山県小杉町小杉流通業務団地内遺跡No16遺跡第1号窯跡

文 献

- ① 『老洞古窯跡群』岐阜市教育委員会、1981
  - ② 檜崎彰一『日本陶磁全集6 白瓷』中央公論社、1976
  - ③ 『愛知県日進町株山地区埋蔵文化財発掘調査報告書』日進町教育委員会、1984
  - ④ 『特別展 猿投窯 須恵器・瓷器から中世陶へ』愛知県陶磁資料館、1981
  - ⑤ 『企画展 君津地方の新考古資料展』千葉県立上総博物館、1984、パンフレット
  - ⑥ 『富山県小杉町・大門町 小杉流通業務団地内遺跡群 第6次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会、1984
2. 円面硯脚部の上・下端に凸帯をつけるものは埼玉県内や多賀城跡に出土例がある。  
 竹花宏之「武蔵国における陶硯について」『武蔵八坂前窯跡』雄山閣、1984  
 『多賀城跡』宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所、1982
3. 南多摩窯址群で9世紀第2四半期に位置付けられているG37出土品のなかに双耳杯が1点ある。また、岐阜県各務原市稲田山古窯跡群出土の双耳杯は、双耳の端部が丸くなるものと角を有するものがあり、それらは「ヘラで面取成形が行なわれてい

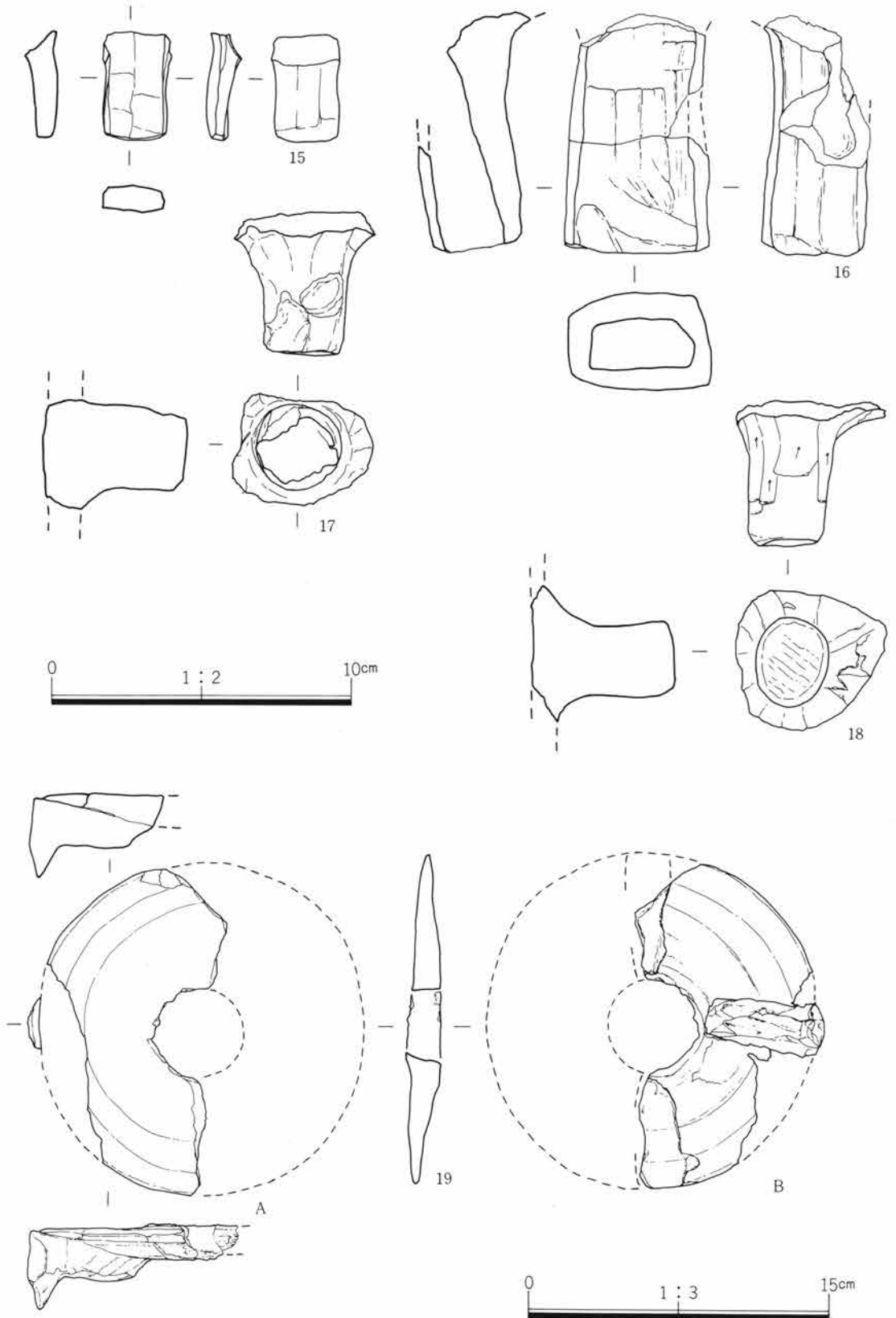


5区10号住居址



5区5号住居址

第173図 遺構外出土遺物 土製品 (1)



第174図 遺構外出土遺物 土製品 (2)

- る」という。稲田山古窯跡群出土の双耳杯は8世紀後半～9世紀代に位置付けられている。
- 服部敬史「南武蔵の窯址」神奈川考古第14号『シンポジウム奈良・平安時代土器の諸問題』神奈川考古同人会、1983  
 『稲田山古窯跡群発掘調査報告書』各務原市教育委員会、1981  
 『美濃須恵古窯跡群資料調査報告書』各務原市教育委員会、1984
- 静岡県湖西窯では8世紀代～9世紀前半に双耳杯の出土例がある。  
 『東笠子遺跡群発掘調査概報 昭和57年度』静岡県湖西市教育委員会、1983
4. 山崎義男「上野國利根郡月夜野二窯址に就いて」『古代文化』第20巻第4号、1941  
 『土器部会研究資料No.2』群馬歴史考古同人会、1983  
 沼田市石墨遺跡に出土例があるという。未見。
5. 瀬戸市歴史民俗資料館宮石宗弘氏、藤澤良祐氏、愛知県陶磁資料館仲野泰裕氏から御教示を得た。記して謝意を表します。  
 用途・機能・名称は不明であるが、焼き具合、形状等から窯道具ではなく、製品のひとつであろうとのことである。

## 第Ⅵ章 ま と め

### 1 縄文時代の遺物について

本遺跡から出土した遺物は少量であり、遺構外から出土したものでもあり、土器と石器の共伴関係は不明である。出土土器の時期も阿玉台式土器が量的にやままとまりを示していたものの、早期から後期に至る時期のものが多岐にわたっていた。

土器についてはまず単軸絡条体原体の資料が注目されよう。非常に微細な節と密接された条が特徴的なものであり、草創期段階の所謂「燃糸紋」とは異なるものである。昭和村中棚遺跡では地文に本種の単軸絡条体原体を施文し、次に口縁部下に大きな鋸歯文を施しているものがある。これより、草創期後半の「燃糸文」段階とは別種のものと考え、一応早期初頭に位置づけてみた。今後の資料増加を待ち再検討したい。

次に、本遺跡で最も量的に多かったのは第Ⅲ群第2類の阿玉台式土器である。No.34は器表面には口縁部に沿う形で角押文が波状に施され、下部に三角形の陰刻文を施している。さらに、内面にも同様の文様を作出している。また、左右対称的な構成はとっていない。これより、阿玉台式直前（五領ケ台式直後）型式に位置づけられよう。

その他、東北地方の系統である常世式に対比されるものや、東海地方の系統である木島式の流れをくむと推定されるものが、少量ではあるが混入していることは特記されよう。

石器としては打製石斧が最も多く、これに磨製石斧や磨石・敲石・石匙・石鏃などが検出された。

その中で特に、草創期初頭の段階と考えられる片刃石斧が含まれている。研磨は認められず、両側縁部から荒い調整加工を加え、器体中央部には第一次剝離面を残している。刃部は先端部方向から加工を施し、縦断面は「く」字状に屈曲している。横断面は三角形状を呈している。重量感がある。月夜野地区において、本段階の片刃石斧が四例検出されている。その資料中には本例に類するものはなく、長野県宮ノ入遺跡出土例に対比されよう。

## 2 弥生時代の遺構と遺物について

5区1号住居址は伴出土器から後期樽式期に比定され、長方形を呈した小規模な住居址である。住居構造で特異な点は、柱穴の位置が壁に極めて近接している点である。これは住居の規模に起因するものと考えられ、炉・貯蔵穴の構造や位置からも、一般的な樽式期の住居址と言えよう。

住居址の短辺と長辺の比は1:1.3となり、群馬県における中期後半から後期にかけての住居址の計測比<sup>注1</sup>からすると、後期3群に位置付けられるものである。また、本住居址は後期の住居址に多く見られる、焼失家屋の可能性が大である。

5区1号住居址と同時期の遺物は5区台地部の西端に限られ、舌状台地状をなす以東（藪田東遺跡も含め）には遺物の散布も認められず、本住居址に関連する集落があるとすれば、調査区より西の尾根状をなす台地に広がっているものと考えられる。

遺物としては、樽式期の土器散布の一群と離れて、野沢I式に比定される土器片が単独で出土しており、文様施文の手法に特徴がある。しかし、関連する遺構は確認<sup>注2</sup>できなかつた。

藪田遺跡周辺の中期の遺跡としては、同じ段丘の下位面に梨の木平遺跡があり、利根川対岸に八束脛洞窟遺跡<sup>注3</sup>がある。また、近辺の新治村や昭和村にも例があり、条痕文系と変形工字文系の土器が出土している。

また、赤谷川対岸の上津塚原遺跡<sup>注4</sup>では、出土状態は明確ではないが、本遺跡と同様の磨消し手法による変形工字文を配した筒形土器が出土している。県内では同様の筒形土器が数例あり、埋葬<sup>注5</sup>に関係した性格の土器として出土している。

5区1号住居址の器種としては、甕・台付甕・鉢・甑があり、遺構外出土の器種としては壺・甕・甑がある。住居址の土器には壺を欠いているが、樽式期の器種としては一般的なセットである。また、出土した土器は小形化した傾向にある。

甕の成形・調整・施文順序は、輪積み成形→ヘラ・刷毛調整→簾状文→波状文→ヘラ研磨の順であり、成形～施文順序が画一化している。また、他の土器も非常に良く研磨されている。

甕の器形は、口縁部は単口縁と折り返し口縁があり、緩やかに外反し、頸部は緩やかに抉れ、胴部は中位およびやや上位に最大径を持ち、屈曲がなく球形化の傾向にある。台付甕は、折り返し口縁で大きく外反し、頸部の抉れが強く、胴部上半が大きく膨らんでいる。鉢はやや膨らみを持って直線的に外反し、口縁部は内湾ぎみとなる。甑は直線的に外反する。器形としては樽式後半の中でも、やや新しい傾向にある。



文様は施文位置が胴部上半～口縁部に限定されている。単口縁の甕は波状文がやや大きく乱れ、簾状文も4～6連止めで間隔は一定していない。折り返し口縁の甕と台付甕は波状文の振幅が小さく、簾状文は2～4連止めでほぼ等間隔である。また、単口縁の甕の簾状文だけが左回転で、他の施文はすべて右回転である。文様は単口縁の甕は折り返し口縁の甕および台付甕に比べて、やや新しい様相を示している。

以上の点から、5区1号住居址の土器は、井上・柿沼両氏の後期弥生土器の分類では、樽式土器B類の範疇と考えられ、相京・三宅両氏の樽式土器の分類では、<sup>注7</sup>第III期に入るものと考えられ、樽式土器中葉の中でも新しい時期と考えられる。

なお、5区1号住居址の第6図2の折り返し口縁の甕は、輪積みに沿ってヒビが入っており、成形技法が観察された。

ヒビは6本が水平に平行して器体をほぼ一周し、2cm～2.3cmの間隔がある。このヒビの間には平行して、1cm～1.3cmの幅のヒビが部分的に走っている。また、縦方向にも対をなすように4本のヒビが乱れながら入っている。

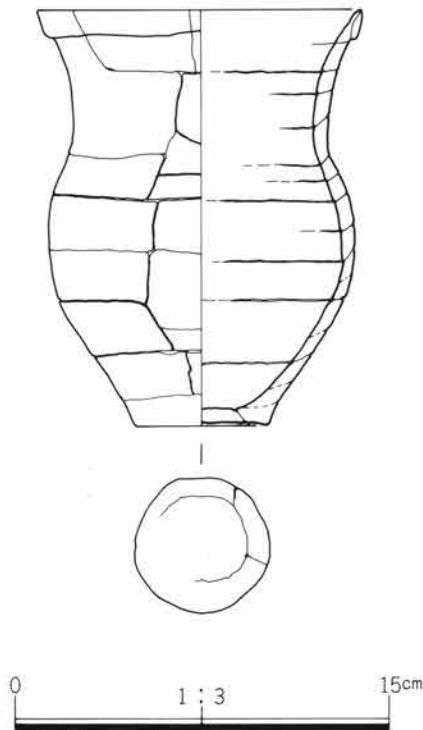
この土器は炉の縁に横倒しになって、押し潰された状態で出土したもので、土圧が均等にかかっていたと仮定すれば、器体を1周するヒビの部分は粘土の接着力が弱く、中間の部分的に入るヒビの部分は粘土の接着力が強かった結果と考えられる。また、対をなす縦方向のヒビは、土圧が極めて均等にかかった状態を示していると思われ、仮定を裏付ける証左のひとつになると考えられる。

前述のヒビの幅は、輪積み成形における粘土紐の太さと単位を示していると考えられる。1cm～1.3cmの単位は粘土紐の太さであり、2cm～2.3cmの単位は粘土紐を2巻した結果と考えられる。これはヒビの状況から、輪積みが粘土紐2巻を基本の1単位として、成形が行なわれたと考えられる。

この単位を基本として土器を観察すると、底部は円板状の粘土板の回りをやや太めの粘土紐が一周している。胴部は5単位でほぼ均等に積み上げている。頸部は基本単位と異なり、粘土紐を3巻して一気に積み上げている。これは頸部の抉れを作出するためと考えられる。口縁部は再び、2巻を1単位として積み上げている。また、口縁部は口唇部外面に粘土紐を1周させて貼り付け、折り返し口縁としている。この粘土紐は、器体の粘土紐と同じ幅である。

なお、各単位の接合部は、下位の粘土帯がやや内湾ぎみの断面を呈し、上位の粘土帯がやや外湾ぎみの断面を呈し、斜めに接合されている。

以上の観察の結果、本個体の輪積み成形の技法には、



第175図 5区1号住居址出土土器2の甕のヒビ割れ状態

一定の単位が認められたこと、頸部の抉れの作出にあたっては手法を変えていることが指摘され、折り返し口縁についても、本個体は別の粘土紐を巻き付けて折り返し口縁状にしていることが指摘される。

このような輪積み成形の技法は、個体特有のものか一般性を持つものかは、他の資料をあたっていないので類例材料を欠くが、輪積み成形の技法を知る好資料となるものである。

注

- 1 平野進一 「群馬県前橋市荒砥前原遺跡—赤城山南麓における弥生時代中期から後期にかけての住居址とその出土遺物について—」 信濃第28巻 第4号 1976
- 2 能登 健・下城 正 「梨の木平遺跡」 群馬県教育委員会 1977
- 3 山崎義男 「群馬県利根郡八束脛遺跡」 日本考古学年報8 1955
- 4 「利根郡誌」 群馬県利根教育会 1930
- 5 梅沢重昭「北関東西部筒形土器の新例について」 考古学雑誌 50巻4号 1965  
外山和夫 「北関東出土の筒形弥生式土器」 考古学ジャーナル No48 1970  
加部二生 「神流川流域における初期弥生遺跡—岩津保遺跡の調査成果を中心として—」 第4回三県シンポジウム 東日本における黎明期の弥生土器 1983  
石坂 茂 「八木沢清水遺跡」 小野上村教育委員会 1978
- 6 井上唯雄・柿沼恵介 「入門講座 弥生土器—関東 北関東3—」 考古学ジャーナル No143 1977
- 7 三宅敦気・相京建史 「樽式土器の分類—榛名山東南麓を中心として—」 第3回三県弥生時代シンポジウム 群馬県資料 弥生終末期の土器 1982

### 3 藪田遺跡平安時代集落の変遷

本調査における平安時代の遺構は、6区1号住居址を除き他は、5区南半台地部に集中している。5区南半は藪田東遺跡に続くものであり、遺構も連続しており、時期的にも藪田5区南半と藪田東遺跡は、同一の遺跡である。また、この台地上の平安時代集落は、粘土採掘坑（調査区外の西へ延びる可能性がある）を除き、全掘されたと考えられる。

本遺跡については、先に刊行された「藪田東遺跡」の報告の中で、遺跡の性格や住居址の形態の特徴、粘土採掘坑等について詳細に述べられており、本稿では、藪田遺跡5区南半と藪田東遺跡調査区の両方を合せた、遺構（土坑を除く）<sup>注1</sup>の変遷を主に述べたいと考える。

台地上の集落を構成する遺構としては、住居址17軒・粘土採掘坑11基11群・溝2本があり、各遺構の特徴は以下のとおりである。

住居址の平面形や規模は、当地域における一般的な平安時代住居址であり、時期が下るに従い不整形・縮小化の傾向が若干窺える。住居址の方位は南北軸を基準とすると、古い段階の住居址はN-3°・4°-Eに集中する傾向があり、以降の住居址の方位は集中性が消失し、方位にばらつきが見られる。

床構造としては、掘形を持つものがあり、5区6号住居址（以下5-6住のように略）ではさらに、各隅に床面下の落ち込みがある。周溝はない住居址が多く、存在しても部分的に廻る状態である。断面はU字状とV字状の両方があり、V字状の周溝は掘り込んだ状態ではなく、板材を打ち込んだような状態である。柱穴はない住居址が多く、あってもやや不規則である。床構造や周溝・柱穴の形態には、時期的な差は本遺跡の中では認められない。

カマドは不明な住居址もあるが、東壁に付設されるものに普遍性が認められる。また、西半の住居

址群は東カマドだけであるが、東半の住居址群はカマド位置が不規則な傾向がある。

貯蔵穴は4軒の住居址で確認されたが、特異な例としては6-1住や藪田東遺跡3号住居址（以下E-3住のように略）のように、石組による貯蔵穴がある点である。しかし、両者は構造が異なっている。

遺物の出土状態としては、カマド～カマド前には煮沸器がやはり多く、南西隅および貯蔵穴には煮沸器と供膳器が共伴し、床面に集中する箇所は南西隅・北壁中央～北西隅・東壁中央が多く、供膳器が集中する傾向がある。このような出土状態は、住居内の空間利用の状態を表したものと考えられる。また、住居の埋没過程において、多くの土器が投棄され流れ込んでいる。

また、住居廃絶後、完全に埋没しない段階で、近接して粘土採掘を行っており、排土の捨場や作業路・掘削作業軽減のために住居の窪みを利用している例がある。

以上が住居址の特徴であるが、本遺跡の性格である陶工集団の居住地としての裏付けとなる、ロクロピットの存在や乾燥・収納の施設といった直接的な根拠は明確（E-6住ではロクロピットの可能性のある柱穴がある）ではないが、粘土をこねる作業台として考えられる床面を掘り窪め偏平な河原石を据えた施設がE-6住にあり、同様の施設は5-5・9住にもあり、すべて南西隅寄りに位置している。また、粘土塊を出土する住居址もあり、粘土採掘坑の存在、焼成時のヒビ割れ・歪みのある多量の土器の出土等から、近接する窯址群の工人集団の居住地としての性格が確実である。

粘土採掘坑については、「藪田東遺跡」の報告の中で、採掘の工程・採掘量等について実証的に論じており、本稿では省略する。粘土採掘坑は東西に走る台地の北半と南半では分布状態が異なり、中央部から南傾斜面にかけては、小群が散在的に分布し、北半の台地の尾根状部分では集中的に群在している。この状況は時期的な要因と良質粘土の埋蔵量の差が考えられる。

また、本集落の西半には2本の溝が構築されている。5区1号溝は集落内への引水が目的と考えられ、土器製作に際して水の供給の円滑化を計ったものと考えられる。2号溝は不明な点があるが、排水を目的としたものと思われる。2本の溝の存続期間は比較的短時期と考えられる。

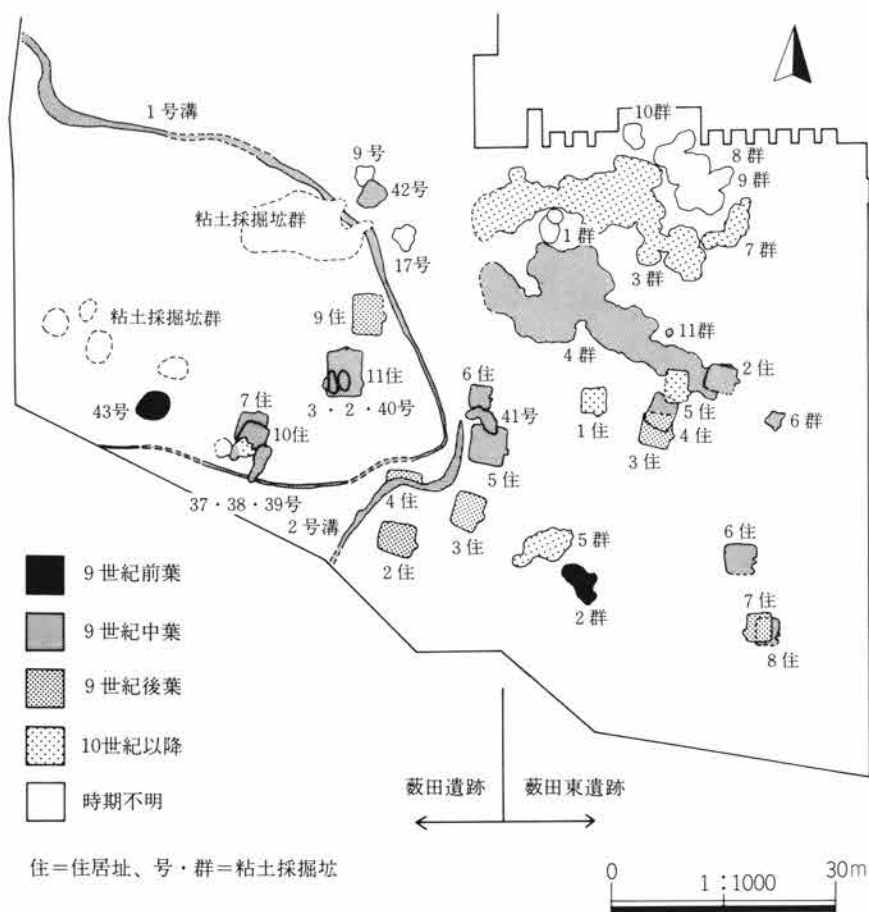
以上のような遺構で構成される藪田遺跡の陶工集団の集落は、出土土器により大きく5期に区分される。遺構の時期区分として、本遺跡の主体である9世紀代を前葉・中葉・後葉の3期に、10世紀代は前半・後半の2期に区分した。時期区分の基準としては、住居址はカマド・貯蔵穴および床面より一括して出土した土器を基準とし、粘土採掘坑は一括投棄された土器を基準とし、覆土中の土器も参考にした。また、重複関係も根拠とした。

この時期区分を基準として、台地上に分布する遺構を分類すると、遺物としては8世紀後半の土器が少量あるが、遺構は存在しない。

9世期前葉の遺構としては、5区43号土坑（粘土採掘坑、以下5-43採のように略）と藪田東遺跡第2群粘土採掘坑（以下E-2群採のように略）だけであり、住居址は台地上にはなく、台地の南傾斜面を散発的に粘土採掘を行っていたものと考えられ、近接して集落が営まれていたと考えられる。

9世紀中葉の遺構としては、5-5・6・7・10・11住、E-2・4・6・8住の9軒の住居址と、粘土採掘坑は、5-38・39・42採（5-9住以北に広がる粘土採掘坑群の一部も本時期の可能性があ

注2



第176図 藪田および藪田東遺跡平安時代時期別遺構分布図

る)とE-4・6・11群採があり、5-1・2号溝も本時期である。この時期は土器には幅があり、遺構も重複している例があり、さらに区別される可能性もある。本時期は台地上に本格的に集落が営まれた時期であり、各遺構が計画的に配置される。場の設定の基準は粘土採掘の場であり、台地北半に密集し連続して採掘が行なわれている。住居址群は台地中央から南傾斜面に半円状に分布し、南傾斜面東寄りの部分に空間を設定している。この部分は、集落共有の広場であると共に、土器の乾燥に関するような作業の場として設定されたものと考えられる。また、1号溝により集落内へ水が引かれている。また、南傾斜面西寄りの部分からは多量の土器が出土しており、不良品の土器の捨場として設定されたものと考えられる。住居址群は5-7・10住は重複しているが、一連の住居址として想定すると、8軒の住居址から構成されていることになる。住居址群は分布等から東西2群に分かれ、東群はE-2・4・6・8住の4軒で、西群は5-5・6・7(10)・11住の4軒からなる。この東西の群はさらに、2軒を1単位としたまとまりを持っており、西群では5-7(10)住・5-11住と5-5住・5-6住に分れ、東群ではE-2住・E-4住とE-6住・E-8住とに分れる。以上のように、中葉の住居址群は2群4単位2軒から構成されている。

9世紀後葉の遺構としては、5-2・3・4・9住、E-3・7住の6軒の住居址があり、粘土採掘場は明確ではないが、台地北半西寄りの1号溝を切る一連の粘土採掘場群が想定される。本時期も、居住区・共通の作業場・捨場の配置は変わっていないが、溝は本時期には機能をしていなかったものと考えられる。住居址群は、数が減少し構成単位も変化する。集落の中央に5-2・3・4住の3軒が配され、周辺に5-9住、E-3・7住の3軒が配される。住居の動きとしては、5-5・6住→5-2・

3・4住、5-7(10)・11住→5-9住、E-2・4住→E-3住、E-6・8住→E-7住のように想定され、中心の密集化した3軒を1単位とする1群と、周辺を取り巻く散在的な3軒を1単位とした1群とに分れる。また、6-1住のように分村化して行く住居址もある。

10世紀代の遺構としてはE-1・5住の2軒の住居址と、5-38採・E-3・5・7群採の採掘坑があり、住居址はE-5住が前半、E-1住が後半に位置付けられる。本時期の住居址は1時期1軒となり、陶工集団の母村としての位置付けは消失し、9世紀代の左回転を特徴とする集団とは、連続しないものと考えられ、在地の陶工集団により、主として粘土の採掘場としての位置付けがなされたものと思われる。粘土の採掘は台地北端に集中し、南傾斜面にも散在し、9世紀代の場の設定を無視している。

菟田遺跡の陶工集団は、土器の上から8世紀末にはこの地域の窯業生産に参入したと考えられ、初現段階では台地を粘土採掘の場として利用し、9世紀中葉において、住居の進出が計られ、採掘の場・住居区(土器製作の場)・共有の作業場・捨場が設定され、住居も計画的に配置され、本格的に窯業生産を開始したものと考えられる。しかし、9世紀後葉には、集落規模の縮小、構成単位の解体、分村化が始まり、9世紀末をもって、左回転の土器や、須恵器胎土の甕等の特徴を持った集団は、消滅・移動あるいは在地集団に吸収されて行ったものと思われる。10世紀代における月夜野窯址群の主体は、本遺跡より北の地域へ移っており、10世紀代の菟田遺跡は在地集団により、粘土採掘を主に機能して行ったものと思われる。

#### 注

1 「菟田東遺跡」

2 菟田東遺跡の報告の中では3住が古く4住が新しい関係となっているが、床面出土の遺物からは前後関係が逆となる。

## 4 中・近世の遺構について

弥生・平安時代以外の遺構としては、掘立柱建物28軒、土壇55基、集石1基、井戸3基、溝3本がある。しかし、これらの遺構は、明確に時期を断定できるものは少ない。

土壇は、形態・規模・覆土の状態から次のように分類される。 1 円形・楕円形を呈し、一挙に埋没しているもの。5区12~15・19~24号 2 長楕円・隅丸長方形を呈し、一挙に埋没しているもの。5区4号、6区2~13・15号、7区3号 3 隅丸長方形を呈し、規模が小さく、自然に埋没しているもの。5区6~8・16・26・27・31号 4 隅丸長方形を呈し、規模が大きく、一挙に埋められ固く締っているもの。5区29・30号(28号は円形を呈するが類似する) 5 円形を呈し、桶を設置したもの。5区11・18・36号 6 不整形を呈し、ロームが逆転しているもの。7区6~8号 7 その他、特性を持たないもの。5区5・25・33~35・45号、6区1・14号、7区1・2・4・5号(5区10号は井戸の可能性はある)

1・2は墓と考えられ、5区台地部の土壇は2群に分れ、24号からは宋銭10枚が出土している。中世に属する可能性がある。6区に分布する土壇は南北の微高地上に分れ、縄文時代の打製石斧が出土しているが、覆土にはFPが混入しており、時期は断定できない。3は5区南半台地の中央を、東西

に直線的に分布し、長軸をほぼ南北にとっている。時期・性格とも不明である。4は藪田東遺跡調査区でも例があり、平安時代の可能性もある。特異な形態・覆土をしているが性格は不明である。5は便所施設で、時期は近世と考えられ、掘立柱建物群の附属施設である。6は風倒木痕であり、時期は不明である。7は時期・性格ともに不明である。また、集石は藪田東遺跡調査区でも検出されており、江戸時代に比定されている。性格は不明である。

5区2号溝は藪田東遺跡の溝状遺構へ続き、5区1号井戸との関連が考えられ、排水路としての機能を有していたものと考えられる。5区4号溝は中世と考えられる5区6～8号掘立柱建物の北限を画している。7区1号溝は極めて新しく、灌漑用の水路と考えられる。井戸は石組のもの素掘りのものがあり、近世の掘立柱建物群の附属施設である。

掘立柱建物は柱穴の総数からすると、まとまった建物の数は極めて低い率と考えられ、建物群の全体像は明確にできなかった。また、掘立柱建物は、弥生・平安時代の遺構とは覆土が異なり、平安時代の遺構を切っており、すべて新しい時期のものである。しかし、建物の時期を直接決定する資料がなく、散布していた、中・近世の陶磁器より類推した。柱穴はすべて円形で、部分的に石を据えている例がある。時期が下るに従い、規模が縮小する傾向が窺える。確認された柱穴は円形を呈していたが、6区1号では角柱が残っており、柱は角材であったと推定される。

構造としては、梁行1間の建物が圧倒的に多く、大きな特徴となっている。桁行は3間のものが多い。このような傾向は南の洞Ⅲ遺跡<sup>注1</sup>でも確認されている。棟方向は東西の建物が多く、規模が大きくしっかりしたものが多い。南北棟は、規模が小さく、特異な構造のものがある。東西棟は、主屋の建物と考えられ、南北棟は副屋の建物と考えられる。

掘立柱建物は、南北軸を基準とした方位による分類をすると4群に区分される。

- |    |               |                            |
|----|---------------|----------------------------|
| 1群 | N-2°-W~N-2°-E | 5区6~8・(12) <sup>注2</sup> 号 |
| 2群 | N-3°~5°-E     | 5区2~4・(9)・(10)・(13)号       |
| 3群 | N-10°~12°-E   | 5区18・20~24号                |
| 4群 | N-14°~17°-E   | 5区(1)・5・14~17・(19)・(25)号   |

この4群は、概ね陶磁器の散布状態からの掘立柱建物へのアプローチと合致し、1世紀を単位とする大まかな時期区分をすると、1群が16世紀、2群が17世紀、4群が18世紀、3群が18世紀以降となる。6区1・2号は3群に入ると考えられ、7区1号は地形により方位が規定されており、明確ではないが、新しい時期の可能性が大である。

本遺跡の掘立柱建物群は、小川城の北西外郭と接しており、年代からも小川城の創立・推移と直結している。陶磁器の内容からは、16・17世紀において特権階層の居住が想定され、強いて言うならば、小川衆の有力地侍の居宅か屋敷が想定される。

注

- 1 「洞Ⅲ遺跡」 上越新幹線地域埋蔵文化財発掘調査概報 VI (群馬県教育委員会) 1980
- 2 ( ) 付きの建物は、陶磁器の分類と異なる建物である。
- 3 「群馬県古城址の研究 下巻」 山崎 一 1972

## 5 奈良・平安時代の土器

本遺跡出土の奈良・平安時代の土器は住居址総数11軒（うち1軒は弥生時代）に対し、整理開始の時点でコンテナバット130箱に達し、実測数は1000個体を越えている。このうち住居址出土として掲載したのは290個体で、残りの大部分は5区2・38～43号土壇出土品と遺構外出土品である。土壇や遺構外出土の土器の量が住居址検出数に比べて多いことが、この遺跡の性格の一端を物語る。

以下、本遺跡出土の土器について、その概要を述べてみたい。

### A 分類

出土土器の種類は、次のように分類した。(i) 須恵器、(ii) 土師器、(iii) 須恵器と同様の胎土をもつ酸化焰焼成の煮沸器、(iv) 黒色土器。

(iii)と(iv)は土師器の部類に入るかもしれないが、仮に設定しておきたい。

#### (i) 須恵器

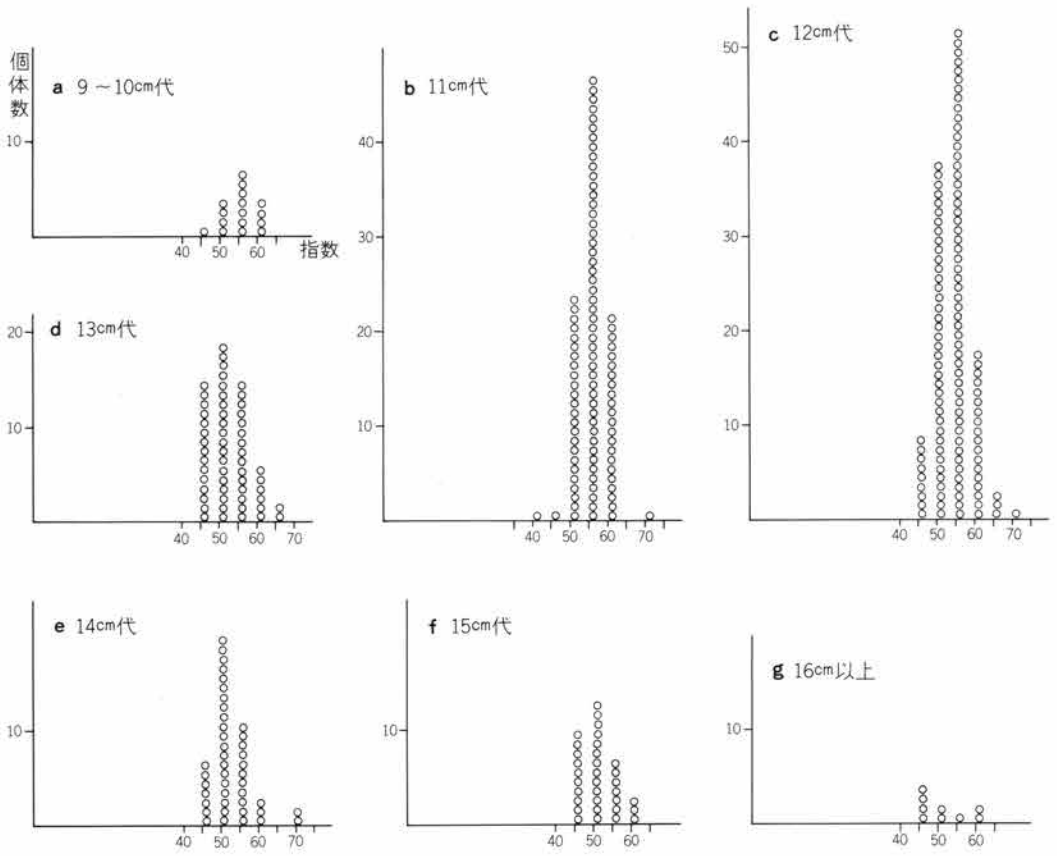
須恵器の器形には蓋、杯・椀、皿、高杯、鉢、壺、甗、甕、羽釜、硯がある。蓋と皿と高杯杯部の口縁部形態はよく似ており、口縁部破片で出土している場合は見分けがつかないこともある。蓋と皿との区別は輪状の付属品の場合は皿（＝高台）とし、ボタン状の付属品の場合は蓋（＝ツマミ）とし<sup>注1</sup>た。高杯と皿（とくに高台皿）は脚部の遺存があれば高杯としたが、高杯は脚部が剝離して出土することが多く、その接合面はツマミと同様に凹線を施す。接合部中央にナデないしヨコナデ等があれば高杯とした。椀と杯とはその形態によって大まかに分離することができたが、両者の中間的形態をもったものあり、明確に分離することはできなかつた。杯・椀に皿を加えた3者の口高指数をグラフにすると、第178図のようになる。口高指数310～320に1つのピークがあり、330～350にも1つのピークがみられた。2つのピークのあいだはやや浅い谷となる。そこで、指数320を境として319までを椀、320～430を杯、430以上を皿とした。これらの指数と形態を加味して杯・椀・皿を分離した。<sup>注4</sup>

**杯** その大きさにより大型杯、杯がある。器高4.3cmを境として、4.4cm以上のものを大型杯、4.4cm未満を杯としておく。杯の形態は体部と口縁部の特徴によっていくつかに分けられる（第179図）。第177図a～gは杯・椀を底口指数<sup>注5</sup>によって分けたもので、本遺跡出土の杯・椀類は底口指数55前後にそのピークをもっており、口径11～12cmのものが最も多い。

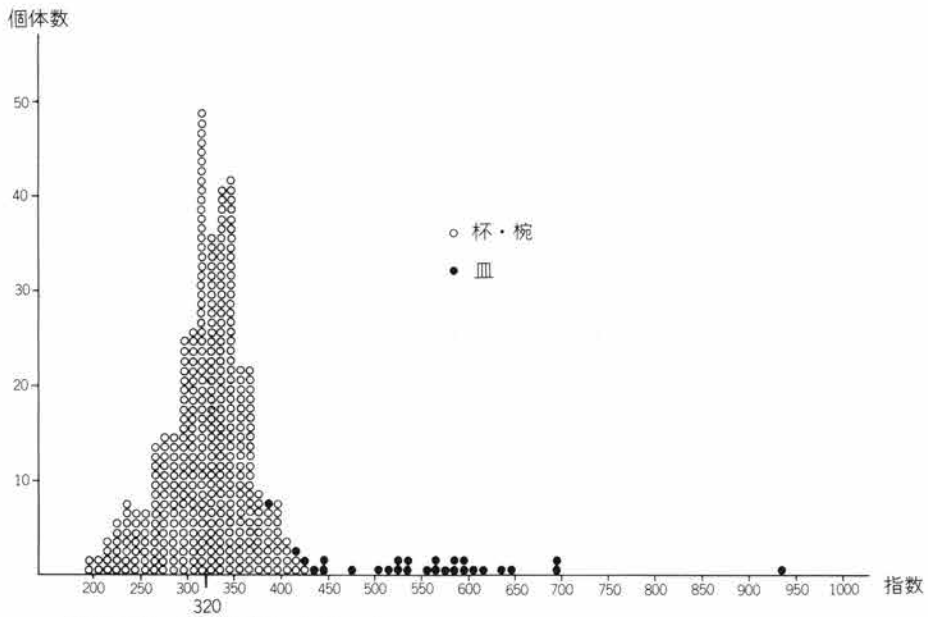
**椀** 椀の形態は概ね内湾した体部をもち、口唇部が外反するものもある。高台をもつもの（第181図）ともたないもの（第180図）とがある。高台をもつもののなかには、体部下半に外稜をもった稜椀がある。

**蓋** 杯・椀類の蓋と壺の蓋がある。杯・椀類の蓋は輪状のツマミをもつもの（第182図1）と偏平なボタン状のツマミをもつものがあり、後者はさらにツマミ中央の形態によって分けられる（第182図2～5）。壺の蓋は肩部に断面三角形の凸帯をもった特徴のある形態で（第182図7）、短頸壺とセットになると考えられる。<sup>注6</sup>

**皿** 無高台の皿はみられず、不明である。一点のみ底部を厚くした皿がある。（第145図13）。「擬高台皿」と呼ばれているものにその形態が似ている。他の皿は口径17～20cm代の大型高台皿と口径<sup>注7</sup>



第177図 杯・碗の底口指数による分布

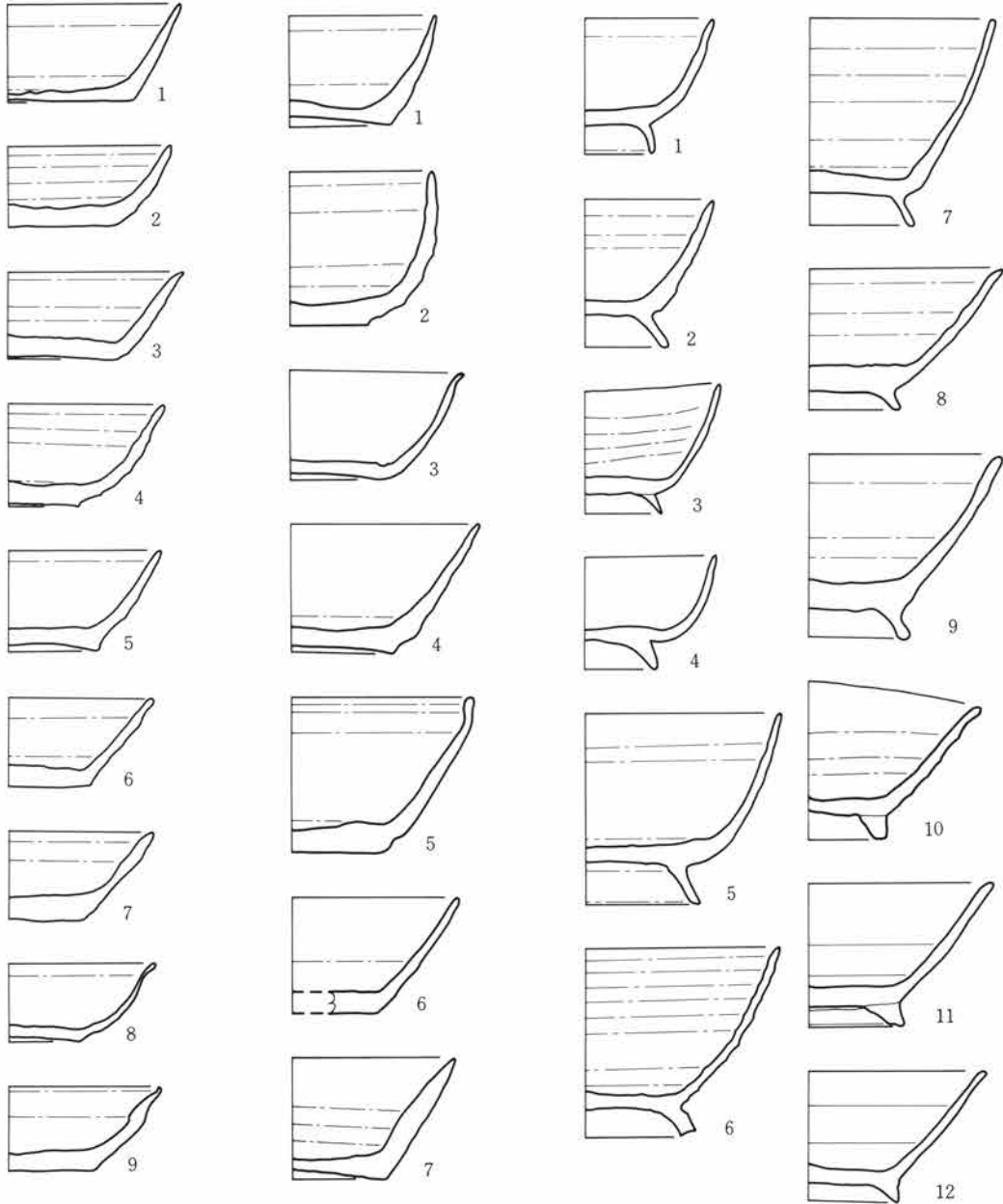


第178図 口高指数による分布



11～14cm代の高台皿とに分けられる。<sup>注8</sup>大型高台皿は口縁部の形態に特徴がみられ、口縁部が直線的なもの(第183図1～3)と屈曲または端部をつまみ出すものの2つに分けられる。高台皿は口縁部を折り曲げたもの(第184図1・2)、つまみ出すもの(第184図3・4)、体部から口唇部まで直線的にひらくもの(第184図5)がある。

**鉢** 大型鉢と鉢がある。大型鉢は全形を知り得るものが1点しかない(第109図23、137頁)。片口も1点の出土である(第147図1、184頁)。口唇部のつくりの特徴のある鉢は、底部に円盤をもつもの(第147図2、184頁)ともたないもの(第11図18、23頁)がある。



第179図 杯の形態図

第180図 碗の形態図

第181図 高台碗と高台の形態図

**壺** 長頸壺、短頸壺、多口壺があげられる。

**甗** 底部の蒸気孔が単孔のものと多孔のものがある。全形を知り得るものは各1点出土した（第185図<sup>注9</sup>）。

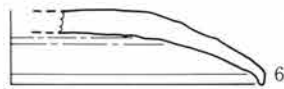
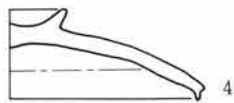
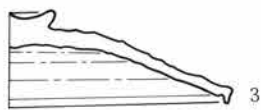
**甕** 口径20cm前後のものと、口径15cm前後の小型のものに分けられる。甕は頸部がしまり口頸部の長いものと、頸部がしまらず鉢形に近くひらく広口の甕がある。小型甕は頸部がしまるものと、広口甕の小型品とに分けられる。

高杯、羽釜、硯は全形を知り得るものがなく、ここでは割愛する。

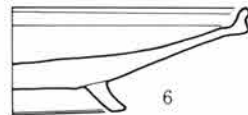
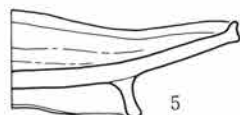
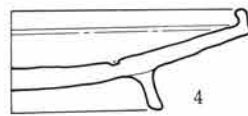
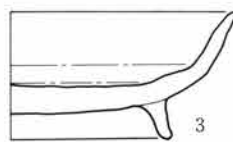
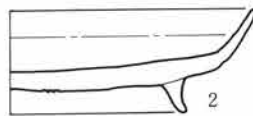
(ii) 土師器

口縁部が丸味をもった「く」の字状に外反する甕と、「コ」の字状に外反する甕がある。小型台付甕が1点出土したが、全形を知ることができない。その他、杯2点、高杯1点がある。

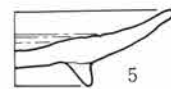
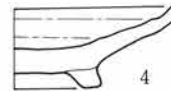
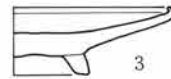
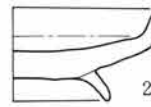
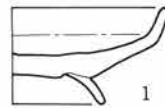
(iii) 須恵器と同様の胎土をもった酸化焰焼成の煮沸器



第182図 蓋の形態図



第183図 大型高台皿の形態図



第184図 高台皿の形態図

口径15cm前後の小型甕(第149図、186頁)と20cm前後の口径をもつ甕(第150図)がある。小型甕は外底に糸切り離

し痕を残すものがあり、さらに体部下半にヘラケズリを施すものもある。焼成のみ酸化焰で、他は須恵器と同様の工程でつくられたと考えられる。<sup>注10</sup>

甕は口唇部が須恵器風につまみ出土されるものと、単純に「く」の字状にひらいたままのものがある。また、外面に平行叩き目を残しているものがあり、

極めて特徴のある形態である（第150図）。

これらの甕類は酸化焙焼成されていることと煮沸用の土器であることから、当座土師器の中に含めておきたい。

#### (iv) 黒色土器

椀、高台椀、高杯、皿？、蓋？がある。遺構外出土例がその大半を占める（第143・144図、181・182頁）。

#### B 各遺構出土の土器

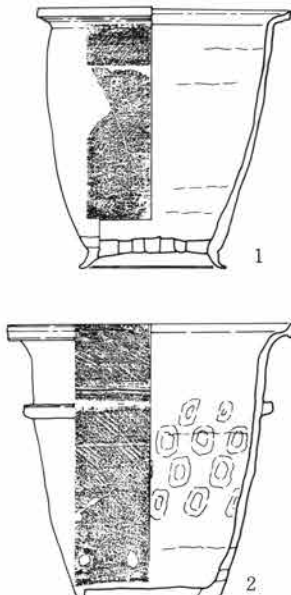
各遺構から出土した土器をまとめると、別表1のとおりである。「コ」の字状の口縁をもった甕と須恵器と同様の胎土をもった煮沸器は、同一住居址内から出土したケースがある。また、小形品でみると、右回転のものと左回転のものが同一住居址内から出土する例が多く、右回転のみの遺構は5区7・10・11号住居址と5区39号土坑の4例である。黒色土器はすべて覆土中から出土したものである。

#### C 技法

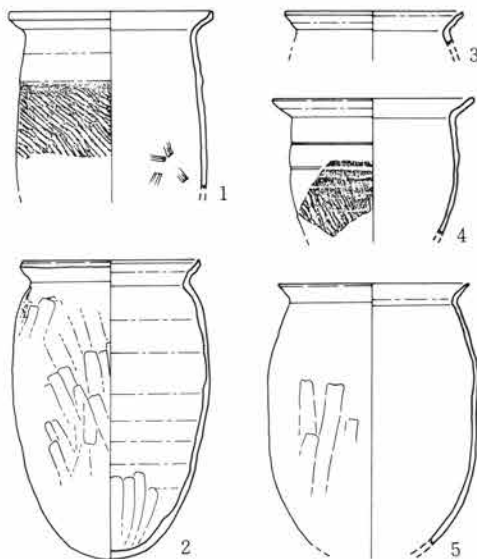
遺物の観察を進めていく過程で気付いた事柄をいくつか述べておきたい。すべて須恵器に関するものである。

#### (i) 内面に糸切り痕のある須恵器

第187図は5区6号住居址掘形から出土した高台をもった椀の破片である。高台貼り付け面のサイズでみると、大型高台椀と考えられる。外底の高台内側にはロクロ右回転（以下、右回転と略称する）の回転ヘラケズリ（以下、ヘラケズリと略称する）が加えられ、高台貼り付け面には凹線を1本施している。内面の補充粘土が剥落し、その下の左回転糸切り痕が露出している。▲Aは糸の入った位置で、▲Bは糸が小石にかかって強引に引き切ったときの痕跡である。▲Bと同様の痕跡は他にも見られる（図版127-9）。内面側にみられる左回転糸切り痕は、本例直前の粘土を切り離したときの糸切り痕



第185図 甕の形態図



第186図 須恵器胎土の甕形態図

のネガティブと考えられ、直前の粘土は右回転によって切り離されたと推定できる。これは外底のヘラケズリ調整の回転方向と矛盾しない。<sup>注11</sup>

内外面に糸切り痕をもつ焼成された破片が他に1点ある(第189図1、図版124)。この小片は内面側に右回転の糸切り痕があり、第187図の例と同様に考えれば左回転の土器から剝離した破片である。第189図2は杯または無高台の椀の破片で、外面に底部と体部の接合痕が明瞭にみられる(図版124)。焼成は還元焰・硬質で内外面青灰色を呈し、割れ口の内部はアズキ色を呈する。これと同様の痕跡は他にもみられることから、「底部円柱づくり」<sup>注12</sup>の技法の存在を推定したい。

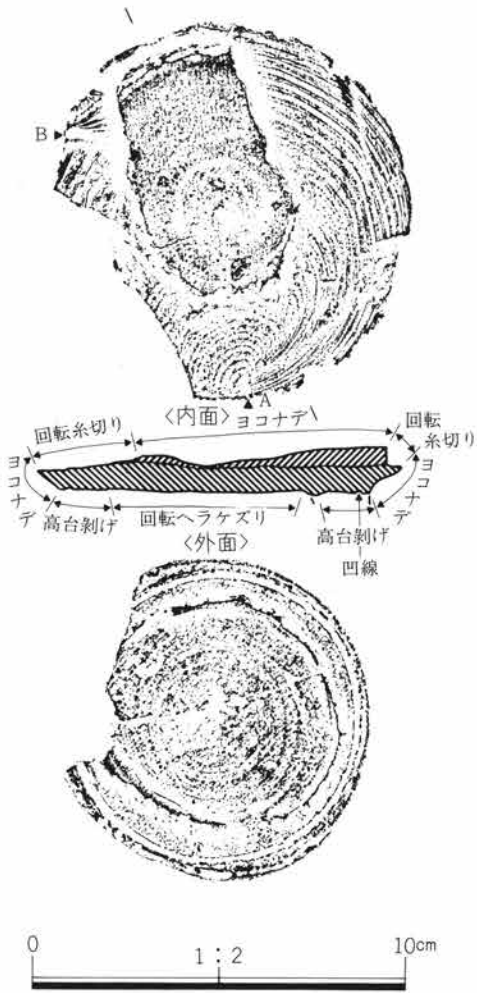
(ii) 外底周縁の絞り込み

第188図は5 R20グリッド出土の杯で、体部下端の底部と接するところは、体部の丸味から反転して凹部を形成している(この部分を外底周縁と呼んでおく)。ここにみられる調整痕は回転を利用したナデ痕であるが、しばしば斜めのシワ状の線を観察することができる。この斜めの線はロクロの回転と糸切り時の粘土の抵抗によって生じた粘土のネジレと推定される。このネジレ直前のヨコナデを施す

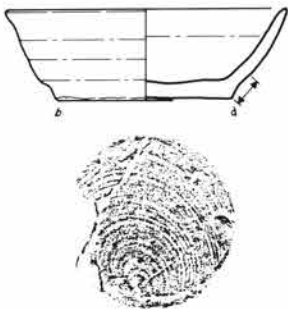
別表1 平安時代の遺構出土土器一覧表

●印は図示がない。

土器種	器種	5 区										6区	5 区						
		2住	3住	4住	5住	6住	7住	9住	10住	11住	1住	2区	38区	39区	40区	41区	42区	43区	
供膳器	蓋	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	杯	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	大型杯		○		○		○	○											
	椀	○	○	○	○		○	○	○		○		○		○		○		
	大型椀		○		○		●	○	○		○	○	○	○	○	○	○	○	
	小型高台椀	○	○		○	○		○			○		○					○	
	高台椀	○				○		●	●				○						
	大型高台椀	○	●		○	○	○	○		●	○				○		○		
	稜椀		○		○						○						○		
	大型高台皿				○		○	○	○						○			○	
	高台皿		○															○	
高杯	○	○						●	○			○	○						
黒色土器	●															●	●		
調理器	小型甕(台付)		●																
	「く」字口縁甕																	○	
	「こ」字口縁甕	○	○		○		●		○		○	○					○	○	
	須恵器胎土甕	○					○	○		○	○	○	○		○				
	須恵器胎土小型甕		○		○	○		○	○		○			○	○	○	○	○	
須恵器	甗									○							○	○	
	羽釜													○					
	鉢	○	○															○	
貯蔵器	台付鉢		○														○		
	壺		●		○	○	○	○	○					○			○	○	
	小型甕		○			○	○						○				○	○	
	甕	○	○			○	○	○	○			○	○	○	○	○	○	○	
	右回転 R	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
	左回転 L	○	○	○	○	○	×	○	×	×	○	○	○	×	○	○	○	○	



第187図 内面に糸切り痕のある須恵器



第188図 外底周縁の絞り込み

原因は、次のように考えられる。

前述のように杯・椀類等が底部円柱づくりの技法によってつくられたとすれば、円柱上端の径と器体下端との径はほぼ同じであり、そこに器体の底部の厚さを意図したアタリをつけることによって糸切りが容易になり、同時に底部の厚さが安定することはすでに指摘されている。<sup>注13</sup>さらに、この作業は体部との接合部をより緊密にナデつけることになり、接合がより強力になるというメリットがある。しかし、この段階では粘土塊から一気に器体をつくりだし、しかも連続した複数個体の生産の場合に表現される「土取り」<sup>注14</sup>とは内容が異なるので、「絞り込み」の語で表現したい。このような外底周縁の絞り込みは、外観の形態としては外底部の凸出感としてあらわれてくる。本遺跡出土の土器でこうした外底の凸出感をもったものは、後述のように9世紀中頃に位置づけられる。<sup>注15</sup>後葉になって底部の凸出感が失われてくるのは、体部との接合や糸切り技法そのものが手慣れて向上し、底径が小径化して糸がかけやすくなったことによるのではないだろうか。

(iii) 高杯脚部の成形

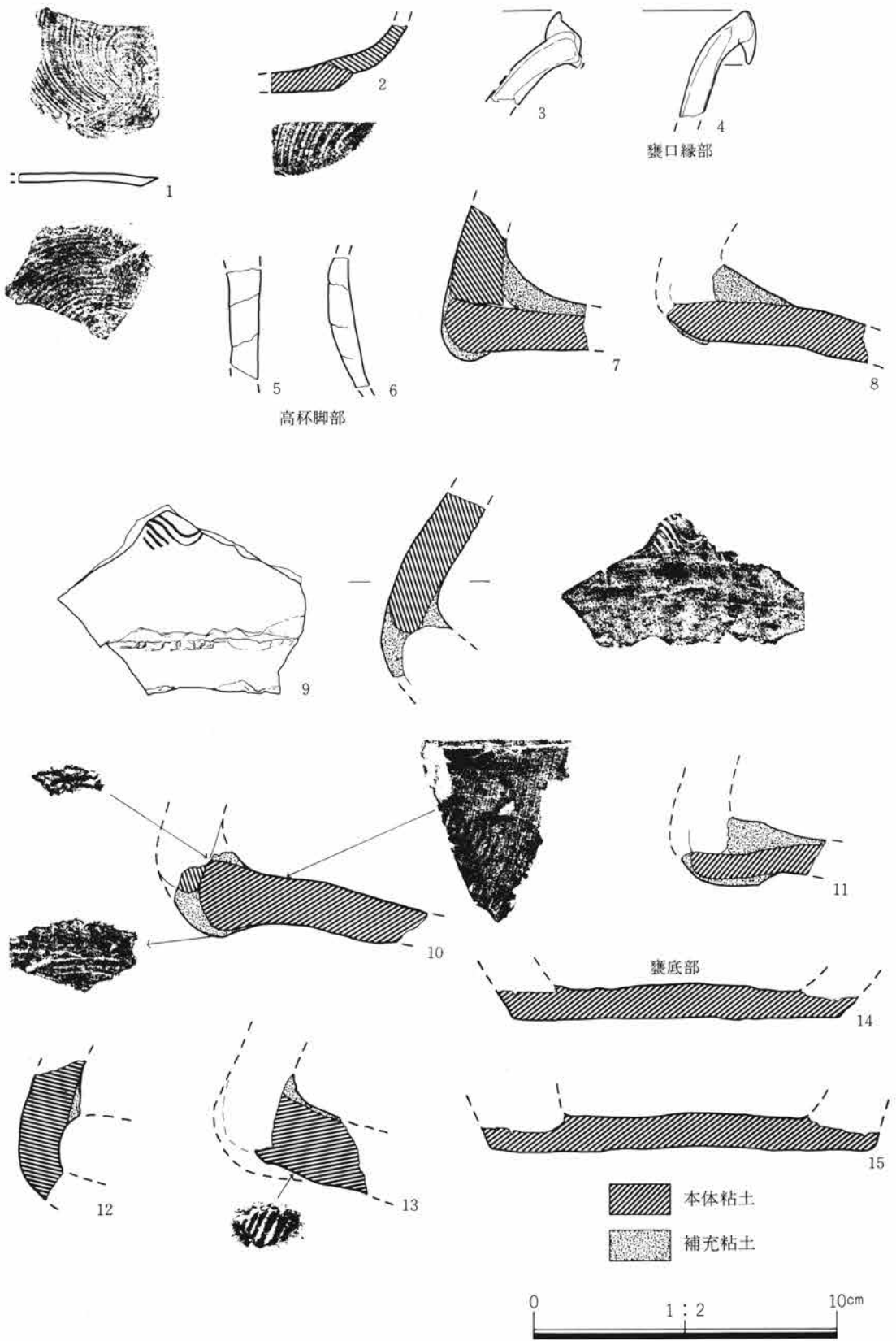
第189図5・6は高杯脚部の破片断面で、外面はロクロナデによって粘土紐巻上げ痕が消されているが、内面には明瞭に残っている(図版124・127)。こうした痕跡から、高杯の製作工程は次のように考えられる。

皿状の杯部をつくる→半乾燥→天地を逆転してロクロ上に据え、外底にへラケズリを施す→接合部に凹線を施して脚部接合の準備をする→粘土紐を杯部外底に押しつけながら巻き上げて筒状の脚部をつくる→裾部をつくり端部を仕上げる(半乾燥の時間は短時間であったと考えられる)。

(iv) 甕類の頸部と体部の接合

第189図7～13は甕の頸部と体部との接合部破片を断面図で示したものである。両者の接合には3通りの方法がみられた(図版124)。

- ①頸部を体部に乗せて接合する方法……………7・8・11
- ②両者の端部を継ぎ合わせるように接合する方法……………9・10
- ③頸部を体部の内側に落とし込んで接合する方法……………12・13



第189図 須恵器 資料

このうち②の方法が最も計算された・より高度な熟練を要すると考えられる。このような接合法がその場の成りゆきで行なわれたのか、工人集団の技法あるいは工人ひとり一人のクセなのか、今それを調べる材料をもっていないが、将来工人集団の系譜や供給先との同定の材料にすることができるかもしれないと思い、ここに図示したものである。

#### (v) 蓋の重ね焼痕

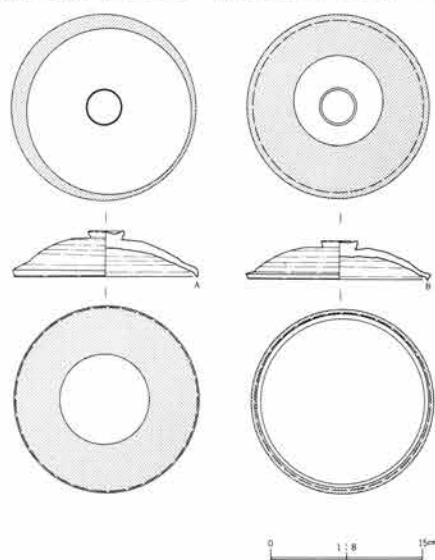
第190図は蓋の重ね焼痕を示したものである。Aは外面の重ね焼痕の径16.2cm、内面の痕跡径8.8cmであり、Bは同様に外面の径8.8cm、内面の径19.0cmである。身と蓋とがセットで窯詰めされ焼成されたとすると、この蓋に合った大きさで大小のある端部径をもった土器は、本遺跡出土須恵器の中では大型高台碗または稜碗である。これに対して、口径12~13cm代の口径の小さい蓋では、内面側のみ重ね焼痕がみられ、かつ、それらの痕跡径は蓋の口径に近いものである。この口径の小さい蓋では内外面に重ね焼痕のみられる例は、今のところ1例もない。口径の小さい蓋に合致する土器は小型高台碗と無高台の杯・碗が推定できるが、いずれにしても大型高台碗・稜碗の窯詰めとは異なった方法がとられていたと考えられる。

Aは蓋を天地逆転して身に重ねた窯詰めの方法であり、Bは蓋を本来の状態を重ねる窯詰めの方法であったと考えられる。A・Bとも右回転で作られ、同一住居址内から出土しているが、焼成・色調・形態とも異なった様子をもっていることから、時間差を考えて良いと思われる。

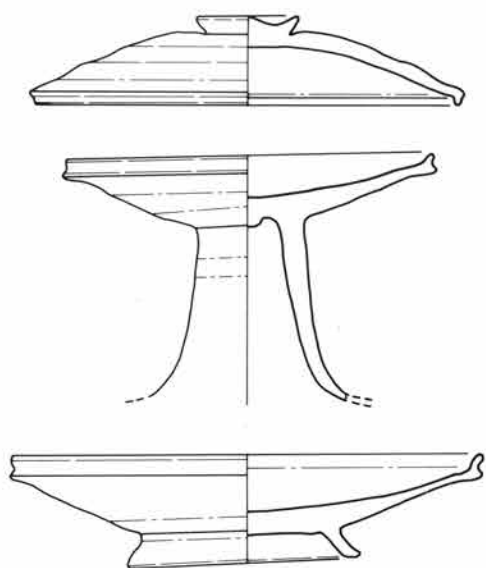
#### (vi) 蓋と高杯と大型高台皿

第191図のように、蓋・高杯・大型高台皿はその口縁部の形態が非常によく似ており、口縁部破片で出土したときは見分けがつかないことがあることは前述した。それぞれのツمامミ・脚部・高台を除いた皿状の凸部外面には、いずれもヘラケズリが施された痕跡がみられる。また、それぞれの回転の中心から半径の $\frac{1}{2}$ 前後の部分は、口縁部寄りの部分に比べて肉厚になっていることが観察できる。ツمامミの周囲に回転糸切り痕を残すものがあり(第36図1、50頁)、大型高台皿の高台内側の外底に回転糸切り痕を残す例もある(第27図26、40頁)ことから、これら3器種は皿状部を作る段階まで同様の方法で

つくられた可能性がある。端部のつくりは、詳細にみれば微妙に異なっているが、それぞれの器種に応じた形態なのであろう。それよりも、中途の段階までほぼ同様の方法で作れることのメリットは、工程を単純化しつつ多量・多種の製品を生み出すことにある。工程の単純化は熟練度をあげて生産の量的拡大をもたらし、多器種の生産は需要側への対応を容易にする。また、皿状部の作り方は杯・碗類の底部円柱づくりの応用である可能性もあり、上記のこととあわせてその効果はより大きいものとなる。この推定が許されるならば、本遺跡周辺の須恵器生産は、意外に効率的な方法をとっていたと考えられる。



第190図 重ね焼きの痕跡



第191図 蓋と高杯と大型高台皿

製銚帯の法制上の使用年代は、これまでの研究によって707年～796年、および807年～810年のあいだに限定されている。<sup>注17</sup>しかし、発掘調査による出土品と同じ遺跡出土土器の編年観とを対比した場合、必ずしも一致しているとは限らないようである。

5区9号住居址の遺物は約800点ある。これらのうち覆土・掘形出土のものを除外し、床面・カマド付近出土の、住居廃絶時に近いと考えられるもののうちで最も新しい様相をもった一群の土器を、9世紀後葉のなかに推定しておきたい。これらの土器群は左回転糸切り無調整の底部と直線的な体部とをもち、底部の凸出感が目立たず、口縁部に向って肉薄となり、口径に比べて深めの器高をもった一群の土器である（第46図31など）。

(ii) 各期の様相

A～Cで述べてきたことと上記の年代推定、およびこれまでに公表された県内平野部での奈良・平安時代の編年観を参考にして、本遺跡出土土器のうち小形品の編年を試みたのが第192～195図である。<sup>注18</sup>

**8世紀後半** この時期に相当する遺構は検出されず、試案に掲げた土器はすべて遺構外出土品である。G-3の杯は外底にナデが施されているが、ヘラ切り離しと考えられる。この他に図版126-2に示した1片がある。これらと同様の左回転の土器は、発見できなかった。

**8世紀終り頃** 両回転とも回転糸切り後周縁ヘラ調整の杯が出現する。比較的短時間のうちに底部回転糸切り・無調整の土器に移行すると思われる。左回転の土器の中に、口唇部をわずかに外反させ尖り気味の口唇部をもち、底部全面にヘラケズリを施す大型碗が出現する。右回転で同様の調整を施した大型碗は見られなかった。また、左回転の土器の中に高台内側の外底にヘラケズリを施す小型高台碗があり、高台は内湾する形態をもっている。これもほぼ同じ頃の所産と考えられる。

**9世紀前葉** 杯はやや口径が大きくなり、内湾気味の体部をもった杯に変化する。口唇部は尖り

D 編年試案

(i) 実年代を推定する材料

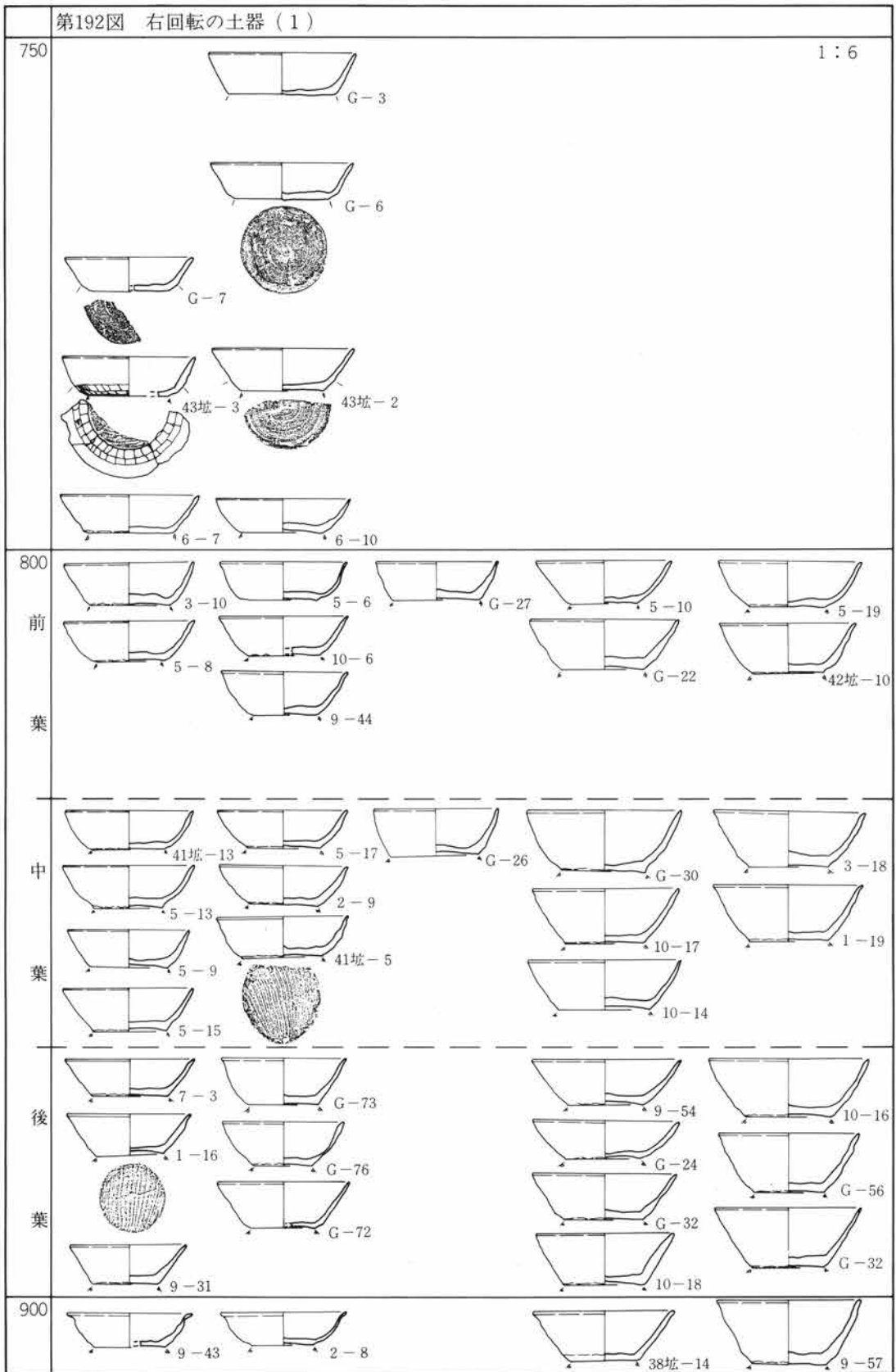
本遺跡出土遺物の中には、直接実年代を知る資料は発見されなかった。そこで、ある程度の時間幅をもっているが、比較的年代の限定されている遺物をあげることによって実年代を推定したい。

①第148図1（185頁）は体部に丸味をもたない長頸壺と考えられる。これまでの研究によってこの種の長頸壺の年代は、今のところ758年～825年直後という年代の中に限定され、その盛行期間は8世紀第4四半期後半から9世紀第1四半期前半とされている。<sup>注16</sup>本遺跡出土須恵器の生産された期間のなかに、758年～825年の実年代が含まれていると推定したい。

②第168図2（218頁）は5区9号住居址の覆土から出土した銅製丸柄の裏金具と考えられる。金属



第192図 右回転の土器 (1)



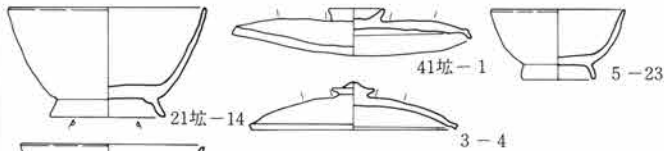
第193図 右回転の土器(2)

750

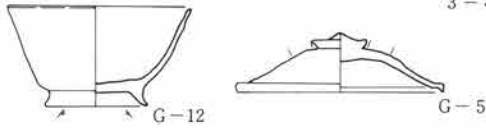
1:6

800

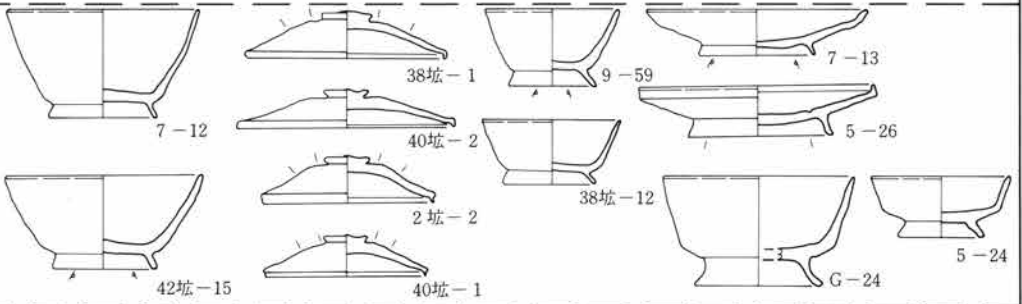
前



葉

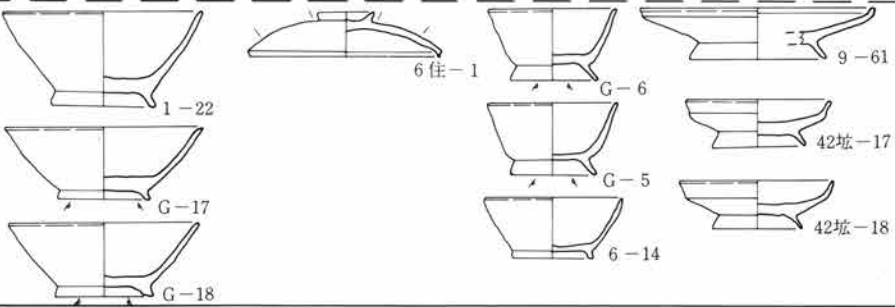


中



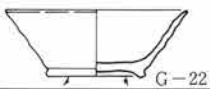
葉

後

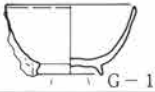

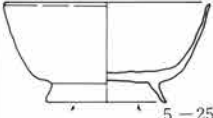

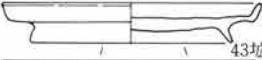
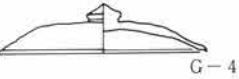
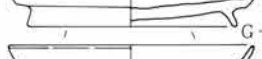


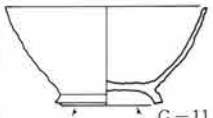
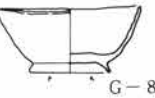
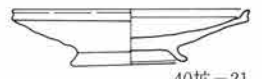
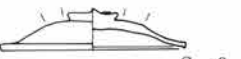
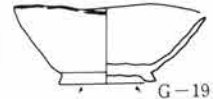
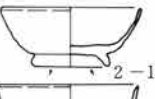
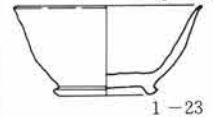
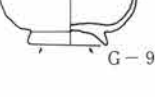


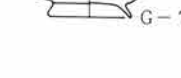
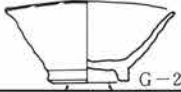



葉

900



第194図 左回転の土器 (1)		1 : 6
750		
	<p>G-13</p>	<p>43坑-4</p>
	<p>G-15</p>	<p>6坑-7</p>
		<p>G-14</p>
		<p>5-18</p>
800		
前	<p>G-31</p>	<p>G-30</p>
	<p>掘-1</p>	<p>41坑-14</p>
	<p>G-26</p>	<p>G-29</p>
葉	<p>43坑-9</p>	<p>G-17</p>
	<p>G-25</p>	<p>41坑-15</p>
中	<p>40坑-3</p>	<p>G-28</p>
	<p>3-11</p>	<p>41坑-7</p>
葉	<p>5-9</p>	<p>41坑-6</p>
	<p>41坑-9</p>	<p>G-33</p>
		<p>G-35</p>
後	<p>2-11</p>	<p>4-1</p>
	<p>4-3</p>	<p>1-4</p>
葉	<p>2-6</p>	<p>1-18</p>
	<p>9-41</p>	<p>G-34</p>
	<p>1-15</p>	<p>G-36</p>
	<p>G-89</p>	<p>1-17</p>
900		

第195図 左回転の土器(2)		1:6
750		
		
800		
前		
葉		
		
		
		
中		
葉		
後		
葉		
		
		
		
900		

気味で、外反するものもある。両回転の土器とも底部周縁に凸出感のあるものが出はじめるが、後出のものに比べて不明瞭である。右回転の土器の中に口唇部をかるく外反させる回転糸切り・無調整の土器（杯・無高台碗）が出現する。高台をもった碗は大型と小型の2者に分れた器種として出現する。左回転の土器では、口唇部をかるく外反させる大型碗のなかに、底部全面ヘラケズリを施すものがあるが、新たな器種として大型高台皿が出現する。大型高台皿は口縁部を直立させる外稜の明確なものから、次第に外傾させるものになり、中葉に入る頃には外稜が消失して丸味をもつものになる。

**9世紀中葉** 土器の出土量が最も多い時期で、中でも右回転の杯・碗類の出土量が最大の量を示す。右回転の土器の中に口唇部を屈曲させ、蓋の逆転形をもった大型高台皿が出現する。外稜をもった稜碗もおそらくこの頃に出現すると考えられる。杯・無高台の碗は、この頃底部円柱づくりの技法がようやく完成し、底部は凸出感をもった回転糸切り・無調整のものになる。左回転の土器の中に口唇部を屈曲させる大型高台皿が出現する。

**9世紀後葉** 左回転の土器の量が再び多くなり、右回転の土器の出土量は減少する。杯と無高台の碗は体部の丸味を失い、再び直線的なものになる。外底部の凸出感は薄れ、口唇部に強いヨコナデを施して肉薄にするものや、体部の一カ所が薄くなるものが出現する。口径はやや小径化し、深めのものになる。両回転とも口径12～14cmほどの高台皿が出現する。右回転の土器では大型高台皿が残るが、端部の屈曲は外反する形態になる。左回転の土器では大型高台皿が消失する。

**10世紀前半** この時期に相当する遺構は本遺跡の調査区内では検出されていないが、東接する藪田東遺跡に遺構がある。本遺跡調査区内での遺物は前代に比べ激減する。右回転の杯は口唇部が玉縁状に肥厚して外反し、高台碗の高台は断面方形となる。

以上、各期毎に変遷を追ってみた。<sup>注20</sup>9世紀中葉とした部分が2時期に細分される可能性が高いが、現在その指標とするものが発見できていない。また、この試案は周辺遺跡での調査やその報告等資料の増加によって、変更・修正されなければならないものである。

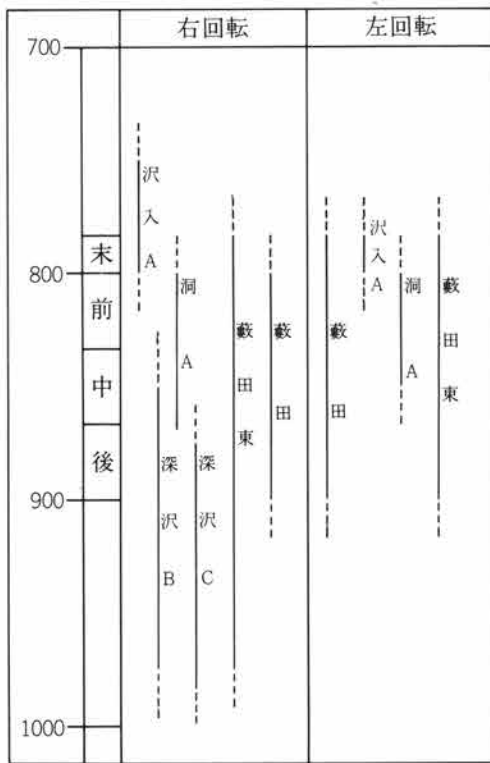
## E 左回転の系譜

これまでの調査・研究によって、月夜野古窯跡群の須恵器の中にロクロ右回転（以下、右回転と略称する）のものと、左回転のものがあることが明らかにされている。

利根川左岸に位置する<sup>おおがま</sup>大釜遺跡の調査所見では、<sup>注21</sup>沢入A支群（以下、沢入Aと略称する）出土の杯は殆ど底部調整を行なっており、右回転のものである。1個体確認された左回転のものは糸切り・底部無調整（以下、無調整と略称する）<sup>注22</sup>である。洞Aでは回転糸切り・無調整で右回転を主とするが、左回転のものもあるとのことである。

群馬歴史考古同人会の調査では、<sup>ふかさわ</sup>深沢B・Cの主体回転方向は右回転である。<sup>注23</sup>また、藪田東遺跡では、<sup>注24</sup>両回転が混在している。藪田東遺跡では、同報告をみた限りで、10世紀代とみられる1・5号住居址および第3群粘土採掘坑のものは、右回転とみられる。左回転のものは概ね9世紀代におさまるようである。

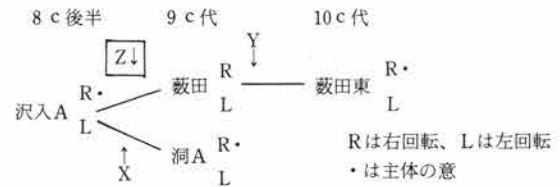
今回藪田遺跡の出土例が加わったことにより、月夜野古窯跡群中の左回転の須恵器を出土したのは沢入A、洞A、藪田東、藪田の4カ所で、沢入A・洞Aの主体は右回転である。一方、藪田東・藪田遺跡の9世紀代の土器は、両回転の混在が確認されている。以上のことを、これまで公表された資



第196図  
月夜野古窯跡群中の右回転と左回転

料を参考にして作成したのが第196図である。<sup>注25</sup>

ロクロの回転方向が同一工人集団の中で混在しているかどうかは不明であるが、併焼の例は確認されている。藪田遺跡と藪田東遺跡の9世紀代の須恵器を藪田遺跡で代表させれば、



の発展系列が考えられる。X→とY→は別系工人の参入が指摘されたところである。<sup>注26</sup> Y→として指摘された人々は、本遺跡6区1号住居址出土土器に代表される、須恵器と同様の胎土をもった煮沸器を使用した人々のことと考えられる。<sup>注27</sup> 第58図24~27・29~33 (74頁)の土器は特徴ある土器で、県内では今のところ藪田東遺跡例を知るのみである。県外では多賀城跡にその類例を見ることができ、口縁部と体部の形態・成形・器面調整の手法・酸化焙焼成であることは似るが、底部の形態が異なっている。<sup>注28</sup> また、福島県・栃木県・新潟県にもシルエットのよく

似た土器が出土している。多賀城跡・福島県・栃木県の例では平底であるのに対し、新潟県例・本遺跡例では丸底が推定されている。底部の形態の違いが何に起因するのか、こうした分布状況の理解も含めて、今後の課題にしたい。

さて、上記の「Z→」はすでに予想されている左回転を主体とする須恵器を製作していた工人集団と考えたい。その人々の出自は東海系で左回転の系譜をもち、大型高台皿・尖り気味の口唇部をかく外反させる大型椀・頸部のしまらない広口甕といった器種をもち込んだ人々で、8世紀の終り頃この地に参入したと考えられる。月夜野古窯跡群の開窯期の人々を第1波とすれば、沢入Aの右回転の人々を第2波、「Z←」を第3波とすることになる。<sup>注33</sup> X≠Zの可能性は残しておきたい。

注

1. 輪状のツمامいをもった蓋も少数だが存在するので、この分類は必ずしも妥当な見分け方法とはいえない。
2. ここで設定する杯と椀は歴史的名称ではなく、筆者が便宜的に与えた名称である。
3. 口高指数=口径/器高×100 (器高は高台を除いた高さで計測している)。
4. 形態を優先する。それでも疑問点が残る。
5. 底口指数=底径/口径×100 (底径は高台を除いた径で計測している)。
6. 同様の形態をもった壺の蓋は吾妻町下の町で出土しており、これらは秋間古窯跡群の製品と推定されている。  
津金沢吉茂「群馬県吾妻町下の町平安時代火葬墓」『群馬県立博物館報』第21号 1978
7. 岡田正彦「平安時代土師器等の編年試案」『信濃』第29巻第9号、信濃史学会、1977  
「第4節 平安時代以降の遺物」『橋原遺跡』岡谷市教育委員会他、1981  
鵜飼幸雄「第4部 高部遺跡出土の平安時代後期の土器様相」『高部遺跡』茅野市教育委員会、1983

8. 資料数が少ないので明瞭に分れたが、将来両者の中間の計測値をもった高台皿が発見される可能性がある。
9. 蒸気孔の形態と凸帯ないし把手の存否に相関関係があるかどうか、今のところ資料数が少なく不明である。
10. いわゆるロクロ土器のなかに含まれるかどうか、今のところ判断する材料がない。
11. 以下、同一個体のロクロ回転方向は左・右の回転方向が混在しないことが前提である。
12. 服部敏史・福田健司「南多摩窯址群出土の須恵器とその編年」『神奈川考古』第6号、1979
13. 小川貴司「回転糸切り技法の展開」『考古学研究』第26巻第1号、1979
14. 前掲、注13による。
15. 前掲、注12の内外面に糸切り痕のある須恵器は、10世紀代とされている。
16. 佐々木和博「市川市権現原遺跡出土の須恵器」『市川市博物館年報』昭和55年度、1981  
シンポジウム資料「房総における奈良・平安時代の土器」史館同人・市川市考古博物館、1983
17. 阿部義平「鈎帯と官位制について」『東北考古学の諸問題』東北考古学会・寧楽社、1976  
後藤喜八郎「神奈川県出土の鈎帯について」『専修考古学』第1号、1983
18. 井上唯雄『群馬県利根郡月夜野町洞窯跡発掘調査報告』月夜野町教育委員会、1973  
「群馬県下の歴史時代の土器」『群馬県史研究』第8号、1978  
「歌舞伎遺跡における土器の編年」『歌舞伎遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、1982  
井上唯雄・若月省吾「笠懸村の原始・古代」『笠懸村誌』別巻1、1983  
山下蔵信「天神風呂遺跡」群馬県大胡町教育委員会、1981  
中沢 悟「出土土器の分類と編年」『清里・陣場遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、1981  
大江正行・中沢悟「群馬県における平安時代の年代観について」『シンポジウム 関東地方における9世紀代の須恵器と瓦』  
立正大学文学部考古学研究室、1982  
中沢 悟「月夜野型羽釜について」『埋文月報』No40、1984、3  
「月夜野窯跡群の概要」『埋文月報』No42、1984、5  
井上 太「古墳時代から平安時代の土器について」『本宿・郷土遺跡発掘調査報告書』富岡市教育委員会、1981  
志村 哲「堀ノ内遺跡群出土土器の分類と編年」『A1 堀ノ内遺跡群』群馬県藤岡市教育委員会、1982  
綿貫綾子「出土土器の分類と編年」『有馬条里遺跡 沖田地区 平安時代』群馬県渋川市教育委員会、1983  
坂口 一・三浦京子「住居伴出土器の相対年代」『中尾 (遺物篇)』群馬県教委他、1984  
坂井 隆「古代の遺物・遺構について」『熊野堂遺跡(1)』群馬県教育委員会他、1984  
唐澤保之「奈良・平安時代の土器の分類について」『芳賀東部団地遺跡 I』前橋市教育委員会、1984  
小島敦子「賀茂遺跡出土の平安時代の土器について」『賀茂遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、1984
19. 左回転の稜椀は今のところ出土していない。
20. 編年図中の各期の中では、上下関係は時間軸の前後関係を意味しない。
21. 沢入A支群、洞A支群、深沢C支群の回転方向の認定は大西氏による。  
大西雅広「ロクロ左回転の須恵器」『大釜遺跡・金山古墳群』群馬県教育委員会・(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団、1983
22. 同じく沢入A支群出土のものとして採集品で筆者が実見したものでは、右回転のものが圧倒的に多く、調整によって回転方向が判りにくいものを除くと98%が右回転・ヘラ調整で、左回転・ヘラ調整のものは2%に満たない。また、左回転無調整のものはその中に見られなかった。
23. 『土器部会研究資料No.2』群馬歴史考古同人会、1983
24. 同報告及び中沢 悟1984、5『埋文月報』No42
25. 真沢A支群、水沼A・B支群については、本遺跡からやや離れていることと、公表資料の中で回転方向が判断できず、省略した。  
前掲注18 埋文月報、注21、注23による。
26. 大江正行「群馬県における古代窯跡群の背景」『群馬文化』199、1984
27. 6区1号住居址出土の杯・椀類には左・右回転があるが、床面、カマド付近、貯蔵穴出土の土器は第56・57図3・4・6・7・10・13・16・17・19・20・22・23で左：右＝5：7である。
28. 『多賀城跡』宮城県教育委員会・宮城県多賀城跡調査研究所、1982
29. 『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告 I 下堀際遺跡』福島県教育委員会、1983
30. 『薬師寺南遺跡』栃木県教育委員会、1979
31. 『上新バイパス関係遺跡発掘調査報告 I 今池遺跡・下新町遺跡・子安遺跡』新潟県教育委員会、1984
32. 前掲、注21。
33. 前掲、注26。

## 6 藪田遺跡出土瓦の考古学的位置

瓦類は、奈良・平安時代における地域勢力の影響を強く受けた特異な遺物である。それは造瓦生産・体制が、公に掌握されたり、地域勢力に直接支配されていたためである。この意味をふまえ、数片の瓦であっても、その文様意匠、作瓦技法などがどのような系統に位置するか解釈することにより、地域掌握者像の一端を知ることができるのである。ここでは、その一端を探るつもりで検討を加え、まとめとして藪田遺跡出土瓦の存在意義について触れたい。

## 1 周辺地域の出土例とその系譜（第176図）

北毛地域は、沼田市、利根郡、吾妻郡からなる。沼田市では、瓦の出土は知られておらず、利根郡内に6箇所、吾妻郡内に6箇所存在する。県下、約100箇所<sup>注1</sup>の出土地数からすれば密度の薄い地域であるが、広大な地域に少ない遺跡数でありながら瓦の意匠、技法は共通する特性があり、このため本稿は、藪田遺跡の位置する利根郡ばかりでなく、補足に吾妻郡内の出土例を加えた。それら出土地、出土瓦の概要は別表2のとおりである。

利根郡での軒丸瓦の出土は後田遺跡<sup>注2</sup>から、中房に十字形を置き、単弁11葉を配した軒丸瓦が出土している。特徴は単弁、十字形中房、背面の布紋目などで、弁数の異なる点を除けば、吾妻郡平古瓦<sup>注3</sup>散布地の軒丸瓦と、基本意匠、技法は酷似し、この点から三例は同一か、同一系統の工人によると見なされ、弁数の不定形化をとらえれば、後田遺跡例がより後出的である。その系統と時期は先に、検討した<sup>注4</sup>とおり、上植木・雷電山系<sup>注5</sup>にあり、その製作年代は<sup>注6</sup>第IV期で、8世紀初頭から8世紀中頃の年代があたえられる。

軒平瓦の出土例は、利根郡内において後田遺跡に、篋書重弧文<sup>注2</sup>の例があり、特徴は、紐作り、裏面に細かい格子印目が見られる点にある。篋書重弧文の存在は、北毛地域で他に知られていないが、細かい格子印は金井廃寺<sup>注6</sup>、平古瓦散布地<sup>注3</sup>、在上古瓦散布地<sup>注3</sup>、天代瓦窯跡B地区<sup>注7</sup>、それに藪田遺跡に類例があり、北毛地域では普遍的に見られる叩板文様である。細かい格子目を施した叩板を用いる技法は、雷電山古窯跡群、笠懸窯跡群にあり、西毛地域の窯跡群では格子叩が数例であるため、軒丸瓦の系統と同様に、細かい格子の叩を、東毛地域に広がりを持つ上植木・雷電山系の一端と見なしてよいと考えられる。

利根郡内における平・丸瓦の特徴は、平瓦の多くに、叩板による叩を施すこと、平・丸瓦の多くを紐作りで製作する点にある。利根郡内の消費地の場合、後田遺跡<sup>注2</sup>では、平瓦に、格子叩による叩板の技法と平・丸瓦に紐作りを認めることができ、森下遺跡<sup>注1</sup>では平瓦に平行叩による叩板の技法と平・丸瓦に紐作りが見られる。窯跡では洞遺跡に、平行叩を施す叩板の技法が認められ、窯業生産集団の関連遺跡例からは、藪田遺跡に細かい格子叩と紐作りとを認め、前中原遺跡<sup>注8</sup>の素文の丸瓦にも紐作りが認められた。これら叩板における格子目、平行刻みを施す例は吾妻郡内にも多く存在し、北毛地域の特色と言えそうである。この中で平行叩は、県内における分布の中から、主体を特定することはできないが、格子目と平行刻みはただ単に、文様の差に過ぎず、叩板を用いることに変りはないという見方をすれば、叩板の多用は上植木・雷電山系にある。また紐作りが利根郡内で多用されていた点は、吾妻郡内では金井廃寺<sup>注6</sup>に類例(第197図)はあるものの、主体は一般的な粘土板剥取り技法にあるため、

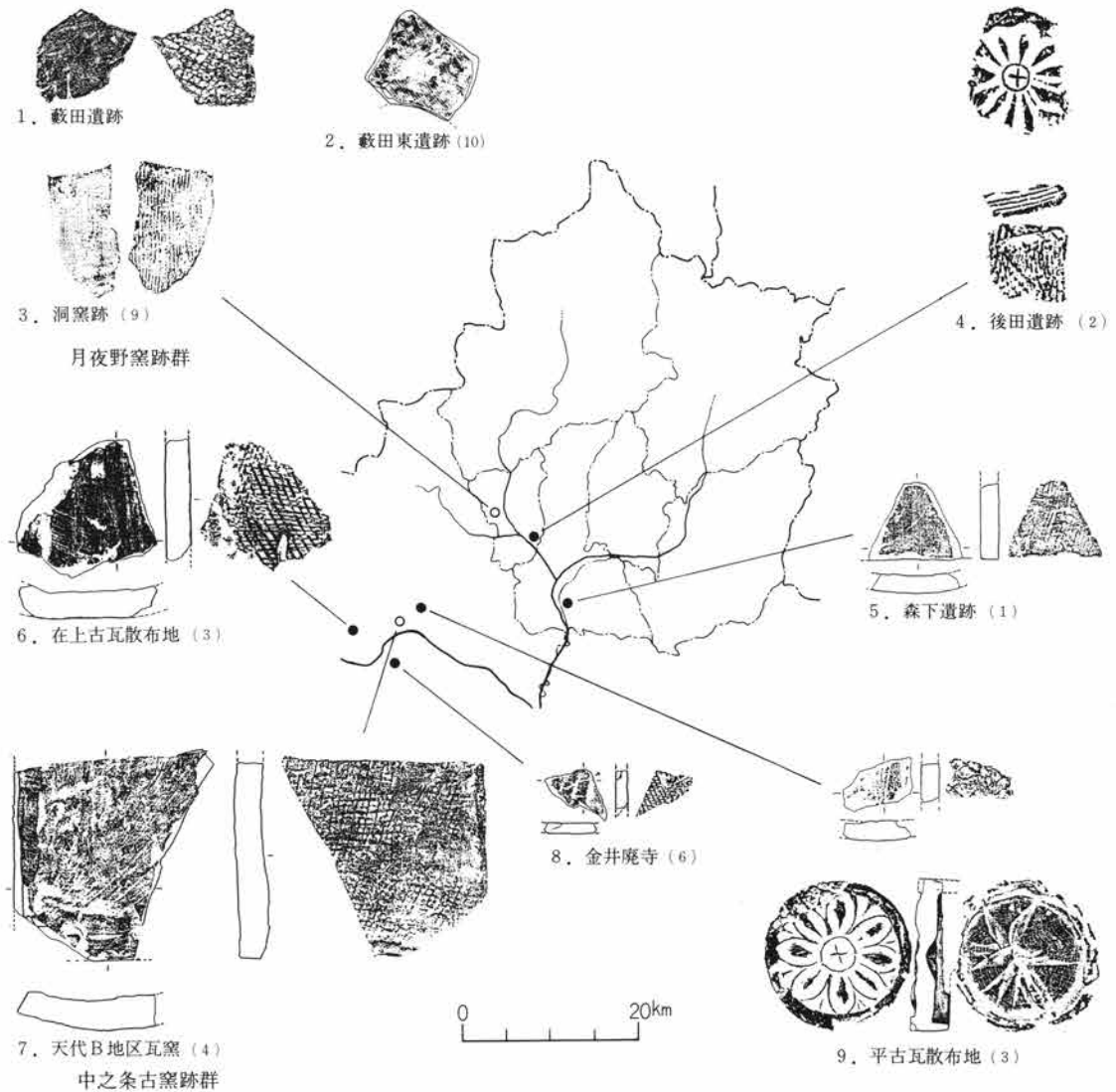


紐作りは利根郡内における特色とした方がよさそうである。紐作りの系統は、上植木・雷電山系の第IV期の一群に多く認められ、利根郡内における紐作りを、時期的に共通する点も含め、その系統の一端にあったとしてよいと推考される。

## 2 利根郡における古瓦の変遷

利根郡内からの古瓦の出土は、消費地では、後田遺跡、森下遺跡、窯跡とその関連では、月夜野窯跡群中に洞窯跡、藪田遺跡、藪田東遺跡、前中原遺跡に認められ、それぞれ、相対的な年代を抽出しうる観点をかかげたうえで変遷観を求めたい。

後田遺跡の①軒丸瓦の文様意匠、その背面にある布の絞り目、②軒平瓦の裏面に見る細かい格子叩目、森下遺跡の③平瓦にある平行叩目、洞窯跡の④平行叩目、藪田遺跡の⑤平瓦にある細かい格子叩目がある。藪田東遺跡例は、裏・表の二面に布目を伴う瓦製品で、要素の抽出が困難であるため除外



第197図 北毛地域における古瓦分布 (出典は注番号に一致)

別表2 北毛地域における古瓦出土遺跡一覧

遺跡名	所在地	遺跡・出土瓦の概要と特色
藪田遺跡 (月夜野古窯跡群)	利根郡月夜野町橋上	周辺に月夜野古窯群、藪田支群が想定され、遺跡内住居は、9世紀代の窯業集団に関連した集落の一部か。東方には、粘土採掘堀を検出した藪田東遺跡がある。出土瓦は4片であったが、そのうち3片の平瓦は格子叩、紐作りを特色とする。詳細は本文参照。
藪田東遺跡 <sup>(10)</sup> (月夜野古窯跡群)	利根郡月夜野町橋上	藪田遺跡に東接した遺跡で、窯業生産に伴う粘土採掘堀と関連の9～10世紀代の住居跡が検出されている。出土瓦は、第4群粘土採掘堀から7片出土している。それらは特殊で、裏・表に布目痕が付着し、側部は弧を呈し、相輪の瓦製を思わせる。
前中原遺跡 <sup>(8)</sup> (月夜野古窯跡群)	利根郡月夜野町水沼	周辺に月夜野古窯跡群、水沼支群が想定される。調査では10世紀代の住居跡が1址検出され、窯業集団との関連が指摘されている。出土瓦は10世紀代と考えられ、同時期の土器とともに2点出土している。2点とも丸瓦で、表面は縦方向の篋削りを施し、成形は、紐作りによる。
洞窯跡 <sup>(9)</sup> (月夜野古窯跡群)	利根郡月夜野町上組	1937年に瓦・須恵器とが伴出出土した窯跡が1基確認され、1970、1971年に、I～III号まで3基の窯跡が調査された。その主体は須恵器であったが、少量出土した。平瓦は、表面に模背桶痕があり、裏面に平行叩がある。月夜野窯跡群において、平行叩は月夜野古窯址部において洞窯跡だけであるが、生行叩は一般性があるので他支群にも存在する可能性を考えた方が良くであろう。
後田遺跡 <sup>(2)</sup>	利根郡月夜野町師	古墳時代後期から奈良時代までの住居址を主体とした大集落址で、調査地の一角から古瓦が出土した。瓦類で軒丸瓦は、単弁11葉を配した第3期類の上植木・雷電山系で、背面に布の絞り目がある。軒平瓦は篋引の重弧文で、裏面に細かい格子叩を施す。叩は平瓦も同様であるが、丸瓦は、素文である。
森下遺跡 <sup>(1)</sup>	利根郡昭和村森下	発掘調査は実施されていない。遺跡の性格としては、瓦塔片が出土しているため、寺院址と考えられている。古瓦の散布は多くなく、400mほどである。平瓦は裏面に平行叩、素文の二者があり、丸瓦は素文である。
在上古瓦散布地 <sup>(3)</sup>	吾妻郡吾妻町在上	発掘調査は実施されていない。遺跡の性格は不詳。瓦類は3類型に分類されている。1類は格子叩、2類は平行叩、3類は素文である。
平古瓦散布地 <sup>(5)</sup>	吾妻郡中之条町平	発掘調査は実施されていない。遺跡の性格は不詳。瓦類は3類型化されている。1類は刻みの浅い格子叩、2類は素文、3類は篋削りを施す。軒丸瓦は、単弁8葉を配した上植木、雷電山系で、背面に布の絞り目がある。
金井廃寺遺跡 <sup>(6)</sup>	吾妻郡吾妻町金井	発掘調査が実施されたものの寺城外であった。諸堂宇の完備した寺院址が想定されている。瓦類は、軒丸瓦が1～6型に分類されて、1・2型は上植木・雷電山系で、3型が山王・秋間系に属す。時期は1型が第II期、2・3型が第III期、4型が第IV期、5・6型が上野国分寺建立以降である。軒平瓦は重弧文で曲線類と有段類の2種がある。平・丸瓦は胎土差により8類型化されている。1類は細い格子叩、2種は素文と格子叩、3類は秋間古窯址群製、4類は格子叩、5類は縄叩と素文、6類は縄叩、7類は平行叩である。
天代瓦窯跡 <sup>(4)</sup> (中之条古窯跡群)	吾妻郡中之条町伊勢	天代瓦窯跡は、3地区に瓦窯が想定され、そのうちC地区瓦窯が発掘された。C地区瓦窯は上・下に2基の窯体が存在した。A・B地区は散布地である。B地区の瓦類は、金井廃寺の6類と共通し、格子叩を特徴とし、焼締りがあり、還元気味の焼成である。時期は第III期に属し、天代瓦窯跡の中では最も古い。A地区の瓦は、軒丸瓦は金井廃寺6-A型と同簿関係にある。平・丸瓦は、全面に縄叩が施され、焼締り、還元気味の焼成である。金井廃寺の6類に相当する。C地区の瓦は2類型化され、1類の平瓦は縄叩、丸瓦は素文。2類は篋削りされた瓦をさしているが平瓦に1点認められたに過ぎない。焼成は軟質で、酸化気味である。金井廃寺の平・丸瓦の6類に相当する。天代瓦窯跡群の系統は作瓦技法から、上植木・雷電山系に属する。

したい。前中原遺跡の⑥丸瓦は素文である。以上の特質なり、要素は、それぞれ、いつ頃の年代を示すのであろうか。次に検討したい。

①は、前述したように、第IV期に属し、8世紀前半から中頃までに限定される。②・⑤の叩技法の主体は、上植木、雷電山系にあり、その系統の中での盛期は第IV期にあるため、8世紀前半から中頃までと見なされる。③・④の平行叩は、洞窯跡の発掘された遺物群と同期であるならば8世紀終末から9世紀前半があたえられる。⑥前中原遺跡の住居跡は窯業集団関連と想定され、遺構量、密度から出土瓦も、それに伴う可能性が高く、それら遺構の主体的な年代から10世紀前半の年代観が得られる。これらを要約すると、後田遺跡出土の軒丸・平瓦、藪田遺跡平瓦について、8世紀前半から中頃が、続いて、洞窯跡・森下遺跡の平行叩のある平瓦に8世紀終末から9世紀前半が、次に、前中原遺跡の丸瓦について10世紀前半の年代があたえられ、この順列が変遷順である。

### 3 藪田遺跡出土瓦の存在意義

藪田遺跡の出土瓦の存在に重要な意義がある。

- ① 現状では、利根郡出土瓦の中では最も古く、8世紀前半の年代があたえられる。このことは、藪田遺跡など窯跡関連を含む月夜野窯跡群の開窯期は現状において8世紀第3四半期とされているが、さらに遡ほることが示唆され、同時に、その段階の窯跡が周辺に想定される。
- ② 後田遺跡出土瓦の製作地は、月夜野窯跡群内で焼造されたものと推測されていたが、細かい格子叩目の共通性から藪田遺跡周辺の窯跡で製作された可能性が高くなり、製作地域が、より厳密に想定できるようになったのである。
- ③ 月夜野窯跡群の成立は東国経営に伴う国家的な設置と類推され、製作された9世紀代の須恵器の一部に、西毛地域にある秋間窯跡群等に反映した器種が含まれていることから、西毛地域の背後的影響者であった物部氏系の勢力の進出があったと考えられるが、それに先だつ8世紀代において、月夜野窯跡群の造瓦組織の主体的な影響者は、上植木、雷電山系の藪田遺跡出土瓦が示すとおり、その系統の主体的影響者であった上毛野氏系勢力の介在を知ることができるのである。瓦類から見て、当初は上毛野氏系が影響下を、後に物部氏系の影響下に置かれたと類推された傾向は吾妻郡についても同様である。

以上、月夜野窯跡群は、洞窯跡の発掘調査にはじまり、藪田東遺跡において粘土採掘<sup>注10</sup>が検出され、藪田遺跡、前中原遺跡では工人集落<sup>注8</sup>が調査された。さらに群馬歴史考古同人会による踏査<sup>注11</sup>でより総合的な把握ができるようになった。その中で須恵器生産に関する検討<sup>注13</sup>はなされたものの、瓦類に関する検討はなされていないので、本稿は、その点を意識したつもりである。ようやく、月夜野窯跡群に関する大项目的な内容が出揃い、窯煙たなびく往時の姿を推測しうようになった。総合理解のためにはそれらの資料をぜひ参照していただきたいし、それら資料の照会に対応する意志のあることをもって文責としたい。

#### 注

- 1 (群馬歴史考古同人会)『第2回 関東古瓦研究会 群馬県資料No.1』 1981、11  
(群馬歴史考古同人会)『第2回 関東古瓦研究会 群馬県資料No.2』 1981、11  
(群馬歴史考古同人会)『第3回 関東古瓦研究会 群馬県資料No.3』 1982、1 に集成されている。
- 2 ((財)群馬県埋蔵文化財調査事業団)『後田遺跡見学会資料』 1982、12
- 3 中沢 悟 「天代瓦窯跡周辺の考古学的環境」『天代瓦窯遺跡』(中之条町教育委員会) 1982

- 4 大江正行・川原嘉久治 「天代瓦窯跡存在の意義をめぐって」『天代瓦窯遺跡』（中之条町教育委員会） 1982
- 5 本稿で扱った系統観、年代観は(4)による。
- 6 大江正行・中沢 悟 『金井廃寺遺跡』（吾妻町教育委員会） 1979
- 7 飯塚正治 「中之条古窯跡群」『天代瓦窯遺跡』（中之条町教育委員会） 1982
- 8 大江正行 「瓦類」『十二原・大原・前中原』（(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団）1981
- 9 井上唯雄 『群馬県利根郡月夜野洞窯跡発掘調査報告』（月夜野町教育委員会） 1973
- 10 原 雅信・中沢 悟 『藪田東遺跡』（(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団） 1982
- 11 (群馬歴史考古同人会) 『土器部会研究資料No.2』 1983
- 12 大江正行 「金井廃寺の存在意義をめぐって」『金井廃寺遺跡』（吾妻町教育委員会） 1979
- 13 中沢 悟 「月夜野窯跡群の概要」『埋文月報 No.42』（(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団） 1984、5

## 7 中世～近代の陶・磁器

### 1 陶・磁器の選択について

当遺跡における中世～近代陶・磁器の出土総量は850点であった。これらは調査区内から出土したものを主体とし、排土中からの表採資料もわずかながら含んでいる。その年代幅は鎌倉時代の舶載陶・磁器から近世・現代の長きにわたるものである。

これらの破片をすべて掲載することは紙面と整理労力の都合上、実施出来ず選択を余儀なくされた。そこで、中世陶・磁器と考えられる破片は、すべてを掲載し、近世遺物は江戸時代前期と考えられる破片のうち実測可能な個体と、稀少性の高い破片についてのみ掲載した。総数は全体の約1.5割に当たる121点を扱い、一括性の高い組合せ、接合率の高い個体も重視した。なお、同時性の高い中・近世の土器類は214頁に記載があり参照されたい。

### 2 観察について（第158～166図、図版130～143、第4表）

観察に当っては、一率、均当な意識で観察する意図から、一覧表を作成した。それが第4表の陶・磁器一覧である。項目立ては、出土陶・磁器の特徴が現れるよう配慮したつもりである。番号は、実測図番号と写真番号が一致し、通番とした。器種は磁器・陶器という焼物種名称と器種・釉種とを併記した。出土位置は遺構名称、出土層位も明記した。層位名は標準土層番号に一致している。量目の項に記入された数値の大半は復元測値で、単位はcmで表した。胎土は、その色調を記入した。磁器の場合、胎土の定義は純白でなくてはならないが、磁質の個体の中に灰色から褐色をおびるものまであり、それらについては磁器を焼造する製作意図が認められれば磁器としたが、陶器の中に磁器に似せた一群があり、陶質磁器と呼んで一区分した。焼成は見た目での焼上がりを目録し、釉調は、概ねその色調をとらえた。特徴・釉調・備考欄に釉色記述をしたが、その中に砧手、透明釉、飴釉、長石釉、白磁釉、鉄釉など伝統的に呼称されている名称は一般理解のために使用している。備考欄は製作地の推定ないしは作調から見た製作系統と製作年代を記入した。製作地系統については、同定的な意味合いではなく、系統の淵源地をさしている。

### 3 観察結果

<sup>注1</sup>  
中国青磁は第158図1～7に示した7点がある。鎗手蓮弁文碗が3～5である。いずれも南宋の龍泉窯系とされる13世紀の製作である。7・9は元代の龍泉窯製、碗・鎗手蓮弁文鉢で、砧手の発色を呈

し、優れた出来である。8の青磁碗は肥厚化が顕著で元代の龍泉窯系かと考えられる。明代の製品には、このほか白磁と染付である青花が存在する。白磁は<sup>注2</sup>1・2がある。青花は<sup>注3</sup>第159図10～14の5点の皿類があり、景德鎮窯系の製品である。発色は明代後半以降の景德鎮窯青花特有な藍色の呉須と淡い青色の白磁釉が施されている。高台部を残す13・14の端部は、施釉の削り落しの際に生じた素地・釉の境目が明瞭で生掛の手法を認めることができる。舶載陶・磁器の出来は、砧手の7・9を除外すれば沈んだ色調で作調は低い。白磁も型物で粗製であり、量産的な側面を伺うことが出来る。青花は全体的に発色が良く、特に14の作調は端正である。

渥美・常滑焼など中世焼締陶器の破片は一切、見られなかったが、出土量の少なさは北毛地域全体の地域傾向であり、むしろその方が一般的なのかもしれない。代って瀬戸・美濃焼<sup>注5</sup>などの中世施釉陶器が存在する。

瀬戸焼は、13・14世紀の目が詰み、重みのある特徴的胎土の個体は第161図53が1点あるに過ぎなかったが、目が荒く瀬戸焼きか美濃焼きか判然としない後代の瀬戸・美濃の一群は量的に多い。

美濃焼は<sup>注5</sup>第160図15～31、第161図35・36の18個体があり、そのうち中世に置かれる例は15の碗、28の灰釉皿、30の灰釉菊皿があり、15・30が16世紀前半、28が後半の所産と考えられるがこの段階の出土量は多くない。瀬戸・美濃は16世紀の所産と見える第161図43の鉄釉皿、47の灰釉皿がある。

17世紀代に至ると前半は前代に似た傾向があり、後半以降の出土量は急増し、当遺跡における新たな生活展開と、美濃大窯以降の量産化あるいは近世主要陶・磁器窯の量産化の反映を窺うことが出来る。このため陶・磁器片総数850点のうち830点が近世以降の陶・磁器と見なされる。

17世紀代前半の製品として美濃焼には第160図16・17の鉄釉碗、25・26の長石釉皿、第161図35の鉄釉碗など小形製品が多く、いわゆる天目茶碗が少なくとも3個体以上、出土した点は注目される。美濃・瀬戸では第161図44の皿がある。磁器では初期伊万里の第162図56の皿、やや後出の57・58の小碗・猪口がある。後半では美濃焼の第160図19・24の碗・皿があり、美濃・瀬戸では第161図34・38・40・42・45など碗・皿がある。磁器は増加傾向にあり、第162図65・66の碗・徳利が見られ、この段階に唐津系陶器の顕著な進出があり、第163図71・72・81の碗類、さらに17世紀の前半か後半か細分の困難な第164図90～92・95・96・98など見込を蛇目に釉落して皿類などが多用されている。皿類見込部の蛇目釉落しの技法を伊万里系磁器の変遷<sup>注7</sup>と比較すれば、伊万里系磁器においては18世紀前半に展開しているため、本項で扱ったこれら皿類の製作時期を17世紀代に置いたことと矛盾が生じる。理由は、県内遺跡例において磁器の多用は18世紀に多くなり、唐津系皿は減少傾向にあることから前代の17世紀に含めたためである。

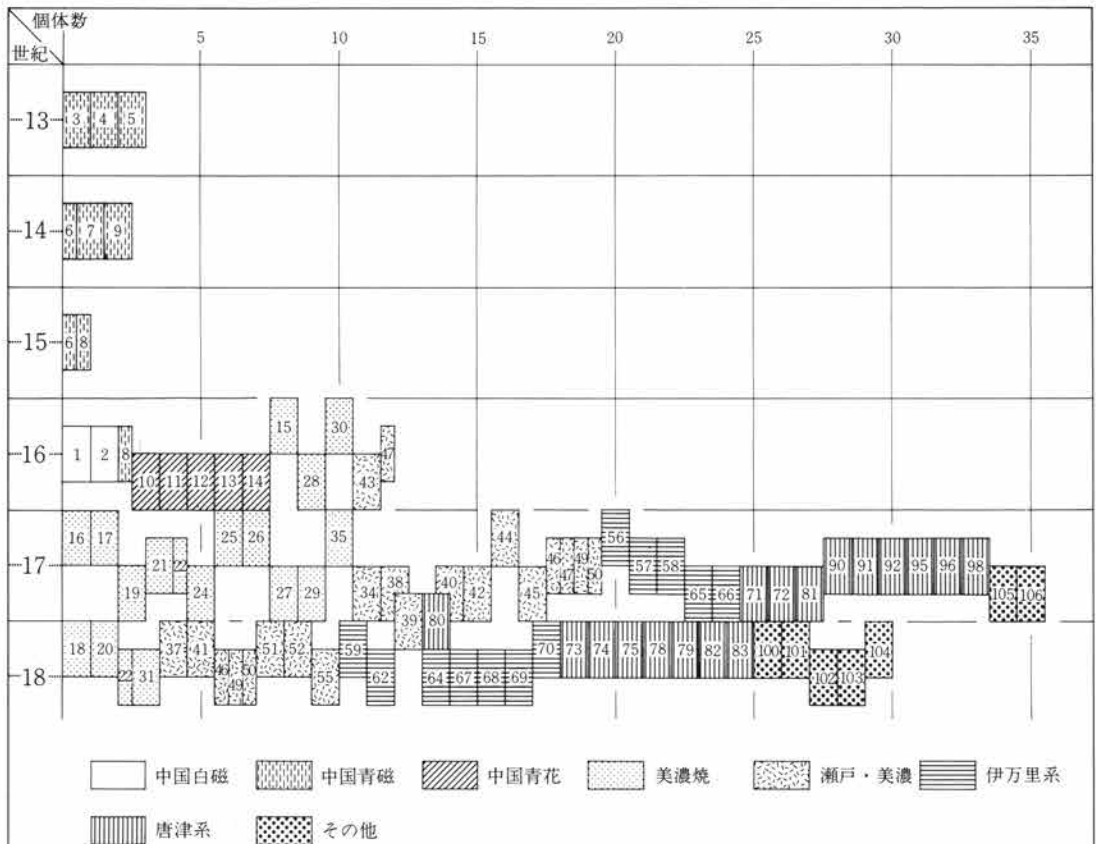
18世紀代は前代の17世紀代に主体を置く、美濃焼、瀬戸・美濃の一群が激減し、伊万里系、唐津系などの依存度が高まり、唐津系の頻度は17世紀代とほぼ似た傾向にあるが、後半以降、急減する。18世紀代の美濃焼には第160図18・19・22・31の碗・皿類があり、量的には極端に減少するが、瀬戸・美濃の一群は17世紀代と同様に数量は多く、第161図37・41・46・49～52・55など主として碗・皿があり、その中に55の汁注が含まれる点は注意される。伊万里系の磁器は第162図59・62・64・67～70があり、仏飯器・油壺など特殊な器種も一般浸透しているのが窺える。唐津系は第163図73～75・78・79・82・83など碗類に限定されてしまうが、時期判別の出来なかった片口・皿なども含まれるかもしれないし、

先の蛇目釉落しの皿類の一部がおよんでいた可能性もあろう。このほか陶質磁器碗が多用されている。第164図100～104の形態は体部下半が張り、上半が直口した碗であるので18世紀代に含めた。この一群は当遺跡における18世紀代の唐津系と伴にもたらされたのではなく、染付磁器の多用化に伴って流通していたものと思われる。

#### 4 出土陶・磁器から見た遺跡の消長（第198～200図）

敷田遺跡における掘立柱建物群は構築時期が不明瞭であるので本項は整理担当から、陶・磁器の検討によるアプローチをもって構築時期推定に寄与せよとの申し入れがあり、それを目的とし、以下に触れたい。

遺構の消長を知る必要から第198図のグラフを作成した。年代軸を上・下に置き、出土量を左・右に取った。グラフの作成にあたり配慮した点は次のとおりである。扱った幅は掘立柱建物が一般的であった中世から江戸時代前半までとし、年代軸は世紀区分、さらに前・後の細分を行い、時期推定も二世



- 数字は個体番号を示す。
- 未掲載の個体は23、32、33、36、48、53、54、60、61、63、76、77、84～89、93、94、97、99、107～117（30個体）である。
- 18世紀後半以降は未掲載である。
- 13～16世紀の遺物はすべて掲載したため、本図の信頼度は高いが、17・18世紀代の陶・磁器片のうち、時代判定困難な破片については、掲げていないので信頼度は極端に低い。
- そのほかの前提は、本文にしたがわなければならない。

第198図 中・近世陶・磁器の世紀別出土量

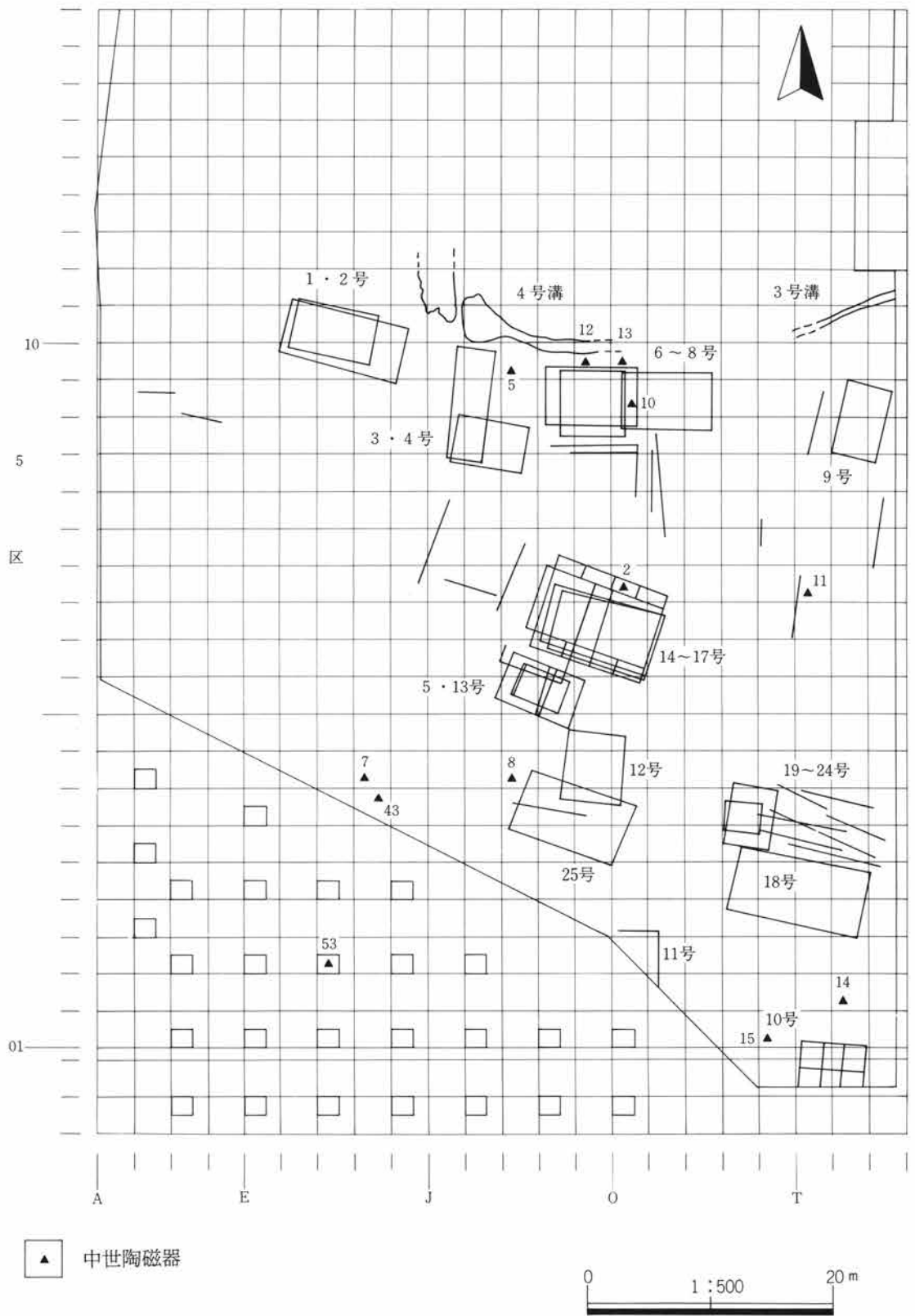
紀以上にまたがることを極力、避けた。第198図に用いたNoは各個体番号に一致する。記入の方法は、<sup>注5</sup>世紀の前半・後半に区分しうる変遷観のある美濃焼、瀬戸焼、伊万里系磁器については、それを拠所としたが、舶載磁器、唐津焼については編年観に明瞭でない一側面があるため概括的とならざるを得なかった。中国青花については当遺跡出土とほぼ同じ一群が16世紀後半に招来された<sup>注3</sup>として時期が示されているので従った。このため大まかな年代観とならざるを得なかった個体は、各世紀の中央に置き、二世紀のどちらかに属すか判断できなかった場合には0.5個体ずつ各世紀に配分した。また世紀の過渡的な個体は二世紀目盛上に置かざるを得ず、跨らせて記入した。

さらに整理班に依頼して出土位置分布と接合関係を示す第199・200図を作成してもらった。ベースは中・近世掘立柱建物群の配置図である。作成の意図は出土陶・磁器片と掘立柱建物群との関係を知るためである。以下、第199・200図から得た所見について触れたい。

13世紀は3個体あり、13～15世紀間における小頂点となっているが、分布に集中傾向がないため、後代に伝世した可能性もあり、小頂点を生活の反映として捉えてよいかは疑問である。県内の出土例では<sup>注14</sup>古墓に直結する中世青磁碗は今のところ認められず、当遺跡の場合も、およそ生活関連としてよいであろう。しかし、中世前半の当地域における住居は、柵列や特殊な場合を除き掘立柱建物が<sup>注15</sup>中心ではなかったであろうとされ、当遺跡において、仮りにその生活が13世紀代にあったとすれば掘立柱建物の可能性は低いと推考される。

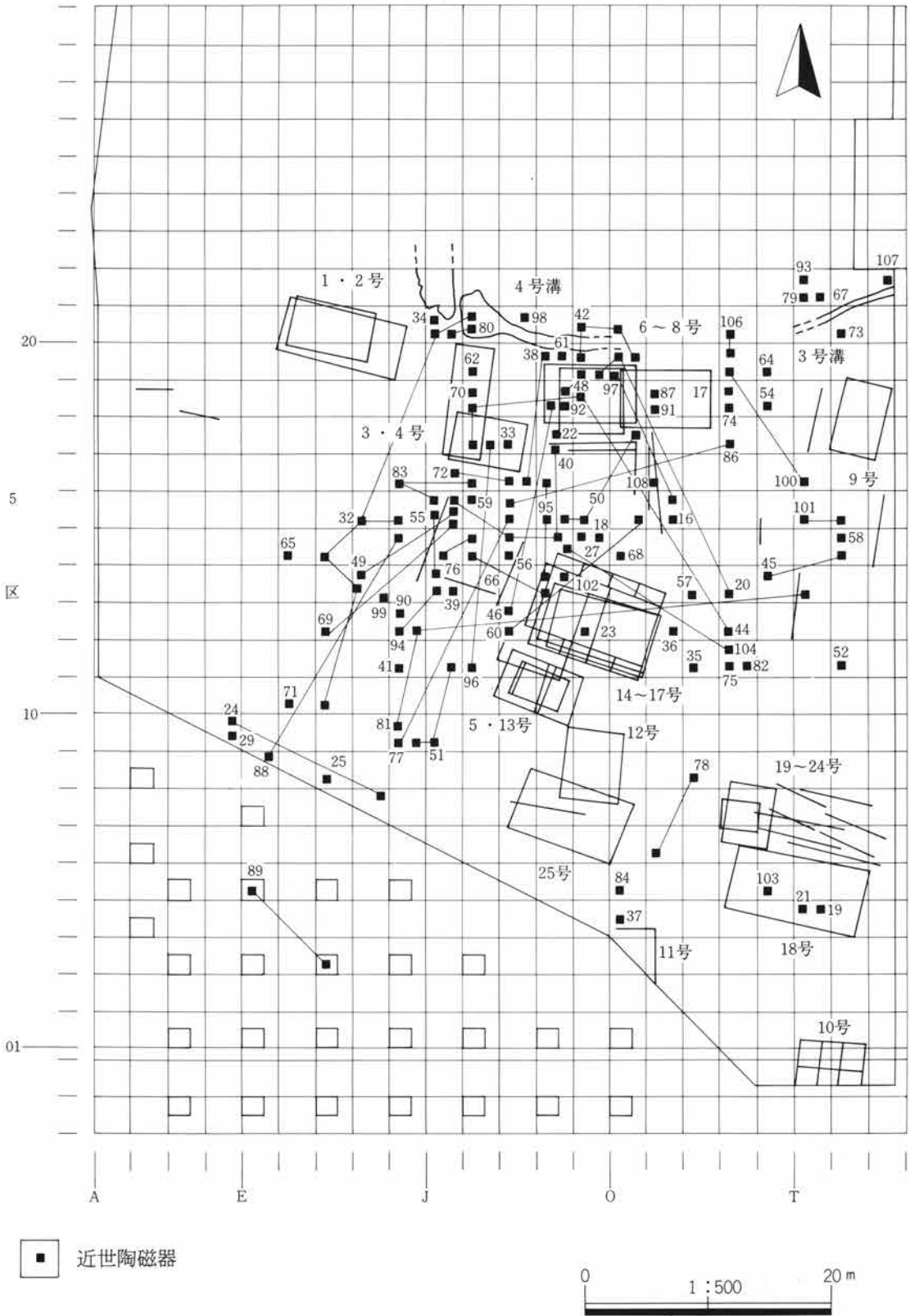
16世紀には白磁2、青磁0.5、青花5、美濃焼3、瀬戸・美濃1.5の計12個体分の出土があり、前代の15世紀が2個体であったのと比べれば、ここに新たな生活展開の始まりが認められる。出土遺物のうち、中国青花は稀少遺物例で、県内では大胡城址1点、歌舞伎<sup>注9</sup>遺跡1点、後田遺跡1点、名胡桃<sup>注11</sup>城址1点、太田浜町屋敷内遺跡<sup>注12</sup>9点の出土例があり、現在まで30遺跡例以上を数えた中国陶・磁器出土の遺跡数からすれば中国青花の存在がいかに少ないか理解されよう。当遺跡の器種は県内で未見であった碗と中形の端折皿が新たに含まれ、その使用者に特権階層が想定できる。16世紀代の遺物の分布は、掘立柱建物群の北半にまとまりを見せる。それに近接して建物軸方向が異なり、柱穴規模の大きな6～8号の掘立柱建物があり、調査者によれば南半の一群より遡りうる可能性が指摘されており、青花3点、青磁1点の分布状況からすれば、伴う可能性は充分にあらう。この4点に同時性があれば、青磁等は伝世したことになる。単独の掘立柱建物である10号に近接し、16世紀前半の美濃焼皿、16世紀後半の青花の小片が出土し、10号も中世に存在した可能性を考えておきたい。

17世紀も前代に生じた生活の延長は認められ、さらに拡大化の傾向がある。拡大化としたのは、美濃焼における<sup>注5</sup>量産化は16世紀の美濃焼大窯の段階において始まっているが、当遺跡出土の個体は3点と、少量しか出土せず、生活が思いのほか小規模であったと推定でき、このことと比較した場合の拡大化である。前代に特権階層の存在を指摘したが、17世紀代も延長像を認めることが出来る。第162図56に初期伊万里皿とそれに後続した段階の58・59が存在するからである。県内における初期伊万里の出土例は皆無に等しく、本例は極めて特異であり、このほか17世紀代の伊万里系磁器が多く存在するのも財力的一端を反映するのであらう。17世紀代における陶・磁器片の分布は掘立柱建物群と重複するよりも建物の周辺から出土する傾向にある。我々の概念は古代の竪穴住居址から出土する土器の在り方から、住居と生活遺物は同一場所に存在するという固定観念をあてはめがちである。いつの時



第199図 中世陶磁器出土位置図





第200図 近世陶磁器出土位置図

代においても破損し、不必要となった用具は住居外に廃棄するのが常であり、当遺跡における掘立柱建物と出土陶・磁器の分布が際立って一致しないのはそのためであろう。このため、6～8号の掘立柱建物は17世紀後半までには廃絶していたらしく、17世紀代の22・38・40・91・92などが、その内部と周辺から出土している。さらにそれらの接合率も近接して高く、廃棄可能な空間であった可能性をより高めている。17世紀代の遺物分布の全体傾向は北西側に多く、南西側に低い傾向にある。17世紀代はもともと陶・磁器の依存頻度が後世よりも高くないことを思えば、18世紀代の分布密度より一層高めに見立てておく必要があり、多目に考えた場合、その傾きは1～4号の掘立柱建物に接近している。このため4基の建物は17世紀代に機能した可能性があるが脚色・検討しなければ答えが出せない状態は、無理が伴うので若干の可能性ありとしておきたい。この一群に近接して18世紀代の陶・磁器片も混在しているのでまとめることのできなかつた掘立柱建物のうち、H～K-15～18周辺に当該期の建物の存在もありうるであろう。さらに5・13～17号のいずれか、あるいはL～P-10～14間に想定される未認知の建物が17世紀代であったらしく、西方に近接して分布がある。

18世紀代も前代との間に空白は認められず、生活の延長は続くものと見なされる。出土陶・磁器の分布傾向は掘立柱建物1・13～17号の周辺に傾きを感じられ、18世紀代の機能がわずかながら唆される。掘立柱建物9号の周辺には18世紀代の陶・磁器片の分布があり、18世紀代に機能した可能性がわずかながらあろう。掘立柱建物12・18～25号は陶・磁器分布に顕著な傾向がなく存続時期の推定は困難であった。

さらに掘立柱建物群の消滅に至るまで検討を加えたかったが、整理期間と時間的都合から実現できなかったことを読者に対しお詫びしておきたい。

## 注

1. 亀井明德 「九州出土の宋・元代陶磁器の分析」『考古学雑誌58巻4号』 1973  
上田秀夫 「14～16世紀の青磁碗の分類」『貿易陶磁研究 No.2』（日本貿易陶磁研究会） 1982
2. 森田 勉 「14～16世紀の白磁の型式分類と編年」『貿易陶磁研究 No.2』（日本貿易陶磁研究会） 1982
3. 小野正敏 「15・16世紀の染付碗・皿の分類と年代」『貿易陶磁研究 No.2』（日本貿易陶磁研究会） 1982
4. 赤羽一郎 「常滑」『世界陶磁全集3 日本中世』 1977
5. 檜崎彰一 「美濃古陶のながれ」『美濃古陶』 1980
6. 狭義のくらわんかは見込に釉掻の蛇目のある碗・皿をさして呼ばれているが、広義では粗製の庶民雑器をさして呼ばれている。ここでは広義の意である。
7. 近世磁器の年代観は大橋康二ほか 「肥前陶・磁の変遷と出土分布」『国内出土肥前陶磁』（九州陶磁文化館） 1984による。
8. 「長楽寺遺跡」（尾島町教育委員会） 1978
9. 大江正行・飯田陽一 「群馬県出土の中国陶磁」『関東の中国陶磁』（群馬県立歴史博物館） 1982
10. 『歌舞伎遺跡』（群馬県埋蔵文化財調査事業団） 1982
11. 『後田遺跡見学会資料』（群馬県埋蔵文化財調査事業団） 1982
12. 「城平遺跡」『城平遺跡・諏訪遺跡』（群馬県埋蔵文化財調査事業団） 1984
13. 『浜町屋敷内遺跡C地点』（群馬県埋蔵文化財調査事業団） 1985
14. 『大葬墓分科会研究資料 No.1』（群馬歴史考古同人会） 1982に集成されている。
15. 大江正行 「吹屋館址の調査所見とその検討」『元島名・吹屋』（群馬県埋蔵文化財調査事業団） 1982

## 8 藪田遺跡出土の印章

本遺跡から銅印1点・土製印1点・烙印（焼印）1点が出土している。この中の銅印・土製印については同種の遺存資料および出土例を参考にすると、奈良～平安時代に使用されたものである可能性が高い。この時代、つまり律令制度による支配の下で印章は「印ノ用ト為スハ実ニ信ヲ取ルニ在リ、公私此レニ拠リ嫌疑ヲ決ス」と述べられているように、公文書に押捺されることによって支配権限の所在を明らかにするものとしての役割を担っていた。

群馬県内においても、本遺跡のもの以外に印章の出土・採集されたものは6例あるが、銅印と土製印とが同一地域から出土した例はまだ報告されていない。この点でこれら印章の出土は、本遺跡の性格を特色づけ、さらに周辺地域の社会的状況を推測する上で興味深いものであると言える。

### 1 律令制度と印章

律令条文の中に印章の種類・規格・用途についての規定が見られる。これは公文書に押捺する官印と官の馬牛に押す烙印である畜産印とに分かれる。そこでまず官印についての規定をみていく。

養老公式令天子神璽条 天子神璽。謂。踐祚之日寿璽宝而不<sub>レ</sub>用。内印。方三寸。五位以上位記。

及下<sub>レ</sub>諸国<sub>レ</sub>公文則印。外印。方二寸半。六位以下位記。及太政官文案則印。諸司印。方二寸二分。

上<sub>レ</sub>官公文及案。移牒則印。諸国印。方二寸。上<sub>レ</sub>京公文及案。調物則印。

同 行公文皆印条 凡行<sub>レ</sub>公文。皆印<sub>レ</sub>事状物数及年月日。并署。縫処。鈴伝符剋数。

養老賦役令調皆随近条 凡調皆随<sub>レ</sub>近合成。絹施布両頭。及絲綿囊。具注<sub>レ</sub>国郡里戸主姓名。年月日。各以<sub>レ</sub>国印<sub>レ</sub>々之。

官印には神璽、内印（天皇御璽・方三寸）、外印（太政官印・方2.5寸）、諸司印（中務之印など・方2.2寸）、諸国印（上野国印など・方2寸）があり、これらは諸国への下達文書や中央官司への上進文書、官人の位記、京へ運ぶ税物に押捺された。押印する個所については、本文・年月日・署名の部分、さらに料紙の継ぎ目などと定められていた。また税物である布帛には、国郡名・提出者名・年月日の<sup>注1</sup>記入とともに国印が押捺された。これらの官印は銅製であった。

次に畜産印についてみていく。

養老厩牧令牧駒犢校印条 凡在<sub>レ</sub>牧駒犢。至<sub>二</sub>歳<sub>一</sub>者。毎<sub>レ</sub>年九月。国司共<sub>レ</sub>牧長<sub>レ</sub>对。以<sub>レ</sub>官字印<sub>レ</sub>。印<sub>レ</sub>在<sub>レ</sub>髀上<sub>レ</sub>。犢印右<sub>レ</sub>髀上<sub>レ</sub>。並印<sub>レ</sub>訖。具録<sub>レ</sub>毛色齒歳<sub>レ</sub>。為<sub>レ</sub>簿<sub>レ</sub>両通<sub>レ</sub>。一通留<sub>レ</sub>国<sub>レ</sub>為<sub>レ</sub>案。一通附<sub>レ</sub>朝集使<sub>レ</sub>申<sub>レ</sub>太政官<sub>レ</sub>。

これは官牧で飼育される駒や犢に、「官」の字の烙印をすることを定めたものである。この印の規格については、律令条文にその規定はみられない。恐らく鉄製であったとみられる。

この官印・畜産印は、大宝元年（701）に諸国に使者を派遣し、新令（大宝令）によって政務を行なうことが告げられ、同時に「新印様」が頒布されていることから、この頃に制度化されたものと見られる。しかし、それが実施されるには相当の期間を要し、慶雲元年（704）に鍛冶司に「諸国印」を铸造させ、同4年（707）に摂津等の23ヶ国に牧の駒犢に押す「鉄印」が給付されている。これらの印章は律令制度による支配の象徴でもあり、その管理は厳重になされていて、これを盗んだ場合の罰則も定

められていた。<sup>注2</sup>

また官印は長期間使用されたために印面が磨損した場合には、新たに鑄造されたものが中央政府より給付されるようになっていたようである。<sup>注3</sup>

以上の律令条文に規定される官印・畜産印の外に、節度使印・鎮守府印・僧綱印・寺院印・穀倉印などのあったことが史料の上から知られる。また奈良～平安時代の文書に押印された使用例からは、前述の官印以外に国倉印・郡印・私印（家印・個人印）のあったことがわかる。さらに遺存する銅印には国倉印・郡印・郷印・軍団印・寺院印・神社印・私印などがある。律令条文で定める以外にも、それに準ずる形で支配機構の単位ないしは機関ごとに各種の印章が使用されていたことが知られる。<sup>注4</sup>

次にこの令制外の私印について少しみておく。私印の早い例としては天平宝字2年(758)に藤原朝臣仲麻呂が惠美押勝を名告った際に「惠美家印」を用いることが許されている。また正倉院宝物の文書の中には「積善藤家」(光明皇后)・「内家私印」・「丸部足人」・「画師池守」など、家あるいは個人を示す印章の使用されている例があり、奈良時代には貴族層を中心に私印が使用されていたことが知られる。しばらく後の貞観10年(868)6月28日の太政官符「応令封家用印事」によると、この頃「有勢諸家」が私に印を鑄造し、中央官司に送達する文書以外の場合これを押捺することが習慣化していた。また、これより以前にそれぞれの封家の調庸雑物の扱いには捺印することとされていたが、この制度が周知されていなかったため混乱が生じていた。このため諸封家は印を用いることとし、その規格は「一寸五分」を限度とすることが定められた。<sup>注5</sup>これは公式令に定める諸国印の方2寸より小さい。さらに畜産印についても、延暦15年(796)頃には既に私印が使用されていたことが知られる。遺跡から銅印の鑄型が出土する例のあることから、私印の中には中央官司より給付されるものでなく、各地域で鑄造されていたものがあったことが知られる。<sup>注6</sup>

## 2 古代上野国関係の印章

群馬県に關係する古代の印章について、出土・採集による原品を中心にとり上げていく。

### (1) 高崎市矢中村東遺跡出土銅印「物部私印」(第201図7)

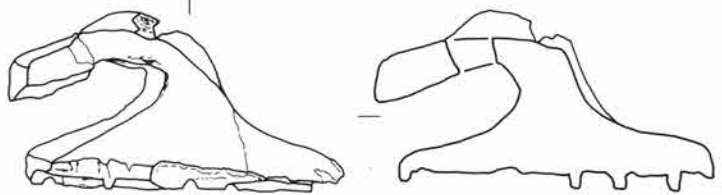
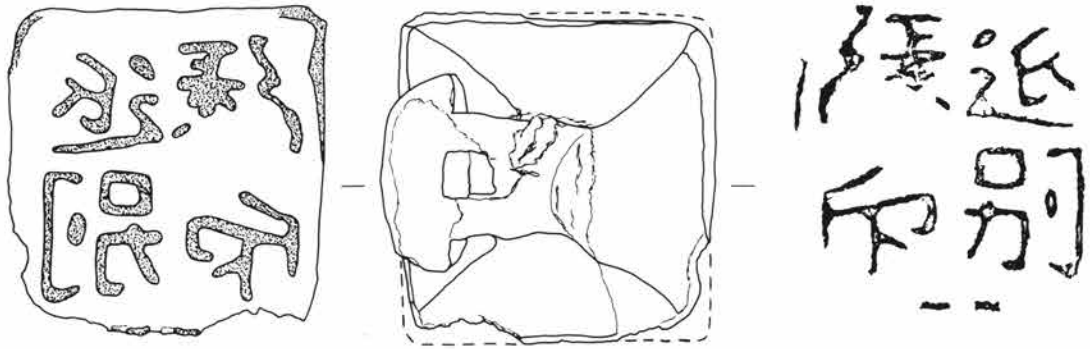
浅間山B軽石(天仁元年<1108>降下)層下で検出された小型水路の最下層から銅印1個が出土した。印面は方3.7cm、全高4.2cm、鈕は5稜から成る蒼鈕(鶏頭型)で中央部に円形の孔が設けられている。印文は周縁を隆線で四角に囲んだ中に楷体で「物部私印」と4字がある。印面の奥の方には朱色の付着物が残存する。<sup>注7</sup>「物部私印」とあることからしても物部家を使用した私印であることは明らかであり、寸法は貞観10年の太政官符で定められた1.5寸(約4.5cm)以内であることに合致している。

神亀3年(726)の年号をもつ金井沢碑には、群馬郡に居住していたと見られる「物部君午足」・「磯部君身麻呂」の名が見られるほか、天平神護元年(765)には甘楽郡の人である物部蜷淵ら5人が、また同2年(766)5月には甘楽郡の人である磯部牛麻呂ら4人が物部公の姓を与えられている。平城宮跡出土木簡の中に「上野国緑野郡小野郷戸主物部鳥麻呂 ○後略」があり、同じく上野国の関係者を列記したと見られる木簡の中に大伴・額田部と並んで「物部君万呂」の名が見られる。上野国分寺跡出土の文字瓦の中に「山字物部子成」などがあり、これは多胡郡山字郷(山部郷の改名と考えられる)

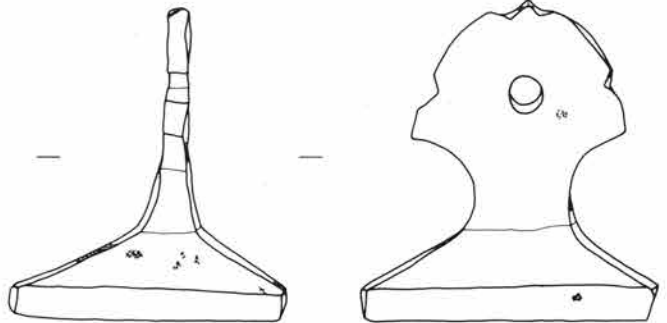
を本貫とする物部氏の在ったことを示している。時代は異なるが仁治4年(1243)の年号をもつ仁治の碑(富岡市下高尾所在)にも「物部国安」の名が見られる。以上の史料から物部氏は群馬・甘楽・緑野・多胡郡を本貫地とし、一族の中には中央政府の官人となる者もあり、長くこの地域に力をもった有勢氏族であったことがわかる。

(2) 利根郡利根村大字高戸谷字小沢採集銅印「□長私印」

片品川河川敷にある菌原ダム管理支所片品川水位観測所の導水路にたまった土砂中より発見されたものである。印面は方4cm、現高1.5cm(鈕を欠損)、鈕の欠損部は研磨された形跡があることから鈕欠損後も使用されていたものとみられる。印文は周縁を隆線で四角に囲んだ中に、やや崩れた楷体で「□長私印」と4字がある。ただ第1字目は現形状では「山」と読めるが、これは他の3字に比べて



1 藤岡市中栗須出土「延別□印」  
(群馬県立歴史博物館蔵)



2 高崎市矢中村東遺跡出土「物部私印」  
(高崎市教育委員会蔵)  
『矢中村東遺跡』1984



第201図 県内出土銅印(1)

小さい。この上・下・右に字画の痕跡が見られることから、これを推定復元した場合「池」・「他」・「地」などが考えられ、その中でも「池」の可能性が強く「池長私印」であろうと判読されている。そしてこれは「イケオサ」と役職名を記すもので、製作・使用年代は平安時代と推定されている<sup>注8</sup>。印文に「私印」とあり、印面の寸法は方1.5寸以内であることから私印であることは明白である。

上野国に関係する人名で姓の1字目に「池」、または2字目に「長」の付くのは「池田」（天平15年〈744〉）、「池原」（延暦4年〈785〉）、「御長」（延暦15年〈796〉・上野介）、また名としては「上毛野池長」（天平20年〈748〉）、「上毛野朝臣上長」（貞観9年〈867〉）、「藤原雄長」（天曆5年〈951〉）、上野介、「県乙長」（長徳4年〈998〉・上野大椽）などが知られる。職名については詳かではなく類例の検討が必要である。

(3) 藤岡市中栗須出土銅印「延別□印」（図版151—(3)）

瓦製作用に同地内から採取された粘土の中から発見されたもので、土練器にかかったため鈕が折れ印面にもかなりの欠損が見られる。印面は天地4.3×左右4.2cm、現高2.4cm（復元全高3.8cm）、鈕最大巾2.7cmを測る。印文は周縁を隆線で四角に囲んだ中に、やや崩れた楷体で「延別□印」の4字がある。第3字目は字画の破損があるが、残存部分の“ヘン”は「糸」とみられ、“つくり”は「録」である可能性が強く、「録」である蓋然性が高い。そうしてみると印文は一応「延別録印」と判読できる。鈕は1稜から成る弧鈕撥型で、現存する国倉印・郡印・軍団印などに近い形状であり、鈕孔も四角型で特異である。印文と形状とから、(1)・(2)が私印であるとは異なり、官印に準ずるもので、年代的にもやや古いものである可能性がある。印面の寸法は現存する郡印・軍団印に近い。

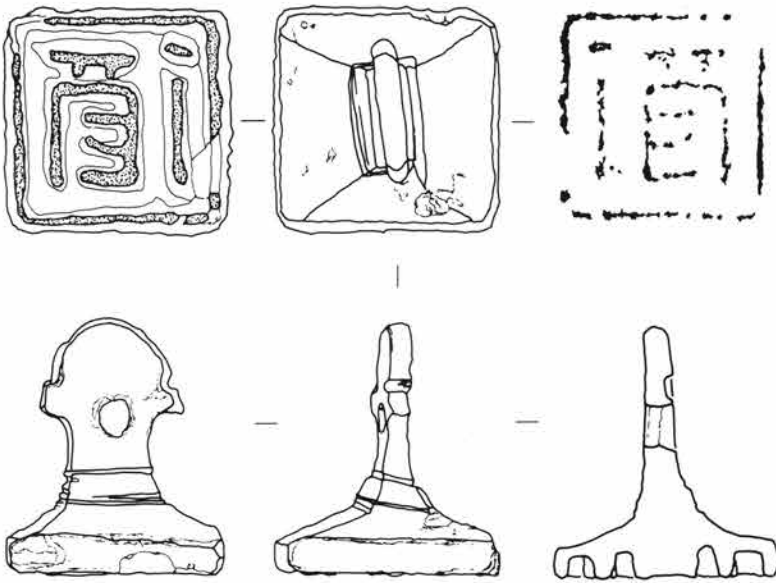
印文の意味については「延別録」がこの3字のみで意味をもつものか、あるいは省略されたものであるのか詳かではなく、類例を俟っての検討が必要である。ただ参考に掲げるならば「延」「別」については聖隆寺を「延暦寺別院」とする（嘉祥3年〈850〉）、「録」については出土地が旧緑野郡内であり、天台宗と関係の深い「緑野寺」が造営されていたことなどの史料がある。

(4) 旧碓氷郡板鼻町（現安中市板鼻町）出土銅印「薤玉大神」

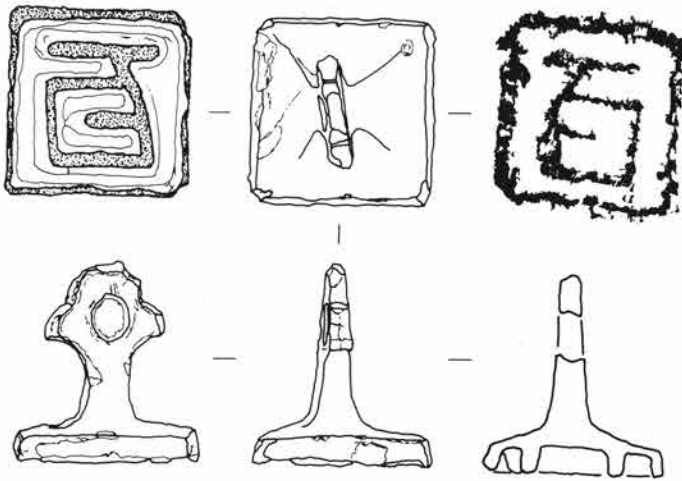
明治26年（1893）に板鼻社廃址より出土したと伝えられ、現在個人の所蔵となっている<sup>注9</sup>。印面は方5.2cm、全高5.2cm、4稜から成る蒼鈕で中央部に円形の孔が設けられている。印文は周縁を隆線で四角に囲んだ中に、楷体で「薤玉大神」と4字がある。第1字目を「薤」に通ずるとすれば「みかたまのおおみかみ」と読み、神社印である。印面の寸法は現存する「大和社印」などに近く、諸国印よりは小さい。貞観10年の太政官符で定められた私印の最大限である1.5寸よりは大きい。神社の公印として用いられたものと考えられ、年代的には平安時代に属するものとみられる。

(5) 前橋市総社町山王廃寺跡出土銅印「酒」（図版151—(1)）

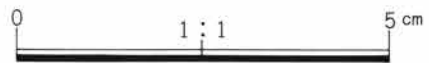
山王廃寺塔跡北方の遺物包含層上面から銅印1点が出土している。印面は方2.7cm、全高3.3cm、鈕は3ないし5稜から成る蒼鈕で中央部に円形の孔が設けられている。印文は周縁を隆線で四角に囲んだ中に、楷体で「酒」の1字がある。鈕の基部にヤスリによって作られた2条の沈線がまわる点に特色がある<sup>注10</sup>。印面の寸法は1寸以下で、遺存する1字の印に近似し、公式令の規定による官印、貞観10年の太政官符に定める有勢諸家の私印（家印）の最大限よりもかなり小さい。私印であり、4字の家印より低い段階で使用されたものと考えられる。年代的には平安時代の類型に属する。



3 山王廃寺跡出土「酒」印  
 (前橋市教育委員会蔵)  
 『山王廃寺跡第5次発掘調査報告書』1979



4  
 富岡市宇田出土「百」印  
 (群馬県立歴史博物館保管)



第202図 県内出土銅印(2)

印文が1字であるものの意味については、人名である場合と官司名を示す場合とが知られている。また人名については、姓あるいは名を示す2つの場合がある。この「酒」に関係する資料には、人名として「酒人人上」(弘仁3年<812>・上野大椽)、「武酒井」(多胡郡武美郷の酒井・上野国分寺跡出土文字瓦)、官司またはそれに準ずる施設としては郡衙の中に「酒屋」のあったことが知られる。<sup>注11</sup>地名としては甘楽郡に「酒甘郷」がある。本品についてはそのいずれとも決め難い。

なお山王廃寺跡周辺から印面は方1.7cm・全高2.0cmで「慶雲」の印文をもち、鈕は動物の形をした銅印1点が採集されている。印文の意味、使用された年代については慎重な検討が必要である。

(6) 富岡市宇田字恵下原採集銅印「百」(図版151-2)

同地の畑地で採集された。印面は方2.4cm、全高2.6cmで、鈕は3ないし5稜から成る蒼鈕で、中央部に円形の孔が設けられている。全体に小ぶりである。印文は周縁を隆線で四角に囲んだ中に楷体で「百」の1字がある。現存する古代の銅印および印影の中では最も小型の部類に属し、私印の範疇に入るものである。年代的には平安時代の類型に属する。

印文の「百」については、人名として「紀百継」(大同3年<808>・上野権介)、また「百濟」氏の存在が参考となる。

以上、県内で出土および採集された印章について概略を述べてきた。これ以外に印章が使用された状態、つまり印影で現在まで残る例、古代の記録の中にみえる場合とがある。

文書に押捺されたものとしては、奈良時代に税物として中央政府に進上された布帛に押された「上野国印」がある。これは賦役令調皆随近条の国印を押捺する規定に準じたものである。また法隆寺蔵の延長6年(928)5月9日の日付をもつ上野国牒では、文面に「上野国印」が17個朱で押印されている。印影は方5.9cmで、公式令の規定である方2寸に一致する。

文書以外に瓦などの粘土製品に押印のされている例が知られる。これを上野国分寺跡出土の瓦を例にしてみる。瓦の成型に伴う格子状の叩目の中に「佐位」・「勢」・「雀」・「藪田」などの文字が陽刻されるもの、「山田」・「山田五子」・「多」など文字のみが陽刻されるものがある。いずれも上野国内の郡・郷名を表わしたもので、木范によったものと見られる。また陰刻されたものには「勢」・「勢□」と文字のみのもので、「罫」と周縁を伴うものがある。前者は郡名を示し、瓦の負担に係わるものと考えられ、木范によったものとみられるが、後者は線が細くて鋭いことから金属製品によったもので、検印など生産過程での意味をもつものと考えられる。

次に古代の記録に見える例を掲げる。延暦15年(796)2月15日の太政官符「定百姓私馬牛印事長二寸広一寸五分以下」によると、上野国司からの上進文で、管内の百姓が官馬を盗んで官の印の上から私印を焼き押しして証拠の隠滅をはかっていることへの対策として、私馬牛印は長2寸・広1.5寸以下とすることが定められた。<sup>注12</sup>このことから厩牧令牧駒犢校印条で定める「官」印字は烙印で2×1.5寸以上であったと推定できる。もう1つは古代の東国社会に動揺をもたらした天慶の乱の中で、天慶2年(937)12月に平将門が上野国府を占拠し、上野国藤原尚範から「印鑑」を奪取したことが知られる。これは「上野国印」と正倉の鑑<sup>かぎ</sup>とで、律令制度にもとづく支配の象徴である。国印を確保することが公権力を遂行する上で必須の条件であったことが窺える。また長元3年(1030)に作成された「上野



国交替実録帳」定額寺項の弘輪寺についての記録の、本来寺に備えられているべき道具で既に滅失してしまっただ品名を列記する中に「銅印壹面」が掲げられている。国司の検閲の対象とされていることから、これは恐らく寺院印であったと考えられる。定額寺に銅印が置かれていたことを示す数少ない例である。

### 3 菟田遺跡出土の印章


本遺跡から出土した印章について、その形状・用途を中心に若干の検討をしてみる。

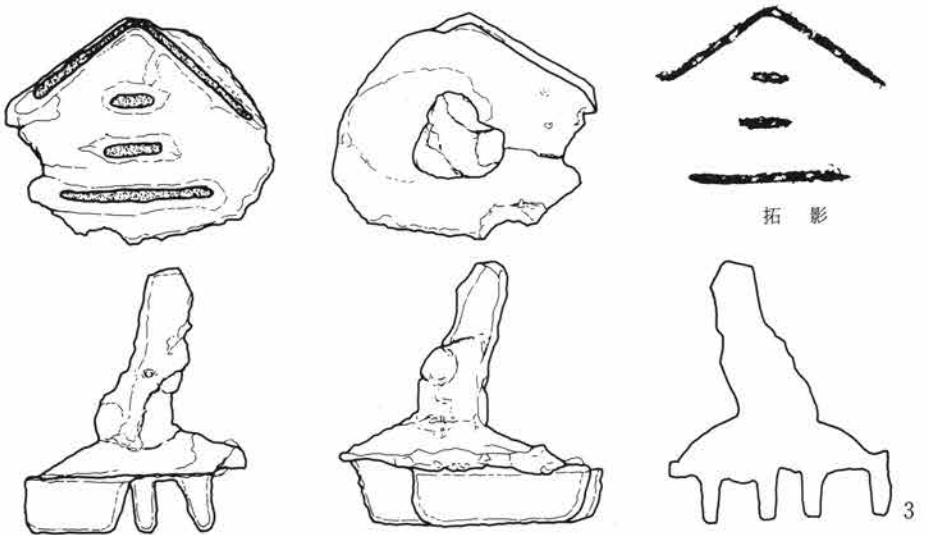
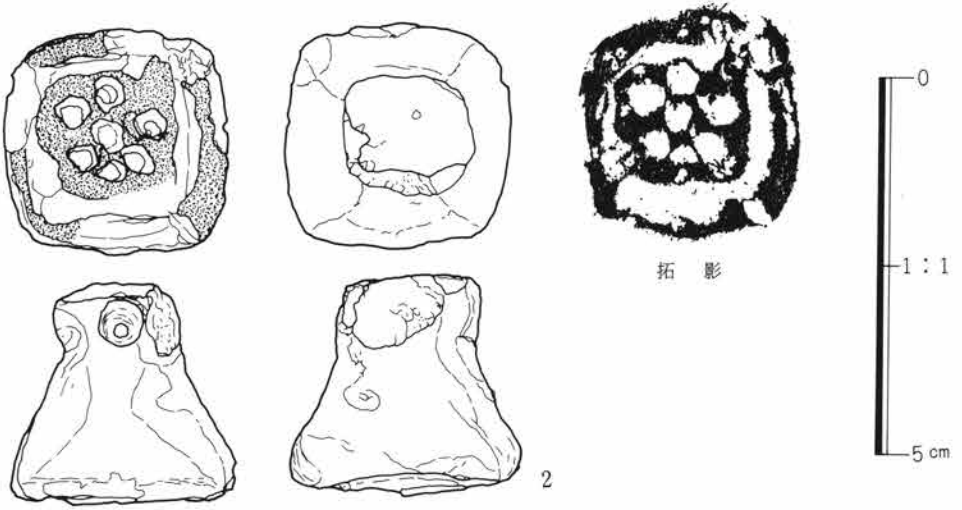
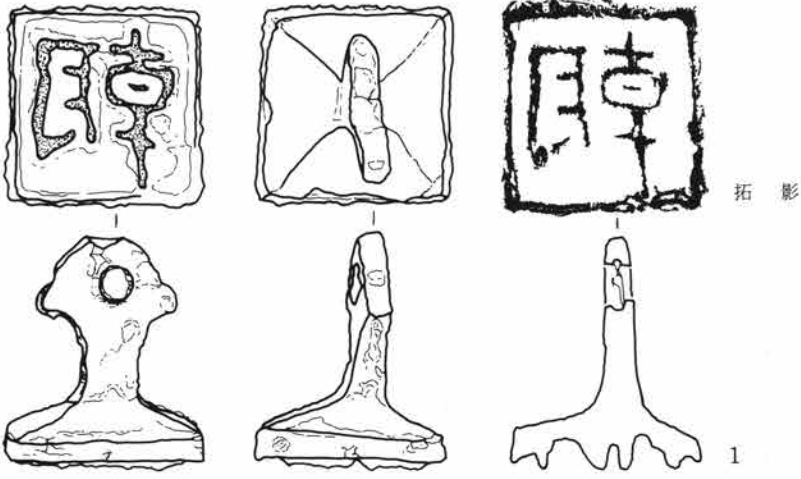
#### (1) 銅印「朝」(第203図1)

印面は天地2.6×左右2.55cm、全高3.1cm、鈕は3ないし5稜から成る蒼鈕で、中央部に円形の孔が設けられている。印文は周縁を隆線で四角に囲んだ中に、楷体で「朝」の1字がある。形状は山王廃寺跡出土の銅印に較べてやや精美さに欠ける。印面の寸法は1寸以下で、遺存する1字印のそれに近似し、公式令に規定される官印および貞観10年太政官符で定める私印の最大限よりも小さい。遺構からの出土ではないため、伴出遺物等から年代を限定することは困難であるが、形状・寸法から平安時代の私印の類型に属するものと考えられる。印面に朱の付着が認められることから文書に押捺されたものであることは明らかである。

印文の「朝」に関しては、上野国に関係する人名では「朝倉君時」(天平7年<735>・女官)・「朝倉公家長」(延暦6年<787>)・「朝野鹿取」(弘仁8年<817>・上野介)・「藤原朝狩」(天平宝字5年<761>・節度使)があり、地名としては郡波郡に「朝倉郷」がある。人名、地名あるいは官職名のいずれであるのかの判断は困難である。

#### (2) 土製印「」(第203図2)

印面は方2.9cmで、周縁に巾2.5～4mmの凸帯部があり、その内側に上面巾2mmで断面V型の沈線によって囲まれた1.6×1.7mmの方形の内区がある。内区には中央の1個を囲むように6個の小穴が作られている。全高は2.8cmで、鈕部は楕円形の断面を呈し短めである。上部に円形の孔が設けられている。印文は銅印のそれが文字を基本とするのに対し、記号ないし文様状である。県内での出土例はまだ知られず、全国的にみても例は少ない。その中で富山県・小杉流通業務団地内遺跡群の第1号窯跡から出土した陶製印章(土製印)が注目される。<sup>注13</sup>印面は方4.2cm・全高7.2cm、鈕は角状の断面を呈し長く、上端近くに円形の孔が設けられている。印面には「」が陰刻されている。この遺構の年代は奈良時代前半とされている。この印は銅印を模倣したものと考えられているが、用途は不明とされている。この窯跡からは粘土板に仏像を陰刻した印仏1点が出土しているが、この裏面にはつまみが付けられており、粘土などに押圧することによって仏像を隆線で表現するためのものと考えられる。そうしてみると土製印も印文は陰刻されており、これも粘土などに押圧するためのものである可能性がある。本遺跡出土の土製印も基本的にはこれと同様であり、印面には朱の付着が認められないこと、紙に押捺するには印面の調整が粗雑であること、紙に押捺した場合(第203図2)より粘土などに押圧した場合(巻頭図版2)の方が文様構成が整っていることなどから、粘土などに押圧するための印章(あるいは原体)とみてよいであろう。その用途を考える場合、先述した瓦への押印の例などが参考となるが、管見の限りではこの文様が押印された製品はまだ確認されていない。使用された年代についての明証はないが、形状・構成要素などは基本的には小杉流通業務団地遺跡群出土のものと相違はなく、奈良～平安時代に属するものと推定される。



第203図 菟田遺跡出土 銅印(1) 土製印(2) 烙印(3)

## (3) 烙印「合」(第203図3)

印面は銅製で、印文は天地2.4×左右3.2cm・台部からの高さ7mmを測る。この本体に断面が方形を呈する鉄製柄が角度をもって接合されている。印文については「ヤマサン」と仮称できるが、意味は詳かでない。これらの形状から、烙印であると判断してよいであろう。

律令制度下の烙印については先述したように馬牛の所属を示すための官印・私印があった。この畜産印は鉄製であり、寸法は延暦15年の太政官符による2×1.5寸が1つの基準となっていた。本品は遺構からの出土ではないため年代の判定は困難である。ただ埼玉県・北坂遺跡13号住居跡出土の鉄製烙印(印文「中」)、神奈川県・中原上宿遺跡出土の鉄製烙印(印文「井」)<sup>注14</sup>がいずれも律令制度下の烙印が鉄製であることに合致し、また印文が文字である点を考慮すると、本品はそれらと基本的な点で相違しており、律令制度下で使用されたものである可能性は低い。県内出土の例として、太田市浜町屋敷内遺跡C地点出土の烙印は、印面は銅製、柄は鉄製、印文は「㊦」であり、近世以降のものであると判断されている。本品は材質・印文が記号様である点でこれと共通する要素を示しており、前述の銅印・土製印よりは年代の降るものであると考えられる。

以上、律令制度下の印章について概観し、次に群馬県に關係する奈良～平安時代の印章について逐一紹介をして、それらと関連する形で本遺跡出土の3点の印章について若干の検討を行ってきた。そこで最初に指摘しておいた銅印と土製印が同一地域から出土しているという点に改めて注意を向けてみたい。銅印は印面に朱の付着が認められることから、文書に押捺されたことがあると考えてよく、土製印は瓦・土器などの土製品に押圧するものであることが推定された。そうしてみた場合、本遺跡周辺<sup>注16</sup>の奈良～平安時代の遺跡の中には窯跡・粘土採取地跡のあることが想起される。土製印はこれらで生産される製品への記号押印用として、銅印はこれに係わる人物の発する文書への押捺用であったと想定することも強ち無理ではあるまい。それには、本遺跡から出土した文字資料として墨書土器の存在にも言及をしておく必要があるであろう。墨書土器は2点あるが、その中の1点は須恵器坏の体部外面の下部に横位置で「□矢」と2字が記されている(図版93)。第1字目は破損部にかかっているため判読が困難であるが残画からは「横」である可能性も考えられる。もう1点は須恵器坏の体部外面の下部に上から下に向って「□乙」の2字、それに続くように底部に<sup>(吉)</sup>「吉継」の2字が記されている。(図版76)。体部の第1字目は、右半部は「リ」であるが左半部は明瞭でない。人名「□乙吉継」と書かれた可能性が高いが、上野国内ではこれに相当する人物は今までのところ知られていない。今後全国的には印章の出土例の増加と、それらを含めた研究の進展に俟つところが大きいと、それと併せて本遺跡およびその周辺から出土する文字資料(例えば墨書土器・漆紙文書)、さらに県下および隣接地域から出土する土製品にも一定の注意を払っていくことが必要であろう。そうすることによって、これらの印章を手懸りとして、本遺跡周辺の律令制度下における歴史的特色を解明するための道筋が開けてくるであろう。

## 注

1. 『延喜式』内匠寮に内印・外印・諸司印・諸国印の材質や工人についての規定が掲げられている。
2. 『賊盜律』神籠条、同・外印条　内印は遠流、外印は徒2年、諸司印・諸国印は杖100、畜産印は杖80の規定がある。
3. 嘉祥2年(849)3月に伊賀国印の印面が磨損したとの申し出に対して、新たに鑄造をして給付がなされている。
4. 奈良～平安時代の印章については、木内武男編『日本の古印』(二玄社 1964)、荻野三七彦『印章』(吉川弘文館 1966)、『書道全集別巻II』(平凡社 1968)、木内武男『印章』(柏書房 1983)に詳しい。

5. 『類聚三代格』文書并印事
6. 例えば、埼玉県大里郡花園町に所在する台耕地遺跡の竪穴住居跡からは印章の鋳型の破片が10点近く出土している。(『関越自動車道関係埋蔵文化財調査報告書—XIX—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1984)
7. 『矢中遺跡(VII) 矢中村東遺跡』高崎市教育委員会 1984
8. 富田 篤・水田 稔『利根村で発見された古代「銅印」』『群馬文化』1984
9. 注4の『書道全集』・木内『印章』による。
10. 『山王廃寺跡第5次発掘調査報告書』前橋市教育委員会 1979
11. 『上野国交替実録帳』諸郡館舎項(『平安遺文』第9巻 第4609号文書、『新編埼玉県史 資料編4』所収)
12. 『類聚三代格』文書并印事
13. 『富山県小杉町・大門町小杉流通業務団地内遺跡群 第6次緊急発掘調査概要』富山県教育委員会 1984
14. 『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告—XI—』埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1981、『中原上宿』中原上宿遺跡調査団 1981
15. 『屋敷内遺跡C地点』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1985
16. 『群馬県利根郡月夜野町洞窟跡発掘調査報告』月夜野町教育委員会 1973、『藪田東遺跡』群馬県埋蔵文化財調査事業団 1982

付記 小稿は本遺跡出土の印章についてとり急ぎまとめた報文である。紙幅の関係で省略をした部分もあり、また関係資料の扱いについても不十分な点が少なくないことと思う。改めて詳述をする機会を得て、さらに検討を深めていきたいと考えている。文末となったが小稿の作成にあたって資料についてのご教示をいただいた佐藤宗諄・田熊清彦・辻 秀人・平川 南の諸氏に厚くお礼を申し上げます。

## 9 藪田遺跡出土の宝篋印塔塔身部分について

### 1 石 質 輝石安山岩

在地の石であろうと考えられるが、産出地については不明。

- ### 2 形 態
- 宝篋印塔身の4分の1、4面のうち2面がそれぞれ半分から割れている。月輪内に胎蔵界4仏が陰刻されている。内側は、下端で1.5cm、上端で4cmの厚さで、10cmの深さでくりぬかれている。その内面は加工が施されている。

### 3 製作年代 室町時代前期～中期(推定)

### 4 所 見

利根郡には群馬県の宝篋印塔ではごく初期に造立されたものが多い。とくに、月夜野町上津塔(貞治2年在銘)、沼田市東光寺塔(応安2年在銘)、水上町綱子塔(永和2年在銘)は、いずれも南北朝時代後半の大型塔で、県内宝篋印塔造塔の先駆的な役割を果している。

この塔は、塔身高14cmほどであることから考えて、総高60～70cmの小型塔と思われる。また月輪の線の太さ、梵字の刻み方などから考えて、応永期以後爆発的に数を増した逆修塔としての宝篋印塔の一つと考えられる。しかし、利根郡には室町中期以降遺物がほとんどなくなることから応永期かそれに続く年代の製作かと考えられる。月夜野町小川島には同型塔が3基あり(ともに無銘だが応永期と思われる)、これと製作年代も同じと考えられる。

この塔身内部はきれいに内ぐりがなされ、納入物があったのではないかと想像できる。宝篋印塔は本来宝篋印陀羅尼経を納入するために造立するという目的をもつが経を納入するという習慣は江戸時代中期以降にならないと類例を見ない。従って、納入物については不明である。

## 10 結 語

藪田遺跡のある、利根川と支流の赤谷川の合流点より北西地域は、旧石器時代の遺跡は確認されていない。これは段丘の成因に起因するものと考えられ、反面、良質な粘土の埋蔵地として歴史性を持ってくる。

縄文～弥生時代にかけては、数多くの遺跡があり、採集経済から初期の農耕経済の地としては、適地であったと推定される。

しかし、古墳時代の遺跡は極めて希薄であり、古墳も存在しない。この地がその存在を再び現すのは律令期に入ってからであり、良質な粘土を産するこの地は、東国経営に伴う国家的な政治状況の中で、窯業生産の地として設定される。

藪田遺跡の9世紀代の陶工集団は、8世紀前半に開窯された月夜野窯跡群の工人集団の中へ、新たな政治的背景を持って参入した、東海系の系譜を引く集団であり、東北地方との関連も強く持っており、銅印や丸柄の存在は、この集団が律令体制下の官人の管理に置かれ、集団の移動や窯業経営が政治的に行なわれたことを物語るものである。

このような、国家的な歴史状況は中世末においては、この地を争乱の場へと引き出している。そして、現在、藪田遺跡の地点は全国新幹線網の群馬県北における要衝として、上毛高原駅が設置され、新たな地域作りが行なわれようとしている。

このような状況の中にあって、近接して開設された月夜野町郷土資料館や県指定遺跡の存在は、地域の歴史性を振り返る、価値ある存在である。

文末ながら発掘調査において、日々真摯な姿勢で汗を流してくれた地域の方々に対して、改めて感謝する次第である。

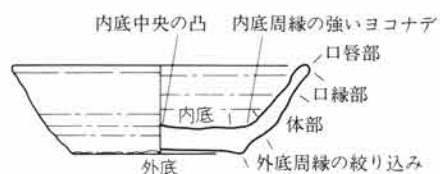
## 土器観察表

## 凡 例

1. 土器番号は実測図・写真図版中の番号と一致する。
2. 器種の項のうち、土師器についてのみ「H」の記号を付した。「H質」の記号は須恵器と同様の胎土をもった酸化焰焼成の土器であり、記号のないものは須恵器である（黒色土器は実測図中の土器番号に記号を付けて示した）。
3. 法量は上から口径・器高・底径とし、——は計測不能、●は丸底を表わす。( )に入った数字は推定復原量を表わし、とくに単位を付けたもの以外は、単位はすべてセンチメートルである。  
高台・台（脚）部を有するものは、裾端部径をもって底径とした。また、蓋の場合はツمام径を加えた。
4. 住居址内出土のもの出土位置は、巻頭凡例中の記載通りである。遺構外出土のものはグリッド名称で表わす。グリッド名称はグリッド界の交点から北へ向って左うしろ（南西側）を見る形で設定されている。
5. 備考欄には後日の検索を期して整理番号を記入してある。整理番号は整理作業中につけられた土器の登録番号で、この番号によって写真・測図・遺物の検索・同定が可能である。番号にNのつくものは整理作業の結果、所属遺構（位置）が移動した新番号（New）である。

例	6区1号住居址1番の土器	6-1（住をつけない）
	5区38号土壇1番の土器	38壇-1
	遺構外出土のもの	Grid-1

6. 口縁部～底部の遺存するものうち、計測可能なものは器の深さを備考欄に記入した。蓋の場合の「深さ」は、天地を逆にして計測したものである。なお、内底の断面に波のある場合や傾きのある場合は、平均的最深部で計測している。
7. 土器の部位は図のように呼んでいる。



右回転系切り無調整

8. 表中「遺存」の項の★は完形に近くても液体をいれるには不適當な焼き割れを意味し、☆は使用可能であることを示す。

第5表1 5区2号住居址出土土器観察表 (第10図、図版55)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
1	蓋	口縁部 ⅔	18.4 現存高 1.7 —	南西隅覆土	ロクロ右回転。口唇部は細く、下方につまみ出されている。天井部を欠く。外面に重ね焼の痕がある。	①砂粒を含む②還元③灰白色④2-25	
2	蓋	天井部 ⅓	— 現存高 3.5 4.5	南壁中央床面一掘形中央	ロクロ左回転。天井部外面にヘラケズリを施す。ツマミは中央が凸である。天井部内面に重ね焼痕があり、その復原径は9.3cmである。	①白色粒を少し含む②還元③灰白色④2-12	
3	蓋	天井部 ⅓	— 現存高 2.5 4.4	南西隅床面	ロクロ左回転。ツマミは中央が凸で、その周囲はヨコナデを施す。天井部外面はヘラケズリ、その他の体部は内外面ともロクロナデを施す。	①石英粒を含む②還元③灰白色④2-11	
4	杯	⅔	12.4 3.8 6.8	南壁中央覆土	ロクロ左回転。体部は直線的にのび、口唇部はわずかに外反する。回転糸切後無調整。内面に重ね焼痕がある。	①白色粒を含む②還元③外面灰色、内面灰白色④深さ2.9cm、2-2	
5	杯	略完★	12.1 3.5 6.8	南東隅覆土	ロクロ右回転。外底の周縁に絞り込みがあり、体部上位は丸く膨み、口縁は反転して外反する。内底の周縁に強いヨコナデを施す。口縁部～体部上半にヒビ割れがある。回転糸切後無調整。	①白色粒・石英粒を少量含む②還元③灰色④深さ2.9、2-3	
6	杯	⅓	12.3 3.3 6.5	南東隅覆土	ロクロ左回転。体部は内湾気味にのび、口唇部はわずかに外反する。回転糸切後無調整。内面に重ね焼痕がある。	①白色粒を多く含む②還元③灰色④深さ2.6、2-7	
7	杯	⅓	12.4 3.7 7.8	南西隅—北西隅覆土	ロクロ左回転。体部は直線的にのびる。内底の周縁に強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③灰色④深さ3.2、2-8	
8	杯	⅓	(12.2) 3.2 (5.8)	中央覆土	ロクロ右回転。外底の周縁に強い絞り込みがあり、腰が丸く張る。口縁部は強いヨコナデにより反転して外反する。口縁部の器厚は約1.5mmと薄い。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③灰色④深さ2.5、2-23	
9	杯	⅓	12.5 3.8 6.6	西壁中央覆土	ロクロ右回転。体部は内湾気味にのび、口唇部は薄くなって端部がわずかに外反する。外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。内面に重ね焼痕がある。	①白色粒を多く含む②還元③外面黒色、内面黄褐色④深さ3.1、2-5	

第5表2 5区2号住居址出土土器観察表 (第10・11図、図版55・56)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土色調 ③焼成備考 ②還元 ④深さ
10	杯	1/2	12.4 3.4 6.5	カマド前 覆土	ロクロ右回転。体部は内湾気味に外上方へ びる。外底の周縁に強い絞り込みがみられる。 内底の周縁に強いヨコナデを施す。回転糸切 後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③黒色④深さ2.6、2 -4
11	杯	略完	12.1 3.6 6.9	壁中央覆 土	ロクロ左回転。体部が直線的にひらく。口縁 部は強いヨコナデによりわずかに外反する。 回転糸切後無調整。外面に重ね焼痕がみられ る。	①白色粒を多く含む②還元③黒色④深さ2.7、2 -1
12	椀	1/2	(13.9) 4.8 (6.9)	北東隅覆 土	ロクロ左回転。体部が直線的にひらく。回転 糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③ 灰色④深さ(3.8)、2-9
13	高台椀	1/2	(11.4) 4.7 6.4	南西隅覆 土	ロクロ左回転。体部は内湾しながらひらく。 内底の周縁に強いヨコナデを施す。内底中央 に非回転のナデがみられる。回転糸切後高台 貼付け。	①白色粒・石英粒を少量 含む②還元③灰黄色④深 さ2.9、2-10
14	高台椀	底部	— 現存高 3.0 7.9	北壁中央 覆土-4 住	ロクロ右回転。切離し後ヘラケズリを施し、 「ハ」字状に開く高台を貼付けている。内底 はロクロナデを施す。高台高さ1.2。	①白色粒・石英粒を含む ②還元③におい黄橙色④ 2-35
15	杯	1/2	(12.5) 3.9 (5.8)	南東隅床 面	ロクロ左回転。体部は内湾気味にひらき、口 縁部は強いヨコナデによってわずかに外反す る。外底の周縁に絞り込みがみられる。回転 糸切後無調整。	①白色粒を含む②酸化③ 外面黒色、内面褐色④深 さ(3.1)、土師質、2-6
16	高台椀	底部	— 現存高 1.7 7.0	東北隅覆 土	ロクロ左回転。回転糸切後高台貼付け。高台 端部は凹みもち、外側へ踏ん張る形である。	①白色粒・石英粒を多く 含む②酸化③におい橙色 ④土師質、2-26
17	杯	1/2	(11.6) 3.4 (6.4)	東南隅覆 土	ロクロ右回転。体部は内湾気味に開き、口縁 部は肥厚してわずかに外反する。回転糸切り。	①白色粒を含む②酸化③ 黒色④深さ(2.5)、土師 質、2-24
18	鉢	1/2	(16.3) 10.2 (7.7)	南壁中央 覆土	ロクロ左回転。体部は内湾気味に開き、口縁 部は直立する。口唇部は内外面に肥厚し、断 面は「T」字形を呈する。口唇部直下に強い ヨコナデを施し、体部はロクロ痕が目立つ。 内底は使用のためか、すり減っている。外底 の調整不明。	①細砂粒を含む②還元③ 灰白色④深さ9.5、2-13



第5表3 5区2号住居址出土土器観察表(第11図、図版56)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
19	甕 H質	⅓	(20.5) 現存高27.6 —	カマド前 カマド前 床面	ゆるい丸味をもった胴部に「く」字状の口縁部をもつ。底部を欠く。胴部最大径は22.2で、中位にある。口縁部はヨコナデ、体部内面はナデを施す。頸部から約5cm下まではハケ目状の痕跡があり(叩き目か?)、そこから底部まではヘラケズリ→ナデ(またはヘラナデ)の調整を施す。	①石英粒を多く含む②酸化③灰褐色④2-14	
20	甕 H	⅓	(19.8) 現存高17.8 —	カマド前 カマド前 床面	ゆるい丸味をもった胴部に、断面「コ」字状の口縁部がつく。底部を欠く。口縁部はヨコナデ、体部内面はナデを施す。体部外面はヨコ方向のヘラケズリを施す。胴部最大径は(19.1)で、中位やや上にある。	①砂粒を多量に含む②酸化③赤褐色④2-15	
21	甕	口縁部 ⅓	(31.3) 現存高12.5 —	北壁中央 覆土	回転方向不明。体部に丸味をもち、口縁部は反転して丸く外反する。口唇部は上下方向に発達して、断面「T」字状を呈する。口縁部はヨコナデを施す。体部上半は叩きののちヨコナデを施す。	①白色粒を含む②還元③灰色④小片からの復原のため、口径はややか、2-16	
22	甕	口縁部 小片	(22.0) 現存高4.3 —	北壁中央 覆土	回転方向不明。口唇部は上下に発達し、断面「T」字状を呈する。内外面ともヨコナデを施す。	①白色粒を多く含む②還元③灰褐色④2-19	
23	甕	口縁部 小片	— 現存高4.5 —	中央覆土	口縁部は大きく外反する。外面の波状文は4本1単位で、向って左方向に進行する。口唇部は上下に発達し、中央部分も凸状を呈する。胎土の断面は中心部が灰色、表面が赤褐色を呈する。	①白色粒を含む②還元③赤褐色④2-17	
24	甕	底部 ⅓	— 現存高11.9 (16.1)	カマド前 覆土	平底と考えられる。底部が剥離している。体部は粘土帯を重ねながら成形したと思われる、帯の天地は3cm前後が観察できる。叩き後ヨコナデを施す。外面のヨコナデは全面に及ばず、帯状に施している。	①小石を多く含む②還元③灰褐色④2-21	

第6表1 5区3号住居址出土土器観察表 (第15図、図版57)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
1	蓋	⅘ ツمامミ欠	(13.6) 現存高 2.2 —	掘形中央	口唇部は下方に折れ曲り、その外面は凹線状を呈する。天井部外面はヘラケズリを施し、ツمامミを接合後周辺をヨコナデする。ツمامミ接合時の前処理として渦巻状の沈線がみられる。ロクロ右回転。	①白色粒を含む②還元③ 灰色④3-21	
2	蓋	⅘ ツمامミ欠	(15.3) 現存高 3.3 —	東南隅覆土	ロクロ右回転。口縁部から丸く膨らみをもって天井部へ至る。口縁部は直立する。天井部外面にヘラケズリを施す。内外面に重ね焼痕を残す。	①白色粒・石英粒を多く含む②還元③灰色④3-17	
3	蓋	⅘ ツمامミ欠	14.0 現存高 1.8 接合痕 6.8	南西隅覆土	ロクロ右回転。輪高台状のツمامミを欠く。口縁部外面は凹線状を呈して直立する。内面に重ね焼痕を残す。	①白色粒・石英粒を多く含む②還元③黒褐色④高台皿か?、3-15	
4	蓋	⅘	(16.3) 3.8 3.3	掘形中央	ロクロ右回転。口唇部は細く尖る。偏平な宝珠形のツمامミをもつ。天井部外面のツمامミ周囲にヘラケズリを施す。	①白色粒を含む②還元③ 灰色④3-20	
5	蓋	⅘	(16.2) 3.8 4.3	北西隅掘形	ロクロ右回転。天井部が丸味をもってやや高くなり、偏平なツمامミをもつ。天井部外面にヘラケズリを施す。内面に重ね焼痕が残る。	①白色粒を多く含む②還元③ 灰色④3-18	
6	杯	略完★	11.8 3.65 5.2	北西隅掘形	ロクロ左回転。外底の周縁に絞り込みがみられる。体部は内湾気味に開き口唇部がわずかに外反する。底部～体部には、ヒビ割れがあり、全体に歪みをもつ。外面に重ね焼痕がみられる。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③ 外面灰白色、内面黒褐色④深さ2.7、3-5	
7	杯	⅘	(12.3) 3.6 (6.8)	カマド前床面	ロクロ左回転。体部は内湾してひろがる。内底の周縁に強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒・石英粒を含む② 還元③灰白色④深さ2.9、3-2	
8	杯	⅘	11.8 3.3 7.1	北東隅床面	ロクロ右回転。体部はわずかに内湾してひろく。内底の周縁に強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。外底に粘土カスが付着している。外面に重ね焼痕がある。	①白色粒・石英粒を多く含む②還元③ 外面灰白色、内面灰色④深さ2.4、3-8	

第6表2 5区3号住居址出土土器観察表(第15・16図、図版57)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土色調 ③色調 ②焼成備考 ④備考
9	杯	⅔	(12.7) 3.8 7.2	北西隅掘形	ロクロ右回転。体部は内湾してひらく。口縁部がわずかに外反する。外底の周縁に絞り込みがみられ、腰がやや張る。回転糸切後無調整。外底に重ね焼痕がみられる。	①白色粒を多く含む②還元③灰色④深さ3.2、3-69
10	杯	⅔	12.8 4.2 7.7	西壁中央床面	ロクロ右回転。体部は内湾してひらく。外底の周縁に絞り込みがみられる。内底の周縁に強いヨコナデを施す。回転糸切後、周縁に不明圧痕(ワラか?)が付いている。	①白色粒を多く含む②還元③外面黒褐色、内面灰褐色④深さ3.1、3-7
11	杯	略完★	11.9 4.0 5.9	フク土	ロクロ左回転。体部は内湾してひらき、口縁部はわずかに外反する。外底の周縁に絞り込みがみられる。体部と底部境にヒビが入っている。回転糸切後無調整。	①白色粒・石英粒を多く含む②還元③外面灰黒色、内面灰白色④深さ2.8、3-6
12	杯	略完★	12.0 3.3 7.3	北西隅覆土	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底の周縁に絞り込みがみられる。底部の器厚は薄い。口縁部に一カ所ヒビが入っている。回転糸切後無調整。内面に重ね焼痕がみられる。全体に歪みあり。	①白色粒を多く含む②還元③外面黒褐色、内面灰褐色④深さ2.8、3-4
13	杯	完	12.0 3.5 7.0	南西隅覆土	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらく。外底の周縁に絞り込みがみられ、腰がやや張る。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③外面黒色、内面灰褐色④深さ2.5、3-3
14	高台椀	⅔ 高台欠	11.2 現存高 4.2	南西隅一中央掘形	ロクロ右回転。体部は内湾してひらき、口縁部はわずかに外反する。高台を除く本体の底径は5.8である。外底は回転糸切後ヘラケズリを施し、高台貼付ののちヨコナデを施す。爪跡状の圧痕が3カ所みられる。内底には重ね焼痕がみられ、その径は5.6である。	①白色粒を多く含む②還元③内外底灰白色、その他黒褐色④深さ3.4、3-1
15	高台皿	⅔	14.1 3.0 7.9	カマド前覆土	ロクロ左回転。低く浅い体部に折れ曲ような口縁部をもつ。高台は高さ1.0で、「ハ」字状にひらき、器厚は薄い。回転糸切後高台を貼り付け、その周縁にヨコナデを施すが、外底中央部に糸切痕が残っている。	①小石を含む②還元③灰色④深さ1.4、蓋の可能性あり、3-14
16	高台皿	½	(13.0) 3.9 8.2	中央一北西隅掘形	ロクロ右回転。偏平で丸味のある体部をもつ。高台は高さ1.1で、「ハ」字状にひらき、その内端は接地しない。外底に非回転ヘラケズリを施す。高台の一部剥げ。	①白色粒を多く含む②還元③灰白色④深さ2.4、3-13

第6表3 5区3号住居址出土土器観察表(第16・17図、図版58)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
17	椀	略完★	15.8 5.3 8.9	南西隅床面	ロクロ右回転。体部は直線的にのびる。外底の周縁に強い絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。底部中央～口縁部にヒビ割れがあり、やや歪みをもつ。	①白色粒を多く含む②還元③灰白色④深さ4.2、3-11	
18	椀	⅔	15.1 5.4 7.8	西壁中央床面	ロクロ右回転。体部は内湾してひらき、口唇部はわずかに外反する。外底の周縁に絞り込みがみられる。内底中央部は凸状に盛り上る。外底に重ね焼痕がある。	①白色粒・石英粒を多く含む②還元③灰褐色④深さ3.6、3-10	
19	椀	⅓	(14.1) 4.4 7.8	北西隅覆土	ロクロ右回転。体部は直線的にのび、口縁部は内湾気味である。口唇部内面がやや肥厚する。内底中央から周縁にかけて強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整、または高台貼付の可能性もある。	①白色粒・石英粒を多く含む②還元③灰褐色④深さ3.9、3-9	
20	椀	⅓	(15.7) 6.4 (7.6)	中央—南壁中央床面	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部は内湾する。口唇部内面は玉縁状に肥厚する。内底の周縁に強いヨコナデを施す。外底は回転糸切後、粘土を補充してナデを施す。底部は円盤状に凸出する。	①白色粒を多く含む②還元③灰白色④深さ5.4、3-12	
21	稜椀	⅓	(14.9) 現存高 4.8 —	カマド前覆土	ロクロ右回転。体部下半に外稜をもち、上半は直線的にひらく。内面屈曲部に強いヨコナデを施す。	①石英粒を多く含む②還元③黄灰色④3-34	
22	鉢	口縁部小片	(16.8) 現存高 6.5 —	北西隅覆土	ロクロ回転方向不明。器厚が厚く、内湾する。口唇上面は平坦で、外面は断面三角形につまみ出す。内外面ともロクロナデを施す。	①白色粒・黒色粒を含む②還元③灰オリーブ色④内外面に自然釉、3-35	
23	高杯	脚部	— 現存高 6.1 10.9	南西隅床面	ロクロ右回転。裾端部は断面三角形につまみ出され、その外面は凹む。筒部はロクロナデによって絞り込まれている。杯部との接合面を残す。	①小石を少量含む②還元③灰色④3-23	
24	甕H	⅓	(20.8) 現存高11.8 —	カマド前床面	口頸部は弱い「コ」字状を呈する。体部はやや丸く、器厚約0.2cmと薄い。体部外面の上部はヨコ方向、下半はタテ方向のヘラケズリ、内面は丁寧なナデを施す。	①砂粒を多く含む②酸化③にぶい褐色④3-66	
25	甕H	⅓	(18.2) 現存高 5.9 —	カマド前—南東隅床面	口頸部は弱い「コ」字状を呈する。器厚0.2~0.3cm。体部外面はヨコ方向のヘラケズリ、内面はナデを施す。	①砂粒を多く含む②酸化③明褐色④3-67	

第6表4 5区3号住居址出土土器観察表 (第17図、図版58)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
26	甕	1/4	(15.0) 現存高 5.3 —	西壁中央 —北西隅 掘形	「く」字状の口縁部をもつ。体部の内外面はロクロナデを施す。ロクロ右回転。	①白色粒を多く含む②酸化③外面橙色、内面にぶい褐色④3-68	
27	甕	1/4	(23.2) 現存高 6.4 —	北西隅覆 土	「く」字状に丸く・短かく外反する口縁部をもつ。体部径よりも口径がやや大きい。口唇部は上方につまみ出される。ロクロ右回転。	①白色粒を含む②還元③灰色④3-24	
28	甕	1/4	26.1 現存高12.0	中央掘形	右回転の調整。肩部から垂直近くに立ち上り、口縁部は大きく外反する。口唇部は上下に発達し、その外面中位に稜線をもつ。体部は叩きが施され、頸部内面はヨコナデが加えられる。体部外面の現存器表はヨコナデを施す。内面の叩き目は中央凸の同心円である。	①白色粒を多く含む②還元③灰色④3-22	
29	甕	底部片	— 現存高 4.5 15.9	西壁中央 覆土	大型甕の底部。平底。底部外面に同心円状の圧痕を残す。上げ底。内面はヨコナデを施す。	①白色粒・小石を多く含む②還元③灰白色④3-28	

第7表1 5区4号住居址出土土器観察表 (第21図、図版58)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
1	杯	1/4	(12.0) 3.7 6.4	北西隅床 面	ロクロ左回転。体部は直線的にひらく。底部が最も厚く約1cm、底部～体部の境で0.4cmを測る。回転糸切後無調整。	①小石を多く含む②還元③灰白色④深さ2.7、4-1	
2	杯	1/4	(13.5) 3.7 7.6	北西隅覆 土	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらく。口縁部は内面の強いヨコナデによって内湾する。外底の周縁は絞り込みがみられ、内面は強いヨコナデを施している。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③外面黒褐色、内面明灰褐色④深さ3.0、4-2	
3	杯	1/4	(12.0) 3.5 (6.2)	北西隅覆 土	ロクロ左回転。体部は直線的にひらき、口縁部はわずかに外反する。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③にぶい黄褐色④深さ(2.9)、4-3	
4	椀	1/4	(14.0) 現存高 3.5 —	北西隅床 面	ロクロ回転方向不明。口縁部はわずかに外反する。外面にロクロナデの痕を残す。	①白色粒を多く含む②酸化③外面黒色、内面明褐色④4-4	

第7表2 5区4号住居址出土土器観察表 (第21図、図版58)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
5	蓋	口縁部 小片	— — —	北西隅床 面	ロクロ回転方向不明。口縁部内面は凹線状を呈する。内外面ヨコナデを施す。	①白色粒を含む②還元③ 灰オリーブ④4-6	
6	壺?	底部片	— 現存高 1.8 (8.0)	北西隅覆 土	底部中央付近が薄く、周縁が厚い。内面はロクロナデ、底部外面は静止糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③ 灰色④4-5	

第8表1 5区5号住居址出土土器観察表 (第25図、図版59)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
1	蓋	1/2	(17.3) 3.4 ツマミ 3.8	覆土	ロクロ右回転。天井部は丸味をもつ。口唇端部は細く、断面三角形にひきだされている。ツマミは偏平で、中央が凸出する。天井部外面はヘラケズリ、ツマミ周囲と口縁部はヨコナデ、その他はロクロナデを施す。	①白色粒・石英粒を多く 含む②還元③灰白色④天 井部外面にアズキ色の付 着物あり、5-28	
2	蓋	1/2	17.1 3.6 ツマミ 4.0	南東隅床 面	ロクロ右回転。天井部は丸味をもつ。口唇端部は外反気味である。ツマミは偏平で中央部が凸出する。天井部外面はヘラケズリ、ツマミ周縁はヨコナデを施す。内外面に重ね焼痕があり、外面は径7.5~8.0cm、内面の径は17cm前後である。	①白色粒を含む②還元③ 灰色④5-27	
3	蓋	1/2	16.3 3.9 ツマミ 3.5	西壁中央 一カマド 前床面	ロクロ右回転。天井部は凸出して丸味をもつ。ツマミは偏平で中央部が凸出する。口唇端部は外反する。天井部外面はヘラケズリ、ツマミ周縁と口縁部はヨコナデ、その他はロクロナデを施す。内面に重ね焼痕がみられる。	①白色粒を多く含む②還元③ 灰白色④5-26	
4	蓋	略完 ☆	17.1 3.4 ツマミ 3.5	カマド前 床面	ロクロ右回転。天井部は凸出して丸味をもつ。ツマミは偏平で中央部が凸出する。口唇端部は断面三角形で下方につまみ出されている。天井部外面はヘラケズリ、ツマミ周縁と口縁部はヨコナデ、その他はロクロナデを施す。	①白色粒を多く含む②還元③ 外面黒褐色、内面に ぶい橙色④5-24	

第8表2 5区5号住居址出土土器観察表 (第25・26図、図版59・60)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
5	蓋	天井部	— 現存高 1.7 ツマミ 3.3	西壁中央 覆土	ロクロ左回転。ツマミは偏平で中央部が凸出し、端部は鋭利に仕上げている。天井部外面はヘラケズリ、内面はロクロナデを施す。ツマミ周縁はヨコナデで仕上げる。	①白色粒・細砂粒を含む ②還元③灰色④5-4 1	
6	杯	⅔	12.3 3.7 6.6	南壁中央 床面	ロクロ右回転?外底の周縁に絞り込みがみられ、腰が丸く張って口縁部はかるく外反する。全体に、やや偏平である。底部は凸出する。切離し・調整ともに器表が剥落して不明。	①白色粒を多く含む②還元③にぶい黄橙色④深さ2.9、5-1	
7	杯	⅔★	12.5 3.6 6.6	北東隅覆 土	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらき、口唇部がわずかに外反する。外底の周縁に絞り込みがみられる。内外面に火だすき状の銀青色の痕跡がある。底部にヒビ割れがある。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③灰色④深さ3.0、5-13	
8	杯	⅔	(12.7) 3.9 (6.5)	北東隅一 カマド前 覆土	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらき、口唇部がわずかに外反する。外底の周縁に絞り込みがみられる。内底にナデを施す。回転糸切後無調整。外面に火だすき状の痕跡がある。	①白色粒を多く含む②還元③灰色④深さ3.0、5-12	
9	杯	⅔	(12.7) 3.7 (6.6)	北西隅床 面	ロクロ左回転。体部は直線的にひらき、口唇部がわずかに外反する。外底の周縁に絞り込みがみられる。外面に重ね焼きの痕跡がある。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③灰白色④深さ2.8、5-11	
10	杯	⅔	13.4 4.2 6.4	北西隅床 面	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらく。外底の周縁に絞り込みがみられる。器表剥落している。回転糸切。	①白色粒を多量に含む②還元③にぶい黄褐色④深さ3.5、5-2	
11	杯	略完 ☆	13.4 4.0 6.7	カマド	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③黒色④深さ3.4、5-7	

第8表3 5区5号住居址出土土器観察表 (第26図、図版60)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
12	杯	⅓	13.0 4.2 6.4	北西隅一 カマド	ロクロ右回転。外底の周縁に絞り込みがみられ、腰がやや張って体部はかるく外反する。内面に重ね焼の痕跡が残る。回転糸切後無調整。	①白色粒・石英粒を多く含む②還元③黒色④深さ3.4、5-5	
13	杯	⅓	(13.8) 4.2 6.3	南東隅床 面	ロクロ右回転。外底の周縁に絞り込みがみられ、腰がやや張って体部は外上方へひらく。底部が凸出する。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③外面黒色、内面灰褐色④深さ3.1、5-4	
14	杯	完☆	12.0 4.2 6.1	南壁中央 床面	ロクロ右回転。外底の周縁に絞り込みがみられ、腰がやや張って体部は外上方にひらく。内底の周縁に丁寧なヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③灰白色④深さ3.3、5-10	
15	杯	略完★	12.6 4.2 7.2	カマド	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底の周縁に絞り込みがみられる。底部が凸出する。回転糸切後無調整。底面中央にヒビ割れがあり、全体に歪みをもつ。	①白色粒を多く含む②還元③灰色④深さ3.2、5-9	
16	杯	略完	12.5 3.8 6.6	中央一南 壁中央覆 土	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底の周縁に絞り込みがみられ、腰がやや張る。底部は凸出する。回転糸切後無調整。内面に重ね焼痕がみられる。歪みあり。	①白色粒を多く含む②還元③外面暗褐色、内面黄褐色④深さ2.9、底部円盤状に割れ、5-3	
17	杯	完★	12.7 3.7 7.1	カマド	ロクロ右回転。外底の周縁に絞り込みがみられ、底部が凸出する。腰が丸く張って、口縁部はわずかに外反する。内底の周縁に強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。内底にヒビ割れがある。	①白色粒を多く含む②還元③黒褐色④深さ3.0、5-6	
18	椀	⅓	14.3 4.5 7.0	南東隅床 面	ロクロ左回転。外底の周縁に絞り込みがみられ、底部がわずかに凸出する。体部は内湾してひらき、口唇部が外反する。内底の周縁に強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③明褐色～黒褐色④深さ3.7、5-8	



第8表4 5区5号住居址出土土器観察表 (第26・27図、図版61)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特 徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
19	杯	⅔★	13.9 4.4 7.2	北西隅一 中央覆土	ロクロ右回転。外底の周縁に絞り込みがみられ、底部が凸出する。体部は内湾してひらく。内底の周縁にヨコナデを施す。回転糸切後無調整。底部にヒビ割れがある。	①砂粒を含む②還元③灰色④深さ3.8、5-14	
20	杯	⅔	(15.1) 5.0 7.3	中央床面	ロクロ右回転。外底の周縁に絞り込みがみられ、底部が凸出する。体部は直線的にひらく。内底の周縁にヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③灰色④深さ4.0、5-15	
21	杯	⅔	(13.7) 5.7 7.2	南東隅覆 土	ロクロ左回転。外底の周縁に強い絞り込みがみられ、底部は凸出する。体部は内湾してひらく。内底の周縁に強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③灰色④深さ4.5、5-16	
22	高台椀	⅔★	(9.8) 5.3 6.2	北西隅覆 土	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。高台は0.9cmの高さで、太くしっかりしており、「ハ」字状にひらき、その内端は接地しない。高台内側の外底に爪跡状の圧痕が弧状に並んでいる。外底は回転糸切後ナデまたはケズリが加わる。底部にヒビ割れがある。	①白色粒を多く含む、小石あり②還元③灰色④深さ3.8、5-37	
23	高台椀	⅔	(10.6) 5.6 (5.6)	南東隅床 面	ロクロ右回転。体部は内湾してひらき、口縁部は強いヨコナデによってわずかに外反する。内底の周縁に強いヨコナデを施す。高台は薄く、内湾気味である。	①白色粒・石英粒を少量含む②還元③灰色④深さ3.7、5-17	
24	稜 椀	⅔	(11.1) 4.9 (6.9)	南東隅床 面	ロクロ右回転。外稜をもつ。外稜部からほぼ直線的にひらく。高台は高さ1.3cmで器厚が厚く、「ハ」字状にひらく。高台の外端は接地しない。	①白色粒を多く含む②還元③灰色④深さ2.8、5-18	
25	高台椀	⅔★	16.4 7.9 9.4	南東隅一 南壁中央 床面	ロクロ左回転。体部は内湾気味にひらく。高台は高さ1.5cmで、「ハ」字状にしっかり開き、その外端は鋭利に仕上げている。内底の周縁に強いヨコナデを施す。高台内側の外底に回転糸切痕を残し、その中央部にヒビ割れがある。	①白色粒・石英粒を少量含む②還元③灰白色④深さ5.4、5-19	

第8表5 5区5号住居址出土土器観察表 (第27・28図、図版62)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
26	高台皿	1/4	18.9 4.0 11.6	カマド	ロクロ右回転。口縁部は体部からほぼ垂直に立ち上り、口唇部内側が玉縁状に丸く肥厚する。高台は「ハ」字状に安定してひらき、その内端は接地しない。内面の体部と口縁部との境に強いヨコナデを施す。回転糸切後ヘラケズリを施し、高台を貼付ける。高台接着部を境に器厚が変化する。高台高さ1.5cm。	①白色粒を多く含む②還元③外面黒褐色、内面に ぶい黄橙色④深さ2.2、5 —22	
27	高台皿	略完	18.0 3.9 10.2	カマド	ロクロ右回転。口縁部は体部から反転して外反し、口唇部外端が外方にまくれる。高台は「ハ」字状にひらき、その内端は接地しない。切離し後ヘラケズリを施し、高台を貼付ける。全体に歪みがある。高台高さ1.5cm。	①白色粒・石英粒の大粒 を含む②還元③灰白色④ 深さ2.3、5—20	
28	高台皿	1/4	17.6 4.5 11.4	西壁中央 床面	ロクロ回転方向不明。口縁部は体部からほぼ垂直に立ち上る。高台は高さ1.6cmで「ハ」字状にひらき、その内端は接地しない。高台接着部を境に器厚が変化する。器表は剝落して調整不明。	①白色粒・石英粒を含む ②還元③外面灰白色、内 面淡黄色④深さ2.9、5 —21	
29	高台皿	1/4	(17.2) 現存高 3.2 —	南東隅床 面	ロクロ右回転。口縁部は体部からほぼ垂直に立ち上り、端部は丸く肥厚する。高台は半欠してその形状は不明。切離し後ヘラケズリを施し、高台を貼付ける。高台接着部を境に器厚が変化する。	①白色粒・小石を含む② 還元、酸化気味③にぶい 黄橙色④深さ2.5、5—23	
30	高台皿	1/4	(19.3) 現存高 4.5 —	中央床面 —3住	ロクロ右回転。内傾した口縁部をもち、最大径(19.8cm)は外稜部にある。外底の高台内側に回転ヘラケズリを施す。	①白色粒を多く含む②還元 ③灰色④5—42	
31	椀 (黒色)	口縁部 小片	(11.1) 現存高 3.3	北西隅覆 土	回転方向不明。内面はヨコ方向に研磨されている。外面は黒色だが、研磨されていない。	①白色の細砂を含み灰色 ～褐色②還元気味③内外 面黒色④5—40	
32	不明	高台部	— 現存高 1.1 3.2	カマド	粘土紐を輪状にして本体に貼りつけている。端部はややまくれ上る。ツマミの可能性はある。	①白色粒・石英粒を含む ②酸化③明褐色④5—38	

第8表6 5区5号住居址出土土器観察表(第28図、図版62)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
33	長頸壺	口頸部	9.6 現存高 7.9 —	南東隅床面	ロクロ右回転。絞り込まれた頸部から、口縁部が大きく外反する。口唇部は上下に発達し、その外面は凹線状に凹む。頸部の内径は3.7cmである。	①細砂を含む②還元③灰白色④5-30	
34	甕 H	⅝	(20.1) 現存高18.5 —	南東隅一カマド	丸味の大きい「コ」字状口縁をもつ。口縁部はヨコナデ、体部外面の上半はヨコ方向・下半はタテ方向のヘラケズリ、体部内面はナデを施す。胴部最大径は中位やや上であり、ほぼ口径に等しい。外面に炭化物付着。底部を欠失する。	①砂粒を多く含む②酸化③にぶい褐色④5-29	
35	甕 H	⅝	(12.3) 現存高 7.5 —	南東隅一中央床面	口縁部は短く、ゆるく外反して立ち上る。胴部はやや扁平で丸く膨らみ、最大径は14.2cmで中位にある。器表は剥落しており、調整不明。2次火熱を受けている。	①白色粒・石英粒・小石を含む②酸化③外面明褐色、内面暗褐色④5-36	
36	甕	体部片	— 現存高17.7 —	南西隅床面	大型甕の体部上半の破片。傾きにやや疑問がある。巻上げの後叩きを加え、さらに内外面にナデが施される。頸部との接合面をよく残している。外面の叩き目は平行叩きでその間隔は1~2mm、内面は中央凸の同心円である。胴部の復原径は80~90cmが推定できる。	①白色粒を含む②還元③灰色④頸部との接合は落し込みタイプ、5-35	
37	甕	口頸部片	(27.8) 現存高 7.1 —	南東隅床面	大型甕の口頸部の破片。35とは頸部径が異なり、別個体である。体部との接合面を残しており、頸部はそこから大きく外反する。体部との接合方法は上乘せのタイプで、35とは異なる。口唇部は上下に発達し、その外面は凸線状を呈する。	①白色粒を多く含む②還元③灰色④5-31	
38	甕	体部⅝	— 現存高18.2 —	南東隅床面	丸味の強い、やや肩の張った甕の体部破片。復原した胴部最大径は31.6cmである。巻上げの後叩きを加え、さらにヨコナデ、ナデを施す。外面の叩き目は平行叩き(間隔3mm前後)、内面はクシ目状の細かい(間隔1mm前後)平行目をもつ。	①白色粒を含む、胎の中心は褐色・器表は内外とも灰色を呈する②還元③灰色④5-32	

第8表7 5区5号住居址出土土器観察表 (第28図、図版62)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
39	甕	底部片	— 現存高12.3 12.2	北東隅覆土	平底の甕の底部破片。体部は叩きの後ヨコナデが施される。外面の叩き目は平行(間隔4mm前後)、内面は無文である。内底に窯体の一部とみられる8×5×3cmほどのガラス質の物体が溶着し、外底には自然釉を被っている。また、外底に別個体の一部とみられる粘土が付着している。	①白色粒を多く含む②還元③青黒色④窯道具として使われたものか、5-33	

第9表1 5区6号住居址出土土器観察表 (第31図、図版63)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
1	蓋	略完	15.3 3.5 ツمامミ 4.6	北壁中央床面	ロクロ右回転。天井部は丸味をもち、屈曲なしに口縁部に至る。口唇部は細く、垂直に近く立ち上る。ツمامミは偏平で、中央部が凹む。天井部外面はヘラケズリ、ツمامミ周縁と口縁部はヨコナデを施す。外面に重ね焼痕がみられる。	①5~8mmの黒色粒と白色粒を多く含む②還元③灰色④深さ2.1、6-8	
2	蓋	略完	17.8 3.8 ツمامミ 3.6	西壁中央覆土	ロクロ右回転。天井部は丸味をもち、口縁部で屈曲して鋭い外稜部に至る。口唇部は細く外反して立ち上る。ツمامミは偏平なボタン状を呈し、中央がやや凹む。天井部外面は丁寧なヨコナデを施す。内外面に重ね焼痕がみられる。外面天井部の灰白色部は径9.0cm、内面の灰白色部の径は17.0cm、天井部内面の溶着部の径は7.5~8.0cmである。	①白色粒・石英粒を含む②還元③灰色④深さ2.2、6-22	

第9表2 5区6号住居址出土土器観察表(第31図、図版63)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土色調 ②焼成備考 ③ ④
3	蓋	略完	16.8 4.3 ツمامミ 3.1	南西隅覆土	ロクロナデ右回転。天井部は丸味をもち、屈曲なしに口縁部に至る。口唇部は細く、わずかに外反する。ツمامミは偏平なボタン状を呈し、中央がわずかに凹む。天井部外面はヘラケズリ、ツمامミ周縁と口縁部はヨコナデを施す。内外面にロクロナデ痕をよく残している。	①石英粒・黒色粒を少し含む②還元③灰白色④深さ2.5、6-9
4	蓋	完	17.4 4.5 ツمامミ 3.1	貯蔵穴	ロクロナデ右回転。天井部上半は丸く盛り上がり、下半は直線的に口縁部に至る。口唇部は断面三角形である。ツمامミは偏平なボタン状で、中央がわずかに凸出する。天井部外面の上半はヘラケズリ、ツمامミと口縁部はヨコナデを施し、他はロクロナデのままである。外面に重ね焼痕があり、灰色部の径は約16cmである。全体に歪みをもつ。	①石英粒・白色粒・黒色微粒を含む②還元③外面灰色、内面暗灰色④深さ3.0、6-23
5	蓋	略完★	18.0 4.5 ツمامミ 3.6	貯蔵穴	ロクロナデ右回転。天井部上半は丸く盛り上がり、下半で屈曲して口縁部に至る。口唇部は細く外反する。ツمامミは偏平なボタン状を呈し、中央がやや凹む。天井部外面の上半はヘラケズリ、ツمامミと口縁部はヨコナデ、その他はロクロナデを施す。内外面に重ね焼痕があり、外面の黄橙色部径は15.9cm、内面は8.9cmである。天井部中央付近から口縁部にかけてヒビ割れがみられる。	①白色粒・石英粒を多く含む②還元③重ね焼痕黄橙色、その他灰色④深さ2.8、6-10
6	蓋	略完★	16.8 4.7 ツمامミ 3.8	南壁中央覆土	ロクロナデ右回転。天井部上半は丸く盛り上がり、下半は直線的に口縁部に至る。口唇部は断面三角形で外反し、その外側面は凹線状を呈する。ツمامミは偏平で内側が凹むが、中心は凸である。天井部外面の上半はヘラケズリ、ツمامミと口縁部はヨコナデ、その他はロクロナデを施す。内外面に重ね焼痕がみられる。外面の径15.0cm、内面の径8.2cmのにぶい褐色部である。天井部内面および口縁部に10カ所のヒビ割れがある。	①白色粒を多く含む②還元③重ね部を除き灰褐色④深さ3.1、6-11

第9表3 5区6号住居址出土土器観察表 (第31図、図版63)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土色調 ②焼成備考
7	杯	1/2	13.3 3.7 7.6	貯蔵穴	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。内底の周縁に強いヨコナデを施す。小片に割れている。土師器か? 回転糸切後無調整。	①精良②酸化、軟質③暗褐色④深さ3.0、軟質のため拓本とれない、6-1
8	杯	1/2	12.0 3.5 7.7	カマド前床面一北西隅掘形	ロクロ左回転。体部は内湾気味にひらく。外底の周縁に絞り込みがみられる。内底の周縁に強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③灰褐色、口縁部のみ黒色④深さ2.9、6-2
9	杯	略完★	12.2 3.6 7.6	貯蔵穴	ロクロ右回転。体部は内湾してひらく。内底の周縁から中央にかけて強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。底部にヒビ割れがみられる。	①白色粒を多く含む②還元③にぶい黄褐色④深さ3.0、6-3
10	杯	1/2	(13.2) 3.3 (8.0)	中央覆土	ロクロ右回転。体部は内湾してひらく。回転糸切後無調整。	①小石・白色粒を含む②還元③灰白色④深さ1.6、6-24
11	杯	略完★	12.7 4.0 7.4	西壁中央覆土	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部は強いヨコナデにより体部より内側へ折れ曲る。外底の周縁に絞り込みがみられ、内面では強いヨコナデを施す。内底中央は凸である。回転糸切後無調整。底部にヒビ割れがみられる。	①白色粒を多く含む②還元③外面黒褐色、内面灰黄褐色④深さ3.1、6-4
12	杯	1/2	(11.6) 3.9 (6.0)	北壁中央覆土	ロクロ左回転。体部上半が丸く張り、口縁部がわずかに外反する。外底の周縁に絞り込みがみられる。2次火熱を受けたものか。回転糸切後無調整。	①小石・白色粒を多く含む②還元③にぶい黄褐色④深さ(2.9)、6-21
13	杯	略完	12.8 4.9 6.9	西壁中央一北西隅掘形	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部はやや内側へ折れる。外底の周縁に絞り込みがみられる。切離し後ナデが施されている。底部中央は欠く。	①石英粒を多く含む②還元③灰白色④深さ4.1、6-5

第9表4 5区6号住居址出土土器観察表(第31・32図、図版63・64)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
14	高台椀	略完★	11.1 4.8 6.5	南壁中央 床面	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部はやや内側へ折れる。高台は外反してひらき、その内端は接地しない。高台内側の外底は切離し後非回転のヘラケズリが施され、高台貼付後ナデが加わる。底部にヒビ割れがみられる。	①白色粒・石英粒を含む ②還元③にぶい橙色、一部黒褐色④深さ3.8、6-6	
15	高台椀	⅔ 高台欠	14.2 現存高 6.3 除高台 7.0	北西隅掘 形	ロクロ右回転。体部は内湾してひらく。底部の形態は不明。体部外面の高台脇はヘラケズリ、口縁部はヨコナデ、内底の周縁に強いヨコナデを施す。	①白色粒を多く含む②還元③灰色④深さ現存5.2、6-7	
16	高台椀	底部片 高台欠 ★	— 現存高 1.2 除高台 8.0	北壁中央 覆土	ロクロ右回転。外底は回転ヘラケズリ後高台貼付け。高台接合のための凹線が1本明瞭に残る。内底は器表が剥離して、左回転糸切痕が残っている(糸切り痕のネガティブと考えられる)。	①白色粒・石英粒を含む ②還元③外面灰色、内面灰白色④6-19	
17	長頸壺	⅔ 口頸部 欠	— 現存高 9.6 10.6	カマド前 床面	ロクロ右回転。直線的な体部下半に、「ハ」字状にひらくしつかりした高台がつく。高台の高さは1.4cmで、高台脇は強いヨコナデを施す。高台内側の外底はナデを加える。体部の内面はロクロナデ、外面は同じく丁寧に施す。	①白色粒・小石を含む②還元③灰色④深さ現存7.4、6-18	
18	甕 H	⅔	9.6 10.5 6.4前後	中央覆土	ロクロ左回転。口縁部は薄く直立し、最大径は胴部中位やや上であり13.3cmである。底部は厚く1.3cm前後で不安定である。口縁部はヨコナデ、内面と体部外面の上半はロクロナデ、外面の体部下半～底部は非回転のヘラケズリを施す。外面体部下半は回転ヘラケズリ後ナデを施し、さらに非回転ヘラケズリの順に調整する。外面の一部にスス附着。	①白色粒を多く含む②酸化③灰黄褐色④深さ9.1、6-12	
19	甕	⅔	(32.0) 現存高14.0 —	中央覆土	ロクロ右回転。最大径は胴部にあり、口縁径よりもやや大きい。口唇部は上方に大きく発達し、下端は鐮状を呈する。体部は叩きの後ロクロナデを施す。外面平行叩き目。	①白色粒を多く含む②還元③灰色④6-14	

第9表5 5区6号住居址出土土器観察表(第32図、図版64)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
20	甕	⅔	22.5 15.8 (11.6)	北西隅— 西壁中央 掘形	ロクロ右回転。口縁部外端に最大径23.0cmをもつ。体部最大径は上位にあり、口径とほぼ同じである。体部は肩が張り、「く」字状に外反する口縁部をもつ。体部下半は直線的に平底の底部に至る。体部下半はナデ、内底は指頭ナデを施し、外底は無調整である。叩きの痕跡はみられない。口唇部は外傾して平坦に仕上げている。	①白色粒を含む②還元③外面の上半と内面は明褐色、外面下半は灰色④深さ14.6、6-13	
21	甕	口縁部 ⅓	(22.0) 現存高 7.7	南西隅覆 土	ロクロ右回転。頸部から大きく外反する口縁部をもつ。口唇部は上方に大きく発達し、その外側は平坦に仕上げる。	①白色粒・小石を含む②還元③灰色④6-15	
22	甕	底部片	— 現存高 4.2 12.0	北西隅掘 形	平底の甕の底部破片。体部の内面はロクロナデ、外面はナデ、内底はナデを施し、外底は無調整である。	①白色粒・小石を多く含む②還元③灰色④6-17	
23	甕	底部片	— 現存高 1.2 17.7	貯蔵穴— 北西隅掘 形	平底の甕の底部破片。体部との接合面から円盤状の底部が剝離している。内底はナデを施す。外底の周縁は非回転のヘラケズリを施し、中央部は無調整である。	①白色粒・小石を多く含む②還元③灰色④6-25	

第10表1 5区7号住居址出土土器観察表(第36図、図版65)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
1	蓋	⅔	13.8 2.8 ツマミ 3.8	北壁中央 —11住	ロクロ右回転。天井部が丸く盛り上る。ツマミ周囲に回転糸切り痕を残す。内外面に重ね焼痕を残し、内面では径7.4cm、外面では径11.5cmである。天井部外面にヘラケズリを施す。	①白色粒を含む②還元③灰白色④深さ1.7、N7住-13	
2	杯	⅔	10.6~11.6 2.7~3.8 5.6	北壁中央 掘形	ロクロ右回転。全体に歪みをもつ。体部は内湾気味にひらく。外底の周縁に絞り込みがみられる。外面に重ね焼痕がある。回転糸切後無調整。	①白色粒・黒色粒・石英粒を含む②還元③灰色④深さ2.3~3.0、N7住-11	
3	杯	⅔	12.6 3.6 7.3	北西隅覆 土	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口唇部はわずかに外反して玉縁状を呈する。内底の周縁に強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒・石英粒を少量含む②還元③灰白色④深さ2.9、N7住-7	



第10表2 5区7号住居址出土土器観察表(第36図、図版65)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土色調 ③色調 ②焼成備考 ④備考
4	杯	$\frac{3}{8}$	12.0 3.3 7.1	北壁中央掘形	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部はわずかに内湾する。外底周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③灰白色④深さ2.6、N7住-8
5	杯	$\frac{1}{2}$	(12.8) 3.7 (7.3)	西壁中央覆土	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部はわずかに外反する。内外面に重ね焼痕がみられる。外底に2次火熱を受けている。回転糸切後無調整。	①白色細粒を含む②還元③灰黄褐色～黒褐色④深さ2.7、N7住-1
6	杯	$\frac{3}{8}$	11.5 3.5 7.2	北壁中央掘形	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。内底中央は凸である。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③黒色④深さ2.5、N7住-5
7	杯	$\frac{1}{2}$	(12.0) 3.8 (7.8)	北壁中央覆土	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底の周縁に強い絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③黒色④深さ3.0、N7住-3
8	杯	$\frac{3}{8}$	(12.0) 3.7 (7.4)	北壁中央覆土	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底の周縁に強い絞り込みがみられる。体部下半に厚みがある。内底中央は凸である。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③外面黒色、内面灰黄色④深さ2.8、N7住-4
9	杯	略完★	11.8 3.6 7.4	北壁中央掘形	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。内底の周縁に強いヨコナデを施し、外底の周縁には絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。底部にヒビ割れがある。	①白色粒を多く含む②還元、酸化気味③淡黄色④深さ2.9、N7住-9
10	杯	$\frac{1}{2}$	(13.2) 4.2 8.0	北壁中央掘形	ロクロ右回転。体部下半に丸味があり、口縁部はわずかに外反する。外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元、酸化気味③淡黄色④深さ3.5、N7住-10
11	杯	$\frac{3}{8}$	14.1 4.5 7.6	北壁中央掘形-10住北東隅	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底の周縁に強い絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①小石・白色粒・石英粒を含む②還元③灰白色④深さ3.5、N7住-15

第10表3 5区7号住居址出土土器観察表(第36・37図、図版65)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
12	高台椀	1/3★	(15.3) 8.5 高台 8.6	北壁中央 掘形	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらく。内底の周縁に強いヨコナデを施す。高台は高さ1.3cmで、「ハ」字状にひらく。外底に回転糸切痕を残している。底部中央に小石があり、そこでヒビ割れている。	①小石・白色粒を含む②還元③灰色④深さ7.2、N7住-12	
13	高台皿	略完★	17.5 3.7 9.4	北東隅覆 土	ロクロ右回転。体部は大きくひらき、口縁部は内側へ折れ曲るようにひらく。高台は高さ1.0cmで、「ハ」字状にひらく。外底に回転糸切痕を残している。内底に径8.5cmの重ね焼痕がある。底部にヒビ割れがみられる。	①小石・白色粒を含む②還元③灰色④深さ2.5、N7住-2	
14	甕	肩部片	— 現存高 5.0 —	北壁中央 覆土	頸部～体部の小片。頸部復原径は11.6cmである。内外面ともロクロナデを施す。	①白色粒を少し含む②還元③灰色④N7住-6	
15	甕	口縁部 1/2	(25.0) 現存高 6.4 —	北西隅覆 土-38号 土壇	口縁部は強く外反し、口唇部は断面三角形を呈して上方にのびる。口唇部内側は凹む。内外面ともロクロナデを施す。	①白色粒を多く含む②還元③青灰色④N7住-14	
16	甕	口縁部 小片	— 現存高 4.0 —	北東隅覆 土	口縁部は「く」字状に外反し、口唇部は断面三角形を呈して上方に発達する。口唇部外面に2本の凹線がある。内外面ともロクロナデを施す。	①白色粒を含む②還元③外面黒色、頸部内面浅黄色④N7住-17	

第11表1 5区9号住居址出土土器観察表(第44図、図版66)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
1	蓋	1/2	(13.5) 2.6 ツマミ 3.8	南壁中央 覆土	ロクロ右回転。天井部上半が丸く盛り上がり、下半は直線的に口縁部に至る。口唇部は細く外反する。ツマミは偏平で中央が凸である。天井部外面の上半にヘラケズリを施し、下半とは器厚が異なる。	①白色粒・小石を含む②還元③灰色④深さ1.2、9-59	

第11表2 5区9号住居址出土土器観察表(第44図、図版66)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土色調 ③ ②焼成備考 ④
2	蓋	1/3	(17.2) 3.8 ツمامミ 4.4	西壁中央覆土—北壁中央覆土	ロクロ右回転。天井部上半が丸く盛り上がり、下半は直線的に口縁部に至る。口唇部は外反して外側へまくれる。天井部外面の上半にヘラケズリを施す。	①石英粒を含む②還元③灰色④深さ1.9、9—58
3	蓋	略完★	16.0 3.0 ツمامミ 4.0	南西隅覆土	ロクロ右回転。天井部上半が丸く盛り上がり、下半は反転して口縁部に至る。内外面に重ね焼痕がみられる。外面の黄褐色部の径は8.8cmである。内面の半乾燥時のアタリは径4.4cm、溶着部の径は8.8cmである。口縁部にヒビ割れがみられる。ツمامミは偏平で中央が凸になり、端部は鋭くつくられている。	①白色粒を含む②還元③黒色④深さ2.0、9—55
4	蓋	1/2	(17.2) 3.7 ツمامミ 3.8	北壁中央覆土	ロクロ右回転。天井部上半が丸く盛り上がり、下半は直線的に口縁部に至る。口唇部は細く外反する。ツمامミは偏平で中央が凸である。天井部外面上半にヘラケズリを施す。	①白色粒を多く含む②酸化③にぶい黄褐色④深さ1.9、9—54
5	蓋	1/4	(16.7) 3.6 ツمامミ 3.4	中央覆土	ロクロ右回転。天井部の丸味は弱く、直線的に口縁部へ至り、外稜部は「く」字状に反転する。口唇部は細く、外反する。ツمامミは偏平なボタン状を呈する。内外面に重ね焼痕がみられる。	①白色粒を含む②還元③にぶい黄橙色、口縁部黒色④深さ2.4、9—56
6	蓋	略完	16.4 3.0 ツمامミ 4.1	中央掘形	ロクロ右回転。天井部上半が丸く盛り上がり、下半は反転して口縁部に至る。口唇部は直線的に「ハ」字状にひらく。ツمامミは偏平で、中央が凹む。天井部外面上半にヘラケズリを施し、重ね焼痕がみられる。その径は約10cmである。	①白色粒・小石を含む②還元③灰白色④深さ1.5、9—57
7	杯	1/3	(12.0) 3.6 (6.6)	南壁中央覆土	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらく。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底では強いヨコナデを施す。口縁部は強いヨコナデにより体部との境に弱い稜線を残す。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③灰色④深さ2.8、9—18

第11表3 5区9号住居址出土土器観察表(第44図、図版66)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
8	杯	$\frac{2}{3}$	(12.2) 3.5 7.1	南東隅掘形	ロクロ左回転。体部中位に弱い外稜をもつ。口縁部はわずかに外反する。外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③外面灰黄褐色、内面黒色④深さ2.8、9-4	
9	杯	$\frac{2}{3}$	11.7 3.2 6.6	中央-北壁中央掘形	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらく。内底の周縁に強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒・小石を含む②還元③外面にぶい黄褐色、内面灰褐色、口縁部黒色④深さ2.3、9-1	
10	杯	$\frac{1}{2}$	(11.5) 3.4 6.4	中央-東壁中央掘形	ロクロ右回転。体部は腰が張り、口縁部はわずかに外反する。外底の周縁に絞り込みがみられる。内底中央に円錐状の凸部がある。回転糸切後無調整。	①石英粒・小石を含む②還元③灰色④深さ2.5、9-15	
11	杯	$\frac{2}{3}$ ★	11.8 3.5 7.1	南壁中央-東壁中央掘形	ロクロ右回転。体部は腰がやや張り、口縁部は直線的にひらく。外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。底部～口縁部にヒビ割れがある。	①白色粒を多く含む②還元③灰色④深さ2.7、9-16	
12	杯	$\frac{2}{3}$ ★	11.0 3.1 6.0	北東攪乱	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部はわずかに外反する。外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。底部～口縁部にヒビ割れがある。	①白色粒・石英粒を含む②還元③灰色④深さ2.5、9-17	
13	杯	略完	11.5 3.4 6.6	南壁中央掘形	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底の周縁に絞り込みがみられ、内面では強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①石英粒を含む②還元③黒褐色④深さ2.5、9-2	
14	杯	$\frac{2}{3}$	11.3 3.1 6.0	北西隅覆土	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部がわずかに外反する。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁は強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③灰色④深さ2.2、9-37	
15	杯	略完★	11.5 3.3 7.0	カマド掘形	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部がわずかに外反する。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁は強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。下半の器厚がやや厚く、0.7cm前後である。	①白色粒を含む②還元③内底橙色、その他灰色④深さ2.4、9-10	

第11表4 5区9号住居址出土土器観察表(第45図、図版67)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②還元 ④備考
16	杯	略完★	11.5 3.7 6.6	カマド掘形	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁は強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。底部にヒビ割れがみられる。	①白色粒を含む②還元③青灰色④深さ2.7、9-34	
17	杯	略完	11.1 3.5 6.0	北壁中央掘形	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらき、口縁部はわずかに外反する。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁は強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①石英粒を含む②還元③灰色④深さ2.7、9-3	
18	杯	⅓	11.4 3.1 6.6	南東隅掘形	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらき、口縁部はわずかに外反する。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁は強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。口縁部にヒビ割れがみられる。	①白色粒を含む②還元③灰色④深さ2.4、9-36	
19	杯	⅓	12.0 3.2 7.2	P309	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。内底の周縁の境および口縁部に強いヨコナデを施す。外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③外面明褐色、内面灰色④深さ2.5、9-29	
20	杯	⅓	11.7 3.7 6.6	北東攪乱	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁は強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。口縁部にヒビ割れがみられる。	①白色粒を含む②還元③外面黒色、内面灰褐色④深さ2.5、9-12	
21	杯	略完	12.0 3.7 6.8	南東隅掘形	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらき、口縁部はわずかに外反する。外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③外面灰色、内面灰白色④深さ2.9、9-21	
22	杯	略完	12.2 3.9 7.2	中央掘形	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部はやや肥厚する。外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③灰色④深さ2.9、9-27	
23	杯	略完★	12.2 3.6 7.1	カマド前覆土	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。内底の周縁および口縁部に強いヨコナデを施す。外底の周縁に絞り込みがみられる。底部にヒビ割れがある。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③黒褐色④深さ2.6、9-31	

第11表5 5区9号住居址出土土器観察表(第45・46図、図版67・68)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
24	杯	1/2	12.0 3.6 6.6	カマド掘形	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部はわずかに外反する。外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③暗褐色④深さ2.7、9-28	
25	杯	略完★	12.1 4.0 6.4	カマド前覆土	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらき、口縁部は外反する。外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。底部にヒビ割れがある。	①白色粒を含む②還元③灰色④深さ3.1、9-35	
26	杯	略完	12.3 3.9 7.1	北壁中央掘形	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。内面に重ね焼痕がある。	①白色粒を多く含む②還元③灰色④深さ2.9、9-33	
27	杯	略完	12.3 3.9 6.6	カマド前覆土	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらき、口縁部は外反する。外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。内面に重ね焼痕がある。	①白色粒を含む②還元③灰色④深さ3.0、9-24	
28	杯	略完★	11.7 3.6 6.9	カマド前床面	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらき、口縁部はわずかに外反する。外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。内面に重ね焼痕があり、底部にヒビ割れがある。	①白色粒を含む②還元③外面灰色、内面灰白色④深さ3.0、9-25	
29	杯	略完★	11.7 3.8 6.8	カマド前床面	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらき、口縁部はわずかに外反する。外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。内面に重ね焼痕があり、底部にヒビ割れがある。	①白色粒を含む②還元③外面灰色、内面灰白色④深さ3.0、9-26	
30	杯	略完★	10.9 3.9 5.6	カマド掘形	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部はわずかに外反する。外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。底部に厚さがある。体部にヒビ割れが1カ所ある。	①白色粒を少し含む②還元③灰色④深さ2.8、9-38	
31	杯	略完	11.4 3.9 6.4	北西隅床面	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁は強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒・石英粒を含む③灰褐色④深さ3.0、9-30	

第11表6 5区9号住居址出土土器観察表(第46図、図版68・69)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
32	杯	略完	11.8 3.9 7.0	南東隅掘形	ロクロ右回転。体部は中位から外反してひらき、口縁部は肥厚する。内底の周縁に強いヨコナデを施す。底部の周縁に厚味がある。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③外面黒色、内面灰白～黒色④深さ3.1、9-22	
33	杯	ㄨ	11.5 3.7 6.6	カマド掘形	ロクロ右回転。体部は直線的にのび、口縁部は外反する。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁は強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③黒褐色、内底のみ明褐色④深さ2.6、9-6	
34	杯	略完★	11.7 3.9 6.3	北壁中央掘形	ロクロ右回転。体部は直線的にのび、口縁部はわずかに外反する。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁は強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。内面に重ね焼痕があり、底部にヒビ割れがある。	①砂粒を少し含む②還元③灰色④深さ3.0、9-14	
35	杯	略完★	11.5 3.9 6.3	南東隅掘形	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部内面がやや肥厚する。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁は強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。口縁部にヒビ割れがある。体部下半に厚味がある。	①白色粒・石英粒を少し含む②還元③外面灰色、内面淡黄色④深さ3.3、9-19	
36	杯	ㄨ★	11.4 4.1 6.2	カマド掘形	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部はわずかに外反する。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁は強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。内底にヒビ割れがある。	①白色粒を含む②還元③灰白色④深さ3.1、9-13	
37	杯	略完☆	11.9 4.1 6.2	南西隅覆土	ロクロ右回転。体部は薄く、直線的にひらく。口縁部内面がやや肥厚する。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁は強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③オリーブ黒色④深さ3.3、9-32	
38	杯	ㄨ	11.8 4.0 6.2	カマド掘形	ロクロ右回転。体部は薄く、直線的にひらき口縁部はわずかに外反する。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁は強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①石英粒・白色粒を含む②還元③黒色、一部灰色④深さ3.0、9-5	
39	杯	ㄨ	11.7 4.0 6.8	東壁中央掘形	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部はわずかに外反する。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁および口縁部下に強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③淡黄灰色④深さ3.1、9-11	

第11表7 5区9号住居址出土土器観察表(第47図、図版69)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
40	杯	略完 ☆	11.6 3.7 5.6	北西隅床 面	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらき、口縁部はわずかに外反する。外底の周縁に強い絞り込みがみられ、底部は凸出する。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③灰褐色④深さ3.0、9-23	
41	杯	⅓	(13.2) 3.9 (6.0)	南西隅覆 土	ロクロ左回転。体部は直線的にひらく。外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③灰色、外底灰白色④深さ2.9、9-84	
42	杯	⅓	(12.4) 3.5 (6.2)	南西隅覆 土	ロクロ右回転。体部は丸く内湾してひらき、口縁部は反転して外反する。外底の周縁に絞り込みがみられ、内外面にロクロナデ痕をよく残す。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③灰色④深さ2.8、9-86	
43	杯	⅓	(12.4) 3.3 (7.0)	南東隅掘 形	ロクロ右回転。体部は丸く内湾してひらき、口縁部は屈曲して外反する。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁は強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③外面黒色、内面灰白色④深さ2.6、9-85	
44	杯	略完 ★	12.2 4.0 6.5	カマド前 床面	ロクロ右回転。体部は内湾してひらき、口唇部は外反して玉縁状を呈する。内底の周縁に強いヨコナデを施す。内外面にロクロナデ痕をよく残している。回転糸切後無調整。口縁部にヒビ割れがある。内底にナデを施す。	①白色粒・小石を含む②酸化③明赤褐色④深さ3.4、9-7	
45	杯	略完 ★	12.3 4.2 6.5	南西隅床 面	ロクロ右回転。体部は内湾してひらき、口縁部は外反する。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁は強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。底部にヒビ割れがある。全体に歪みがある。	①白色粒を含む②還元③外面黒色、内面明赤褐色④深さ3.0、9-8	
46	杯	略完 ★	13.0 4.0 6.2	南西隅床 面	ロクロ右回転。体部は内湾してひらき、口縁部は外反する。外底の周縁に強い絞り込みがみられ、内底の周縁は強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。底部にヒビ割れがあり、全体に歪みをもつ。	①白色粒を含む②還元③口縁部～体部上半黒色、体部下半以下橙色④深さ2.9、9-9	
47	杯	⅓	(12.8) 4.0 7.0	西壁中央 覆土	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらき、口縁部内面はわずかに肥厚する。回転糸切後無調整。内底周縁に強いヨコナデを施す。	①白色粒を含む②還元③灰白色④深さ3.1、9-20	



第11表8 5区9号住居址出土土器観察表(第47・48図、図版69・70)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②還元 ④備考
48	椀	略完★	13.8 4.9 6.9	カマド前 床面	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部はわずかに外反する。外底周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁は強いヨコナデを施す。体部下半に厚味がある。回転糸切後無調整。内底および口縁部にヒビ割れがある。	①白色粒を多く含む②還元③外面灰色、内面灰白色④深さ4.1、9-42	
49	椀	⅔	13.5 4.7 7.5	カマド掘 形	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。体部中位が薄く、それ以下に厚味がある。外底周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁は強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。糸切痕の一部は折れ曲る。	①白色粒を含む②還元③灰色④深さ4.0、9-46	
50	椀	略完☆	13.9 4.5 7.2	南東隅掘 形	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁は強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。内外面に重ね焼痕がある。	①白色粒を少し含む②還元③口縁部灰色、その他灰白色④深さ3.6、9-39	
51	椀	⅔	(14.4) 4.8 8.0	カマド掘 形	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部内面がやや肥厚する。外底周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁は強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③外面黒色、内面灰色④深さ3.8、9-41	
52	椀	⅔	15.2 4.9 8.5	北壁中央 床面-カ マド前掘 形	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁は強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒・小石を含む②還元③灰色④深さ4.3、9-45	
53	椀	⅔	(14.8) 4.7 8.6	東壁中央 掘形	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部はやや内側に折れて直立気味になる。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁は強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒を少し含む②還元③灰色④深さ3.7、9-49	
54	椀	略完★	14.6 4.4 7.4	北壁中央 覆土	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらく。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁は強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。ヒビ割れがある。	①白色粒・石英粒を少し含む②還元③灰色、外底のみ灰白色④深さ3.5、9-44	
55	椀	略完	13.9 5.4 7.2	東壁中央 掘形	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらき、口縁部はわずかに外反する。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁は強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③灰色④深さ4.5、9-43	

第11表9 5区9号住居址出土土器観察表(第48・49図、図版70)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
56	椀	略完	13.6 5.7 6.6	カマド掘形	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらく、外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁は強いヨコナデを施す。内外面にロクロナデ痕をよく残している。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③外底～体部下半灰白色、内面灰色④深さ4.8、9-47	
57	椀	略完	14.0 6.1 7.2	北壁中央床面	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらき、外面は中位が凹んで波うつ。口縁部はわずかに外反する。外底の周縁に絞り込みがみられ底部は凸出する。内底の周縁は強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③灰色④深さ5.1、9-48	
58	椀	略完	14.4 5.7 7.5	東壁中央掘形	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらき、外面は中位が凹む。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁は強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒を少し含む②還元③外底にぶい橙色、その他灰色④深さ4.7、9-40	
59	高台椀	略完★	10.8 6.1 7.0	東壁中央掘形	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらく。高台は高さ1.1cmで「ハ」字状にひらく。内底の周縁に強いヨコナデ、高台脇にヨコナデを施す。回転糸切後高台貼り付け。内底にヒビ割れがあり、体部が歪んでいる。内底に重ね焼痕がみられ、径7.0で同器種を重ねたと考えられる。	①白色粒・小石を含む②還元③灰色④深さ4.1、9-50	
60	高台椀	1/2 高台欠	14.0 現存高 7.4 —	カマド前一中央床面	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部はやや内傾して直立気味となる。高台は欠く。高台取付け部径8.5cm。外底の高台内側は回転糸切後ナデ、内底の周縁はヨコナデを施す。	①白色粒を含む②還元③灰色、高台部黄灰色④深さ6.0、9-51	
61	高台皿	1/4	(18.8) 4.1 (11.0)	北東隅覆土	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部は屈曲して玉縁状を呈する。高台は高さ1.3cmで「ハ」字状にしっかりひらく。高台貼り付け後高台脇にヨコナデを施す。	①白色粒を含む②還元③灰色④深さ(2.0)、9-52	
62	高台皿	1/2 高台欠	(17.0) 現存高 2.7 —	北壁中央一東壁中央掘形	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、上半は薄い。口縁部は細く外反してつけられる。高台は欠失している。外底の高台内側は回転糸切後ヘラケズリを施し、さらに高台脇にヨコナデを加える。	①白色粒・小石を含む②還元③青灰色④深さ1.8、9-53	

第11表10 5区9号住居址出土土器観察表(第49図、図版70)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
63	椀	底部欠	(13.6) 現存高 5.6 —	東壁中央 掘形	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。内外面とも丁寧にロクロナデを施す。底部の形状は不明。	①白色粒を多く含む②酸化③ぶい橙色④9-83	
64	甕 H	口縁部	(11.0) 現存高 3.7 —	南壁中央 覆土	右回転。体部以下を欠く。内傾した頸部をもち、口縁部は外反して口唇部はわずかに玉縁状にまくれる。内面の口頸部はヨコナデ、頸部以下は丁寧なナデを施す。二次火熱を受けている。	①砂粒を多く含む②酸化③外面褐色、内面黒褐色④9-70	
65	甕 H	口縁部	(16.0) 現存高 5.4 —	中央覆土	ロクロ右回転。体部以下を欠く。弱い「く」字状の口縁部をもつ。現存破片でみると体部径は口径よりもやや大きい。	①白色粒を含む②還元気味③明褐色④9-73	
66	甕 H	口縁部	13.6 現存高 5.6 —	南東隅掘形	ロクロ右回転。体部以下を欠く。「く」字状の口縁部をもつ。内外面ともロクロナデを施す。	①白色粒・石英粒を多く含む②酸化③外面橙色、内面暗赤灰色④9-68	
67	甕 H	口縁部	(16.0) 現存高 5.8 —	北壁中央 掘形	ロクロ右回転。肩部以下を欠く。「く」字状に外反する口縁部をもち、口縁部外面の中位が凸状を呈する。体部は丸く膨らみ、口径よりも大きい。内外面ロクロナデを施す。	①白色粒を含む②酸化③灰黄褐色④9-76	
68	甕 H 貫	口縁部 小片	(20.0) 現存高 5.5 —	南壁中央 床面	ロクロ右回転。体部以下を欠く。「く」字状に外反する口縁部をもち、口唇部は上方に発達してつまみ出される。口唇部外面は内傾する平坦面をもつ。体部上半の外面は非回転のヘラケズリ、内面はロクロナデを施す。	①白色粒を含む②酸化③橙色④9-71	
69	甕	口縁部	(27.6) 現存高 8.8	南壁中央 掘形	ロクロ右回転。肩部以下を欠く。「く」字状に外反する口縁部をもち、口唇部は上方に発達する。内外面ロクロナデを施す。	①白色粒・小石を含む②還元③灰色④9-62	
70	不明	体部 小片	— 現存高 9.0 —	カマド掘形	ロクロ右回転。体部片の中央に断面三角形の罫がつき、1カ所に上→下に向う径3mmの小孔がある。内面はナデを施しているが、やや凹凸があり、叩キを加えた可能性がある。外面の罫下方はロクロナデ、上方は自然釉で調整は不明である。甕形土器か？ 罫の復原外径は28.0cmである。	①白色粒・細砂粒を含む②還元③灰色④9-88	

第11表11 5区9号住居址出土土器観察表(第49図、図版70)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
71	甕	1/5	(36.0) 現存高23.1 ●	カマド前 掘形	ロクロ右回転。鉢形にひらく体部をもち、体部の径は口径よりも小さい。底部は欠失しているが丸底と考えられる。肩部から一度頸部でしまり、口縁部は「く」字状に大きく外反する。体部外面は非回転ヘラケズリ、内面はロクロナデ→ナデ、口縁部はヨコナデを施す。口唇部は上方に発達して断面三角形を呈する。	①白色粒・石英粒・砂粒・小石を多く含む②酸化③にぶい黄橙色④深さ(22.5)、9-60	
72	甕	口縁部 体部欠	23.9 現存高11.1	カマド前 一中央床 面	右回転。口頸部は略完存し、体部以下を欠く。頸部は外反して立ち上り、口縁部は大きく外反する。口唇部はつまみ出されて上方に発達し、その外面に凹線を1本施す。頸部内外面にロクロナデ痕を残している。口縁部にヒビ割れがある。	①白色粒を含む②還元③灰色④9-61	
73	甕	底部片 1/5	— 現存高 6.2 (16.2)	東壁中央 掘形	回転方向不明。平底の甕の底部片。内面はナデ、外底の現存部までナデまたはヘラナデを施す。円盤状の底部の生地は、表面が黄橙色、中心部は灰色を呈する。	①白色粒を含む②還元③外面黄橙色、内面灰色④9-67	

第12表1 5区10号住居址出土土器観察表(第38図、図版71・72)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
1	蓋	1/5	16.6 4.4 ツمامミ 2.7	北西隅覆 土	ロクロ右回転。天井部が盛り上り、下半は直線的にひらく。ツمامミは断面台形を呈し、上面はやや凹むが中央は凸にならない。口唇部は内傾して折れ曲る。天井部外面の上半はヘラケズリを施す。	①白色粒を多く含む②還元③青灰色④深さ2.6、N10住-3	
2	蓋	1/5	(14.8) 現存高 2.3 —	中央覆土 -39号土 塚	ロクロ左回転。ツمامミを欠く。天井部下半は水平に近くなる。口縁部内面は凹線状を呈し、口唇部は「ハ」字状にひらく。天井部外面の上半はヘラケズリを施す。	①白色粒を多く含む②還元③青灰色④深さ1.7、N10住-37	
3	杯	1/5	12.2 3.5 7.0	中央床面	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。内底周縁に強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③灰白色④深さ2.7、N10住-30	
4	杯	略完	12.0 3.1 7.0	中央床面	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口唇部がわずかに外反する。内底の周縁に強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①砂粒を少し含む②還元③黄橙色④深さ2.6、N10住-32	

第12表2 5区10号住居址出土土器観察表(第38図、図版71・72)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特 徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
5	杯	⅔	12.2 3.5 7.3	北壁中央 覆土-38 号土壇	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらき、口唇部は丸くおさめる。外底の周縁に絞り込みがみられる。内底の周縁は強いヨコナデを施し、内底中央が丸く盛り上る。回転糸切後無調整。	①白色粒・石英粒を含む ②還元③灰白色④深さ2.9、N10住-27	
6	杯	⅔	(12.2) 3.8 (6.8)	北東隅覆土	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部はわずかに外反する。外底の周縁に強い絞り込をがみられる。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③灰色④深さ3.0、N10住-9	
7	杯	略完★	11.3~12.6 3.3~3.9 6.6	カマド前 一北東隅 覆土	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。ほぼ中央にヒビ割れがある。	①細砂粒を含む②還元③青灰色④深さ1.9~2.8、N10住-12	
8	杯	略完	12.0 3.9 6.0	カマド前 覆土-38 号土壇	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらき、下半は丸味をもつ。外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①細砂粒を含む②還元③灰色④深さ2.8、N10住-1	
9	杯	略完	12.2 3.6 7.2	中央覆土 -39号土 壇	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらき、口唇部は外反する。内底中央は凸である。外底周縁に円盤状の切離しバリがみられ、2回切離しと考えられる。内底周縁にヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③外面黒色、内面黄橙色④深さ2.6、N10住-34	
10	杯	略完	11.7 3.7 7.0	北東隅床 面-38号 土壇	ロクロ右回転。体部に丸味をもち、口縁部は外反する。外底周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。ほぼ中央で割れている。	①白色粒・石英粒を多く含む②還元、酸化気味③外面黒褐色、内面黄橙色④深さ2.8、N10住-11	
11	杯	略完	11.8 3.8 7.3	西壁中央 覆土-38 号土壇	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③外面黒色、内面黄橙色④深さ2.5、N10住-33	
12	杯	略完★	11.9 3.4 7.0	北壁中央 覆土	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部は薄くなる。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁は強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。底部にヒビ割れがある。	①白色粒を多く含む②還元③体部黒色、底部淡黄色④深さ2.5、N10住-22	

第12表3 5区10号住居址出土土器観察表(第38・39図、図版71)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土色調 ③焼成備考 ②酸化気味 ④深さ
13	杯	⅔	11.5 3.4 7.0	中央床面 —北壁中央	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底の周縁に強い絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色粒・石英粒を含む ②還元、酸化気味③外面黒褐色、内面灰黄褐色 ④深さ2.7、N10住—29
14	椀	⅔	(15.0) 4.8 (8.8)	北壁中央 覆土	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらき、口縁部は薄くなる。外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色粒・石英粒を多く含む②還元③外面黒色、内面灰黄褐色④深さ3.8、N10住—7
15	椀	⅔	(15.9) 5.5 9.5	カマド前 床面—39 号土壇	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらき、下半に丸味をもつ。底部周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色粒・小石を含む②還元③灰白色④深さ4.8、N10住—16
16	椀	⅔	15.4 5.6 8.2	カマド前 床面	ロクロ右回転。体部は内湾してひらく。外底の周縁に絞り込みがみられる。内底中央は凸である。回転糸切後無調整。	①白色粒・小石を含む②還元、酸化気味③灰褐色④深さ4.6、N10住—17
17	椀	略完	14.3 5.3 7.7	北壁中央 覆土— 39号土壇	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらく。外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元、酸化気味③橙色、一部黒褐色④深さ4.5、N10住—28
18	椀	⅔	13.3 5.0 7.6	北壁中央 覆土	ロクロ右回転。体部は直線的にのび、中位の器厚が厚い。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁は強いヨコナデを施す。静止糸切後無調整。	①白色粒・石英粒を多く含む②還元、酸化気味③浅黄色④深さ4.2、N10住—2
19	高台皿	口縁部 欠	— 現存高 2.9 高台(15.6)	中央床面 —北壁中央	ロクロ左回転。口縁部を欠き、高台は一部残存している。高台の高さは1.4cmで、ほぼ直立する。外底の高台内部はヘラケズリを施し、高台脇はヨコナデを施す。内底はロクロナデ痕が残っている。	①小石・白色粒を含む②還元③灰白色④N10住—23

第12表4 5区10号住居址出土土器観察表(第39・40図、図版72)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土色調 ③焼成備考
20	高台皿	1/2	(18.0) 3.7 高台(9.3)	カマド前 覆土-38 号土壇	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部は外反気味に直立する。口唇部は丸く肥厚する。高台は高さ1.2cmで、「ハ」字状にひらく。外底の高台内側に回転糸切り痕が残っている。	①白色粒を含む②還元③灰色④深さ1.6、N10住-13
21	高杯	膨部	— 現存高 7.1 —	中央覆土	ロクロ回転方向不明。杯部・脚端部とも欠く。杯部との接合痕を残し、この部分の径は4.7cmである。内外面ともロクロナデを施す。	①白色粒を多く含む②還元③灰色④N10住-26
22	高杯	脚部	— 現存高 9.6 12.8	北西隅床 面-38号 土壇	ロクロ右回転。杯部を欠き、杯部との接合面を一部残している。脚端部はヨコナデを施し、他の部分はロクロナデである。	①小石・石英粒を含む②還元、酸化気味③黄褐色④N10住-4
23	壺	底部片	— 現存高 4.3 (9.6)	中央床面	ロクロ回転方向不明。底部小片で、高台の接合面を残す。外底は高台脇にヨコナデを施す他、無調整。	①白色粒を多く含む②還元③青灰色④N10住-31
24	甕 H	口縁部 1/4	(21.2) 現存高 9.0 —	カマド前 床面	口縁部～肩部の破片。頸部は丸味をもっている。最大径は体部にある。口縁部はヨコナデ、肩部以下の外面はヘラケズリ、内面はナデを施す。	①砂粒を多く含む②酸化③外面にぶい橙色、内面橙色④N10住-14
25	甕 H	口縁部 1/2	(20.0) 現存高 5.0 —	カマド前 床面	口縁部～頸部の小片。頸部は丸味をもっている。口縁部はヨコナデ、頸部以下の外面はヘラケズリ、内面はナデを施す。	①砂粒を多く含む②酸化③ぶい橙色④N10住-15
26	甕 H	口縁部 小片	— 現存高 5.7 —	北西隅覆 土	口縁部～肩部の小片。口縁部断面は波状を呈する。肩部以下の内外面はともにロクロナデを施す。頸部内面に稜をもつ。	①白色小粒を含む②酸化③灰褐色④N10住-24
27	甕 H	口縁部 小片	— 現存高 4.2 —	北壁中央 覆土	口縁部～肩部の小片。「く」字状に外反する口縁部をもち、頸部内面に稜をもつ。口縁部内面が凹み、口唇部内面は肥厚する。口縁部はヨコナデ、頸部以下の内外面はともにロクロナデを施す。	①白色小粒を少し含む②酸化③外面淡褐色、内面にぶい黄褐色④N10住-25

第12表5 5区10号住居址出土土器観察表(第37・40図、図版72)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
28	甌	底部 小片	— 現存高 5.3 (14.5)	北壁中央 覆土	1対2孔の穿孔痕をもつ底部小片。穿孔は焼成前に外面→内面の方向で行ない、2孔の最短距離は2.6cmで、別例から見て2対(4孔)が約180°で向い合ったと見られる。底面と外面の底部周縁とはヘラケズリ、内面はロクロナデを施す。内面の孔周辺は穿孔バリをナデつけている。	①黒色粒・白色小粒・石英粒を含む②還元③灰色④N10住-10	
29	甕	口縁部 小片	— 現存高 6.1 —	西壁中央 覆土-39 号土壇	口縁部～肩部の小片。頸部は丸味をもつ。口唇部外面は下方に発達し、上端は薄く上方へのびる。口縁部はヨコナデ、頸部以下はロクロナデを施す。ロクロ右回転。	①白色粒を多く含む②還元③青灰色④N10住-6	
30	甕	1/2 底部欠	(25.2) 現存高11.1 —	カマド前 床面	ロクロ右回転。口縁部～体部上半の破片。口縁部は「く」字状に外反し、口唇部は上下に発達する。体部は内外面ともにロクロナデを施す。	①白色粒・小石を含む②還元③灰白色④N10住-35	
31	壺	口縁部 1/2	12.3 現存高12.8 —	北壁中央 覆土	口縁部～肩部の破片。口縁部は直に立ち上り、口唇部は上下に発達する。肩部以下の内面には叩きの痕跡を残すが、無文である。口縁部内面及び外面には自然釉がかかる。	①白色粒を含む②還元③灰色④N10住-38	
32	甕	1/2	(24.5) 現存高39.3 —	カマド前 床面	底部が剥離して、欠く。径13cm前後の円盤状の底部が考えられる。最大径は体部上位にあり、口縁部は水平近くまで外反し、口唇部は上下に発達する。口唇部外面は2本の凹線をもつ。叩き成形ののち、外面はヨコナデを施し、内面の肩部と底部近くにもヨコナデを加える。外面の叩き目は平行、内面は無文である。最大径付近に幅1mmの凹線がある。底部近くの内面に粘土の継ぎ目がみられる。	①白色粒・小石を含む②還元③灰色④N10住-40	



第13表1 5区11号住居址出土土器観察表(第52図、図版73)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	① 胎土 ③ 色調	② 焼成 ④ 備考
1	蓋	⅔	17.8 3.2 ツمامミ 3.7	西壁中央 床面	ロクロ右回転。天井部上半がやや盛り上がり、下半は直線的に口縁部に至る。口唇部は外反し、その外面は凹線状を呈する。ツمامミは偏平で中央が凸である。天井部外面の上半はヘラケズリを施す。内面に重ね焼痕があり、その径は14cm前後である。	①石英粒・小石を含む②還元③灰白色④深さ1.3、N11-1	
2	杯	略完★	11.8 3.7 6.7	中央床面	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部は強いヨコナデによりわずかに外反する。内底周縁は強いヨコナデを施し、内底中央は丸く盛りあがる。回転糸切後無調整。口縁部にヒビ割れがある。	①白色粒を多く含み、小石が混る②還元③灰褐色④深さ2.5~2.9、N11-2	
3	杯	略完★	11.9 4.0 6.4	中央床面	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の同位置は強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。内底にヒビ割れがある。	①白色粒を多く含む②還元③外面黒色、外底明黄褐色、内面にぶい黄橙色④深さ3.2、N11-3	
4	杯	⅔★	11.5 3.6 6.2	南壁中央 床面	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく、外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。底部近くにヒビ割れがある。	①白色粒を多く含む②還元③外面灰白色、内面灰褐色④深さ2.6、N11-4	
5	杯	略完★	11.4 3.4 6.0	東壁中央 床面	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらき、口縁部はわずかに外反する。外底周縁に絞り込みがみられ、内底の同位置は強いヨコナデを施す。口縁部の1カ所にヒビ割れがあり、他の1カ所は1.4×1.0cmほどの小石を含んでいる。	①白色粒を多く含む②還元③灰白色④深さ2.5、N11-5	
6	杯	略完★	11.8 3.5 6.8	中央床面	ロクロ右回転。体部は内湾してひらき、口縁部はわずかに外反する。口縁部内面がやや肥厚し、ゆるい内稜をつくる。外底周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。底部にヒビ割れがある。	①白色粒を含む②還元③黒色④深さ2.5、N11-6	
7	椀	⅔ 高台欠	(15.6) 現存高 6.8 —	東壁中央 床面	ロクロ右回転。底部との境に外稜をもつ。体部は直線的にひらき、口唇部はわずかに外反して玉縁状を呈する。内底の周縁に凹線を1本施す。高台を欠き、高台とり付け部の径は8cm前後で外稜部径(12.3cm)。外底の高台内側は回転糸切痕を残す。高台脇はヨコナデを施す。	①白色粒・小石を含む②還元③灰色④深さ5.3、N11-7	

第13表2 5区11号住居址出土土器観察表(第52図、図版73)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
8	甕	口縁部 1/2	(19.0) 現存高 3.3 —	東壁中央 床面	ロクロ右回転。甕の口縁部小片。「く」字状に外反する口縁部をもつ。口唇部は上方に発達し、その内側は凹む。口縁部中位の外面が肥厚する。	①白色粒を含む②酸化③黄橙色④N11-8	

第14表1 6区1号住居址出土土器観察表(第56図、図版73・74)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
1	蓋	口縁部 1/2	(12.9) 現存高 2.1	貯蔵穴	口縁部ヨコナデ。高台皿の可能性がある。	①石英粒を少し含む②還元③灰色、外面の一部に淡赤橙色部分あり、1-32	
2	蓋	口縁部 1/2	(18.1) 現存高 2.4	北壁中央 床面	口縁端部は折れ曲らず、断面方形を呈する。天井部外面はロクロ右回転ヘラケズリ、口縁部はヨコナデを施す。	①白色粒を多く含む②還元③灰色④内面に重ね焼痕、1-31	
3	杯	略完	10.3 3.8 6.3	東壁中央 床面	ロクロ左回転。体部中位は内湾気味で、口縁部の器厚は薄い。底部は静止糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③灰白色④深さ3.2、1-17	
4	杯	略完	12.3 3.6 6.2	東壁中央 床面	ロクロ左回転。体部は外上方にのびる。底部中央の器厚はやや薄い。静止糸切後無調整。歪みあり。	①白色粒・石英粒を少量含む②還元③外面黒灰色、内面灰色④深さ2.8、1-16	
5	杯	完★	11.6 4.0 6.1	南西隅覆 土	ロクロ右回転。体部は直線的にのびる。内底の周縁に強いヨコナデを施す。外底は回転糸切後無調整。口縁部～体部中位にかけて割れがある。歪みあり。	①白色粒を少量含む②還元③にぶい褐色④深さ3.1、1-4	
6	杯	完★	12.0 3.8 5.8	貯蔵穴	ロクロ右回転。外底の周縁に強い絞り込みがあり、腰が張る。口縁部は外反する。外底は回転糸切後無調整。底部に割れがある。	①白色粒を含む②還元③暗灰色④深さ2.7、1-2	
7	杯	完★	10.8 3.2 6.8	東壁中央 床面	ロクロ右回転。外底の周縁に絞り込みがあり、腰が張る。口縁部は外反し、内面側が丸く肥厚する。回転糸切後無調整。底部に割れあり。	①白色粒を含む②還元③灰色④深さ2.6、1-1	

第14表2 6区1号住居址出土土器観察表(第56図、図版73・74)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
8	杯	略完★	12.1 3.1 7.0	南西隅覆土	ロクロ右回転。外底の周縁に絞り込みがあり、口縁部は折れ曲るように外反する。回転糸切後無調整、3本の平行する圧痕あり。底部に割れがある。内底に重ね焼痕。	①白色粒を含む②還元③外面黄灰色、内面オリーブ黒色④深さ2.4、1-6	
9	杯	略完	12.2 3.3 6.6	南西隅覆土	ロクロ右回転。外底の周縁に強い絞り込みがあり、腰が張る。口縁部はわずかに外反する。回転糸切後無調整。口縁部に焼成前の折れがある。	①白色粒が多く混り、石英粒少②還元③オリーブ黒色④深さ2.7、1-3	
10	杯	略完★	12.3 3.6 6.8	東壁中央床面	ロクロ右回転。外底の周縁に強い絞り込みがあり、腰が張る。中位から上方は直線的。回転糸切後無調整。口縁部にヒビ割れが3カ所ある。	①石英粒を多く含む②還元③外面黒色、内面淡黄色④深さ2.7、1-9	
11	杯	1/2	(12.2) 3.5 6.6	カマド前覆土	ロクロ左回転。体部下位で器厚が薄く、上位で厚い。体部は内湾気味。回転糸切後無調整。	①白色粒・石英粒を多く含む②還元③外面にぶい黄橙色、内面オリーブ黒色④深さ2.6、1-7	
12	杯	略完	12.7 4.0 7.3	南西隅覆土	ロクロ右回転。外底の周縁に絞り込みがあり、腰がやや張る。体部は内湾気味で、口縁部はわずかに外反する。回転糸切後無調整。内面に重ね焼痕あり。	①白色粒を多く含む②還元③外面黒色、内面灰色④深さ3.3、1-5	
13	杯	口縁部 1/4欠	13.2 3.9 7.0	東壁中央床面	ロクロ左回転。体部は直線的にのび、口縁部がわずかに外反する。回転糸切後無調整。内底に黒褐色の付着物あり。1-8	①白色粒を含む②還元③外面オリーブ黒色、内面灰黄褐色④深さ3.1	
14	杯	口縁部 1/2欠	(12.5) 4.0 6.8	中央覆土	ロクロ右回転。体部はほぼ直線的にのび、口縁部直下の内面に強いヨコナデが施される。内面の体部と底部の境に強いヨコナデが施される。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③外面黒色、内面オリーブ黒色④深さ3.0、1-11	
15	杯	略完★	12.6 3.7 6.4	南西隅覆土	ロクロ左回転。体部は直線的にのびる。内底の周縁を入念にヨコナデする。回転糸切後無調整。底部にヒビ割れあり。	①白色粒を含む②還元③灰色④深さ3.0、1-10	

第14表3 6区1号住居址出土土器観察表(第56・57図、図版74~76)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
16	杯	$\frac{2}{3}$	12.2 3.6 6.4	東壁中央 床面	ロクロ右回転。体部は直線的にのびる。外底の周縁に絞り込みがある。口縁部は強いヨコナデによってわずかに外反し、器厚は体部に比べ薄い。底部も薄く、内底は同心円状に波うつ。静止糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③灰白色④深さ3.4、外面に墨書あり、1-15	
17	椀	$\frac{3}{4}$	13.4 6.5 6.4	東壁中央 床面	ロクロ左回転。内湾する体部をもつ。口唇部はわずかに外反する。外底の周縁に絞り込みをもつ。回転糸切後無調整。	①白色粒を少量含む②還元③灰白色④深さ5.6、1-18	
18	椀	$\frac{1}{2}$	(15.0) 4.9 7.4	北西隅覆 土	ロクロ左回転。体部は直線的にのびる。外底の周縁に強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③黒褐色④深さ3.8、1-13	
19	椀	$\frac{1}{6}$	(14.6) 5.4 7.8	東壁中央 床面	ロクロ右回転。体部は内湾気味。口縁部は強いヨコナデにより外反する。外底の周縁に絞り込みをもつ。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③外面黒色、内面オリーブ灰色④深さ4.6、1-12	
20	椀	$\frac{2}{3}$ ★	15.5 5.7 7.1	東壁中央 一南壁中 央床面	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口唇部は外反する。外底の周縁に絞り込みをもつ。回転糸切後無調整。内底にヒビ割れをもつ。	①白色粒を少量含む②還元③外面灰白色、内面オリーブ灰色④深さ5.0、1-14	
21	高台椀	底部～ 体部 $\frac{1}{2}$	— — (7.5)	南西隅覆 土	ロクロ右回転。内湾気味の体部をもつ。高台は1.2cmの高さで、「ハ」字状に開く。回転糸切後高台を貼付け、高台脇をヨコナデする。	①白色粒・黒色粒を含む②還元③灰色④1-33	
22	高台椀	略完★	(15.0) 7.0 8.2	北東隅床 面	ロクロ右回転。内湾気味の体部をもち、口縁は外反する。体部中位に厚味をもつ。高台は0.7cmの高さで「ハ」字状に開き、外側は上方にまくれ上る。回転糸切後高台貼付け。内面の内底の周縁に強いヨコナデを施すが、ヒビ割れしている。	①白色粒を多く含む②還元③灰白色④深さ5.4、1-19	
23	高台椀	$\frac{1}{4}$	16.0 7.4 8.3	東壁中央 床面	ロクロ左回転。体部は内湾気味に外上方に開く。高台は1.1cmの高さで「ハ」字状に開き、端部を丸くおさめる。外底に厚味をもつ。回転糸切後高台貼付け。	①白色粒を少量含む②還元③灰白色④深さ5.1、1-20	

第14表4 6区1号住居址出土土器観察表(第57・58図、図版75・76)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調 ②焼成 ④備考
24	甕 H	⅓	13.7 13.5 5.1	東壁中央 床面一貯 蔵穴	ロクロ右回転。丸い胴部に「く」字状に外反する口縁をもつ。最大径は胴部中位にあり、14.0cm。口縁部は強いヨコナデにより、やや内湾する。外底は静止糸切後、周辺から体部下半にかけてヘラケズリを施す。	①石英粒・白色粒を多量に含む②酸化③褐色④深さ13.0、1-23
25	甕 H	⅓	(11.5) 10.6 (5.3)	南壁中央 覆土	ロクロ右回転。丸い胴部に「く」字状に外反する口縁をもつ。最大径は胴部中位にあり、11.7cm。胴部下半から外底はヘラケズリを施す。	①石英粒・白色粒を多量に含む②酸化③灰褐色④2次加熱を受けている、1-21
26	甕 H	⅓ 口縁部 欠	— 現存高 8.8 3.7	カマド前 床面一貯 蔵穴	ロクロ右回転。丸い胴部をもつ。底部は静止糸切後、体部⅓以下からヘラケズリを施す。内面はロクロ痕が目立つ。	①白色粒を多く含む②酸化③灰褐色④2次加熱を受けている、1-22
27	甕	下半⅓	— 現存高 6.6 4.8	南西隅覆 土	ロクロ右回転。丸い胴部をもち、現存胴部最大径は(12.7)である。底部は静止糸切で、周縁の外面にヘラケズリを施す。内面はロクロ痕が目立つ。	①石英粒・白色粒を多量に含む②酸化③灰褐色④1-24
28	甕 H	底部片	— 現存高 7.5 多角形約4.0	貯蔵穴	「コ」字状の口縁部をもつ甕の底部片。内底にヘラの圧痕があり、他の内面はナデを施す。外面はヘラケズリを施し、器厚を薄くしている。外底は不整多角形を呈する。	①砂粒を多量に含む②酸化③灰褐色④1-25
29	甕 H質	口縁部 ⅓	(29.0) 現存高14.3 —	カマド一 カマド前 覆土	丸味の少ない胴部に「く」字状に外反する口縁部をもつ。口唇部は上方に発達しており、須恵器的端部をもつ。体部外面に叩き目とヘラケズリ痕を残す。体部内面はロクロ痕が目立つ。ロクロ左回転。	①白色粒を多く含む、石英粒あり②酸化③灰褐色④1-26
30	甕 H質	口縁部 ⅓	(22.2) 現存高10.9 —	カマド前 一中央覆 土	ロクロ左回転。「く」字状に外反する口縁部をもつ。体部外面に叩き目を残す。内・外面にロクロ痕が目立つ。	①小石・白色粒を多く含む②酸化③褐色④1-28

第14表5 6区1号住居址出土土器観察表(第58図、図版75・77)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
31	甕 H質	口縁部 %	(21.6) 現存高17.8 —	カマド前 床面一貯 蔵穴	ロクロ回転方向不明。「く」字状に外反する口縁部をもつ。体部上位に叩キ目→ロクロナデ→底部へ向うヘラケズリ痕を残す。内面に叩キ当て具痕が一部残る。外面叩キ目の凹部には、叩キ目に直交する繊維状の細線がみられる。叩キ目の凹凸の間隔は2～3mmである。	①砂粒を多く含む②酸化 ③褐色④1-27	
32	甕 H質	口縁部 %	(21.8) 現存高14.2	貯蔵穴一 南壁中央 覆土	ロクロ左回転。口縁部は「く」字状に外反し、端部は丸く納める。体部に叩キ目を残し、凹凸の間隔は2～4mmである。	①砂粒を多く含む②酸化 ③橙色④1-29	
33	甕 H質	底部片	— 現存高 4.0 ●	中央覆土	外面に平行叩キ目を残し、内面は不定方向のナデを施す。	①石英粒・白色粒を多量 に含む②酸化③黄橙色④ 1-35	
34	甕	底部片	— 厚さ 1.4 —	貯蔵穴	外底に同心円状の痕跡がみられる。成形時のものか。内面はナデを施す。	①白色粒を多く含む②酸化 ③外面赤灰色、内面橙 色④1-34	
35	甕	口頸部 %	(24.0) 現存高 8.3 —	カマド	頸部はほぼ直立し、口縁部は大きく外反する。口唇部は上下に発達する。内外面ともロクロナデが目立つ。	①白色粒を少量含む②還 元③灰白色④1-30	

第15表 掘立柱建物出土土器観察表(第72図)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
1	椀	%	(12.0) 6.3 6.6	5-8号 掘立南西 隅ピット	ロクロ左回転。体部は腰が張り、口縁部は直立する。外底の周縁に絞り込みがみられる。内底中央は凸で、内面は焼成時の灰を被っている。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③ 灰色④深さ5.4、8掘-1	
2	壺? H質	口縁部 %	(7.8) 現存高 2.5	5-18号 掘立ピッ ト5	口縁部～肩部の小片。全形は不明。口縁部は外反気味に直立し、口唇部は平坦で、口唇部外端がひき出されている。肩部の外面は平滑に仕上げしており、ヘラミガキを施した可能性がある。内面はヨコナデを施す。	①白色粒を少し含む②環 元③にぶい黄橙色④18掘 -1	
3	蓋	ツマミ	— 現存高 3.2 ツマミ 2.7	25号掘立	ツマミは完存するが、口縁部を欠く。擬宝珠形のツマミで、高さ1.8cmである。ツマミ周囲はヨコナデを施し、丁寧に仕上げている。天井部外面は右回転ヘラケズリを施す。	①白色粒・小石を含む② 還元③灰白色④N25掘 -1	

第16表1 土壇出土土器観察表 (第93図、図版79)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
1	蓋	略完	17.7 3.9 ツمامミ 3.8	1号土壇	ロクロ右回転。天井部上半が盛り上り、下半は直線的にひらく。ツمامミは偏平で、中央が凸である。口唇部は断面三角形を呈し、その外面は内傾する。天井部外面の上半はヘラケズリを施す。	①白色粒を多く含み、石英粒・小石が混る②酸化③橙色④深さ2.2、1土壇-2	
2	杯	1/4	(11.8) 3.5 (7.1)	1号土壇	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部がわずかに外反する。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②酸化③灰褐色④深さ2.9、1土壇-5	
3	杯	1/4	(12.5) 3.6 (7.8)	1号土壇	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。底部周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。器表磨減。	①白色粒・石英粒を含む②還元③黒色④深さ2.8、1土壇-4	
4	杯	略完★	11.6 3.5 7.0	1号土壇	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部はわずかに外反する。回転糸切後無調整。底部にヒビ割れがある。内底中央は凸である。	①白色粒・石英粒を含む②還元③灰色④深さ2.6、1土壇-3	
5	杯	3/4	11.7 3.6 6.9	1号土壇	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらく。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁は強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元、酸化気味③外面黒褐色、内面にぶい黄褐色④深さ2.7、1土壇-1	
6	稜椀	1/4	16.0 現存高 7.2 —	3号土壇	ロクロ右回転。高台を欠く。底部と体部との境に弱い外稜をもち、体部は内湾気味にひらく。内底の周縁は凹線状を呈する。回転糸切後高台貼り付け。外稜部にヒビ割れがある。	①白色粒・石英粒・小石を含む②還元③外面黄褐色、内面灰白色④深さ5.6、3土壇-1	
7	椀	1/4	(16.0) 6.0 7.2	6号土壇	ロクロ左回転。体部下半は丸味をもち、上半は直線的にひらく。口縁部外面に凹線を1本もつ。内底の周縁は強いヨコナデを施す。外底には回転ヘラケズリを施す。	①白色粒を含む②還元、酸化気味③灰白色④深さ4.9、6土壇-1	
8	甕	口縁部 1/4	(28.0) 現存高12.5 —	6号土壇	ロクロ回転方向不明。頸部は指頭幅でしまり、口縁部は短く外反する。口唇部は外上方へ薄くひらく。体部下半は叩き絞めたのちロクロナデを加える。底部を欠く。	①白色粒・石英粒を含む②還元③外面灰白色、内面橙色④N 6土壇-2	
9	フイゴ 羽口	略完	長さ 10.5 外径 9.7 孔径 1.3~ 1.7	10号土壇	フイゴ側の端部が一部遺存しているが、この端部と孔の中軸線は直交せず、76°の角度を測る。孔径はフイゴ側が大きい。外周の一部にヒモで縛ったようなアタリがみられる。先端の鉄滓は孔付近のみ磁石に反応する。	①多量の砂と少量の繊維を含む②酸化、先端部は還元気味③淡黄褐色④ロクロ不使用、10土壇-1	

第16表2 土壇出土土器観察表 (第94図、図版79・81・82)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
10	高台椀	⅔	(15.5) 8.7 8.8	21号土壇	ロクロ右回転。体部は内湾してひろく。高台は高さ1.3cmで、「ハ」字状にひろく。内底周縁は強いヨコナデを施す。外底の高台内側に回転糸切痕を残している。	①小石・白色粒を含む②還元③灰色④深さ6.1、21土壇-1	
11	椀	⅔	13.8 5.3 7.3	24号土壇	ロクロ右回転。体部は内湾してひろく。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁は強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒・石英粒を含む②還元③灰色④深さ4.4、24土壇-1	
12	甕	体部片	— — —	29号土壇	大型の甕の体部片である。内外面に叩キの痕跡を残している。外面の叩キ目は平行、内面の当て具は同心円で中央が凸である。	①白色細粒を含む、一部暗紫色②還元③灰色④29土壇-1	

第17表1 5区2号土壇出土土器観察表 (第90図、図版80)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
1	蓋	⅔	(17.4) 3.1 ツマミ 4.0	P12	ロクロ右回転。天井部から直線的に口縁部に至る。ツマミは偏平で中央が凸である。口唇部は下方にのびて外反し、その外面は凹線状を呈する。天井部外面の上半にヘラケズリを施し、同位置に重ね焼痕がみられる。	①白色粒を含む②還元③灰色④深さ1.5、2土壇-15	
2	蓋	⅔	(13.6) 3.8 ツマミ 3.4	P13	ロクロ右回転。天井部上半は丸く盛り上がり、下半は直線的に口縁部に至る。口唇部は薄く外反し、その外面は凹線状を呈する。ツマミは偏平で中央が凸である。天井部外面にヘラケズリを施す。内面に重ね焼痕があり、その径は10.2cmである。	①白色粒・石英粒を多く含む②還元③外面黒色、内面にふい黄橙色④深さ2.4、2土壇-16	
3	杯	体部 ⅔	(11.7) 3.7 (7.5)	P55	ロクロ左回転。体部は直線的にひろく。内外面にロクロナデ痕を残す。	①白色粒・小石を含む②還元③黄灰色④深さ3.0、2土壇-18	



第17表2 5区2号土坑出土土器観察表(第90図、図版80)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
4	杯	略完★	11.7 3.4 6.5	P54	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底の周縁に強い絞り込みがみられ、底部は凸出する。回転糸切後無調整。底部にヒビ割れがある。	①白色粒を含む②還元③黒色、口縁部外面灰色④深さ2.5、2土坑-10	
5	杯	略完☆	11.3 3.3 6.6	P56	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底の周縁に強い絞り込みがみられ、底部は凸出する。回転糸切後無調整。	①白色粒・小石を含む②還元③黄灰色、口縁部外面灰色④深さ2.5、2土坑-8	
6	杯	1/2	12.0 3.3 6.9	P25	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底の周縁に絞り込みがみられ、底部は凸出する。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③外面黒色、内面灰黄色④深さ2.4、2土坑-13	
7	杯	略完★	11.5 4.7 6.8		ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底の周縁に絞り込みがみられ、底部は凸出する。回転糸切後無調整。底部にヒビ割れがあり、全体に歪みがある。	①白色粒・小石を含む②酸化③橙色④深さ2.7、2土坑-7	
8	杯	略完★	11.5 3.4 6.6	P17	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底の周縁に絞り込みがみられ、底部は凸出する。内底の周縁は強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。底部にヒビ割れがある。	①白色粒・小石を含む②還元③黒色④深さ2.6、2土坑-9	
9	杯	1/2	(12.1) 3.7 (7.7)	P11	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底の周縁に強い絞り込みがみられ、底部は凸出する。回転糸切後無調整。内底中央に小石がある。	①白色粒・小石を含む②還元③外面黒褐色、内面淡黄色④深さ2.7、2土坑-21	
10	杯	略完★	10.8 3.4 6.0	P53	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の同位置は強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。底部にヒビ割れがある。	①白色粒を含む②還元③黒色④深さ2.6、2土坑-11	
11	杯	1/2	(11.0) 3.4 6.2	P35	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらき、腰が張る。外底の周縁に絞り込みがみられ、底部は凸出する。回転糸切後無調整。	①細かい白色粒を含む②還元③黒色④深さ2.6、2土坑-19	
12	杯	1/2	(11.6) 3.3 6.2	P23	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらき、口縁部はわずかに外反する。外底の周縁に絞り込みがみられ、底部は凸出する。回転糸切後無調整。	①白色粒・石英粒を多く含む、小石が混る②還元③青灰色④深さ2.4、2土坑-17	

第17表3 5区2号土坑出土土器観察表 (第90・91図、図版80)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	① 胎土 ③ 色調	② 焼成 ④ 備考
13	杯	⅓	(10.9) 3.2 (6.7)	P65	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらき、口縁部はわずかに外反する。体部下半に厚味があり、腰が丸く張る。外底の周縁に絞り込みがみられ、底部は凸出する。回転糸切後無調整。	①小石・白色粒を含む②還元③灰色④深さ2.5、2	土坑-20
14	杯	⅓	(16.0) 4.8 (9.6)	P18	ロクロ右回転。体部は直線的にひらくが、下半はやや丸味をもつ。外底周縁に絞り込みがみられ、底部は凸出する。回転糸切後無調整。体部の内外面にロクロナデ痕をよく残す。ヘラ記号状の「一」が外底周縁にある。	①白色粒・小石を含む②還元③灰白色④深さ4.0、2	土坑-23
15	杯	⅓	(14.0) 4.8 (8.2)	P16	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、下半に厚味がある。外底の周縁に絞り込みがみられ、底部は凸出する。回転糸切後無調整。	①白色粒・小石を含む②還元③外面灰色、内面灰白色④深さ3.7、2	土坑-22
16	杯	⅓	(14.5) 4.9 (7.5)	P24	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底の周縁に絞り込みがみられ、底部は凸出する。回転糸切後無調整。	①白色粒・小石を含む②還元③灰色④深さ3.6、2	土坑-12
17	杯	⅓	(14.0) 4.5 (8.0)	P30	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底の周縁に絞り込みがみられ、底部は凸出する。内外面ロクロナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒・小石を多く含む②還元③灰色④深さ3.5、2	土坑-24
18	高杯	脚部	— 現存高 8.3 —	P71	ロクロ右回転。裾部・杯部を欠く。杯部内底中央はナデを施す。脚部内面にロクロナデを施し、その上端に杯部との接合痕を残している。	①白色粒を含む②還元③灰白色④2	土坑-6
19	甕 H	口頸部 ⅓	(21.0) 現存高 5.0 —	P21・26	体部以下を欠く。頸部はやや外傾して立ち上り、口縁部は外反して「コ」字状の口縁部をもつ。肩部外面はヨコ方向のヘラケズリ、内面は丁寧なナデ、口縁部はヨコナデを施す。肩部の器厚は2～3mmと薄い。	①砂粒を多く含む②酸化③褐色④2	土坑-4

第17表4 5区2号土坑出土土器観察表(第91・92図、図版80・81)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
20	甕 H質	1/2	(19.0) 31.6 ●	P27・51・ 52・64・ 68	右回転。胴部が余り張らず、口縁部は「く」字状に外反する。丸底。口縁部内面ににぶい稜をもつ。口唇部はつまみ出されて上方に発達する。最大径は胴部中位やや上にあり、(21.2cm)である。頸部径(17.2cm)。外面の頸部以下はロクロナデ後底部へ向うタテ方向のヘラケズリを施し、底部近くはさらにナデを加える。内面はロクロナデを施し、底部付近は指頭ナデが加わる。外底は2次火熱を受けており、器表が磨滅している。叩キの痕跡はみられない。	①白色粒・小石を多く含む②酸化③浅黄橙色へにぶい褐色④深さ30.5、2土坑-1	
21	甕	口縁部 小片	— 現存高4.2 —	P55	短い口縁部が外反して内面に稜線をもつ。口唇部は上方にひきだされる。鉢形に近くなる。	①白色粒・小石を含む②還元③灰白色④2土坑-5	
22	甕	口頸部 1/2	17.4 現存高10.8 —		頸部は肩部からほぼ垂直に立ち上り、口縁部は外反する。口唇部は上下に発達し、その外面は内傾する。内外面にヨコナデを施す。肩部以下は叩キののちヨコナデを施すとみられる。右回転。	①白色粒を多く含み、小石が混る②還元③灰白色④2土坑-2	
23	甕	口頸部 1/2	(23.2) 現存高9.4 —	P59・62	肩部からほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は水平近くまで外反する。口唇部は上下に発達し、その外面に浅い凹線が2本みられる。内面にロクロナデを施す。右回転。	①白色粒・黒色粒を多く含み、小石が混る②還元③灰色④2土坑-3	
24	甕	1/2 底部欠	24.2 現存高41.8 —	P6・58・ 66・67、 x号土坑	頸部は肩部から垂直に近く立ち上り、口縁部は外反する。最大径は胴部上位にあり、(35.7cm)である。口唇部は上下に発達し、その外面に凹線1本を施す。体部は内外面平行叩キ目の後ナデを加える。右回転。	①白色粒・小石を多く含む②還元③灰色、一部アズキ色④2土坑-25	

第18表1 5区38号土坑出土土器観察表 (第96図、図版83)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
1	蓋	略完	15.8 3.8 ツمامミ 3.7	7・8・10 住798	ロクロ右回転。天井部上半が盛り上り、下半は直線的にひらく。ツمامミは偏平で、中央が凸である。口唇部は丸く、内側に肥厚する。天井部外面上半はヘラケズリを施す。内外面に重ね焼の痕跡があり、外面は径14.7cm、内面は約8cmである。	①白色粒・石英粒を含む ②還元③灰白色④深さ2.3、N38土坑-24	
2	蓋	略完	17.4 3.5 ツمامミ 3.8	10住覆 土下1222	ロクロ右回転。天井部上半が盛り上る。ツمامミは偏平で、中央が凸である。口唇部は「ハ」字状に短くひらく。天井部外面の上半はヨコナデを施す。内外面に重ね焼の痕跡があり、外面は径8.0cm、内面は径15.6cmである。	①白色粒・小石を含む②還元③灰白色④深さ1.6、N38土坑-12	
3	杯	1/2	12.0 3.9 6.7	10住不落 7住120	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。内外面に火ダスキ状の銀灰色部がある。	①白色細粒を含む②還元③灰色④深さ3.2、N38土坑-19	
4	杯	1/2	13.0 3.7 7.3	10住947・ 1102	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部はわずかに外反する。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁はヨコナデを施す。内底中央はわずかに凸である。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元、酸化気味③黒褐色④深さ3.0、N38土坑-6	
5	杯	略完★	12.2 3.4 7.3	10住覆 土下1220	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部は外反する。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁は強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。口縁部に1カ所小石の抜けた跡がある。内底中央は凸である。	①白色粒・石英粒・小石を含む②還元③灰色④深さ2.8、N38土坑-21	
6	杯	略完	11.8 3.3 7.0	10住覆 土下1221	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらく。内底の周縁は強いヨコナデを施す。内底中央は凸である。回転糸切後無調整。	①白色粒・小石を含む②還元③外面黒褐色、内面浅黄褐色④深さ2.6、N38土坑-5	
7	杯	1/2	(13.0) 2.9~3.5 6.3	8住457・ 456・471・ 473	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらき、口縁部はわずかに外反する。全体に歪みがある。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁は強いヨコナデを施し、内底は丸く盛り上る。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③灰色④深さ2.5、N38土坑-4	
8	杯	1/2	(11.8) 3.2 6.8	10住1198 不落	ロクロ右回転。体部は丸味をもち、口縁部は薄くなって外反する。外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元、酸化気味③黒褐色④深さ2.6、N38土坑-22	

第18表2 5区38号土坑出土土器観察表 (第96・97図、図版83・84)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
9	杯	⅔	(11.2) 3.4 (6.6)	7・8・10 住697	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらく。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の中央は凸である。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③黒褐色④深さ2.4、N38土坑-27	
10	杯	略完★	11.4 3.3 6.7	7・8・10 住582	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらく。外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。底部にヒビ割れがある。	①白色粒を含む②還元③黒褐色④深さ2.5、N38土坑-7	
11	杯	略完	12.8 3.8 6.4	10住1034・ 1055・1056	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部はかるく外反する。内底の周縁に強いヨコナデを施す。内底はナデが加えられる。回転糸切後無調整。	①白色粒・小石を含む②還元③灰白色④深さ3.2、N38土坑-8	
12	高台椀	⅔★	11.1 5.2 7.2	10住1019・ 1087・1377 ・不落	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。高台は高さ1.1cmで内湾し、「ハ」字状にひらく。回転糸切後高台貼付け。内底の周縁に強いヨコナデを施す。底部にヒビ割れがある。内底中央は凸である。	①白色粒を含む②還元③灰色④深さ3.5、N38土坑-10	
13	椀	略完★	14.8 5.1 7.2	10住1104 ～1109・ 1171	ロクロ左回転。体部は内湾してひらき、口唇部はわずかに外反する。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁は強いヨコナデを施す。内底は丸く盛り上る。回転糸切後無調整。内底の周縁にヒビ割れがある。	①白色粒・石英粒・小石を含む②還元③灰白色④深さ4.3、N38土坑-9	
14	椀	⅔	(13.6) 4.8 6.2	7・8・10 住639	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部は外反する。内底の周縁に強いロクロナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒・小石を含む②還元、酸化気味③褐色④深さ4.1、N38土坑-23	
15	椀	⅔	(13.5) 4.4 7.4	7・8・10 住595、10 住不落、 8住476・ 478	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらき、口縁部は外反する。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁は強いヨコナデを施す。底部は回転糸切りを2回行っているが、無調整である。歪みをもつ。	①白色粒・小石を含む②還元、酸化気味③黒褐色④深さ3.9、N38土坑-2	
16	高台椀	⅔	13.8 5.5 7.4	7・8・10 住685・459 ・463、カ マド前	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらき、口縁部はわずかに外反する。高台は高さ0.7cmで断面三角形を呈し、外端は接地しない。回転糸切後高台貼付け。内底の周縁に強いロクロナデを施す。内底中央は凸である。口縁部の1カ所に粘土を補充した痕がみられる。	①白色粒・小石を含む②還元、酸化気味③黒色④深さ4.2、N38土坑-1	

第18表3 5区38号土壇出土土器観察表 (第97・98図、図版84)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調 ②焼成 ④備考
17	高台椀	略完	14.6 5.3 7.8	10住1051	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部はわずかに外反して口唇部が肥厚する。高台は高さ1.0cmで、断面三角形を呈する。回転糸切後高台貼付け。内底の周縁に強いロクロナデを施し、内底中央は凸である。	①砂粒を多く含む②還元、酸化気味③黄褐色④深さ4.0、N38土壇-11
18	高杯	脚部欠 ★	14.7 現存高 9.9 —	10住1114	ロクロ右回転。脚端部を欠く。皿状の杯部に外面凹線状を呈する口縁部がつく。口唇部は上外方へひきだされる。杯部外底はヘラケズリ、脚柱部はロクロナデを施す。脚内面上端は、下方に凸である。杯部にヒビ割れがある。	①小石・白色粒を含む②還元③灰白色④杯部深さ1.6、N38土壇-13
19	脚	1/2	長さ 7.0 幅 4.1	10住S側	横断面長方形を呈する注口状の土製品である。外面はヘラ状工具によるケズリとナデつけを施し、下端は平坦に仕上げている。内面の仕上げは雑である。本体との接合面は凹曲面をなしており、下端とは平行な面にならない。丸底の本体につけられた脚部と考えておきたい。	①白色粒・砂粒を含む②還元、酸化気味③淡褐色④N38土壇-18
20	甕	体部片	— — —	7・8・10 住635	甕の体部片。内面はロクロナデ、外面は丁寧なナデを施す。外面に「X」状のヘラ書きがある。	①白色粒を含む②還元③灰色④N38土壇-26
21	甕 H質	口縁部 小片	— 現存高 3.5 —	10住1103	「く」字状に外反する甕の口縁部小片。口唇部は上方にひきだされる。	①白色粒を含む②酸化、還元気味③淡黄色④N38土壇-15
22	甕	口縁部 小片	— 現存高 5.5 —	10住不落	口縁部～体部上半の小片。肩部以下はタテ方向のヘラケズリを施す。内面はロクロナデである。	①砂粒を含む②酸化③にぶい橙色④N38土壇-17
23	甕	口縁部 1/2	(12.3) 現存高 4.9 —	10住不落	口縁部～体部上半の破片。「く」字状に短く外反する口縁部をもち、体部上半は丸く張る。内外面ロクロナデを施す。	①白色粒を含む②酸化、還元気味③外面にぶい橙色、内面黒色④N38土壇-16
24	羽釜	体部片	— 現存高14.0 —	7・8・10 住621	鐙部を含む体部片。断面方形の鐙をつけている。鐙以下は輪積み痕を残し、外面はタテ方向のナデ、内面はヨコナデを施す。	①白色粒を少し含む②還元③灰褐色④N38土壇-25
25	羽釜	体部片		8住530	鐙部を含む体部小片。鐙以下にヘラケズリは見られない。	①砂粒を含む②還元③黒色④N38土壇-3

第18表 4 5区38号土壇出土土器観察表(第98図)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土色調 ②焼成備考 ③ ④
26	甕	口縁部小片		10住不落	口唇部が上下に発達する甕の口縁部小片。内外面ヨコナデを施す。	①白色粒を含む②還元③灰色④N38土壇-20
27	甕	口縁部小片		10住不落	口唇部が上下に発達する甕の口縁部小片。上方がやや厚く大きい。内外面ヨコナデを施す。	①白色粒を含む②還元③灰色④N38土壇-14

第19表 1 5区39号土壇出土土器観察表(第99図、図版85)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土色調 ②焼成備考 ③ ④
1	杯	1/4	12.0 3.2 7.0	8住不落 840・845・ 847・848・ 826	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部はわずかに外反する。内底の周縁に強いヨコナデを施す。内底は丸く盛り上る。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③灰色④深さ2.4、N39土壇-1
2	杯	略完★	11.8 3.3 6.5	10住1274	ロクロ右回転。体部は直線的にひらくが、腰にやや丸味がある。外底の周縁に絞り込みがみられる。内底中央は凸である。回転糸切後無調整。口縁部にヒビ割れがある。	①白色粒を多く含む②還元③にぶい橙色④深さ2.5、N39土壇-7
3	杯	略完★	12.0 3.5 6.6	10住床 1215	ロクロ右回転。体部は腰が張り、口縁部はわずかに外反する。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁は強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。底部にヒビ割れがある。	①白色粒を多く含む②還元③外面黒色、内面にぶい橙色④深さ2.6、N39土壇-9
4	杯	略完★	12.4 3.4 6.8	10住1275	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部がわずかに外反する。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底中央はわずかに凸である。回転糸切後無調整。底部にヒビ割れがある。	①白色粒を多く含む②還元③外面黒色、内面浅黄色④深さ3.1、N39土壇-11
5	杯	略完★	12.4 3.7 7.4	10住1273	ロクロ右回転。体部は腰がやや張り、口縁部は外反する。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底中央は凸である。回転糸切後無調整。底部にヒビ割れがある。	①白色粒を多く含む②還元③外面黒色、内面灰色④深さ2.9、N39土壇-8
6	碗	1/5	(15.0) 5.3 7.8	8住255	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部はやや直立気味になる。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁は強いヨコナデを施す。底部に厚味がある。回転糸切後未調整。	①白色粒・石英粒を含む②還元③浅黄色④深さ4.1、N39土壇-6

第19表2 5区39号土壇出土土器観察表 (第99図、図版85)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
7	壺	口縁部 ⅓	(6.2) 現存高 4.9 —	10住1351	ロクロ右回転。口縁部は水平に近くまで外反し、口唇部は断面三角形を呈し上方にひき出される。長頸壺の口縁部か。	①白色粒を多く含む②還元③灰色④N39土壇-2	
8	壺	体部片	— 現存高16.2 —	10住1213	内外面ロクロナデ、外底はナデを施す。体部小片で、7とは別個体である。	①白色粒・小石を多く含む②還元③灰白色④N39土壇-10	
9	甕	口縁部 小片	— 現存高 4.3	8住407	口縁部は大きく外反し、口唇部は上方に発達する。口唇部外面は凹む。	①白色粒を含む②還元③淡黄色④N39土壇-3	
10	甕 H	口縁部 ⅓	(19.5) 現存高 3.3 不落836	8住323 不落836	「く」字状に外反する口縁部をもつ。外面の頸部以下はヘラケズリを施す。	①細砂粒を含む②酸化③褐色④N39土壇-5	

第20表1 5区40号土壇出土土器観察表 (第100図、図版85・86)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
1	蓋	⅓	12.7 3.2 ツマミ 3.5	11住212・ 230	ロクロ右回転。天井部上半は盛り上り、下半は直線的にひらく。口縁部外面は凹線状を呈する。ツマミは偏平で、中央が凸である。天井部外面の上半はヘラケズリを施す。内面に重ね焼痕があり、その復原径は11.7cmである。	①白色粒を含む②還元③外面黒色、内面暗灰黄色④深さ1.8、N40土壇-21	
2	蓋	⅓	(17.5) 3.1 ツマミ 3.6	11住144・ 146・149・ 210	ロクロ右回転。天井部上半はやや盛り上り、下半は直線的にひらく。口唇部は外反気味で口縁部外面は凹線状を呈する。内外面に重ね焼痕があり、内面は径(8.6cm)、外面は径(15.5cm)である。	①白色粒を含む②還元③灰白色、灰色④深さ1.4、N40土壇-22	
3	杯	⅓	12.1 4.0 6.0	11住146・ 224	ロクロ左回転。体部は内湾してひらく。内底の周縁に強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。内外面に重ね焼の痕跡がある。	①白色粒を含む②還元③灰褐色④深さ3.1、N40土壇-1	
4	杯	略完	11.8 3.6 6.9	11住181	ロクロ右回転。体部は内湾してひらく。内底の周縁に強いヨコナデを施す。内底中央はわずかに凸である。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③灰褐色④深さ2.8、N40土壇-2	



第20表2 5区40号土壇出土土器観察表(第100図、図版85・86)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
5	杯	略完	11.8 3.5 7.1	11住223	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらく。内底の周縁に強いヨコナデを施す。内底は丸く盛り上る。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③外面黒褐色、内面にぶい黄色④深さ2.7、N40土壇-3	
6	杯	1/5	12.3 3.4 7.0	11住153・ 174・192	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底の周縁に強い絞り込みがみられ、内底の周縁は強いヨコナデを施す。内底中央は凸である。回転糸切後無調整。内外面に重ね焼痕がある。	①白色粒・石英粒を含む②還元③灰白色④深さ2.8、N40土壇-9	
7	杯	1/5	12.3 3.4 7.4	11住床下 落44	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらく。外底の周縁に強い絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色粒・石英粒を含む②還元③灰白色④深さ2.6、N40土壇-8	
8	杯	1/5	(11.6) 3.7 5.9	11住116・ 117・122	ロクロ左回転。体部は内湾気味にひらき、口縁部はわずかに外反する。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁は強いヨコナデを施す。内底はわずかに凸である。回転糸切後無調整。	①白色粒・石英粒を少し含む②還元③灰色④深さ3.0、N40土壇-27	
9	杯	1/5	11.3 3.6 6.6	11住180	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底中央は凸で周縁にヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③灰白色④深さ2.7、N40土壇-7	
10	杯	略完★	11.3 3.4 6.5	11住229	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底の周縁に強い絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。体部内面に重ね焼痕があり、内底中央は小石のためにヒビ割れている。	①白色粒を含む②還元③灰白色④深さ2.4、N40土壇-5	
11	杯	略完	10.8 3.4 6.2	11住123・ 152・196・ 209	ロクロ右回転。体部は丸味をもってひらく。外底の周縁に強い絞り込みがみられ、内底の周縁はヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③灰白色④深さ2.4、N40土壇-6	
12	杯	略完	11.6 3.3 6.2	11住227	ロクロ右回転。体部は丸味をもち、腰が張る。口縁部内面が肥厚する。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁はヨコナデを施す。回転糸切後無調整。外面に重ね焼痕がある。	①白色粒を含む②還元③外底灰白色、内面黒色④深さ2.5、N40土壇-4	

第20表3 5区40号土壇出土土器観察表 (第100・101図、図版86・87)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
13	杯	略完★	14.5 4.9 8.0	11住107・ 198	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底周縁に強い絞り込みがみられ、内底周縁はヨコナデを施す。回転糸切後無調整。底部にヒビ割れがある。内底中央はわずかに凸である。	①白色粒・小石を含む②還元③灰白色④深さ3.9、N40土壇-11	
14	杯	略完★	14.6 4.8 8.2	11住151・ 197	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらく。外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。底部にヒビ割れがある。	①白色粒・小石を含む②還元③外面灰白色、内面灰黄褐色④深さ3.6、N40土壇-10	
15	杯	略完★	15.1 4.9 8.7	11住182・ 177	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底の周縁に強い絞り込みがみられ、内底の周縁はヨコナデを施す。内底中央はわずかに凸である。回転糸切後無調整。底部にヒビ割れがある。	①白色粒・小石を含む②還元③灰色④深さ3.7、N40土壇-12	
16	杯	1/2	15.1 4.7 8.3	11住219	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部はわずかに外反する。外底の周縁に強い絞り込みがみられ、内底の周縁はヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒・小石を含む②還元③灰色④深さ3.6、N40土壇-13	
17	稜 椀	略完★	12.5 4.8 8.2	11住217・ 179	ロクロ右回転。底部との境に外稜をもつ。高台は高さ0.9cmで、「ハ」字状にひらく。回転糸切後高台貼付け。外稜以下の外面はヨコナデ、内底周縁もヨコナデを施す。高台が一部剥れている。	①白色粒・石英粒を多く含む②還元③灰白色④深さ3.0、N40土壇-14	
18	稜 椀	高台欠	12.3 現存高 3.7 —	11住186	ロクロ右回転。高台を欠く。底部との境に外稜をもつ。回転糸切後高台貼付け。外稜以下の外面はヨコナデを施す。	①白色粒・小石を含む②還元③灰色④深さ2.6、N40土壇-15	
19	高台椀	1/2★	(15.3) 7.9 (8.8)	11住99・ 100・109 ～113・ 118・160	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。高台は高さ1.5cmで、「ハ」字状にひらく。回転糸切後高台貼付け。内底周縁はヨコナデを施す。底部にヒビ割れがある。	①白色粒・小石を含む②還元③灰色④深さ5.5、N40土壇-16	

第20表4 5区40号土坑出土土器観察表(第101・102図、図版87)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土色調 ③色調 ②焼成備考 ④備考
20	高台碗	1/2 高台欠	(16.1) 現存高 7.0 —	11住176	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらき、口縁部はわずかに外反する。内底周縁は凹線状を呈する。外面の高台外側は約2cm幅でヘラケズリを施す。切離しは不明。	①白色粒を含む②還元③外面暗灰色、内面淡黄色④深さ5.8、N40土坑-17
21	高台皿	3/4	18.8 4.3 9.4	11住126・ 231・床下 落7	ロクロ左回転。体部は直線的にひらき、口縁部は反転して外上方にひらく。口縁部外面は太い凹線状を呈する。高台は高さ1.3cmで、「ハ」字状にひらき、外端は跳ね上って接地しない。高台脇と外底はヨコナデを施す。底部にヒビ割れがある。歪みがある。	①小石・白色粒を含む②還元③灰色④深さ2.2、N40土坑-18
22	高台皿	1/2 高台欠	(17.8) 現存高 3.0 —	11住43・ 137・139・ 床下落	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部は反転して外上方にひらく。口縁部外面は太い凹線状を呈する。高台は剥落し、貼付け時の凹線がみられる。高台の外側はヘラケズリ→ヨコナデを施す。	①小石・砂粒を含む②還元③灰白色④深さ2.2、N40土坑-19
23	高台皿	3/4 高台欠	(12.3) 現存高 3.5 —	11住212	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部は反転して外上方にひらく。口縁部外面は太い凹線状を呈する。高台は端部を欠く。高台の外側はヨコナデを施す。	①小石・白色粒を含む②還元③灰白色④深さ2.0、N40土坑-20
24	甕	体部上 半 1/2	(24.5) 現存高19.3 —	11住191・ 199・202	ロクロ左回転。体部下半を欠く。「く」字状に口縁部が外反し、口唇部は上方にひきだされる。最大径は口縁部にある。内面はロクロナデを施し、外面の肩部以下は口縁部へ向うタテ方向のヘラケズリを施す。頸部以上がやや厚味を増す。外面の肩部に炭化物が付着している。	①小石・白色粒を含む②酸化③にぶい橙色④N40土坑-23
25	甕	体部上 半 1/2	(10.8) 現存高 7.5 —	11住193	ロクロ左回転。体部下半を欠く。口縁部は「く」字状に外反し、やや内湾する。内外面ロクロナデを施す。外面に2次火熱の痕がある。	①白色粒を含む②酸化③にぶい橙色④N40土坑-24

第20表 5 5区40号土坑出土土器観察表 (第102図、図版87)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	① 胎土 ③ 色調	② 焼成 ④ 備考
26	甕	体部上半 ⅓	(10.6) 現存高 8.4 —	11住203	底部を欠く。口縁部は「く」字状に外反する。最大径は体部中位にあり、(11.4cm)である。体部外面は上方へ向うタテ方向のヘラケズリ、内面は不定方向のナデを施す。輪積痕がみられる。外面に炭化物付着。	①砂粒を少し含む②酸化 ③外面褐灰色、内面にぶ い黄橙色④N40土坑-25	
27	甕	底部 ⅓	— 現存高 5.7 11.6	11住189	叩キ成形後底部近くの外面はナデを加える。叩キ目は内外面とも平行である。内底はヨコナデを施す。半円形にヒビ割れている。外底は無調整で、布目状の圧痕がある。	①白色粒・小石を多く含 む②還元③淡黄色④N40 土坑-26	

第21表 1 5区41号土坑出土土器観察表 (第103図、図版88)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	① 胎土 ③ 色調	② 焼成 ④ 備考
1	蓋	⅓	19.1 1.9~3.7 ツマミ 4.5	5 T09- 282	ロクロ右回転。全体に歪んでいる。天井部は偏平である。口縁部は下方へ折り曲るようにつくる。ツマミは中央が凹む。天井部外面の上半はヘラケズリを施す。内面に重ね焼の痕跡があり、その径は(16.0cm)である。	①白色粒を多く含む②還 元③灰色④深さ0.9~2. 1、N41土坑-27	
2	蓋	略完	18.4 1.7~3.4 ツマミ 4.3	5 T09- 54	ロクロ右回転。歪みがある。天井部は偏平で、口縁部近くで反転する。口縁部は下方へ折り曲るようにつくる。ツマミは中央が凹み輪状を呈する。天井部外面の上半はヘラケズリを施す。	①白色粒を多く含む②還 元③灰色④深さ0.3~1. 8、N41土坑-28	
3	杯	⅓ ★	13.2 4.0 7.2	5 V08不 落	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口唇部は玉縁状を呈してわずかに外反する。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁はヨコナデを施す。回転糸切後無調整。口縁部にヒビ割れがある。	①白色粒・小石を含む② 還元③灰白色④深さ3.2、 N41土坑-11	
4	杯	⅓ ★	13.9 3.9 7.7	5 T09- 97・102・ 129・161	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらく。外底の周縁に絞り込みがみられる。内底中央は凸である。静止糸切後無調整。底部にヒビ割れがある。	①白色粒・小石を含む② 還元③灰色④深さ3.0、N 41土坑-5	
5	杯	⅓	(12.9) 4.0 8.0	5 T09- 85	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらき、腰がやや張る。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁は強いヨコナデを施す。内底中央は凸である。静止糸切後無調整。歪みがある。	①白色粒・小石を含む② 還元、酸化気味③黒褐色 ④深さ3.1、N41土坑-6	

第21表2 5区41号土坑出土土器観察表(第103図、図版88)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
6	杯	1/4★	(13.0) 3.7 6.5	5 T09- 204・303	ロクロ左回転。腰がやや張って、体部は直線的にひらき、口縁部はわずかに外反する。外底の周縁に絞り込みがみられる。内底中央は凸である。底部にヒビ割れがある。	①白色粒・小石を含む、 2mm大のメノウ片がある	②還元③灰白色④深さ2.9、N41土坑-2
7	杯	1/2	13.1 4.3 7.1	5 T09- 227・245・ 246・251・ 262	ロクロ左回転。腰がやや張り、口縁部は外反する。外底周縁に絞り込みがみられる。内底中央は凸で、周縁はヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒・小石を含む② 還元③外面灰色、内面灰 白色④深さ3.5、N41土坑 -3	
8	杯	1/4	12.7 4.3 7.0	5 T09- 107・188・ 231	ロクロ左回転。腰がやや張り、口縁部はわずかに外反する。外底周縁に絞り込みがみられ、内底中央は凸で、周縁はヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒・小石を含む② 還元③灰色④深さ3.5、N 41土坑-7	
9	杯	1/2	(12.9) 4.1 7.3	5 T09- 178・256・ 266	ロクロ左回転。腰がやや張り、口縁部は外反気味である。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底中央は凸で、周縁はヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒・小石を含む② 還元③外面灰白色、内面 黒色④深さ3.3、N41土坑 -8	
10	杯	1/2	(12.6) 3.8 6.6	5 T09- 11・316 U-09- I	ロクロ左回転。腰がやや張り、口縁部は外反気味である。内底中央は凸で、周縁は強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒・小石を含む② 還元、酸化気味③外面黒 褐色、内面浅黄褐色④深 さ3.1、N41土坑-10	
11	杯	1/4★	13.7 3.3 7.4	5 T09- 186・222	ロクロ左回転。腰がやや張る。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底は中央が凸で、周縁は強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。口縁部にヒビ割れがある。	①白色粒を含む②還元③ 灰色④深さ2.6、N41土坑 -12	
12	杯	1/2	(12.8) 3.8 (7.0)	5 T09- 125・193・ 不落	ロクロ左回転。体部は内湾気味にひらく。外底の周縁に強い絞り込みがみられ、内底の周縁はヨコナデを施す。内底中央はナデを加える。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③ 外面黒褐色、内面灰褐色 ④深さ3.0、N41土坑-4	
13	杯	1/4	(12.4) 3.8 7.2	5 T09- 19・55・72 ・216・279	ロクロ右回転。体部は内湾してひらく。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁はヨコナデを施す。内底中央はナデが加えられ、わずかに凹む。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元、 酸化気味③黒褐色④深さ 3.2、N41土坑-9	

第21表3 5区41号土坑出土土器観察表 (第103・104図、図版88・89)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調 ②焼成 ④備考
14	椀	1/4	(15.8) 5.9 (8.5)	5 T09- 178	ロクロ左回転。体部は直線的にひらく。内底の周縁にヨコナデを施す。外底とその周縁は回転ヘラケズリを施し、周縁はさらにナデが加わって体部との境にふい稜をつくる。	①白色粒・小石を含む②還元③灰色④深さ4.9、N41土坑-29
15	椀	1/4	(15.7) 5.5 9.1	5 T09- 166・244・ 168	ロクロ左回転。体部は直線的にひらく。内底の周縁は強いヨコナデを施し、中央は凸である。体部外面にロクロナデ痕が目立つ。回転糸切後無調整。	①白色粒・石英粒を含む②還元③外底灰黄色、内面灰白色④深さ4.6、N41土坑-13
16	杯	底部	— 現存高 2.5 7.0	5 T09- 155	ロクロ右回転。体部以上を欠く。外底の周縁に絞り込みがみられ、内底の周縁は強いヨコナデを施す。回転糸切後ナデが施され、さらに「X」状のヘラ記号が加えられる。	①白色粒を含む②還元③黒褐色④N41土坑-14
17	播鉢	口縁部 1/4	(14.0) 現存高 5.2 —	5 T09- 117	ロクロ左回転。体部以下を欠く。口唇部は内側へ傾く平坦面をもつ。内外面ロクロナデを施す。	①白色粒・小石を含む②還元③灰色④N41土坑-1
18	甕 H	口縁部 1/4	(22.0) 現存高 7.1 —	5 T09- 340	肩部以下を欠く。弱い「コ」字状の口縁部をもち口唇部は内湾気味になる。肩部外面はヨコ方向のヘラケズリ、内面はナデを施す。	①砂粒を多く含む②酸化③褐色④N41土坑-21
19	甕 H	口縁部 1/4	(18.6) 現存高 7.9 —	5 T09- 130	肩部以下を欠く。弱い「コ」字状の口縁部をもち、口唇部近くは内湾気味となる。肩部の外面はヨコ方向のヘラケズリ、内面は丁寧なナデを施す。	①砂粒を多く含む②酸化③褐色④N41土坑-22
20	甕 H	口縁部 1/4	(22.8) 現存高 5.7 —	5 T09- 108・223・ 314、U09 -不落	肩部以下を欠く。外反する口縁部をもち、口唇部は薄く仕上げる。頸部に2本の凹線がある。肩部の外面はヨコ方向のヘラケズリ、内面はヘラケズリののちナデを施す。	①砂粒を多く含む②酸化③暗赤褐色④N41土坑-23

第21表4 5区41号土坑出土土器観察表(第105図、図版88・89)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
21	小型甕	$\frac{1}{3}$	(17.0) 11.0 9.0	5 T09— 44・58・ 169・189・ 211・236・ 238・279・ 311・367	ロクロ左回転。体部は上位に最大径があり、口縁部外端径と同じである。口縁部は強く外反し、口唇部は上方へのびる。体部は内外面ともロクロナデを施し、外面の底部近くはナデを加える。内底はナデを施し、その周縁は強いヨコナデを加える。外底は無調整である。	①白色粒を含む②還元③灰白色④深さ9.8、N41土坑—26	
22	小型甕	口縁部 $\frac{1}{3}$	(18.5) 現存高 6.4	5 T09— 35・151・ 70・不落	ロクロ左回転。体部は上位に最大径(17.8)があり、口径の方が大きい。体部下半以下を欠く。口縁部は強く外反し、口唇部は上外方へ発達してその内側がやや凹む。体部は内外面とも丁寧なロクロナデを施す。	①白色粒を含む②還元、酸化気味③外面黄褐色、内面灰オリブ色④N41土坑—18	
23	甕	口縁部 $\frac{1}{3}$	(24.2) 現存高14.5 —	5 T09— 244・249・ 63・U09 —1	ロクロ回転方向不明。叩き成形ののち、ロクロナデを施す。外面の叩き目は平行、内面は不明である。口縁部は強く外反し、口唇部は上方へ発達する。体部の最大径は上位にあり(24.2cm)、口径よりもやや小さい。口唇部の内側はやや凹む。	①白色粒・黒色粒を含む②還元③灰白色④N41土坑—17	
24	甕	口縁部 $\frac{1}{3}$	(25.0) 現存高15.9 —	5 T09— 322・152・ 197・U09 —不落	底部を欠く。口縁部は強く外反し、口唇部は上外方へ発達する。最大径(25.3cm)は体部上位にある。体部は内外面ともロクロナデを施す。	①白色粒・小石を含む②還元③にぶい黄橙色④N41土坑—16	
25	甕 H	底部 $\frac{1}{3}$	— 現存高 6.7 5.6	5 T09— 178・U09 —1	体部上半以上を欠く。内外面ロクロナデを施し、外底は左回転糸切後無調整である。小型甕か。	①白色粒を含む②酸化③にぶい黄褐色④N41土坑—25	
26	甕 H質	底部	— 現存高 7.0 9.0	5 T09— 84・U09 —1	体部以上を欠く。ロクロ左回転。体部の内面はロクロナデを施し、外面は丁寧なヨコナデを施す。外底は無調整である。体部外面に2次火熱の痕跡がある。	①白色粒を含む②還元、酸化気味③にぶい橙色④N41土坑—24	
27	甕	口縁部 $\frac{1}{3}$	(20.1) 現存高 8.2 —	5 T09— 380・U09 —1	肩部から外反して立ち上がる。口唇部外面は平坦で、下方に少しのびる。内外面ヨコナデを施す。	①白色粒・小石を含む②還元③灰色④N41土坑—19	

第21表5 5区41号土壇出土土器観察表 (第105・106図、図版89)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
28	甕	1/2	(29.6) 19.5 12.0	5 T09— 13・14・35 他	体部の最大径(28.0cm)は上位にあり、口径よりもやや小さい。口縁部は強く外反し、口唇部は外上方へ引き出される。底部は平底で、円盤状に割れている。この円盤状底部は、体部下端の器厚分だけ一まわり小さな円盤である。体部内面を内底周縁はロクロナデを施し、外底とその周縁はナデを加える。2次火熱の痕跡がみられる。ロクロ回転方向不明。	①白色粒・小石を含む②還元③灰白色④深さ18.5、N41土壇—31	
29	甕	1/2	(26.7) 27.1 15.7	5 T09— 53・225他	体部は余り張らず、口縁部は水平近くまで外反する。底部の蒸気孔より下は高さ2.0cmの高台状を呈し、「ハ」字状にひらく。蒸気孔は円盤を外面側から4孔あけている。中央の2孔は長楕円形、両端は略1/2円形を呈する。即ち、断面方形の「橋」が3本残ることになる。体部は叩きののち内面は丁寧に、外面は比較的雑にロクロナデを施す。外面の叩キ目は平行、内面は不明である。体部外面の下端はヘラケズリ、底部の蒸気孔及びその周辺はナデとヨコナデを施す。蒸気孔を形成する「橋」はヘラナデで仕上げ、本体との接合部はナデで仕上げる。歪みがある。	①白色粒・小石を含む②還元③灰色④N41土壇—30	

第22表1 5区42号土壇出土土器観察表 (第107図、図版90)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
1	杯	略完★	12.6 3.9 7.2	P123	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底の周縁に絞り込みがみられ、底部は凸出する。回転糸切後無調整。口縁部にヒビ割れがある。	①白色粒・石英粒・小石を含む②還元③灰白色④深さ3.3、N42土壇—12	
2	杯	略完★	12.4 3.3 6.0	P114	ロクロ左回転。体部は内湾してひらく。外底の周縁に絞り込みがみられるが、体部下半が丸く押し広げられ、腰が膨らむ。回転糸切後無調整。底部・口縁部にヒビ割れがある。	①白色粒を多く含む②酸化③ぶい橙色④深さ2.3、N42土壇—9	



第22表 2 5区42号土壇出土土器観察表 (第107図、図版90)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土色調 ③色調 ②焼成備考 ④備考
3	杯	略完★	12.8 3.7 7.9	P112	ロクロ右回転。体部上半がやや丸味をもち、口縁部は内湾気味となる。内底の周縁に強いヨコナデを施す。内底中央が厚く盛りあがる。回転糸切後無調整。底部にヒビ割れがある。やや歪む。	①白色粒を多く含む②還元③外面灰褐色、内面にぶい橙色④深さ3.1、N42土壇-10
4	杯	略完★	12.0 3.3 6.4	P110	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。内底の周縁に強いヨコナデを施す。内底中央が厚く盛りあがる。回転糸切後無調整。口縁部にヒビ割れがある。	①白色粒を多く含む②還元、酸化気味③口縁部灰色、その他にぶい橙色④深さ2.5、N42土壇-8
5	杯	略完★	12.0 3.3 6.9	P117	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底の周縁に強い絞り込みがみられ、底部は凸出する。口縁部の1カ所に小石を含み、ヒビを周囲に広げている。回転糸切後無調整。	①白色粒・小石を含む②還元③黒色、外底灰褐色④深さ2.4、N42土壇-11
6	杯	⅓	12.0 3.2 6.6	P51	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部は外反する。外底の周縁に強い絞り込みがみられ、底部は凸出する。回転糸切後無調整。	①白色粒・小石を含む②還元③灰色④深さ2.6、N42土壇-26
7	杯	⅓★	(11.4) 3.5 (6.7)	P121	ロクロ右回転。体部上半は直線的にひらくが、下半は丸く腰が張る。外底の周縁に強い絞り込みがみられ、底部は凸出する。回転糸切後無調整。底部にヒビ割れがあり、別のヒビ割れから⅓大に割れている。	①白色粒・小石を含む②還元③青灰色④深さ2.6、N42土壇-25
8	杯	⅓	(11.4) 3.6 (6.9)	P50	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部はわずかに外反する。外底の周縁に絞り込みがみられ、底部は凸出する。回転糸切後無調整。	①白色粒・小石を含む②還元③にぶい黄橙色④深さ2.9、N42土壇-27
9	杯	⅓	(11.8) 3.4 6.4	P96	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらく。外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元、酸化気味③黒褐色④深さ2.3、N42土壇-3
10	椀	略完	13.3 4.8 6.4	P71	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部は外反する。外底の周縁に絞り込みがみられ、底部は凸出する。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③灰色④深さ3.9、N42土壇-13

第22表3 5区42号土坑出土土器観察表(第107・108図、図版90・91)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
11	杯	⅔	13.9 5.0 7.8	P107・ 119	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底の周縁に強い絞り込みがみられ、底部は凸出する。内底の中央は凸出し、周縁は強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒・小石を含む②還元③灰色④深さ4.0、N42土坑-1	
12	杯	⅔	(14.7) 5.5 7.4	P120	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらき、口縁部はわずかに外反する。外底の周縁に絞り込みがみられ、底部は凸出する。回転糸切後無調整。	①白色粒・小石を含む②還元③灰色④深さ4.3、N42土坑-2	
13	杯	⅔	(16.4) 5.5 10.2	P13	ロクロ右回転。体部は内湾してひらく。外底の周縁に絞り込みがみられ、底部は凸出する。内底の周縁は強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒を少し含む②還元、酸化気味③灰黄褐色④深さ4.4、N42土坑-24	
14	杯	⅔ 底部欠	(15.0) 5.5 (7.6)	P111	ロクロ右回転。体部は内湾してひらく。外底の周縁に絞り込みがみられ、底部は凸出する。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元、酸化気味③外面黒色、内面灰黄褐色④深さ4.3、N42土坑-23	
15	高台椀	略完★	15.6 7.5 8.2	P86・95	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらく。高台は高さ1.2cmで「ハ」字状にひらく。体部外面にロクロナデ痕を残す。回転糸切後高台貼り付け。高台脇はヨコナデを施す。ヒビ割れの部分から割れている。	①白色粒・小石を含む②還元③灰白色④深さ5.4、N42土坑-14	
16	高台椀	⅔	(10.7) 5.4 (6.5)	P74・75	ロクロ右回転。体部は直線的にひらくが、下半外面がやや厚く丸味をもつ。高台は高さ1.2cmで「ハ」字状にひらく。回転糸切後ヘラケズリまたはナデを加え、高台貼り付けののち脇にヨコナデを施す。	①白色粒・小石を含む②還元③灰白色④深さ3.5、N42土坑-4	
17	高台皿	略完	11.6 3.8 7.4	P108・ 109・113	ロクロ右回転。底部との境にふい外稜をもって屈曲し、口縁部は外傾して立ち上がる。高台は高さ1.3cmで「ハ」字状にひらく。外底の調整不明。蓋の可能性はある。	①白色粒を含む②還元③淡黄色④深さ1.7、N42土坑-5	

第22表4 5区42号土壇出土土器観察表(第108・109図、図版91)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
18	高台皿	略完	12.5 3.8 7.2	P84	ロクロ右回転。底部との境にぶい外稜をもって口縁部が立ち上がる。口縁部は外傾する。高台は高さ1.2cmで「ハ」字状にひろく。外底はナデを施す。	①白色粒・石英粒を多く含む②還元③黒色④深さ1.9、N42土壇-15	
19	長頸壺	¼★ 口頸部欠	— 現存高18.8 9.8	P80・92・ 116・118	ロクロ右回転。頸部以上を欠く。体部上位に最大径(19.9cm)をもち、外稜をもたない。頸部との接合部を残す。高台は高さ1.0cmで断面方形を呈し、「ハ」字状にひろく。高台外端は鋭利に仕上げ接地しない。体部内面にロクロナデ痕を残し、内底中央は凸である。数カ所に小石を含み、そこからヒビ割れが広がっている。	①白色粒・小石を多く含む②還元③青灰色④N42土壇-6	
20	甕 H質	口縁部 小片	— 現存高9.2 —	P34・39・ 67	ロクロ右回転。体部に丸味をもたず、口縁部は外反する。体部は内外面ロクロナデを施した後、外面にタテ方向のヘラケズリを加える。	①白色粒・石英粒を含む②酸化③ぶい橙色④N42土壇-18	
21	甕 H質	口縁部 小片	— 現存高6.2 —	P41	ロクロ右回転。体部がやや張り、口縁部は「く」字状に外反する。体部は内外面ロクロナデを施し、外面はタテ方向のヘラケズリを加える。	①白色粒・小石を含む②酸化③黄橙色④N42土壇-19	
22	甕 H	口縁部 小片	— 現存高6.7 —		傾きにやや疑問がある。口縁部は丸味をもって外反する。口唇部外面は玉縁状を呈する。体部外面はヨコ方向のヘラケズリ、内面は丁寧なナデを施す。	①砂粒を多量に含む②酸化③橙色④N42土壇-20	
23	鉢	¾	30.2 14.5 14.4	P83	ロクロ左回転。体部は内湾してひろく。口唇部は平坦で、内端が稜を形成する。内外面ともロクロナデを施し、外底は未調整で、磨滅がみられる。内底も一部磨滅している。体部外面の下半に斑点状の剥落があり、使用痕と考えられる。	①小石を多く含む②還元③浅黄色④深さ13.2、N42土壇-7	
24	甕	口縁部 ¼	(16.2) 現存高9.0 —	P72	回転方向不明。頸部は大きく外反して立ち上がる。口唇部は上方にひきだされ、その外面は平坦である。体部は叩キのちナデを施す。外面の叩キ目は平行、内面は無文である。	①白色粒を多く含む②還元③灰色④N42土壇-16	
25	甕	口縁部 小片	(22.0) 現存高5.8 —		ロクロ右回転。大きく外反して立ち上がる。口唇部は下方にひきだされ、その外面は丸味がある。	①白色粒を多く含む②還元③青灰色④N42土壇-17	

第22表 5 区42号土坑出土土器観察表 (第109・110図、図版92)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土色調 ②焼成備考
26	甔	略完	30.8 28.8 15.4	P53	左回転。直線的な体部に、水平近くまで外反する口縁部をもつ。体部上位に断面方形の鐳がつく。底部は径10.5cmの単孔がある。底部から1～2cm上方に2対4孔が外面→内面の方向で穿たれている。口唇部は上下方向に発達し、その外面に浅い凹線2本が施される。体部は叩きしめたのち、ロクロ上において内外面ナデを施し、さらに鐳を貼りつける。内外面とも鐳より上方は丁寧なロクロナデで仕上げ。外面の叩キ目は平行、内面は無文である。体部 $\frac{1}{2}$ 以下は粘土を補充しながらナデつける。底部の単孔は周縁に幅2cmほどの平坦面をもち、内面側ヘナデつけている。底部近くの穿孔は径約1cmで、焼成前に施す。底部近くに1カ所焼成前のキズがある。鐳の径26.8cm。	①白色粒・小石を多く含む②還元③灰色④深さ27.8、N42土坑-22
27	甔	体部 $\frac{1}{4}$	— 現存高42.6 —	P85	口頸部、底部を欠く。体部上位に最大径をもち、(43.9cm)である。底部は平底と考えられ、(19cm)ほどの円盤が剝離した痕が残る。頸部径(20.6cm)。体部は叩キを施し、外面の頸部付近と底部近くは丁寧なヨコナデ、その他は粗雑なナデとヨコナデを施す。内面の底部と体部上半および頸部(接合部)は丁寧なヨコナデを施し、他の部分は雑な仕上げである。外面の叩キ目は平行、内面は無文である。	①白色粒・小石を多く含む②還元③外面暗赤褐色、内面灰黄色④N42土坑-21

第23表 1 5区43号土坑出土土器観察表 (第111図、図版93)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土色調 ②焼成備考
1	蓋	$\frac{1}{4}$	(20.5) 現存高 2.9	5 F09 不落	ツマミを欠く。ロクロ右回転。天井部は平坦につくり、斜め下方にひらく。口縁部は折り曲げたのみである。天井部外面の上半はヘラケズリ→ヨコナデを施す。	①白色粒を含む②還元③灰色④N43土坑-17
2	杯	$\frac{1}{4}$	(13.8) 4.1 (7.9)	5 G09- 69	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。体部下半にやや厚味がある。内底の周縁はヨコナデを施す。外底は回転ヘラケズリを施し、体部下半は回転ヘラケズリ→ヨコナデを加える。切離しは不明。	①白色粒を含む②還元③灰黄色④深さ3.5、N43土坑-1

第23表2 5区43号土壇出土土器観察表(第111図、図版93)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
3	杯	1/2	(13.1) 3.8 (7.8)	5 G 09— 48・52	ロクロ右回転。体部は腰が張り、口縁部はわずかに外反する。内底周縁はヨコナデを施し、浅い凹線2本がみられる。回転糸切後底部周縁に回転ヘラケズリを加える。その回転ヘラケズリ部分に墨書がある。	①白色粒・石英粒を含む ②還元③灰白色④深さ3.4、N43土壇—3、墨書あり	
4	杯	1/2	14.6 3.5 8.7	5 G 09— 39・40・82 ・不落	ロクロ左回転。体部は直線的にひらき、口縁部はわずかに外反する。内底中央は凸で、周縁はヨコナデを施す。回転糸切後無調整。外底に径(6.2cm)の焼成時のアタリがある。	①白色粒を含む②還元③灰色④深さ2.7、N43土壇—7	
5	杯	1/2	(14.3) 4.2 7.6	5 G 09— 97・15	ロクロ左回転。腰がやや張り、口縁部は外反する。内底の中央は凸で、周縁はヨコナデを施す。口縁部の一部が焼成完了前に内側へ折り取られている。意図的なものかどうか不明。内底に5カ所棒状の先端で焼成前に刺突した痕跡がある。刺突は矢印の方向から行なわれている。回転糸切後無調整。	①白色粒・小石を含む②還元③灰色④深さ3.3、N43土壇—5	
6	杯	1/4	(13.0) 4.2 (6.0)	5 G 09— 37	ロクロ左回転。腰がやや張り、口縁部はわずかに外反する。内底の中央は凸で、周縁はヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒・小石を含む②還元③外面橙灰色、内面浅黄色④深さ3.3、N43土壇—2	
7	杯	1/2	(13.2) 4.0 (7.2)	5 G 09— 73	ロクロ左回転。腰がやや張り、口縁部はわずかに外反する。内底の周縁はヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒・小石を多く含む②還元③外面灰色、内面暗褐色④深さ3.1、N43土壇—16	
8	杯	1/2	(13.1) 3.6 (7.4)	5 G 09— 60・F 09 —1	ロクロ左回転。腰がやや張り、口唇部がわずかに外反する。内底の周縁はヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒・石英粒を含む ②還元③オリブ灰色④深さ3.0、N43土壇—6	
9	杯	1/4	(11.0) 4.2 (6.2)	5 G 09— 22	ロクロ左回転。体部は内湾気味にひらき、口縁部はわずかに外反する。内底中央は凸で、周縁はヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③灰白色④深さ3.4、N43土壇—4	

第23表3 5区43号土坑出土土器観察表 (第111・112図、図版93・94)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土色調 ③備考	②焼成 ④備考
10	椀	½★	(17.8) 5.6 9.9	5 G 09— 62・71	ロクロ左回転。体部は内湾してひらき、口縁部は外反する。内底周縁に強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。体部にヒビ割れがある。	①白色粒・小石を含む②還元③灰黄色④深さ4.8、N43土坑—15	
11	高台皿	略完★	20.6 3.2 16.0	5 G 09— 35	ロクロ左回転。底部はほぼ水平にひらき、口縁部は外上方に短くひらく。高台は高さ1.3cmで、「ハ」字状にひらく。外底の高台内側は回転ヘラケズリを施し、高台貼付けのちヨコナデを加える。内底周縁は口縁部ヨコナデのため、わずかに凹む。内底は火グスキ状を呈し、底部・口縁部にヒビ割れがある。	①白色粒・小石を含む②還元③灰色④深さ1.2、N43土坑—13	
12	長頸壺	肩部 ½	— — —	5 G 09— 32	ロクロ回転方向不明。頸部から肩部の破片で、口縁部・体部以下を欠く。外端に明瞭な稜線をもち、外稜寄りにクシ状工具による刺突文をめぐらし、その上下端は凹線で区画する。内面は接合痕を残しており、ヨコナデを施す。	①白色粒を少し含む②還元③外面灰色、内面淡黄色④N43土坑—12、外稜径(12.9)	
13	小型甕	½	(15.0) 8.5 4.0～4.6	5 G 09— 9・88	ロクロ左回転。短く「く」字状に外反する口縁部をもち、体部は上位に最大径(14.5cm)があり、口径の方がやや大きい。体部下半は底部に向うヘラケズリを施し、外底も非回転のヘラケズリを加え、不整多角形を呈する。内面はロクロナデを施し、内底中央は凸である。外底に2次火熱の痕跡がある。	①白色粒・砂粒を多く含む②酸化③外面にぶい黄橙色、内面灰褐色④深さ7.7、N43土坑—9	
14	小型甕	口縁部 ½	(15.2) 現存高 7.0 —	5 G 09— 10	ロクロ左回転。底部を欠く。短く「く」字状に外反する口縁部をもち、体部は上位に最大径があり、口径にほぼ等しい。内外面ロクロナデを施す。	①白色粒を多く含む②酸化③にぶい黄褐色④N43土坑—10	
15	小型甕	⅙	(12.4) 6.9 4.0	5 G 09— 101	ロクロ回転方向不明。短く「く」字状に外反する口縁部をもち、体部は上位に最大径があり、口径にほぼ等しい。体部下半は底部に向うヘラケズリを施し、外底も非回転のヘラケズリを加え、不整多角形を呈する。内面はロクロナデのままである。頸部内面に稜がある。	①白色粒・砂粒を多く含む②酸化③黒褐色④深さ5.9、N43土坑—14	

第23表4 5区43号土坑出土土器観察表(第113図、図版94)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
16	甕	体部 1/2	— 現存高34.5 ●	5 G09— 14~17・ 19・21・24 ~27・30・ 78・79他	口縁部を欠く。体部の最大径(45.3cm)は体部上位にある。叩キののち最大径部以上の外面はナデを施す。体部内面は雑なナデを加える。外面の叩キ目は平行、内面の当て具痕は無文である。底部外面は径24cmほどの割れがみられ、これに対応する内面は帯状に丸く盛り上り、周辺は指頭によってナデを施している。体部内面の一部に布状の圧痕がある。	①白色粒・小石を多く含む②還元③外面灰色、内面茶褐色④N43土坑—18	

第24表1 遺構外出土土器観察表・蓋(第129図、図版103・104)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
1	蓋	1/2	13.9 3.0 ツمامミ 3.7	5 G09— I	ロクロ左回転。天井部はツمامミ周囲のみ平坦で、直線的に口縁部に至る。口縁部は外方へ折れ曲る。ツمامミは輪状を呈し、中央は凹む。外面に自然釉がみられる。	①白色粒を多く含む②還元③外面オリーブ灰色、内面灰色④深さ1.4、G—182	
2	蓋	1/2	12.9 3.0 ツمامミ 3.0	5 N04— I	ロクロ右回転。天井部上半がやや盛り上る。口唇部は外方へひらく。ツمامミは偏平でボタン状を呈し、中央がわずかに凸である。天井部上半の外面はヘラケズリを施す。	①白色粒・石英粒を含む②還元③灰白色④深さ1.5、G—183	
3	蓋	1/2	14.7 3.2 ツمامミ 4.0	5 R03— II	ロクロ左回転。天井部が丸く盛り上り、口縁部近くは水平近くにひらく。口唇部は断面三角形で細い。ツمامミの中央は細く凸になる。天井部外面の上半はヘラケズリを施す。	①白色粒を含む②酸化③黒色④深さ1.6、G—181	
4	蓋	1/2	16.5 3.9 ツمامミ 2.8	5 U13	ロクロ左回転。天井部上半がわずかに盛り上る。口縁部内面は凹線状を呈する。ツمامミは宝珠形を呈する。天井部外面の上半はヘラケズリを施す。口縁部内面に重ね焼痕がみられ、その径は(14.1cm)である。	①白色小粒を含む②還元③灰色④深さ1.8、G—176	
5	蓋	略完	16.3 4.7 ツمامミ 4.3	5 R03— II	ロクロ右回転。天井部は丸く盛り上る。口唇部は細く、外反気味である。ツمامミは偏平で中央が凸である。天井部外面の上半はヘラケズリを施す。口縁部内面に重ね焼痕がみられ、その径は(14.2cm)である。	①白色小粒を含む②還元③灰色④深さ2.6、G—175	

第24表2 遺構外出土土器観察表・蓋 (第129図、図版103・104)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
6	蓋	1/2	17.3 3.7 ツمامミ 3.7	5区	ロクロ左回転。天井部上半がわずかに盛り上がる。口唇部は細く、口縁部内面は凹線状を呈する。ツمامミは偏平で、中央が凸である。天井部外面の上半はヘラケズリを施す。口縁部内面に重ね焼痕がみられ、その径は(15.9cm)である。	①白色粒を多く含む②還元③外面青黒色、内面灰白色④深さ2.4、G-204	
7	蓋	1/3	(17.7) 3.7 ツمامミ 4.3	5 T09-I	ロクロ左回転。天井部は丸味をもつ。口縁部は折れ曲って「ハ」字状にひらく。ツمامミは偏平で中央が凹む。天井部外面はヘラケズリを施す。	①白色粒・石英粒を含む②還元③灰白色④深さ2.0、G-177	
8	蓋	ツمامミ	— 現存高 2.1 ツمامミ 2.0	5 K08-I	ロクロ回転方向不明。宝珠形に近いツمامミ。外稜はシャープである。天井部内面は凸である。	①白色粒を少し含む②還元③灰白色④G-582	
9	蓋	ツمامミ	— 現存高 2.7 ツمامミ 3.3	5 K10-I	ロクロ左回転。円柱の上端をひろげたような形状のツمامミ。接合時に強く押したためか、天井部内面が丸凸になる。天井部外面はヘラケズリののちヨコナデを施す。	①白色粒を含む②還元③灰白色④G-581	
10	蓋	ツمامミ	— 現存高 1.0 ツمامミ 4.3	4 T32-II	偏平で、中央がわずかに凸のツمامミ。本体との接合面を残している。本体を回転糸切後、少量の粘土を補充し、ツمامミを貼り付けている。ツمامミに残っている回転糸切痕は左回転とみられ、これはネガティブであるから、本体の回転方向は右回転と考えられる。	①細砂粒を含む②還元③灰白色④G-579	
11	蓋	1/2	(16.3) 現存高 4.3 —	5 M15	ロクロ右回転。ツمامミを欠く。天井部下端に幅2mm程の凸線があり、口縁部との境に断面三角形の凸帯をもつ。凸帯は外上方へ傾く。口縁部はほぼ垂直に立ち、口唇部内側に稜をもつ。天井部外面の上半はヘラケズリを施す。	①白色粒を含む②還元③外面青灰色、内面灰色④深さ3.6、G-172	



第24表3 遺構外出土土器観察表・蓋・杯 (第129・130図、図版104)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
12	蓋	略完	14.0 5.3 ツマミ 3.5	5 F09-I、5 T06-I	ロクロ右回転。天井部は平坦に近く、断面三角形の凸帯上面は水平になる。口唇部は丸味をもつ。ツマミは偏平で、中央が凹む。天井部外面はヘラケズリののちかるくヨコナデを施す。凸帯部に2対計4カ所の焼成前の「切り込み」がみられる。	①白色粒を含む②還元③灰白色④深さ3.1、G-173	
13	蓋	$\frac{3}{4}$	13.8 3.4 ツマミ 3.4	5 T13-I	ロクロ右回転。天井部は外面側に丸味をもって厚くなる。内面は平坦である。肩部はその上下を強くヨコナデすることによって凸帯状に張り出す。口縁部外面は凹む。口唇部に厚味があり、その中央に凹線がみられる。ツマミは偏平なボタン状を呈し、中央がわずかに凸である。天井部外面の上半はヘラケズリを施す。	①白色粒・石英粒・小石を含む②還元③灰色④深さ1.9、G-174	
1	杯	$\frac{1}{2}$	(13.5) 3.4 (8.8)	5 P02-II	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。底部外面の周縁は回転ヘラケズリ、底部外面は非回転のヘラケズリを施す。内底の周縁に強いヨコナデを施す。	①白色粒を含む②還元③灰黄色④深さ2.5、G-92	
2	杯	底部片 $\frac{1}{4}$	— 現存高 2.1 (9.0)	5 区	ロクロ回転方向不明。外底は非回転のヘラケズリを丁寧に施す。外底周縁はヨコナデを施す。	①白色粒を多く含む②還元③灰褐色④G-127	
3	杯	$\frac{3}{4}$	(14.3) 4.0 (10.0)	5 F09-I	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。内底の周縁に浅い凹線が1本ある。外底はナデを施しているため不明確だが、ヘラ切離しと推定できる。	①白色粒を含む②還元③灰白色④深さ3.6、G-143	
4	杯	$\frac{1}{4}$	(12.9) 3.7 (7.6)	5 区	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口唇部外側が丸くなる。外底は回転ヘラケズリを施す。	①白色粒を多く含む②還元③灰色④深さ2.9、G-117	
5	杯	$\frac{1}{4}$	(14.5) 4.0 (10.1)	5 区	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底は回転ヘラケズリを施す。	①白色粒・石英粒を含む②還元③灰白色④深さ2.8、G-126	

第24表4 遺構外出土土器観察表・杯・碗 (第130・131図、図版105・106)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調 ②焼成 ④備考
6	杯	⅔★	(13.8) 3.6 8.6	5区	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。内底の周縁に強いヨコナデを施す。外底はヘラ切り離し後回転ヘラケズリを施す。底部にヒビ割れがある。	①白色粒を多く含む②還元③灰黄色④深さ2.8、G-78
7	杯	⅓	(12.5) 3.3 (8.0)	5区	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部は外反気味になる。内底の周縁に強いヨコナデを施す。外底は回転ヘラケズリを施し、このケズリは周縁に及ぶ。	①白色粒を含む②還元③灰白色④深さ2.6、G-125
8	杯	⅓	(12.6) 3.1 (6.6)	5区	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部は外反気味になる。外底は回転ヘラケズリを施し、このケズリは周縁に及ぶ。	①白色粒を含む②還元③灰色④深さ2.4、G-119
9	杯	⅓	(12.5) 3.2 (6.4)	5区	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底は回転ヘラケズリを施し、このケズリは周縁に及ぶ。内底周縁に強いヨコナデを施す。	①白色粒を含む②還元③灰色④深さ2.5、G-118
10	杯	⅓	(13.0) 3.3 (9.0)	5S03-I	ロクロ右回転。体部は外反気味にひらく。底部近くに外稜をもつ。外底は回転ヘラケズリを施し、外稜とのあいだ約0.5cmはロクロナデである。外底は丸味をもって凸となる。	①白色粒・石英粒を多く含む②還元③外面灰色、内面淡黄色④深さ2.7、G-507
11	杯	⅓	11.2~15.2 3.1~4.9 7.3~8.1	5V01-II	ロクロ右回転。全体に耳杯状の歪みをもつ。外底は回転ヘラケズリを施す。ヘラ切り離しの可能性がある。外面に自然釉がかかる。	①白色粒を多く含む②還元③灰色④深さ1.7~3.3、G-20
12	杯	⅔★	12.8 3.0 9.0	5V01-II	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらき、口唇部は尖る。内底中央は凸である。外底はヘラ切り後回転ヘラケズリを施す。ヒビ割れ。	①白色粒・石英粒を含む②還元③黒色④深さ2.4、G-40
13	杯	⅓	(11.4) 3.0 (8.0)	5U13	ロクロ左回転。体部は直線的にひらく。外底は回転糸切後、周縁のみ回転ヘラケズリを施す。底部中央寄りには上げ底状となり、器厚が薄くなる。	①白色粒を多く含む②還元③灰白色④深さ2.5、G-508
14	碗	⅓	16.0 4.2 8.6	5V02-II	ロクロ左回転。体部は内湾してひらき、口縁部はわずかに外反する。外底は丁寧な回転ヘラケズリを施し、このケズリは周縁に及ぶ。内底の周縁は丁寧なヨコナデを施す。	①白色粒を含む②還元③灰色④深さ3.1、G-6

第24表5 遺構外出土土器観察表・杯 (第130・131図、図版105・106)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調 ②焼成 ④備考
15	杯	⅝	(14.2)・ 4.1 (8.9)	5 G16	ロクロ左回転。体部は直線的にひらき、口縁部はわずかに外反する。内底の周縁に強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。外底に「X」のヘラ記号がある。	①白色粒を含む②還元③褐色④深さ3.2、G-429
16	杯	⅝	(15.9) 4.0 8.8	5 G07-I	ロクロ左回転。体部は直線的にひらく。内底にロクロナデ痕が目立ち、中央は凸である。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③外面にふい赤褐色、内面灰色④深さ3.1、G-76
17	杯	⅝	15.2 4.9 7.7	5 F14	ロクロ左回転。体部は内湾気味にひらき、口縁部は薄くなってわずかに外反する。内底の中央は凸で、周縁は強いヨコナデを施す。外底周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③灰色④深さ4.0、G-629
18	杯	⅝	14.2 4.4 7.9	5 F09-I	ロクロ左回転。体部は内湾気味にひらき、口縁部は薄くなってわずかに外反する。内底の周縁は強いヨコナデを施す。外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③褐色④深さ3.5、G-75
19	杯	略完	14.8 4.2 7.6	5 I16-I	ロクロ左回転。体部は内湾気味にひらき、口縁部はわずかに外反する。内底の中央は凸で、周縁はヨコナデを施す。外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③灰白色④深さ3.4、G-11
20	杯	⅝	(14.4) 4.5 7.8	5 M04-I	ロクロ左回転。腰に丸味があり、体部上半は直線的にひらく。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③外面黒色、内面灰白色④深さ3.7、G-88
21	杯	⅝	(15.5) 4.7 7.6	5 B19-I、5 R20-I	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらく。内底の周縁および口縁下の内面に強いヨコナデを施す。外底の周縁に強い絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。外面にスス付着。	①白色粒・石英粒を多く含む②還元③灰白色④深さ3.6、G-10
22	杯	略完★	14.7 4.8 8.1	5 H11	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部内側がわずかに肥厚する。内底の周縁に強いヨコナデを施し、内底中央は凸である。外底周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。底部にヒビ割れがある。	①白色粒・小石を含む②還元③灰白色④深さ3.6、G-12

第24表 6 遺構外出土土器観察表・杯 (第131・132図、図版106)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特 徴	① 胎土 ③ 色調	② 焼成 ④ 備考
23	杯	1/2	14.3 4.4 7.9	5 R20	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、中位の器厚が薄い。内底中央はやや凸で、周縁に浅い凹線が1本あり、強いヨコナデを施す。外底の周縁に強い絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③灰色④深さ3.6、G-18	
24	杯	3/8	14.5 3.7 7.4	5 C13	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらき、口縁部は強いヨコナデによりやや薄くなり、わずかに外反する。内底の一部にナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色小粒を多く含み、小石が混る②還元③黒色④深さ3.2、G-490	
25	杯	1/2	14.2 3.6 7.5	5 H11	ロクロ左回転。体部は腰が張って丸味をもち、口縁部はわずかに外反する。内底周縁に強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒・石英粒を多く含む②酸化③黄褐色④深さ2.7、G-24	
26	杯	1/6	14.6 4.0 8.8	5 J06-I	ロクロ左回転。体部は内湾気味にひらき、口縁部は強いヨコナデによってわずかに外反する。内底の周縁に強いヨコナデを施し、中央は凸である。回転糸切後無調整。	①白色小粒を含む②還元③灰色④深さ3.1、G-97	
27	杯	1/6	(13.8) 3.8 8.0	5 E07・G07・H07-I	ロクロ左回転。体部は直線的にひらく。内底の周縁に強いヨコナデを施し、中央は凸である。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③暗赤褐色④深さ3.1、G-98	
28	杯	1/6	(12.2) 3.6 (7.0)	5 G09・H07-I 5 I06-II	ロクロ左回転。体部は腰が張って丸味をもち、口縁部はわずかに外反する。内底周縁に強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③暗赤褐色④深さ2.9、G-116	
29	杯	1/6	(14.4) 3.9 (7.2)	5 G09-I	ロクロ左回転。体部は腰が張って丸味をもち、口縁部はわずかに外反する。内底の周縁に強いヨコナデを施し、中央は凸である。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含み、小石が混る②還元③暗赤褐色④深さ3.0、G-140	
30	杯	1/6	(12.6) 4.0 (7.0)	5 F09・G09-I	ロクロ左回転。体部は丸味をもち、口縁部はわずかに外反する。内底中央は凸である。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③暗赤褐色④深さ3.3、G-141	

第24表7 遺構外出土土器観察表・杯 (第132・133図、図版106)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
31	杯	略完	13.0 3.9 7.1	5 C13	ロクロ左回転。体部は腰が張って丸味をもつ。内底の周縁に強いヨコナデを施し、中央は凸である。外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③灰色④深さ3.0、G-491	
32	杯	✕	12.5~13.9 3.3~4.1 6.5	5 H11-I	ロクロ左回転。全体に耳杯状の歪みをもつ。体部は丸味をもち、口縁部は外反気味である。内底の周縁に強いヨコナデを施し、中央は凸である。回転糸切後無調整。	①白色小粒を含む②還元③灰色④深さ2.5~3.4、G-27	
33	杯	✕	(13.6) 3.5 7.4	5 F09-I	ロクロ左回転。体部は丸味をもち、口縁部は外反気味である。内底の周縁に強いヨコナデを施し、中央は凸である。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③灰白色④深さ2.8、G-84	
34	杯	✕	(13.0) 3.5 (6.2)	5 F09・G09-I	ロクロ左回転。体部は丸味をもち、口縁部はわずかに外反する。内底の周縁に強いヨコナデを施し、中央は凸である。回転糸切後無調整。	①白色小粒を多く含む②還元③灰色④深さ3.2、G-91	
35	杯	略完★	13.7 4.0 7.2	5 I17-I	ロクロ左回転。体部下半に丸味をもつが、上半は直線的にひらく。内底の周縁に強いヨコナデを施し、中央は凸である。外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。底部にヒビ割れがある。	①白色粒・石英粒を含む②還元③灰白色、外面の一部灰褐色~黄橙色④深さ3.2、G-21	
36	杯	✕	14.1 4.5 6.3	5 G・J18	ロクロ左回転。体部に丸味をもち、口縁部はわずかに外反する。内底の周縁に強いヨコナデを施し、中央は凸である。外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色小粒・石英粒を含む②還元③黄褐色④深さ3.7、G-14	
37	杯	✕★	13.3 3.9 7.0	5 J15	ロクロ左回転。体部下半に丸味をもち、上半は直線的にひらく。内底の周縁に強いヨコナデを施し、中央は凸である。外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。底部にヒビ割れがある。	①白色小粒・石英粒を含む②還元③にぶい黄橙色④深さ2.9、G-38、底部にヒビ割れがある。	
38	杯	✕★	(12.9) 4.0 5.9	5 D12	ロクロ左回転。体部下半に丸味をもち、上半は直線的にひらく。内底の周縁に強いヨコナデを施し、中央は凸である。回転糸切後無調整。底部にヒビ割れがある。	①白色粒を多く含む、石英粒が混じる②還元③外面黒色、内面にぶい黄橙色④深さ3.0、G-489	

第24表 8 遺構外出土土器観察表・杯 (第133・134図、図版107)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
39	杯	1/4	(13.1) 4.1 6.1	5 I 06-I	ロクロ左回転。体部は丸味をもち、口縁部はわずかに外反する。内底の周縁に強いヨコナデを施し、中央は略円形に剥離しかけている。外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色小粒を含む②還元 ③外面黒色、内面にふい 黄橙色④深さ3.1、G-86	
40	杯	3/8	13.0 3.8 7.5	5 T・U 09	ロクロ左回転。体部は丸味をもち、口縁部はわずかに外反する。内底の周縁に強いヨコナデを施す。外面にロクロナデ痕が目立つ。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③ 暗灰黄色④深さ3.0、G -43	
41	杯	1/4	(12.0) 3.1 5.6	5 区	ロクロ左回転。体部は丸味をもち、口縁部がやや厚くなる。内底の周縁に強いヨコナデを施し、中央はわずかに凸である。回転糸切後無調整。口縁部外面に重ね焼痕がある。	①白色粒を含む②還元③ 外面灰白色、内面浅黄橙 色④深さ2.4、NG-628	
42	杯	3/8★	12.7 3.5 7.0	5 C	ロクロ右回転。体部は丸味をもち、口縁部はわずかに外反する。内底の周縁に強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。底部にヒビ割れがある。	①白色粒を含む②酸化気 味③外面黒褐色、内面褐 色④深さ2.7、G-486	
43	杯	3/8	12.7 4.1 7.4	5 L12	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部は外反気味である。内底の周縁に強いヨコナデを施し、中央はナデが加わってやや凹む。外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色粒・石英小粒を含 む②還元、酸化気味③外 面淡黄色、内面灰色④深 さ3.3、G-37	
44	杯	略完★	12.0~13.1 3.8~4.3 6.9~7.2	5 F17	ロクロ右回転。体部は丸味をもち、口縁部はわずかに外反する。内底の周縁に強いヨコナデを施し、外底の周縁は絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。底部にヒビ割れがある。	①白色粒・小石を含む② 還元③灰白色④深さ3.2、 G-36	
45	杯	略完★	12.5 4.2 6.6	5 C13	ロクロ右回転。体部は丸味をもち、口縁部はわずかに外反する。内底の周縁にヨコナデを施し、中央は平坦である。外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。体部外面と底部にヒビ割れがある。	①白色小粒を多く含む② 還元③黒褐色④深さ3.3、 G-484	
46	杯	略完	12.5 3.5 7.5	5 H11-I	ロクロ右回転。体部下半に丸味をもつ。内底の周縁に強いヨコナデを施す。外底の周縁は絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元、 酸化気味③黒褐色④深さ 2.8、G-46	

第24表9 遺構外出土土器観察表・杯 (第134図、図版107・108)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
47	杯	⅔	12.0 3.8 6.9	5 P	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部は外方へやや折れ曲る。外底周縁に強い絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色小粒を含む②還元③外面黒色、内面灰白色④深さ2.9、G-62	
48	杯	⅔	11.9 3.5 6.1	5 R03- II	ロクロ左回転。体部は直線的にひらき、口縁部はわずかに外反する。内底周縁に強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒・石英粒・小石を含む②還元③外面灰褐色、内面黒色④深さ2.6、G-69	
49	杯	⅔	11.4 3.9 7.2	5 Q19- I	ロクロ右回転。体部下半に丸味があり、口縁部はわずかに外反する。内底周縁に強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。外底に重ね焼痕があり、周縁に絞り込みがみられる。重ね焼痕の径(6.7cm)である。	①白色粒を多く含む②還元③灰色④深さ3.0、G-130	
50	杯	⅔	11.5 3.6 6.4	5 N08- I	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底の周縁に強い絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色小粒を多く含む②還元③外面灰白色、内面灰色④深さ2.3、G-135	
51	杯	⅔★	11.7 3.6 6.8	5 P17- I	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。口縁部にヒビ割れがある。	①白色小粒を含み、小石が混る②還元③灰色④深さ2.7、G-66	
52	杯	略完	11.6 3.4 6.6	5 P16- I	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部はわずかに外反する。内底周縁にヨコナデを施し、外底周縁は絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色粒・石英粒を含み、小石が混る②還元③灰色、外底のみ灰白色④深さ2.5、G-67	
53	杯	略完★	11.7 3.8 7.0	5 C13	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらき、口縁部はわずかに外反する。内底周縁に強いヨコナデを施し、外底周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。底部にヒビ割れがある。	①白色粒を含み、小石が混る②還元③外面灰色、内面淡黄色④深さ2.8、G-483	
54	杯	略完★	11.7 3.6 6.6	5 E11- I	ロクロ右回転。体部は腰が張り、口縁部はわずかに外反する。内底周縁に強いヨコナデを施し、外底周縁は強い絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。底部にヒビ割れがある。	①白色粒を含む②還元③黒色、外底のみにぶい褐色④深さ2.6、G-60	
55	杯	略完	11.8 3.6 7.0	5 F10- I	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部はわずかに外反する。外底周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色粒を少し含む②還元③灰白色④深さ2.8、G-59	

第24表10 遺構外出土土器観察表・杯 (第134・135図、図版108・109)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調 ②焼成 ④備考
56	杯	1/2	(11.8) 3.7 (7.1)	5 Q 19-I	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらき、口縁部はわずかに外反する。外底周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元、酸化気味③外面黒褐色、内面橙色④深さ2.8、G-131
57	杯	3/8	(11.5) 3.6 (6.8)	5 R 19-I	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部はわずかに外反する。外底周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③外面黒褐色、内面灰褐色④深さ2.8、G-132
58	杯	3/8	11.5 3.4 6.6	5 O 11-I	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらく。内底の周縁に強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒・石英粒を含む②還元③黒褐色④深さ2.6、G-70
59	杯	略完	11.3 3.5 6.9	5 R 18・ R 19-I	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元、酸化気味③褐色④深さ2.8、G-65
60	杯	3/8	11.0 3.3 6.6	5 Q 19-I	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。口縁部は強いヨコナデのため、やや薄くなって外反気味となる。内底周縁に強いヨコナデを施し、外底周縁は絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③灰色、外底灰白色④深さ2.4、G-133
61	杯	3/8	(11.4) 3.3 (7.1)	5 Q 19-I	ロクロ右回転。体部下半は丸味があり、口縁部はわずかに外反する。外底周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③黒色④深さ2.4、G-144
62	杯	3/8★	11.2 3.6 6.9	5 R 20-I	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらく。外底周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。体部下半にヒビ割れがある。	①白色粒・石英粒を多く含む②還元、酸化気味③外面黒色、内面のみ橙色④深さ2.8、G-72
63	杯	3/8	11.4 3.1 5.8	5 Q 03-I	ロクロ右回転。体部は丸味をもち、口縁部は外反する。内底の周縁に強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。外底にワラ状圧痕がある。	①白色粒・石英粒を含む②還元、酸化気味③外面黒色、内面褐色④深さ2.4、G-71
64	杯	3/8	10.6 3.8 6.1	5 K 10	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。内底の周縁に強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色小粒・石英粒を多く含む②還元③黒色④深さ3.2、G-73



第24表11 遺構外出土土器観察表・杯 (第135・136図、図版109)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土色調 ③焼成備考
65	杯	⅓	(11.6) 3.3 (6.2)	5 L05-I	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部は外反する。内底の周縁に強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③外面灰色、内面灰白色④深さ2.7、G-535
66	杯	⅓	(12.0) 4.0 (7.4)	5 P14-I	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらき、口縁部は外反する。口縁部内面に鈍い稜がある。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③外面黒色、内面にふい黄褐色④深さ3.2、G-510
67	杯	⅓	(12.3) 3.6 6.8	5 O10-I	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。内底の周縁に強いヨコナデを施し、外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②酸化③にふい黄褐色④深さ2.7、G-80
68	杯	⅓	(11.0) 3.9 (6.6)	5 T04-II	ロクロ右回転。体部中位の器厚が薄く、口縁部は内湾してひらく。内底の周縁に強いヨコナデを施し、中央は凸である。外底周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③外面黒色、内面灰色④深さ3.0、G-521
69	杯	⅓	13.0 3.2 7.0	5 Q01-I	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。内底の周縁に強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色小粒を多く含む②還元③にふい橙色④深さ2.3、G-48
70	杯	⅓	(10.7) 3.1 5.4	4 U33-I	ロクロ右回転。体部上位で屈曲し、口縁部は外反する。内底に強いロクロナデを施し、中央はわずかに凸である。回転糸切後無調整。	①白色小粒を多く含む②還元、酸化気味③にふい黄褐色④深さ2.2、G-74
71	杯	⅓	(12.6) 3.7 (6.2)	5 T02-I・II	ロクロ左回転。体部は直線的にひらき、口縁部は外反する。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③灰色④深さ3.0、G-530
72	杯	⅓	(12.8) 4.5 (6.0)	5 R03-I	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口唇部は玉縁状に丸くなる。内底の周縁に強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含み、小石が混る②還元③灰色④深さ3.8、G-138
73	杯	⅓★	12.3 4.5 6.6	5 N20	ロクロ右回転。体部は丸味をもち、口縁部は外反する。内底の周縁に強いヨコナデを施し、外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。外底に「X」のヘラ記号がある。底部にヒビ割れをもつ。	①白色小粒を多く含む②還元③灰色④深さ3.6、G-428

第24表12 遺構外出土土器観察表・杯 (第136・137図、図版110)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調 ②焼成 ④備考
74	耳杯?	1/2	8.9~13.7 3.0~5.2 6.0	5 G12	ロクロ左回転。内底中央に楕円形を呈する指頭の凹みがあり、口縁部はこの凹みと同方向に長軸をもつ略楕円形の上面観となる。内底の凹みには工人の指紋が残っている。外底は凸出しており、回転糸切後ほぼ平行な鋭い凹線が20本以上みられる。	①白色粒を多く含む②還元③灰色④深さ1.8~4.2(内底中央の凹み分を除く)、G-492
75	杯	1/2	14.5 3.7 6.8	5 J06-I	ロクロ右回転。体部下半は丸味をもってひろがり、口縁部は薄くなって外反し、口唇部は尖る。内底の周縁に強いヨコナデを施し、外底の周縁は強い絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。外底の切り離し部分は凸出して径6.8cm、内底径は10cm前後である。	①白色粒を多く含む②還元③外面灰黄色、内面灰色④深さ2.9、G-19
76	杯	1/2	(11.7) 4.3 5.8	5-I	ロクロ右回転。体部は丸味をもってひらき、口唇部が外反する。体部下位の器厚が最も薄く、口縁部に向って厚くなる。内底の周縁に強いヨコナデを施し、中央には渦巻状の凹線がある。外底周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③青灰色④深さ3.5、G-89
77	杯	1/2	(11.0) 3.5 (6.1)	5 S03-I	ロクロ右回転。体部は丸味をもってひらき、口縁部は外反する。内底にナデを施し、周縁は強いヨコナデを施す。回転糸切後、雑なナデが加わる。	①白色小粒を少し含む②還元③灰色④深さ2.8、G-509
78	杯	口縁部 小片	(19.0) 現存高 2.7 —	5 G07-I	盤状を呈する土師器杯。口縁部はヨコナデ、内面は丁寧なナデ、体部外面はヨコ方向のヘラケズリを施す。	①砂粒を含む②酸化③赤褐色④G-540
79	杯	1/2	12.0 4.0 6.4	5 Q12-I	ロクロ左回転。体部は丸味をもってひらき、口縁部はわずかに外反する。内底の周縁に強いヨコナデを施し、外底の周縁は絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②酸化③黒色④深さ3.0、G-58
80	杯	1/2	12.0 4.2 6.6	6 V04-I	ロクロ左回転。体部下位に丸味をもち、口縁部は薄くなって外反する。回転糸切後無調整。器表は磨滅している。	①白色小粒・石英粒を含む②還元③灰色④深さ3.5、G-532
81	杯	略完	13.4 3.9 6.2	5 G12	ロクロ左回転。体部は直線的にひらき、口縁部はわずかに外反する。内底中央に回転糸切痕の痕跡がみられる(不明瞭)。回転糸切後無調整。器表の磨滅多い。	①白色粒を多く含む②還元、酸化気味③にぶい黄橙色④深さ3.1、G-488

第24表13 遺構外出土土器観察表・杯 (第137図、図版111)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
82	杯	略完	12.8 3.8 6.5	5 J 06-I	ロクロ左回転。体部は直線的にひらき、口縁部は外反する。内底の周縁に強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色小粒・石英小粒を含む②還元③黒色～灰色④深さ3.0、G-35	
83	杯	略完	12.3 3.6 6.6	5 J 07-I	ロクロ左回転。体部は直線的にひらき、口縁部はわずかに外反する。内底の周縁に強いヨコナデを施し、中央はわずかに凸である。回転糸切後無調整。	①白色小粒を少し含む②酸化③外面灰褐色、内面にぶい橙色④深さ3.0、G-51	
84	杯	略完★	12.7 3.6 6.4	5 M05-I	ロクロ左回転。体部中位でさらに外反度を強めてひらく。内底の周縁に強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。体部にヒビ割れがある。	①白色粒を含む②酸化、環元気味③にぶい橙色～黒色④深さ2.8、G-52	
85	杯	略完	12.6 3.5 6.2	5 M05-I	ロクロ左回転。体部中位の器厚が最も薄く、ここからさらに外反度を強めてひらき、口縁部は反転して外反する。口縁部の下になにぶい外稜をもつ。内底の周縁に強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②酸化、環元気味③にぶい黄橙色～黒色④深さ2.6、G-49	
86	杯	1/2	13.3 3.8 6.6	5 G12	ロクロ左回転。体部は直線的にひらき、口縁部は外反する。外底の周縁に絞り込みがみられる。器表磨減多い。	①白色粒・石英粒を含む②酸化、環元気味③にぶい黄橙色～黒色④深さ2.9、G-487	
87	杯	略完★	12.7 3.6 6.5	5 J 06	ロクロ左回転。体部下位の器厚が最も薄い。体部は直線的にひらき、口縁部は外反する。内底の周縁に強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。底部にヒビ割れがある。	①白色粒・石英粒を多量に含む②還元③灰白色④深さ2.8、G-47	
88	杯	略完★	12.7 3.2 6.8	5 J 06	ロクロ左回転。体部下位の器厚が最も薄く、直線的にひらき、口縁部は反転して外反する。口縁部の下になにぶい外稜をもつ。回転糸切後無調整。体部と底部の境にヒビ割れがある。底部に厚味がある。	①白色粒を少し含む②酸化③にぶい黄色④深さ2.1、G-50	
89	杯	略完	12.3 3.5 6.8	5 G12	ロクロ左回転。体部中位になにぶい外稜をもち、口縁部は反転して外反する。口縁部内面に明瞭な稜線をもち、口唇部内側に丸味をもつ。回転糸切後無調整。外底に不明圧痕がある。器表磨減多い。	①白色粒・石英粒を含む②還元③黒色④深さ2.6、G-485	

第24表14 遺構外出土土器観察表・椀 (第138図、図版112)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土色調 ③色調 ②焼成備考 ④備考
1	高台椀	⅔	(10.4) 5.5 高台 5.2	5 I 07- II	ロクロ左回転。体部は内湾してひらく。高台は高さ0.9cmで、内湾気味に「ハ」字状にひらく。内底中央は凸である。外底の高台内側は回転ヘラケズリを施す。外面に土または窯体の一部が溶着している。	①白色小粒を含む②還元 ③灰色④深さ4.1、G-161
2	高台椀	完	9.5~11.0 4.7~ 4.9 高台 5.5	5 S 03- II	ロクロ左回転。体部は内湾気味にひらく。高台は高さ0.7cmで、内湾して「ハ」字状にひらく。内底中央は凸である。外底の高台内側に回転糸切痕を残す。全体に片口状の歪みをもつ。内面の全面と外面の一部に自然釉がかかり、高台の1カ所は折れている。	①白色粒を多く含む②還元 ③外面灰色、内面オリーブ色④深さ2.4~3.3、G-289
3	高台椀	⅔	(11.2) 4.9 高台 6.1	5 T 09・ U 09-I	ロクロ右回転。体部は内湾してひらく。高台は高さ0.7cmで、「ハ」字状にひらき、外端は接地しない。外底の高台内側に回転糸切痕が残り、爪先状の列点が略一周する。	①白色粒を含む②酸化、還元気味③にぶい橙色④深さ3.6、G-156
4	高台椀	⅔	(9.4) 4.7 高台 (6.2)	5 区	回転方向不明。体部は腰に丸味をもってひらく。高台は高さ1.0cmで、「ハ」字状にひらく。外底の切り離し・調整は不明。	①白色粒・石英粒・黒色小粒を含む②還元③灰色④深さ3.1、G-162
5	高台椀	⅔	(10.4) 5.6 高台 6.8	5 T 02- II	ロクロ右回転。体部は腰に丸味をもってひらき、口縁部は外反する。高台は高さ1.1cmで、「ハ」字状にひらく。外底の高台内側は切り離した後ヨコナデを加える。内底周縁に強いヨコナデを施す。	①白色小粒を少し含む②還元③灰色④深さ4.0、G-157
6	高台椀	⅔	(10.1) 5.6 高台 6.8	5 H 06- I	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部は外反する。内底の周縁に強いヨコナデを施し、外底の高台内側も強いヨコナデを施す。高台にヒビ割れがある。	①白色粒を多く含む②酸化、還元気味③外面黒色、内面灰褐色④深さ3.5、G-159
7	高台椀	⅔	(11.0) 5.7 高台 (6.8)	5 N 20	回転方向不明。体部は直線的にひらき、口縁部は薄くなってわずかに外反する。高台は高さ1.3cmで、「ハ」字状にひらく。内底の周縁に強いヨコナデを施す。	①白色粒を少し含む②還元③外面黒色、内面灰白色④深さ3.7、G-431
8	高台椀	⅔	11.3 5.3 高台 6.4	5 N 05- I	ロクロ左回転。体部は内湾してひらく。高台は高さ0.7cmで、「ハ」字状にひらき、端部が尖って断面三角形を呈する。内底の周縁に強いヨコナデを施し、外底の高台内側には回転糸切痕が残る。	①白色粒を含み、小石が混る②還元③灰色、一部黒色④深さ3.5、G-155

第24表15 遺構外出土土器観察表・椀 (第138・139図、図版112・113)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
9	高台椀	$\frac{3}{8}$	(11.1) 4.6 高台 6.2	5 R03- II	ロクロ左回転。体部は内湾してひらく。高台は高さ1.0cmで、「ハ」字状にひらき、端部は丸味をもっており、断面三角形を呈する。内底の周縁に強いヨコナデを施し、外底の高台内側には回転糸切痕を残す。	①白色小粒を含む②還元 ③灰褐色、高台内側のみ にぶい黄橙色④深さ2.8、 G-164	
10	高台椀	$\frac{3}{8}$ 高台欠	11.0 現存高 5.1 —	5-I	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらく。体部中位の器厚が薄い。高台は半欠し、端部の形状は不明。内底の周縁に強いヨコナデを施し、外底は回転糸切後高台を貼り付け、その内側に雑なナデを加える。	①白色小粒・石英粒を含む ②還元③灰色④深さ4. 5、G-154	
11	高台椀	$\frac{3}{8}$	16.0 7.7 高台 8.7	5 R03- II	ロクロ左回転。体部は内湾してひらく。高台は高さ0.9cmで断面長方形を呈し、「ハ」字状にひらく。接地点の径は7.5cm、外端は接地せず径8.7cmである。内底の周縁にヨコナデを施し、外底の高台内側に回転糸切痕が残り、非回転のナデが加わる。	①白色粒を含み、小石が 混る②還元③外面黒色、 内面明緑灰色④深さ5.9、 G-283	
12	高台椀	$\frac{3}{8}$	(14.7) 7.9 高台 8.0	5 R03- I	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらく。高台は高さ1.3cmで、「ハ」字状にひらき、外端は外側へ踏ん張る。内端は接地しない。内底の周縁に強いヨコナデを施し、外底の高台内側に回転糸切痕が残る。	①白色粒を含む②還元③ 灰色④深さ6.0、G-146	
13	高台椀	$\frac{3}{8}$	(15.1) 6.7 高台(10.2)	5 G12	ロクロ右回転。体部は内湾してひらき、口縁部は外反する。高台は高さ0.7cmで、「ハ」字状にひらく。内底の周縁に強いヨコナデを施し、外底の高台内側に回転糸切痕を残す。	①白色粒を含む②還元③ 黄褐色④深さ5.4、 G-493	
14	高台椀	$\frac{3}{8}$	(15.4) 現存高 6.5 —	5 Q19	ロクロ右回転。高台は半欠し、端部の形状は不明。体部は直線的にひらき、口縁部はわずかに内傾する。内底の周縁に強いヨコナデを施し、中央は凸である。外底の高台内側に回転糸切痕を残す。	①白色粒を含む②還元、 酸化気味③淡黄色④深さ 5.2、G-17	
15	高台椀	$\frac{3}{4}$	(15.0) 現存高 4.3 —	5 R16- I	ロクロ右回転。底部を欠く。体部は丸味をもつてひらき、口縁部は器厚が薄くなって外反し、口唇部は玉縁状に肥厚してさらに外反する。体部内外面にロクロナデ痕が目立つ。	①白色小粒を多く含む② 酸化③黒褐色④G-504	

第24表16 遺構外出土土器観察表・椀 (第139・140図、図版113)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土色調 ②焼成備考
16	高台椀	⅓	(15.0) 現存高 4.9 —	5 Q10- I	ロクロ右回転。口縁部小片。体部は丸味をもってひらき口縁部は外反する。口唇部は玉縁状に肥厚する。	①白色粒・石英粒を多く含む②還元、酸化気味③黒褐色④G-539
17	高台椀	⅓	(15.7) 5.8 高台 7.4	5 区	ロクロ右回転。体部は丸味をもってひらき、口縁部は外反して端部は尖り気味になる。高台は高さ0.7cmで、「ハ」字状にひらき、端部は丸くおさめる。内底の周縁に強いヨコナデを施し、外底の高台内側は回転糸切後ナデを加える。底部の器厚が厚い。	①砂粒を含む②還元、酸化気味③褐色④深さ3.9、G-149
18	高台椀	⅓	(15.0) 5.9 7.4	5 J 06	ロクロ左回転。体部は直線的にひらく。高台は高さ0.9cmで、断面台形を呈し、内端は接地しない。内端と外端との間は凹む。内底の周縁に強いヨコナデを施し、外底の高台内側に回転糸切痕が残る。	①砂粒を含む②酸化、還元気味③褐色④深さ4.1、G-148
19	高台椀	⅓	(15.3) 5.1~ 6.3 7.7	5 J 06	ロクロ左回転。歪みをもつ。体部は直線的にひらく。高台は高さ0.9cmで、断面三角形を呈する。内底の周縁に強いヨコナデを施し、外底は回転糸切ののち高台を貼り付け、強いヨコナデを施す。高台内側に回転糸切痕が残るが、ナデを加える。	①白色粒を含み、小石が混る ②還元 ③灰色 ④深さ4.2~4.7、G-147
20	高台椀	⅓★	12.2~13.7 5.5~ 6.0 高台 6.6	4 C 33- II	ロクロ右回転。歪みをもつ。体部は直線的にひらき、口縁部は外反する。高台は高さ1.0cmで断面台形を呈する。外底の高台内側に回転糸切痕が残るが、ナデを加えている。体部外面にロクロナデ痕が目立つ。	①白色粒・石英粒を含む ②還元③灰白色④深さ3.6~4.8、G-517、口縁部にヒビ割れがある。
21	高台椀	⅓	14.4 4.8~ 5.4 高台 6.8	4 C 33- II	ロクロ右回転。歪みをもつ。体部は丸味をもってひらき、口縁部は外反する。高台は高さ0.7cmで断面台形を呈し、外端は接地しない。内端の径5.7~6.1cmである。内外面とも器表が剥落しており、調整は不明。但し、外底の高台内側に回転糸切痕がわずかに残る。	①白色粒・砂粒を多く含む②酸化、還元気味③灰白色④深さ3.5~3.8、G-518
22	高台椀	⅓	(14.6) 5.2 高台 8.2	4 C 33- II	ロクロ右回転。体部は直線的にひらき、口縁部は肥厚して外反する。高台は高さ0.6cmで断面台形を呈し、外端は接地しない。内端径6.0cm。外底の高台内側に回転糸切痕を残す。高台の剥落面には接合用の凹線がなく、糸切痕のみである。	①白色小粒を含む②還元 ③灰白色④深さ4.1、G-527

第24表17 遺構外出土土器観察表・椀 (第140・141図、図版113・114)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土色調 ③焼成備考	②還元 ④備考
23	高台椀	1/5★	(14.2) 現存高 4.9 —	4 C 33— II	ロクロ左回転。体部は直線的にひらき、口縁部は肥厚する。高台を欠く。本体の底部径は5.7cmである。外底に回転糸切痕を残す。全体に歪みもち、内底に小石があり、その周辺にヒビ割れがみられる。	①白色粒を多く含み、小石が混る②還元③灰白色④深さ4.1、G-528	
24	稜椀	2/3	(15.4) 8.5 高台(10.3)	5 P 17— I	ロクロ右回転。底部と体部との境に外稜をもち、体部は直線的にひらく。高台は高さ2.2cmで「ハ」字状にひらき、端部は外方へ踏ん張る。内底の周縁に浅い凹線が1本みられる。外底の高台内側に回転糸切痕が残るが、ナデを加えている。外稜径12.3cm。	①白色粒を含む②還元③外面灰色、内面灰白色④深さ5.6、G-430	
25	稜椀	1/6	(14.9) 現存高 4.5 —	5 U 04— II	ロクロ右回転。底部を欠く。底部と体部との境に外稜をもち、体部は直線的にひらく。内底の周縁に凹線をもつ。外稜径12.2cm。	①白色小粒を含む②酸化、還元気味③外面黒色、内面褐色④G-536	
26	椀	2/3	(13.2) 4.6 8.3~8.6	5 T 13— I	ロクロ右回転。やや歪む。体部は内湾してひらき、口縁部がわずかに外反する。内底の周縁に強いヨコナデを施し、中央は凸である。回転糸切後無調整。糸切に失敗したのか、糸切痕が2回みられ、中央側が古く、外周側が新しい。	①白色粒を多く含む②還元③外面暗赤褐色、内面灰色④深さ3.7、G-77	
27	椀	1/3	(12.1) 3.8 (8.3)	5 M 12・ 13—I	ロクロ右回転。体部は内湾気味にひらき、口縁部はわずかに外反する。内底の周縁に強いヨコナデを施し、中央は丸く盛り上げる。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元、酸化気味③にぶい黄橙色④深さ3.0、G-82	
28	椀	略完	14.7~16.5 5.9~6.8 7.0	5 K 17	ロクロ左回転。体部は内湾してひらく。内底の周縁に強いヨコナデを施し、外底の周縁に絞り込みがみられる。体部外面にロクロナデ痕が目立つ。回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②還元③灰色④深さ4.7~5.7、G-2	
29	椀	1/3	(16.4) 5.4 (8.1)	5 F 07— I	ロクロ左回転。体部は内湾してひらき、口縁部はわずかに外反する。回転糸切後無調整。	①白色粒・石英粒を含む②還元③暗灰黄色④深さ4.4、G-101	
30	椀	3/4	(15.7) 5.9 8.2	5 O 18— I	ロクロ右回転。体部は丸味をもってひらく。内底の周縁に強いヨコナデを施し、外底の周縁は強い絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色小粒を多く含む②還元③灰色④深さ5.3、G-3	

第24表18 遺構外出土土器観察表・椀・皿 (第141・142・145図、図版114・118)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特 徴	① 胎土 ③ 色調	② 焼成 ④ 備考
31	椀	⅝	(14.7) 4.6 (8.0)	5 S02— I	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。内底の周縁に強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。歪みをもつ。	①白色粒を含む②還元③灰色④深さ4.0、G-136	
32	椀	⅝	(14.2) 5.8 (7.0)	5 R03— I	ロクロ右回転。体部は直線的にひらく。内底の周縁に強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。体部内面にロクロナデ痕が目立つ。	①白色粒を含む②還元③外面灰色、内面灰白色④深さ4.8、G-137	
33	椀	⅜★	14.8 5.2 7.7	5 R03— II	ロクロ左回転。体部は内湾してひらき、口縁部はわずかに外反する。内底の周縁に強いヨコナデを施し、外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。底部にヒビ割れがみられる。	①白色粒を多く含み、小石が混る②還元③黒色～灰褐色④深さ4.2、G-8	
34	椀	⅜★	14.8 5.3 7.5	5 R03— I・II	ロクロ左回転。体部は直線的にひらき、口縁部はわずかに外反する。内底の周縁に強いヨコナデを施し、外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。ワラ状の圧痕が平行して2本ある。底部にヒビ割れがある。	①白色粒を多く含む②酸化③外面黒色、内面にぶい橙色④深さ4.2、G-7	
35	椀	略完	13.9～14.6 4.8 6.9	5 R03— II	ロクロ左回転。体部は内湾してひらく。全体に歪みがある。内底の周縁に強いヨコナデを施す。回転糸切後無調整。	①白色粒・砂粒を含む②酸化③外面黒色、内面にぶい橙色④深さ3.9、G-9	
36	椀	⅝	(13.2) 5.0 (8.1)	5 I07— I	ロクロ左回転。体部は直線的にひらき、口縁部は強いヨコナデにより薄くなって外反する。内底の周縁に強いヨコナデを施し、外底の周縁に絞り込みがみられる。回転糸切後無調整。	①白色粒・石英粒を含み、小石が混る②酸化③明黄褐色④深さ4.1、G-85	
1	高台皿	⅝	(20.9) 3.5 高台(16.8)	5 E12	ロクロ左回転。内底は中央に向かって低くなり、口縁部は明瞭な外稜を境に外上方へひらく。高台は高さ1.3cmで「ハ」字状にひらき、内端は接地しない。皿部との接合面に3本の凹線を施し、接合を強めている。外稜以下の皿部外底に回転ヘラケズリを施し、高台接合のうち内側3cmほどの部分までヨコナデを施す。外底中央の径9cmほどは回転ヘラケズリのままである。内底の周縁は強いヨコナデを施す。底部中央の器厚が最も厚い。外稜径は18.7cmである。	①白色粒を多く含む②還元③灰色④深さ2.0、G-165	



第24表19 遺構外出土土器観察表・皿 (第145図、図版118)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土色調 ③焼成備考	②還元 ④焼成備考
2	高台皿	1/4	(19.6) 4.1 高台 14.0	5 F・H 08-I	ロクロ左回転。口縁部と底部との境に明瞭な外稜をもたない。高台は高さ1.4cmで、端部は外方へ踏ん張る。内底の周縁に強いヨコナデを施し、外底の高台内側は回転ヘラケズリのちヨコナデを加える。高台の接合面には凹線を施す。	①白色小粒を含む②還元 ③灰褐色④深さ2.4、 G-167	
3	高台皿	3/4	(17.8) 5.1 高台 12.5	5 J 13-I	ロクロ左回転。口縁部と底部との境にぶい外稜をもつ。高台は高さ1.6cmで端部は外方へ踏ん張る。内底の周縁に強いヨコナデを施す。外底の高台内側に同心円状の細く浅い凹線がみられるが、切り離し痕か整形痕か不明。最終仕上げはヨコナデを施す。	①白色粒を含む②酸化③ 明赤褐色④深さ2.9、G- 166	
4	高台皿	1/4	(13.1) 3.5 高台 (8.0)	5 G・H 11	ロクロ左回転。皿と杯との中間形。底部と口縁部との境にぶい外稜をもつ。高台は高さ1.2cmで「ハ」字状にひらき、内端は接地しない。内底の周縁に強いヨコナデを施し、外底の高台内側もヨコナデで仕上げる。	①白色粒を含む②還元③ 灰色④深さ1.5、G-163	
5	皿	1/4	(11.6) 現存高 2.0 —	5 Q 13	ロクロ右回転。口縁部小片。底部と口縁部との境に外稜をもつ。内外面ヨコナデを施す。底部を欠く。外稜径 (11.4cm)。	①白色粒を含む②還元③ 灰色④G-548	
6	高台皿	1/4	(13.9) 現存高 2.7 —	5 G 12-I	ロクロ右回転。高台を半欠する。底部と口縁部との境に外稜をもち、口縁部は反転して外上方へひらく。外底の高台内側の付け根は強いヨコナデを施し、それより内側はナデを加える。口縁部のつくりは蓋と同様で、蓋の可能性はある。	①白色粒を含む②酸化、 還元気味③外面黒色、内 面オリーブ黒色④深さ1. 4、G-196	
7	高台皿	1/4	12.2 3.4 高台 6.5	5 区	ロクロ左回転。底部と口縁部との境にぶい外稜をもつ。高台は高さ1.1cmで、内湾して「ハ」字状にひらく。外底の高台内側に回転糸切痕が残るが、ナデを加えている。	①白色小粒を含む②還元 ③灰色④深さ1.5、 G-501	
8	高台皿	1/4	(12.8) 3.1 高台 6.8	5 G 12	ロクロ左回転。口縁部に強いヨコナデを施し、口唇部は上方へひき出される。高台は高さ0.8cmで断面台形を呈し、外端は接地しない。外底の高台内側に回転糸切痕を残す。	①白色粒・石英粒を含む ②還元、酸化気味③外面 黒色、内面灰褐色④深さ 1.6、G-497	

第24表20 遺構外出土土器観察表・皿 (第145図、図版118)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土色調 ②焼成備考 ③色調 ④
9	高台皿	略完★	12.3 2.9 高台 6.2	5 G12	ロクロ右回転。口縁部の器厚が薄く、強いヨコナデにより上外方へひきだされる。高台は高さ0.9cmで、端部は丸く仕上げる。外底の高台内側に回転糸切痕を残すが、ナデを加えている。ヒビ割れがみられる。	①白色粒を含む②還元③灰色④深さ1.3、G-495
10	高台皿	略完★	12.9 2.8 高台 6.2	5 G12	ロクロ右回転。口唇部は細くつまみ出され、内傾する。高台は高さ0.8cmで断面台形を呈し、内端は接地しない。外端と内端との間は凹む。外底の高台内側に回転糸切痕を残すが、ナデを加えている。底部にヒビ割れがある。	①白色粒・石英粒を含む②還元、一部酸化③灰色、一部褐色④深さ1.0、G-496
11	高台皿	略完	11.9 2.6 高台 6.0	5 G12	回転方向不明。口縁部に強いヨコナデを施し、口縁部は外上方へひきだされる。口縁部と底部との境に外稜をもつ。高台は高さ0.8cmで断面台形を呈し、外端と内端の間が凹む。外底の高台内側はナデを加える。	①白色粒・石英粒を含む②還元、酸化気味③灰黄色④深さ1.0、G-494
12	高台皿	1/2	12.6 3.0 高台 6.2	5 区	回転方向不明。口縁部は強いヨコナデにより器厚がやや薄くなるが、折り曲げ・つまみ出し等は加えられない。高台は高さ0.7cmで断面三角形を呈し、端部は丸くおさめる。内底中央が凹む。外底の高台内側に回転糸切痕を残すが、ナデを加えている。	①白色粒・石英粒を含む②還元③灰白色④深さ1.5 (中央)、G-168
13	皿	1/2	(12.5) 2.5 6.1	5 R16-I	ロクロ左回転。外底は厚さ0.7cmの円盤状に凸出する。回転糸切後無調整。糸切痕の渦の中心がほぼ底部中央にあり、糸を抜いた痕跡が残らない切り離しを施す。	①白色小粒・石英小粒を含む②還元③黒色④深さ1.3、G-99
14	皿	口縁部小片	(13.2) 現存高 1.5	5 O14-I	回転方向不明。底部を欠く。内外面ともヨコナデを施す。	①白色小粒を含む②還元③灰色④G-584
15	皿	口縁部小片	(12.2) 現存高 1.3	5 S03-I	ロクロ右回転。底部を欠く。内外面ともヨコナデを施し、口縁部は強いヨコナデによりわずかに外反する。	①白色小粒を含む②還元③黒褐色④G-583
16	皿	口縁部小片	(12.0) 現存高 1.4	5 O13-I	ロクロ右回転。底部を欠く。内外面ともヨコナデを施し、口縁部は強いヨコナデによりやや薄くなる。高台または円盤状の底部が付くと思われる。口縁部内面に重ね焼痕がみられその径は(9.8cm)である。	G-542

第24表21 遺構外出土土器観察表・高杯・鉢 (第146・147図、図版104・119)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	① 胎土 ③ 色調	② 焼成 ④ 備考
1	高杯	杯部 ⅓	(17.2) 現存高 5.2 —	5 L07-I	口縁部と杯部の底部との境に外稜をもち、口縁部は反転して外反する。口唇部は外方にひきだされ、上面に平坦面をもち、内端は稜をもつ。内外面ともヨコナデを施す。脚部欠。	① 白色粒・砂粒を含む② 酸化③ 橙色④ G-534	
2	高杯	杯部 ⅓	— 現存高 1.7 —	5 G08・I06-I	脚部、口縁端部を欠く。皿状の杯部で、脚部との接合面を残す。接合面には断面V字状の凹線を3本切り込んで接合を強化する。中央部はナデが加えられており、脚部は円筒状と考えられる。杯部外面の中央寄り、左回転ヘラケズリののち、ヨコナデを施す。	① 白色粒・石英粒を含み、小石が混る② 酸化③ 黄橙色④ G-205	
3	高杯	杯部 ⅓	— 現存高 2.0 —	5 G08・H08・I07-I	脚部、口縁部を欠く。皿状の杯部で、外面に脚部との接合面を残す。接合面には断面V字状の凹線を4本切り込んで接合を強化する。接合部中央はナデを加える。杯部外面の中央寄りは左回転ヘラケズリののちヨコナデを施す。	① 白色粒・石英粒を含む② 酸化③ におい黄橙色④ G-206	
4	高杯	接合部	— 現存高 3.4 —	5 区	脚部、杯部の接合部のみ遺存する。杯部外底の中央に爪跡状の圧痕を残す。脚部は粘土紐の巻きあげとみられる。	① 白色小粒を含む② 還元③ 灰色④ G-207	
5	高杯	脚部 ⅓	— 現存高 6.7 12.0	5 I12-I	杯部を欠く。脚部上端に杯部との接合面を残す。粘土紐左回転巻き上げにより成形し、その痕跡を脚部内面に残す。裾部外面に断面三角形の凸帯をもち、端部は薄くなって水平近くまでひらく。内外面ロクロナデを痕す。	① 白色小粒・砂粒を含む② 還元③ 灰色④ G-505	
6	高杯	脚部 ⅓	— 現存高 5.0 —	5 U06	杯部、脚裾部を欠く。裾部は打ち欠いたように2cmほどの間隔で計7カ所の割れ口がみられる。	① 白色小粒・砂粒を含む② 還元③ 灰色④ G-555	
1	鉢	口縁部 ⅓	(14.1) 現存高 5.6 —	5 J06-I	底部を欠く。口縁部に1カ所外方へ折れ曲る部分があり、片口と考えられる。口縁部にヨコナデを施したのち、丁寧に折り曲げており、破損品らしいアタリはみられない。器厚は0.3~0.4cmで薄く、内外面とも丁寧にヨコナデを施して仕上げている。底部の形状は不明だが、傾きの様子から器高12cm前後が推定できる。	① 白色粒を含む② 還元③ オリーブ灰色④ G-208	

第24表22 遺構外出土土器観察表・鉢・甌 (第147・151図、図版119・122)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	① 胎土 ③ 色調	② 焼成 ④ 備考
2	鉢	略完	12.2 12.3 (8.8)	5 G 0	底部を半欠し、内底中央を欠く。ロクロ左回転。体部は丸味をもってひらき、口縁部は上外方へひき出される。口唇部は平坦で、内端に明瞭な稜をもつ。底部に向って径が小さくなり、くびれ部の径は6.4cmである。底部は厚さ約1cmの円盤で、回転糸切後ナデを施し、周縁は面取り状に斜めの面をもつ。内面にロクロナデ痕が目立つ。	①白色粒を多く含む②還元③灰色④深さ(11.0)、G-282	
3	鉢	口縁部 1/2	(13.0) 現存高 5.4 —	5 T03-I	体部下半以下を欠く。口縁部に強いヨコナデが施され、口唇部は平坦に、その外端は外上方へ引きだされ、内端は丸く凸出するように仕上げられている。	①白色粒を含む②還元③灰色④G-516	
4	鉢	口縁部 1/2	(14.0) 現存高 7.7 —	5 R03-I	体部下半以下を欠く。口縁部に強いヨコナデが施され、口唇部は平坦に仕上げる。口唇部の内・外端は凸出する。	①白色粒・石英粒を含む②還元③灰白色④G-269	
5	鉢	底部	— 現存高 4.4 11.8	5 H08-I	底部のみ遺存する。厚さ約1cmの円盤に体部が接合されている。体部下端にヨコナデを施したのち、円盤状底部の側面にヨコナデを加えるため、円盤の上面はまくれ上っている。内底は器表が剥落し、外底はヘラケズリナデが施されて中央部が上げ底状となる。	①白色粒を多く含み、小石が混る②還元③灰色④G-551	
6	鉢	底部 1/2	— 現存高 1.9 (12.0)	5 G08・07-I	底部のみ遺存する。厚さ約1cmの円盤状の底部に体部が接合されている。円盤に断面V字状の凹線(2本見えている)を施し、体部を接合する方法で、ツマミや高台の接合同様の方法である。外底はナデが加えられ、自然釉がかかる。	①白色小粒を含む②還元③灰色④G-605	
1	甌	体部 1/2	— 現存高18.7 (11.2)	5 K09-I	口縁部、底部の大半を欠く。ロクロ右回転。体部は上位に最大径(20.3cm)がある。遺存上端は凸帯の可能性もあるが、内外面の形状から口縁部としておく。底部の蒸気孔は長方形の孔3~4カ所が推定できる。下端は断面台形の高台状を呈し、平坦面をもっており、外方へ踏ん張る。内外面とも丁寧なヨコナデを施す。	①白色粒を多く含む②還元③灰色④G-256	

第24表23 遺構外出土土器観察表・須恵器・小型カメ・鉢 (第149・151図、図版121・122)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
2	甕	略完★	14.8 17.0 9.6	5 M18	最大径19.6cmは体部中位やや上にある。口縁部は強く外反し、口唇部は上方にひき出される。口唇部側面は凹む。底部は円盤貼り付けで、外底には布目状の圧痕がある。底部にヒビ割れがみられ、体部外面の一部は器表が剥落している。体部は内外面ヨコナデを施す。	①白色粒を多く含む②還元③灰色④深さ15.6、G-229	
3	甕	口縁部 ¼	(12.0) 現存高 4.8 —	5 N16- I	肩部以下を欠く。口縁部は「く」字状に外反し、口唇部は断面三角形を呈する。現存下端の内面の形状から肩部以下は底部に向かってすぼまる形態と考えられる。内外面ともナデを施す。	①白色粒を含む②還元③灰色④G-232	
4	甕	口縁部 ¼	(10.6) 現存高 2.2 —	5 N20- I	頸部以下を欠く。口縁部は強く外反し、口唇部は上方にひき出される。内外面ヨコナデを施す。	①白色粒を含む②還元③外面灰色、内面灰白色④G-546	
5	甕	口縁部 小片	(16.0) 現存高 2.7 —	5 P02- I	体部以下を欠く。口縁部は「く」字状に外反して水平近くまでひろく。口唇部は細く上方へひき出される。内外面ヨコナデを施す。	①白色粒を含む②還元③灰色④G-547	
6	甕	口縁部 ¼	(20.0) 現存高12.0 —	5 R03- I	鉢形に近くひらき、体部下半以下を欠く。体部の最大径(19.2cm)は中位にあり、口径よりもやや小さい。口縁部は「く」字状に外反し、口唇部は上方へひき出される。内外面ヨコナデを施す。	①白色粒を含む②還元③灰色④G-236	
7	甕	口縁部 ¼	(28.3) 現存高13.3 —	5 G12	体部下半以下を欠く。体部最大径(26.8cm)は口縁下にあり、口径よりも小さい。口縁部は短く「く」字状に外反し、口唇部は上方へひき出される。頸部外面に強いヨコナデを施す。平底か。	①白色粒を多く含む②還元③灰色④G-503	
1	甕 H質	¼★	(13.0) 11.4 7.0	5 F09- I	ロクロ左回転。最大径(16.3cm)は体部中位やや上にある。口縁部は短く「く」字状に外反する。内面にロクロナデ痕があり、内底中央は凸である。底部は円盤貼り付けと考えられる。外底は回転糸切後無調整。	①白色粒を多く含む②酸化③橙色④深さ9.8、G-214	
2	甕 H質	¼	(14.8) 現存高 9.5 —	5 区	ロクロ左回転。最大径(15.7cm)は体部中位やや上にある。口縁部は短く「く」字状に外反する。体部外面の下半は非回転のヘラケズリが施される。底部を欠く。	①白色粒・砂粒を含む②酸化③外面灰黄色、内面灰色④深さ9.3、G-218	

第24表24 遺構外出土土器観察表・小型甕・甕 (第149・150図、図版121・122)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土色調 ③色調 ②焼成備考 ④備考
3	甕 H質	1/3	(12.7) 12.3 —	5 F09— I	ロクロ左回転。底部を欠く。最大径(13.6cm)は体部中位やや上にある。口縁部はヨコナデ、体部はロクロナデを施し、体部外面の下半は非回転のヘラケズリを加える。このヘラケズリは主として底部に向う。	①白色粒・砂粒を含む②酸化、還元気味③外面灰黄色、内面黒色④G—216
4	甕 H質	1/3	(14.4) 現存高 9.7 —	5 Q19— I	回転方向不明。底部を欠く。最大径(15.3cm)は体部中位にある。口縁部は「く」字状に外反し、その上半は強いヨコナデを施す。体部は内外面とも丁寧なロクロナデを加える。内面の一部に炭化物が付着している。	①白色粒・砂粒を含む②酸化③赤褐色④G—498
5	甕 H質	口縁部 小片	— 現存高 5.2 —	5 Q19— I	ロクロ左回転。口縁部は内湾してひろく。体部の内外面にロクロナデ痕が目立つ。	①白色粒・砂粒を含む②酸化③橙色④G—251
6	甕 H質	底部 1/2	— 現存高 4.0 (7.4)	5 I 12	ロクロ左回転。外底に静止糸切り痕を残す。内面はロクロナデ痕が目立ち、体部下端は回転ヘラケズリののちナデを加える。二次火熱を受けている。	①白色粒・砂粒を含み、小石が混る②酸化、還元気味③外面灰色、内面灰黄色④G—562
7	甕 H質	底部	— 現存高 4.1 6.0	5 L08	ロクロ右回転。底部のみ遺存する。外底に非回転のヘラケズリののちナデを加える。体部下端は回転ヘラケズリののちナデを施す。内底と体部外面はロクロナデのままである。外面に2次火熱を受けている。	①白色粒・砂粒を含む②酸化③橙色④NG—627
1	甕 H	口縁部 1/3	(25.4) 現存高11.0 —	5 R03— II	体部下半以下を欠く。口縁部は「く」字状に外反し、口唇部は尖り気味となる。口縁部はヨコナデ、体部外面はタテ方向のヘラケズリ、内面はナデを施す。	①白色粒・砂粒を含む②酸化③赤褐色④G—549
2	甕	口縁部 1/3	(20.1) 現存高 8.5 —	5 R03— II	体部下半以下を欠く。「コ」字状の口縁部をもち、口唇部は内湾する。体部の外面はヨコ方向のヘラケズリ、内面は丁寧なナデを施す。	①砂粒を多く含む②酸化③赤褐色④G—271
3	甕	口縁部 1/3	(20.6) 現存高14.1 —	5 Q17— I	体部下半以下を欠く。「コ」字状の口縁部をもち、口唇部は内湾気味である。体部の外面はヨコ方向のヘラケズリ、内面は丁寧なナデを施す。内面に炭化物が付着している。体部の器厚は2mmほどで薄く、口縁部の厚さは約4mmである。	①砂粒を多く含む②酸化③褐色④G—273

第24表25 遺構外出土土器観察表・甕 (第150図、図版121)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
4	甕 H	口縁部 1/2	(19.4) 現存高 9.0 —	5 R03— II	体部下半以下を欠く。口縁部上半の外反が弱い「コ」字状の口縁部をもつ。口縁部はヨコナデ、体部の外面はヨコ方向のヘラケズリ、内面は丁寧なナデを施す。	①砂粒を多く含む②酸化 ③褐色④G-272	
5	甕 H	口縁部 1/2	(21.0) 現存高 7.8 —	5 P17— I	体部以下を欠く。口縁部上半は滑らかに外反し、口唇部下の外面に浅い凹線をもつ。体部外面はヨコ方向のヘラケズリ、内面は丁寧なナデを施す。口縁部に炭化物が付着している。	①砂粒を多く含む②酸化 ③褐色④G-550	
6	甕 H	底部片	— 現存高 4.7 —	5 Q19— I	底部の小片。器厚は約3mmで、内面は丁寧なナデを施す。外面は鉄分が付着しており、調整は不明。	①細砂粒を含む②酸化③ 褐色④G-281	
7	甕 H質	口縁部 1/2	(19.7) 現存高10.6 —	5 G12	体部下半以下を欠く。口縁部は弱く外反し、口唇部がやや肥厚する。体部内面はロクロナデ状に波をうち、外面は底部へ向うタテ方向のヘラケズリを施す。	①白色粒・石英粒を多く 含む②酸化③淡褐色④G -502	
8	甕 H質	口縁部 1/2	(22.0) 現存高 6.7	5 F09— I	体部下半以下を欠く。口縁部は強く外反して水平近くまでひらく。口唇部下の外面は強いヨコナデにより凹む。頸部内面ににぶい稜をもつ。体部の内面はヨコナデ、外面は口縁部へ向うタテ方向のヘラケズリを施す。ヘラケズリは頸部直下まで及ぶ。	①白色粒・石英粒を含む ②酸化③黄橙色④G -248	
9	甕 H質	口縁部 1/2	(25.2) 現存高12.9 —	5 R14— I	体部下半以下を欠く。口縁部は「く」字状に外反し、口唇部は上方にひき出されて断面三角形を呈する。口唇部外面に明瞭な稜をもつ。体部最大径は口径とほぼ同じになると考えられる。頸部内面ににぶい稜をもつ。現存下端に平行叩き目が残っており、ヘラケズリはこの叩き目を切っている。またロクロナデの上からヘラケズリを施している。これらから、粘土紐(帯)巻上げ→叩き締め→ロクロナデ(口縁部づくり)→ヘラケズリの順に仕上げたと考えられる。ヘラケズリは底部に向うタテ方向で施す。外面と口縁部内面に赤褐色の塗彩がみられる。	①白色粒・石英粒・金雲 母の他に砂粒を多く含む ②酸化③黄橙色④G -247	

第24表26 遺構外出土土器観察表・羽釜 (第153図、図版129)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
1	羽釜	口縁部 小片	— 現存高 4.1 —	5区	口縁部が内傾する。口唇部はわずかに凹み、外端は外上方へひき出される。断面三角形の鏝を貼り付ける。	①白色粒を含み、小石が混る②還元③にぶい黄橙色④G-298	
2	羽釜	口縁部 小片	— 現存高 5.1 —	5 D12	口縁部が内傾する。口唇部はわずかに凹み、外端は外上方へひき出される。断面三角形の鏝を貼り付ける。鏝の直下にタテ方向のヘラケズリ痕がみられる。	①白色粒を含む②還元③灰白色④G-297	
3	羽釜	口縁部 小片	— 現存高 7.5 —	5 E07- I	口縁部が内傾する。口唇部は凹み、外端は外上方へひき出される。断面三角形の鏝を貼り付けたのち鏝下端に向うタテ方向のヘラケズリを施す。内面はヨコナデを施す。	①白色小粒を含む②還元③灰白色④G-295	
4	羽釜	口縁部 小片	— 現存高 6.6 —	5 R16- I	口縁部が内傾する。口唇部は平坦に仕上げる。断面略三角形の鏝を貼り付けたのち、鏝付け根から1.5cmほど下の部分までタテ方向のヘラケズリを施す。鏝はやや下向きである。	①白色小粒・石英粒を多量に含む②還元③黄灰色④G-294	
5	羽釜	口縁部 小片	— 現存高 5.2 —	5 R15- II	口縁部が内傾する。口唇部は平坦に仕上げ、内端は稜をもつ。断面三角形の鏝を貼り付けたのち、鏝下端に向うタテ方向のヘラケズリを施す。内面はヨコナデを施す。鏝上面から口縁部にかけて赤色塗彩する。	①白色小粒・石英粒を多く含む②酸化③淡黄色④G-296	
6	羽釜	口縁部 小片	— 現存高 6.0 —	5 R07- I	口縁部は直立する。口唇部は平坦に仕上げる。断面三角形の鏝を貼り付けたのち、鏝下端に向うタテ方向のヘラケズリを施す。	①白色小粒・石英粒を含む②還元③にぶい黄橙色④G-290	
7	羽釜	口縁部 小片	— 現存高 5.6 —	5 K07- I	口縁部は直立する。口唇部は凹み、外端は外上方へひき出される。断面三角形の鏝を貼り付けたのち、鏝下端に向うタテ方向のヘラケズリを施す。	①白色小粒を含む②酸化③にぶい褐色④G-292	
8	羽釜	口縁部 小片	— 現存高 5.4 —	5区-I	口縁部は直立する。口唇部は尖り気味である。断面三角形の鏝を貼り付けている。内面はヨコナデを施す。	①白色粒を含む②還元③外面灰色、内面黒色④G-291	
9	羽釜	口縁部 小片	— 現存高 4.3 —	5 K07- I	口縁部は直立する。口唇部は平坦に仕上げ、外傾する。外端は稜線になる。断面三角形の鏝を貼り付ける。内面はヨコナデを施す。	①白色粒・石英粒を含む②酸化③にぶい褐色④G-293	



第24表27 遺構外出土土器観察表・壺 (第148図、図版120)

番号	器種	遺存部	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
1	長頸瓶	体部 ⅓	— 現存高 8.0 4.2	5 H・T 07-I	ロクロ右回転。体部から底部にかけて遺存する。体部はふくらみがなく、直線的にひらく。内外面にロクロナデ痕を残し、内底中央は凸である。回転糸切後無調整。	①白色小粒を多く含む②還元③灰色④G-554	
2	小型壺	体部 ⅓	— 現存高 4.8 (5.4)	5 S03-I	ロクロ右回転。肩部以上を欠く。現存最大径(7.6cm)は肩部にあり、底部に向けてすぼまる。肩部内面には稜をもつ。内面にロクロナデ痕が目立つ。回転糸切後無調整。	①白色粒を含む②還元③灰色④G-556	
3	小型壺	口縁部 ⅓	(3.4) 現存高 2.0 —	4 T32-II	体部下半以下を欠く。直口口縁の短頸壺。肩部径は(7.2cm)である。内外面ヨコナデを施す。	①白色小粒を含む②還元③灰色④G-559	
4	多口壺	注口部 ⅓	3.7 現存高 3.3 —	5 P13-I	本体を欠く。長頸壺に4連の注口部をもつ多口壺(多嘴瓶)の注口部と考えられる。本体の一部が残っており、孔径は1.6cmである。内外面ヨコナデを施し、接合部多面はナデを加える。口唇部は尖り気味である。ミニチュアの平瓶口縁部の可能性がある。	①白色粒を含む②還元③灰色④G-555	
5	多口壺	注口部 略完	2.0 現存高 3.3 —	5 Q12-I	本体を欠く。多口壺の注口部と考えられる。口縁部は上下に発達する。本体側の孔径は1.8~2.0cmである。内外面ヨコナデを施す。ミニチュア品の可能性がある。	①白色小粒を含む②還元③灰色④G-557	
6	長頸壺	口頸部	8.0 現存高 6.4 —	5 R20	体部以下を欠く。円盤に穿孔して口頸部をとりつけている。頸部径は5.2cmで、口縁部は外反し、口唇部は上方にひき出される。口唇部内側が凹む。口頸部は内外面ヨコナデ、円盤へのとりつけ部はナデを施す。	①白色小粒を含む②還元③灰色④G-506	
7	長頸壺	口頸部 ⅓	10.4 現存高 6.8 —	5 Q19-I	頸部以下を欠く。口唇部は上方にひき出され、下方へも鐙状に発達する。口唇部は丸味をもつ。内外面ヨコナデを施す。	①白色粒を多く含む②還元③灰色④G-543	
8	長頸壺	体部 ⅓	— 現存高13.8 —	5 P19-I	肩部以上、高台を欠く。肩部に外稜をもたない。内面に輪積み痕らしき痕跡がある。外底に高台の接合面が遺存する。体部の最大径(17.8cm)は中位やや上にある。高台を除く本体底部径は(10.2cm)である。内面はロクロナデ、体部外面の下端は左回転ヘラケズリを施す。	①白色粒を多く含み、小石が混る②還元③外面灰色、内面灰赤色④G-227	

第24表28 遺構外出土土器観察表・壺・甕 (第148・152図、図版120・122)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
9	長頸壺	体部 1/2	— 現存高17.7 —	5 Q18- I	口頸部、底部を欠く。肩部に外稜をもたない。体部最大径(19.7cm)は中位やや上にある。円盤状の底部の剝離痕が残る。口頸部と体部との接合痕がみられ、口頸部を直接体部に接合する方法がとられたと考えられる。内面はロクロナデ、体部外面の下端は左回転のヘラケズリを施す。	①白色粒を多く含み、小石が混る②還元③灰色④G-226	
10	短頸壺	体部 1/2	10.0 現存高14.0 —	5 J 07・ 09・14- I	底部を欠く。肩部に鈍い稜線をもち、口縁部は短く外反する。口唇部は平坦である。頸部径(9.5cm)、最大径(19.5cm)である。底部は円盤貼り付けと考えられる。外面の口縁部から肩部にかけて自然釉がみられる。	①白色粒を含む②還元③灰色④G-225	
11	短頸壺	体部 1/2	11.0 現存高12.7 —	5 J 18	底部を欠く。肩部に鈍い外稜をもち、口縁部は短く外反する。口唇部は平坦で内傾し、内端に稜をもつ。最大径(20.3cm)は体部中位やや上にある。体部外面に平行叩き目残り、ロクロナデを加える。内面の肩部～頸部の間は当て具痕がみられる。	①白色小粒を含む②還元③灰白色④G-432	
1	甕	口頸部 1/2	(26.0) 現存高12.7 —	5 P11- I	頸部以下を欠く。体部からほぼ垂直に立ち上り、口縁部は外反する。口縁部は上下に発達し、外側面に凹線2本がある。外面に文様はない。内外面ロクロナデを施す。右回転。	①白色小粒・石英粒を含み、小石が混る②還元③灰色④G-233	
2	甕	口頸部 小片	— 現存高9.0 —	5 E12	強く外反する口頸部片。口縁部は上下に発達する。上方はひき出し、下方は貼り付けの可能性がある。外面には向って左に施文が進行する3本1単位のクシ描波状文が上下2段に施される。一部にナデまたは擦痕が加えられる。	①白色粒を含む②還元③灰色④G-435	
3	甕	口頸部 小片	— 現存高7.5 —	5 Q01- II	口縁部は外反し、口唇部は折り曲げたように上方に反転してひらき、内側に断面三角形の凹線がある。頸部は内外面ロクロナデを施し、文様はない。	①白色粒を含む②還元③灰色④G-245	
4	甕	口頸部 小片	— 現存高5.1 —	5 R20	口縁部は外反し、口唇部は上方にひき出され、外側面は凹む。端部に丸味がある。文様はない。	①白色小粒を含み、小石が混る②還元③灰色④G-265	

第24表29 遺構外出土土器観察表・甕・硯・その他(第152・154図、図版122・119)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土色調 ③焼成備考
5	甕	口頸部 小片	— 現存高 4.1 —	5 V20— I	口縁部外面の下端に凹線がみられる。頸部外面に段がつき、自然釉がかかる。	①白色粒を含む②還元③外面灰色、内面灰オリーブ色④G-585
6	甕	口頸部 小片	— 現存高 5.5 —	4 S33— II	口唇部内側が凹み、外側面に浅い凹線がある。頸部外面には向って右に施文が進行する4本1単位のクシ描波状文が上下2段に施される。上下の波状文の間は施文前に凹線によって区画されている。内外面に自然釉がかかる。	①白色小粒を多く含む②還元③外面黒褐色、内面灰オリーブ色④G-586
7	甕	底部 1/2	— 現存高 9.2 (13.5)	5 V09— II	体部は叩きを施したのち、ナデを加える。外面の叩き目は平行、内面は無文である。内底はナデを施し、外底および周縁には非回転のヘラケズリを施す。	①白色粒を含み、小石が混る②還元③灰色④G-257
8	甕	底部	— 現存高16.0 14.2	5—I	体部はロクロナデ痕がみられ、叩きの痕跡は発見できない。底部に径10cmほどの円形の割れがみられる。外底周縁はナデを施す。	①白色粒・石英粒を含み、小石が混る②還元③外面灰～黒色、内面灰白色④G-230
1	硯	脚部 小片	— — —	5 K04— I	外面に向って左端には長方形透しの一部が遺存している。中央に3本、やや離れてその両側に各1本のタテ方向に施したヘラ描き凹線がある。内外面ヨコナデ後ヘラ描き。	①白色小粒を含む②還元③灰色④G-552
2	硯	脚部 小片	— — —	5 H07— I	外面にほぼ等間隔に並んだ4本のヘラ描き凹線がある。	①白色小粒を含む②還元③灰色④G-576
1	甕	口縁部 1/2	(34.0) 現存高 8.7 —	5 I07— II	口縁部は「く」字状に外反する。口唇部に浅い凹線をもち上下に肥厚する。頸部内面に鈍い稜がある。内外面ロクロナデを施す。	①白色粒・石英粒・砂粒を含む②酸化、還元気味③黒褐色④G-244
2	内耳土器	口縁部 小片	— 現存高 6.2	5 M02— I	内耳の接合部が遺存している。口径に比べて浅い形態と考えられる。	①砂粒を含む②酸化、還元気味③黒褐色④G-244
3	火鉢	底部 小片	— 現存高 4.5 脚部(17.0)	5 K15— I	火鉢	

第24表30 遺構外出土土器観察表・黒色土器 (第143図、図版115)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
1	椀	1/8	(14.6) 4.9 8.0	5 S03-I	ロクロ左回転。体部は内湾気味にひらき、口縁部はわずかに外反する。外底は回転糸切後無調整。体部下半はヘラケズリを施し、中位はさらにヨコナデが加わる。体部内面はヨコ方向、内底は一定方向(平行)研磨→黒色化。口縁内面に細い凹線1本がある。	①白色粒・石英細粒を含む②内面側還元③外面褐色④深さ4.3、G-511	

第24表31 遺構外出土土器観察表・黒色土器 (第143図、図版115)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
2	椀	口縁部 小片	— 現存高 3.2 —	5 I13-I、5 B11-I	ロクロ回転方向不明。内面研磨→黒色化。内面のミガキは口縁とほぼ平行に帯状に剥けている。	①白色細粒を含む②内面側還元③外面明褐色④G-305	
3	椀	口縁部 小片	— 現存高 4.8 —	5 I09-I	ロクロ左回転。外面の体部下半は回転ヘラケズリを施す。内面研磨→黒色化。	①白色細粒を少し含む②酸化③外面灰色④G-310	
4	椀	口縁部 小片	— 現存高 5.2 —	5 M04-I	ロクロ右回転。外面の体部下半はナデを施す。内面研磨→黒色化。	①白色細粒を少し含む②酸化③外面橙色④G-301	
5	椀	口縁部 小片	— 現存高 4.6 —	5 T02-I	ロクロ右回転。体部外面はヨコナデを施す。内面研磨→黒色化。	①白色細粒を少し含む②内面側還元③外面にぶい黄橙色④G-311	
6	椀	口縁部 小片	— 現存高 3.5 —	5 H-12 不落	ロクロ回転方向不明。体部外面の下半は回転ヘラケズリを施す。内面研磨→黒色化。	①白色細粒を少し含む②酸化③外面にぶい黄橙色④G-312	
7	椀	口縁部 小片	— 現存高 3.5 —	5 I01-I	ロクロ回転方向不明。体部外面はヨコナデを施す。内面研磨→黒色化。	①砂粒を少し含む②内面側還元③外面にぶい黄橙色④G-313	
8	椀	口縁部 小片	— 現存高 5.2 —	5 P17 不落	ロクロ左回転。体部外面の下半は回転ヘラケズリを施す。一部にヨコナデが加わる。内面研磨→黒色化。口縁部外面も黒色。	①砂粒・白色細粒を少し含む②内面側還元③外面にぶい黄橙色④G-299	
9	椀	口縁部 小片	— 現存高 4.0 —	5 F09-I	ロクロ右回転。口縁部内面に浅い凹線1本がある。体部外面の下半は回転ヘラケズリを施す。内面研磨→黒色化。口縁部外面も黒色。	①砂粒・白色細粒を少し含む②内面側還元③外面にぶい黄橙色④G-300	
10	椀	口縁部 小片	— 現存高 3.0 —	5 H06-I	ロクロ回転方向不明。口縁部内面に細く浅い凹線3本がある。外面はヨコナデを施す。内面研磨→黒色化。	①白色細粒を少し含む②内面側還元③外面にぶい黄橙色④G-304	

第24表32 遺構外出土土器観察表・黒色土器 (第143図、図版115)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特 徴	① 胎土 ③ 色調	② 焼成 ④ 備考
11	椀	口縁部 小片	— 現存高 5.6 —	5 H12 不落	ロクロ回転方向不明。体部外面はヨコナデを施す。内面の体部に斜方向（交差する）研磨→黒色化。	①白色細粒・砂粒を含む ②内面側還元③外面に ④G-309	② 焼成 ④ 備考
12	椀	体部片	— 現存高 9.0 —	5 J13- I	ロクロ右回転。体部は内湾してひらく。体部外面の下半は回転ヘラケズリを施し、一部ヨコナデを加える。内面及び口縁部外面（幅1cmほど）研磨→黒色化。	①細砂粒を含む②内面側 ③口縁部還元④体部外面 ④G-307	② 焼成 ④ 備考
13	椀	体部片	— 現存高 7.8 —	5 H13- I	ロクロ回転方向不明。体部は内湾気味にひらく。底部近くはヘラケズリを施す。体部内面は斜方向（向って右上り）の研磨→黒色化。	①細砂粒を含む②内面側 ③還元④外面に ④G-308	② 焼成 ④ 備考
14	椀	底部 片	— 現存高 2.6 (9.6)	5 E12 不落	ロクロ左回転。外底と体部下半の外面はヘラケズリののちヨコナデを施す。ヘラ切離しの可能性がある。体部内面はヨコ方向、内底は一定方向（平行）研磨→黒色化。	①白色細粒・砂粒を含む ②内面側還元③外面に ④G-306	② 焼成 ④ 備考
15	椀	底部片	— 現存高 2.5 —	5 G09- I	ロクロ左回転。外底と体部下半の外面は回転ヘラケズリののちヨコナデを施す。体部内面はヨコ方向、内底は2方向（交差する）研磨→黒色化。	①白色細粒・砂粒を含む ②還元③外面灰色④G -323	② 焼成 ④ 備考
16	椀	底部片	— 現存高 1.3 —	5 D04・ 05-II	ロクロ右回転。外底と体部下半の外面は回転ヘラケズリののちヨコナデを施す。内底周縁はヨコ方向、内底は一定方向（平行）研磨→黒色化。	①白色細粒・砂粒を含む ②外底の一部酸化③外面 ④G-317	② 焼成 ④ 備考
17	椀	底部片	— 現存高 1.3 —	6-1- P208	ロクロ右回転。外底と体部下半の外面は回転ヘラケズリののちヨコナデを施す。内面研磨→黒色化。皿の可能性ある。	①白色粒を含む②酸化③ ④G-320	② 焼成 ④ 備考
18	椀	底部片	— 現存高 0.8 —	5 G09- I	ロクロ左回転。外底と体部下半の外面は回転ヘラケズリを施す。内底放射状研磨→黒色化。	①砂粒を含む②内面側還 ③元④外面に ④G-318	② 焼成 ④ 備考
19	椀	底部片	— 現存高 3.3 —	5 G09- P18	ロクロ左回転。外底と体部下半の外面は回転ヘラケズリを施す。内面の体部ヨコ方向、内底一定方向（平行）研磨→黒色化。	①砂粒を含む②内面側還 ③元④外面に ④G-316	② 焼成 ④ 備考
20	椀	底部片	— 現存高 2.1 —	5 H02- I	ロクロ右回転。外底と体部下半の外面は回転ヘラケズリを施す。内面研磨→黒色化。	①白色粒・石英細粒を含 ②む③酸化④外面に ④G-314	② 焼成 ④ 備考

第24表33 遺構外出土土器観察表・黒色土器 (第143・144図、図版115・116)

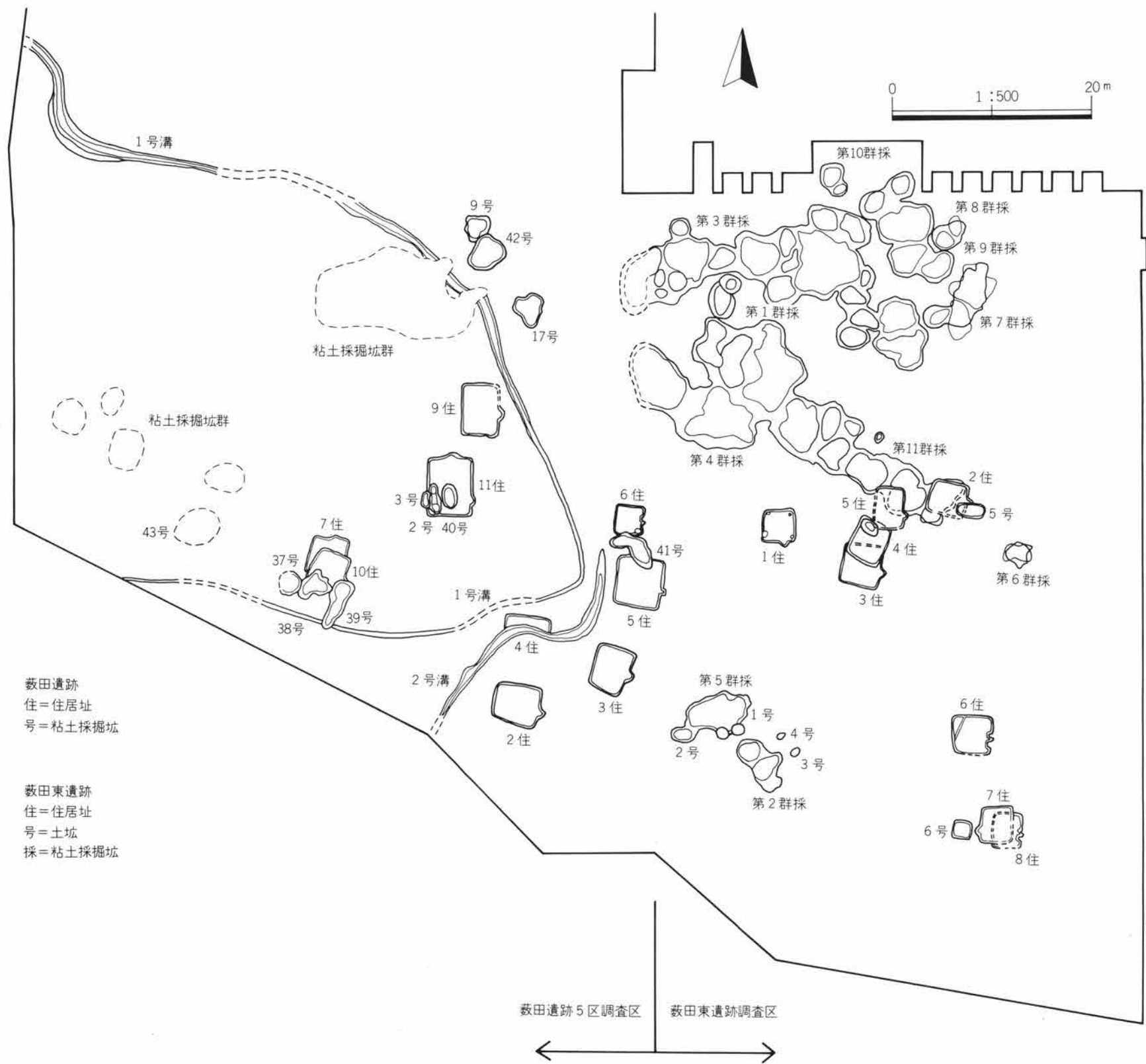
番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
21	椀	底部片	— 現存高 2.9 —	5 F08— I	ロクロ左回転。外底と体部下半の外面は回転ヘラケズリを施す。内面研磨→黒色化。	①白色細粒を含む②内面側還元③外面にぶい黄橙色④G-321	
22	椀	底部片	— 現存高 3.0 —	5 N04— I	ロクロ右回転。外底は回転糸切後周縁に回転ヘラケズリ→ヨコナデを施す。外面の体部中位は丁寧なヨコナデを施す。体部内面はヨコ方向、内底は一定方向(平行)研磨→黒色化。	①白色粒・砂粒を含む②内面側還元③外面にぶい黄橙色④G-327	
23	椀	底部片	— 現存高 4.5 —	5 S02— II	ロクロ右回転。外底は回転糸切後周縁に回転ヘラケズリ→ヨコナデを施す。内面研磨→黒色化。	①白色粒・砂粒を含む②内面側還元③外面にぶい黄橙色④G-329	
24	椀	底部片	— 現存高 2.5 —	5 H11 不落	ロクロ右回転。回転糸切後、周縁を含めて回転ヘラケズリ→ヨコナデを施す。内面研磨→黒色化。	①白色粒・石英細粒を含む②体部外面酸化③体部外面にぶい黄橙色④G-331	
25	椀	底部片	— 現存高 1.0 —	5 S02— II	ロクロ左回転。回転糸切後、周縁を含めて回転ヘラケズリ→ヨコナデを施す。内面研磨→黒色化。	①白色細粒を含む②内面側還元③外面にぶい黄橙色④G-328	
26	椀	底部片	— 現存高 1.6 —	5 S02— II	ロクロ右回転。外底は回転糸切後無調整。周縁はナデが加わる。内面→定方向(平行)研磨→黒色化。	①白色細粒を含む②内面側還元③外面にぶい黄橙色④G-330	
27	椀	口縁部 1/2	(16.0) 現存高 2.5 —	5 G09— 75	ロクロ回転方向不明。内外面研磨→黒色化。外面は口縁下2cmまで研磨を施す。底部を欠く。	①白色細粒を含む②還元③黒色④G-340	
28	高台椀	底部 1/2	— 現存高 4.5 (10.0)	5 G09— 34、5 H 07—I	ロクロ左回転。高台外側の体部は回転ヘラケズリの後研磨を施す。内底周縁に凹線1本がある。高台は高さ1.6cmで、「ハ」字状にひらき、先端は尖り気味となる。内外面不定方向研磨→黒色化。外底の高台内側は回転ヘラケズリ→研磨の順に調整する。	①白色細粒を含む②還元③黒色④G-341	
29	椀	口縁部 小片	— 現存高 1.9 —	5 G09— I	ロクロ回転方向不明。口唇直下に1本の凹線がある。内外面研磨→黒色化。凹線内は研磨されない。	①白色細粒を含む②還元③黒色④G-337	
30	椀	口縁部 小片	— 現存高 1.6	5 S01— II	口唇下1cmほどで折れ曲る。内外面研磨→黒色化。皿の可能性がある。	①白色細粒を含む②還元③黒色④G-338	

第24表34 遺構外出土土器観察表・黒色土器 (第144図、図版116・117)

番号	器種	遺存	法量	出土位置	特徴	①胎土 ③色調	②焼成 ④備考
31	皿 または 高杯杯部	口縁部 小片	— 現存高 1.6 —	5 F09— I	口縁部が上方に折れ曲る。内外面研磨→黒色化。口唇部は黒色化していない。	①白色細粒を含む②還元 ③口唇部にぶい黄橙色④ G-339	
32	高台椀	底部 小片	— 現存高 1.6 (14.0)	5 H08— I	高台は高さ0.6cmで、断面方形を呈し、しっかりしている。高台端部を含め内外面研磨→黒色化。	①白色細粒を含む②還元 ③黒色④G-342	
33	蓋	口縁部 小片	— 現存高 1.0 —	5 G-09	口縁部は下方へ折れ曲る。外面に浅い凹線状の非研磨部分がある。内外面研磨→黒色化。高杯脚の裾部の可能性がある。	①白色細粒を含む②還元 ③黒色④G-600	
34	高杯	脚部片	— 現存高 4.0 (8.8)	5 G07— I、5 H 03—I	裾部に外稜をもち、端部は細く直立する。脚柱部はタテ方向、裾部はヨコ方向研磨→内外面黒色化。内面は研磨されない。	①白色細粒を含む②還元 ③黒色④G-343、他に接 合しないが同一個体と考 えられる小片がある。	
35	椀	$\frac{1}{3}$	(10.7) 3.9 (5.0)	5 H12— I	ロクロ左回転。体部は内湾してひろく。外面は底部も含めて丁寧に回転ヘラケズリを施し、口縁部はさらにヨコナデを施す。内面はヨコ方向の研磨を施す。内外面黒色化。内底中央はわずかに凸である。	①白色細粒をわずかに含 む②還元③黒色④G -332	
36	椀	口縁部 小片	(16.0) 現存高 3.0 —	5 S02— I	直線的に外反する口縁部片。内面はヨコ方向の研磨、外面はヨコナデを施す。内外面黒色化。	①白色細粒をわずかに含 む②還元③黒色④G -333	
37	椀	底部 $\frac{1}{3}$	— 現存高 1.2 (6.6)	5 F09— I	ロクロ回転。外面は底部も含めて丁寧に回転ヘラケズリを施す。内底中央は一定方向(平行)の研磨を施す。内外面黒色化。	①白色細粒を含む②還元 ③黒色④G-335	







折込1 菟田遺跡5区・菟田東遺跡平安時代遺構全体図





折込2 藪田遺跡5区・藪田東遺跡中～近世遺構全体図



# 版 図





菟田遺跡の地形（航空写真1/2,000 昭和49年撮影）



菟田遺跡の周辺地形（航空写真 1/4,000 昭和49年撮影）





調査中の菽田遺跡（航空写真 1/4,000 昭和52年撮影）



1 遺跡遠景（予備調査中、北西より）



2 6～7区の予備調査状況（北より）



1 5区調査状況（南東より）



2 5区実測風景（東より）



1 調査前の5区台地部（北西より）



2 調査後の5区台地部（北西より）



1 5区台地部全景（東より）



2 5区台地部南端（北東より）



1 6区全景（南より）



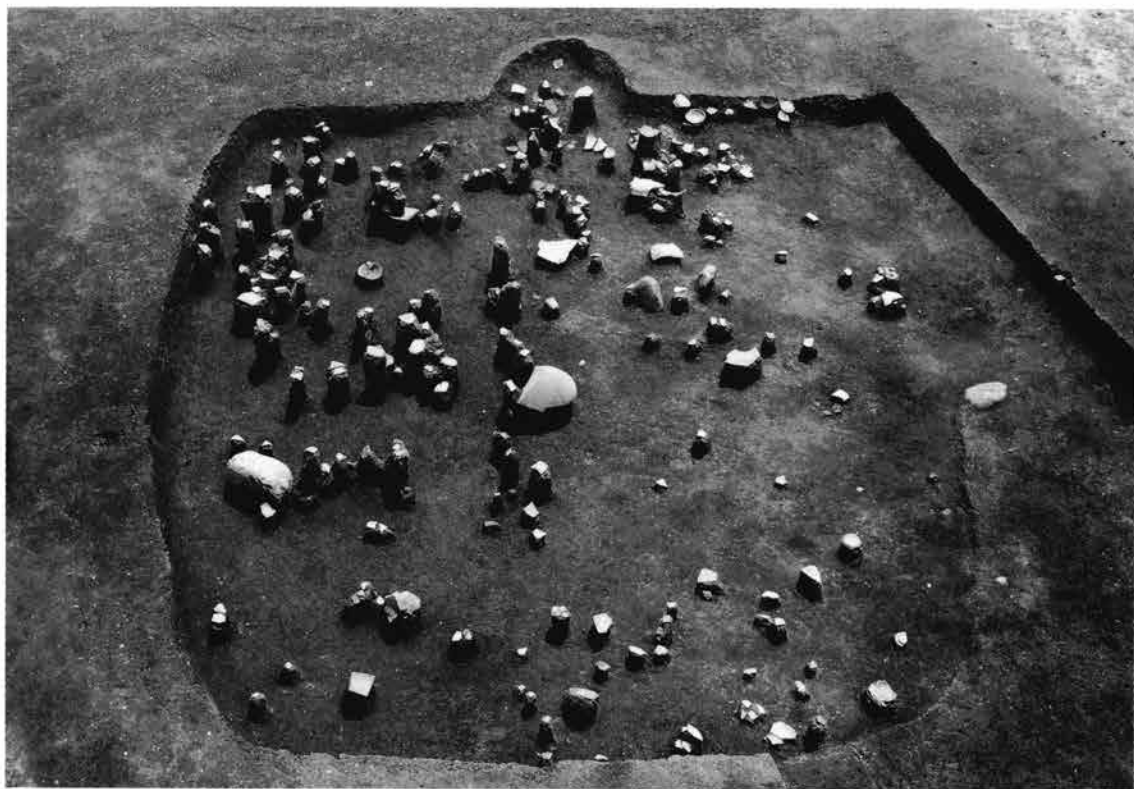
2 7区全景（西より）



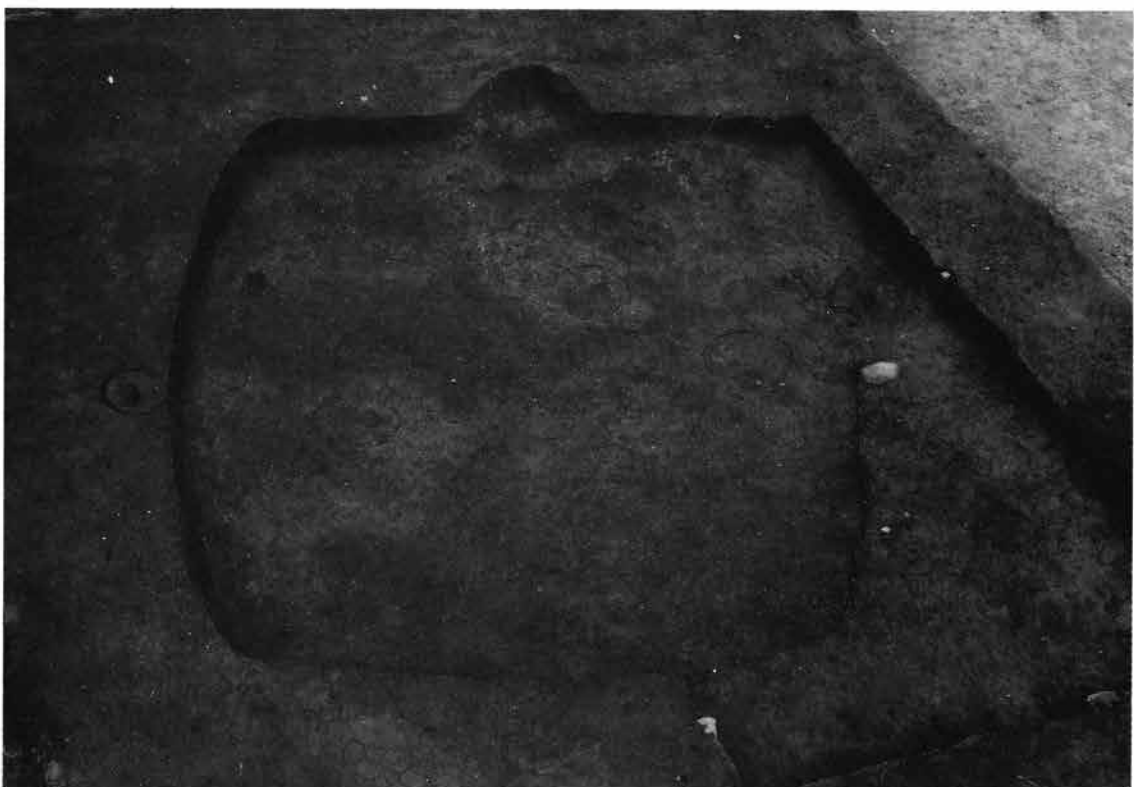
1 5区1号住居址（北より）



2 同上、炉と土器2の出土状態（南より）



1 5区2号住居址遺物出土状態（西より）



2 5区2号住居址（西より）



- 1 5区2号住居址  
 カマド前遺物出土状態  
 (南より)

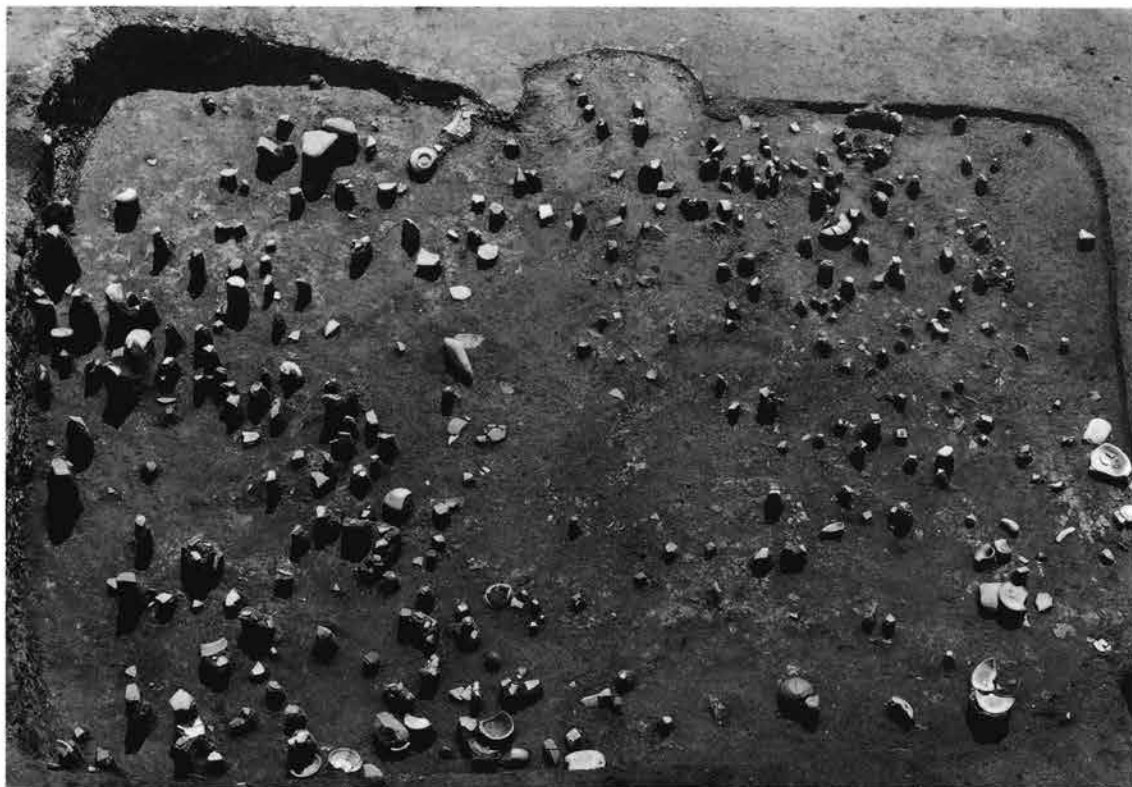


- 2 同上、北東隅遺物出土  
 状態 (西より)



- 3 同上、カマド・カマド  
 前掘形 (西より)





1 5区3号住居址遺物出土状態（西より）



2 5区3号住居址（西より）



1 5区3号住居址掘形遺物出土状態（西より）



2 5区3号住居址掘形（西より）

図版14



1 5区4号住居址  
(南より)



2 5区4号住居址  
(西より)



3 5区4号住居址遺物出  
土状態 (西より)



1 5区5号住居址 (西より)



2 5区5・6号住居址と41号土坑 (西より)



1 5区5号住居址  
東半遺物出土状態  
(南より)



2 同上、床面遺物出土状態  
(西より)



3 同上、南東隅床面遺物  
出土状態 (西より)



1 5区6号住居址遺物出土状態（西より）



2 5区6号住居址掘形（西より）



1 5区6号住居址  
カマドと貯蔵穴  
(西より)



2 同上、貯蔵穴遺物出土  
状態 (西より)



3 同上、北東隅掘形  
(東より)





1 5区7・10号住居址遺物出土状態（東より）



2 5区7・10号住居址と4・37~39号土坑（東より）



1 5区9号住居址遺物出土状態（西より）



2 5区9号住居址床面遺物出土状態（西より）

- 1 5区9号住居址  
南西隅遺物出土状態  
(東より)



- 2 同上、カマド前遺物出土状態 (西より)

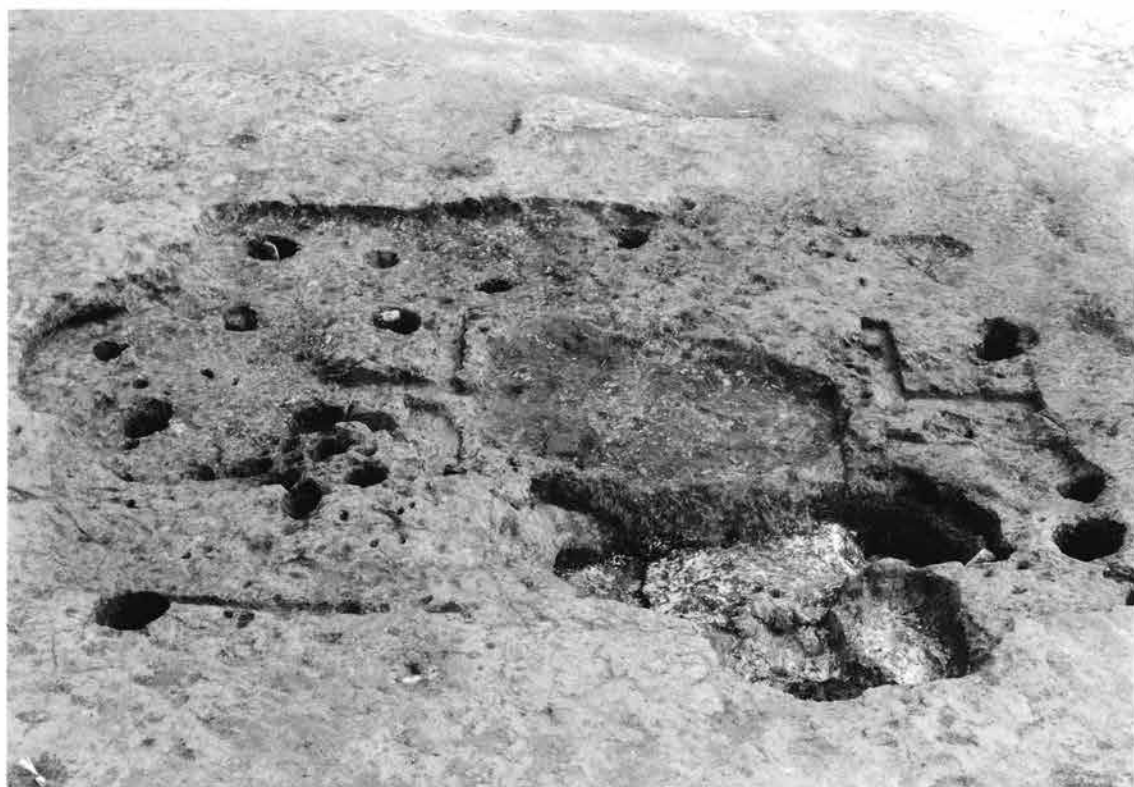


- 3 同上、掘形 (西より)





1 5区11号住居址と2・3・40号土塚遺物出土状態(西より)



2 5区11号住居址と2・3・40号土塚(西より)



1 6区1号住居址 東半遺物出土状態(西より)



2 6区1号住居址(西より)



1 6区1号住居址  
西半遺物出土状態  
(南より)



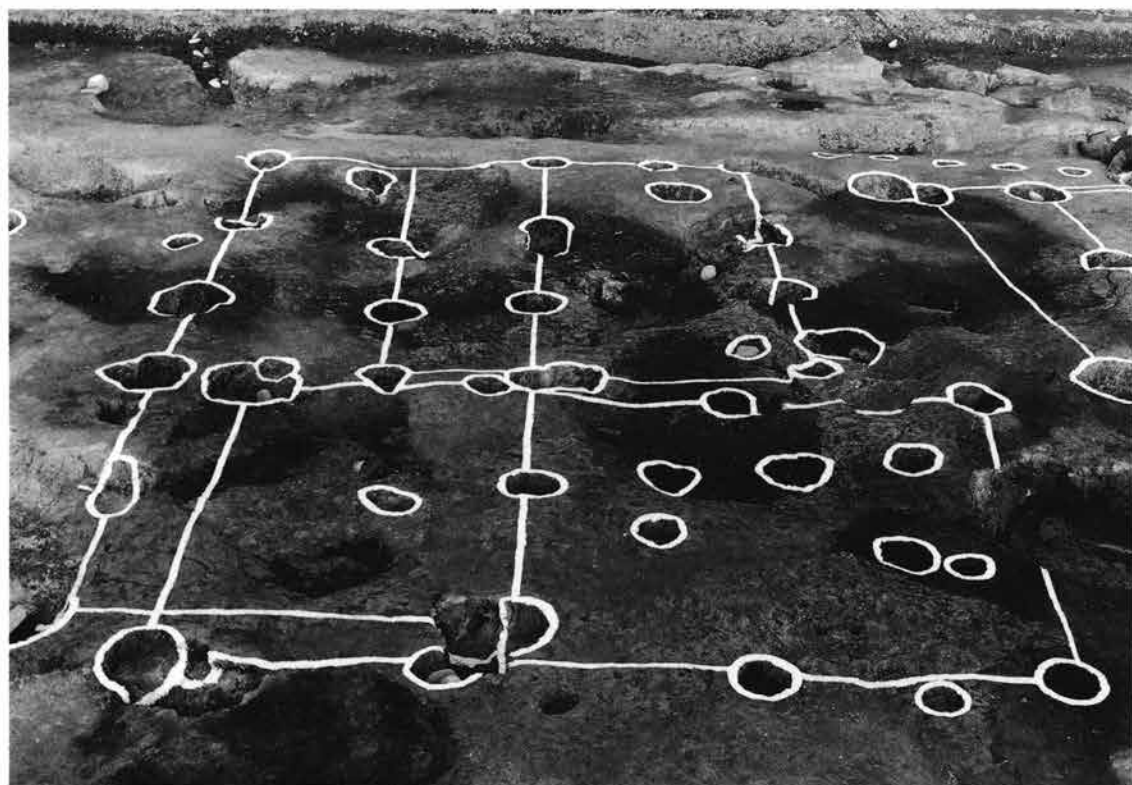
2 同上、東壁中央寄りの  
遺物出土状態 (西より)



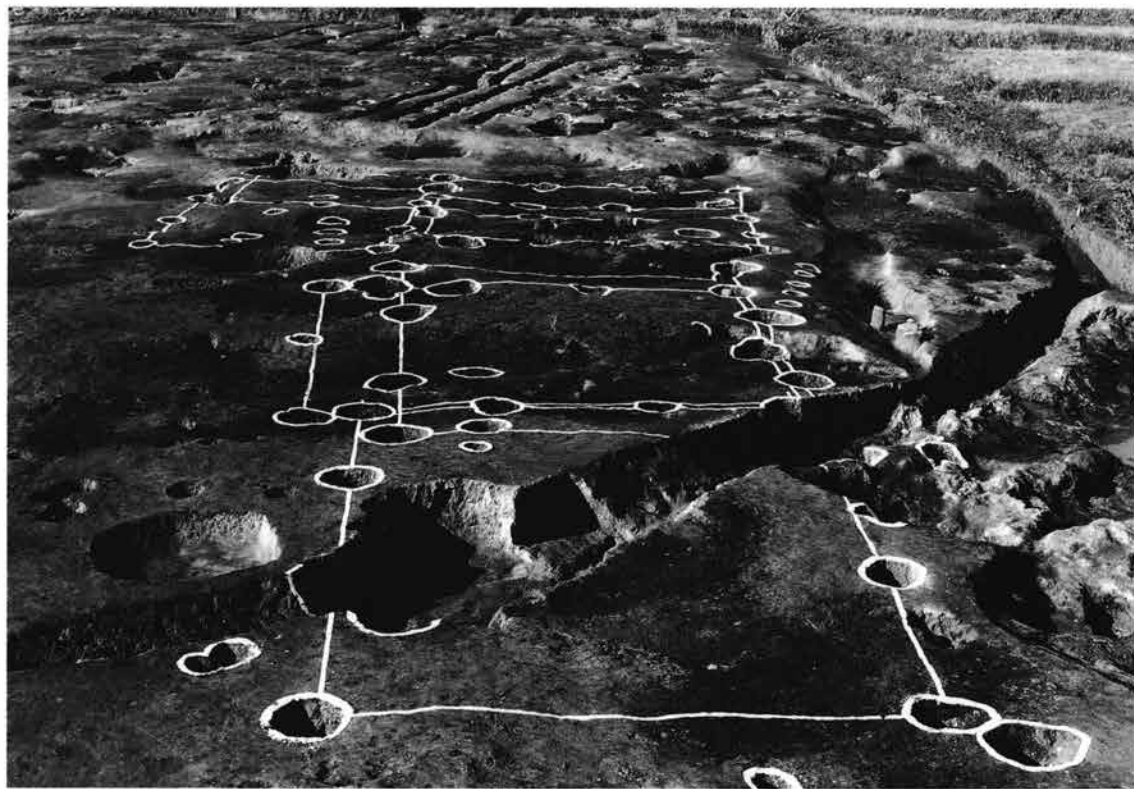
3 同上、貯蔵穴遺物出土  
状態 (西より)



1 5区1・2号掘立柱建物（南より）



2 5区3・4号掘立柱建物（南より）

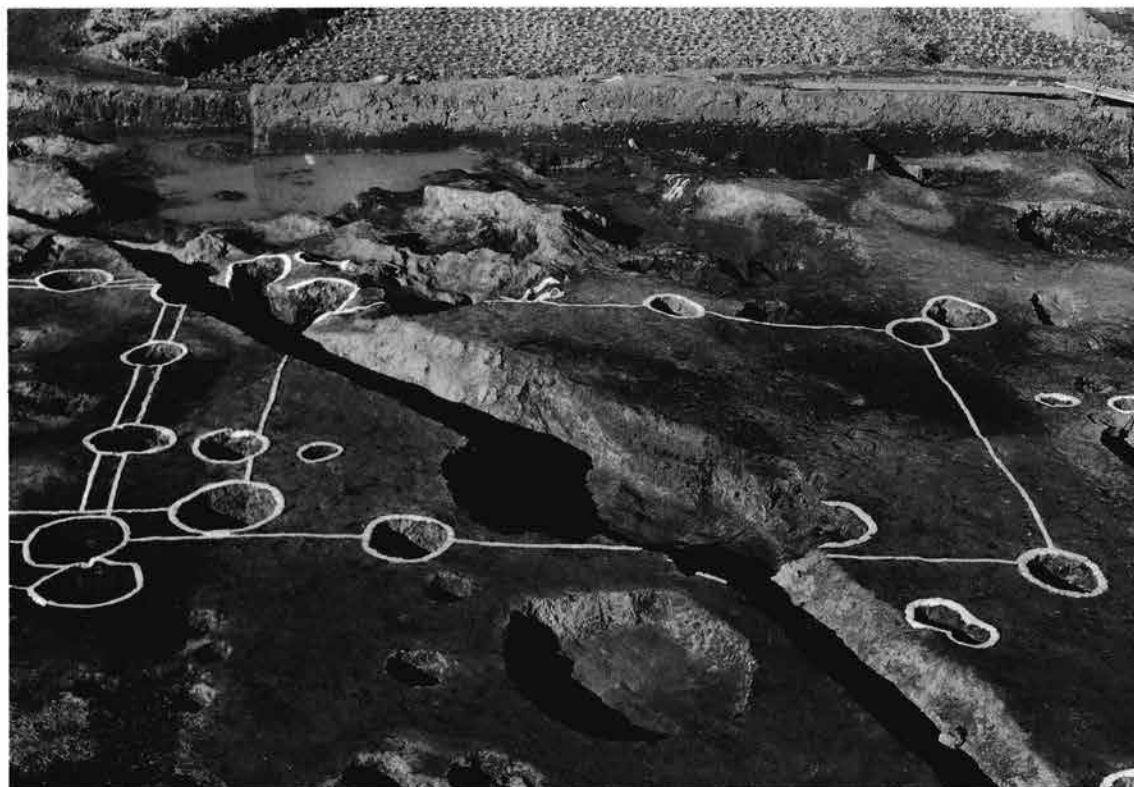


1 5区3・4・6～8号掘立柱建物（東より）

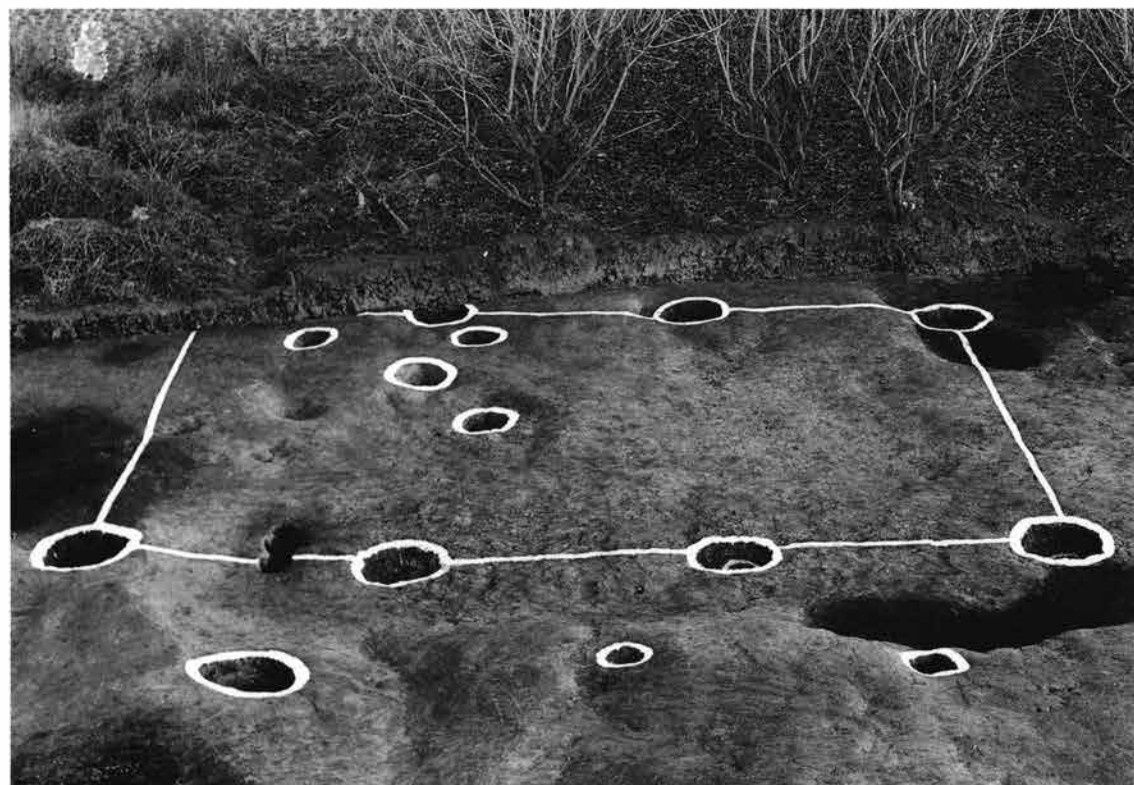


2 5区6・7号掘立柱建物（南より）

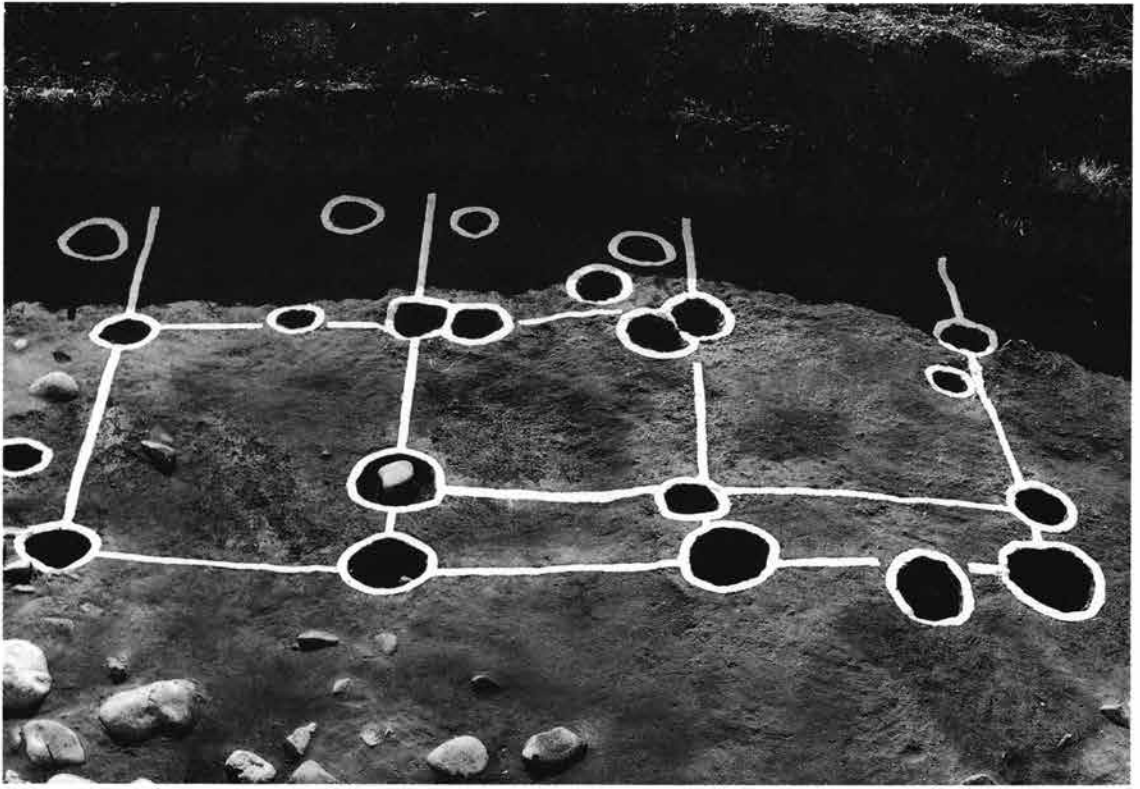




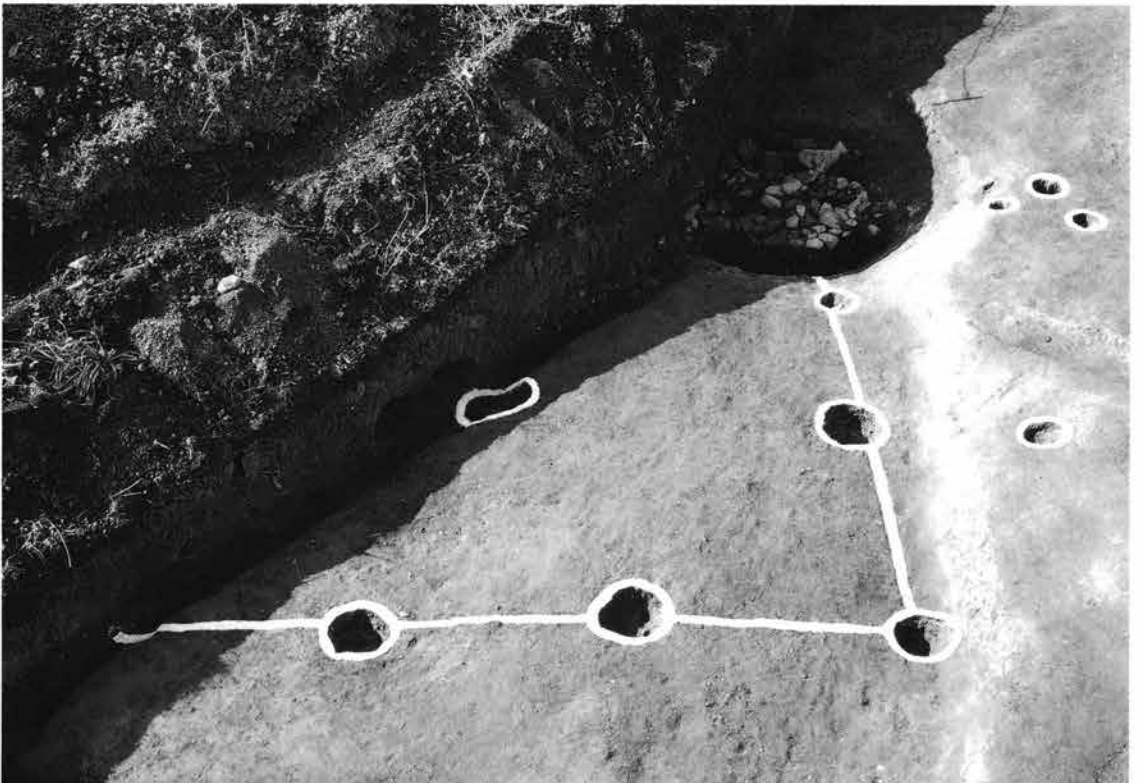
1 5区8号掘立柱建物（南より）



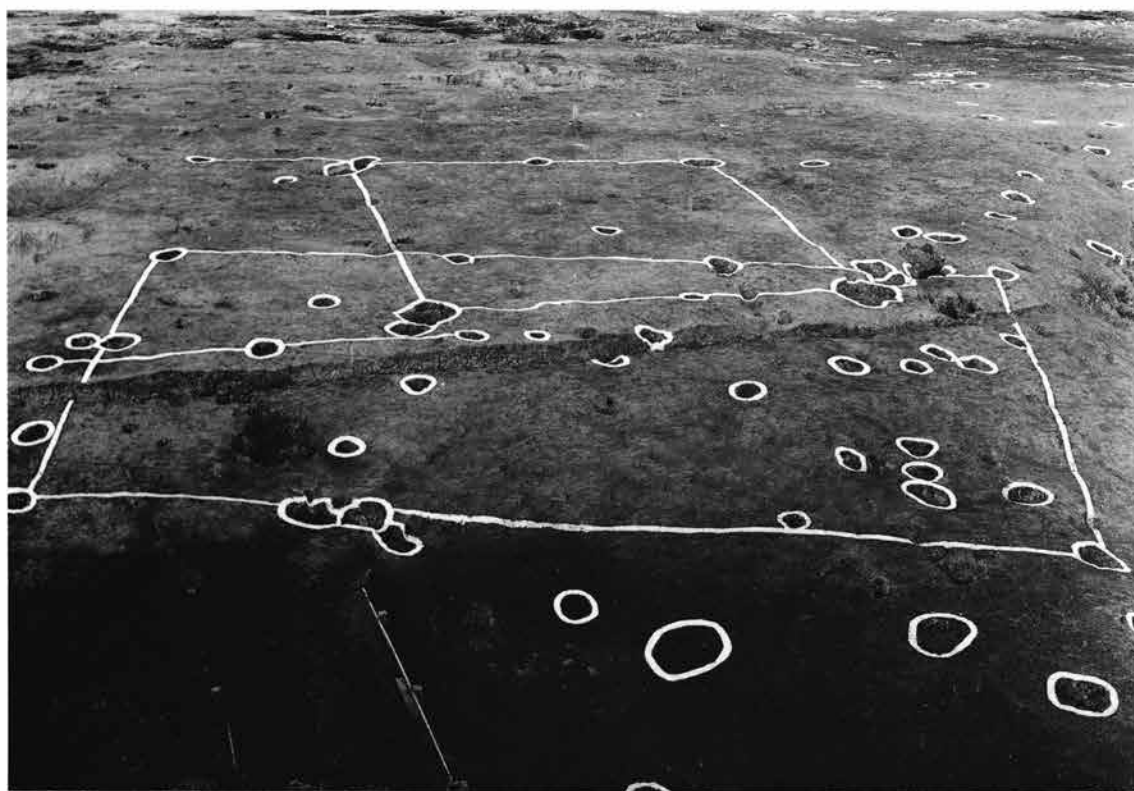
2 5区9号掘立柱建物（西より）



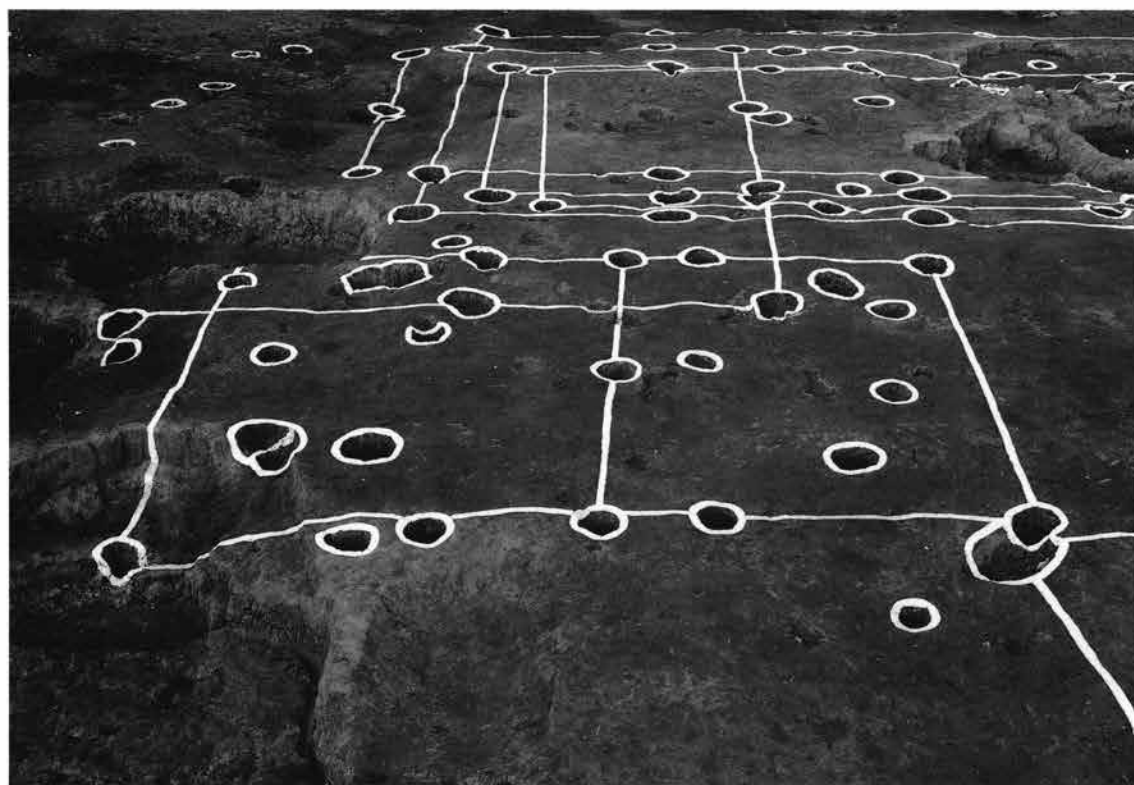
1 5区10号掘立柱建物（北より）



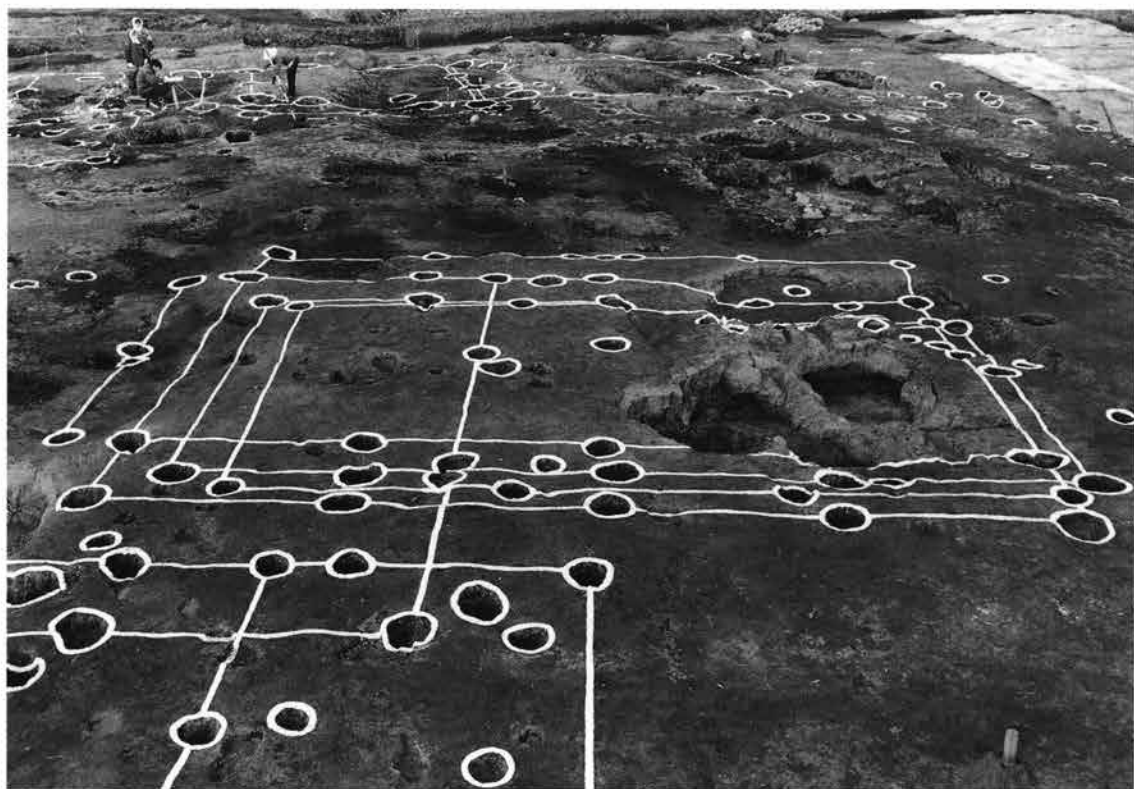
2 5区11号掘立柱建物（東より）



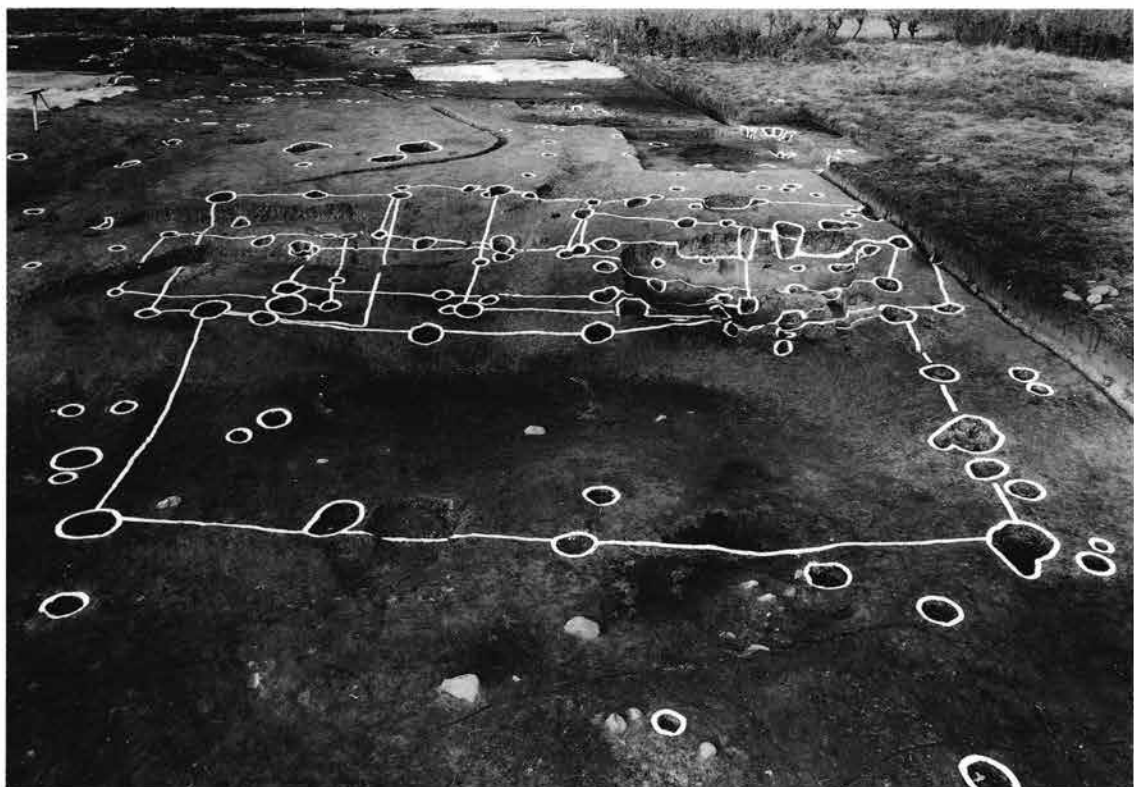
1 5区12・25号掘立柱建物（南より）



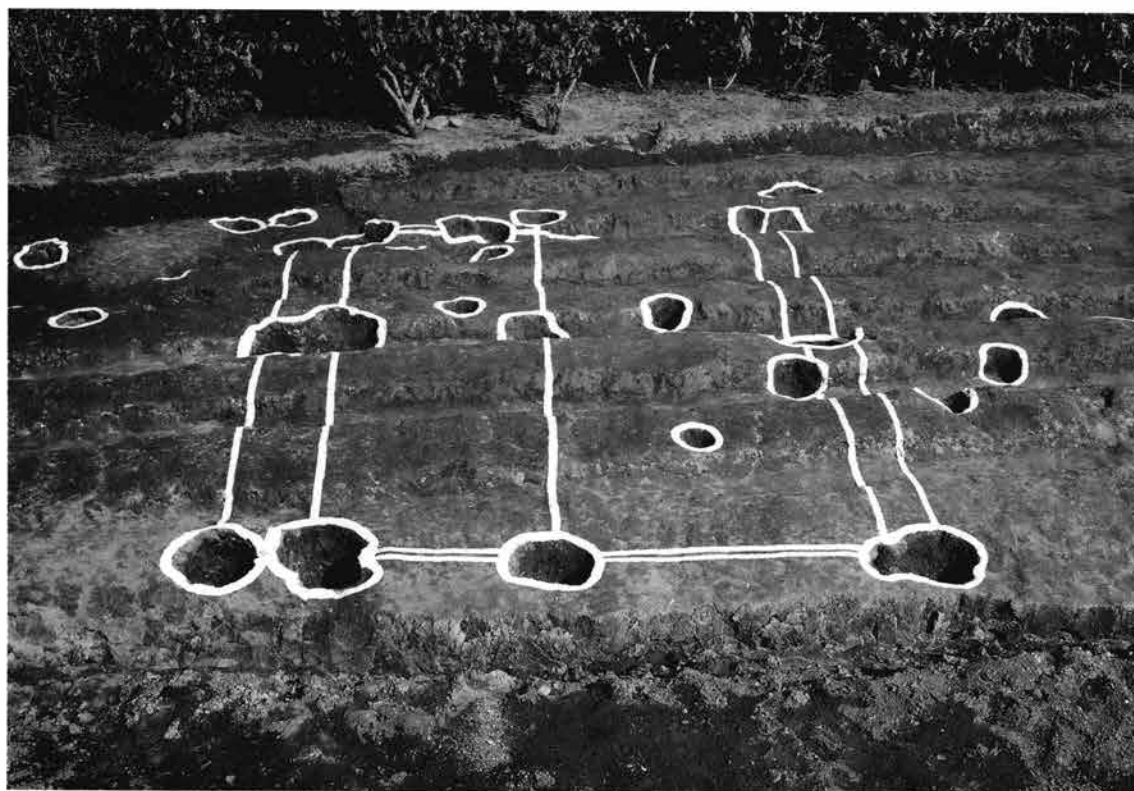
2 5区5・13・14号掘立柱建物（南より）



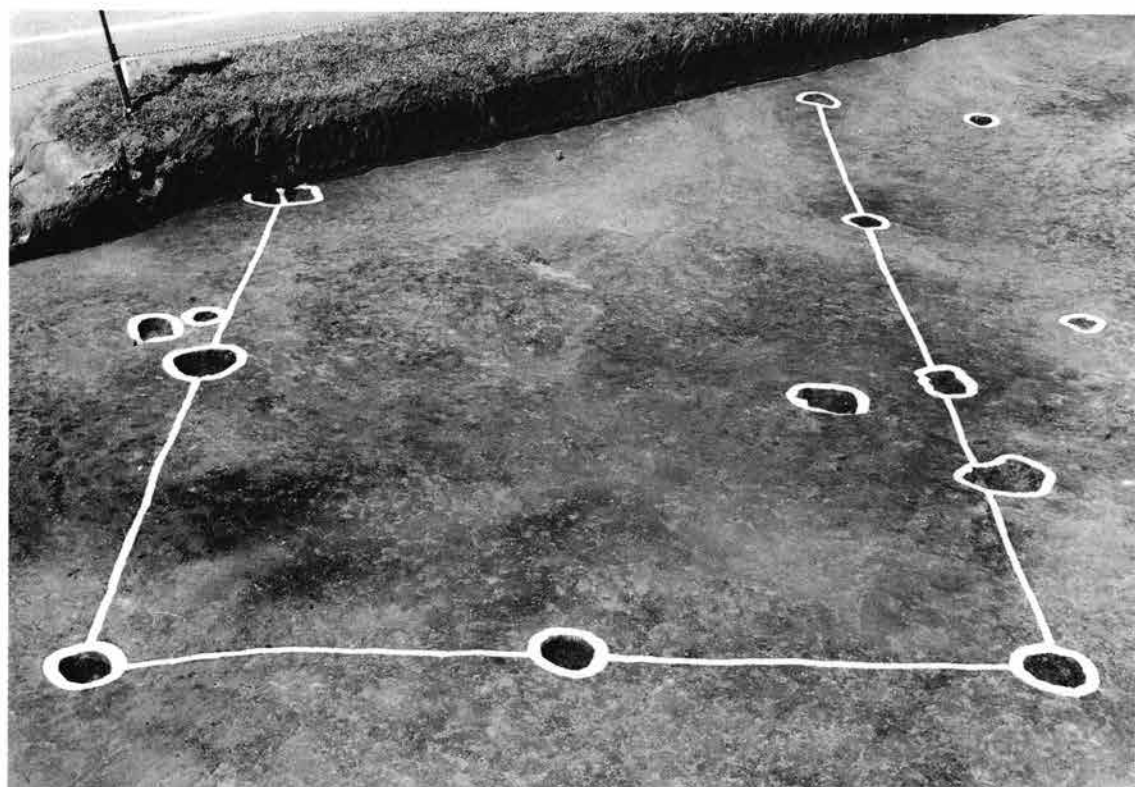
1 5区15～17号掘立柱建物（南より）



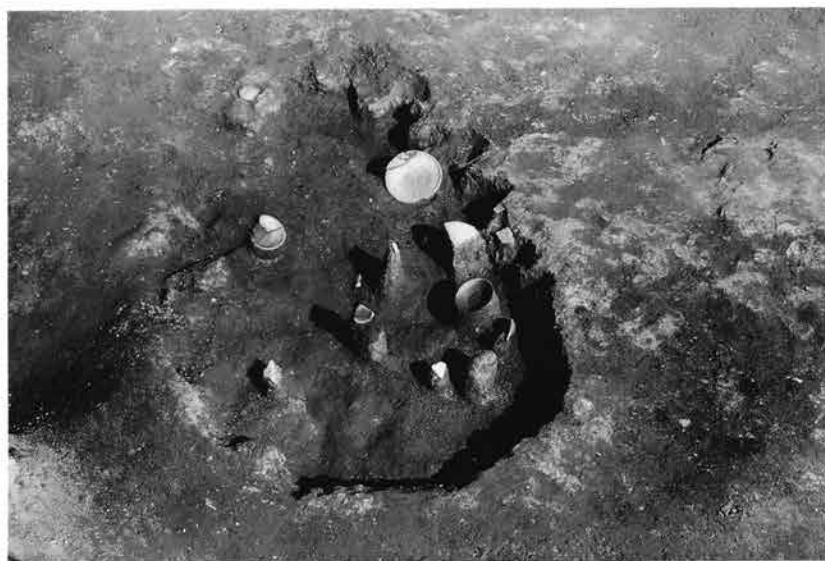
2 5区18～24号掘立柱建物（南より）



1 6区1・2号掘立柱建物（西より）



2 7区1号掘立柱建物（西より）



1 5区1号土坑  
(南東より)



2 5区2(右)・3(左)  
号土坑  
(南より)



3 5区2号土坑遺物出土  
状態 (南より)

1 5区4号土坑  
(東より)



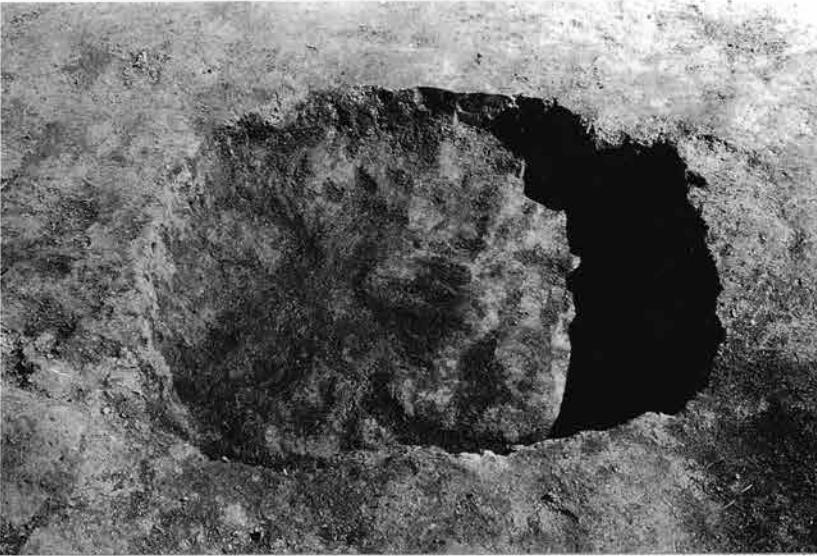
2 5区6号土坑  
(南東より)



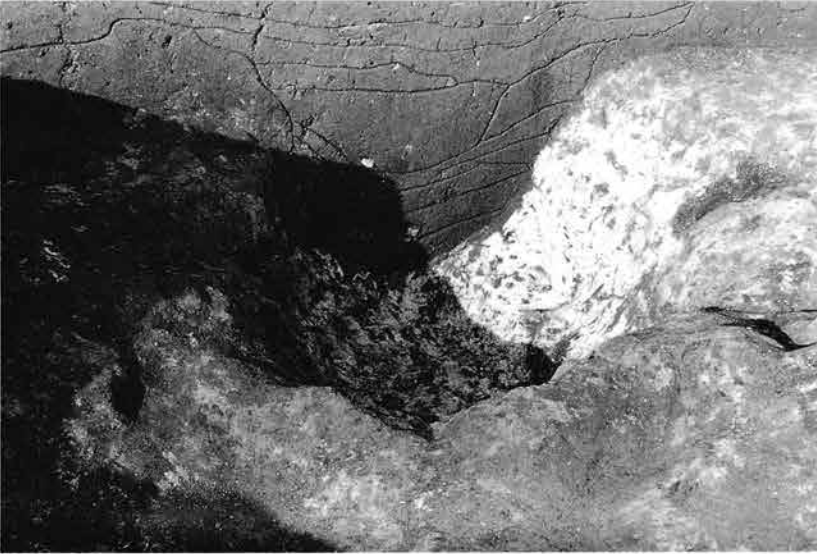
3 5区7号土坑  
(南東より)



1 5区8号土壇  
(西より)



2 5区10号土壇  
(南西より)



3 5区11号土壇  
(南より)





1 5区12~14号土壇  
(南西より)



2 5区15号土壇  
(南東より)

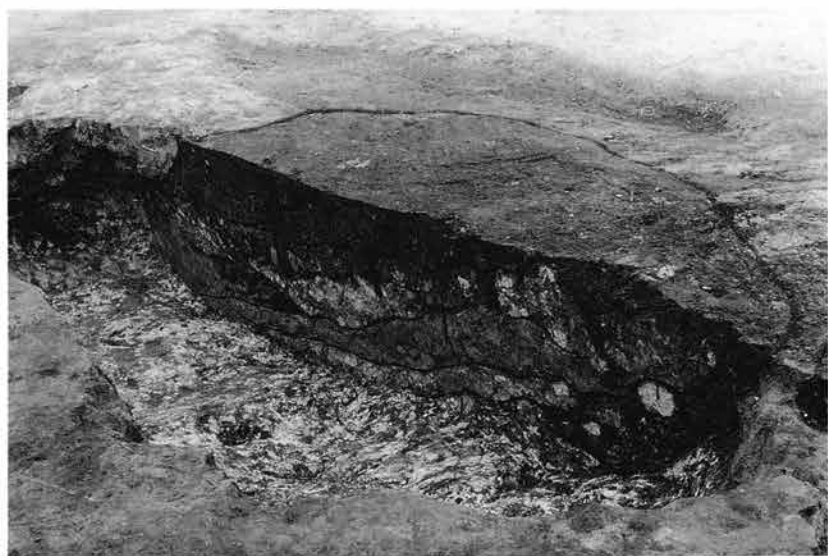


3 5区16号土壇  
(南より)





1 5区17号土坑  
(西より)



2 5区17号土坑土層断面  
(南西より)

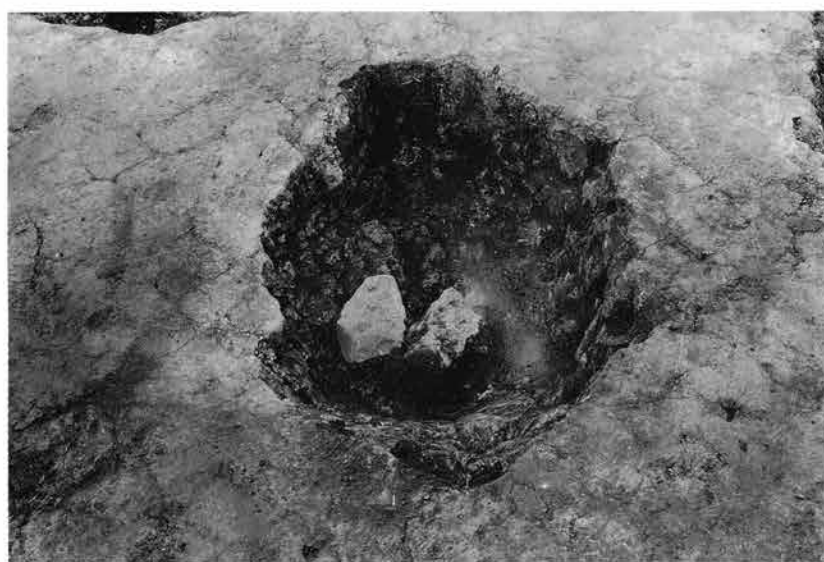


3 5区18号土坑  
(南東より)

1 5区19号土坑  
(南西より)



2 5区20号土坑  
(南西より)



3 5区21号土坑  
(南より)





1 5区22号土坑  
(南より)



区23号土坑  
(南西より)



3 5区24号土坑  
(西より)

1 5区25号土坑土層断面  
(南西より)

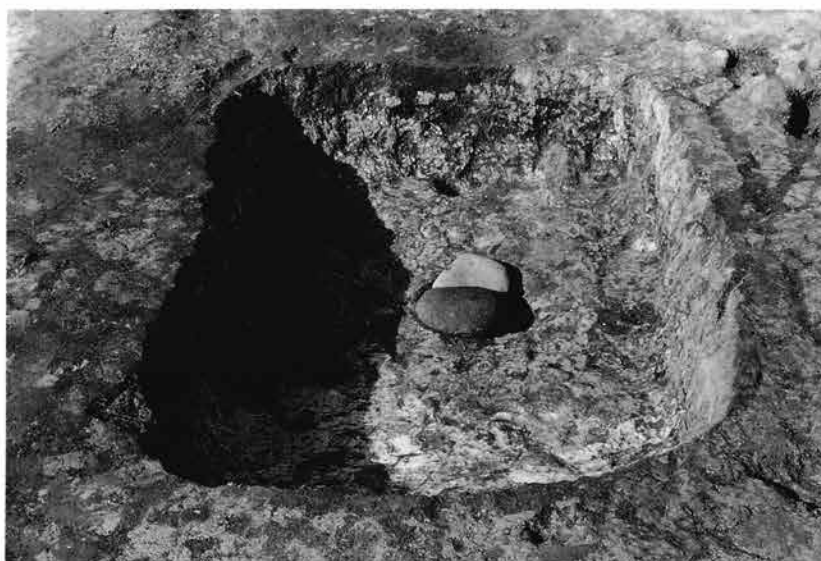


2 5区26(右)・28(左)  
号土坑(南西より)



3 5区27号土坑  
(南東より)





1 5区29号土坑  
(東より)



2 5区30号土坑  
(南より)



3 5区31号土坑  
(南より)

1 5区36号土壇  
(東より)



2 5区40号土壇  
(東より)



3 5区40号土壇遺物出土  
状態 (南東より)





1 5区41号土塚  
(西より)



2 5区41号土塚遺物出土  
状態 (南より)



3 5区43号土塚遺物出土  
状態 (南より)



1 5区42号土塚  
(西より)



2 5区9・42・44号土塚  
(南東より)



3 5区1号集石  
(南東より)





1 6区1号土坑  
(南西より)



2 6区2(右)・3(左)  
号土坑(南西より)



6区4号土坑  
(東より)

1 6区5号土坑  
(北東より)



2 6区6号土坑  
(北より)

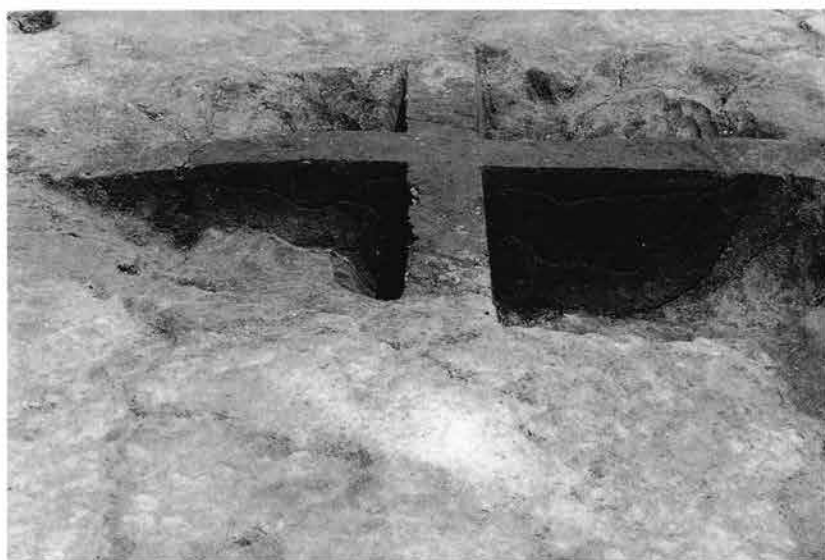


3 6区7号土坑  
(南東よ)





1 6区9号土坑  
(南より)



2 6区10号土坑  
(南西より)



3 6区11号土坑  
(南東より)

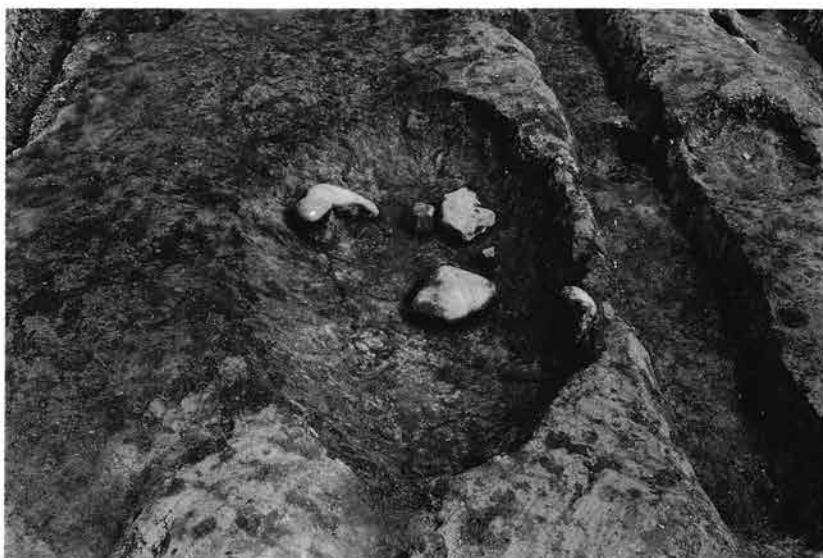
1 6区12号土坑  
(南東より)



2 6区13号土坑  
(東より)



3 6区15号土坑  
(南より)





1 7区1号土坑  
(南より)

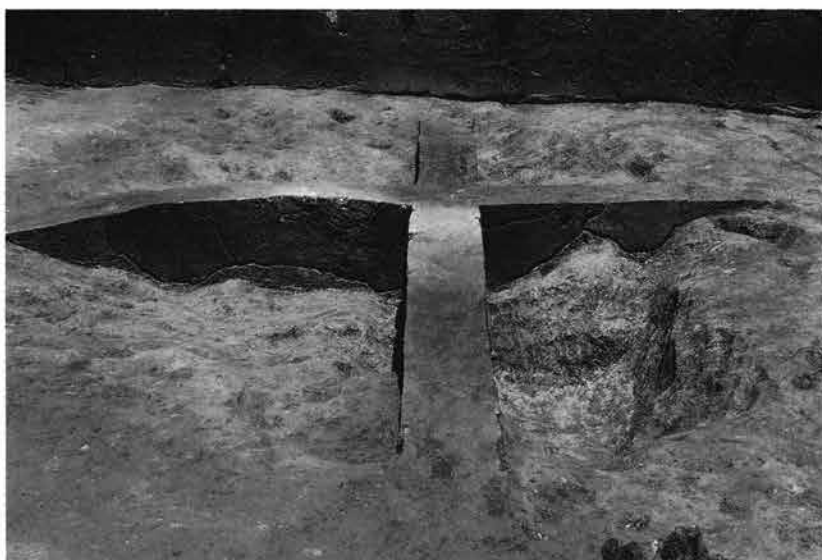


2 7区2号土坑  
(東より)



3 7区4号土坑  
(南東より)

1 7区6号土坑  
土層断面（南より）



2 7区7号土坑  
（南より）



3 7区8号土坑  
（南より）





1 5区1号溝東端～南西端（北東より）



2 5区1号溝東端～北端（南東より）



1 5区1号溝北西端  
(北西より)



2 5区1号溝東端寄り土  
層断面 (南東より)



3 5区1号溝北端寄り土  
層断面 (北西より)





1 5区2号溝  
(南西より)



2 5区3号溝  
(南西より)



3 5区4号溝  
(西より)

1 5区1号井戸  
(東より)



2 5区2号井戸  
(北より)



3 6区1号井戸  
(南西より)





1



2



3



4

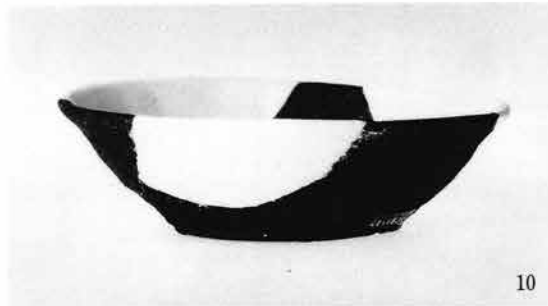
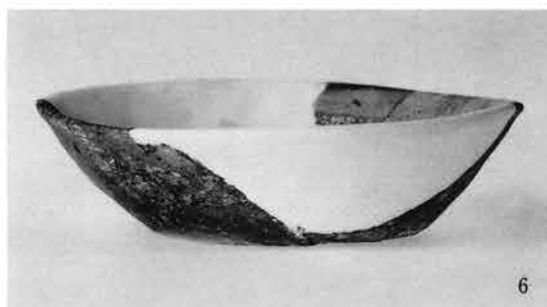


7

5区1号住居址出土遺物(1)



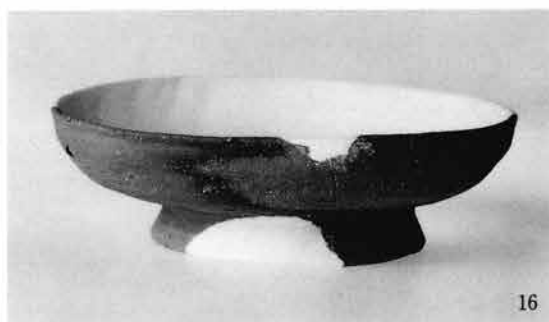
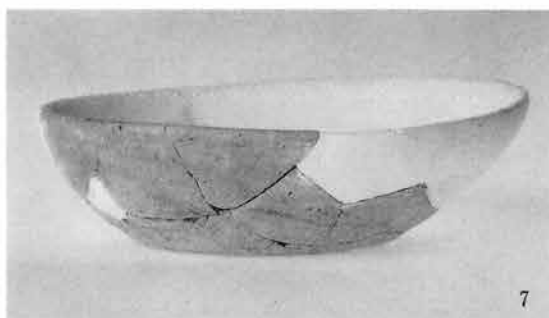
5区1号住居址出土遺物(2)



5区2号住居址出土遺物(1)



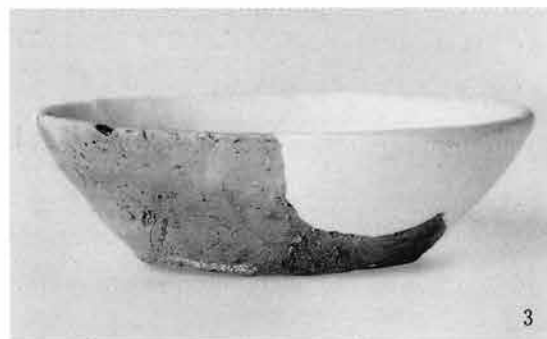
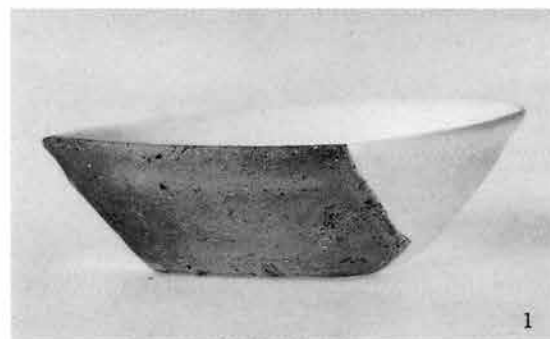
5区2号住居址出土遺物(2)



5区3号住居址出土遺物(1)

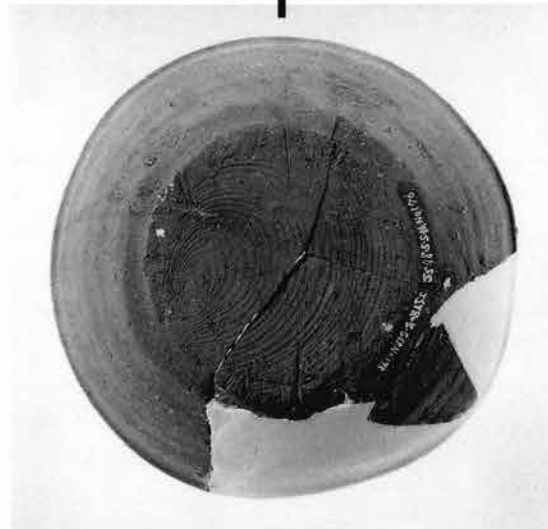
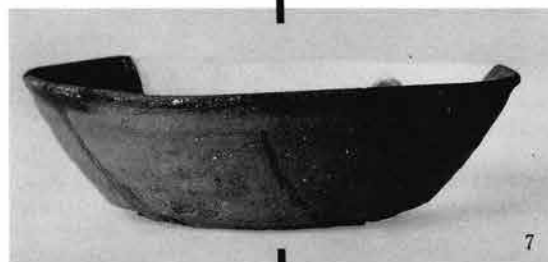


5区3号住居址出土遺物(2)

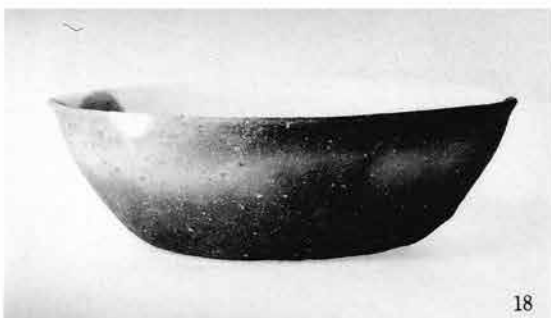
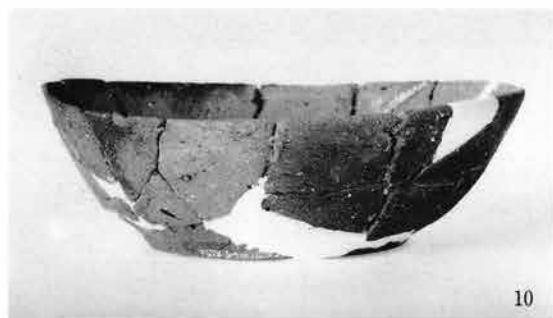


5区4号住居址出土遺物

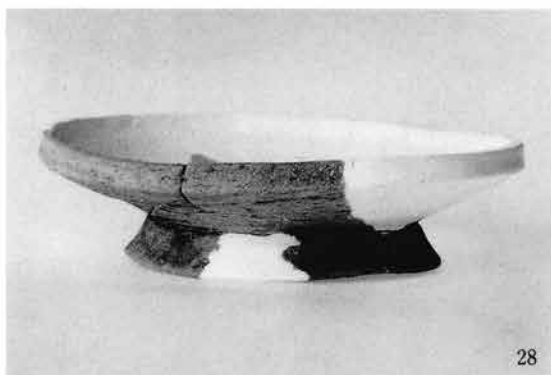
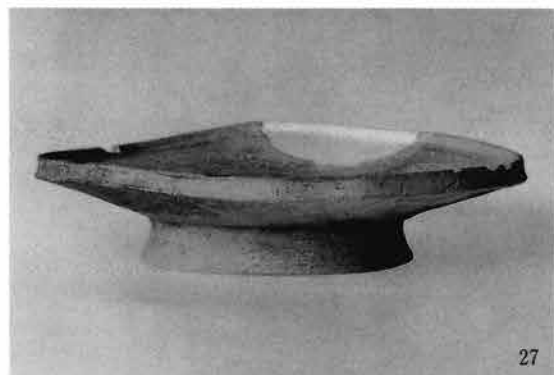
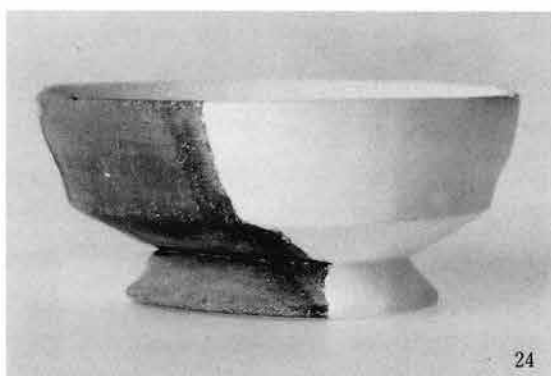




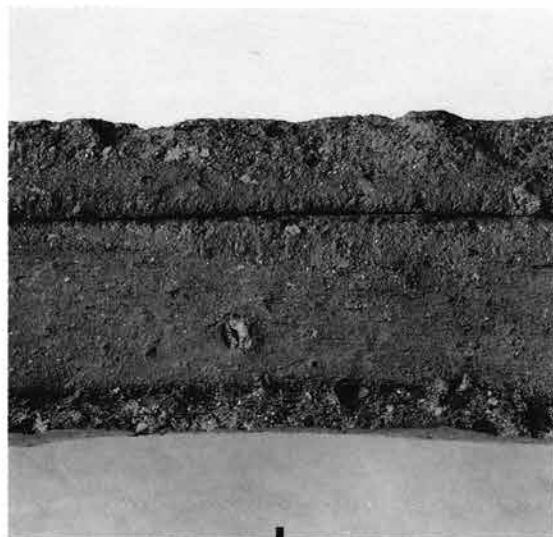
5区5号住居址出土遺物(1)



5区5号住居址出土遺物(2)



5区5号住居址出土遺物(3)



38



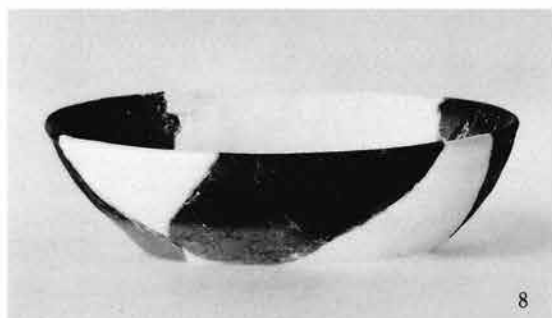
36



34

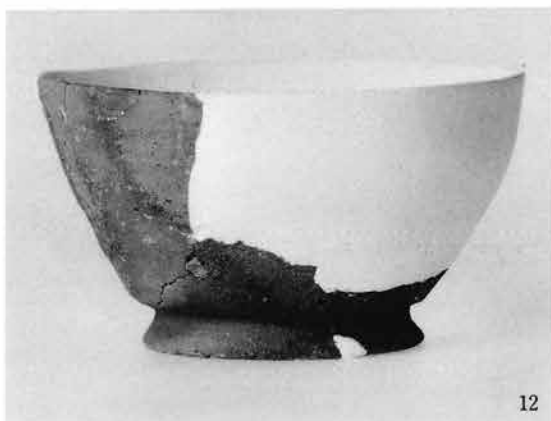
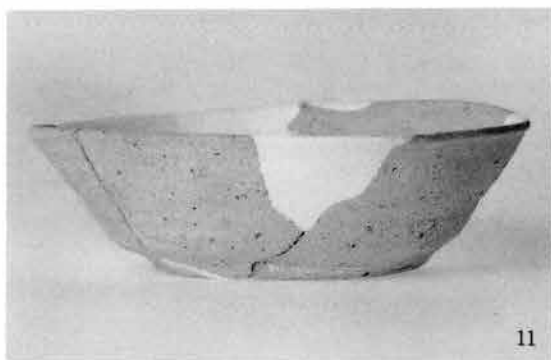
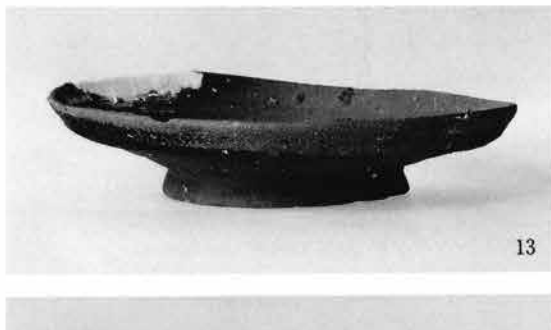
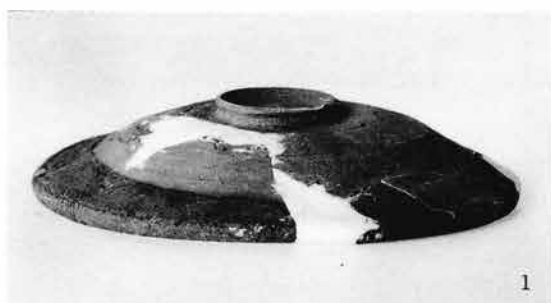


39

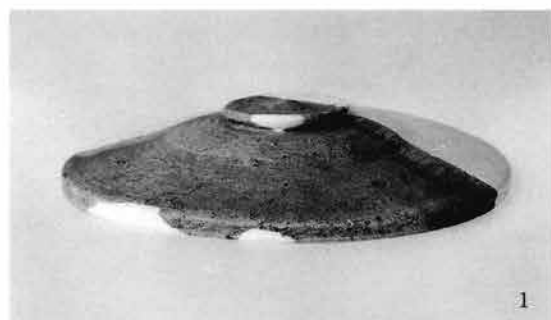


5区6号住居址出土遺物(1)





5区7号住居址出土遺物









27



28



29



30



31



32



33



34



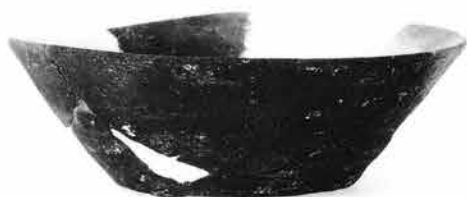
35



36



37



38



40



44



45



46



48



50



52



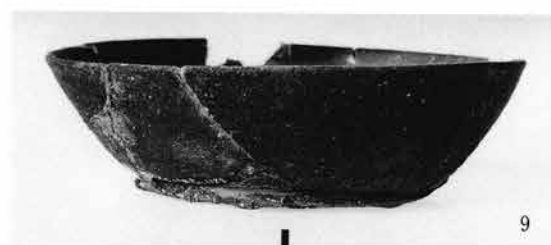
54

5区9号住居址出土遺物(4)

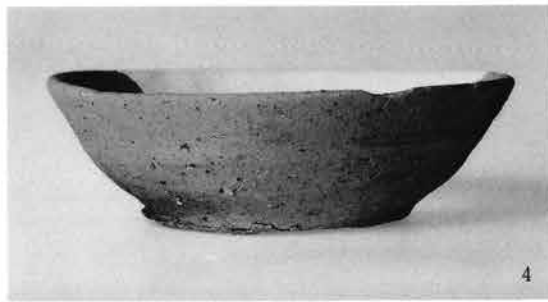
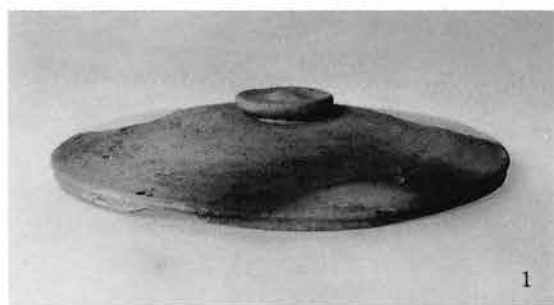




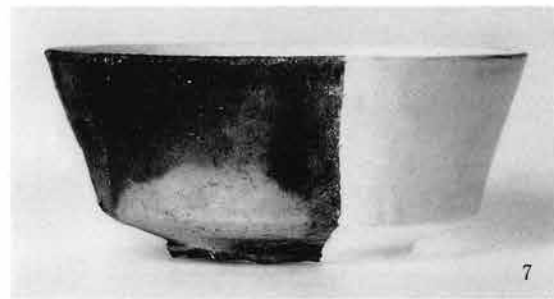
5区10号住居址出土遺物(1)



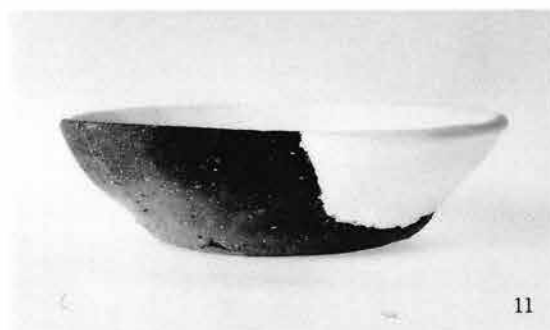
5区10号住居址出土遺物(2)



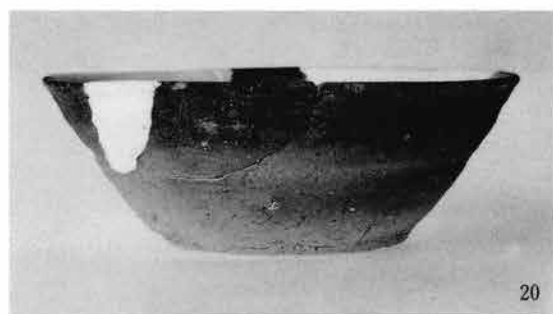
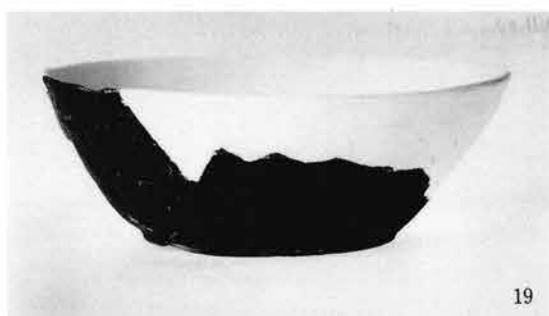
5区11号住居址出土遺物



6区1号住居址出土遺物 (1)

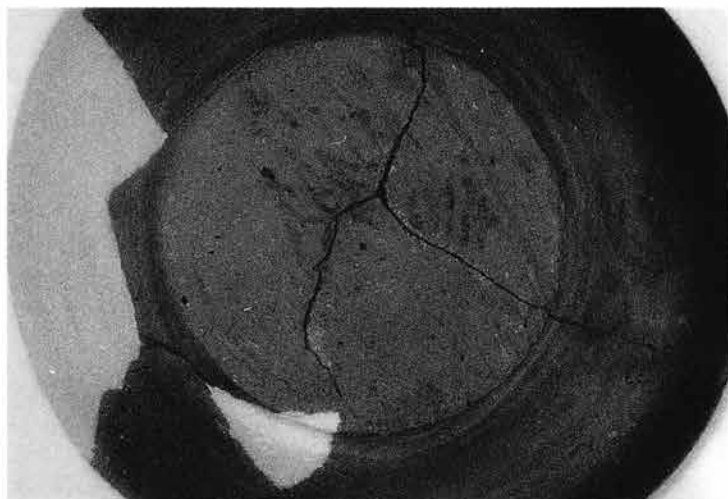






6区1号住居址出土遺物(3)

6区1号住居址-16の墨書



6区1号住居址出土遺物(4)

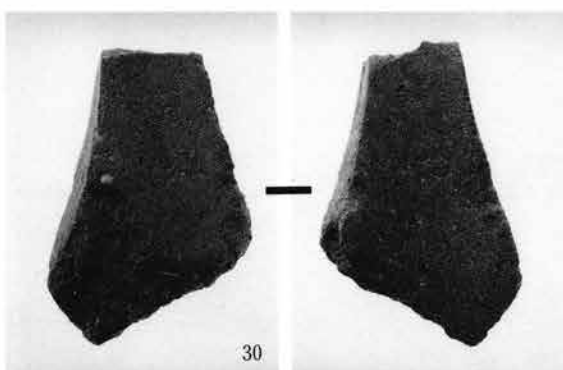


29

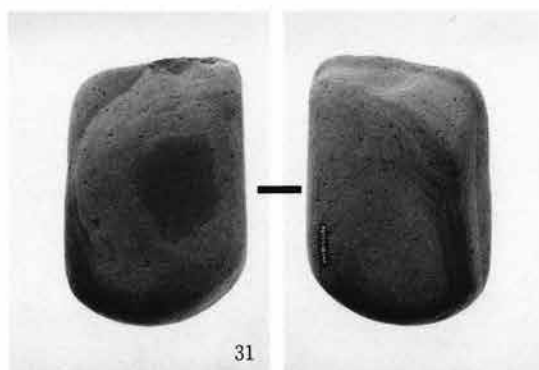


31

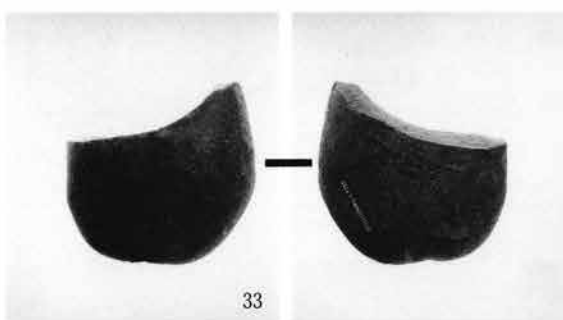
6区1号住居址出土遺物(5)



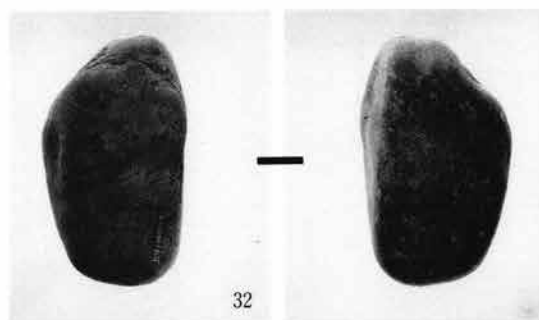
30



31

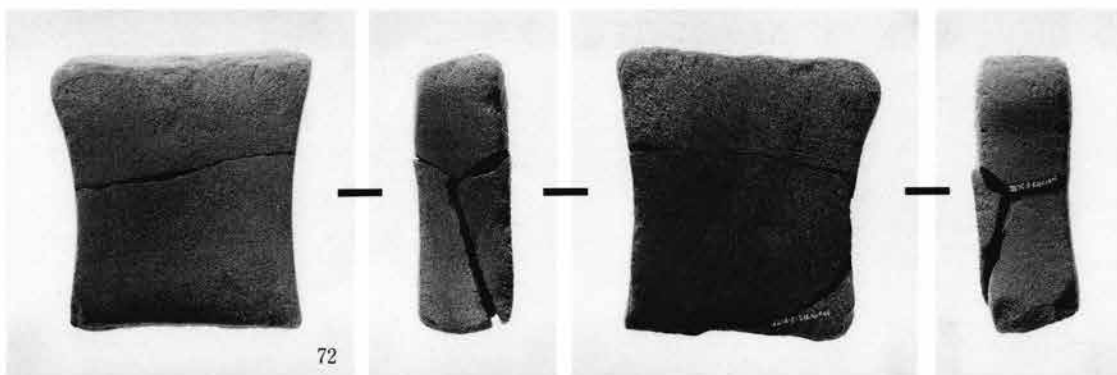


33



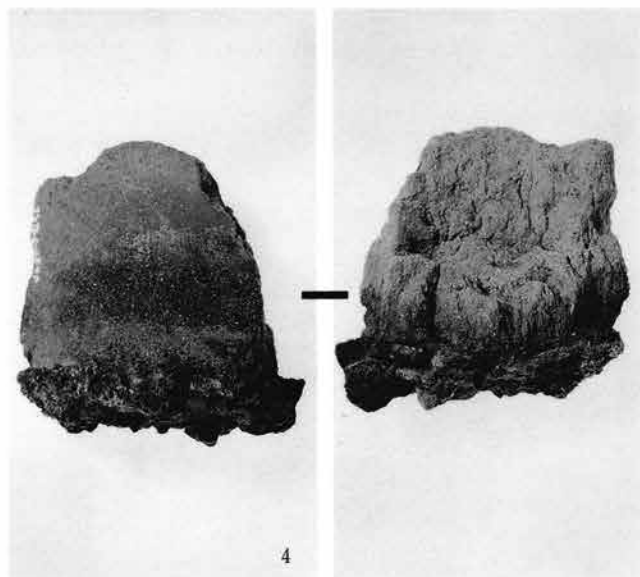
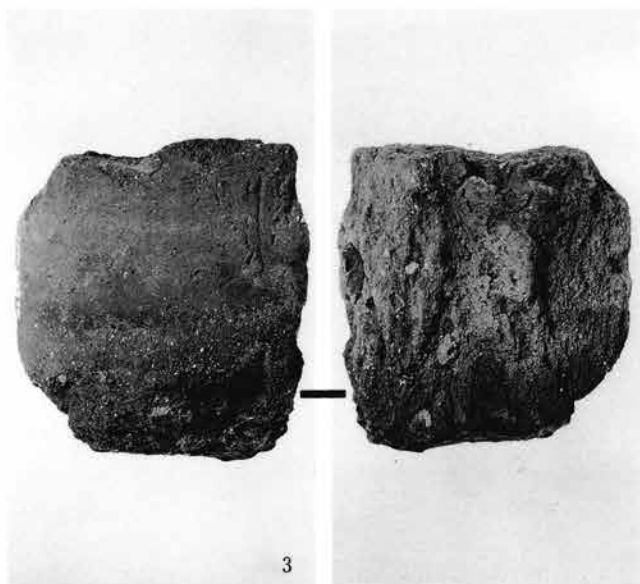
32

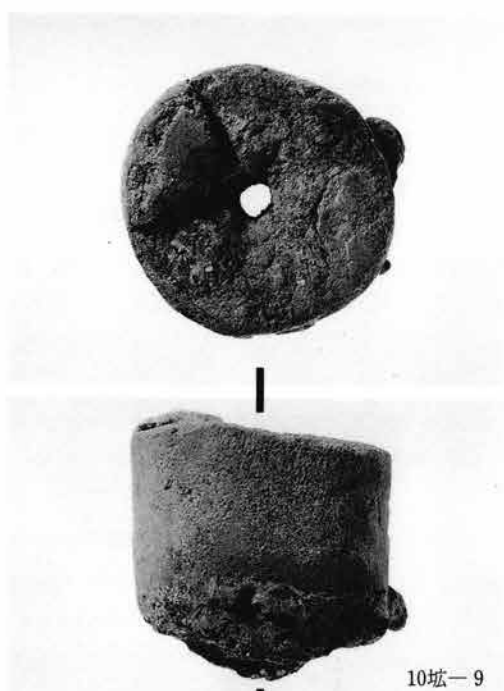
5区3号住居址出土砥石



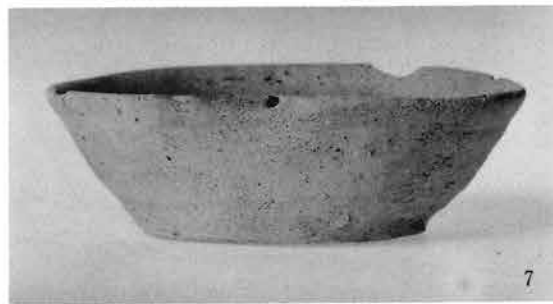
72

5区5号住居址出土砥石





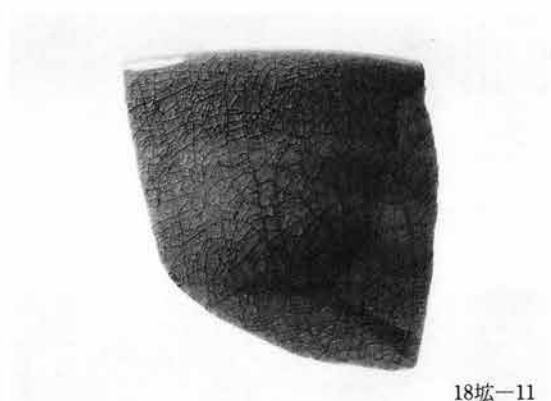
5 区 1・3・6・10・16号土塚出土遺物



5区2号土坛出土遺物(1)



20



18坑—11



18坑—12



24



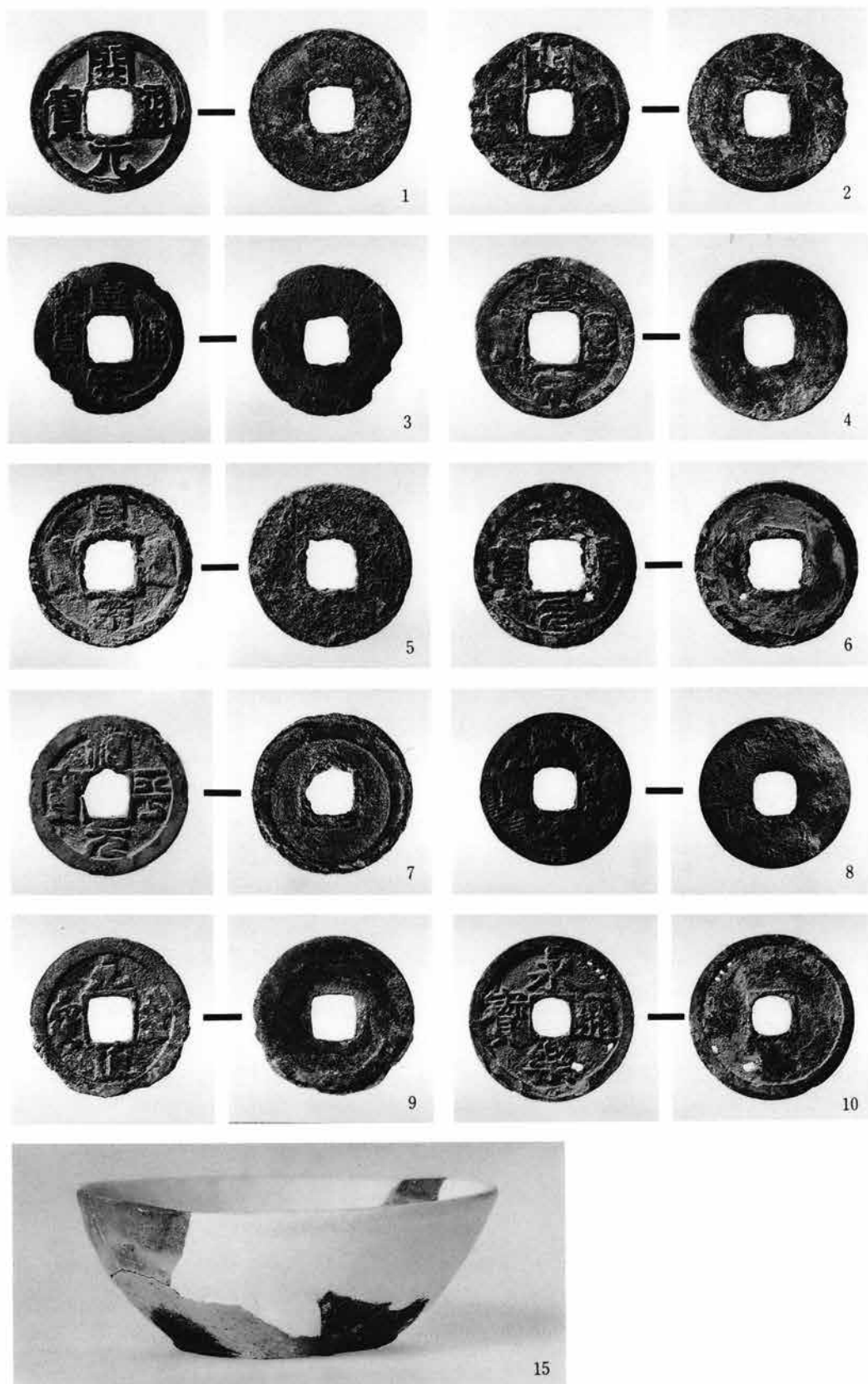
18坑—13



21坑—14

5区2号土坑出土遗物(2)

5区18·21号土坑出土遗物



5区24号土坑出土遺物





5区38号土坑出土遺物(1)

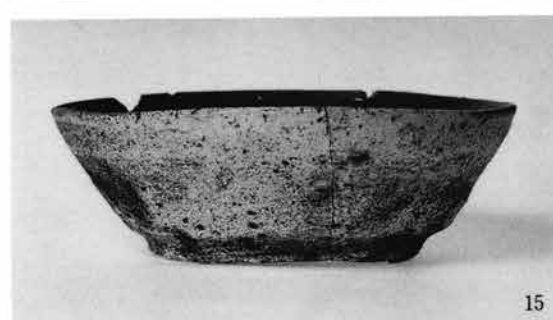
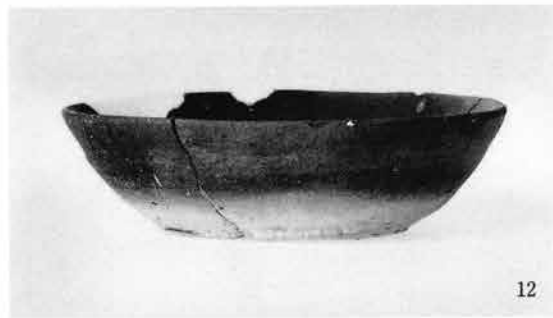
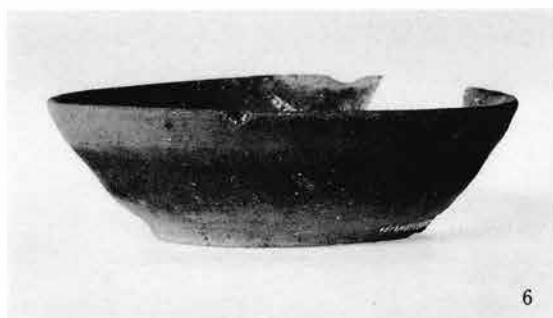




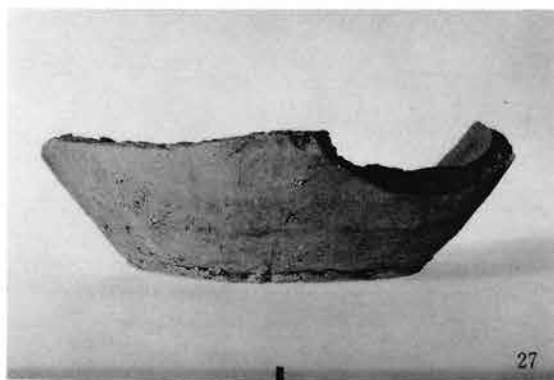
5区39号土坛出土遺物



5区40号土坛出土遺物(1)

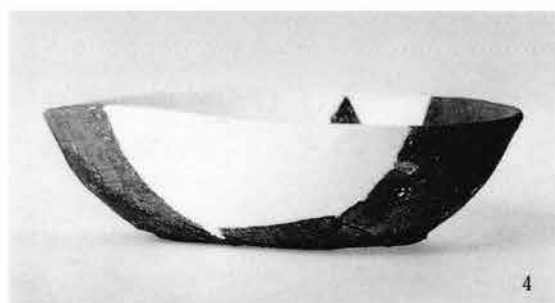


5区40号土坛出土遺物(2)

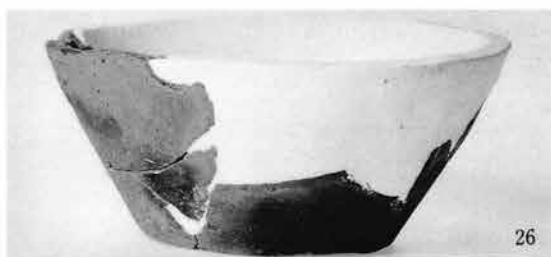


5区40号土坑出土遺物(3)

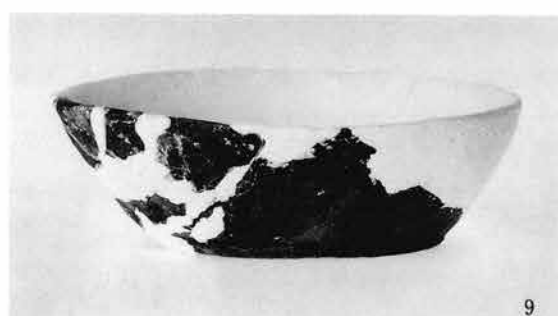
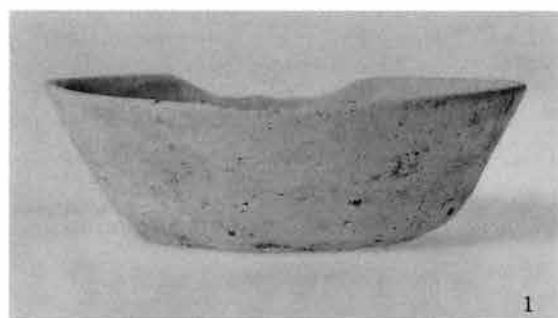




5区41号土坛出土遺物 (1)

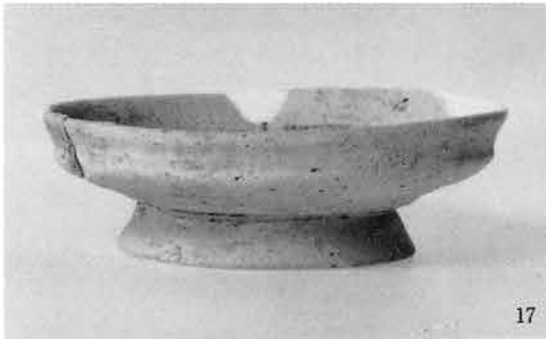


5区41号土坑出土遺物(2)

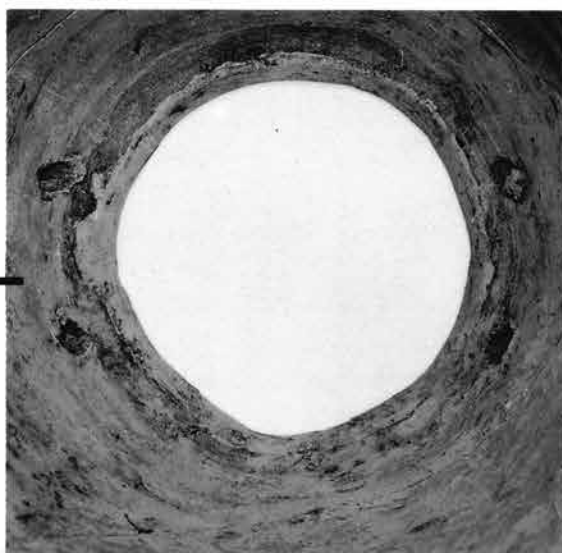
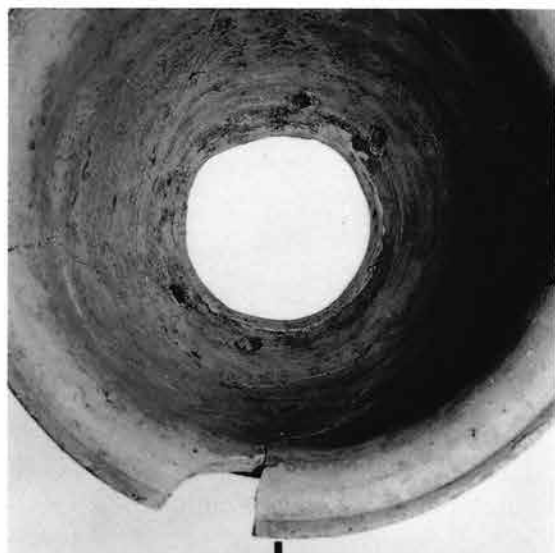


5区42号土坛出土遺物(1)



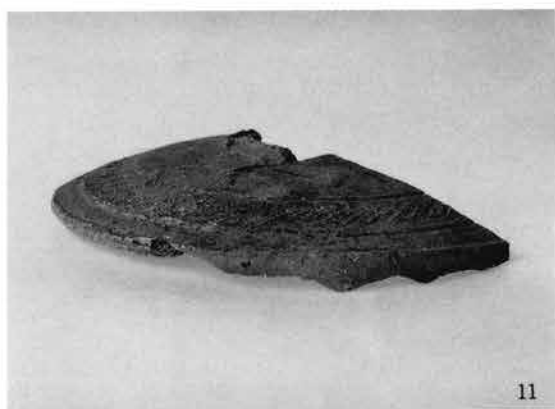
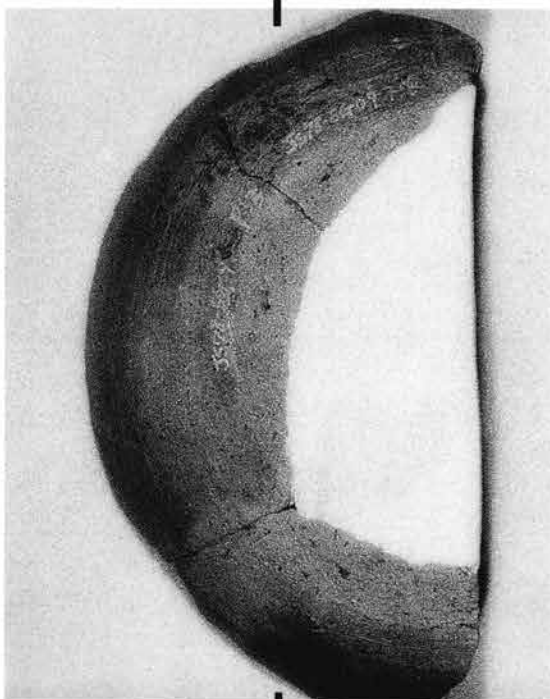


5区42号土坑出土遺物(2)



5区42号土坛出土遗物(3)

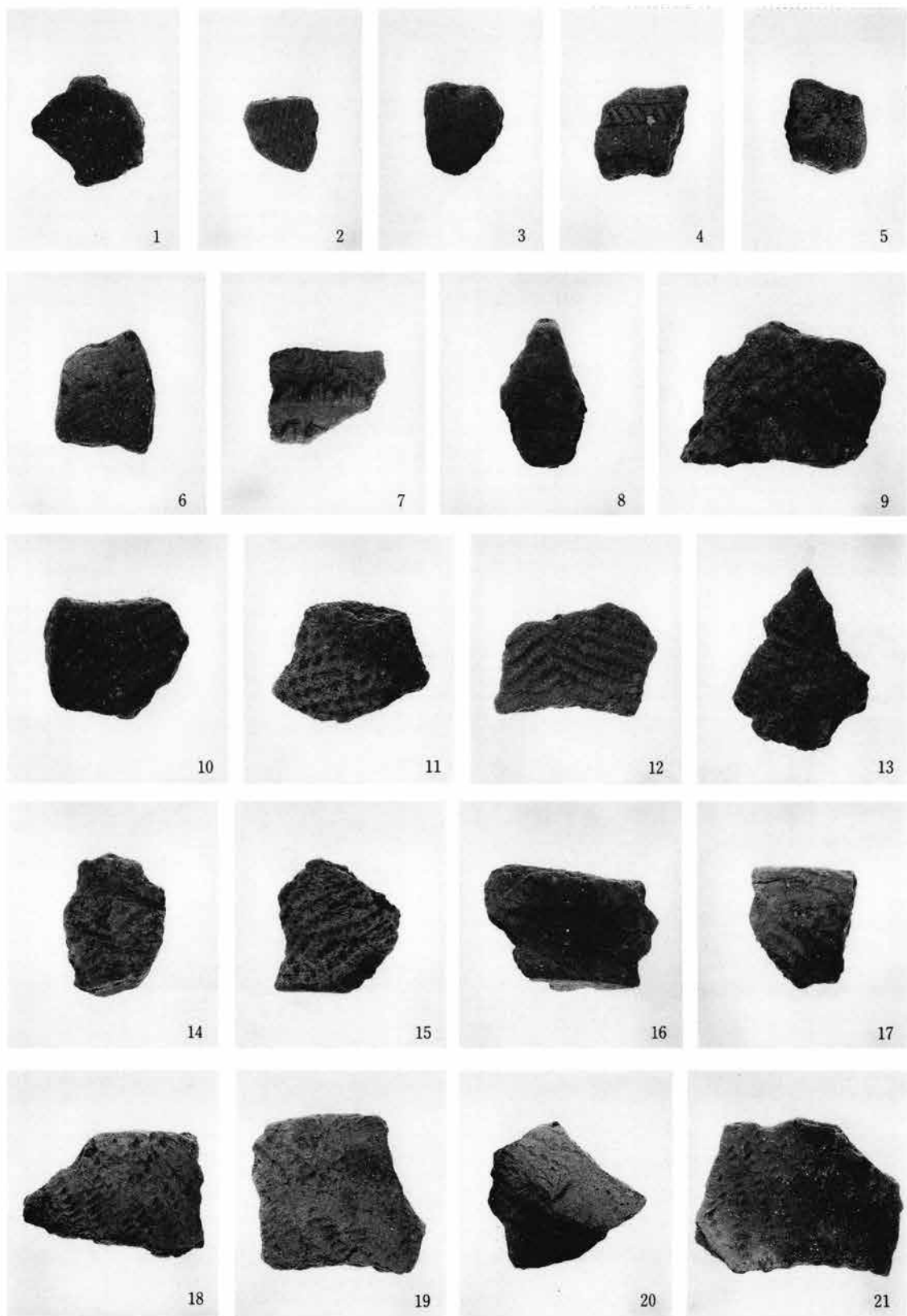




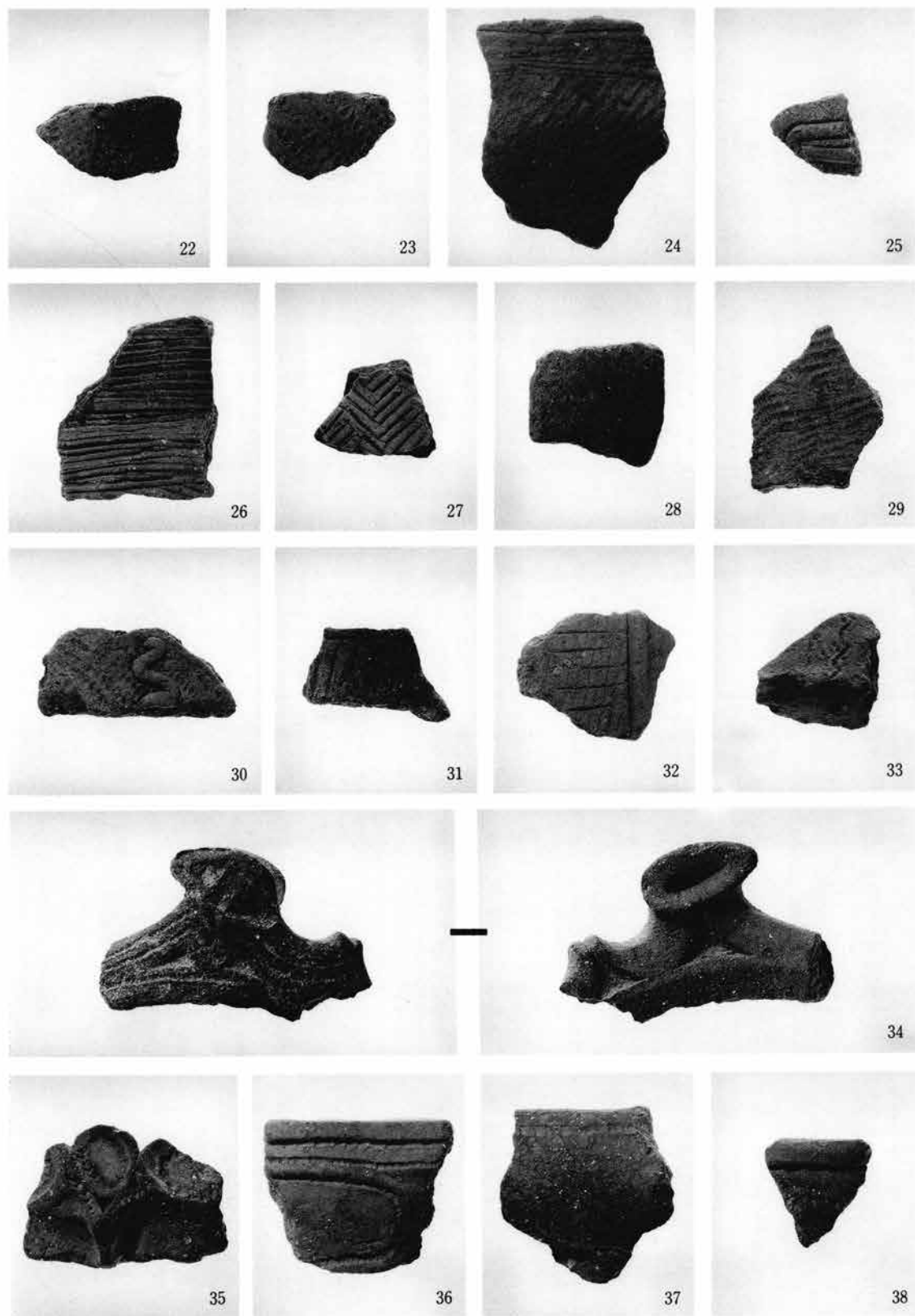
5区43号土坛出土遺物(1)



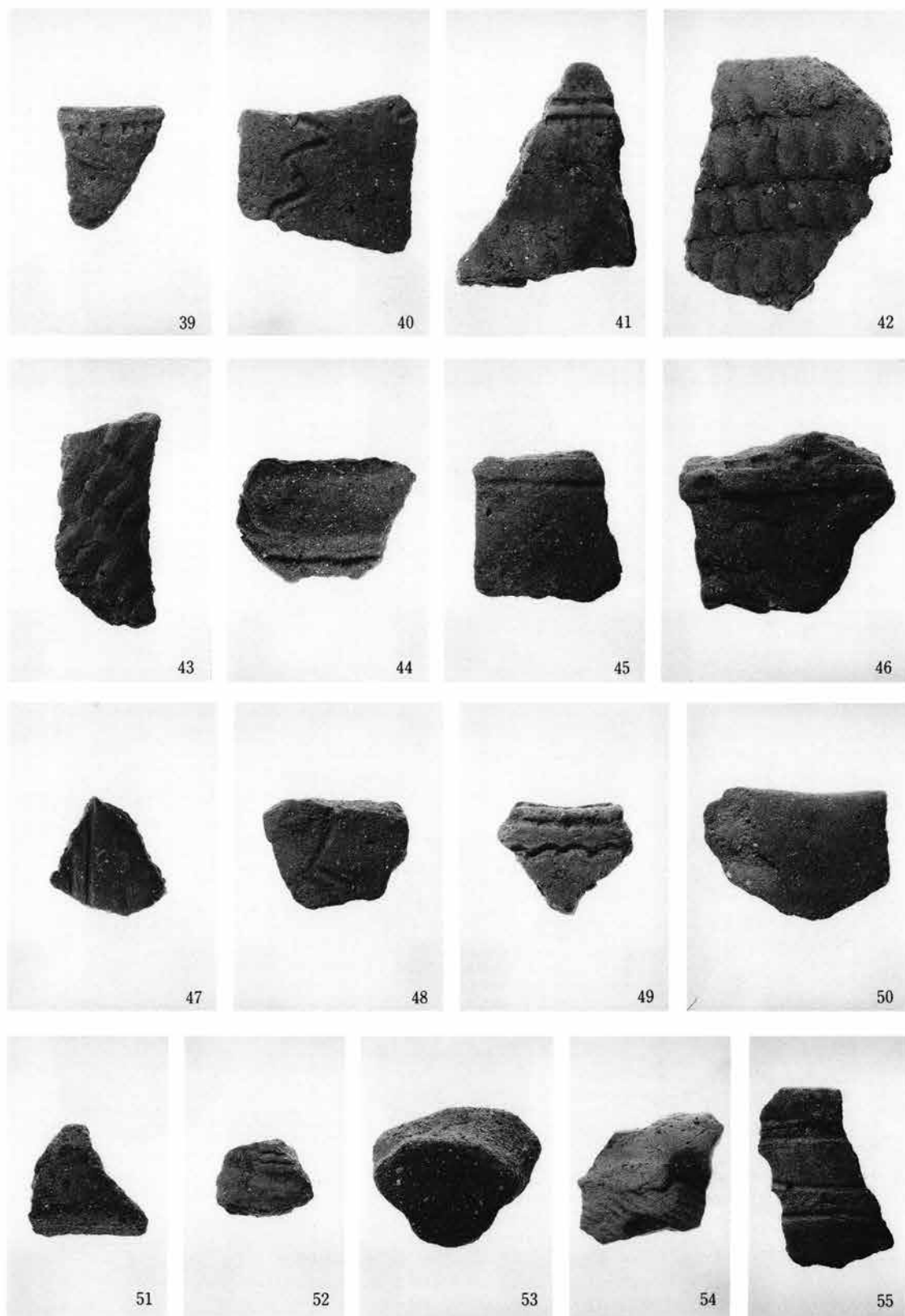
5区43号土坛出土遺物(2)



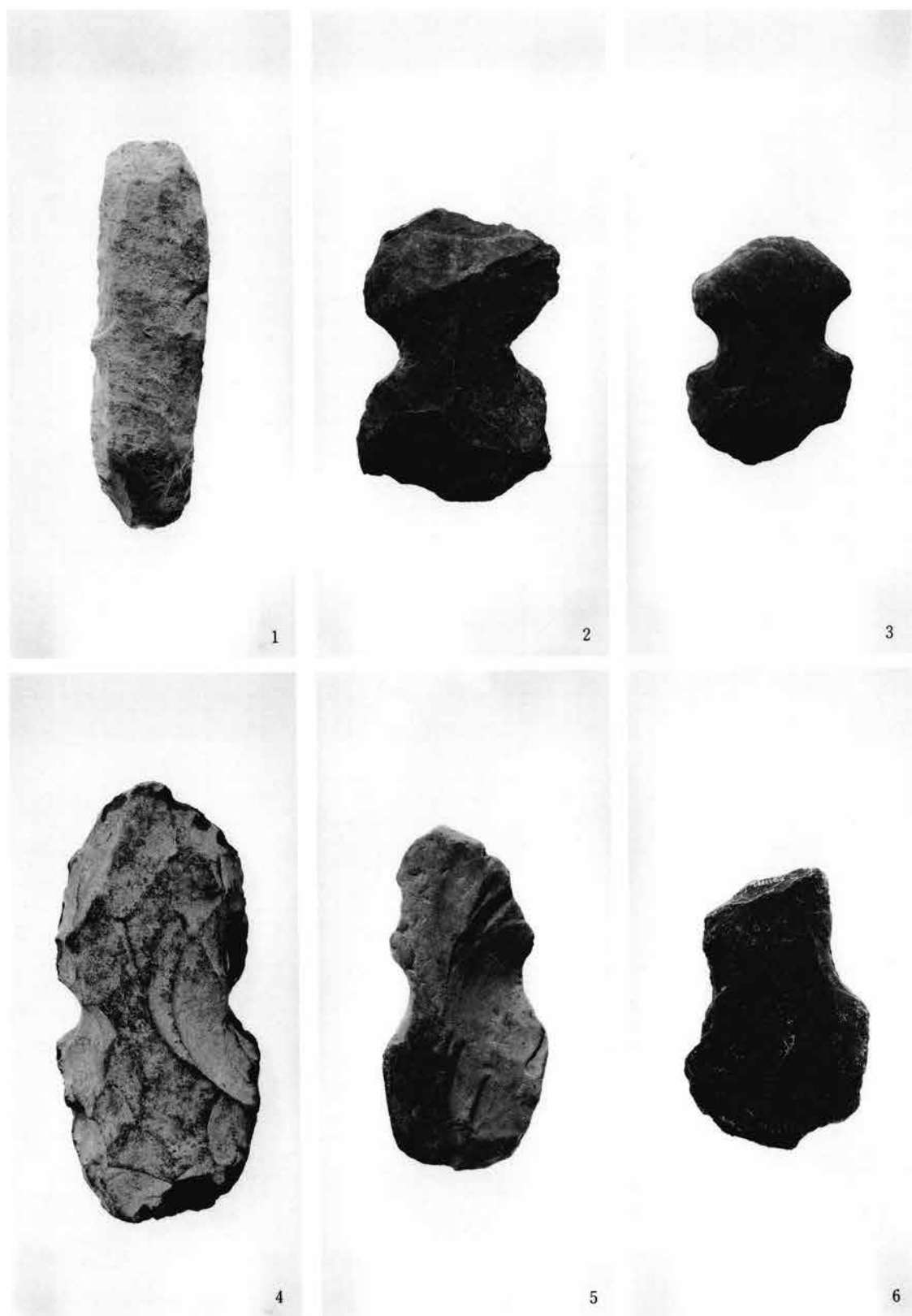
遺構外出土の縄文土器 (1)



遺構外出土の縄文土器 (2)

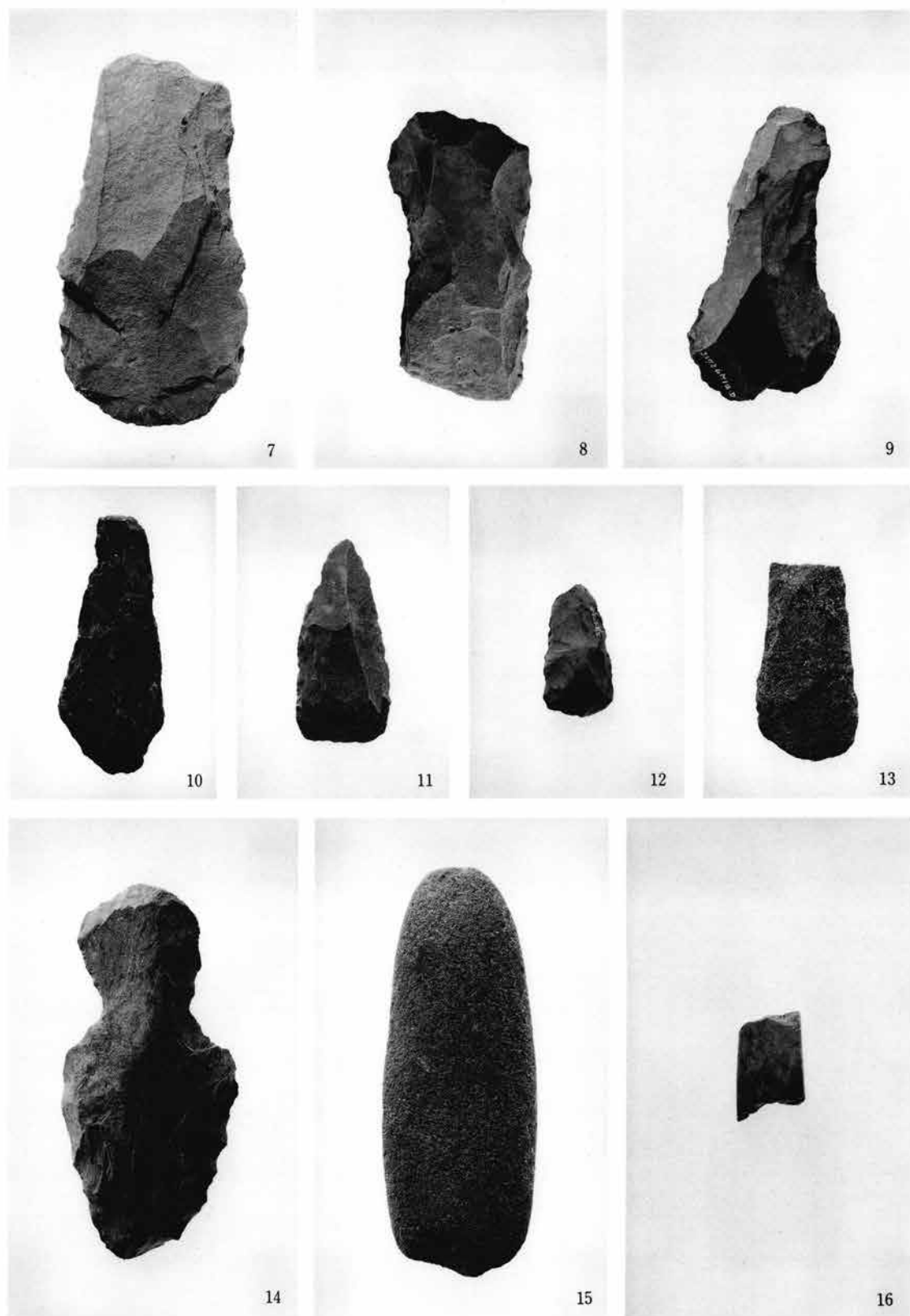


遺構外出土の縄文土器 (3)

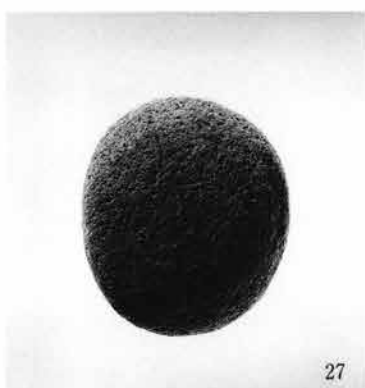


遺構外出土の縄文石器 (1)

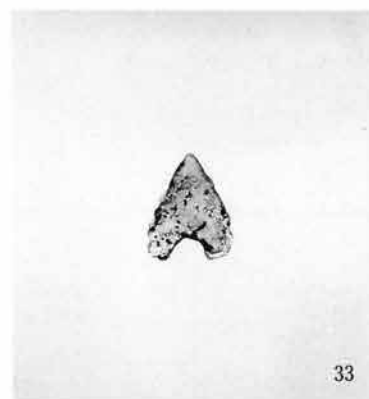




遺構外出土の縄文石器 (2)



遺構外出土の縄文石器 (3)



遺構外出土の縄文石器 (4)



1



2



3



4



5



6



9

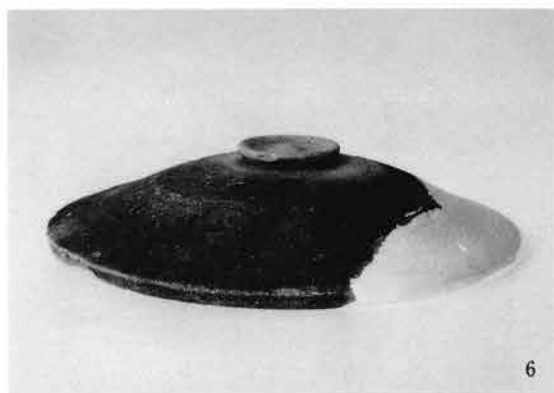
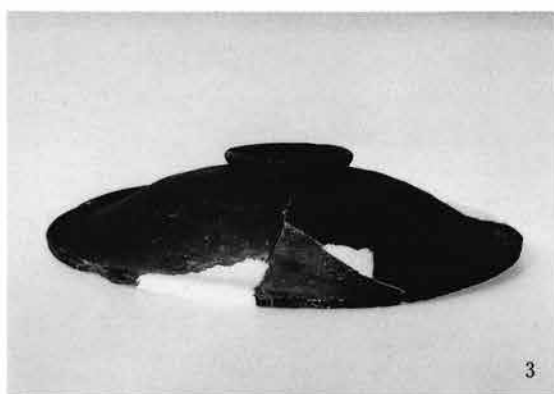
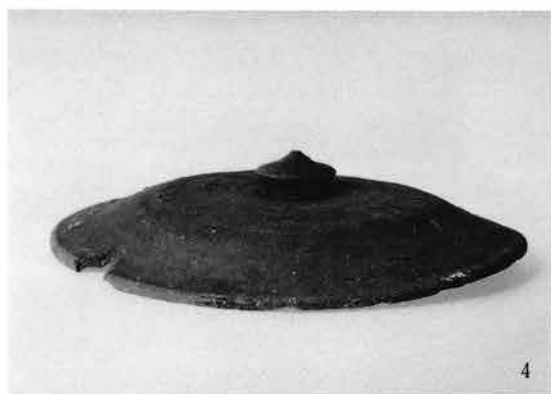


8



10

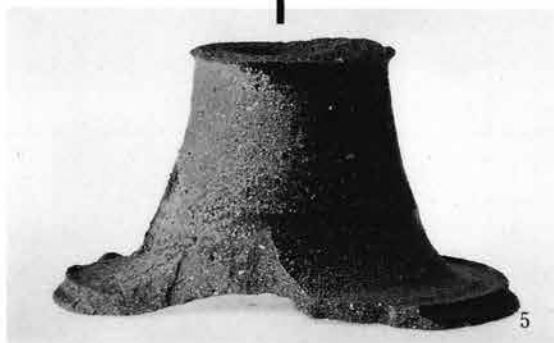
遺構外出土の弥生土器



遺構外出土の蓋 (1)



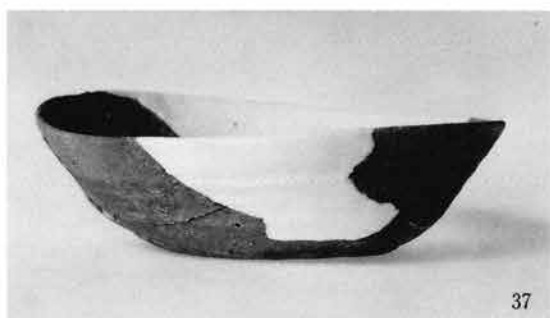
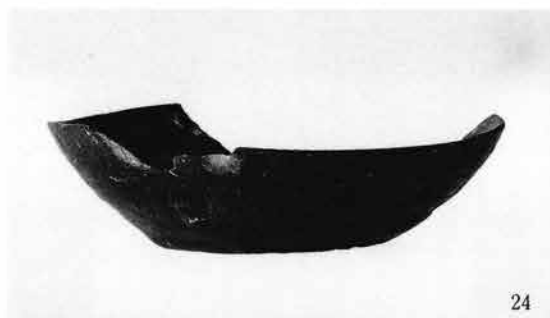
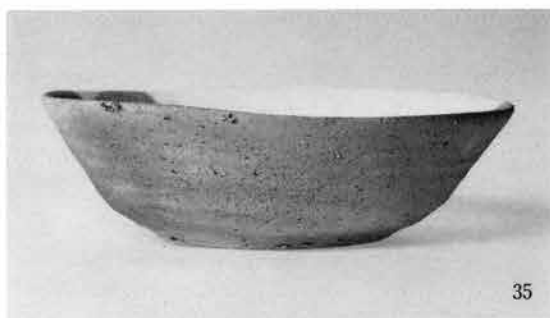
遺構外出土の蓋 (2)



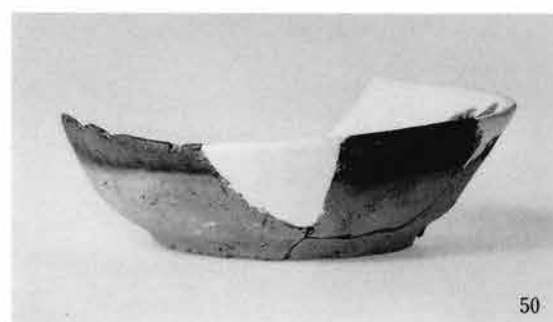
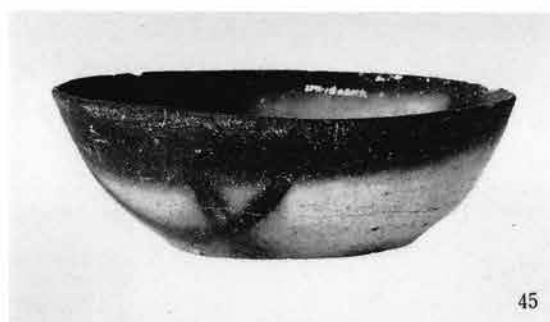
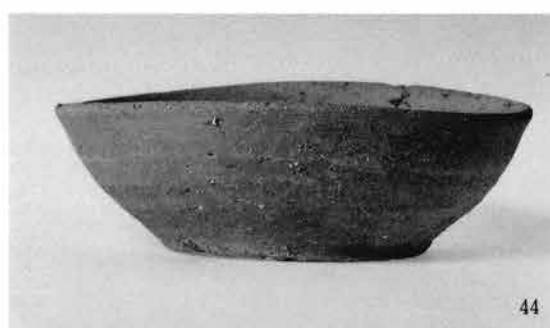
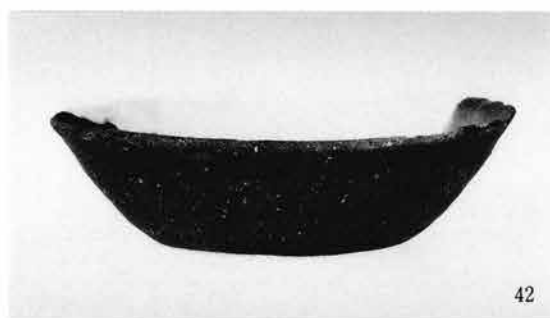
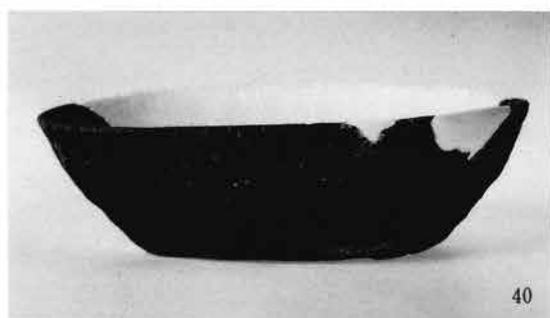
遺構外出土の高杯



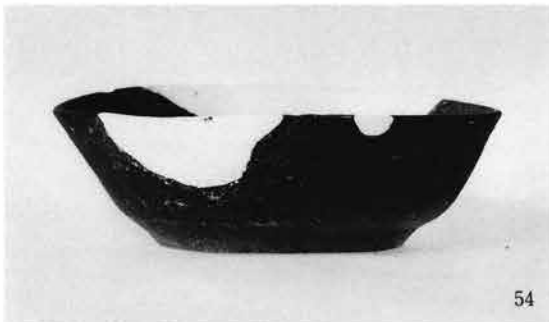
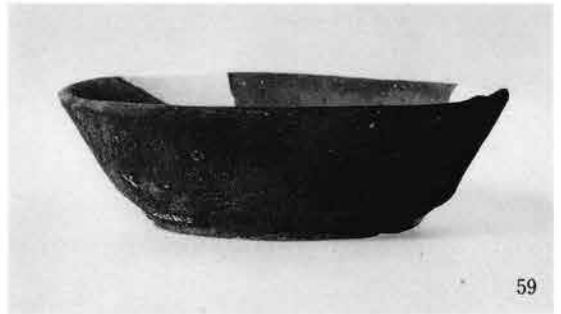
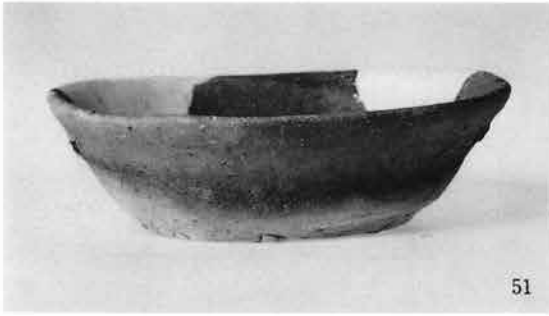
遺構外出土の杯 (1)



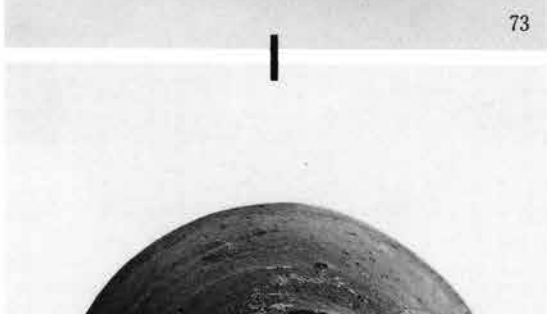
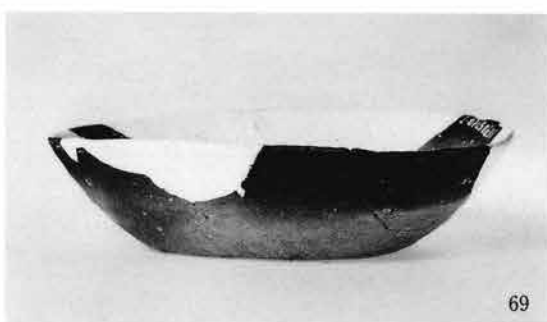
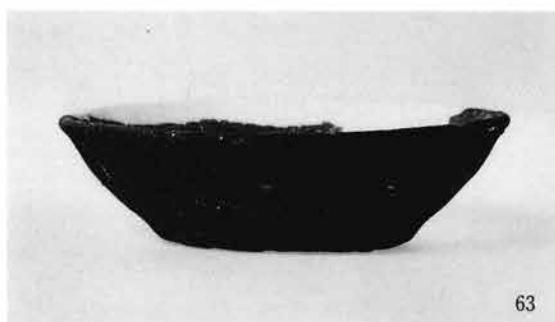




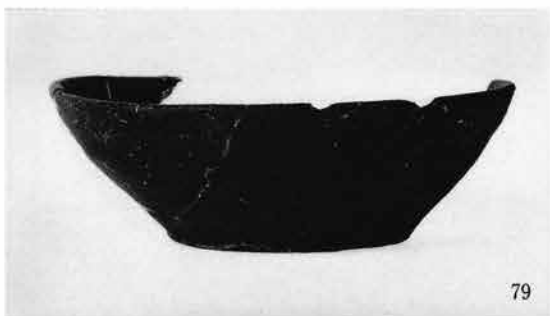
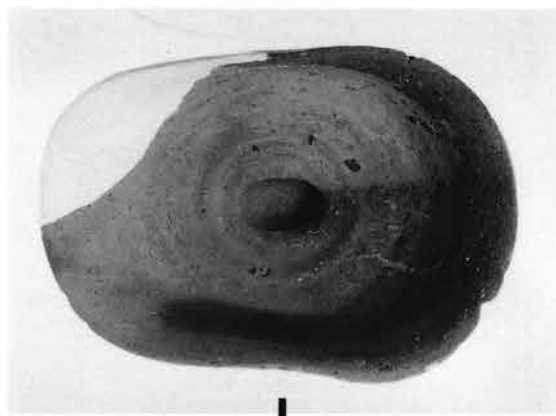
遺構外出土の杯 (3)



遺構外出土の杯 (4)



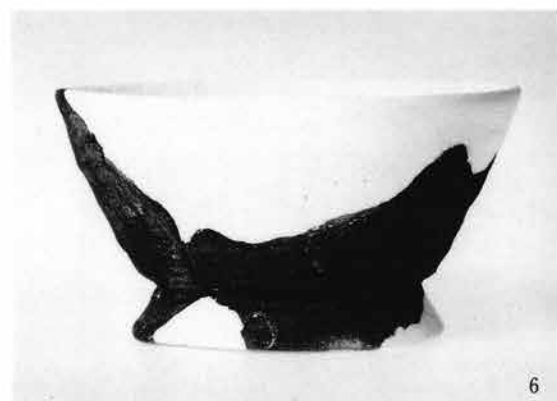
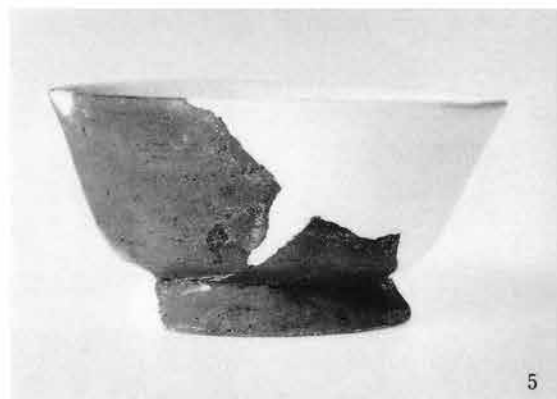
遺構外出土の杯 (5)



遺構外出土の杯 (6)



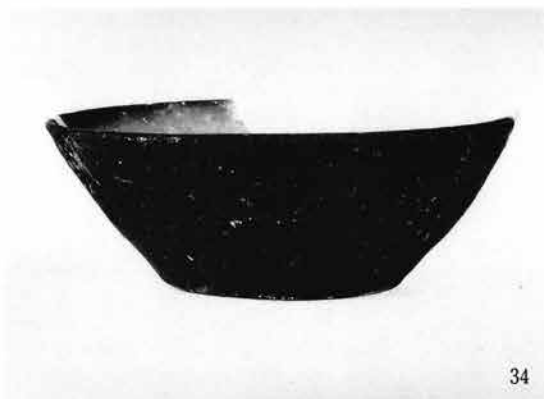
遺構外出土の杯 (7)



遺構外出土の碗 (1)



遺構外出土の碗 (2)

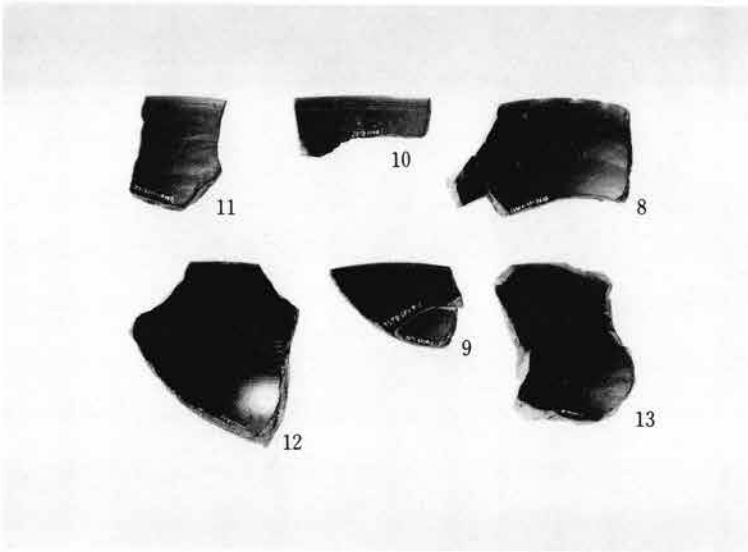


遺構外出土の椀 (3)

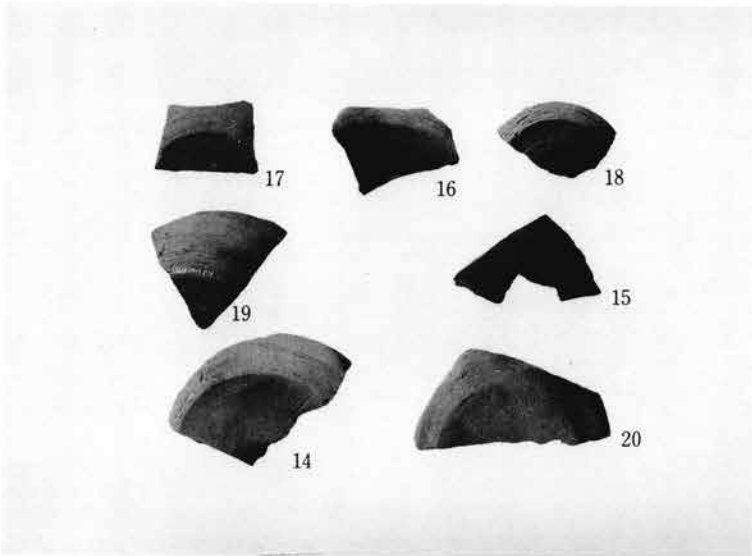


遺構外出土の黒色土器 (1)

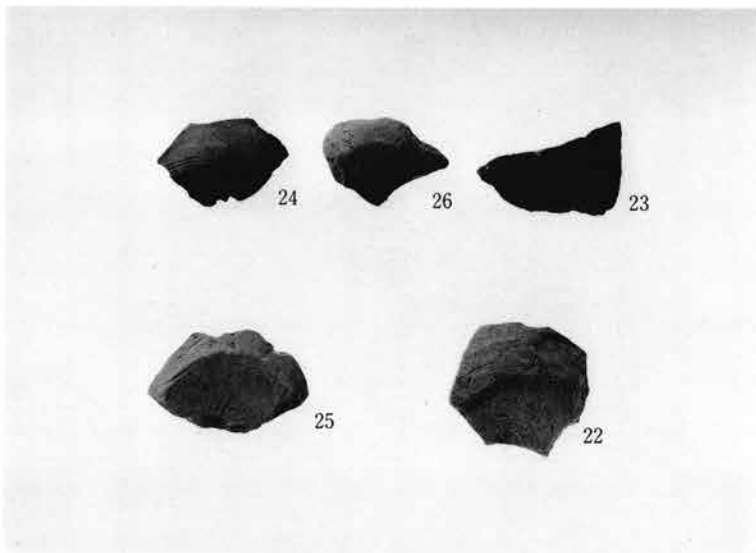
1 口縁部



2 底部外面全面  
回転ヘラケズリ



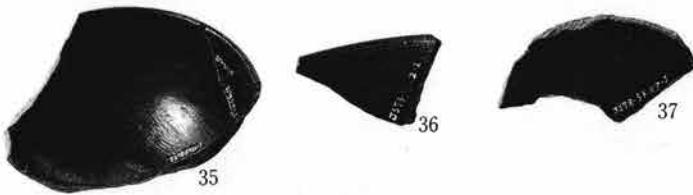
3 底部外面回転  
糸切り







35



35

36

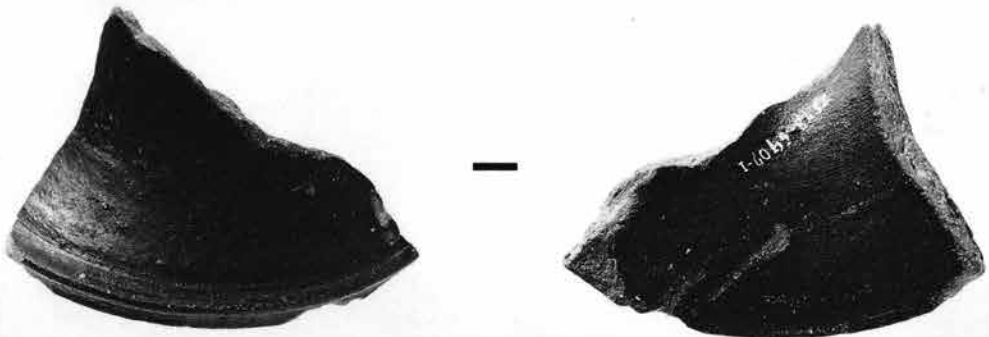
37



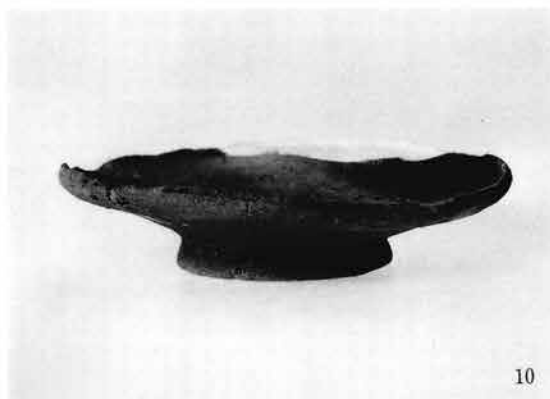
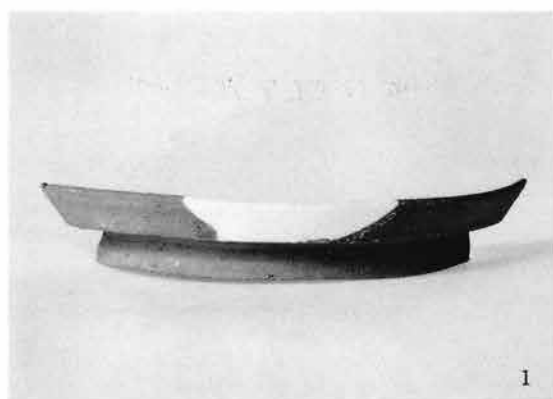
35

36

37



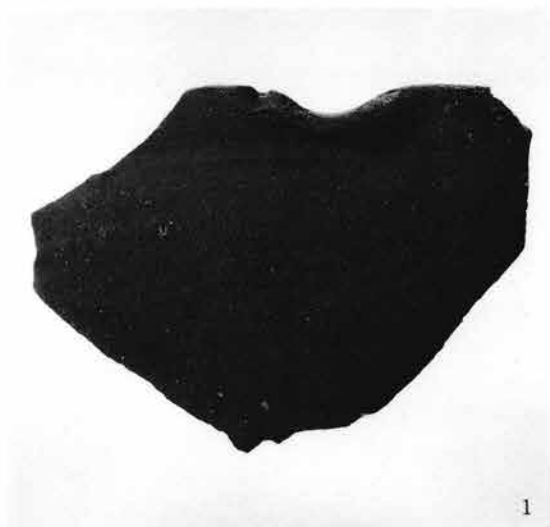
34



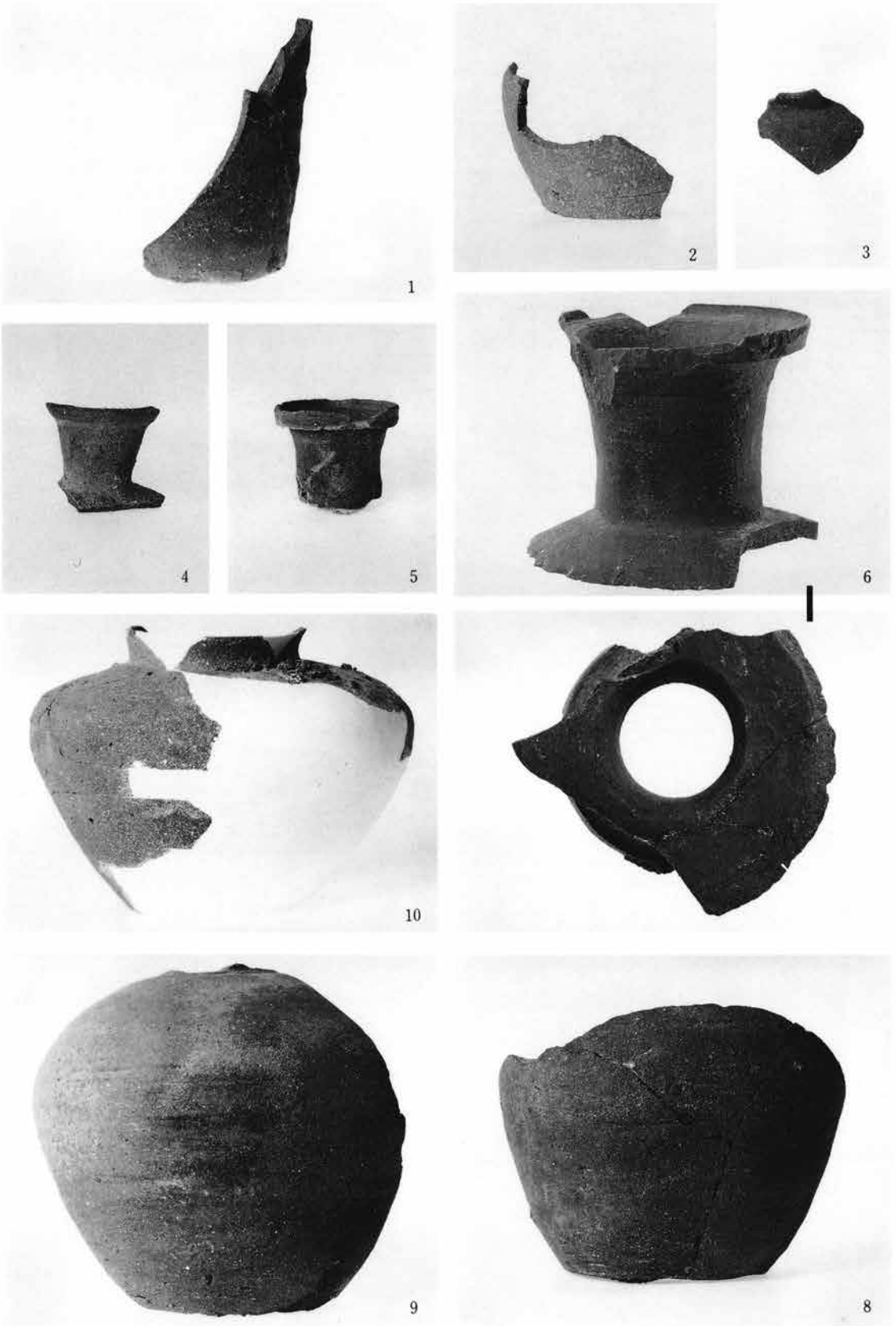
遺構外出土の皿



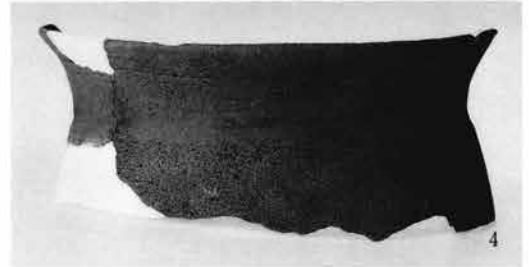
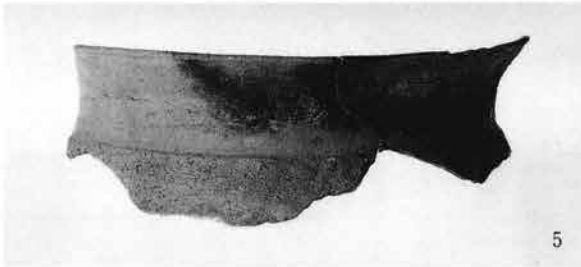
遺構外出土の硯



遺構外出土の鉢



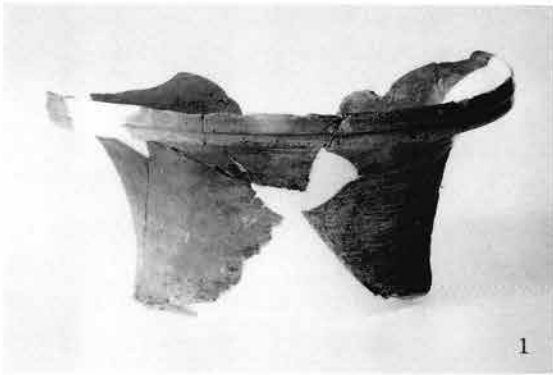
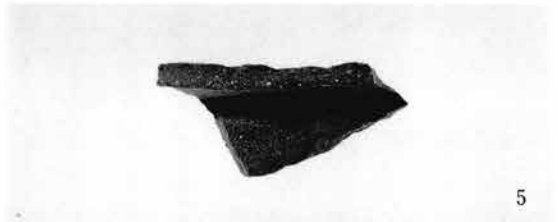
遺構外出土の壺



遺構外出土の土師器・土師質甕

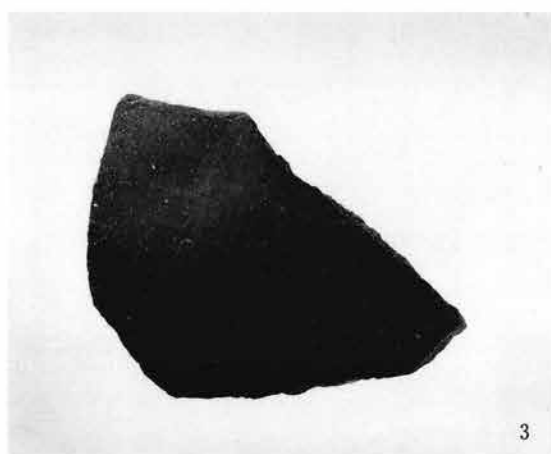


遺構外出土の小型甕



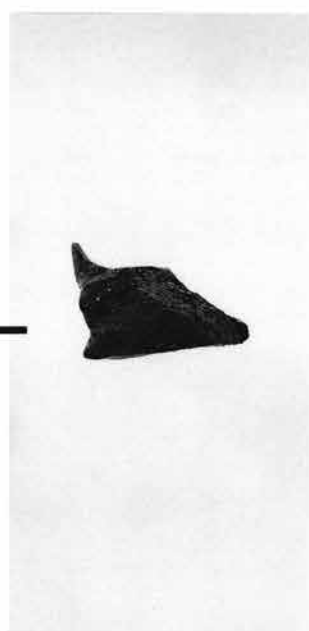
遺構外出土の甑・小型甕・甕





遺構外出土のヘラ記号のある土器







1 ヘラ切離し後回転ヘラケズリ



5 外底周縁の凸



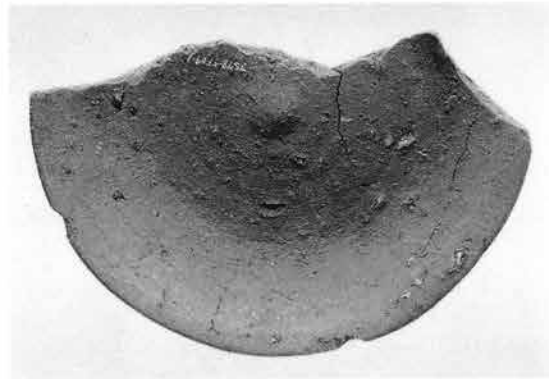
2 ヘラ切離し後ナデ?



6 内底周縁の強いヨコナデ



3 右回転糸切離し後回転ヘラケズリ



7 内底中央の凸



4 内底の渦巻状剝離



8 外底の鋭い平行線



9 回転糸切り時の小石剥離



13 回転糸切り後の高台貼り付け



10 焼き割れ ★



14 高杯 脚接合時の凹線と粘土紐巻上げ



11 外底のワラ状圧痕



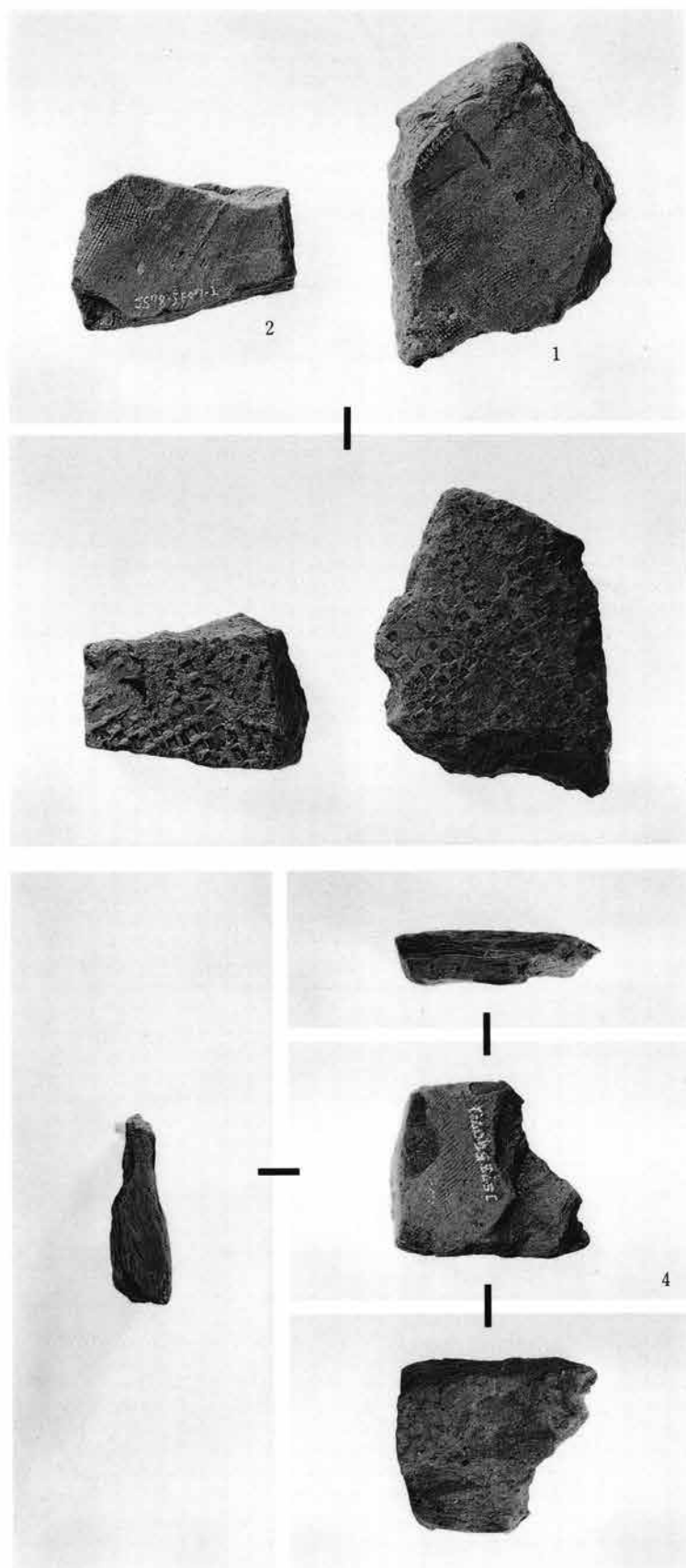
15 高杯 杯部剥離面

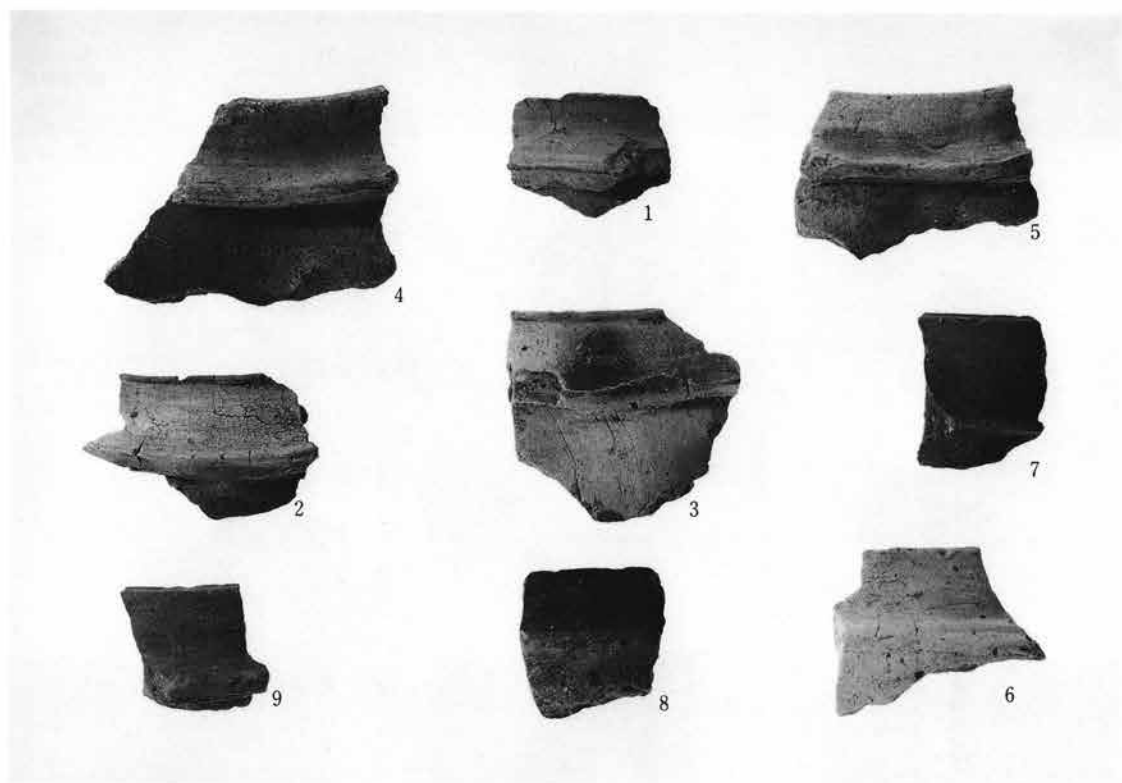


12 凹線を施す高台貼り付け

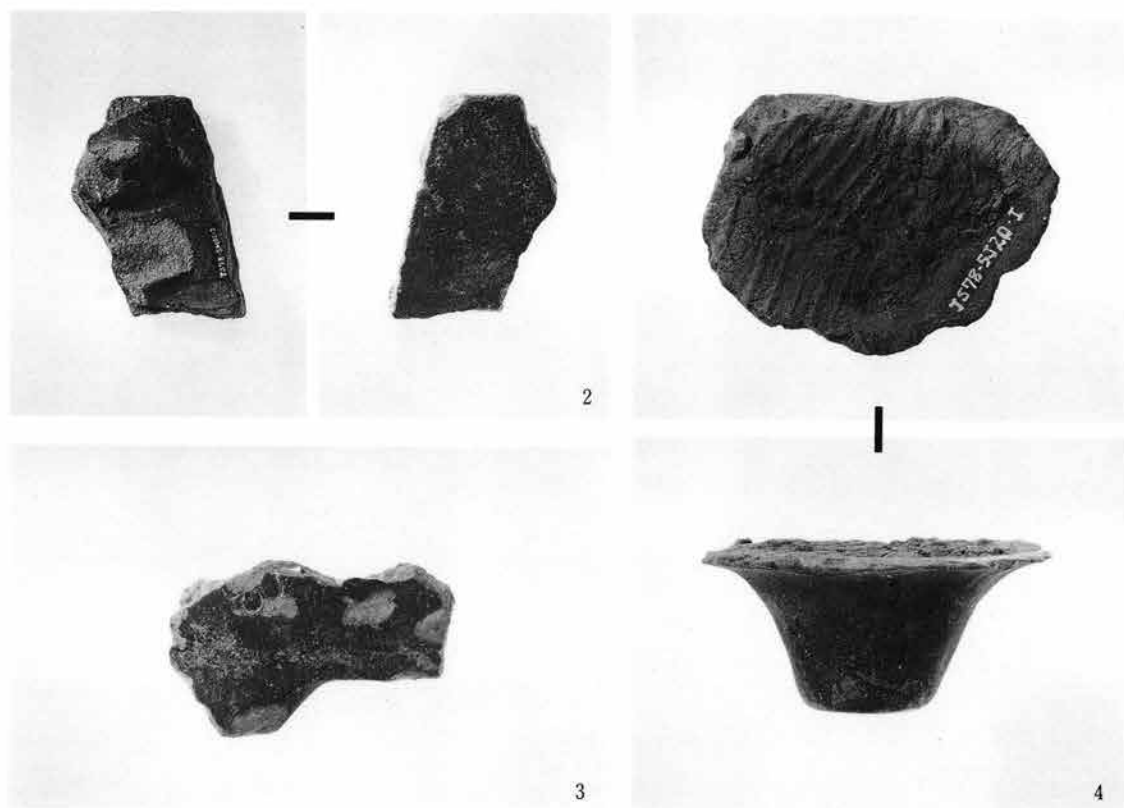


16 高杯 脚部粘土紐巻上げ

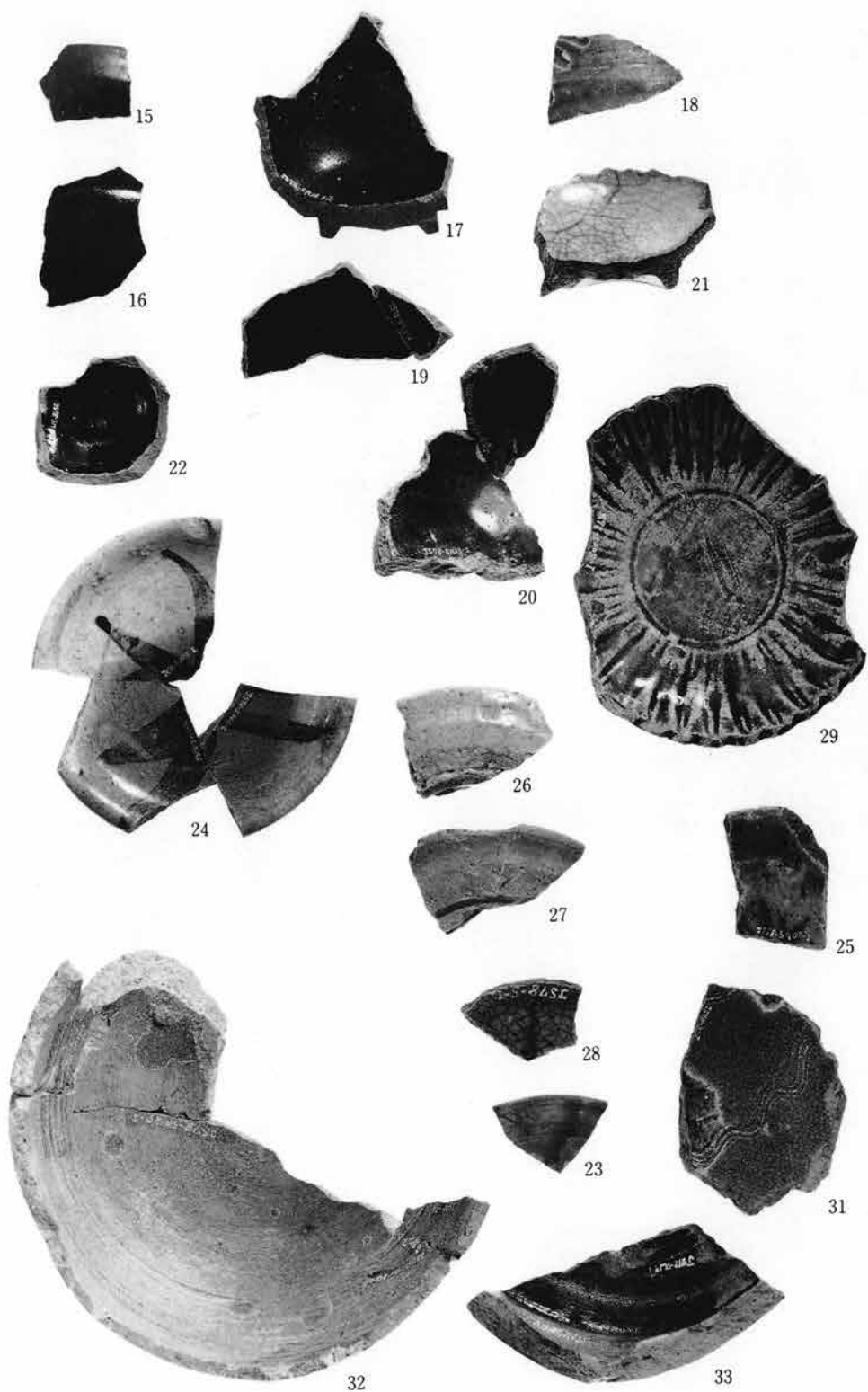




遺構外出土の羽釜



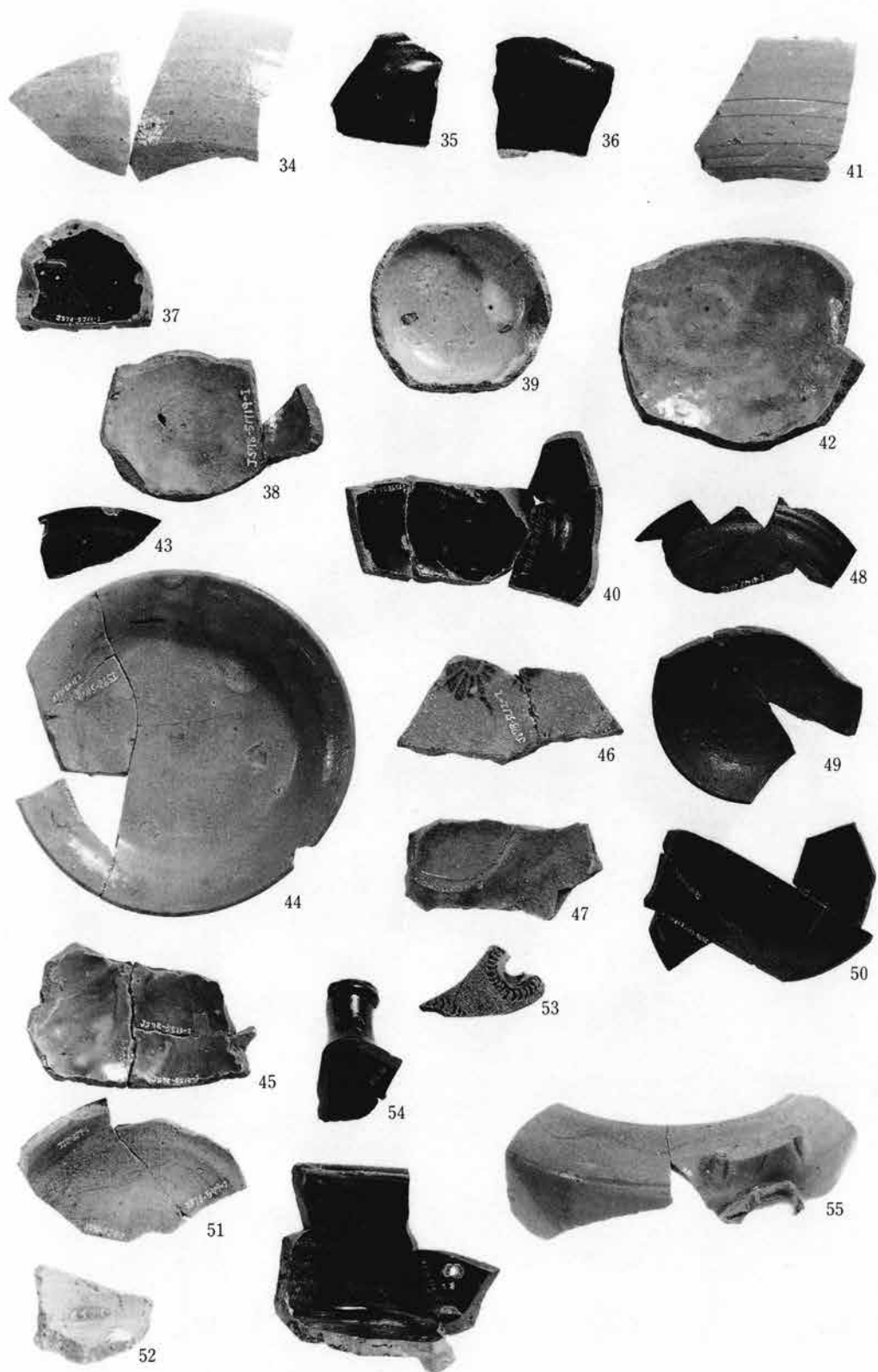
中・近世の軟質陶器







陶磁器 (2) 美濃焼 外面





陶磁器 (4) 瀬戸・美濃 外面



57



59



61



58



62



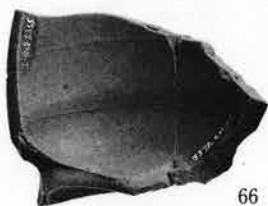
65



60



63



66



64



68



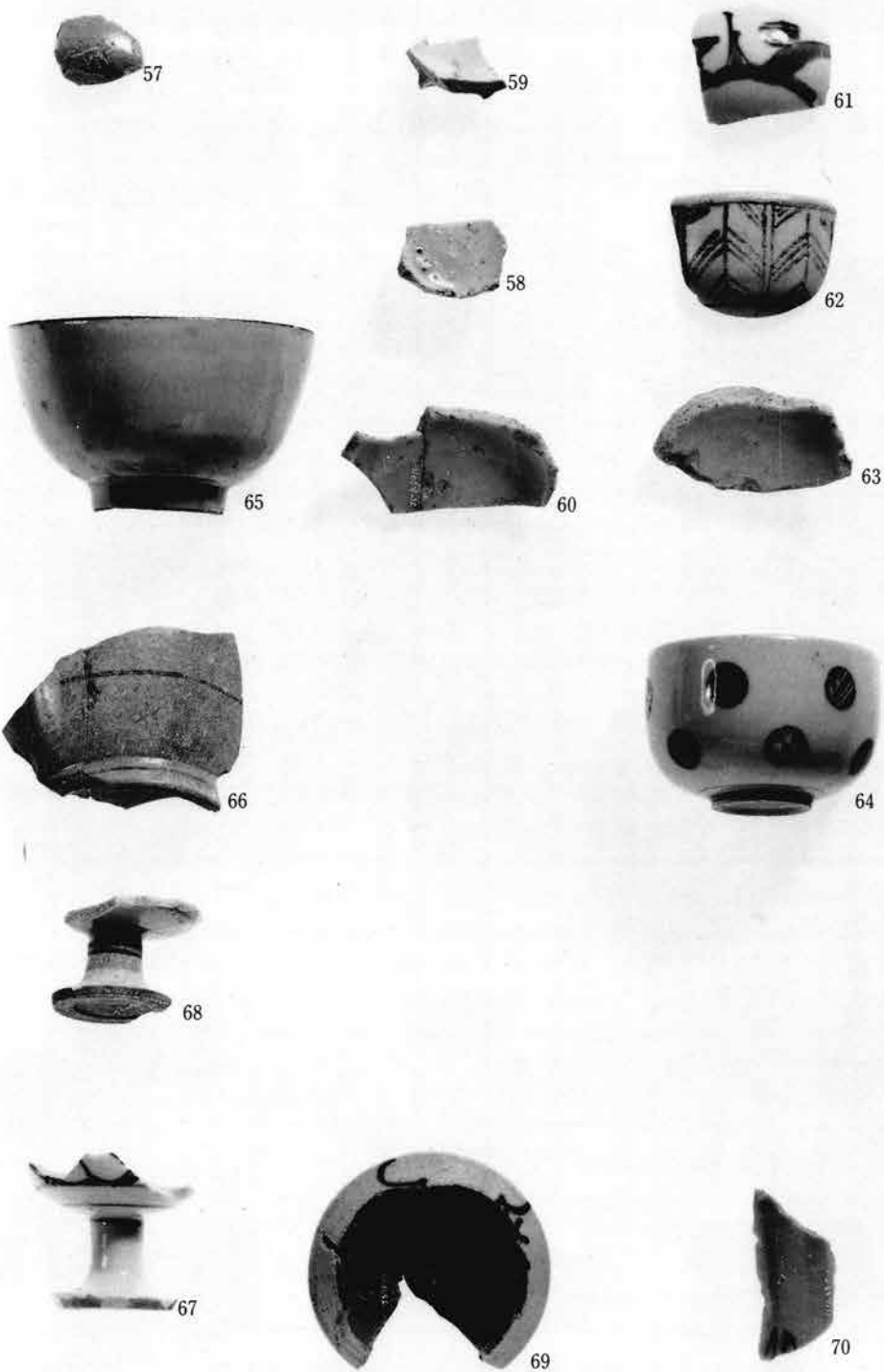
67



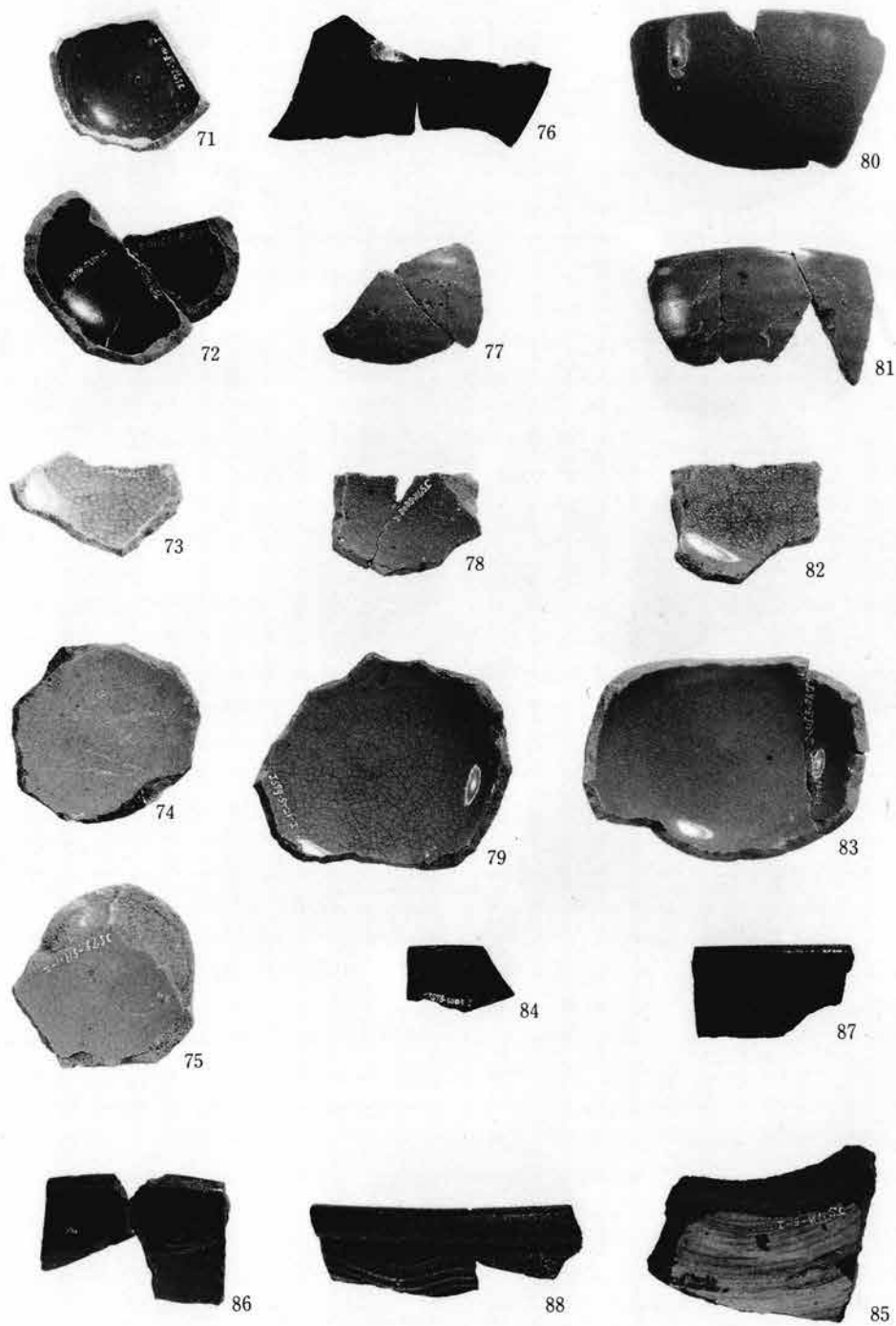
69

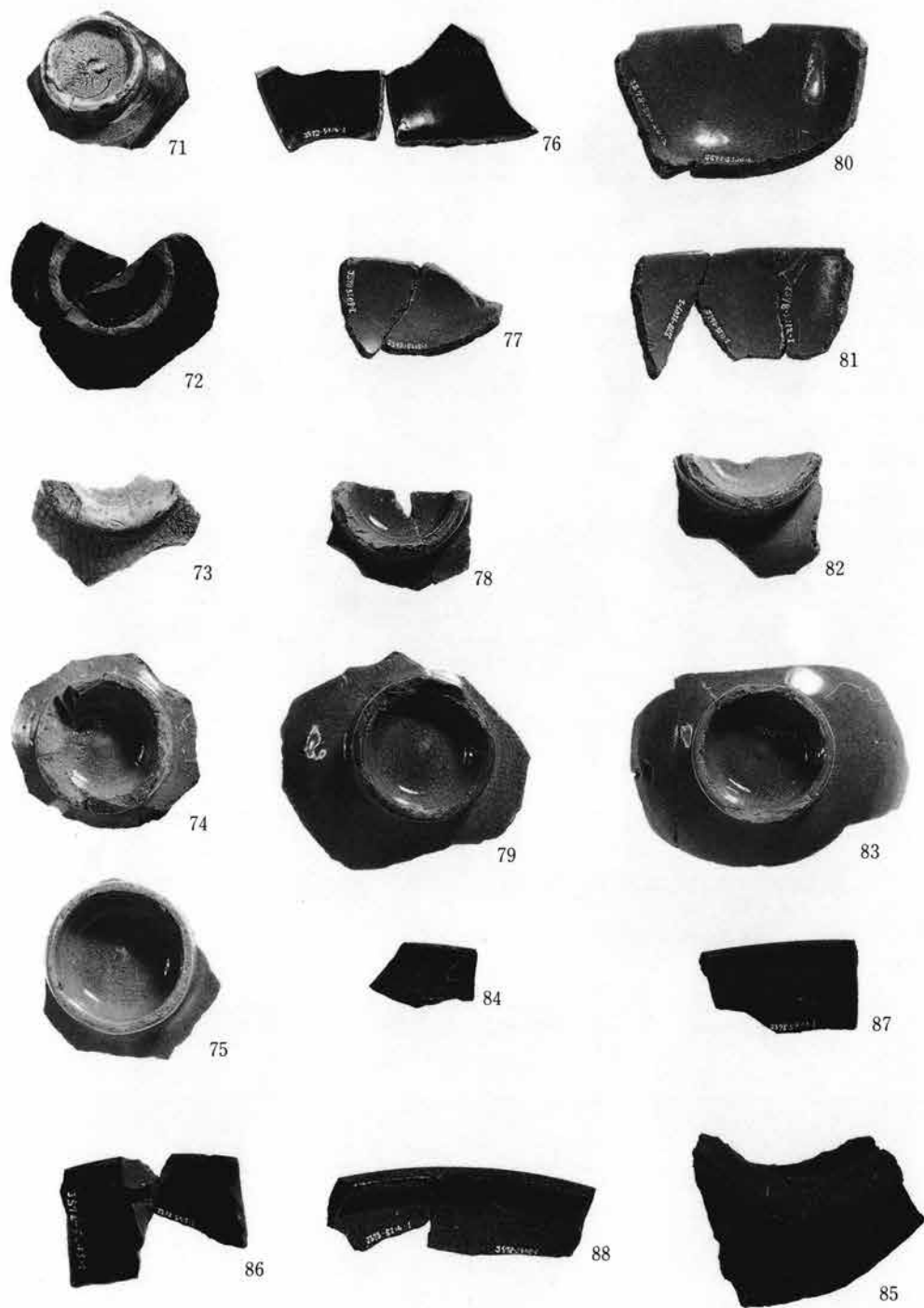


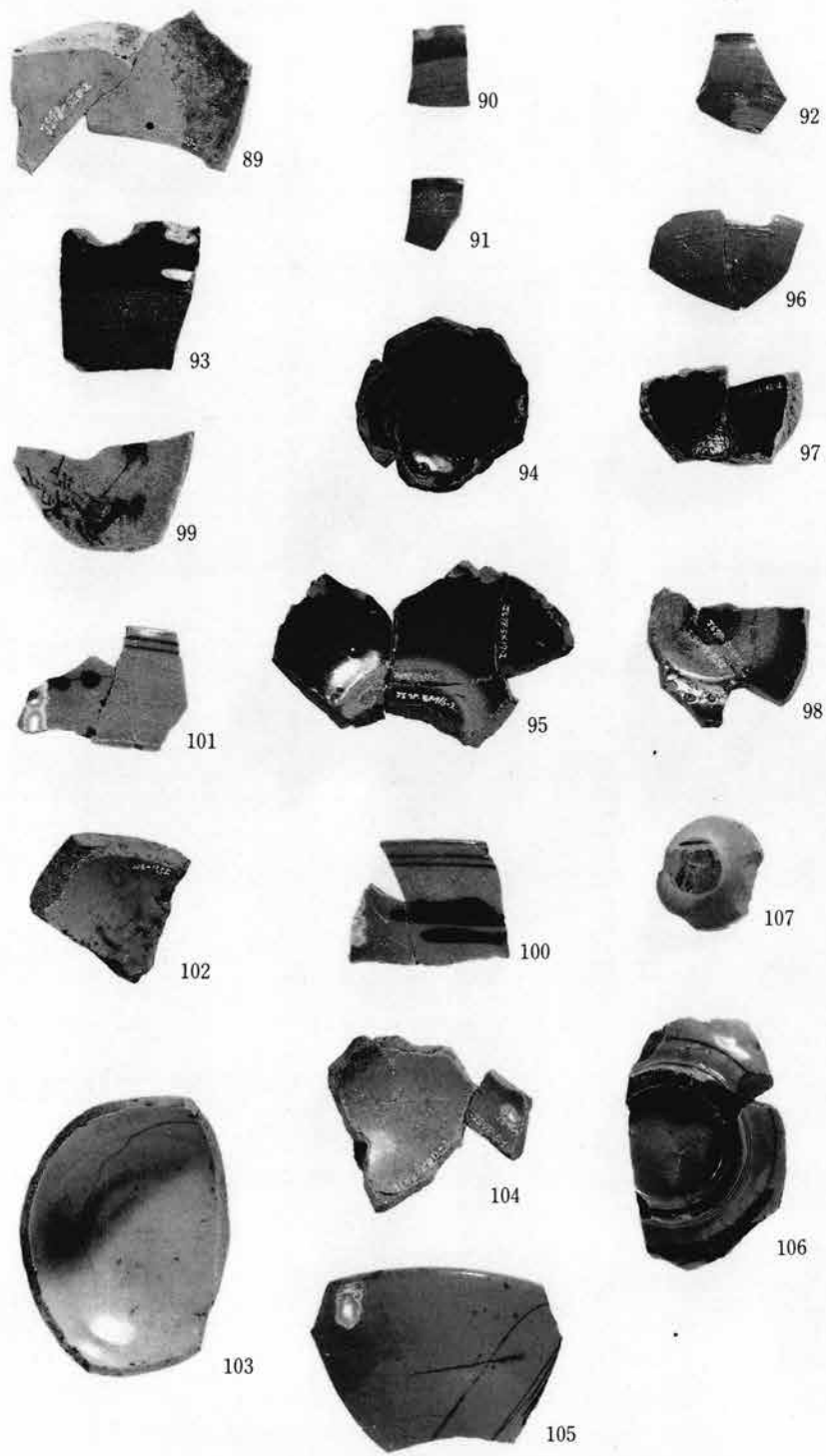
70



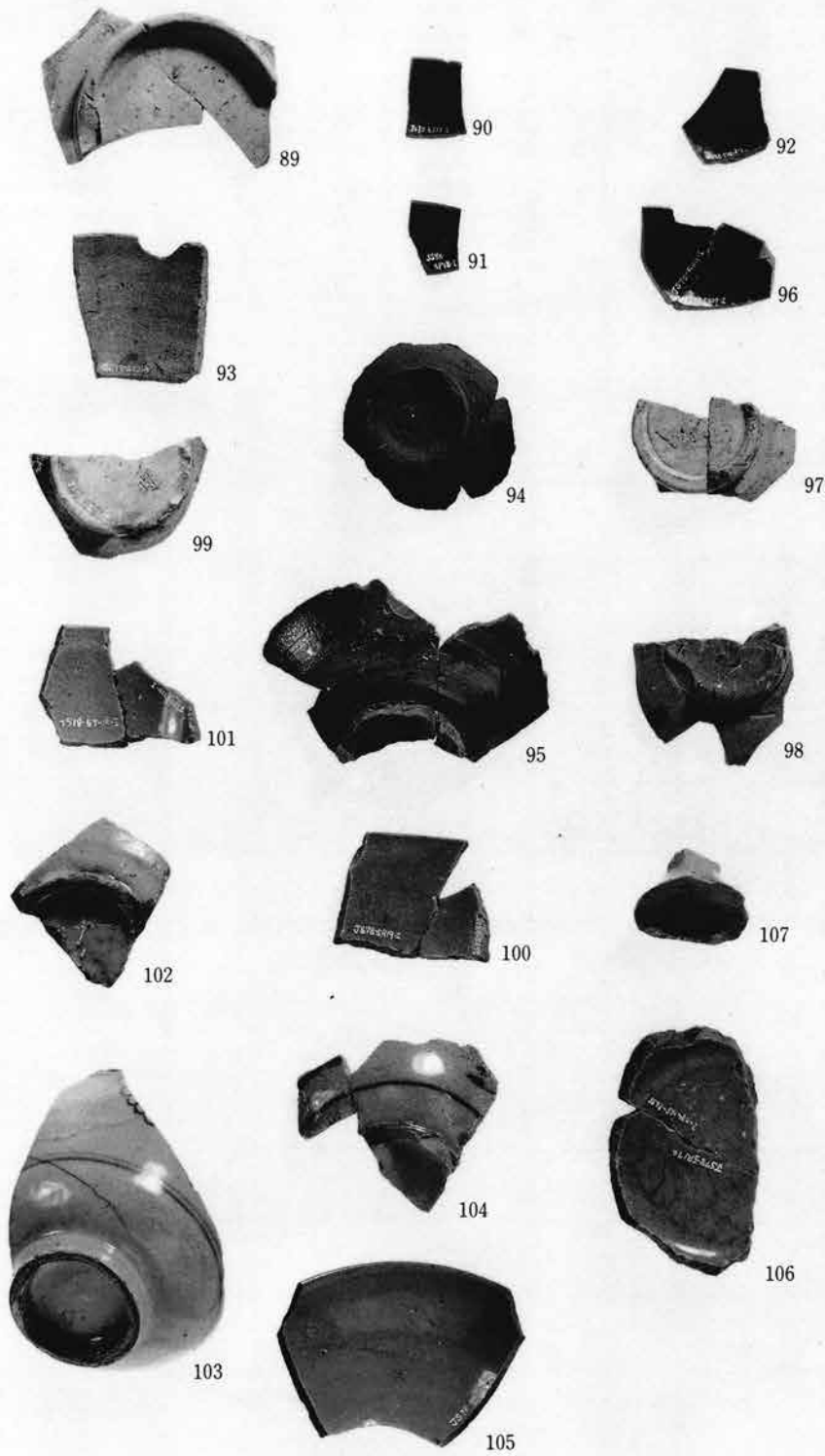
陶磁器 (6) 伊万里系 外面



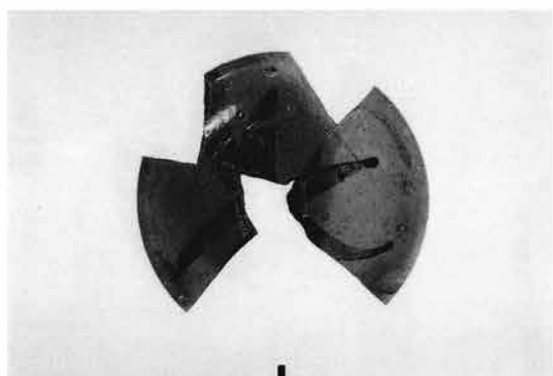








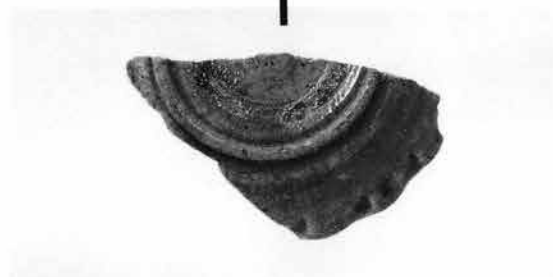
陶磁器 (10) その他 外面



24



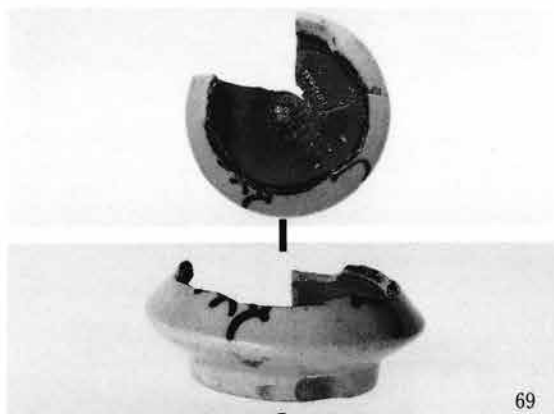
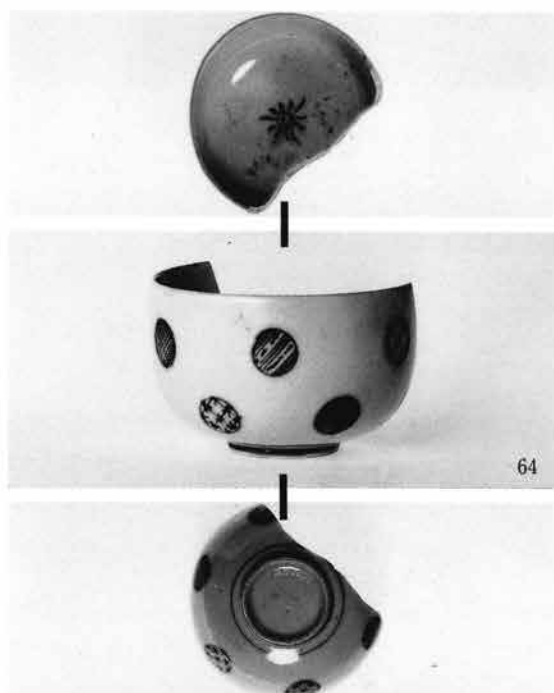
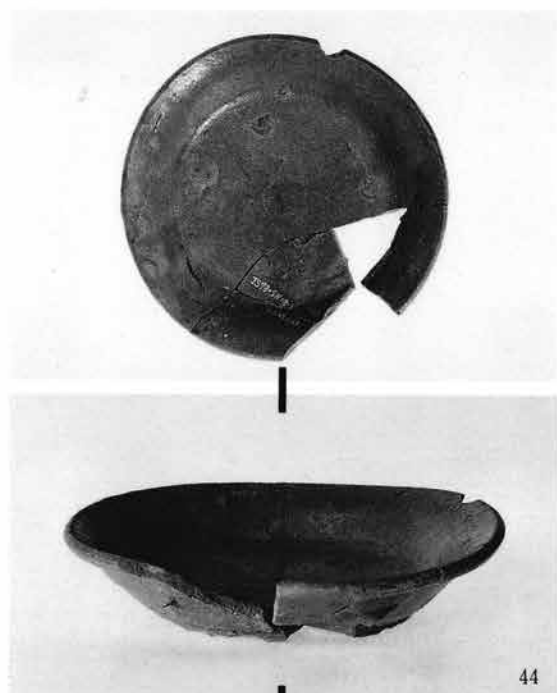
30



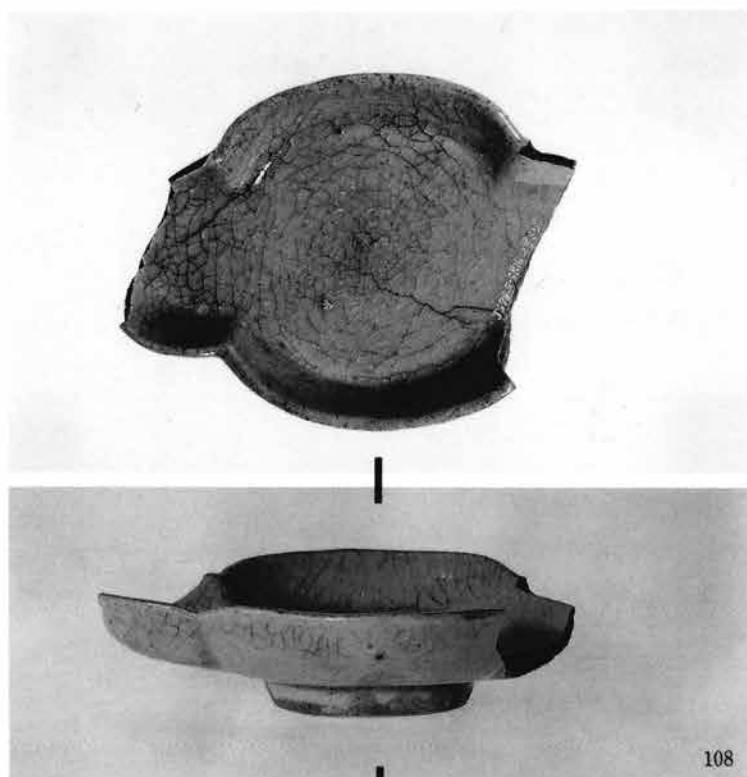
29

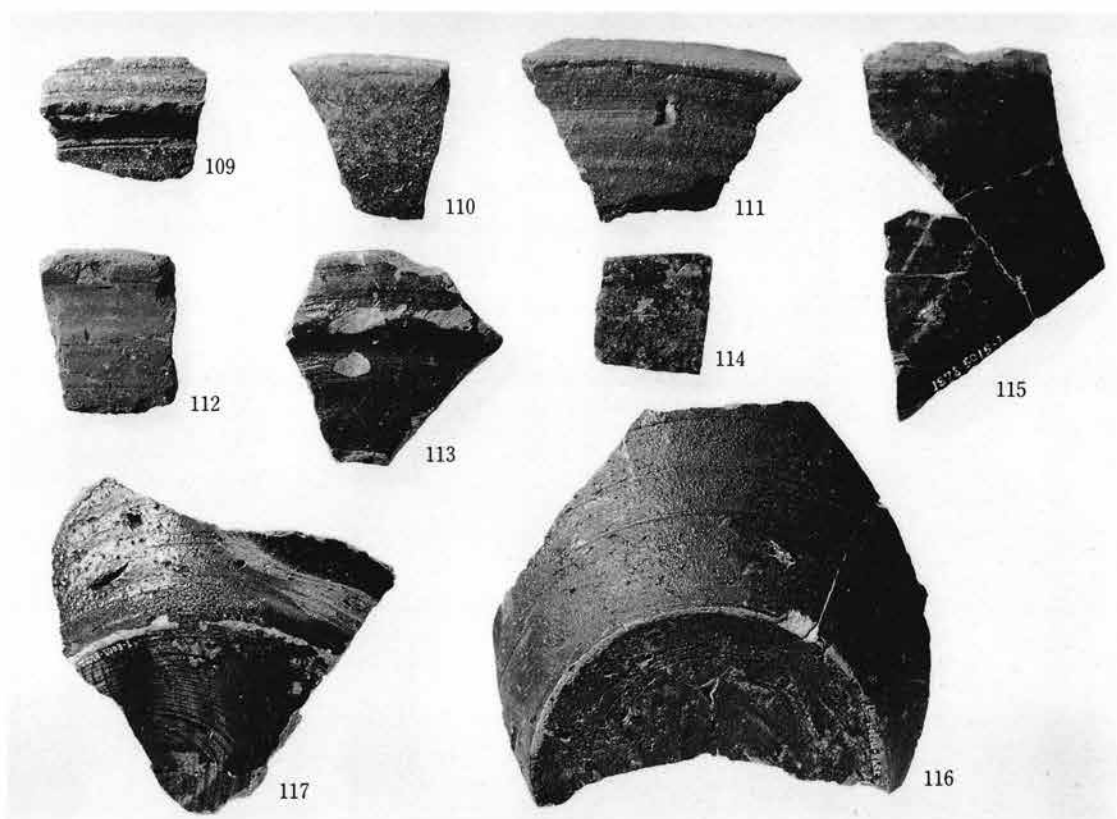
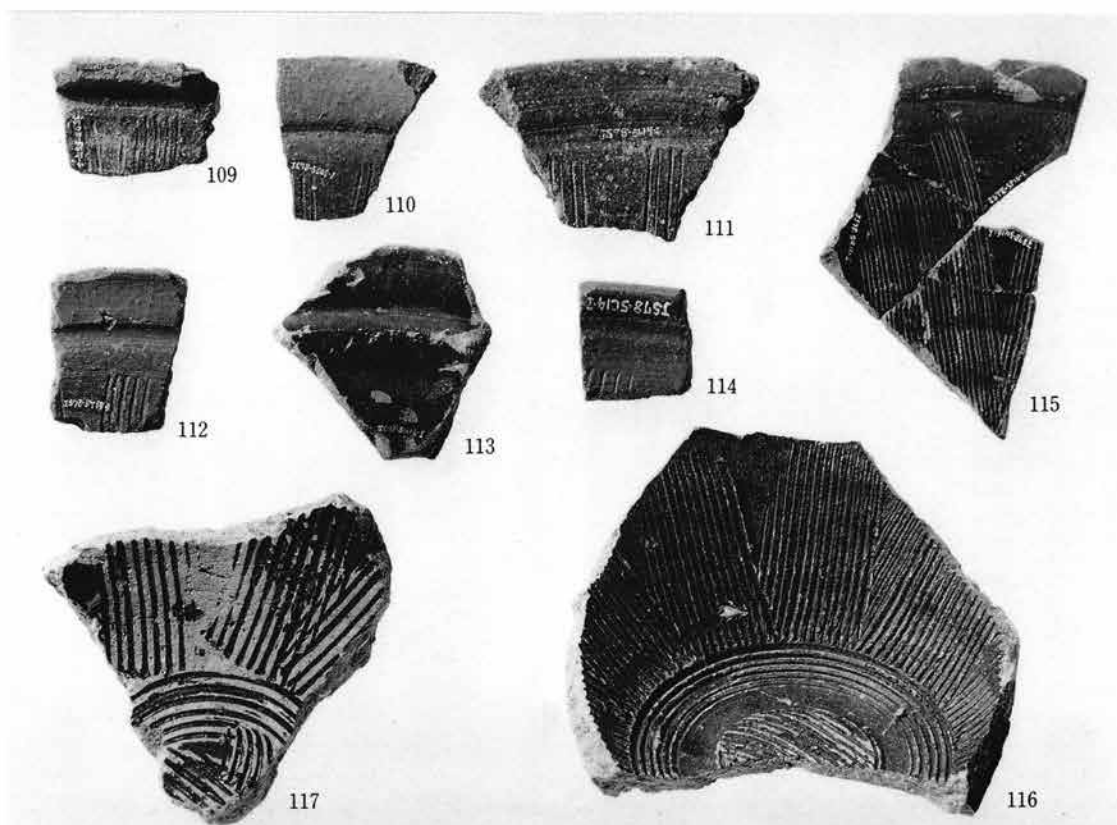


32

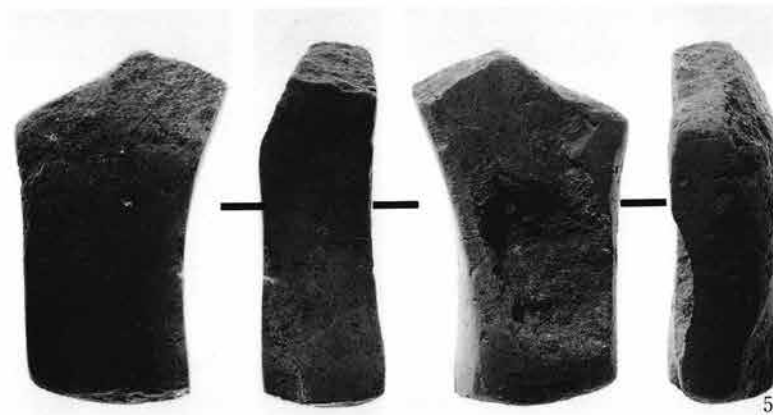
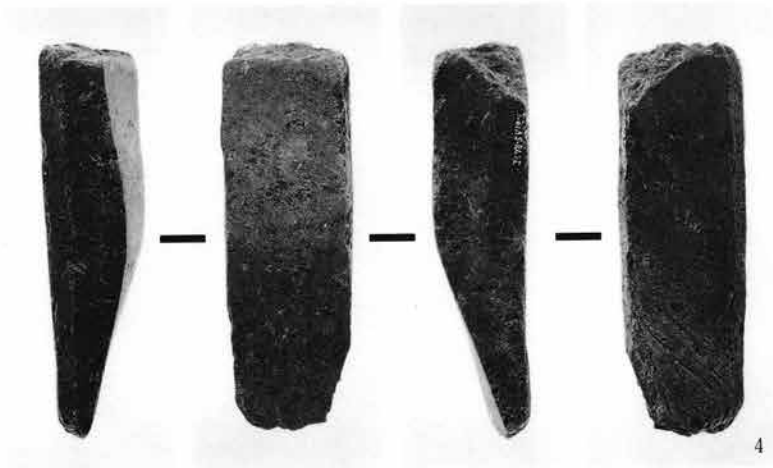
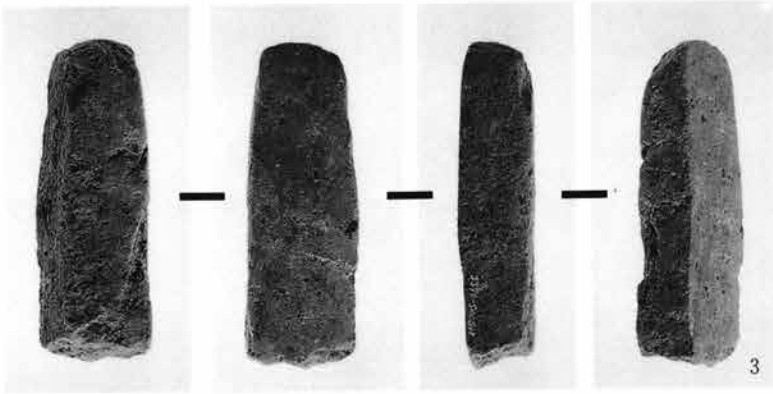
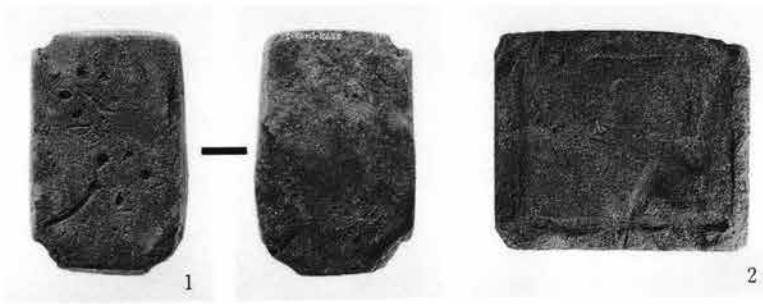


陶磁器 (12) 瀬戸 [44]、伊万里 [64・65・67~69]

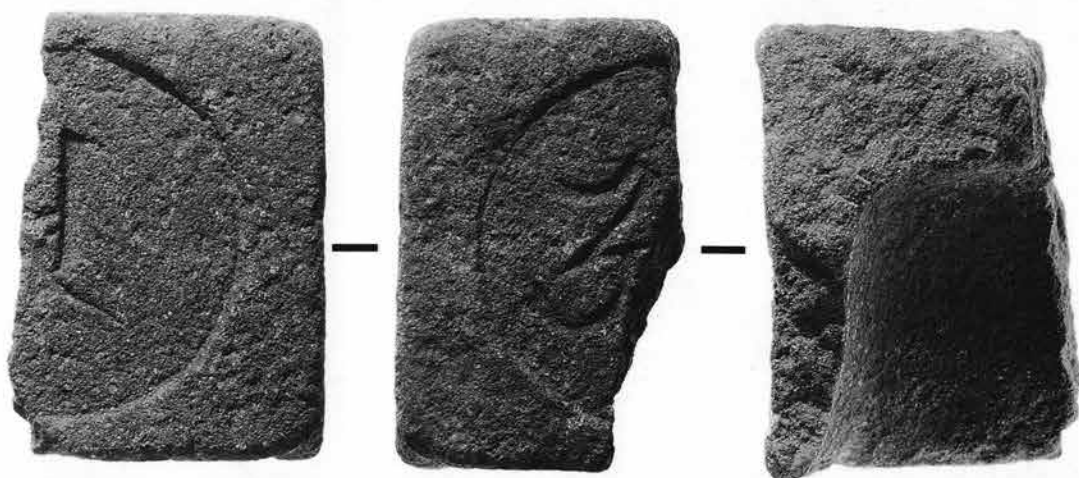




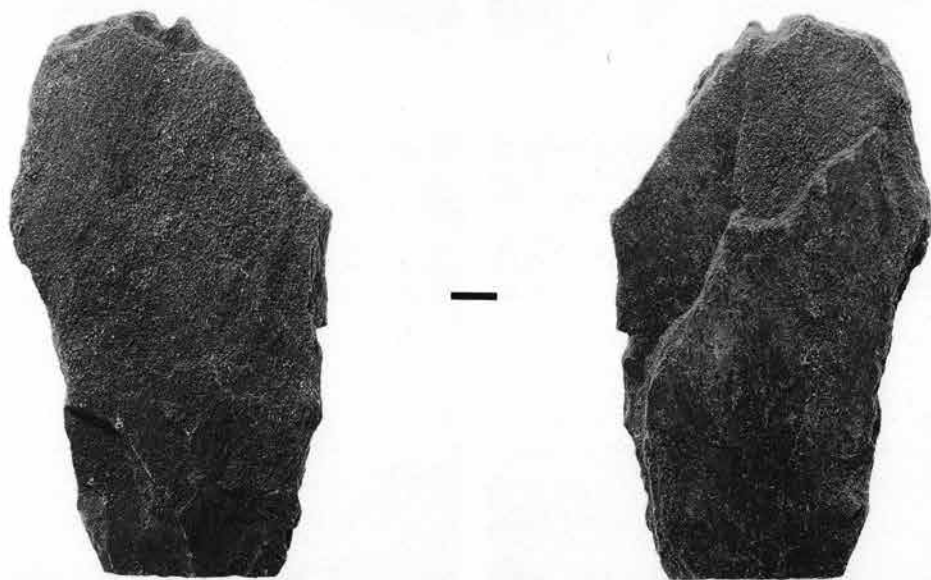
陶磁器 (14) 插鉢



石製品 (1) 砥石 [1・3~5]、硯 [2]、石臼 [6]



1



2

石製品 (2) 宝篋印塔 [1]、板碑 [2]



9



10



12



14

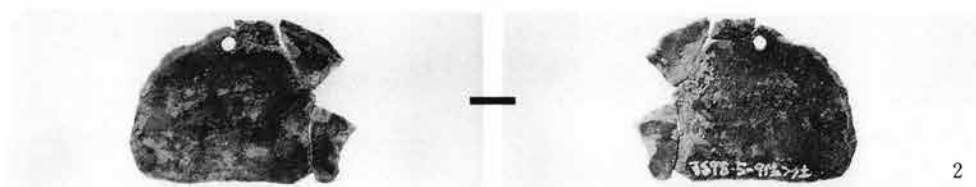


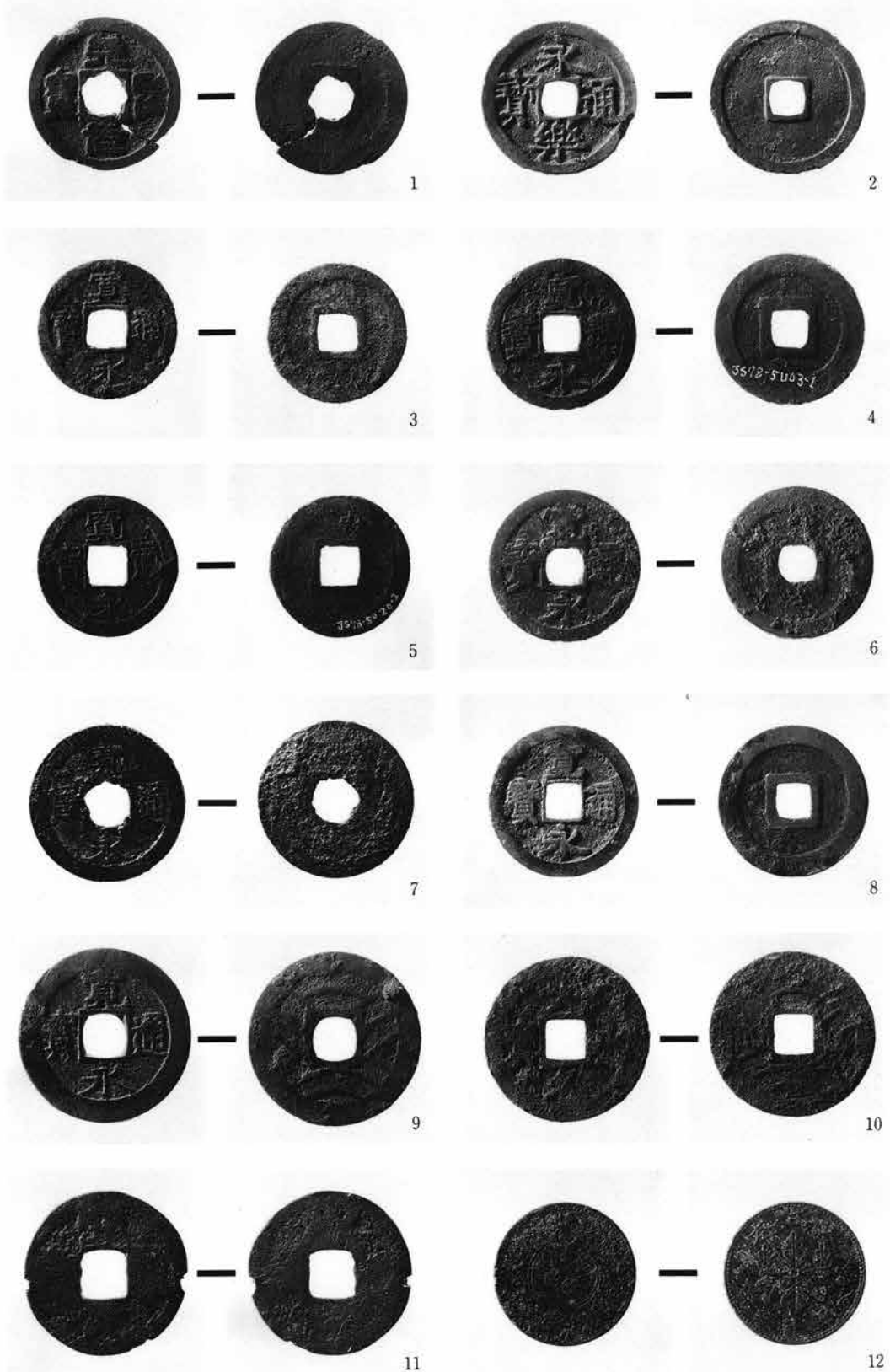
11

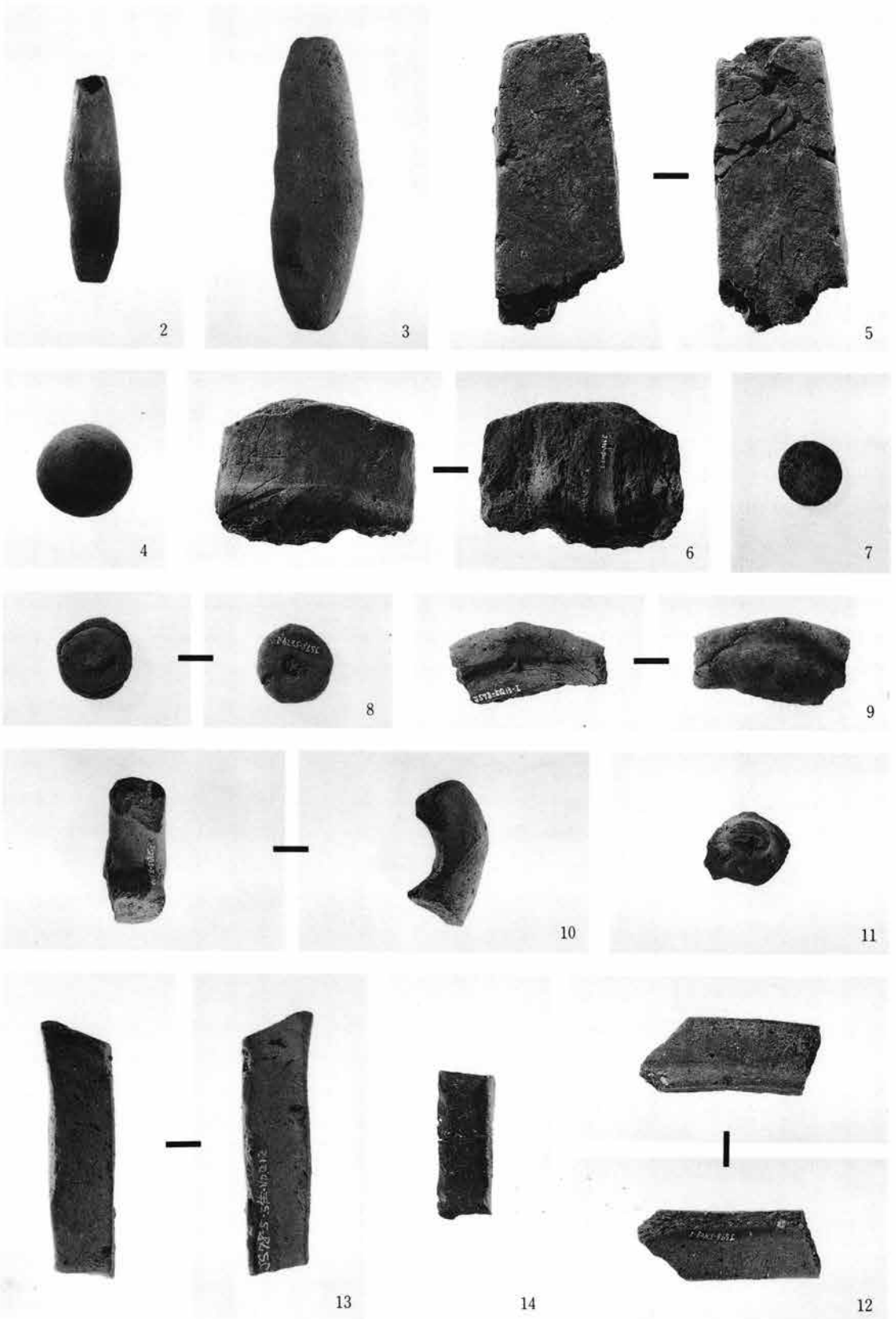


13

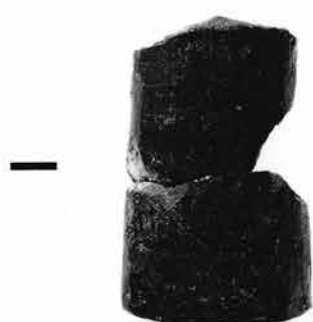
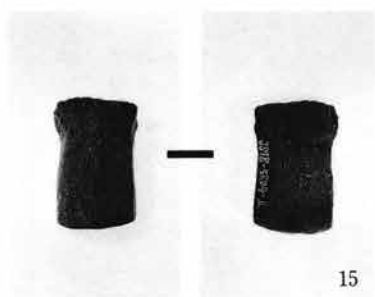








土製品 (1)



土製品 (2)

(1) 前橋市山王廃寺跡出土「酒」字銅印



(2) 富岡市宇田出土「百」字銅印

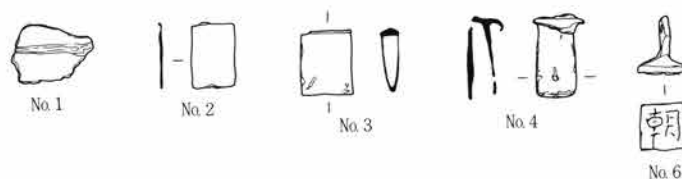


(3) 藤岡市中栗須出土  
「延別録印」字銅印



## 銅製金属器の蛍光X線分析

図示した銅製品について、蛍光X線分析を行ったところ、その結果は次のとおりである。分析は群馬県工業試験場 花岡紘一氏による。



### 1 緒 言

銅製遺物を非破壊で分析するため、蛍光X線分析により行った。遺物には青色のサビが多量に発生していた。蛍光X線分析ではサビと地金の両方の元素を測定している。このため、サビだけ、地金だけの成分比率は不明である。なお、地金から出たサビは地金の組成とは異なっている。ここでは遺物の組成を推定するため蛍光X線分析により含有元素のX線強度比を測定した。

### 2 測定条件

蛍光X線分析装置：理学電機製KG-4型

X線管球：銀対陰極，50KV，20mA

分光結晶：Cu, Su, Pb, Fe, As, Sb, Bi, Zn, Ni には LiF ( $2d=4.028\text{\AA}$ ) Si, Ca, S, Al には EDDT ( $2d=8.808\text{\AA}$ )

検出器：LiFを使用したとき S.C EDDTを使用したとき P.C

時定数：1

チャート：4°/min

波高分析器：FeK $\alpha$ (1)はPbL $\beta_3$ (2)、PbL $\beta$ (1)はSnk $\alpha$ (2)と重なるため微分方式で使用。他は積分方式で使用。

測定線：CuK $\beta$ , SuK $\alpha$ , PbL $\beta$ , FeK $\alpha$ , AsK $\beta$ , SbK $\alpha$ , BiL $\beta$ , ZnK $\alpha$ , NiK $\alpha$ , SiK $\alpha$ , CaK $\alpha$ , AlK $\alpha$ , SK $\alpha$  の各1次線を使用。

X線照射面積：20mm $\phi$

### 3 結果及び考察

銅製金属器の蛍光X線分析結果を下表（銅製金属器に含有されている元素の特性X線強度）に示す。BiL $\beta$ の？はBiL $\beta$ (1)とPbL $\beta_3$ (1)が重なるため多量の鉛を含有する遺物のBiは不明である。CaK $\alpha$ の？はCaK $\alpha$ (1)とSnL $\beta$ (1)が重なるため多量のSnを含んだ遺物のCaは不明である。僅少とは検出

された元素でX線強度比が0.001未満のものを示している。

検出された元素のうち、Cu, Sn, Pb, Fe, As, Sb, Bi, Zn, Ni, S の大部分は遺物中およびサビの成分とみられる。Si, Ca, Al の大部分は、土壤中に埋蔵されていたときの土壤中に由来する石英・長石・粘土などがサビ中に混入したものと考えられる。なお、各試料によりサビの厚さ、面積・密度・地金の露出割合が異なっているので、サビで地金それぞれの成分比率を求めることは困難である。

	CuK $\beta$	SnK $\alpha$	PbL $\beta$	FeK $\alpha$	AsK $\beta$	SbK $\alpha$	BiL $\beta$	ZnK $\alpha$	NiK $\alpha$	SiK $\alpha$	CaK $\alpha$	AlK $\alpha$	SK $\alpha$
No.1	1	0.350	0.723	0.204	0.032	0.003	?	0.005	0.001	0.053	?	0.008	0.001
No.2	1	—	0.003	0.011	0.001	0.001	0.003	0.001	僅少	0.019	0.010	僅少	0.001
No.3	1	—	0.006	0.048	0.003	0.002	0.001	—	僅少	0.007	0.005	—	0.003
No.4	1	0.011	0.952	0.117	0.071	0.014	?	0.004	0.001	0.032	0.018	0.005	0.001
No.6	1	0.001	0.343	0.220	0.076	0.005	?	0.001	0.001	0.009	0.016	0.003	0.001

### 分析の目的と分析値

金属分析はこれまで県内で重ねられてきた土器の胎土分析に比べて類例に乏しく、また分析資料の半数は不明品であるため、まず遺物の材質を知ることによってその機能・用途等を推定する材料としよう、考えたものである。用途等が判明している遺物については、今後の資料増加を待ちたい。

No.1 は銅の他に錫・鉛の比が比較的大きく、青銅の可能性がある。

No.2 およびNo.3 は銅を除く他の元素の強度比が小さく、純銅に近いと考えられる。

No.4 は鉛の強度比が大きく、不純物としても大きすぎるため、意図的に鉛を入れてあると考えられる。銅-鉛の合金である可能性が高い。

No.6 の銅印は他の金属に比べて鉛の強度比がやや高い。

また、No.4 とNo.6 は鉛とアンチモンの比が共に高く、素材となる地金の精錬技術に関連するのかもしれない。

以上の分析値の読みとりは、花岡氏の御教示によるものである。

①No.3 の銅は外観観察から鉄地銅被せの可能性を考えたが、結果は純銅に近いものであった。

②No.6 の銅印に関連して、最近興味深い資料が発表されている（大澤正己、1984）。

埼玉県大里郡花園町所在台耕地遺跡第49号住居跡は平安時代に比定され、同住居跡からは製鉄関連遺物とともに印章鋳型と小銅塊が出土している。大澤氏の分析によれば、この小銅塊の成分は鉛が3.06%、ケイ素2.05%で残りは銅であったという。そして小銅塊を「合金元素添加前の純銅成分」とした。

千葉県千葉市花輪町所在谷津遺跡では銅粒と印章鋳型が共に出土し銅粒は「銅（92.2%）一錫（2.18%）合金」という結果を得ている（前掲、大澤氏による）。

群馬県高崎市所在矢中遺跡群矢中村東遺跡の小型水路から出土した「物部私印」は蛍光X線分析の結果銅の他にヒ素・鉄・鉛・錫・銀・アンチモンを含んでいるという（高崎市教育委員会、1984）。

これらの例に比べると、今回の分析は定量分析ではないため比較しにくいだが、錫よりも鉛の強度比が大きいためにあげられる。印の性格や精錬・鋳造技術の違い、さらにはこれらを含めた年代の差な

どが考えられよう。

③今回の分析は当初の目的にはほど遠く、単に分析値を得たにとどまったが、さらに類例を加えて検討を続けたい。

大澤正己 1984「台耕地遺跡出土の鋳銅・製鉄関係遺跡の金属学的調査」『関越自動車道関係埋蔵文化財調査報告書—XIX—台耕地（II）』財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団。

なお、後藤和民・熊野正也『日本の古代遺跡18 千葉北部』保育社、1984を参考とした。  
高崎市教育委員会 1984 『矢中遺跡群（VII）矢中村東遺跡』群馬県高崎市文化財調査報告書第57集



## X線透過試験

### 1 目的

5 U14グリッド出土の「全」字烙印は、本体が銅製、柄部が鉄製である。両者の接合方法を推定するため、X線透過試験を行った。

5 O18グリッド出土の分銅は、表面に淡緑色のサビが発生しているが地金は鉄サビと同様の外観であり、鉄地銅被せまたは銅メッキの可能性がある。形状は総高31.5mm、錘の高さ29mm、横断面は一辺13~14mmの方形を呈し、現状の重さ37.99gである。引掛部を除いた錘の体積は、

$$13 \times 14 \times 29 = 5,278 \text{ mm}^3 (= 5.278 \text{ cm}^3)$$

1 cm<sup>3</sup>当りの重さは、引掛部を無視して概算すると、

$$37.99 \div 5.278 = 7.198 \text{ g (小数点第4位を四捨五入)}$$

となる。銅と鉄の比重は20°Cでそれぞれ銅=8.93 (g/cm<sup>3</sup>)、鉄=7.86 (g/cm<sup>3</sup>)であるから、錘の地金は鉄製の可能性が大きいことになる。

X線の金属に対する透過度の違いから、内部に空洞があるか否か、表面と地金とがX線フィルム上で分離可能かどうかを調べるため、試験を行ったものである。

撮影は、群馬県工業試験場 小林重夫氏による。記して謝意を表する次第である。

### 2 方法

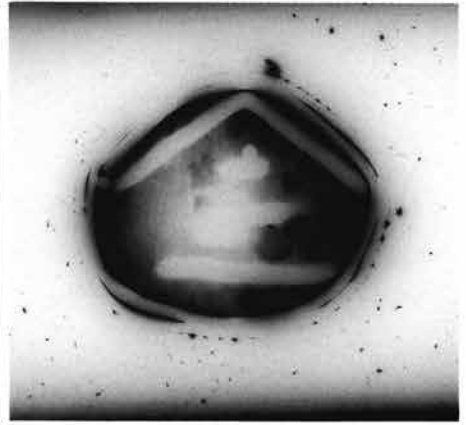
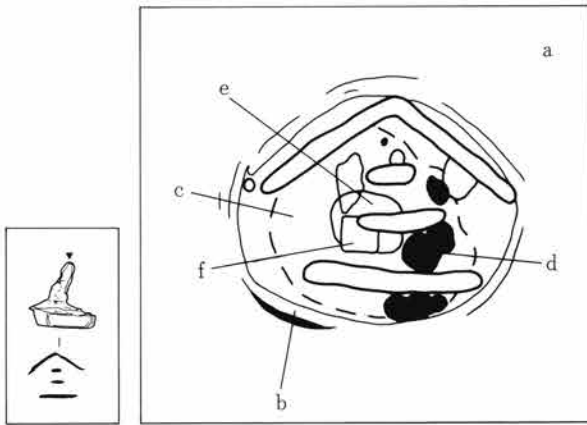
X線フィルムは物体を透過したX線がフィルムの乳剤に当ることによって、現像処理後に黒化する。従って、フィルム上黒っぽい部分はX線がフィルムの乳剤に比較的多量に当たった部分であり、逆に白っぽい（透明度の高い）部分は物体を透過することができず、乳剤面にX線が余りとどかなかつたことを意味する。フィルムは現像処理を施せばそのままポジティブであり、一般撮影用のモノクロフィルムが通常ネガティブであるのとは異なる。

一般にX線の金属に対する透過度は鉛—銅—ステンレス—鉄—アルミニウムの順に透過しやすくなるという性質をもっているという。従って、銅と鉄とを同じ大きさで並べて同じ強さのX線を照射すれば、鉄をやっと透過するほどの強さの場合はフィルム上鉄部分は黒っぽく、銅部分は透明に近くなる。逆に、銅を透過するほどの強さの場合は、いずれもフィルム上は黒っぽくなるはずである。

但し、フィルム面上に物体が占める面積が同じでも、物体を透過する距離が異なれば、フィルムの濃度は異なる。なお、鉛玉を周囲に敷きつめるのは、X線が散乱することによって像のコントラストが低下することを防ぐためである。

烙印「全」は柄部側からX線を照射して得られたものである。烙印の側面に鉛板を巻き、周囲に鉛玉を敷きつめて撮影している。

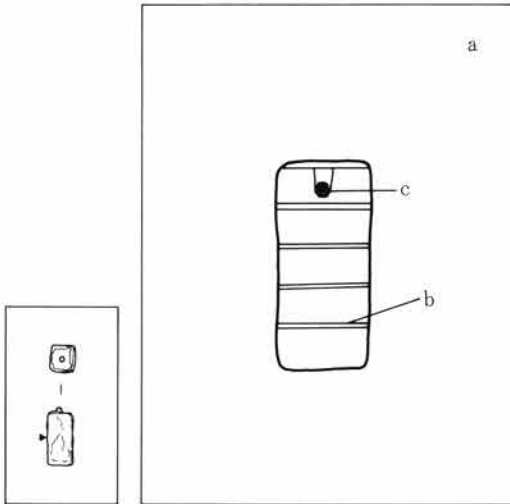
分銅は周囲に鉛玉を敷きつめ、長辺に平行にX線を照射して得られたものである。短辺に平行な細い白線は濃度確認のためのサンプルのカゲであり、分銅自身に含まれているもののカゲではない。



### 烙印

- a. 鉛玉を敷きつめた部分
- b. 側面の鉛板
- c. 烙印本体の背部
- d. 鉄サビ
- e. 柄部と本体との重なり部分
- f. 鉄柄または本体の凸起部分

年月日	59. 10. 26		
試料	F A 3		
電圧	115 K.V.P.	電流	5 mA
露出時間	min 24 sec		
距離	60 cm	焦点	2.0×2.0 mm
フィルム	FUJI-100	増感紙	0.03 PB
現象	20 °C	5 min	
備考	群馬県工業試験場		



### 分銅

- a. 鉛玉を敷きつめた部分
- b. 濃度確認のための試験体
- c. 引掛部挿入用の小穴

年月日	59. 10. 26		
試料	F A 1		
電圧	190 K.V.P.	電流	5 mA
露出時間	min 30 sec		
距離	60 cm	焦点	2.0×2.0 mm
フィルム	FUJI-100	増感紙	0.03 PB
現象	20 °C	5 min	
備考	群馬県工業試験場		

### 3 結 果

#### 烙印

写真の a 部分は鉛玉を敷きつめた部分で、鉛玉の間隙をぬって X 線がフィルムに達している。

b 部分は側面に巻いた鉛板のカゲである。

c 部分は烙印本体の背部で、本体周縁から柄の取り付け部に向ってしだいに厚さを増してゆくため、黒化している部分との境界は明瞭ではない。

d 部分は「サン」を構成するヨコ棒の根元に発生している鉄サビと像が重なっており、本体背面に鉄サビが食い込んでいるとみられる。

e 部分は輪郭が不明瞭だが、柄部と本体背面とが重なっている部分で、本体背面と柄部鉄サビのフクレのカゲとみられる。

f 部分はフィルムそのもので見ると e 部分とのあいだにわずかな濃度差があり、その形状から柄の鉄地金の断面と同様である。

以上の読みとりから、本体と柄部との接合は次の様に考えられる。

接合部付近のフィルムの濃度は c—e—f の順に透明に近くなっており、「サン」の中央のヨコ棒の濃度と f 部分の濃度とはほとんど差がない。c 部分は本体背面の銅地の厚さが漸移的に変わる部分であり、この c 部分よりも f 部分の方がフィルムの透明度が高くなった原因は 2 通りに考えられる。①は、X 線の透過距離が本体よりも長かったために X 線が鉄柄部を透過することができず、黒化しなかった場合である。②は、本体背面よりも銅地金の厚さが厚い場合である。

太田市浜町屋敷内遺跡 c 地点出土の烙印は、本例と同じく本体が銅製、柄部が鉄製で、X 線透試験の結果中央に一辺 3 mm ほどの黒化部が見られた(飯田陽一他、1985)。この黒化部は 5 mm ほど遺存していた鉄製柄部を透過した X 線によって乳剤が反応したものと推定された。

本遺跡例の場合、鉄製柄部が 20 mm ほど遺存しており、屋敷内遺跡例に比べて透過距離が長い場合、透明に近い結果になったのかもしれない。

また、前述のように鉄と銅とでは X 線の透過度が異なり、銅の方が透過しにくいという性質がある。接合部に鉛が使われた場合を除くと、f 部分が鉄であれば d 部分のように X 線が透過して黒化するはずであるが、フィルムを見ると文字部と同じ程度の透明度であるから、文字部と同程度の厚さの銅地金の存在が推定される。

これらのことから、①の場合は鉄柄部が本体にけられた柄穴に挿入されていることが推定され、②の場合は本体背面に凸起を鑄造し、その凸起を包むように鉄柄部を接合していることが考えられる。②の場合は屋敷内遺跡例とは逆の接合法となる。

#### 分 銅

a 部分は烙印と同じく鉛玉を敷きつめた部分である。

b 部分は前述のように濃度確認のための試験体(計 5 本の太さの異なる針金)である。

c 部分は黒化している。X 線に対して本体よりも透過度の高い物質が存在するか、または空洞になっていることが考えられる。本体の外部に凸出した引掛部は、X 線の散乱と鉛玉によって見えなくなっ

ている。

以上の読みとりから、次の様に考えられる。

表面と地金とをフィルム上で分離できるかについては、試験体の厚さ透過距離の方がはるかに厚いため、物体のカゲに含まれてしまって分離できないことがはっきりした。

次に、c部分の上方に本体よりもわずかに濃度の高い（黒化した）部分が上方にひろがっており、これは本体に挿入した引掛部のカゲと考えられる。従って引掛部は、本体の小穴に棒状の柄部を打ち込んで結合したと考えられ、この小穴に別の物質をいれたと考えるよりも、c部分は空洞であると推定したい。また、この部分以外の本体はほぼ一様の濃度をもっており、亀裂等がみられないことから、本体は内部中央に空洞をもたないように鑄造されたと考えられる。さらに推定を重ねれば、分銅としての決められた一定の重さにするための調整を、外表に被せる銅箔の重さで行なったのではないだろうか。

**菟田遺跡** 一上越新幹線関係埋蔵  
文化財発掘調査報告第4集一

---

印刷 昭和60年3月26日  
発行 昭和60年3月31日

編集・発行 群馬県埋蔵文化財調査事業団  
勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2  
(0279) 52-2511代

印刷 朝日印刷工業株式会社

---

上越新幹線関係埋蔵文化財発掘調査報告書 第4集

藪田遺跡正誤表 群馬県埋蔵文化財調査事業団

頁	行	訂 正 箇 所
49	第35図左下	0は10号住居址の遺物 → トル
264	注14	『大 <sup>・</sup> 葬 <sup>・</sup> 墓 <sup>・</sup> … → 『火 <sup>・</sup> 葬 <sup>・</sup> 墓 <sup>・</sup> …
266	23行目	(第201 <sup>・</sup> 図 <sup>・</sup> 7) → (第201 <sup>・</sup> 図 <sup>・</sup> 2)
268	10行目	( <sup>・</sup> 図 <sup>・</sup> 版 <sup>・</sup> 151 <sup>・</sup> -( <sup>・</sup> 3)) → ( <sup>・</sup> 第 <sup>・</sup> 201 <sup>・</sup> 図 <sup>・</sup> 1 <sup>・</sup> , <sup>・</sup> 図 <sup>・</sup> 版 <sup>・</sup> 151 <sup>・</sup> -( <sup>・</sup> 3))
	30行目	( <sup>・</sup> 図 <sup>・</sup> 版 <sup>・</sup> 151 <sup>・</sup> -( <sup>・</sup> 1)) → ( <sup>・</sup> 第 <sup>・</sup> 202 <sup>・</sup> 図 <sup>・</sup> 3 <sup>・</sup> , <sup>・</sup> 図 <sup>・</sup> 版 <sup>・</sup> 151 <sup>・</sup> -( <sup>・</sup> 1))
270	8行目	( <sup>・</sup> 図 <sup>・</sup> 版 <sup>・</sup> 151 <sup>・</sup> -( <sup>・</sup> 2)) → ( <sup>・</sup> 第 <sup>・</sup> 202 <sup>・</sup> 図 <sup>・</sup> 4 <sup>・</sup> , <sup>・</sup> 図 <sup>・</sup> 版 <sup>・</sup> 151 <sup>・</sup> -( <sup>・</sup> 2))
図版45	3	6区7号土 <sup>・</sup> 壇 <sup>・</sup> ( <sup>・</sup> 南 <sup>・</sup> 東 <sup>・</sup> よ <sup>・</sup> → 6区7号土 <sup>・</sup> 壇 <sup>・</sup> ( <sup>・</sup> 南 <sup>・</sup> 東 <sup>・</sup> よ <sup>・</sup> り)

上越新幹線関係  
埋蔵文化財発掘調査報告

第4集

# 藪田遺跡



付図 蘇田遺跡遺構全体図

01-310  
9  
(9)

群埋文